

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 56 —

福岡県朝倉郡杷木町所在 畑田遺跡の調査

1999

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係

埋蔵文化財調査報告

— 56 —

福岡県朝倉郡杷木町所在 畑田遺跡の調査



煙田遺跡 全景

序

福岡県教育委員会では、九州横断自動車道のうちの大分自動車道建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度から実施してきました。本書は、これまでに刊行してきた『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』の第56集にあたり、本シリーズの最後の一巻であります。

この報告書に掲載した杷木町所在の畠田遺跡は昭和61～62年に発掘調査を行ったもので、古くは縄文時代早期からの遺物があり、のちに縄文時代晚期～弥生時代前期に集落と墓地が営まれ、さらには奈良時代末～平安時代、そして中世期の遺構・遺物が検出されています。

とくに弥生早期の支石墓の存在は、北部九州の弥生時代開始期の様相を考えるうえできわめて貴重な事例であります。また、奈良時代末～平安時代の多量の土器は、瓦片が少量であるとはいえ、旧池田村に存したといわれる幾つかの寺院跡のひとつの中世の存在を示唆しています。さらには、中世の輸入陶磁器類の出土はこの周辺における荘園の存在を彷彿させてくれます。

ここに報告する内容は、当地方における原始・古代～中世の生活の実態の解明に少なからず寄与するものと考えます。

本書に報告する調査成果が、今後の研究の一助ともなれば幸甚です。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成において多数の方々に御協力・御援助を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成11年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 光安 常喜

例言

1. 本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を実施した、九州横断自動車道関係遺跡についての56冊目の報告書であり、これが本シリーズの最終巻である。
2. 本書に収録したのは、昭和61年度に発掘調査を行った福岡県朝倉郡杷木町所在の畠田遺跡である。
3. 遺構については、実測は井上裕弘・佐々木隆彦・伊崎俊秋・木村幾多郎・武田光正・日高正幸・田中康信が行い、原野昌伸・渡辺輝子・高瀬セツ子・本石セツ子・中村光恵・後藤カミヨ・矢野静子・牟田サエ子の協力を得た。写真は伊崎が撮影した。
気球写真はフォトオオツカによる。
4. 出土遺物の整理は、岩瀬正信の指導のもとに、九州歴史資料館および福岡県文化財保護課甘木事務所とで行った。
5. 遺物については、実測は原富子・岡泰子・丸山小夜子・大野愛里・西田美代子・辻啓子・重藤輝行・伊崎が行い、写真は北岡伸一が撮影した。
6. 遺構の下図作成には塩足里美の、住居跡等の面積測定には窪山頼子の、図面の整理には大場佐世子の協力を得た。
7. 遺構・遺物の浄書は塩足里美と伊崎・重藤が行った。
8. 本書で使用した方位は、新平面直角座標系のⅡ系に基づく座標北である。
9. 本書の挿図・付図等において、住居跡は基本的にそのままの数字で示すが、それ以外は掘立柱建物跡はS B、土坑はS K、周溝墓はS T、溝はS D、支石墓はS S、石棺墓はS C、柱穴はP、その他の遺構にS R・S Xの略号を番号の前に冠する場合がある。
また、遺物のうち土器・陶磁器については、縮尺は原則として1/3とし、一部の大型のものは1/4とした。土製品・石器等は2/3・1/2・1/3・1/4・1/6の縮尺がある。
10. 組織痕土器については早くに名古屋大学の渡辺誠氏より玉稿をいただきしており、Vに収録した。
11. 本書の執筆・編集は、Vを除いて伊崎が行った。

本文目次

I 序論	1
A. 調査の経過	1
B. 調査の組織と関係者	4
II 遺跡の位置と環境・概要	7
A. 位置	7
B. 歴史的環境	7
C. 概要	10
III I～III区の調査	18
A. 縄文時代～弥生時代の遺構と遺物	18
1. 壺穴住居跡	19
2. 土坑（SK・SX）	74
3. 支石墓（SS）	79
4. 石棺墓または木棺墓（SC）	82
5. その他	88
B. 古墳時代以降の遺構と遺物	136
1. 掘立柱建物跡（SB）	136
2. 土坑（SK・SR・SX）	137
3. 周溝墓（ST）	163
4. 溝（SD）	167
5. その他	179
IV IV区の調査	209
A. 遺構と遺物	209
1. 溝	209
2. ピットその他	218
V 福岡県杷木町畠田遺跡の組織痕土器	(渡辺誠) 237
VI まとめ	241
[附編]	247

卷頭カラー図版

畠田遺跡全景

図版目次

- 図版 1 畠田遺跡全景（気球写真）
- 図版 2 1 上空より白木谷をのぞむ
3 S D 2 など（東から）
- 図版 3 1 畠田遺跡全景（南東から）
- 図版 4 1 支石墓周辺遠景（南東から）
- 図版 5 1 1～10号住居跡ほか
- 図版 6 1 17～22号住居跡ほか
- 図版 7 1 15・34号住居跡ほか
- 図版 8 1 37～40号住居跡ほか
- 図版 9 1 75号住居跡ほか（東から）
3 71・72号住居跡（北東から）
- 図版10 1 79号住居跡ほか（東南から）
3 1号支石墓周辺（東から）
- 図版11 1 1～3号支石墓（東南から）
3 1号支石墓下部遺構（北東から）
- 図版12 1 2号支石墓土器出土状態（南から）
3 3号支石墓下部遺構（南から）
- 図版13 1 4号支石墓下部遺構（西北から）
3 4号土坑（北から）
- 図版14 1 1・2号石棺墓（南から）
- 図版15 掘立柱建物（1・2・4は北から、3は西から）
- 図版16 1 1号土坑（東北から）
3 3号土坑（南東から）
- 図版17 1 5号土坑（南東から）
- 図版18 1 6号土坑（南西から）
3 11号土坑（東から）
- 2 楠田遺跡より畠田遺跡をのぞむ
- 2 同（北から）
- 2 西半部遠景（東から）
- 2 28～32号住居跡ほか
- 2 48～54号住居跡ほか
- 2 39・46号住居跡ほか
- 2 24～26号住居跡ほか
- 2 56号住居跡ほか（東から）
- 2 63号住居跡ほか（東から）
- 2 1号支石墓上石（北東から）
- 2 2号支石墓下部遺構（南から）
- 2 5号支石墓下部遺構（西北から）
- 2 1号石棺墓（北から）
- 2 1号土坑土器出土状態
- 2 5号土坑カマド（南東から）
- 2 10号土坑（南から）

- 図版19 1 旧II区とSK20ほか（北東から）
3 SR2遺物出土状態（東から）
- 図版20 1 IV区全景（南東から）
3 IV区12トレンチ
- 図版21 住居跡出土土器
- 図版22 住居跡その他出土土器
- 図版23 包含層等出土土器と土製品
- 図版24 1 大陸系磨製石器（第96図）
3 打製石鏃〈サヌカイト〉（第98図）
- 図版25 1 打製石鏃〈サヌカイト〉（第98・99図）
2 打製石鏃〈サヌカイト他〉（第99図）
3 スクレイパーほか〈サヌカイト他〉（第100～102図）
- 図版26 1 スクレイパー〈サヌカイト〉（第100～102図）
2 打製石鏃〈黒曜石〉（第98・99図）
3 スクレイパーほか〈黒曜石〉（第100図）
- 図版27 1 スクレイパーほか〈黒曜石〉（第101・102図）
2 石斧（第103図）
3 石斧（第103・104図）
- 図版28 1 石斧（第104・105図）
2 石斧（第105図）
3 すり石・叩石（第106図）
- 図版29 1 すり石・叩石（第106・107図）
2 すり石・叩石（第107・108図）
3 すり石・叩石（第108・109図）
- 図版30 1 すり石・叩石（第109図）
2 すり石・叩石（第109・110図）
3 砥石・台石（第111・113図）
- 図版31 1号土坑出土土器
- 図版32 1・3・5・11号土坑、2号溝出土土器
- 図版33 2・3・6号溝、ピット出土土器等
- 図版34 ピット、包含層出土土器等
- 図版35 包含層その他出土土器等
- 図版36 1 土製品〔中世〕（第169図）
2 瓦、土製品（第170図）
3 滑石製品（第171図）
- 図版37 1 鉄製品（第172図）
2 鉄製品（第172・173図）
3 砥石（第175図）
- 図版38 1 渡来銭〈表〉（第174図）
2 渡来銭〈裏〉（第174図）
3 砥石（第175・178図）

- | | | |
|------|----------------------|----------------------|
| 図版39 | 1 台石、軽石等(第177・179図) | 2 小扁平石(第179図) |
| | 3 石塔、黒曜石原石(第179図) | |
| 図版40 | IV区出土土器 | |
| 図版41 | 1 IV区出土瓦1 〈表〉(第197図) | 2 IV区出土瓦1 〈裏〉(第197図) |
| | 3 IV区出土土製品(第200図) | |
| 図版42 | 1 IV区出土瓦2 〈表〉(第198図) | 2 IV区出土瓦2 〈裏〉(第198図) |
| | 3 IV区出土土製品(第200図) | |
| 図版43 | 1 IV区出土瓦3 〈表〉(第199図) | 2 IV区出土瓦3 〈裏〉(第199図) |
| | 3 IV区出土滑石製品(第200図) | |
| 図版44 | 1 IV区出土石斧等(第201図) | 2 IV区出土砥石等(第201図) |
| | 3 IV区出土すり石・叩石(第202図) | |
| 図版45 | 1 IV区出土軽石等(第202図) | 2 IV区出土石鎌等(第203図) |
| | 3 IV区出土スクレイパー(第203図) | |
| 図版46 | 1 IV区出土鉄製品等(第204図) | |
| | 2 移築復元した支石墓(甘木歴史資料館) | |
| | 3 3号支石墓(?)上石 | |

挿図目次

第 1 図	九州横断自動車道路線図 (1/840,000)	xii
第 2 図	畠田遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50,000)	8
第 3 図	畠田遺跡地形図 (1/1,500)	10
第 4 図	畠田遺跡地籍・区分図 (1/1,500)	11
第 5 図	畠田遺跡区割図 (1/800)	12
第 6 図	畠田遺跡旧地形図 1 〈縄文後期以前〉 (1/500)	14
第 7 図	畠田遺跡旧地形図 2 〈縄文晚期～弥生前期〉 (1/500)	15
第 8 図	第 1・2 トレンチ土層図 (1/120)	16
第 9 図	第 3・4・7 トレンチ、II区北端土層図 (1/120)	17
第 10 図	畠田遺跡縄文～弥生時代遺構配置・区割図 (1/600)	18
第 11 図	1号住居跡実測図 (1/60)	19
第 12 図	2号住居跡実測図 (1/60)	20
第 13 図	3号住居跡実測図 (1/60)	21

第 14図	4・6号住居跡実測図 (1/60)	22
第 15図	5・23号住居跡実測図 (1/60)	24
第 16図	7・11号住居跡実測図 (1/60)	25
第 17図	8・9・10・12号住居跡実測図 (1/60)	26
第 18図	13号住居跡実測図 (1/60)	27
第 19図	14号住居跡実測図 (1/60)	28
第 20図	15・66号住居跡実測図 (1/60)	29
第 21図	16・19号住居跡実測図 (1/60)	30
第 22図	1・2・7・8・9・10・11・15・16号住居跡出土土器実測図 (1/3)	31
第 23図	17・18・27号住居跡実測図 (1/60)	33
第 24図	20・70号住居跡実測図 (1/60)	34
第 25図	21号住居跡実測図 (1/60)	35
第 26図	17・18・19・21号住居跡出土土器実測図 (1/3)	36
第 27図	22・45・48号住居跡実測図 (1/60)	39
第 28図	22・24号住居跡出土土器実測図 (1/3)	40
第 29図	24・25・26・60・61号住居跡実測図 (1/60)	(折込み) 40-41
第 30図	28・29号住居跡実測図 (1/60)	41
第 31図	30・31・32・59号住居跡実測図 (1/60)	42
第 32図	33・35・36・37・38・39号住居跡実測図 (1/60)	(折込み) 44-45
第 33図	34・67号住居跡実測図 (1/60)	45
第 34図	25・26・30・31・32・34号住居跡出土土器実測図 (1/3)	46
第 35図	40・69号住居跡実測図 (1/60)	47
第 36図	41・42号住居跡実測図 (1/60)	49
第 37図	43・44・46号住居跡実測図 (1/60)	50
第 38図	40・41・42・45・46号住居跡出土土器実測図 (1/3)	51
第 39図	47号住居跡実測図 (1/60)	52
第 40図	49号住居跡実測図 (1/60)	53
第 41図	50号住居跡実測図 (1/60)	55
第 42図	51・52号住居跡実測図 (1/60)	56
第 43図	47・48・49・50・51号住居跡出土土器実測図 (1/3)	57
第 44図	53・54・57・73号住居跡実測図 (1/60)	(折込み) 58-59
第 45図	55・58・65号住居跡実測図 (1/60)	60
第 46図	56・74号住居跡実測図 (1/60)	61

第 47図	53・54・56・58号住居跡出土土器実測図 (1/3)	62
第 48図	62・64号住居跡実測図 (1/60)	63
第 49図	63号住居跡実測図 (1/60)	64
第 50図	68・71・72号住居跡実測図 (1/60)	66
第 51図	59・60・62・66・70・73号住居跡出土土器実測図 (1/3)	67
第 52図	75・76・77・85号住居跡実測図 (1/60)	68
第 53図	75号住居跡内炉跡? 実測図 (1/20)	69
第 54図	75号住居跡出土土器実測図 1 (1/4)	69
第 55図	75号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	70
第 56図	78・79・80・81・82・83・84号住居跡実測図 (1/60)	72
第 57図	76・78・79号住居跡出土土器実測図 (1/3)	73
第 58図	4・12・15・18・19号土坑 <SK 4・12・15・18・19> 実測図 (1/40)	75
第 59図	S X 1・2 実測図 (1/60)	77
第 60図	4・16・19号土坑 <SK 4・16・19>, S X 1・2 出土土器実測図 (1/3)	78
第 61図	支石墓・石棺墓位置図 (1/100)	79
第 62図	1号支石墓 <SS 1> 実測図 (1/30)	81
第 63図	2・3号支石墓 <SS 2・3> 実測図 (1/30)	83
第 64図	4・5号支石墓 <SS 4・5> 実測図 (1/30)	84
第 65図	1・2号石棺墓 <SC 1・2> 実測図 (1/30)	86
第 66図	支石墓・石棺墓出土土器実測図 (1/3)	87
第 67図	ピット出土土器実測図 1 [縄文～弥生] (1/3)	89
第 68図	ピット出土土器実測図 2 [縄文～弥生] (1/3)	90
第 69図	包含層V出土土器実測図 (1/3)	91
第 70図	包含層VI出土土器実測図 (1/3)	91
第 71図	包含層VII出土土器実測図 1 (1/3)	92
第 72図	包含層VII出土土器実測図 2 (1/3)	93
第 73図	包含層VIII出土土器実測図 1 (1/3)	94
第 74図	包含層VIII出土土器実測図 2 (1/3)	95
第 75図	包含層VIII出土土器実測図 3 (1/3)	96
第 76図	2・7トレンチ間包含層出土土器実測図 1 [A・B層] (1/3)	98
第 77図	2・7トレンチ間包含層出土土器実測図 2 [B層] (1/3)	99
第 78図	2・7トレンチ間包含層出土土器実測図 3 [B層] (1/3)	100
第 79図	2・7トレンチ間包含層出土土器実測図 4 [B・B1層] (1/3)	101

第 80図	2・7 トレンチ間包含層出土土器実測図 5 [B2層] (1/3)	102
第 81図	2・7 トレンチ間包含層出土土器実測図 6 [B2・B3・C層] (1/3)	103
第 82図	5・7 トレンチ間包含層出土土器実測図 1 [A・B層] (1/3)	104
第 83図	5・7 トレンチ間包含層出土土器実測図 2 [B1層] (1/3)	105
第 84図	5・7 トレンチ間包含層出土土器実測図 3 [B1・C層] (1/3)	106
第 85図	5・7 トレンチ間包含層出土土器実測図 4 [D・F層] (1/3)	107
第 86図	包含層等出土土器実測図 1 (1/3)	108
第 87図	包含層等出土土器実測図 2 (1/3)	109
第 88図	包含層等出土土器実測図 3 (1/3)	110
第 89図	包含層等出土土器実測図 4 (1/3)	111
第 90図	包含層等出土土器実測図 5 (1/3)	112
第 91図	包含層等出土土器実測図 6 (1/3)	113
第 92図	包含層等出土土器実測図 7 (1/3)	114
第 93図	包含層等出土土器実測図 8 (1/3)	115
第 94図	包含層等出土土器実測図 9 (1/3)	116
第 95図	土製品実測図〔縄文～弥生〕 (1/2)	117
第 96図	大陸系磨製石器実測図 (1/3)	118
第 97図	石包丁形石器実測図 (1/3)	118
第 98図	打製石器実測図 1 〈石鏃〉 (1/2)	119
第 99図	打製石器実測図 2 〈石鏃〉 (1/2)	120
第100図	打製石器実測図 3 〈スクレイパー等〉 (1/2)	121
第101図	打製石器実測図 4 〈スクレイパー等〉 (1/2)	122
第102図	打製石器実測図 5 〈スクレイパー等〉 (1/2)	123
第103図	石斧実測図 1 (1/3)	124
第104図	石斧実測図 2 (1/3)	125
第105図	石斧実測図 3 (1/3)	126
第106図	すり石・叩石実測図 1 (1/3)	127
第107図	すり石・叩石実測図 2 (1/3)	128
第108図	すり石・叩石実測図 3 (1/3)	129
第109図	すり石・叩石実測図 4 (1/3)	130
第110図	すり石・叩石実測図 5 (1/3)	131
第111図	砥石・台石実測図 1 (1/3)	132
第112図	砥石・台石実測図 2 (1/6)	133

第113図	砥石・台石実測図3 (1/3)	134
第114図	畠田遺跡古墳時代以降遺構配置・区割図 (1/600)	136
第115図	1号掘立柱建物跡〈SB1〉実測図 (1/60)	138
第116図	2号掘立柱建物跡〈SB2〉実測図 (1/60)	139
第117図	3号掘立柱建物跡〈SB3〉実測図 (1/60)	140
第118図	4号掘立柱建物跡〈SB4〉実測図 (1/60)	141
第119図	5号掘立柱建物跡〈SB5〉実測図 (1/60)	142
第120図	1・3号土坑〈SK1・3〉実測図 (1/40)	143
第121図	2・13・14・16・17号土坑〈SK2・13・14・16・17〉実測図 (1/60)	145
第122図	1・2号土坑〈SK1・2〉出土土器等実測図 (1/3)	146
第123図	1号土坑〈SK1〉出土土器実測図2 (1/3)	147
第124図	3号土坑〈SK3〉出土土器等実測図 (1/3)	148
第125図	5号土坑〈SK5〉実測図1 (1/60)	150
第126図	5号土坑〈SK5〉実測図2 (1/30)	151
第127図	5号土坑〈SK5〉出土土器実測図 (1/3)	152
第128図	5・11号土坑〈SK5・11〉出土土器実測図2 (1/3)	153
第129図	5~11号土坑位置図 (1/100)	154
第130図	6・7・8・9号土坑〈SK6・7・8・9〉実測図 (1/30)	155
第131図	10・11号土坑〈SK10・11〉実測図 (1/30)	156
第132図	20号土坑〈SK20〉、SX3実測図 (1/60)	158
第133図	20号土坑〈SK20〉出土土器等実測図 (1/3)	159
第134図	S R 1 ~ 3 実測図 (1/40)	161
第135図	6・8・21・22号土坑、SX3、SR1・2出土土器等実測図 (1/3)	162
第136図	1号周溝墓〈ST1〉実測図 (1/60)	164
第137図	2号周溝墓〈ST2〉実測図 (1/60)	165
第138図	1・2号周溝墓〈ST1・2〉主体部実測図 (1/30)	166
第139図	1・2号周溝墓〈ST1・2〉出土土器実測図 (1/3)	167
第140図	1号溝〈SD1〉出土土器等実測図1 (1/3)	168
第141図	1号溝〈SD1〉出土土器等実測図2 (1/3)	169
第142図	2・6号溝〈SD2・6〉土層図 (1/40)	170
第143図	2号溝〈SD2〉出土土器等実測図1 (1/3)	171
第144図	2号溝〈SD2〉出土土器等実測図2 (1/3)	172
第145図	2号溝〈SD2〉出土土器等実測図3 (1/3)	173

第146図	2号溝〈SD2〉、ピット出土土器等実測図(1/3)	174
第147図	3・4・5号溝〈SD3・4・5〉出土土器等実測図(1/3)	176
第148図	6・7号溝〈SD6・7〉出土土器等実測図(1/3)	177
第149図	ピット出土土器等実測図1〔中世〕(1/3)	180
第150図	ピット出土土器等実測図2〔中世〕(1/3)	181
第151図	ピット出土土器等実測図3〔中世〕(1/3)	182
第152図	ピット出土土器等実測図4〔中世〕(1/3)	183
第153図	包含層I出土土器等実測図1(1/3)	184
第154図	包含層I出土土器等実測図2(1/3)	185
第155図	包含層I出土土器等実測図3(1/4)	186
第156図	包含層I出土土器等実測図4(1/3)	187
第157図	包含層I出土土器等実測図5(1/3)	188
第158図	包含層I出土土器等実測図6(1/3)	189
第159図	包含層II出土土器等実測図(1/3)	190
第160図	包含層III出土土器等実測図1(1/3)	191
第161図	包含層III出土土器等実測図2(1/3)	192
第162図	包含層III出土土器等実測図3(1/3)	193
第163図	包含層III出土土器等実測図4(1/3)	194
第164図	包含層IV出土土器等実測図1(1/3)	195
第165図	包含層IV出土土器等実測図2(1/3)	196
第166図	遺構検出面その他出土土器等実測図1(1/3)	197
第167図	遺構検出面その他出土土器等実測図2(1/3)	198
第168図	遺構検出面その他出土土器等実測図3(1/3)	199
第169図	土製品実測図〔中世〕(1/2)	200
第170図	瓦・土製品実測図(1/3)	200
第171図	滑石製品実測図(1/3)	201
第172図	鉄製品実測図1(1/2)	202
第173図	鉄製品実測図2(1/2)	203
第174図	渡来鏡拓影(2/3)	203
第175図	石製品実測図1〈砥石〉〔中世〕(1/3)	204
第176図	石製品実測図2〈台石〉〔中世〕(1/3)	205
第177図	石製品実測図3〈台石〉〔中世〕(1/3)	206
第178図	石製品実測図4〈台石〉〔中世〕(1/4)	207

第179図 石製品実測図 5 <軽石等> [中世] (1/3)	208
第180図 IV区地形図 (1/600)	210
第181図 IV区遺構図 (1/300)	211
第182図 IV区第11・12トレンチ土層図 (1/120)	212
第183図 IV区1・4号溝 <SD 1・4> 出土土器実測図 (1/3)	213
第184図 IV区5号溝 <SD 5> 出土土器実測図 (1/3)	214
第185図 IV区6号溝 <SD 6> 出土土器実測図 (1/3)	216
第186図 IV区7号溝 <SD 7> 出土土器等実測図 1 (1/3)	217
第187図 IV区7号溝 <SD 7> 出土土器等実測図 2 (1/3)	218
第188図 IV区3層出土土器等実測図 1 (1/3)	220
第189図 IV区3層出土土器等実測図 2 (1/3)	221
第190図 IV区3層出土土器等実測図 3 (1/3)	222
第191図 IV区3層出土土器等実測図 4 (1/3)	223
第192図 IV区3層出土土器等実測図 5 (1/3)	224
第193図 IV区3層出土土器等実測図 6 (1/3)	225
第194図 IV区3層出土土器等実測図 7 (1/3)	226
第195図 IV区4層出土土器実測図 (1/3)	227
第196図 IV区出土土器等実測図 (1/3)	228
第197図 IV区出土瓦実測図 1 (1/3)	229
第198図 IV区出土瓦実測図 2 (1/3)	230
第199図 IV区出土瓦実測図 3 (1/3)	231
第200図 IV区出土土製品・石鍋等実測図 (1/3)	232
第201図 IV区出土石製品実測図 1 (1/3)	233
第202図 IV区出土石製品実測図 2 (1/3)	234
第203図 IV区出土石製品実測図 3 (1/2)	235
第204図 IV区出土鉄製品・渡来銭実測図・拓影 (1/2・2/3)	236
第V-1図 組織痕土器拓影 (2/3)	237
第V-2図 網目の計測部位	238
第V-3図 鏡山氏による組織痕土器の分布	239
第205図 畑田遺跡出土壺と関連土器 <畑田以外は各報告書より改変転載> (1/3)	243
第206図 畑田遺跡周辺地形図 (1/5000)	246

写真挿図目次

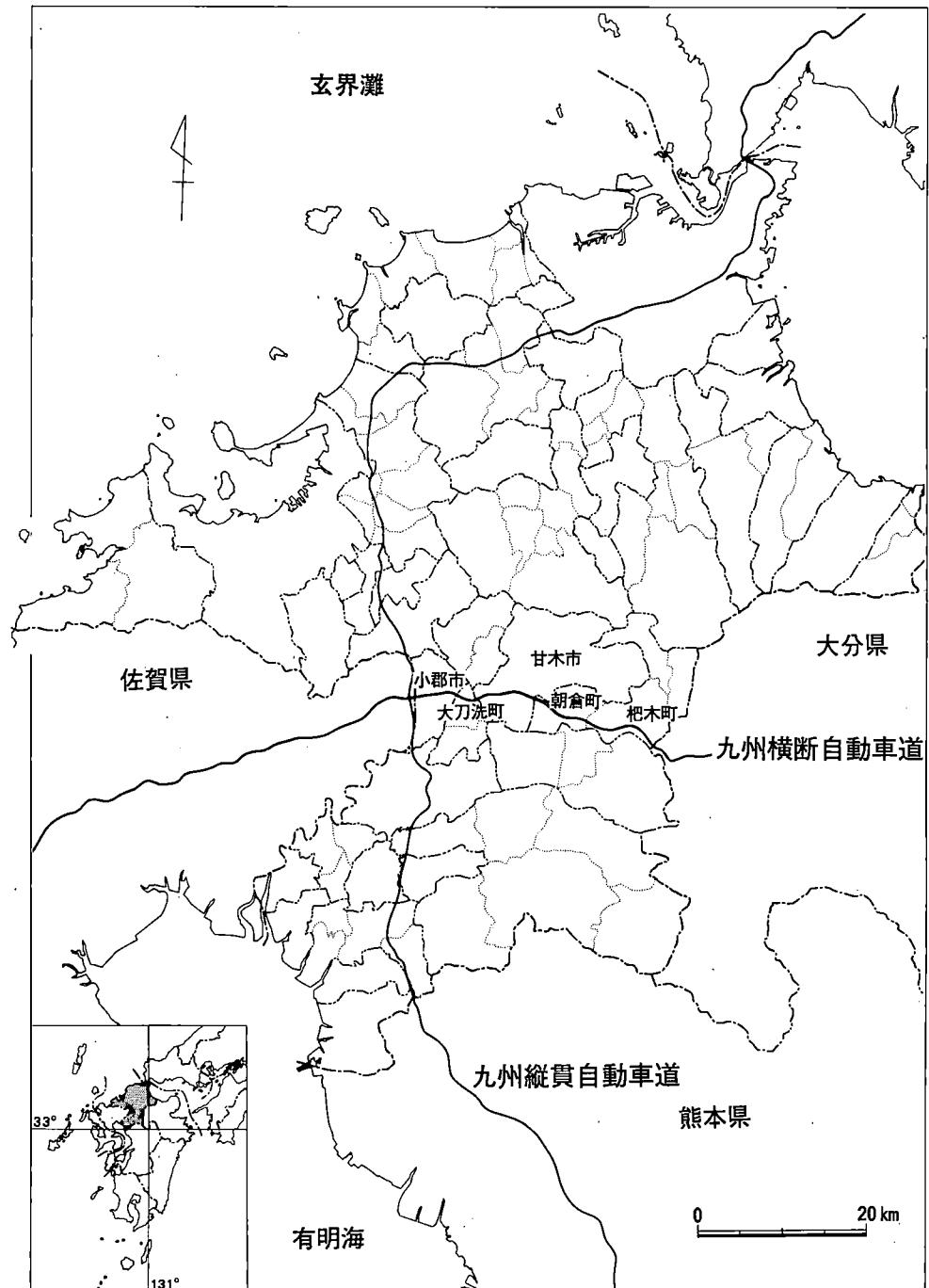
Photo. 1 調査風景 1	3
Photo. 2 調査風景 2	54
Photo. 3 S D 7 など	178
Photo. 4 調査風景 3	187
Photo. 5 IV区	208
Photo. 6 調査風景 4	250

表目次

第1表 九州横断自動車道関係遺跡一覧表	(折込み) 6-7
第2表 ①～⑩ 土製品・石器法量表	251-260

付 図

畠田遺跡全体図(1/200)



第1図 九州横断自動車道路線図 (1/840,000)

I 序 論

A. 調査の経過

九州横断自動車道と総称されるうちの大分自動車道における福岡県内部分は、西端部の小郡市から東端部の朝倉郡杷木町まで約37kmの距離がある。その建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査は、日本道路公団からの委託を受けて、福岡県教育委員会によって1979（昭和54）年から始められ、1990（平成2）年までの12年間に、62箇所を対象として実施された。その発掘調査の総面積は約53万m²に及んでいる。

横断自動車道の早期供用開始を目指して、それに向けて発掘調査を最大限に優先してきたなかにおいても、調査担当者それぞれが調査報告書の作成を順次行ってきた。しかしながら発掘調査事業が行われている間に全ての報告書を刊行することはとても不可能であったため、調査終了後の1991（平成3）年度からは毎年度5冊を目安として報告書を刊行することとした。その結果、1998（平成10）年3月段階に52集までを刊行し、平成10年度が最終年度となった。本年度は下記の4冊であり、この第56集をもって『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』のシリーズは完結することとなる。足掛け20年にわたる長期の事業であった。報告書収録の遺跡等に関しては〔附編〕を参照されたい。

第53集（29-A地点：原の東遺跡Ⅱ）

第54集（34地点：金場遺跡）

第55集（27地点：長島遺跡Ⅱ）

第56集（48地点：畠田遺跡）

この20年間にこの事業に関係した人は多人数にわたり、それらの方々の協力・支援のもとにこの事業が遂行できたことに対し、衷心よりお礼申し上げる次第である。

地点ごとの概要は第1表を参照されたい。

報告書の作成にかかる遺物・図面等の整理は、福岡県文化財保護課甘木事務所および太宰府事務所、九州歴史資料館において行った。

本書に収録した畠田遺跡は、1987（昭和62）年2月5日に鳥栖ー朝倉間が開通する直前の、昭和61年度（1986~87年）に調査を行ったものである。調査対象面積は約5000m²であったが、中世から縄文時代へと時期ごとに掘り下げていったので、総計では17000m²ほどを調査したこととなった。以下に調査の経過として日誌を抄録する。

[昭和61(1986)年]

- 8月18日 42地点・江栗遺跡より器材を搬入。テント設営。
表土剥ぎの済んだ所には中世と縄文晩期の遺物が見えている。
- 22日 遺構検出作業。青磁・白磁片多し。
- 25日 路線内水路にパイプを埋設する。
- 27日 レベル移動。第1トレーニング設定。
- 30日 1号溝発掘。
- 9月 1日 1号溝、包含層I発掘。
- 4日 農道を境にして調査区をI・II・III区に分ける。第2トレーニング発掘。
- 8日 II区の平板測量。
- 13日 遺構検出とピット発掘、実測。
- 16日 III区に支石墓の上石と思われる大きな石あり。I区にて青白磁合子の身出土。
- 17日 柏木町文化財専門委員8名来訪。
- 18日 III区の大石は支石墓として間違いないと判断する。
- 24日 発掘と実測。SK1写真。
- 27日 I区全体の写真を撮る。
- 29日 ベルトコンベアーに入る。
- 10月 1日 包含層IIIの掘り下げ。SB4・5写真。
- 3日 農道の付け替えについて利用者(地権者)の同意を得る。
- 6日 包含層IVの下に住居跡があるらしい。
- 15日 I区6号溝発掘。包含層IIIの除去。
- 17日 III区にSK5確認。
- 22日 2・3号支石墓の下部遺構発掘。
- 24日 49地点試掘……なし。
- 27日 I区に住居跡10軒弱を確認
- 29日 第3トレーニングの深い所より押型文土器出土。
- 11月 2日 農道を取り外す。
- 5日 第2トレーニングの下部で標高60.26mにて礫層現れる。
- 7日 1・2号石棺墓の発掘。
- 10日 全体清掃、写真。
- 14日 1号支石墓の東南部にて鉄鏃子出土。
- 15日 30号住居跡より土製紡錘車出土。
- 18日 SR1より渡来鏡出土。

第1表 九州横断自動車道関係遺跡一覧表

地 点	遺 跡 名	所 在 地	内 容	面積 m ²	調 査 年 度 と 面 積											備 考	報 告 書	
					54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	H2		
1	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡	弥生集落、歴史溝	11,200					5,000		560						完了	7集
2	前伏遺跡	〃 〃	弥生・古墳散布地	10,400						330	6,000						完了	11集
3	大板井遺跡	〃 大板井	弥生・古墳	5,400							3,000						小郡市委託完了	15集
4	〃	〃 〃	〃 〃	9,200						3,500	5,000						小郡市委託完了	15集
5	井上薬師堂遺跡	〃 井上	弥生・中世集落	8,800						4,500	3,700						完了	10・38集
6	薬師堂東遺跡	〃 薬師町	弥生・古墳散布地(首切塚)	32,000					500	7,300	10,100						完了	13・16集
7	〃 今隈	弥生散布地		7,200					200		100						遺構なし完了	—
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	古代道路遺構	4,000					3,600								完了	26集
9	春園遺跡	〃	先土器・弥生・奈良・近世墓	10,800					100	6,700							完了	26集
10	十三塚遺跡	〃 甲条	古墳集落	34,400				700		300							完了	26集
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	古墳・奈良集落、墓地	33,800				13,860	13,500	10,000	3,000						2・5・8・14・17 46・51・52集	
12	小石原川西条里	〃 上浦	中世	48,000				8,100									遺構なし完了	—
13	〃 東条里	〃 上浦馬田	〃	56,000	200	7,600										完了	1集	
14	上々浦遺跡	〃 上浦	弥生・古墳集落	18,400	200											完了	1集	
15	西原・下原遺跡	〃 一ツ木屋永	〃 〃	54,800	AB地点 3,850	C地点 3,850	1,400									完了	1・2・3集	
16	高原遺跡	〃 屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400	5,400						完了	31集	
17	口の坪遺跡	〃 牛鶴	近世積石	100						100						完了	31集	
18	〃	散布地		2,550					300							遺構なし完了	—	
19-A	塔ノ上遺跡	〃 〃	奈良集落	30,000					700	8,200						完了	9集	
19-B	大還端遺跡	朝倉町大字石成	古墳集落・奈良墓地	20,000							8,400					完了	39集	
19-C	石成久保遺跡	〃	古墳集落	20,000							6,100					完了	39集	
20	中道遺跡	〃 大庭	縄文・弥生・奈良集落	15,400					300		11,400					完了	39集	
21-A	西法寺遺跡	〃 〃	奈良集落・中世								8,400					完了	47集	
21-B	経塚遺跡	〃 〃	散布地					800	600		2,300					完了	47集	
21-C	大庭久保遺跡	〃 〃	弥生墓地・奈良集落							9,650						完了	36集	
21-D	上の原遺跡	〃 〃	弥生集落・墓地・古墳集落							12,300						完了	18・27・33集	
22-A	治部ノ上遺跡	〃 入地	縄文・弥生・古墳集落	5,400					300	4,800						完了	32集	
22-C	狐塚南遺跡	〃 〃	弥生・中世集落・墓地	5,000							3,420					完了	28集	
23	座禅寺遺跡	〃 〃	弥生集落・古墳	2,600						2,600						完了	32集	
24	才田遺跡	〃 〃	古墳～奈良・中世集落	5,400						1,050	6,650					完了	48集	
25	東才田遺跡	〃 〃	〃 〃	4,000						1,300	4,400					完了	48集	
26	〃 須川	散布地		1,600												遺構なし完了	—	
27	長島遺跡	〃 〃	縄文・弥生・古墳・奈良集落	16,000				C地点 5,000	C地点 6,640			500	16,000			完了	34・55集	
28	中妙見遺跡	〃 〃	縄文・歴史集落	2,400				200	458							完了	50集	
29-A	原の東遺跡	〃 菱野	縄文・弥生集落・墓地	16,800					600			5,240	2,100			完了	50・53集	
29-B	妙見古墳群	〃 〃	古墳・方形周溝墓								4,660					完了	29集	
30	鎌塚遺跡	〃 菱野・山田	縄文・弥生集落	4,000							6,550					完了	22集	
31	山ノ神遺跡	〃 山田	縄文	2,000							1,980					完了	22集	
32	〃	散布地		2,400				300								遺構なし完了	—	
33	長田遺跡	〃 〃	縄文・弥生・古墳集落	2,000							5,500	2,000				完了	30集	
34	金場遺跡	〃 〃	縄文・古墳	3,600							680	15,400				完了	54集	
35-A	上ノ宿遺跡	〃 〃	弥生・散布地	2,600							880	2,900				完了	20集	
35-B	恵蘇山遺跡	〃 〃	古墳集落								2,400					完了	20集	
36	稗畠遺跡	〃 〃	古墳散布地	2,000							3,980					完了	20集	
37	大迫遺跡	〃 〃	奈良～平安火葬場・集落	2,400							5,410	9,900	700			完了	24集	
38	外之隈遺跡	〃 〃	弥生～中世・箱式石棺	125							5,150	12,600		1,200		完了	35・40集	
39-A	杷木宮原遺跡	杷木町大字志波	弥生・古墳・中世散布地							320	3,400					完了	21集	
39-B	中町裏遺跡	〃 〃	〃 〃 〃	22,000							11,000					完了	21集	
40	志波桑ノ本遺跡	〃 〃	中世・散布地	2,500						300	7,700					完了	45集	
41	志波岡本遺跡	〃 〃	〃 〃	18,000						300	9,400					完了	45集	
42	江栗遺跡	〃 〃	中世・鍛冶遺構	8,000						300	9,700					完了	45集	
43	大谷遺跡	〃 若市	古墳群	12,000							500	7,560				完了	41集	
44	〃 久喜宮	散布地		1,800							150					遺構なし	—	
45	笛隈遺跡	〃 〃	旧石器～中世・墓地・集落	2,400							400	3,710				完了	44集	
46	夕月・天園遺跡	〃 古賀	〃	1,800							300	2,210	225			完了	42集	
47	上池田遺跡	〃 池田	弥生・古墳・中世散布地	4,000							3,200					完了	42集	
48	畠田遺跡	〃 〃	縄文・弥生・中世集落・墓地	1,800							6,800					完了	56集	
49	〃 林田	散布地		3,200							150					遺構なし	—	
50	〃 〃	〃		2,400							200					〃	—	
51	楠田遺跡	〃 〃	縄文集落	5,200							6,500					完了	49集	
52-A	小覚原遺跡	〃 〃	〃							1,000	1,250					完了	49集	
52-B	二十谷遺跡	〃 〃	〃								1,550					完了	49集	
53	陣内遺跡	〃 穂坂	中世	3,500							5,700					完了	49集	
54	上野原遺跡	〃 〃	弥生・中世	1,800							2,700					完了	49集	
55	〃 〃	散布地		1,600							100					遺構なし	—	
56	〃 〃	〃		2,400							800					遺構なし	—	
57	柿原遺跡群	甘木市大字柿原	古墳群・縄文・弥生集落	200,000	測量 14,700	900	8,300	15,000	18,500	4,400						土取場・完了	4・6・12・19・37・41集	
58	山田古墳群	朝倉郡大字山田	古墳群	40,000	測量 4,435													

- 20日 IV区にトレンチ設定。I区住居跡発掘。
- 26日 IV区平板測量。
- 27日 住居跡の番号56まで。
- 12月 1日 全景気球写真が3日目にして撮影完了。
- 6日 1号支石墓、1・2号石棺墓実測。
- 9日 第1トレンチの南端を掘り下げる。旧河道かと思われる粗砂層あり。
- 10日 包含層IVの最下部にて住居跡を掘る。
- 11日 第2・7トレンチ間の発掘。
- 15日 住居跡の番号85まで。
- 17日 支石墓の石を甘木歴史資料館へ移築することの打ち合わせ。
- 18日 62~85号住居跡の写真。
- 20日 第2・7・5トレンチ間の発掘。平板測量。
- 26日 昭和61年の作業終了。

[昭和62(1987)年]

- 1月 6日 重機にて下げる。
- 8日 人力にての作業開始。IV区の遺構検出と発掘。
- 13日 雪にて作業中止。
- 17日 IV区の発掘継続。
- 22日 現場作業終了。
- 24日 器材を47・51地点へ移動し、全作業終了。
- 26日 支石墓の上石を甘木歴史資料館へ移設。

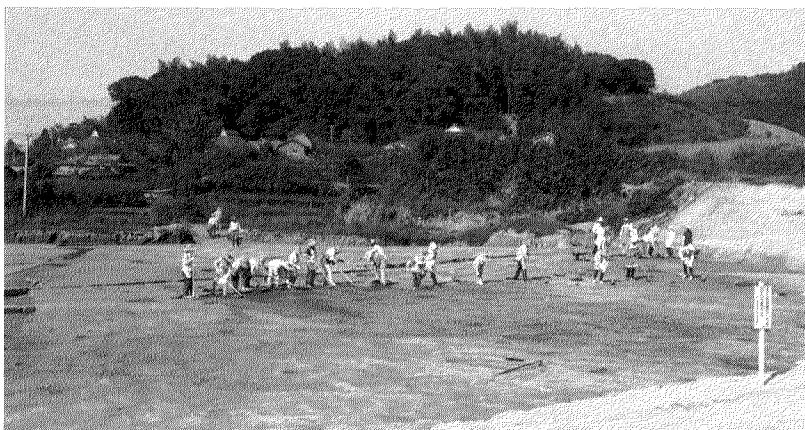


Photo. 1 調査風景 1

B. 調査の組織と関係者

畠田遺跡の発掘調査を行った昭和61年度と、報告書作成の平成10年度における関係者は次のとおりである。

日本道路公団

福岡建設局

	昭和61年度	平成10年度
局長	今村 浩三（前任）	杉田 美昭
次長	菱刈 庄二（前任）	吉岡 康行
総務部長	安元 富治	
管理課長	森 宏之	
管理課長代理	佐伯 豊	

福岡建設局甘木工事事務所

所長	乗松 紀三（前任）	風間 徹
副所長	西田 功	
副所長（技術担当）	中村 義治	
庶務課長	徳永 登	
用地課長	岩下 剛（前任）	松尾 伸男
工務課長	後藤二郎彦	
小郡工事区工事長	友田 義則	
甘木工事区工事長	猪狩 宗雄	
朝倉工事区工事長	小手川良和（前任）	上野 満
杷木工事区工事長	山中 茂（前任）	小沢 公共

【九州支社】

支社長	青木 秀郎
用地部長	原賀 寛
管理課長	松尾 俊昭
管理課長代理	酒井 正弘
担当	豊住 正哉
〃	上別府 黥
日田工事事務所長	藤木 和啓
〃 庶務課長	大野 誠治

福岡県教育委員会

昭和61年度

平成10年度

[総括]

教 育 長	友野 隆	光安 常喜
教育次長	竹井 宏	藤吉純一郎
理 事		青木 幹雄
指導第二部長	渕上 雄幸	
総務部長		富永 獻
文化課長	窪田 康徳	
文化財保護課長		石松 好雄
文化財保護課参事		柳田 康雄
〃		井上 裕弘
文化課課長補佐	平 聖峰	
文化財保護課課長補佐		角 伸行
文化課課長技術補佐	宮小路賀宏	
文化財保護課課長技術補佐		井上 裕弘 (兼)
文化課参事補佐	栗原 和彦	
〃 〃	中矢 真人	
〃 〃	大塚 健	
〃 〃	柳田 康雄	
文化財保護課参事補佐		橋口 達也
〃 〃		川述 昭人
〃 〃		佐々木隆彦
〃 〃		児玉 真一
〃 〃		中間 研志

[庶務]

文化課庶務係長	平 聖峰 (兼)	
文化財保護課管理係長		角 伸行 (兼)
文化課 事務主査	長谷川伸弘	
文化財保護課事務主査		鶴我 哲夫
〃 主任主事		田中 利幸
〃 〃		佐藤 雅二

(調査)

文化課調査班総括	柳田 康雄（兼）
〃 技術主査	井上 裕弘
〃 主任技師	高橋 章
〃 〃	馬田 弘穎
〃 〃	中間 研志
〃 〃	佐々木隆彦
〃 〃	小池 史哲
〃 〃	伊崎 俊秋（担当）
〃 技 師	緒方 泉
〃 〃	小田 和利
〃 文化財専門員	木村幾多郎 [現 大分市歴史資料館]
〃 臨時職員	日高 正幸 [現 小石原村教育委員会]
〃 〃	宮田 浩之 [現 小郡市教育委員会]
〃 〃	森山 栄一 [現 筑紫野市教育委員会]
〃 調査補助員	高田 一弘
〃 〃	武田 光正 [現 遠賀町教育委員会]
〃 〃	佐土原逸男
〃 〃	向田 雅彦 [現 鳥栖市教育委員会]

[整理]

文化財保護課技術主査	伊崎 俊秋
〃 整理指導員	岩瀬 正信
〃 〃	北岡 伸一

調査は地元の杷木町の作業員の皆さんのご協力のもとに進捗し、多大な成果をおさめることができた。とくに杷木町役場石井徳昌氏には様々なご助力をいただいた。記して感謝いたします。また、調査中には西谷正・西健一郎（九州大学）、後藤直（福岡市埋蔵文化財センター）、山田成洋（静岡県教育委員会）、赤川正秀（福岡県文化財保護指導委員）、石山勲（甘木歴史資料館）、池田和博（松末小学校）、安田保實（朝日新聞）、田崎博之・池田祐司・山村信栄氏等（肩書きは調査当時）の来訪があり、種々のご教示を受けた。さらには、整理・報告書作成の段階でも多くの方々から有益なご助言・ご援助をいただいた。深謝いたします。

なお、本報告書で一連の九州横断自動車道関係の調査報告は最終巻となるが、これまでの調査および報告書作成に関わる事業において、各方面から多大なるご援助・ご協力・ご支援をいただいた。それらについても衷心より深甚なる謝意を表します。

II 遺跡の位置と環境

A. 位置と立地

(図版2、第2図)

[所在地]

福岡県朝倉郡杷木町大字池田字畠田57-1・59-1・71-1ほか

福岡県朝倉郡杷木町は福岡県の東南端部にあり、大分県日田市と境を接する県境のまちである。ここは、九州中央山脈に源を発した一級河川たる筑紫次郎こと筑後川が、日田盆地を抜けていわゆる両筑平野へ流れ込む喉元部分の右岸にあたる。

佐賀県鳥栖市の鳥栖ジャンクションから分岐して大分県大分市までを結ぶ九州横断自動車道（大分自動車道）は、福岡県内は小郡市・三井郡大刀洗町・甘木市・朝倉郡朝倉町・同杷木町を通過する。朝倉町で国道386号線と交差するまでの西側部分は平野・低台地部を、それより東側は山間部を縫って走っている。

ここに報告する畠田遺跡が所在するのは、この横断道の福岡県内部分でも東端部に近く、横断道の路線 STATION ナンバーでいえば No283+80 ~ No285+20 の間にある。国道386号線に面する杷木町役場の北東方にあたり、筑後川の中流に注ぐ小支流河川・白木谷川の中流右岸に位置している。国土座標では X = +40380 ~ 40470、Y = -16400 ~ 16540 の範囲にあたる。

調査地区の標高は 60 ~ 67m ほどであり、小丘陵先端の緩傾斜部と裾部平坦面とを含んでいる。平坦部は調査前は大部分が水田として利用されていた。

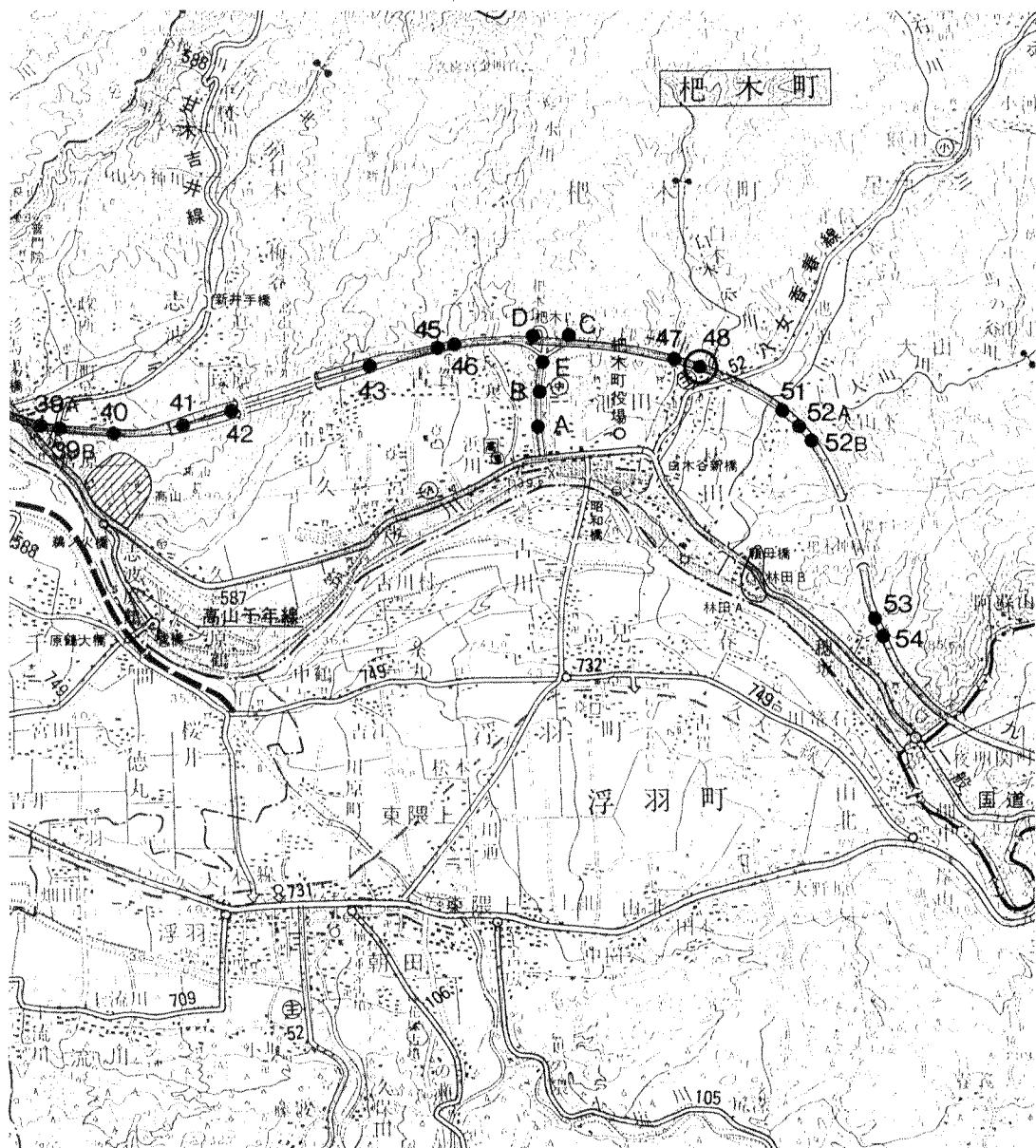
B. 歴史的環境

(第2図)

九州横断道関係の調査においては旧石器時代から歴史時代に至る多くの遺跡から、あらゆる種類の遺構・遺物が発見された。調査された遺跡の数は60遺跡にのぼり、夥しい考古資料が蓄積された。甘木市から朝倉町西部にかけては、中位段丘上の先端部付近を横断道が通過するため、密集度の高い遺構・遺物が検出されている。朝倉町東部から杷木町を経ての県境までは主に山間部を路線が通過するが、ここでも予想をはるかに越える成果が得られている。

以下に、畠田遺跡に関連して、この近辺の調査された幾つかの遺跡を概観する。

楠田遺跡（杷木町大字林田字楠田） 畠田遺跡の東南600mほどの、赤谷川左岸にあり、標高61m前後の所に占地する。縄文早期の土坑1（押型文土器）、縄文後期の土坑1、縄文晚期の



39-A	杷木宮原遺跡	43	大谷遺跡	51	楠田遺跡	A	鞍掛遺跡
B	中町裏遺跡	45	笠隈遺跡	52-A	小覚原遺跡	B	前田遺跡
40	志波桑ノ本遺跡	46	天園遺跡	B	二十谷遺跡	C	西ノ迫遺跡
41	志波岡本遺跡	47	上池田遺跡	53	陣内遺跡	D	クリナラ遺跡
42	江栗遺跡	48	畠田遺跡	54	上野原遺跡	E	若宮遺跡

第2図 畠田遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50,000)

豎穴住居跡7、豎穴1、土坑61、弥生中期の土坑1、古墳時代の豎穴1が検出されている。豎穴住居跡は畠田遺跡のそれと似たところがある。

小覚原遺跡（杷木町大字大山字小覚原） 畠田遺跡の東南800mにあり、標高89m前後に占地する。縄文晚期後半の豎穴住居跡12・土坑40（おとし穴15・貯蔵穴6）が検出された。

二十谷遺跡（杷木町大字林田字二十谷） 畠田遺跡の東南1kmほどの所にあり、標高76～78m前後に占地する。縄文晚期中頃～後半の豎穴住居跡33、中世の掘立柱建物3のほかに、おとし穴10、土坑42があった。15～16世紀代の鍛冶遺構は注意される。

上池田遺跡（杷木町大字池田字上池田） 畠田遺跡の西100～200mにあり、標高70m前後に占地する。縄文後期後半の住居跡1、晚期後半の住居跡2・土坑39、弥生前期後半～末の住居跡2・土坑8、12世紀後半の土坑1、15世紀後半の豎穴4・土坑2・土壙墓4があり、それ以外に縄文早期・中期の土器も出土している。その所在する位置と検出された遺構・遺物の時期からしても、畠田遺跡と無関係の遺跡ではない。

クリナラ遺跡（杷木町大字寒水字クリナラ） 標高96～110m前後の、山間部の中の谷部に占地する遺跡である。縄文晚期中頃～後半の豎穴住居跡7・土坑2・集石遺構2・埋甕1のほかに古墳時代後期の豎穴住居跡2が検出されている。

以上は横断道関係で調査された畠田遺跡に至近の遺跡であるが、これらには全て縄文晚期の遺構・遺物がある。またもう少し離れた所で、天園遺跡（杷木町大字古賀字天園：標高78～81m前後に占地）、笹隈遺跡（杷木町大字久喜宮字笹隈：標高77～87m前後に占地）、大谷遺跡（杷木町大字若市字大谷：標高94～102m前後に占地）といった遺跡でもまた縄文晚期の遺構・遺物が見られる。それは畠田遺跡の縄文晚期～弥生前期集落を考えるうえで重要な資料となる。

11～13世紀の中世期の集落はそう多くはないが、杷木町志波桑ノ本遺跡、朝倉町才田遺跡では多量の輸入陶磁器を含む遺物が出土している。やはり莊園に関連した有力土豪層の存在をこの畠田遺跡にもみることができるものと思われる。

この畠田遺跡の存する所は幕藩時代は上座郡池田村に属していた。『朝倉紀聞』『筑前国統風土記』『筑前国統風土記附録』『筑前国統風土記拾遺』の池田村の項には、かつて宗坊寺・妙道寺・真光寺・長光寺・不動寺・金龍寺・徳心院・自得院・地蔵院といった寺があったが今は何もない、と記されている。その正確な所在地も規模もいまは全く不明ではあるが、畠田遺跡の北方に「宗坊寺」、西方に「金蔵寺」という字が残っている。調査中に「IV区北方の一帯にはかつて寺があったという伝承がある」ということを地元の人から聞いた。IV区における瓦片を含む遺物については、あるいは「宗坊寺」と称されていた寺と関連するのかもしれない。

（参考文献については省略）

C 概要

この畠田遺跡では便宜上 I～IV区の区分けを行って調査した（第4図）。I～III区については農道・水路を境界としていたものの、最終的にはそれらを付け替えて全面がひとつの調査区となった。これに対し、IV区は小さな尾根を境として I～III区の西部に位置しており、I～III区とは別に取り扱うのが妥当と考えられる。よって、以下には I～III区をひとまとめにし、それとIV区とを分けて報告する。以下の報告において、IV区のみはその表示を行うが、それ以外は特に断りのない限り I～III区のこととする。

I～III区で検出された遺構の主なものは縄文時代晚期～弥生時代初頭の堅穴住居跡と墓地、

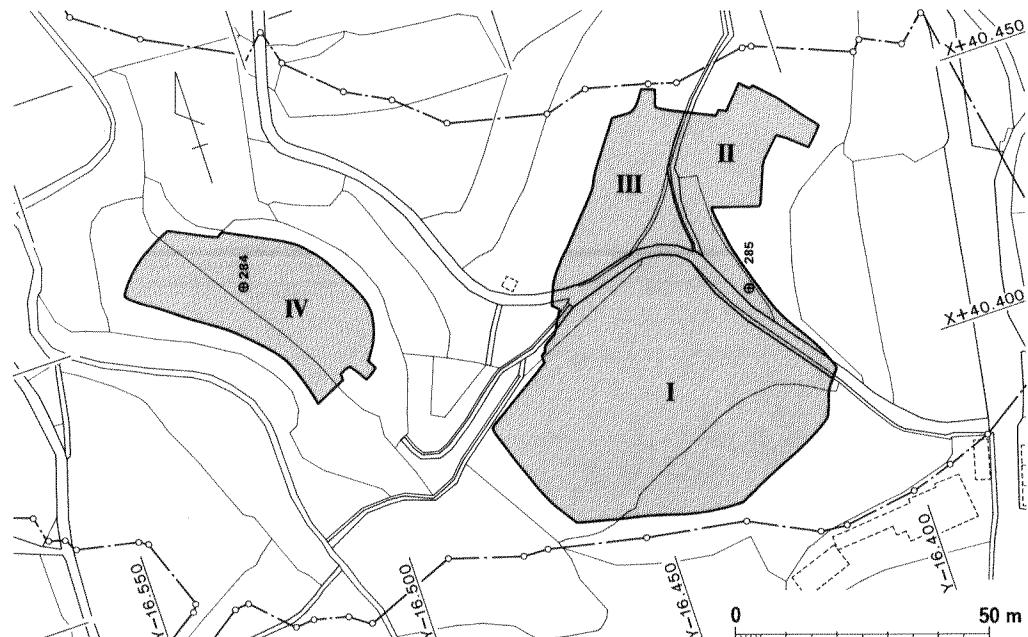


第3図 畠田遺跡地形図 (1/1,500)

土坑、溝、包含層、そして平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡、土坑、周溝墓、溝、包含層等であった。弥生時代中期から古墳時代にかけての遺物も若干見られたが、その時期の明確な遺構は検出できなかった。

この畠田遺跡の、とくにⅠ～Ⅲ区については、その北東方を流れる白木谷川のたび重なる氾濫・土砂流によって砂質土が堆積し、結果的にはこの川で開析された河岸段丘状を呈していた。従って最下層部分は砂礫層であり、その上に幾層にも重なった砂質層があって、それらを切り込んで遺構が掘り込まれていた。堆積層であるために各遺構のプランを把握するのにはきわめて難渋したというのが実状であった。

堆積状況と時期区分を把握するために隨時調査区の数カ所にトレンチを設定して土層を見たが、白木谷川の氾濫（大洪水）はかなりの回数に及んでいると捉えられた（第9図）。結果として層位は幾つにも分けられ、氾濫後の安定期に定住生活を営んだと思われる古墳時代以降の包含層Ⅰ～Ⅳ（それらは概ね平安時代～鎌倉時代に該当）と、縄文時代晩期～弥生時代の包含層Ⅴ～Ⅷを抽出したのであったが、とくに支石墓群の周辺の、調査時の初期にⅢ区としていた所の下層においては、Ⅶ・Ⅷ層の前後はさらに幾つかの層位を捉えることとなった。就中、2トレンチから5トレンチを経て7トレンチに至る所ではA・B・B1・B2・B3・C・D・E・F層から縄文晩期～弥生初頭期の土器が多量に出土した。最も古いのは縄文時代早期の押型文土器を含む層も存した。場所によっては層位が欠落するところもある。当然のことながら堆積



第4図 畠田遺跡地籍・区分図 (1/1,500)

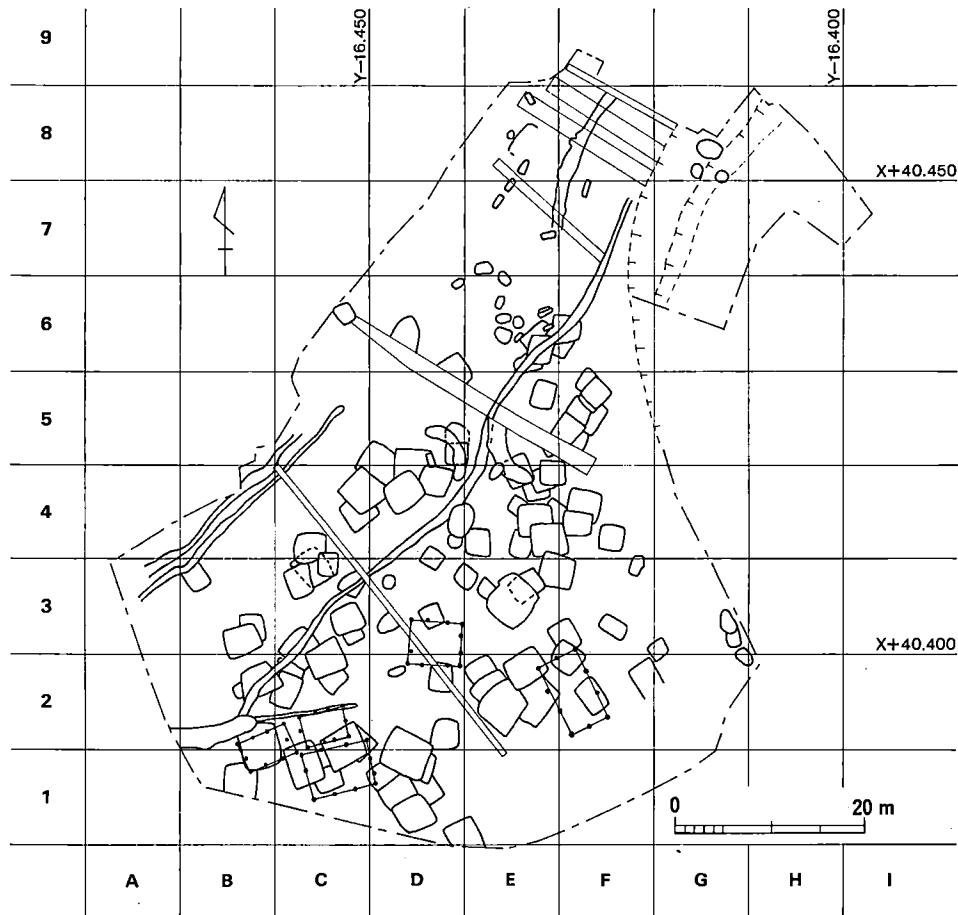
層は東北側から西南側にかけて低くなっている。この詳細は第6・7図を参照されたいが、調査時の所見では、これらの層位の前後関係を古い方から次のように捉えた。

E→C→F (VII) →D (VII) →B3 (→) B2→B1→B→A

ただし、包含層VIIは上流から流されてきた粗砂、堆積した微砂に入っている土器を取り上げるのに冠した層であり、調査区の平坦部のほぼ全面に堆積しており、厚さは1~1.5mにおよんでいる。それは一時期のみの堆積ではないと捉えられた。

VII層はこのVII層の下位にある茶褐色粘質土であるが、これは本来は調査区全域に広がっていたものをVII層によって削られて、2・7トレンチの間の1号支石墓の下部周辺と、のちの80号住居跡の周辺、調査区東南端部周辺に残っていたのみであった。

包含層VIはあるいはB層と同じかもしれない。住居群の大半はこの層と同じかと思われる。



第5図 畑田遺跡区割図 (1/800)

それより新しくⅤ→Ⅳと続いていく。包含層Ⅰ～Ⅲはあまり広い範囲に及ぶものではない。

Ⅳ区は遺構としては溝とピットのほかにはなかったが、遺物は土器を中心として多量に出土した。ここも調査区中心部に縦横のトレンチを設定して土層を見たが（第182図）、一部に人為的な版築に近い整地行為と思われる整然とした層位があった。調査区の範囲内では判断しかねるところもあるが、調査区外も含めて寺跡のような構築物の存在に關係する層位とみてよいのかもしれない。

なお、遺構番号については原則的に調査時のものをそのまま用いることとしたので、連続する番号がかなり離れていたり、また欠番もある。Ⅰ～Ⅲ区について、本文での説明では位置關係がわかりやすいように区割りを行っている（第5図）。出土遺物のうちの土製品・石器については巻末の第2表を参照されたい。検出された遺構・遺物は下記のとおりである。

● I～Ⅲ区の遺構と遺物

[縄文時代晩期～弥生時代]

- ・竪穴住居跡 85軒
- ・土坑（SK、SX） 7基
- ・支石墓（SS） 5基
- ・石棺墓または木棺墓（SC） 2基
- ・ピット

〈出土遺物……縄文土器、弥生土器、紡錘車、石包丁、磨製石斧、打製石斧、打製石器（鎌・スクレイパー・錐・使用剝片等）、砥石、すり石、台石、軽石〉

[中世]

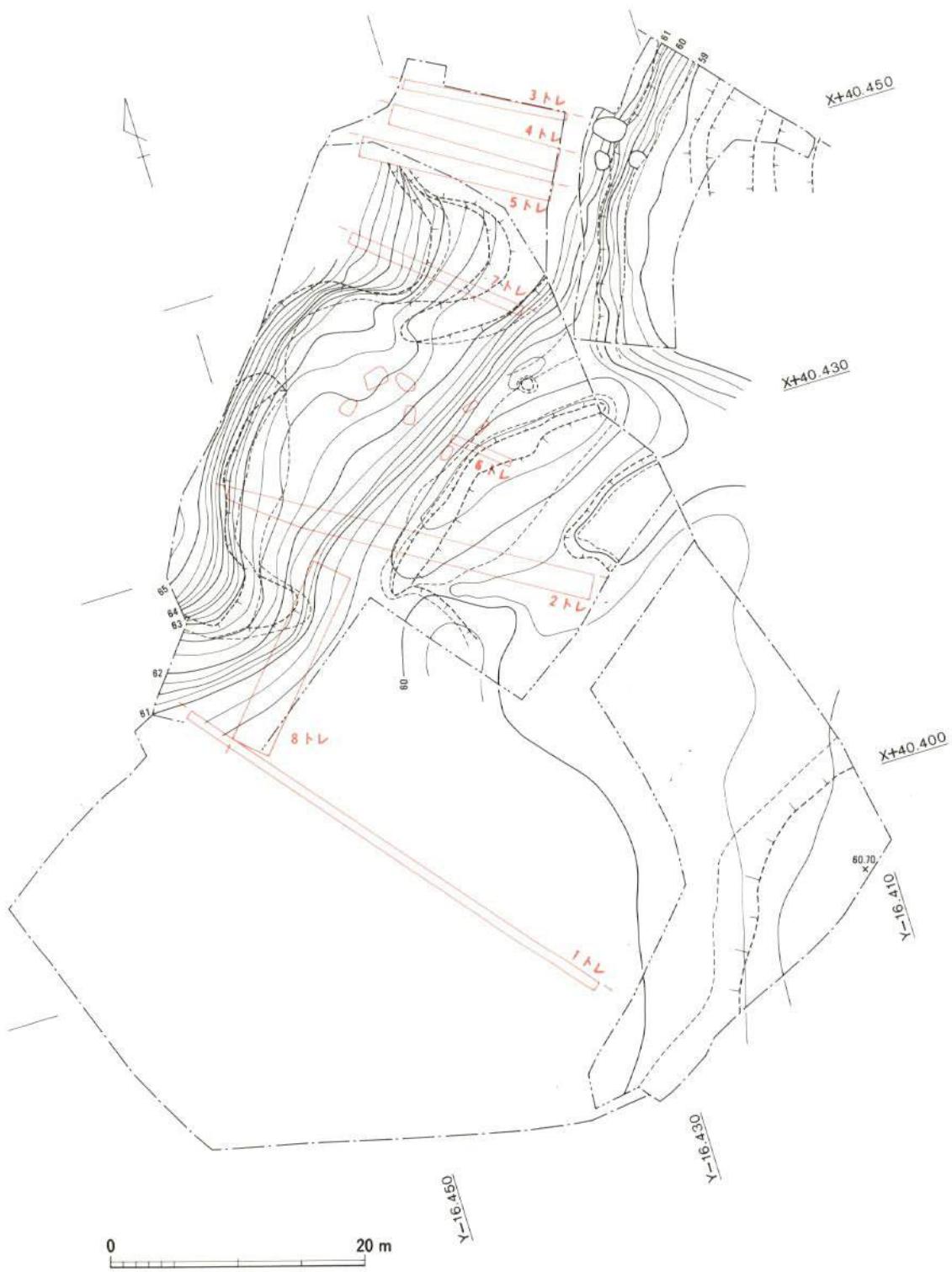
- ・掘立柱建物跡（SB） 5棟
- ・土坑（SK、SR、SX） 19基（土壙墓6基）
- ・周溝墓（ST） 2基
- ・溝（SD） 7条
- ・ピット

〈出土遺物……土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器、瓦器、陶器、磁器、土錐、瓦、石鍋、鐵器、渡来錢、砥石、台石、軽石〉

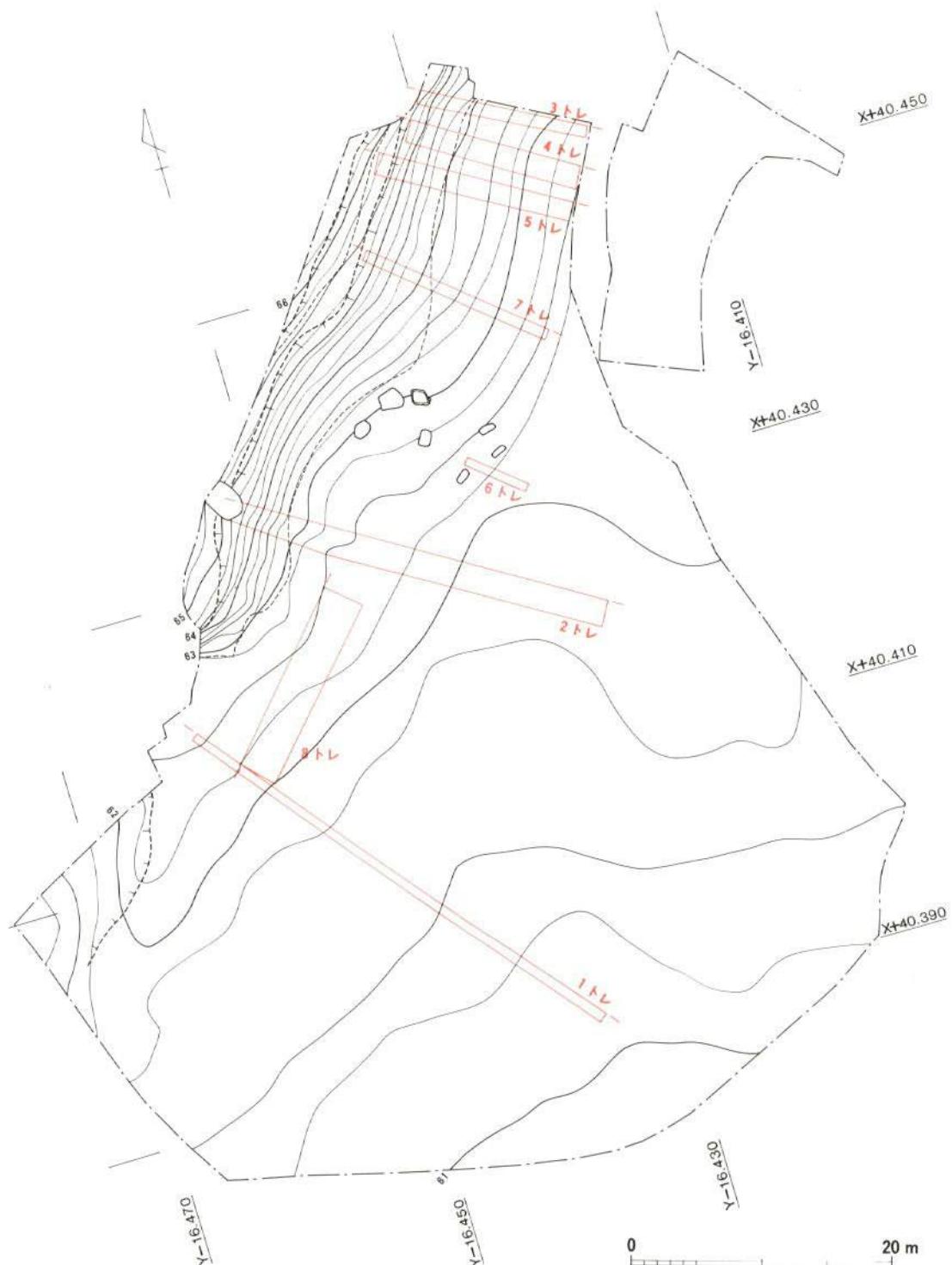
● Ⅳ区の遺構と遺物

- ・溝 7条
- ・ピット

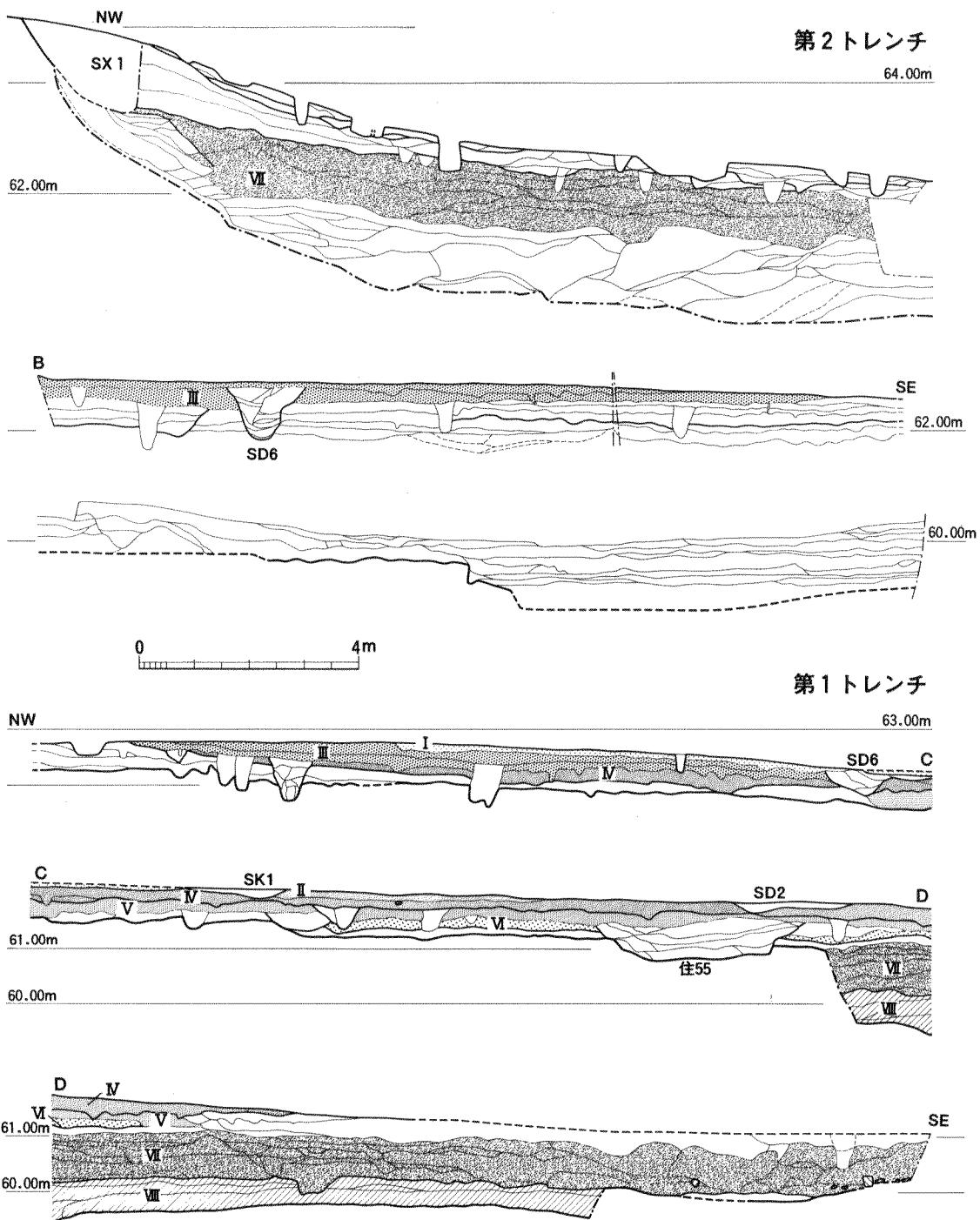
〈出土遺物……縄文土器、弥生土器、土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・製塩土器、土鉢、土製品、瓦、石鍋、渡来錢、鐵器、砥石、台石、軽石、磨製石鎌、打製石器（鎌・スクレイパー・使用剝片等）〉



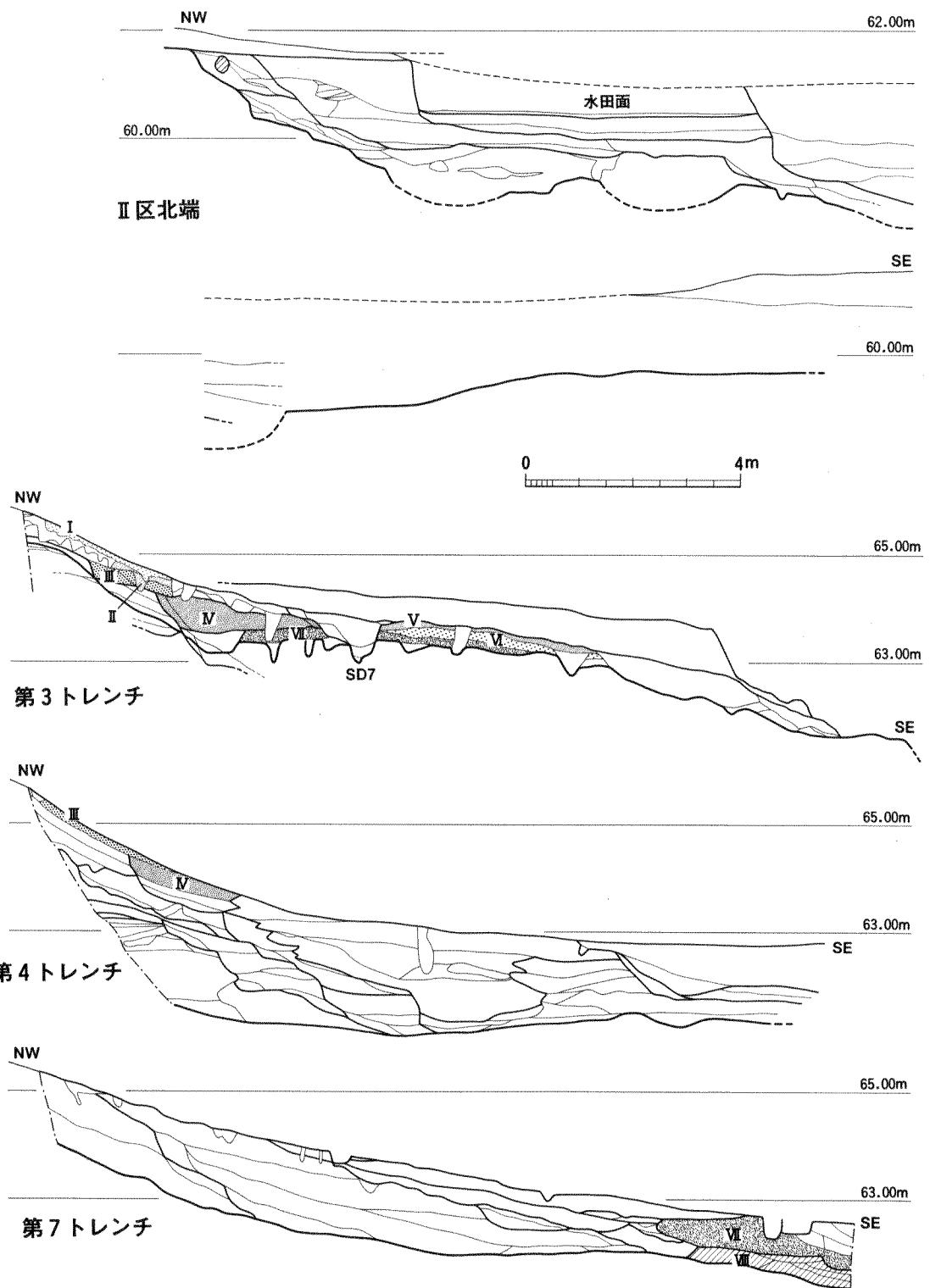
第6図 畑田遺跡旧地形図1 〈縄文後期以前〉 (1/500)



第7図 畑田遺跡旧地形図2 〈縄文晩期～弥生前期〉 (1/500)



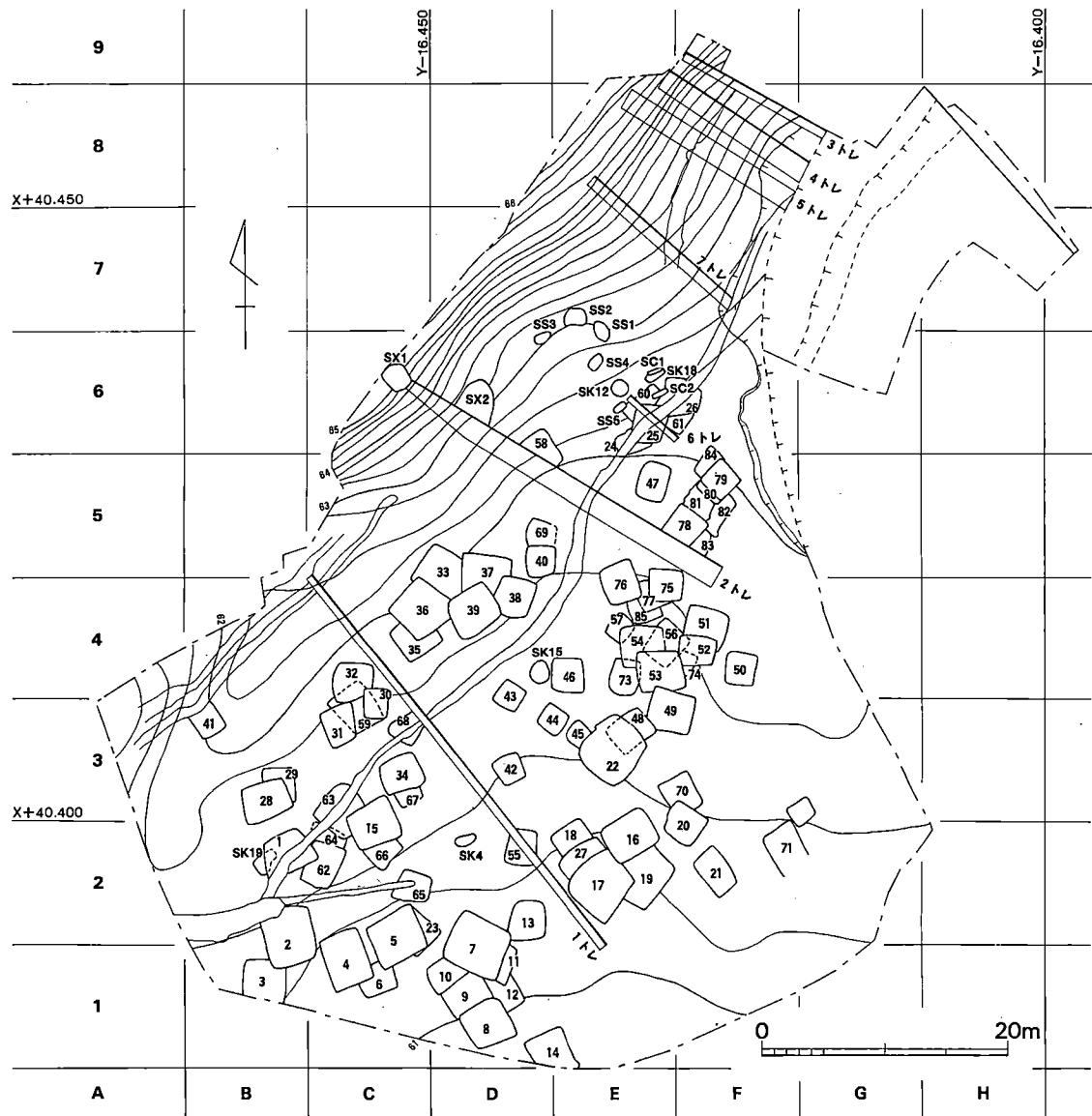
第8図 第1・2トレンチ土層図 (1/120)



第9図 第3・4・7トレンチ、II区北端土層図 (1/120)

III I ~ III区の調査

A 繩文時代～弥生時代の遺構と遺物



第10図 畑田遺跡縄文～弥生時代遺構配置・区割図 (1/600)

1 壇穴住居跡

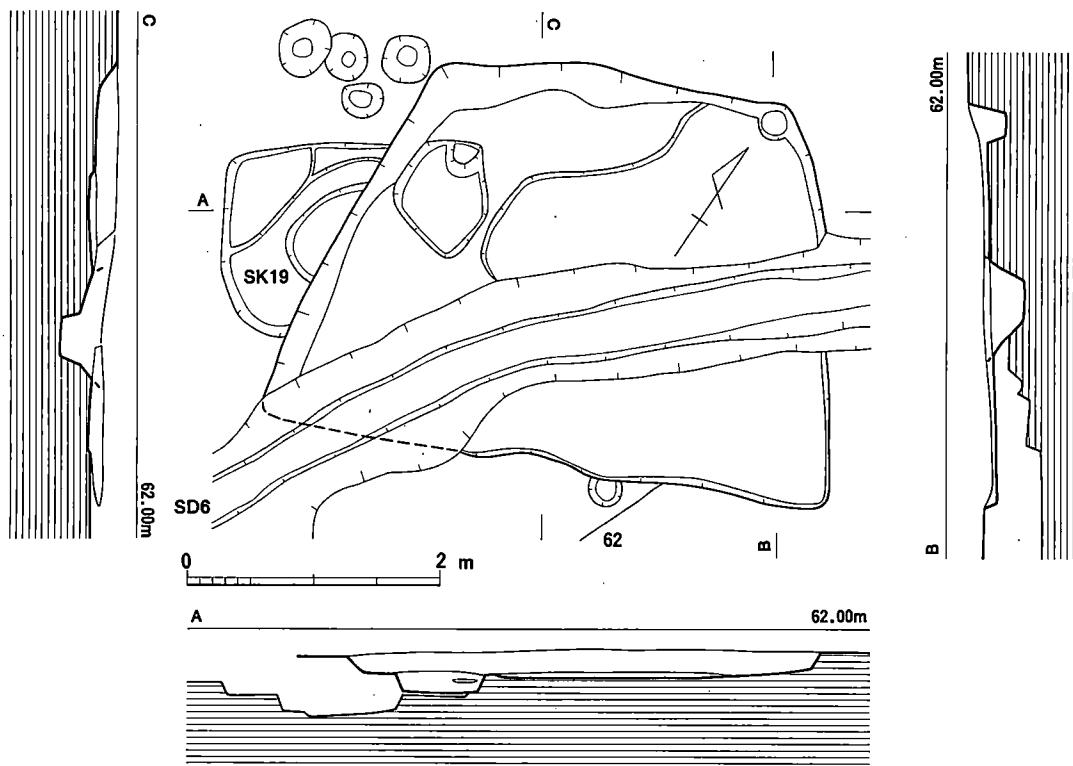
I～III調査区の北西部を除いた平坦部に検出された。堆積層に造られた住居であるため、面的に確認するのに難儀したが、85軒の多くは重複しており、单一の時期に形成された集落ではもちろんない。面的には10ほどのグループが認められる。個々は方形、隅円方形、長方形等のプランをなす。遺存状態はあまりよくなく、検出面から床面までは総体に浅かった。62号以下の住居はそれ以前の住居群の面から掘り下げたのちに検出されたものである。

1号住居跡（図版5、第11図）

B・C2区にあり、62号住居跡と19号土坑を切り、6号溝に切られている。北辺2.8m、南辺4.5mで、南北3.1mほどの台形に近いプランをなす。主柱穴は1個も検出されなかった。面積は 10.3m^2 。東南隅から土器片・すり石等が出土した。

出土遺物（図版28、第22図1・2、106図1・2）

土器（第22図1・2） 1は精製の浅鉢の肩部片であり、胴部との接合面は逆L字形にくぼんでい

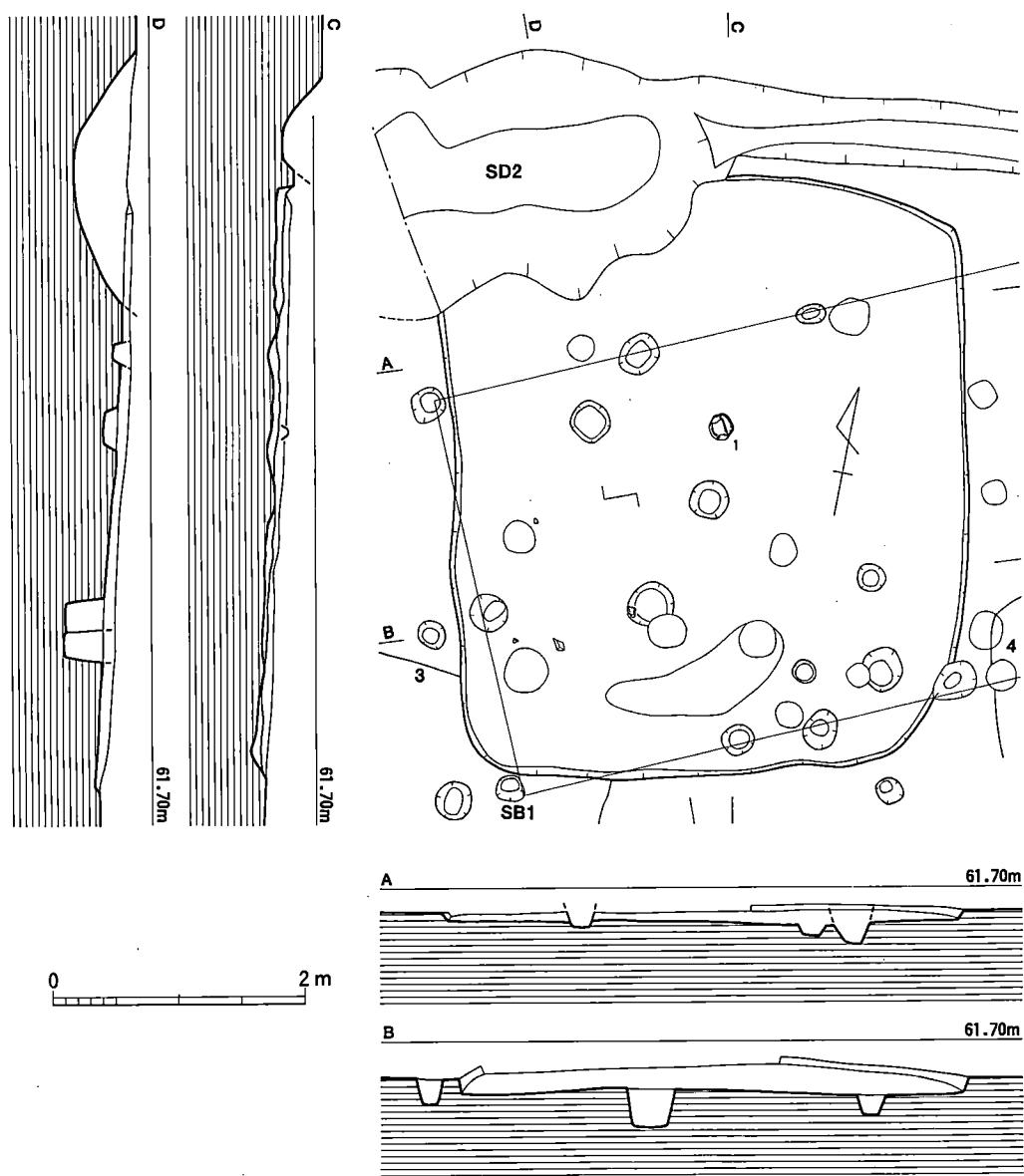


第11図 1号住居跡実測図 (1/60)

る。2は外面が簾状の圧痕のように見える撚糸文土器である。

石器(第106図1・2)ともに小さな丸い石である。ここではすり石としておくが、投弾の可能性もないではない。

2号住居跡 (図版5、第12図)



第12図 2号住居跡実測図 (1/60)

B・Cの1・2区にあり、3号住居跡を切り、2号溝と1号掘立柱建物跡に切られている。東西4.1m、南北4.7mの隅円長方形プランをなす。柱穴は7個が見られたが、主柱穴配置としては4本かと思われる。面積は復元で17.9m²。床面の中央北寄りから鉢が倒立て出土した。

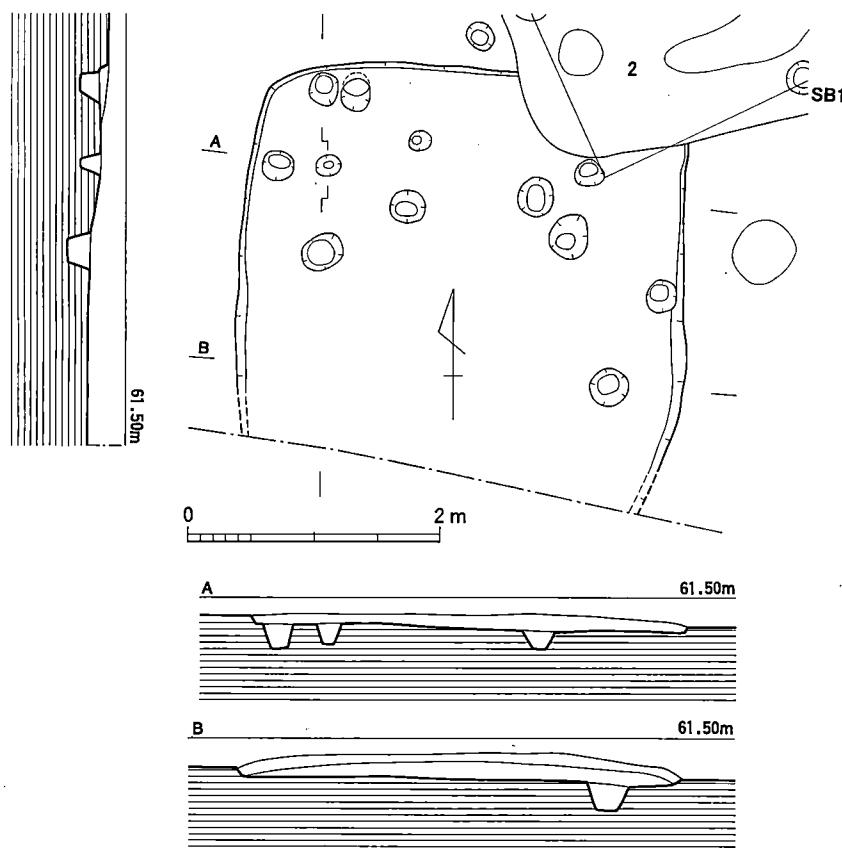
出土遺物（図版21・27・28、第22図1・2、103図1、106図3～6）

土器（第22図1・2）1は粗製の小形の鉢である。内面は黒色をなす。口径17.2cm。2は脚台としておくが蓋のつまみの可能性もある。粗製で二次熱を受け、内底面は黒変している。底径5cm。3は内面黒色の土師器椀で混入品である。

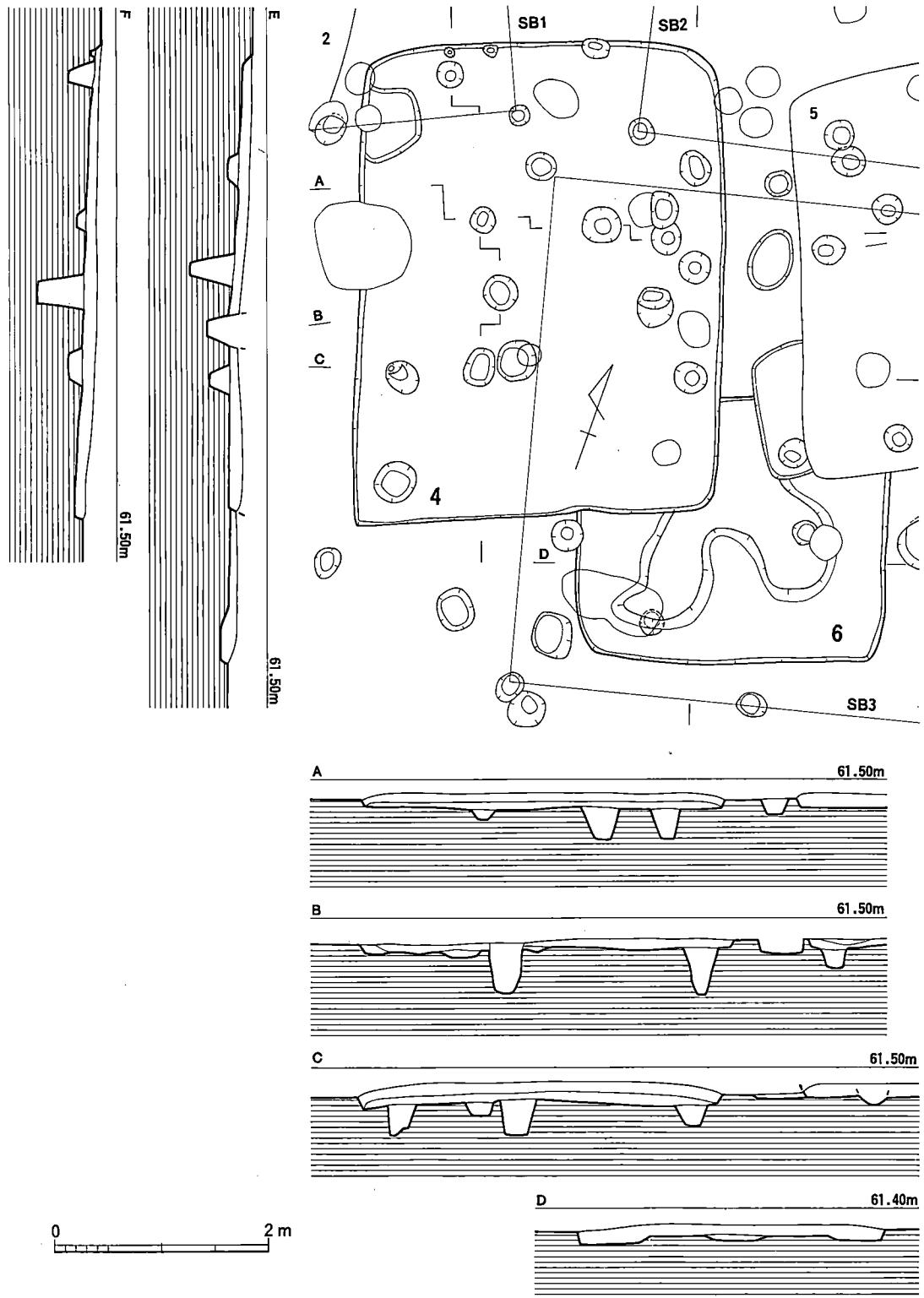
石器 第103図1は打製石斧の破片。第106図3～5は丸い石で、3・4には磨れた部分があり、すり石として使ったものだろう。6は表面がよく磨れている。

3号住居跡（図版5、第13図）

B1区にあり、2号住居跡と1号掘立柱建物跡に切られ、南端部分は調査区外にある。東西は3.5mで、南北もほぼ同じ規模であろう。柱穴は11個が見られたが、主柱穴配置はよくわか



第13図 3号住居跡実測図 (1/60)



第14図 4・6号住居跡実測図 (1/60)

らない。面積は復元で 11.7m^2 。埋土中から混入した中世の土鍋片が出土したのみでほかに遺物はなかった。

4号住居跡（図版5、第14図）

C1・2区にあり、6号住居跡を切り、1～3号掘立柱建物跡に切られている。東西3.4m、南北4.4mの長方形プランをなす。柱穴は14個ほどが見られたが、主柱穴配置はよくわからない。面積は 14.2m^2 。出土遺物はまったくなかった。

5号住居跡（図版5、第15図）

C1・2区の4号住居跡の東隣にあり、6・23号住居跡を切り、2・3号掘立柱建物跡に切られている。東西4.2m、南北3.7mの平行四辺形プランをなす。柱穴は18個ほどが見られたうちの、P1～4とした4個であろう。面積は 15m^2 。甕の破片と台石が出土している。

出土遺物（第111図5）

石器（第111図5） 玄武岩らしい石材で、表面には擦過痕がある。台石としておく。

6号住居跡（図版5、第14図）

C1区で4・5号住居跡と3号掘立柱建物跡に切られている。東西2.9m、南北2.5mの長方形プランをなす小型の住居である。主柱穴は不明。面積は復元で 6.6m^2 。遺物は全く出土しなかった。

7号住居跡（図版5、第16図）

Dの1・2区にあり、9・10・11・13号住居跡を切る大きめの住居である。東西4.5～4.9m、南北4.3mの隅円長方形プランをなす。柱穴は16個ほどが見られたが、主柱穴配置は不明である。面積は 19.3m^2 。甕・壺の破片と黒曜石・サヌカイトの破片が出土している。

出土遺物（第22図1）

土器（第22図1） 粗製の壺かと思われる破片である。二次熱を受けた痕跡がある。中期のものか。

8号住居跡（図版5、第17図）

D1区にあり、9・12号住居跡を切っている。東西3.7m、南北3.3～3.7mのやや歪んだ方形プランをなす。柱穴はいくつかあるものの主柱穴配置は不明。面積は 12m^2 。鉢の破片が出土している。

出土遺物（第22図1）

土器（第22図1） 半精製の鉢の胴部片。

9号住居跡（図版5、第17図）

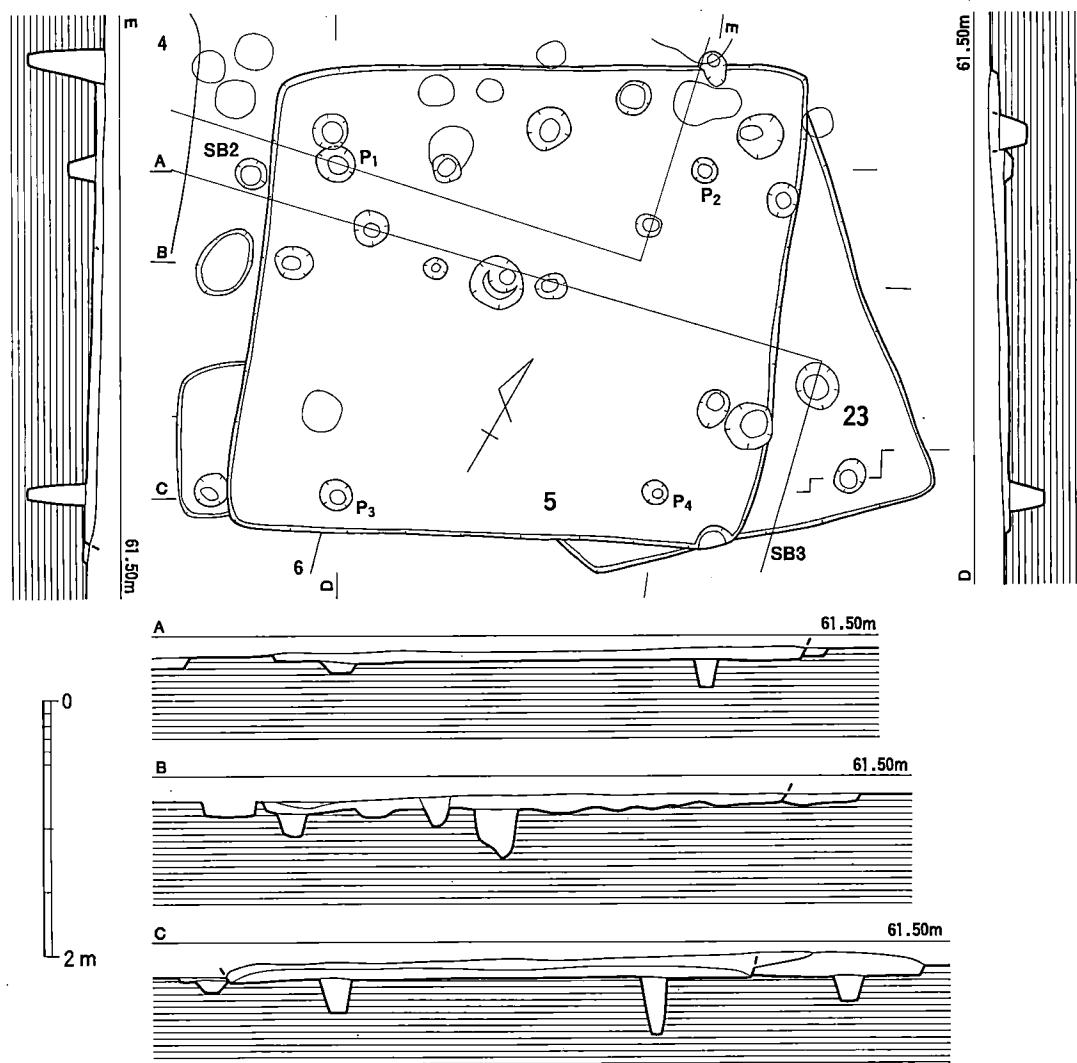
D1区にあり、12号住居跡を切り、7・8・10号住居跡に切られている。東西長が3.7mで、南北長も同じくらいの方形プランであろう。柱穴はいくつかあるものの主柱穴配置は不明。壺、甕の破片が出土している。

出土遺物（第22図1）

土器（第22図1） 半精製の壺の肩部片で、5条の横沈線の下位に格子文が刻まれている。

10号住居跡（図版5、第17図）

D1区にあり、9号住居跡を切り、7号住居跡と3号掘立柱建物跡に切られている。南北長

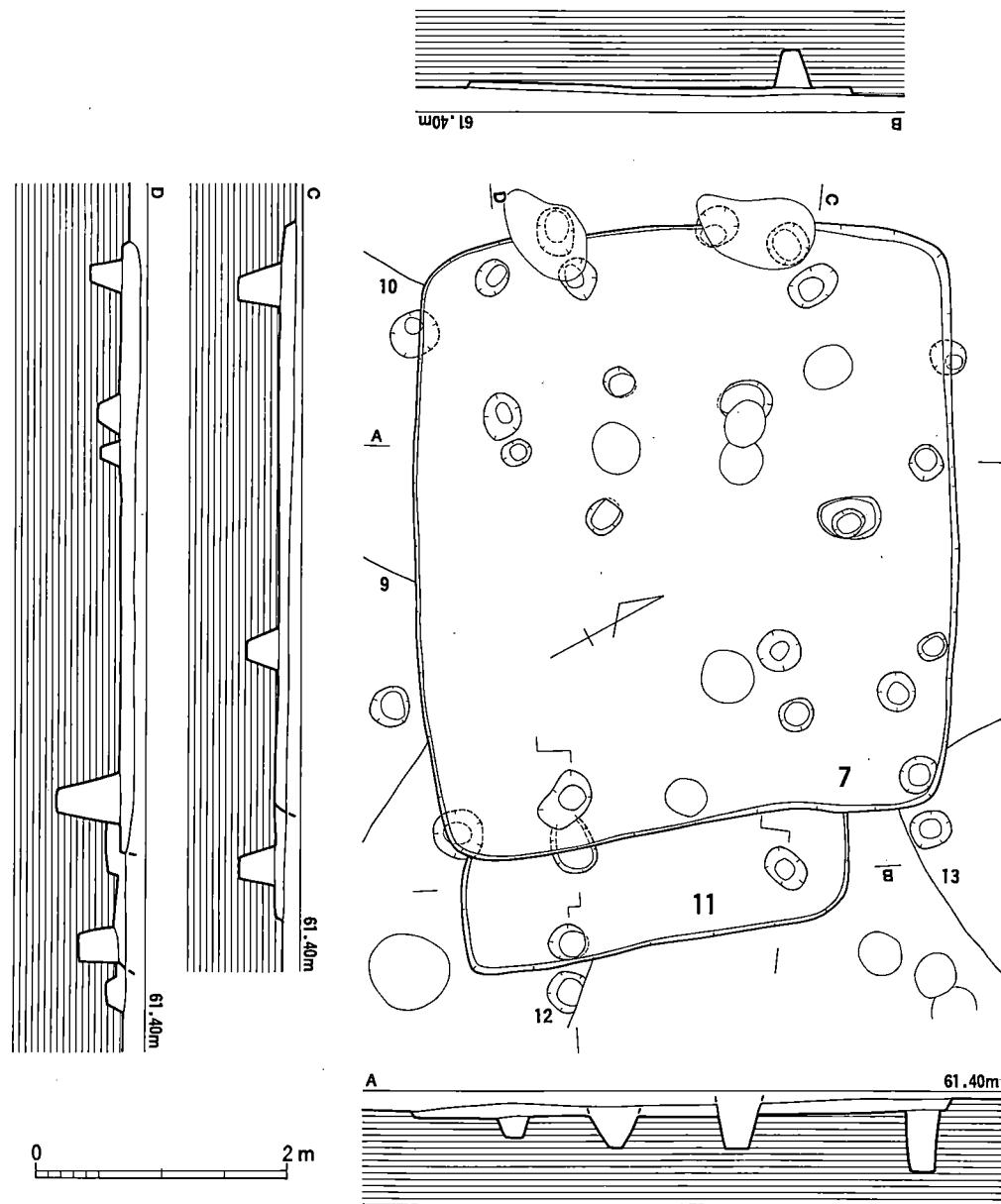


第15図 5・23号住居跡実測図 (1/60)

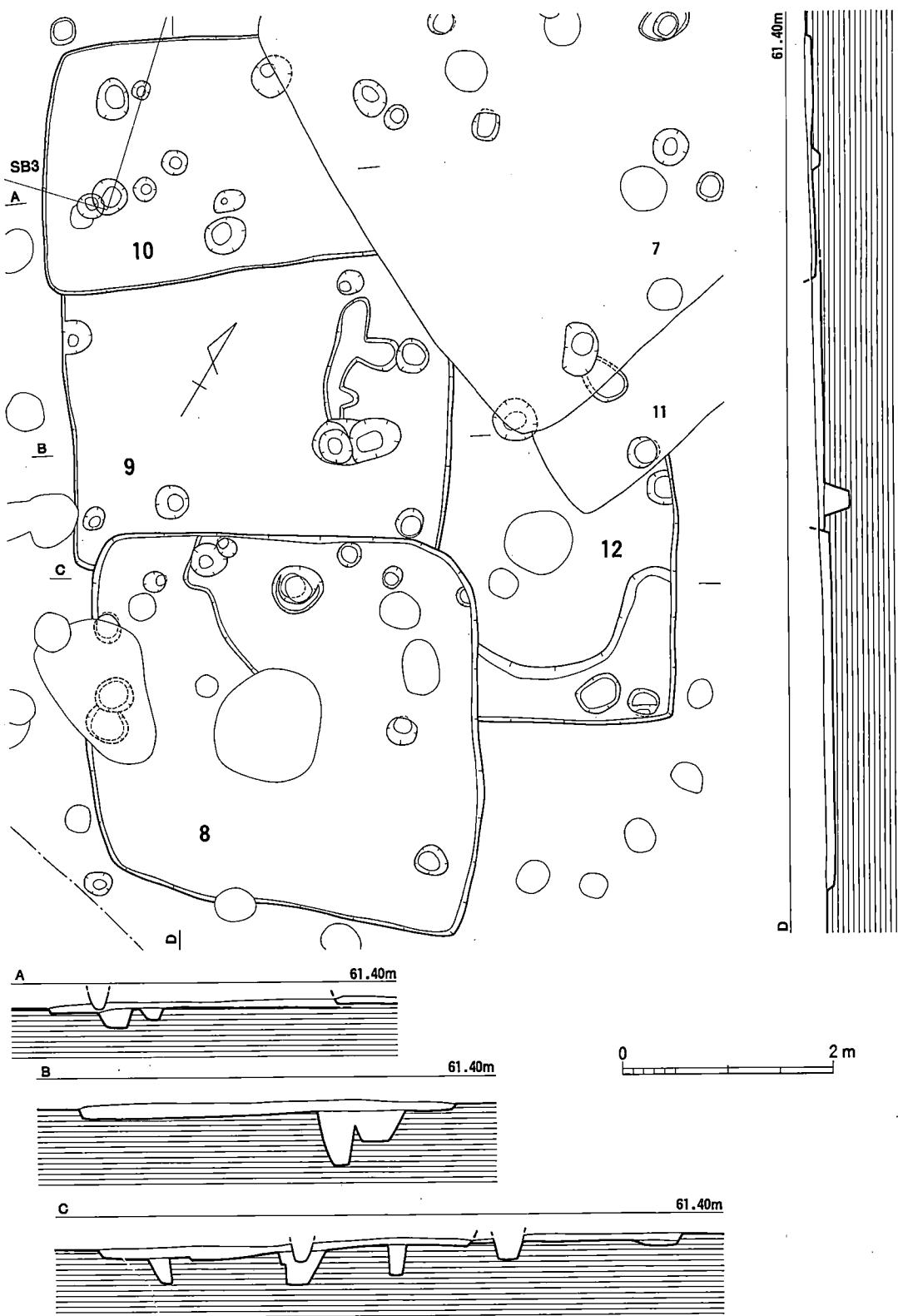
は2.3mで、東西長は3.6m以上の長方形プランになる。主柱穴配置は不明。埋土中から甕と中世土鍋片が出土している。

出土遺物（第22図1）

土器（第22図1） 丸みを持った口唇部に細かい刻みを入れた甕の破片である。



第16図 7・11号住居跡実測図 (1/60)



第17図 8・9・10・12号住居跡実測図 (1/60)

11号住居跡 (図版5、第16図)

D 1区にあり、12号住居跡を切り、7号住居跡に切られている。南北長の3.1mがわかるのみで詳細は不明。柱穴から壺片と埋土中から石鎌が出土している。

出土遺物 (図版24、第22図1、98図1)

土器(第22図1) 壺の底部片で、内面は黒変している。復元底径8.7cm。

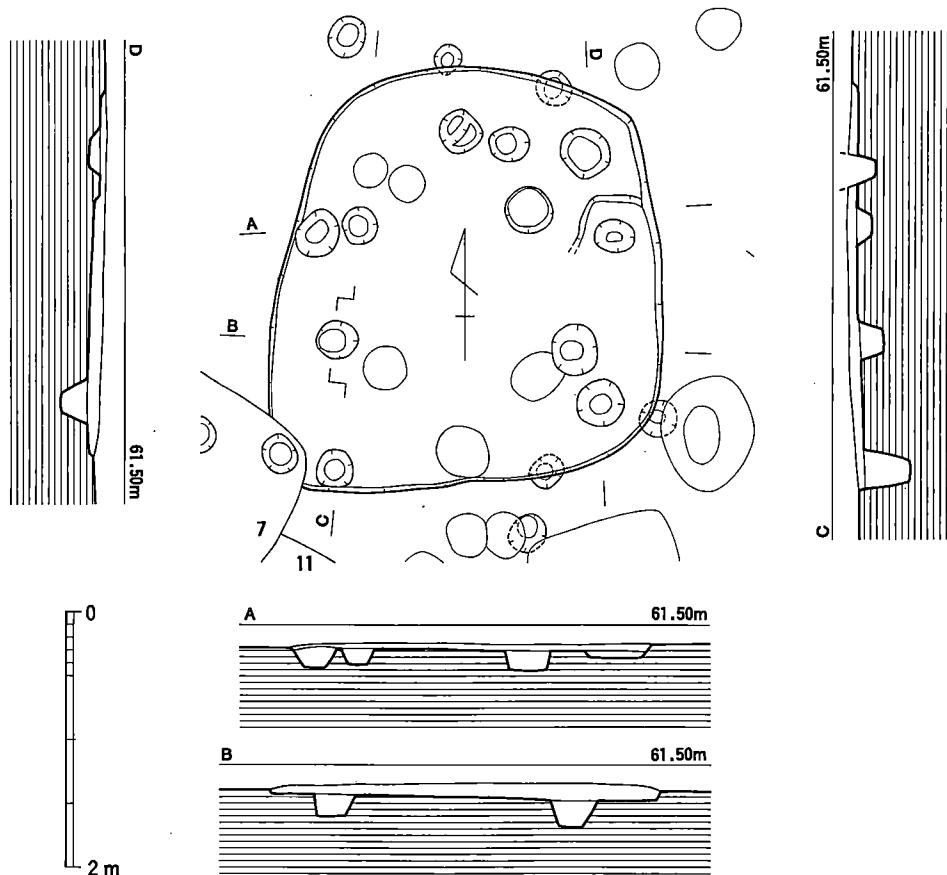
石器(第98図1) サヌカイト製の打製石鎌で、脚端のごく一部を欠失するのみである。

12号住居跡 (図版5、第17図)

D 1区にあり、8・9・11号住居跡に切られている。東辺と南辺の一部がわかるのみで詳細は不明。柱穴から壺片とサヌカイト剝片が出土したが図示にたえない。

13号住居跡 (図版5、第18図)

D 2区にあり、西南隅を7号住居跡に切られている。東西長3.1m、南北長3.3mの隅円方形



第18図 13号住居跡実測図 (1/60)

プランをなし、面積は 8.5m^2 。主柱穴は4本かと思われるが定かでない。柱穴から甕・壺の破片が出土したが図示にたえない。

14号住居跡（図版5、第19図）

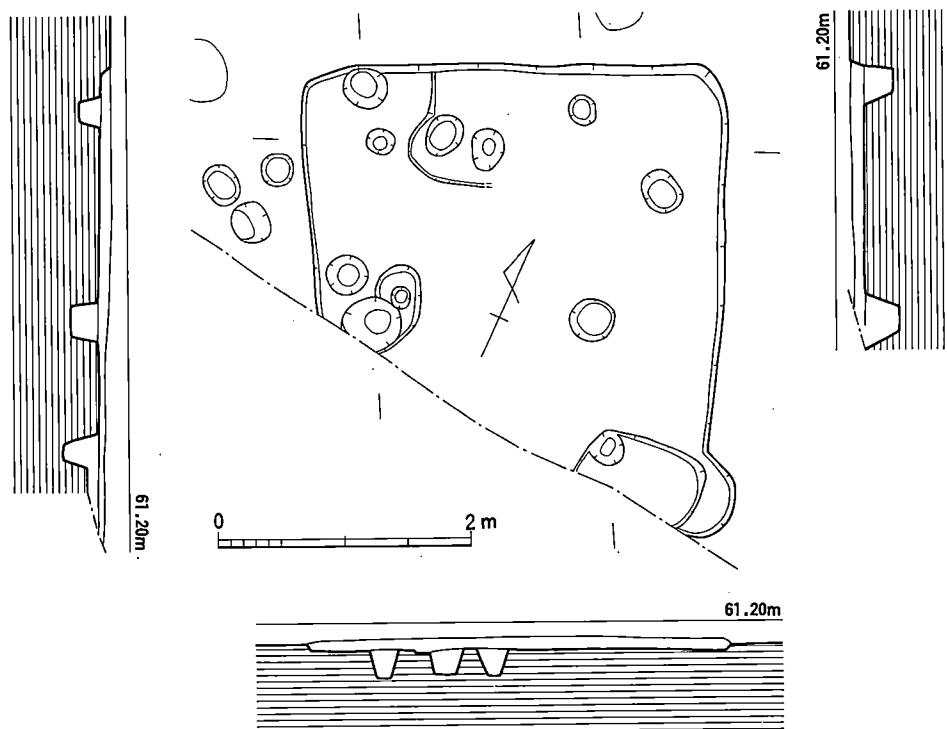
D・Eの1区にあり、西南部は調査区外にかかっている。東西長は3.2~3.35mであり、南北長もほぼ同じくらいの方形プランであろう。面積は復元で 11.9m^2 。主柱穴は4本かと思われるが定かでない。遺物はまったく出土しなかった。

15号住居跡（図版5・7、第20図）

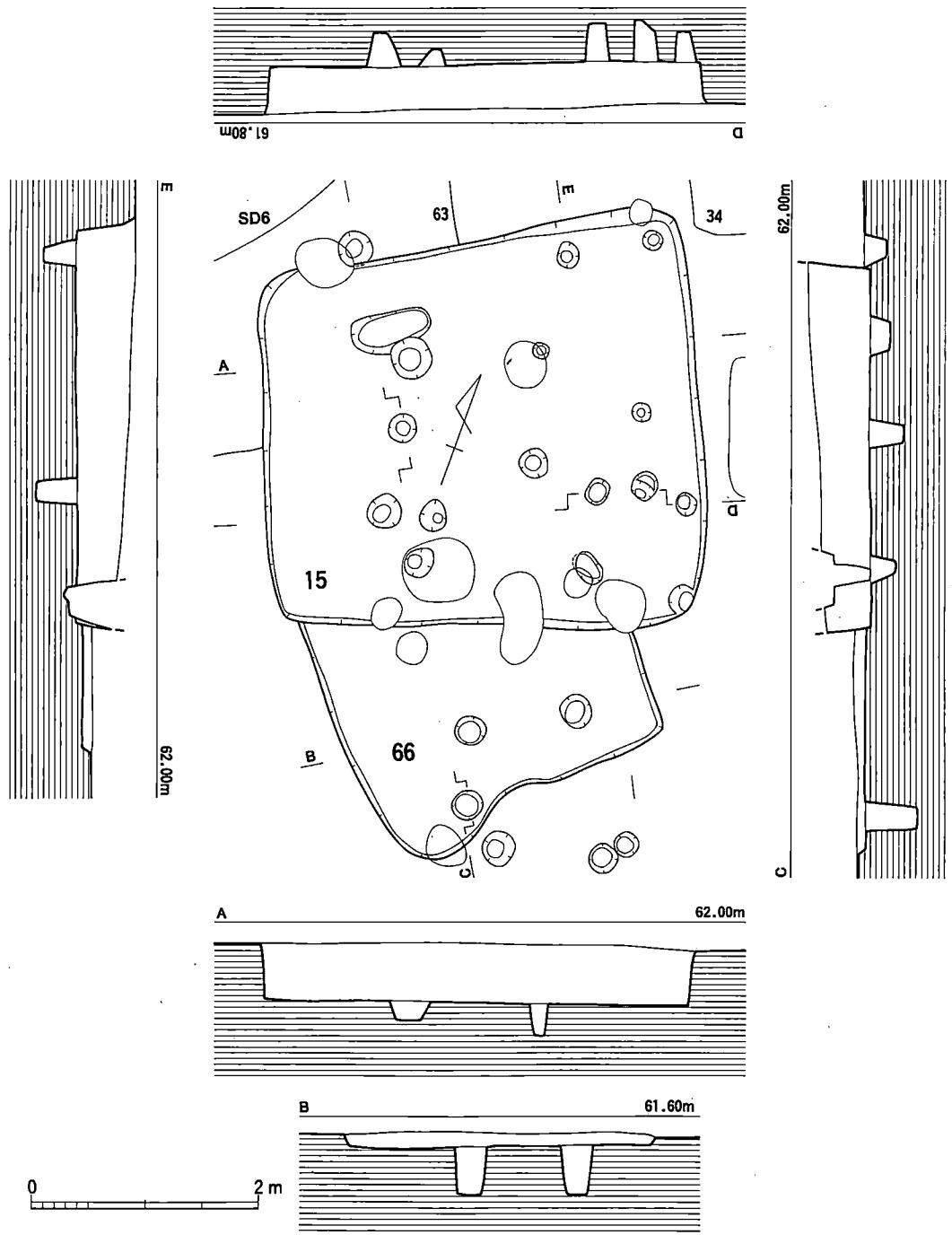
Cの2・3区にあり、63・66号住居跡を切っている。東西3.8~3.9m、南北3.1~3.65mの台形に近い方形プランである。主柱穴は4本とみてよいだろう。面積は 12.1m^2 。床面から土器片のほか黒曜石・サヌカイトの鏃、剝片が多数出土した。

出土遺物（図版24・26~28、第22図1・2、98図2~4、103図2、106図7・8）

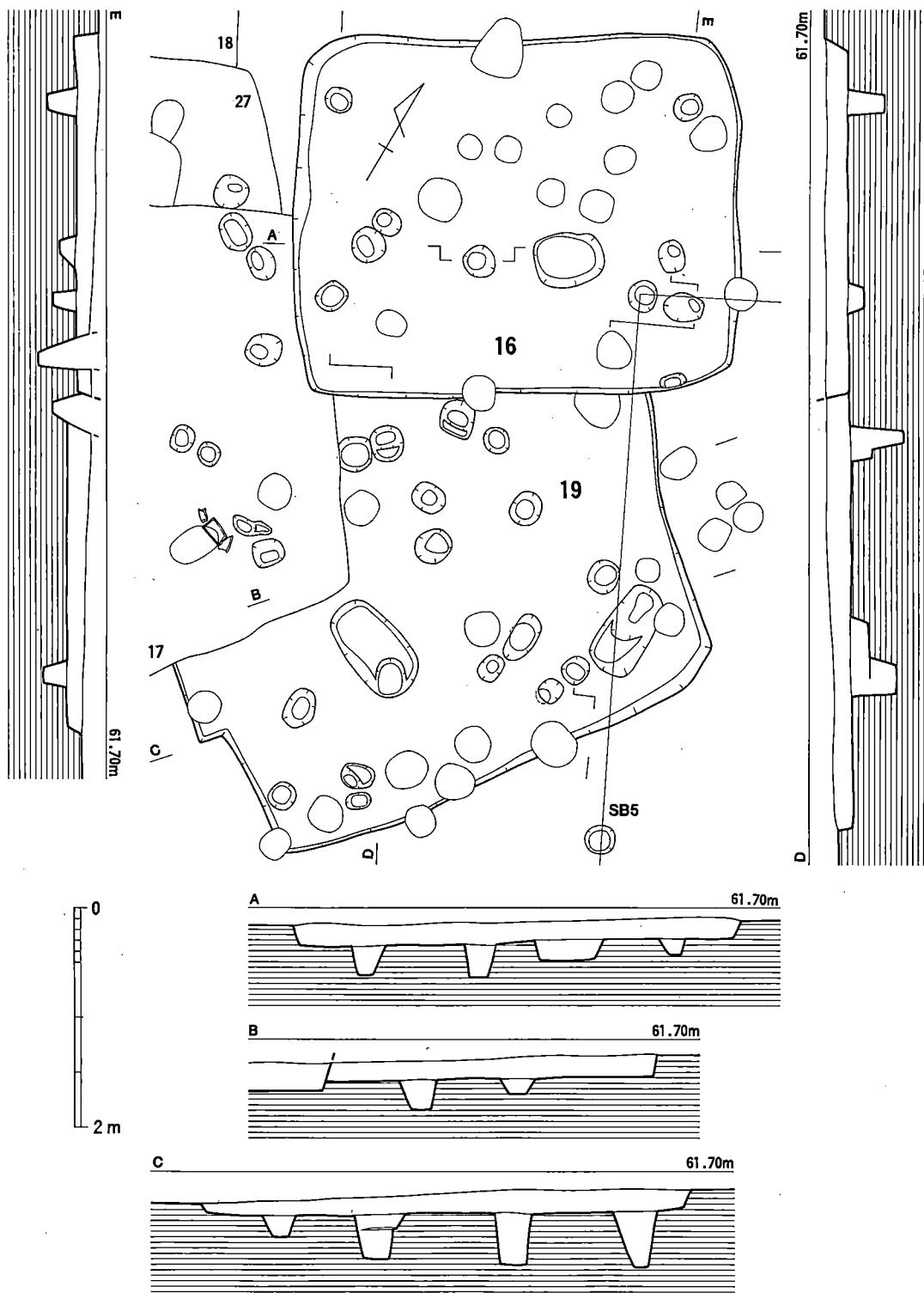
土器（第22図1・2）1は口縁の内外端部と肩部突帯に刻みを施した甕である。2は甕の底部片で、内面上半は黒変している。復元底径9.1cm。



第19図 14号住居跡実測図 (1/60)

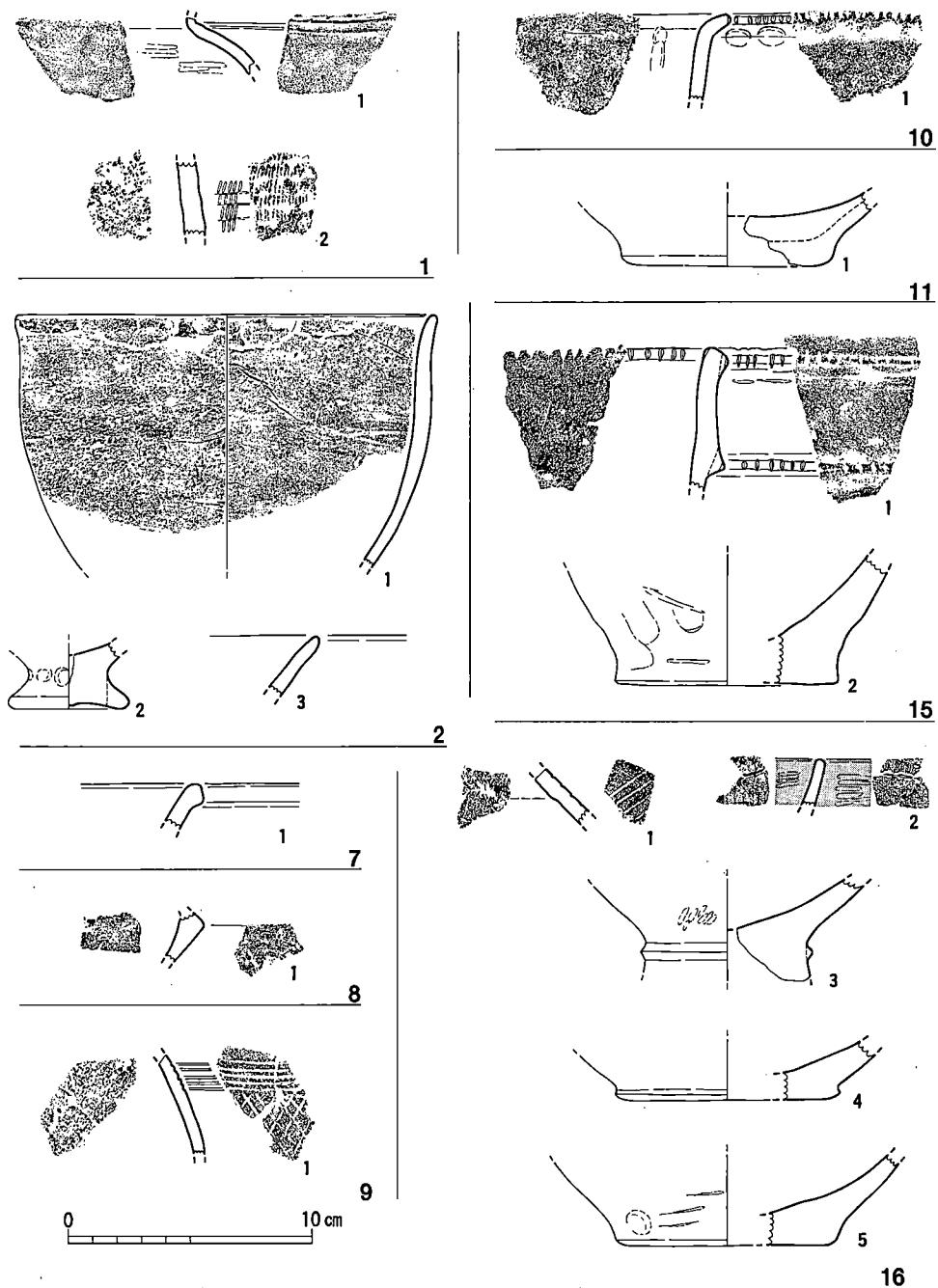


第20図 15・66号住居跡実測図 (1/60)



第21図 16・19号住居跡実測図 (1/60)

石器 第98図2~4のうち2と4は打製石鎌の未製品かと思われる。3は分厚い製品で、明確な稜が見られる。



第22図 1・2・7・8・9・10・11・15・16号住居跡出土土器実測図 (1/3)

第103図2は局部磨製石斧で、内外の一部が磨れており、刃部には使用痕が見られる。

第106図7・8はすり石かと思われる小石である。

16号住居跡（図版6、第21図）

Eの2・3区にあり、17・19号住居跡を切り、5号掘立柱建物跡に切られている。東西3.3m、南北4.1mの長方形方形プランである。主柱穴は確証はないがP1～P4の4本としておく。面積は12.2m²。埋土中から土器片のほか黒曜石・サヌカイトの剥片、炭化した木の実、軽石等が出土した。

出土遺物（第22図1～5、113図26）

土器（第22図1～5） 1は壺の肩部片で、外面には山形文がヘラ描きされている。2は鉢の口縁部片で、いまは大半が剥落しているがもともと丹塗磨研である。3は高坏の破片で、坏部と脚部の境に突帯を貼り付けている。4・5はともに壺の底部であろう。

石器 第113図26は軽石製品で、表面に擦過によると思われる条痕があり、側縁などに磨って面をとった所がある。すり石とすべきか。

17号住居跡（図版6、第23図）

E 2区の16号住居跡の南にあり、19・27号住居跡を切り、16号住居跡に切られている。一辺が3.5～4.3mの不整隅円方形プランである。主柱穴は特定できない。面積は17.8m²ほどであろう。埋土中から土器片のほか黒曜石・サヌカイトの剥片等が出土した。

出土遺物（図版21・24・26・28、第26図1～3、98図5・6、100図65、106図9、111図8）

土器（第26図1～3） 1は壺の肩部片で、外面には三条の沈線の下位に斜線文らしきヘラ描きがある。2は大型壺の口頸部で、内外ともヘラミガキが施されている。外面の口縁下3cmほどの所に長さ7.4mm、幅3.65mmの糲痕がある。復元口径29.8cm。3は口唇に深い刻みを入れた甕である。

石器 第98図5・6はサヌカイトの鏃。6は剥片鏃である。

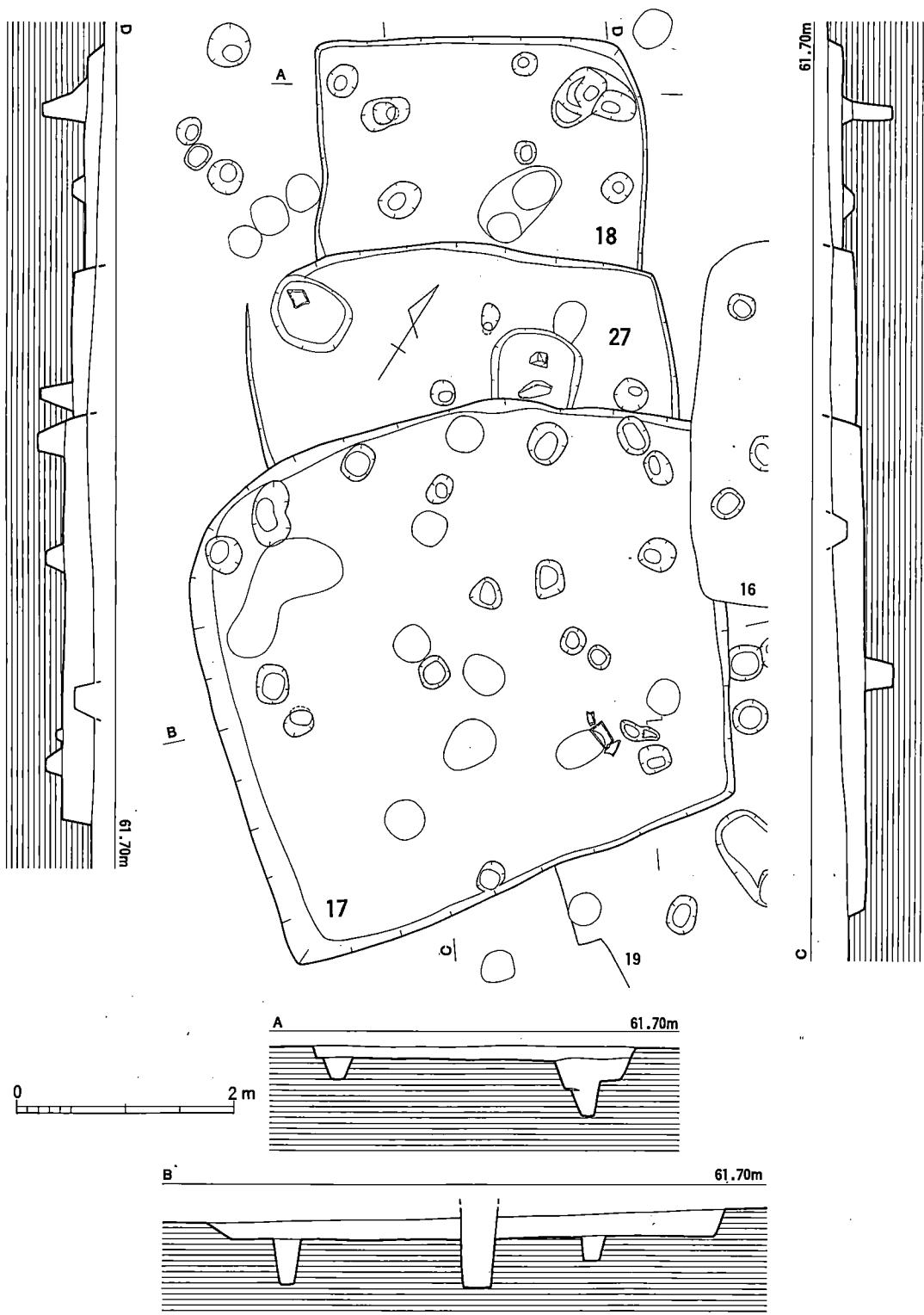
第100図65は使用痕のある剥片。第106図9は小さなすり石。第111図8は花崗岩で明確な使用痕跡は見えないが台石としておく。

18号住居跡（図版6、第23図）

E 2区の16号住居跡の西にあり、27号住居跡に切られている。東西幅の3mしかわからないが、方形プランであろう。主柱穴は特定できない。埋土中から土器片とサヌカイトの剥片が出土したのみである。

出土遺物（第26図1）

土器（第26図1） 甕の口縁部片で、口唇下端に刻みが施されている。



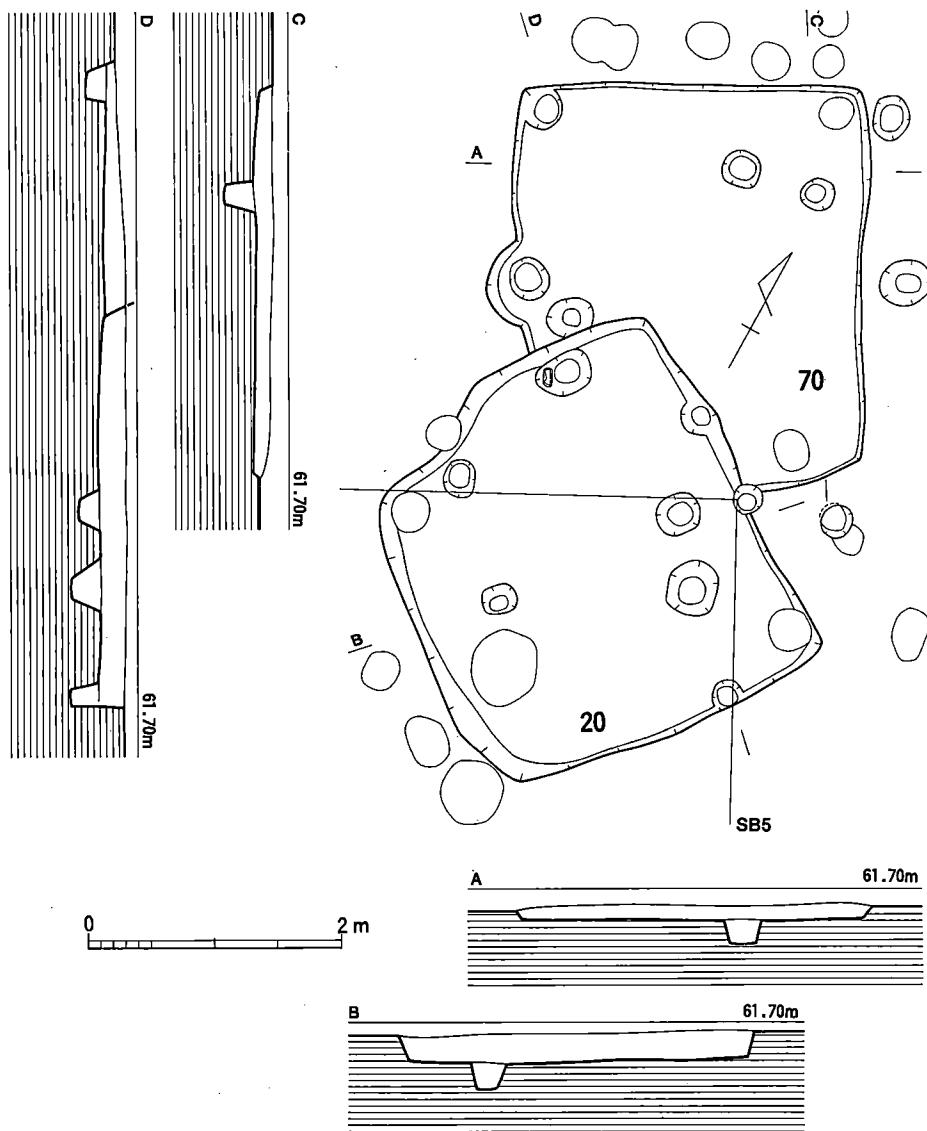
第23図 17・18・27号住居跡実測図 (1/60)

19号住居跡 (図版6、第21図)

E 2 区で16・17号住居跡と 5 号掘立柱建物跡に切られている。東西長は4.4mから4.8m以上となるが、西辺に鍵形になった部分があるので2軒の重複かもしれない。土器片のほか黒曜石・サヌカイトの剝片、鏃等が出土した。

出土遺物 (図版24、第26図1~7、98図7)

土器(第26図1~7) 1~3は壺の破片。1は9号住居跡の出土品と同形状だが同一個体かどうか



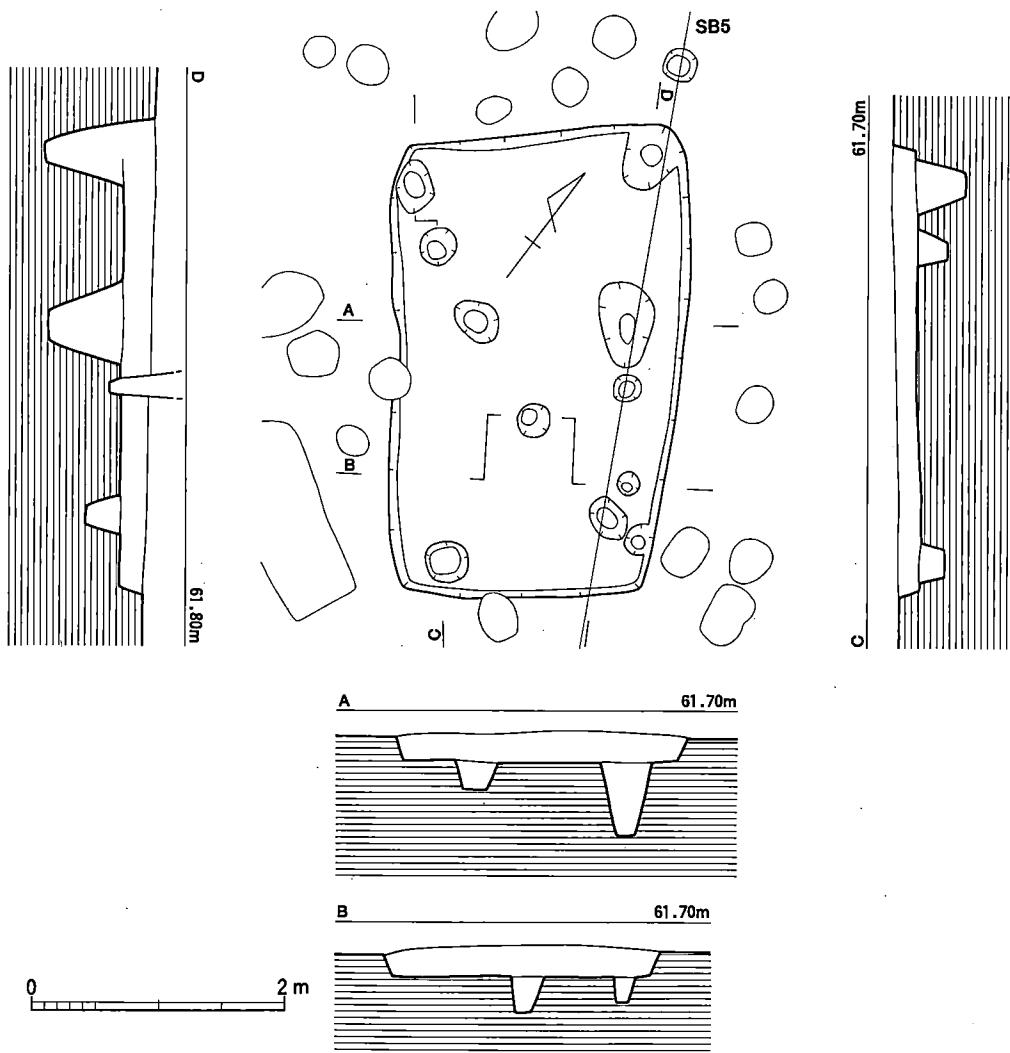
第24図 20・70号住居跡実測図 (1/60)

は不明。4は浅鉢の破片。5は胴屈折部に細かい刻みがある。6・7の外面は焼けている。7は復元口径21.8cm。

石器 第98図7はサヌカイトの鏃でかなり薄いつくりである。

20号住居跡（図版6、第24図）

E・Fの2・3区で16号住居跡の東隣にあり、70号住居跡を切り、5号掘立柱建物跡に切られている。一辺が2.8~3.2mの不整な方形プランである。主柱穴はわからない。面積は7.2m²。土器片と黒曜石・サヌカイトの剝片が出土したが図示にたえない。



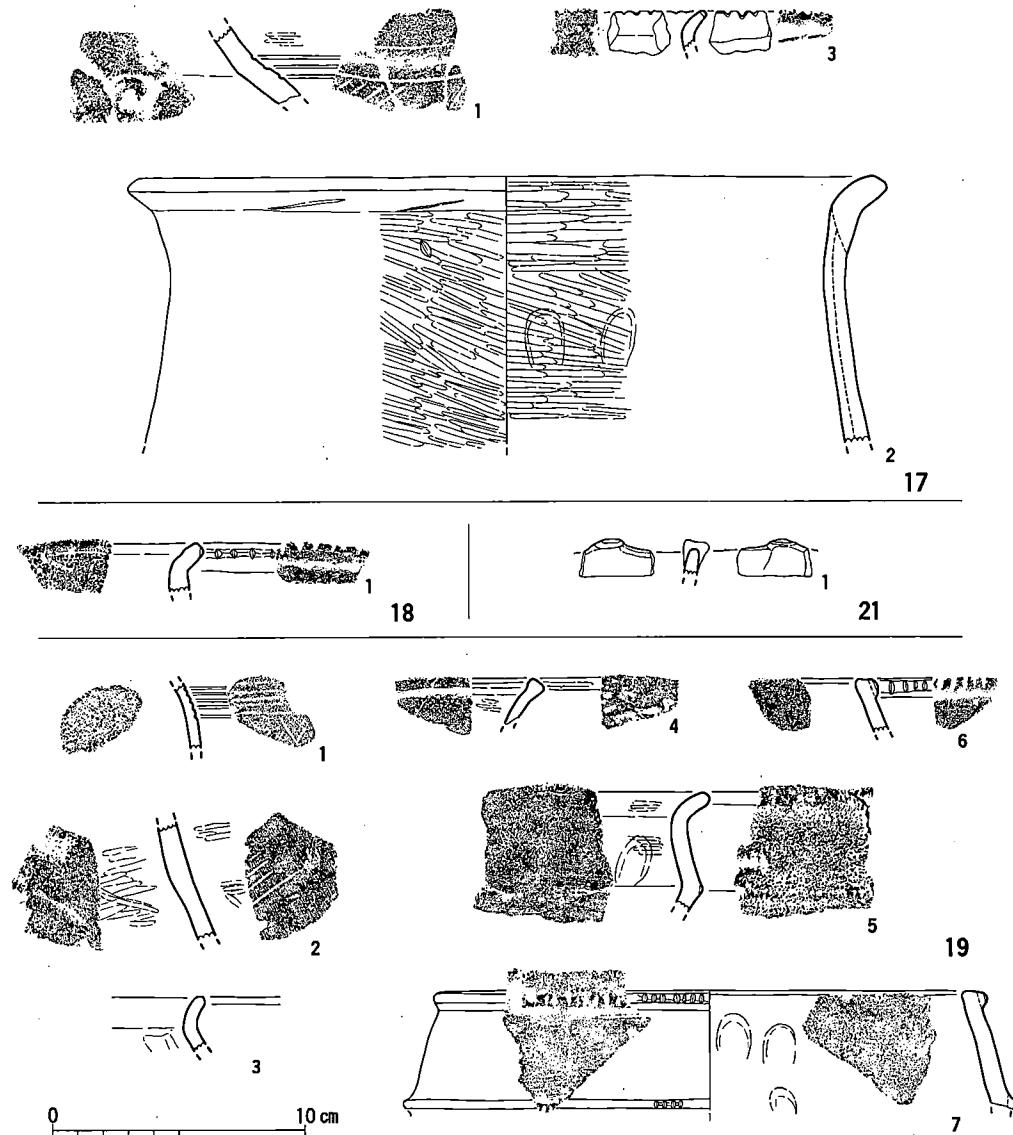
第25図 21号住居跡実測図 (1/60)

21号住居跡（図版6、第25図）

F 2 区にあり、5号掘立柱建物跡に切られている。東西1.9~2.4m、南北3.7mの長方形プランである。主柱穴は特定できない。面積は7.4m²。ごく少量の土器片と黒曜石・サヌカイトの剝片が出土した。

出土遺物（第26図1）

土器（第26図1） 半精製の鉢の口縁部片で、突起がある。



第26図 17・18・19・21号住居跡出土土器実測図（1/3）

22号住居跡（図版6、第27図）

E 3 区にあり、45・48号住居跡を切っている。一辺が4.5~5mほどの不整隅円方形プランであるが、北辺に突出した部分があるのを見ると、あるいは2軒の重複であった可能性もある。また下層からは48号住居跡の残余の部分が現れた。主柱穴は特定できない。面積はこの遺跡で最大の19.7m²を測る。埋土中から土器片のほか黒曜石・サヌカイトの剝片・鏃等が出土した。

出土遺物（図版24・25・28、第28図1~11、98図8・9、100図68、106図10~12）

土器（第28図1~11） 1は壺の口縁部片であるが、精製とはいえない。2は浅鉢片。3は口縁が内傾する鉢。4は壺の底部。5は脚台部分で内面は煤ける。6~11は口縁と胴部に刻目のある甕で、6は8と同一個体かと思われるが、9は別個体らしい。10・11も同一個体かと思われ、丸くなつた口唇外端部に刻みがあり、肩部にも突帯がつくらしい。

石器 第98図8・9はサヌカイトの鏃であろう。きわめて小さい。第100図68はサヌカイトのスクレイパー。

第106図10・11は小さな、12はやや大きめのすり石で、いずれも器表の一部に磨れた部分がある。

23号住居跡（図版5、第15図）

C・D の 1・2 区にあり、5号住居跡と2・3号掘立柱建物跡に切られている。南辺の2.8mと、東辺が3.3m前後であろうことがわかる程度である。甕の破片とサヌカイトの剝片が出土したが図示にたえない。

24号住居跡（図版8、第29図）

E 6 区にあり、25号住居跡と6号溝に切られている。東西約3m、南北1.9mの不整長方形プランで、復元される面積も4.2m²ときわめて小さく、また北辺と東辺には段が付くため住居跡としてやや疑問もあるところである。主柱穴はわからない。埋土中から土器片のほか黒曜石の剝片が出土した。

出土遺物（第28図1~4）

土器（第28図1~4） 1は小壺の肩部片で、沈線部の復元径は9.2cm。2の壺の底部は1と同一個体ではない。3は半精製の鉢もしくは高杯であるが、内外とも丹塗りの痕跡がある。4は口縁外端部に細かい刻目のある甕。4点ともに埋土下層から出土した。

25号住居跡（図版8、第29図）

E 6 区にあり、24・60・61号住居跡を切り、6号溝に切られている。おそらく26号住居跡も切っているのだろう。東西2.7m、南北3.1mの平行四辺形気味のプランで、面積は7.2m²。西辺の中央近くに削り出しの段が付く。主柱穴は不明。埋土中から土器片のほか黒曜石・サヌ

カイトの剝片、すり石等が出土した。

出土遺物（図版27・28、第34図1～7、103図3、106図13・14）

土器（第34図1～7） 1は小壺片で、肩部に3条の沈線が入る。胴部の復元径は9.7cm。2は壺の口縁部であろう。3は壺の頸部片。4は浅鉢片。5は壺、6は甕の底部で、6の内面は煤ける。7は口唇部に刻みのある甕。

石器 第103図3は片岩の石斧で磨いた痕跡はない。

第106図13・14はすり石で、13の外面はよく磨かれている。

26号住居跡（図版8、第29図）

E・Fの6区にあり、60・61号住居跡を切り、2号石棺墓と6号溝に切られている。一辺が3m前後の不整方形プランで、面積は復元で7.3m²。内部には段が付く。主柱穴は特定できない。埋土中から土器片のほか黒曜石・サヌカイトの剝片、すり石等が出土した。

出土遺物（図版28、第34図1～4、106図15）

土器（第34図1～4） 1は鉢であろう。2～4は壺片で、2・3の肩部には突帯があり、4は口唇下端に刻みがある。2～4は混入であろう。

石器 第106図15はすり石としておくが磨れた痕跡はない。

27号住居跡（図版5、第23図）

E2区にあり、18号住居跡を切り、17号住居跡に切られている。東西長が3.9mであることのほかは詳細不明。弥生前期の甕片とサヌカイトの剝片が出土したが図示にたえない。

28号住居跡（図版5、第30図）

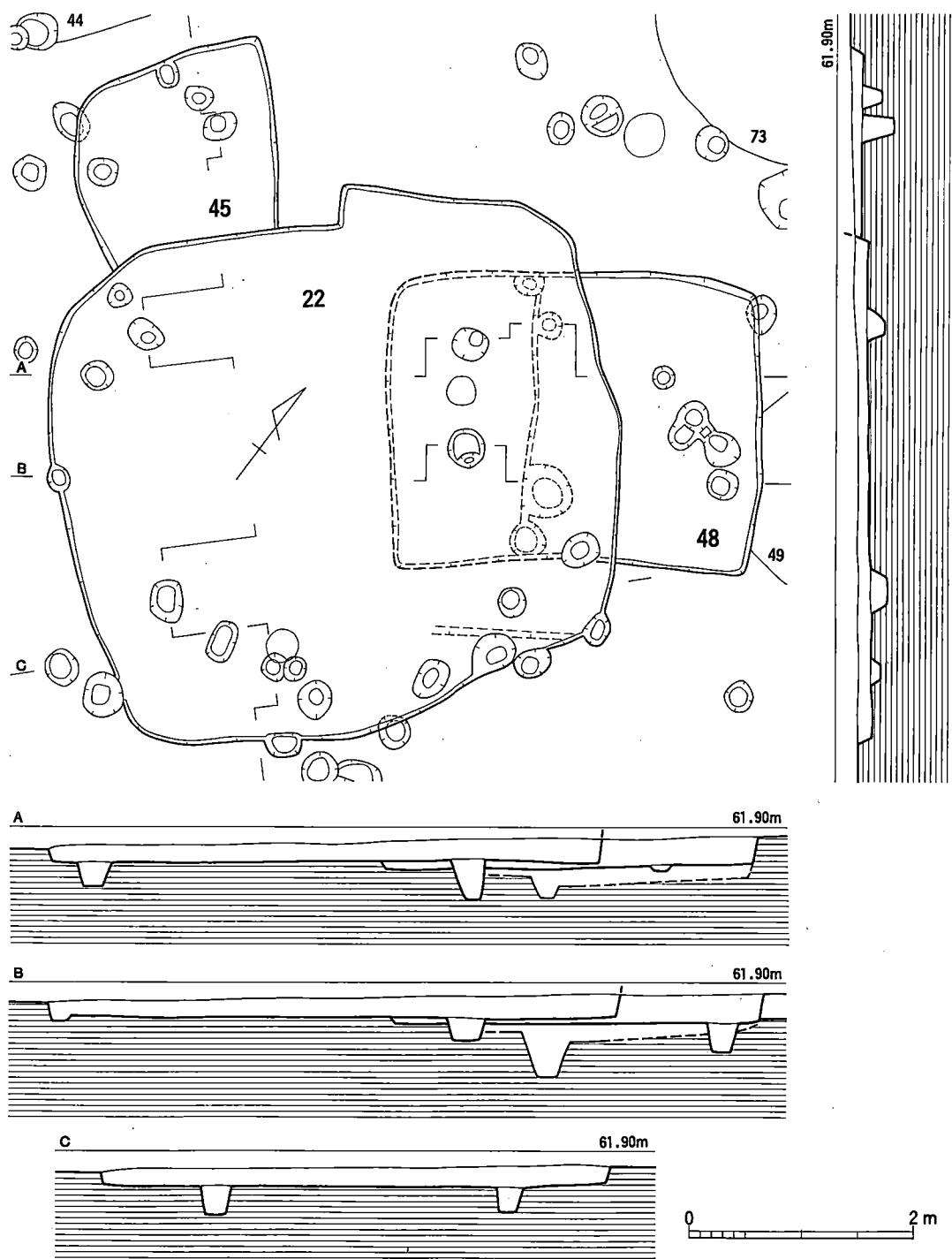
B3区にあり、29号住居跡を切っている。東西長3.4～3.9m、南北長2.6～3.1mの長方形プランで、面積は10.2m²。主柱穴は東西の壁に近い位置にある2本かもしれない。黒茶褐色土を埋土としていた。埋土中から甕片1点が出土したが図示できない。

29号住居跡（図版5、第30図）

B3区で28号住居跡に切られてその北にある。東西長2.5m、南北長3mの小さな長方形プランで、面積は復元で6.9m²。主柱穴は確実ではないが4本であろうか。土器片と黒曜石剝片が出土している。

出土遺物（図版26、第100図66）

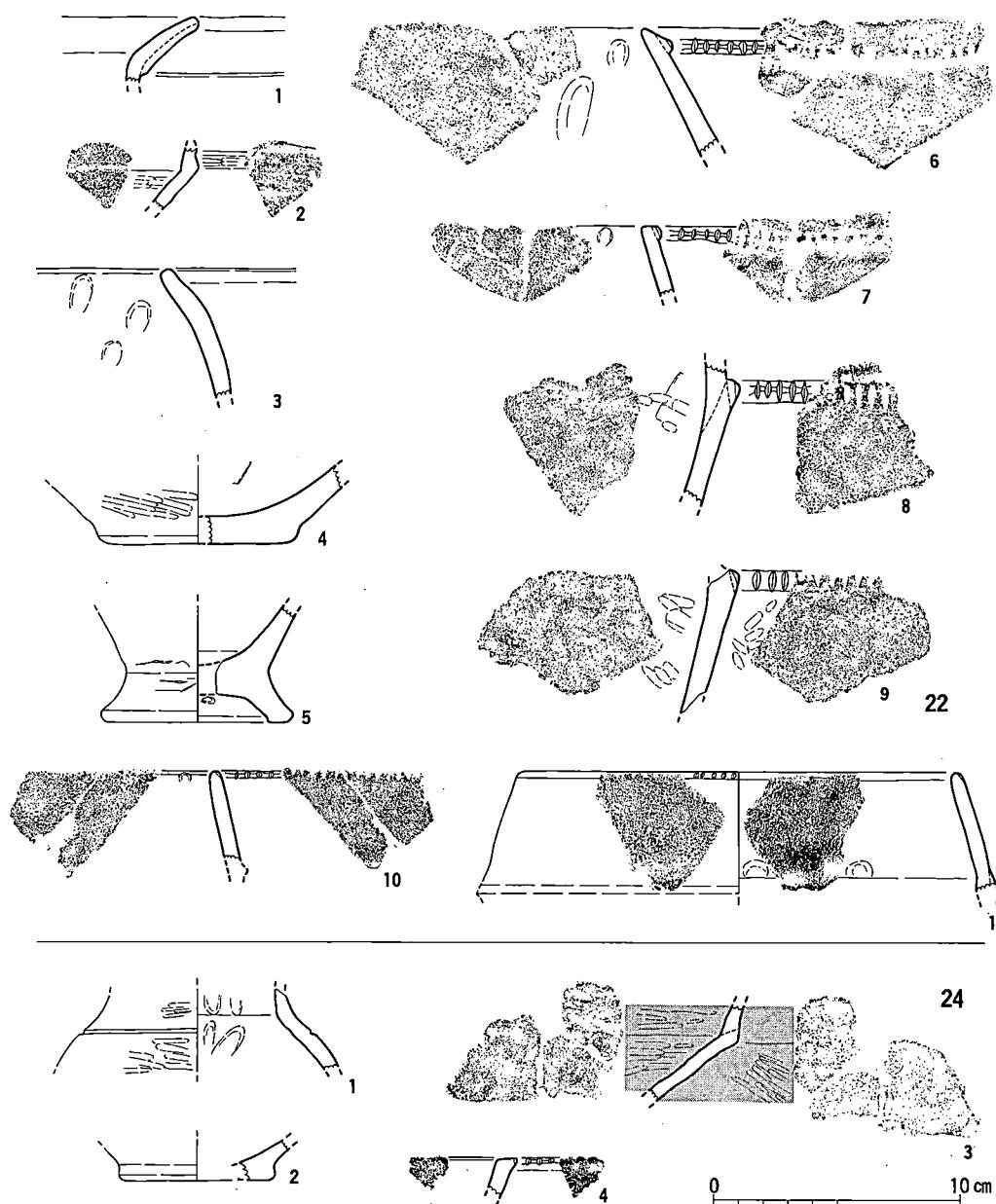
石器 第100図66は黒曜石の剝片でスクレイパーか。



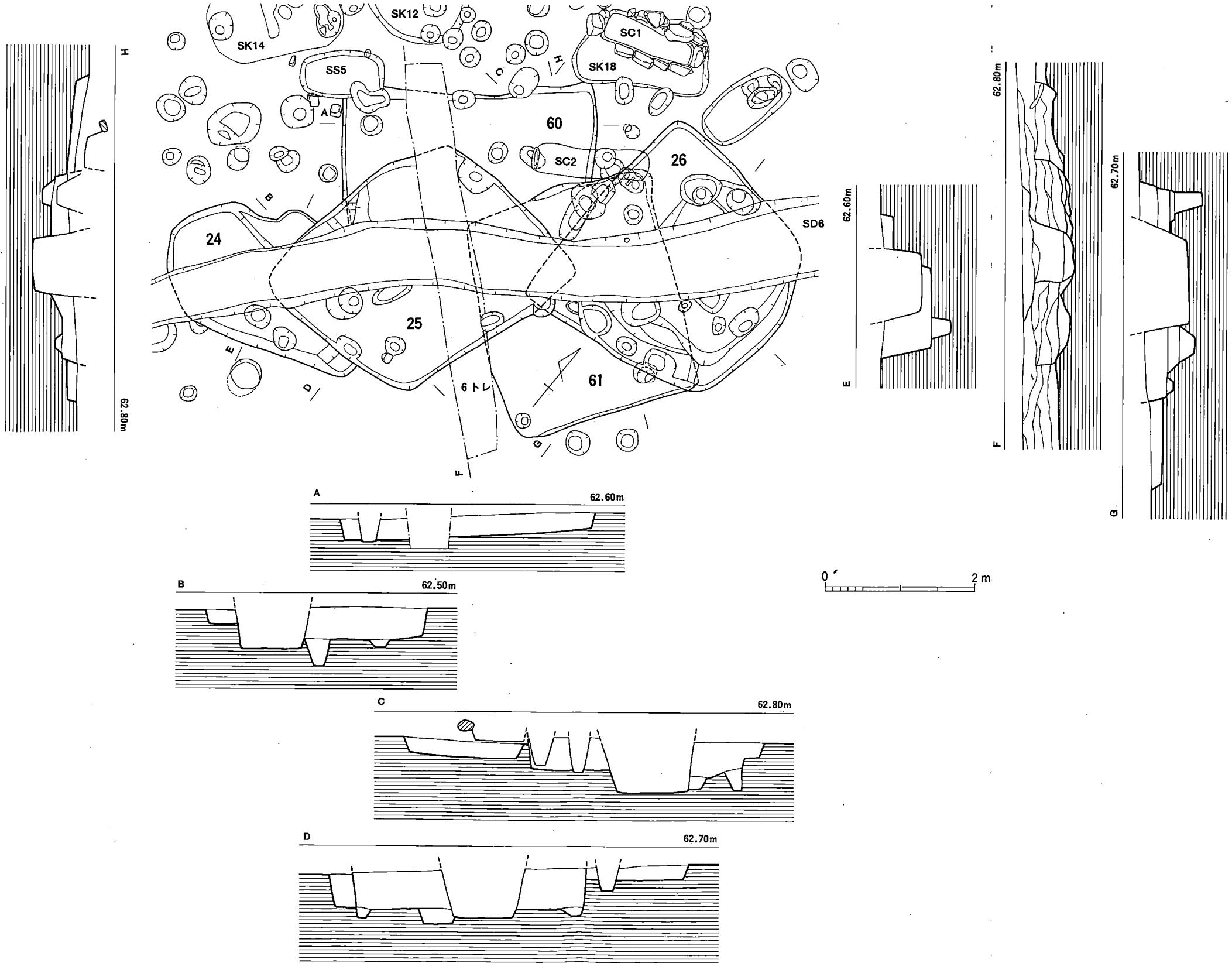
第27図 22・45・48号住居跡実測図 (1/60)

30号住居跡 (図版7、第31図)

C 3・4区にあり、32・59号住居跡を切っている。東西2.1m、南北2.5mの小さな長方形プランで、面積は4.6m²。主柱穴は不明。埋土中から土器片のほか黒曜石剝片、紡錘車、石斧等が出土した。



第28図 22・24号住居跡出土土器実測図 (1/3)

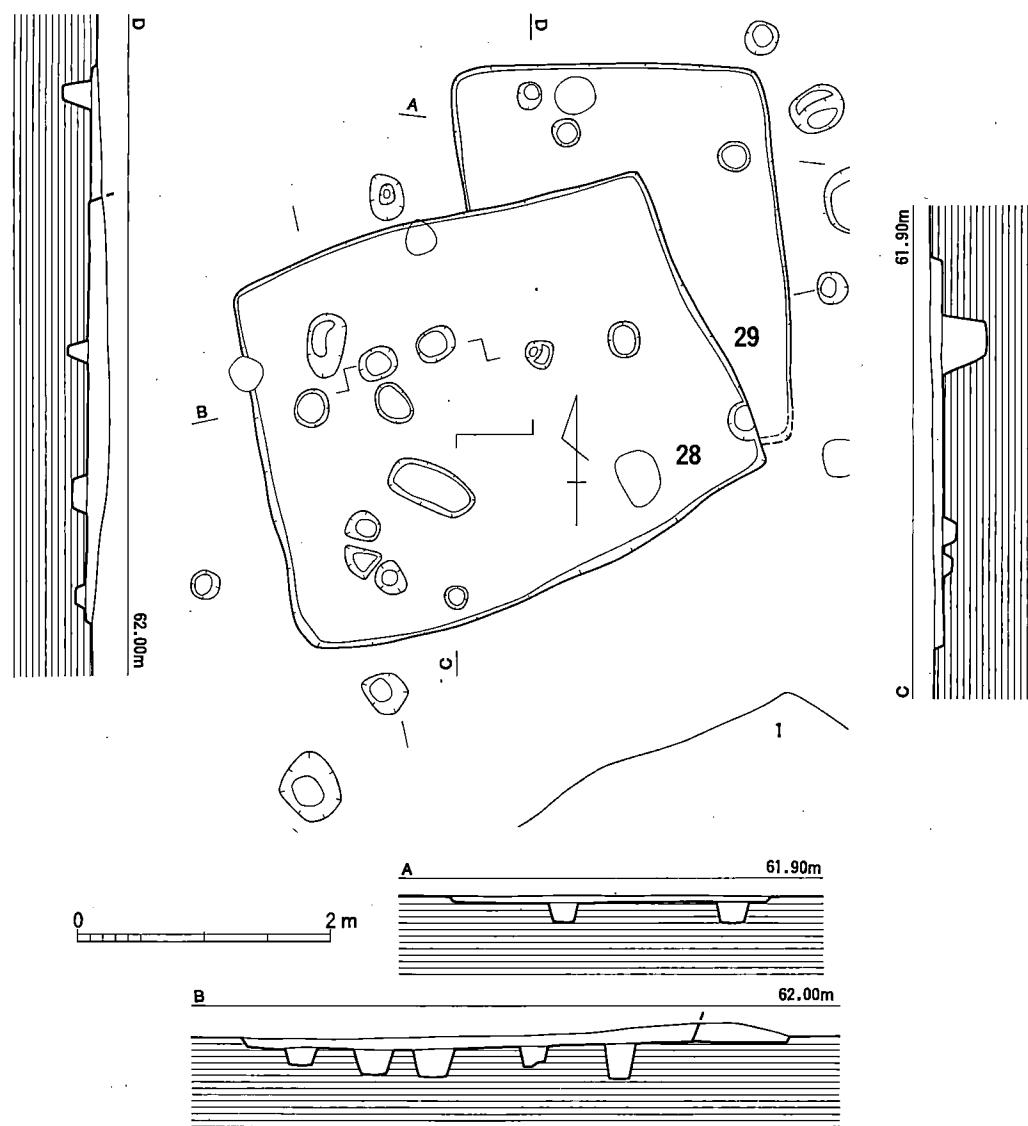


第29図 24・25・26・60・61号住居跡実測図 (1/60)

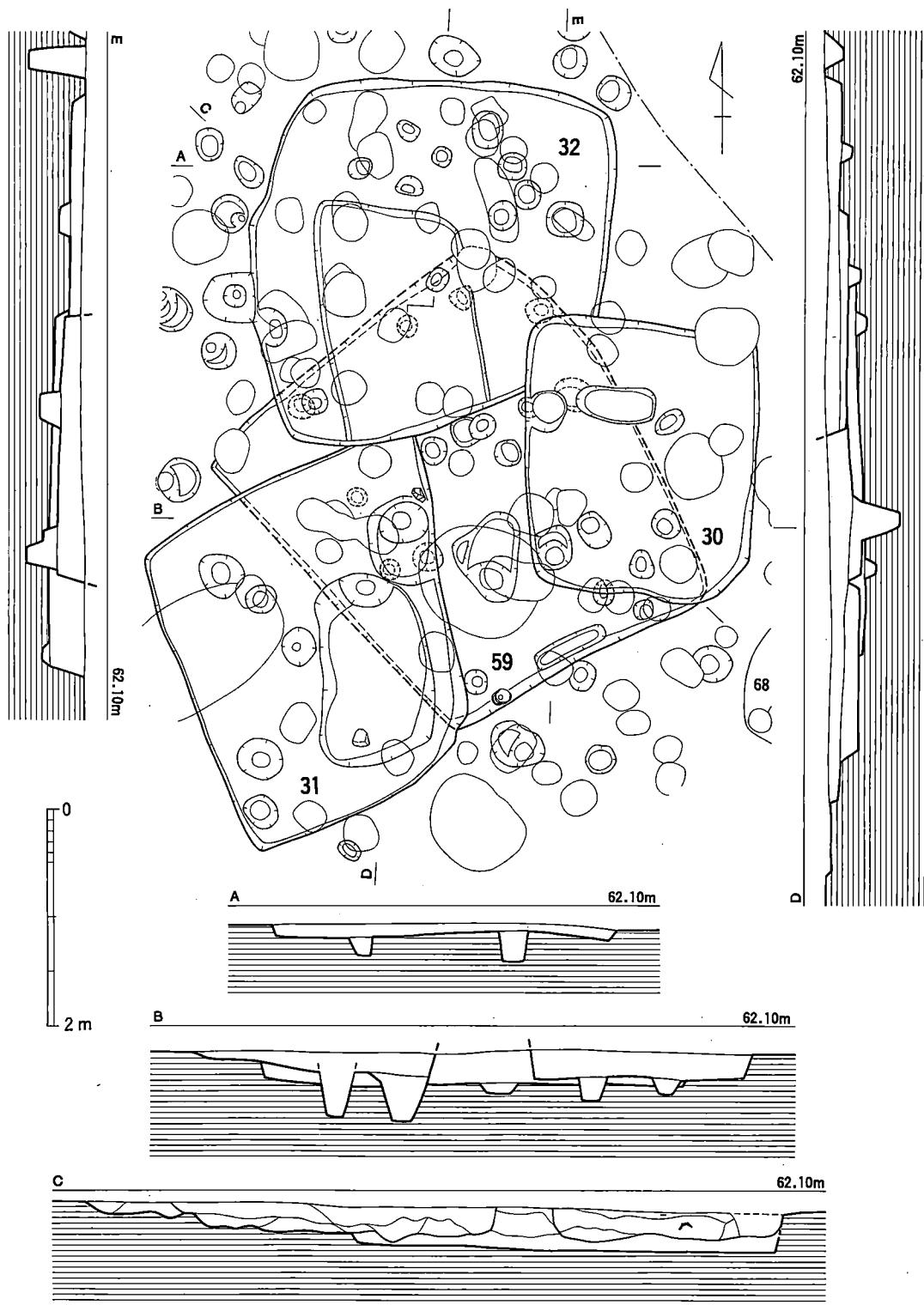
出土遺物（図版21・23・27、第34図1～3、95図1、103図4）

土器（第34図1～3） 1は壺の肩部片で、2条の沈線の下位に重弧文が入る。2号住居跡西包含層から出土したもの（第90図99）と同一個体かもしれない。2は壺の底部で内底面には敲打によるくぼみ7個が見られる。3は甕の肩部片で、刻目突帯より下方は焼けている。

土製品 第95図1は紡錘車で、孔は片側から穿たれ、中央よりやや偏した位置にある。器表には擦過痕が、縁部にはネズミ等の齧歯目小動物の門歯痕が見られる。



第30図 28・29号住居跡実測図 (1/60)



第31図 30・31・32・59号住居跡実測図 (1/60)

石器 第103図4は蛇紋岩の磨製石斧で、器表には磨いた際の稜線と擦過痕がよく残る。敲打痕がかなり見られ、とくに一側縁に著しい。

31号住居跡（図版7、第31図）

C 3 区にあり、59号住居跡を切り、32号住居跡に切られている。東西2.3~2.7m、南北3.1mの台形に近いプランを呈する。面積は7.2m²。主柱穴は不明。中央よりやや西寄りの所に焼けた部分があったが、炉とするにはくぼみもなかった。埋土中から土器片のほか黒曜石コア、砥石が出土した。

出土遺物（図版21・30、第34図1、111図1）

土器（第34図1） 約1/2が残存する甕である。底部は円盤貼り付け状を呈し、胴部はやや張りをもっており、直立した肩部から急角度に屈折した口縁部となる。口唇部全面に刻目が入る。外面は擦過のちナデ、内面はナデである。外面の口縁から胴中位までが煤けており、内面は口縁下6cmおよび底面周辺を除いた胴部が煤けている。復元で口径21.2cm、底径7.5cm、器高21.9cmを測る。

石器 第111図1は砂岩製の砥石で中砥になろう。側面も使用しており、裏面は原面を残しつつ使用している。

32号住居跡（図版7、第31図）

C 4 区にあり、31・59号住居跡を切り、30号住居跡に切られている。東西3.1~3.3m、南北2.8~3.3mほどの台形に近いプランを呈する。面積は8.8m²。主柱穴は不明である。埋土中および柱穴から土器片のほか黒曜石・サヌカイトの剝片・鏃等が出土した。

出土遺物（図版24・30、第34図1、98図10、113図25）

土器（第34図1） 刻目突帯の甕の破片である。

石器 第98図10はサヌカイトの剝片鏃。第113図25は片岩の扁平なもので、側縁に小さな抉りと頂部にやや大きな抉りがあるので錘であろう。

33号住居跡（図版8、第32図）

C・D の 4・5 区にあり、36・37・39号住居跡に切られている。西辺の3.6mはわかるが、東西方向は4.1m以上となるので長方形プランであろう。主柱穴は各隅部近くの4本の可能性がある。埋土中から弥生前期甕片が出土したが図示できない。

34号住居跡（図版7、第33図）

C 3 区にあり、67号住居跡を切っている。東西3~3.5m、南北2.6~2.9mの長方形プランで

ある。主柱穴は東西両辺の中央壁際にあるP1・P2の2本であろう。面積は8.1m²。わずかの土器片と、黒曜石・サヌカイトの多量の剝片、鏃等が出土した。

出土遺物（図版24・26、第34図1、98図11～19）

土器（第34図1） 粗製の鉢の破片である。

石器（第98図11～19） 11～14は黒曜石、15～19はサヌカイトの鏃で、13は形状が異なるが剝片鏃としておく。19は未製品と捉える。

35号住居跡（図版8、第32図）

C・Dの4区にあり、36号住居跡に切られている。東西長3.4m、南北長3.3mの方形プランであり、面積は復元で10.2m²。主柱穴は特定できないが、2本の可能性がある。埋土中から土器片が出土したが図示できない。

36号住居跡（図版8、第32図）

C・Dの4区にあり、33・35号住居跡を切り、39号住居跡に切られている。北東辺と西南辺の間が3.8～4.3m、北西辺と東南辺の間が3.6～4.2mを測る台形プランである。面積は復元で15.4m²。主柱穴は特定できない。出土遺物はなかった。

37号住居跡（図版8、第32図）

Dの4・5区にあり、33号住居跡を切り、38・39号住居跡と2号周溝墓の主体部に切られている。北辺の4mと南北長の3.3m以上からすれば、一辺4m前後の方形プランであろう。主柱穴は特定できない。出土遺物はなかった。

38号住居跡（図版8、第32図）

D4区にあり、37号住居跡を切り、39号住居跡と2号周溝墓の主体部に切られている。東西3m、南北3.2mの方形プランである。埋土は灰褐色砂質土であった。主柱穴はわからない。面積は復元で8.6m²。土器片と片岩の石斧らしい破片が出土したが図示にたえない。

39号住居跡（図版8、第32図）

D4区にあり、33・36・37・38号住居跡を切っている。東西4m、南北3.4mの隅円長方形プランである。主柱穴は特定できない。面積は12.2m²。出土遺物はなかった。

40号住居跡（図版8、第35図）

D5区にあり、69号住居跡と細い溝を切り、2号周溝墓の周溝に切られている。東西2.4m、

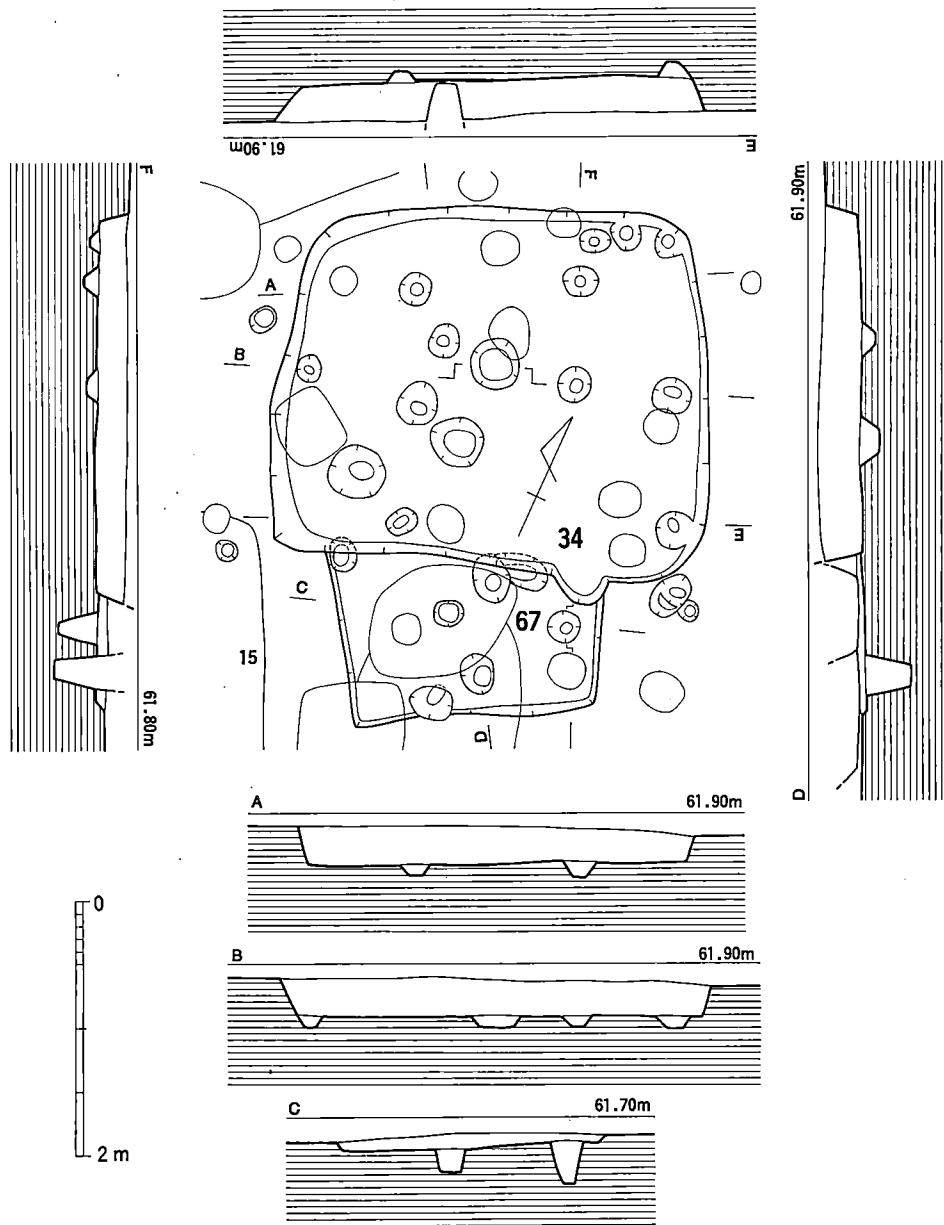


第32図 33・35・36・37・38・39号住居跡実測図 (1/60)

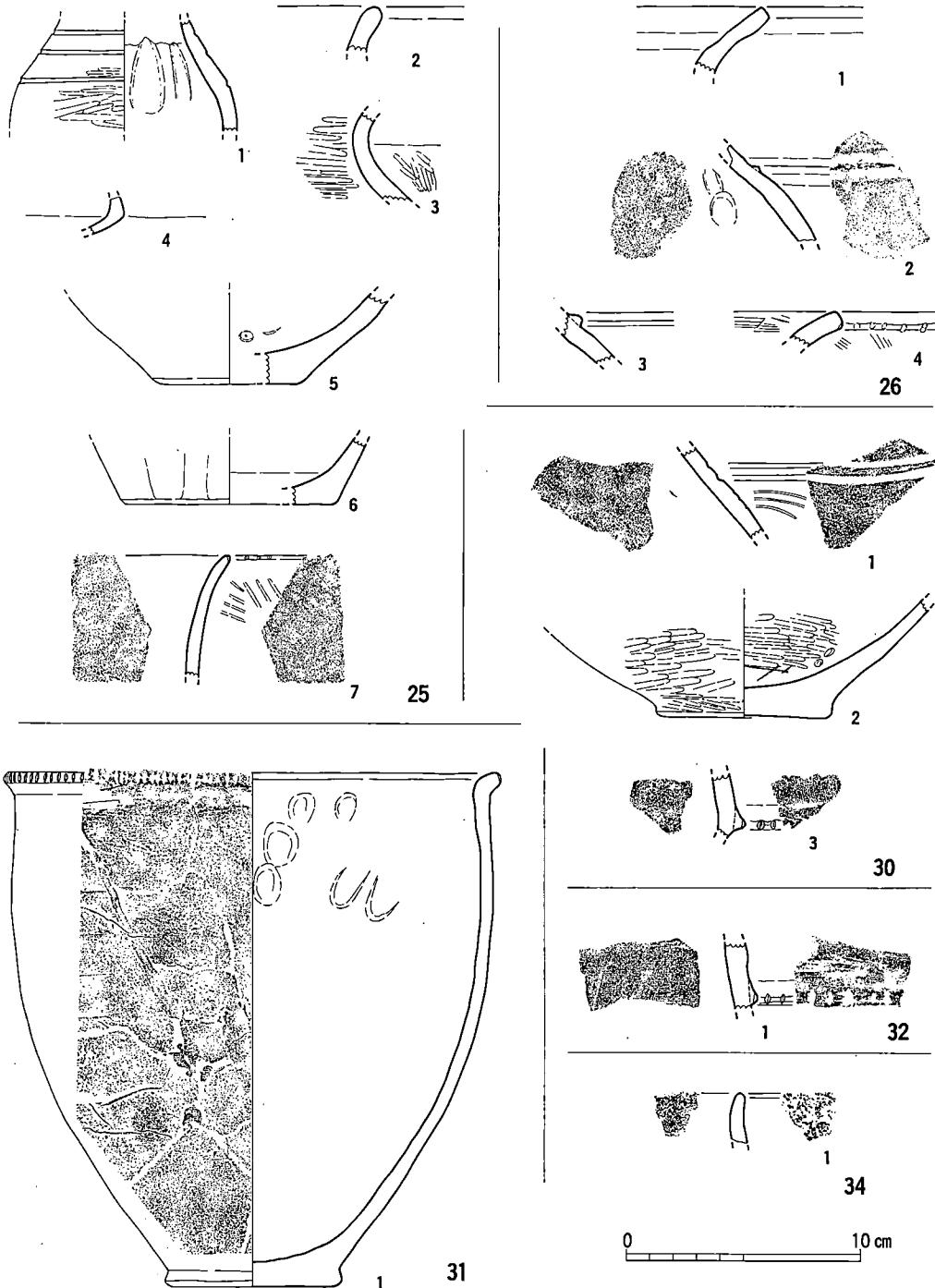
南北2.5mの小さな隅円方形プランである。埋土は灰褐色砂質土であった。主柱穴はわからない。面積は5.1m²。土器片とサヌカイトの剝片が出土した。

出土遺物（第38図1・2）

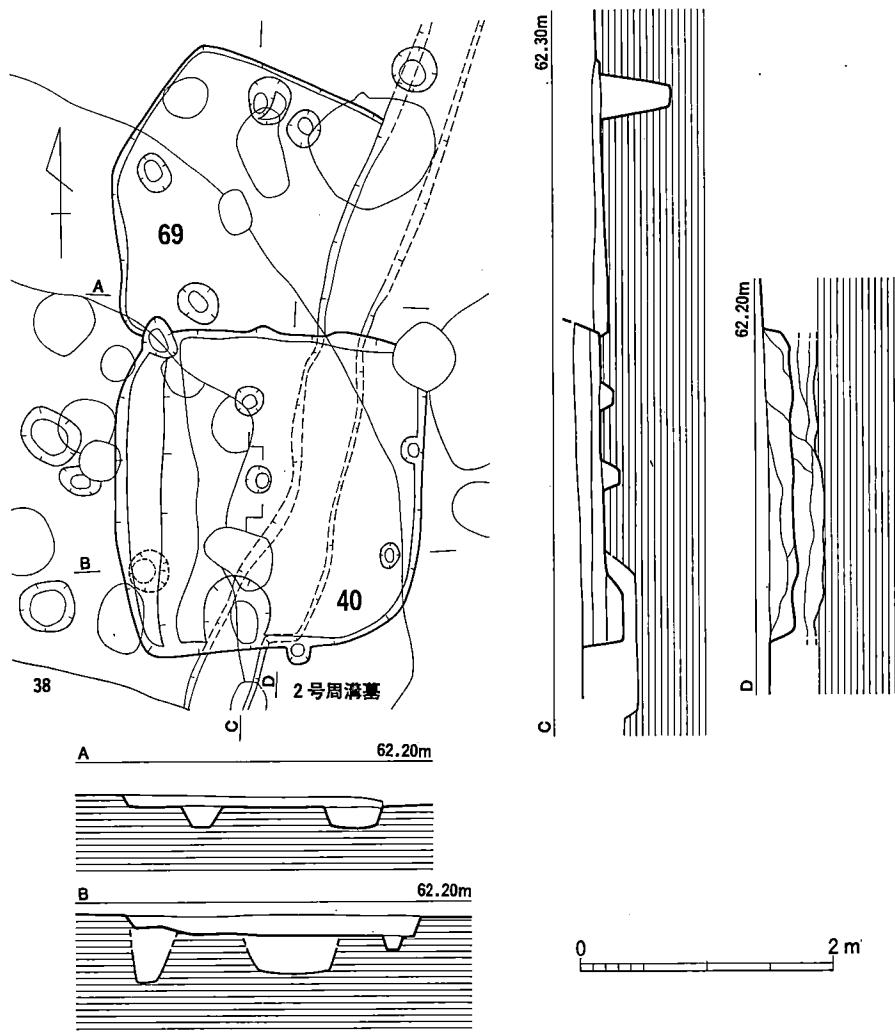
土器（第38図1・2） 1は鉢であろう。粗製。2は内外とも粗い条痕のある粗製の鉢で、全体に黒っぽい色調をなす。復元口径39.5cm。



第33図 34・67号住居跡実測図 (1/60)



第34図 25・26・30・31・32・34号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第35図 40・69号住居跡実測図 (1/60)

41号住居跡 (図版5、第36図)

B3区にあり、5号溝に切られている。東西長は2.25mで、南北長は2.5m程度の小さな長方形プランであろう。埋土は濃灰色砂質土であった。南側は床面の下が一段低くなっているが、これは住居とは関係のないものである。主柱穴は1個も見られなかった。面積は5.1m²。土器片と黒曜石・サヌカイトの剝片、すり石が出土した。

出土遺物 (図版28、第38図1~5、106図16)

土器(第38図1~5) 1~4は粗製の鉢である。4は強い二次熱を受けている。5は粗製の条痕文土器で、縄文晩期かとも思われるが、もっと古い時期かもしれない。

石器 第106図16は表裏面ともに使用した条線が見られる。すり石とするが、台石とすべきか。

42号住居跡（図版5～7、第36図）

D 3 区にあり、4号掘立柱建物跡に切られている。東西長1.9～2.35m、南北長2.35mの台形に近い小さな方形プランである。二段掘りになっており、二段目は深い。主柱穴はわからない。面積は4.6m²。壺のみの土器片と黒曜石・サヌカイトの剝片、鏃等が出土した。

出土遺物（図版24、第38図1～5、98図20）

土器（第38図1～5） すべて精製の壺である。1は小壺。2～4は肩部に重弧文があり、5の外面は丹塗りである。1～3は上層、4・5は下層から出土した。

石器 第98図20はサヌカイトの鏃で、下層から出土した。

43号住居跡（図版6・7、第37図）

D の 3 ・ 4 区にある。一辺が2.15mの小さな方形プランである。主柱穴は特定できない。面積は4.0m²。出土遺物はなかった。

44号住居跡（図版6・7、第37図）

D ・ E の 4 区にある。一辺が2.3mの小さな隅円方形プランである。主柱穴は特定できない。面積は4.2m²。埋土中から鉢の破片と黒曜石・サヌカイトの剝片が出土したが図示できない。

45号住居跡（図版6・7、第27図）

E 4 区で、44号住居跡の東南にあり、22号住居跡に切られている。一辺が1.8mほどの方形プランと思われ、面積は2.98m²しかなく、この遺跡の中では最も小さい。ふつうの竪穴とすべきかもしれない。主柱穴はわからない。土器片1点が出土したのみである。

出土遺物（第38図1）

土器（第38図1） 壺か鉢であろう。肩部に細い沈線が入る。外面は煤けている。

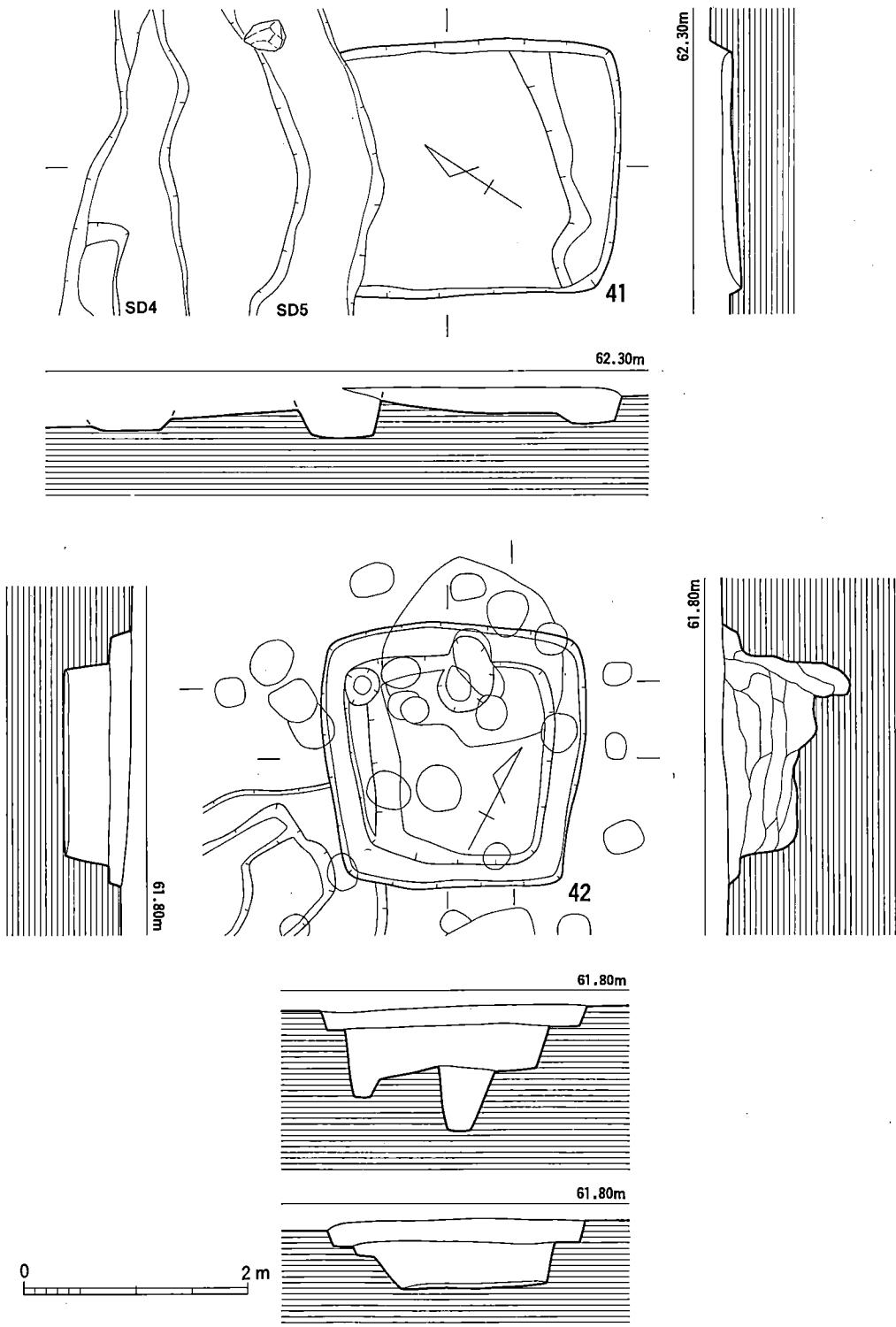
46号住居跡（図版6・7、第37図）

44号住居跡の北、E 4 区にあり、S X 3 に切られている。東西2.4～2.8m、南北2.6～2.8m のやや歪な方形プランであり、面積は7.0m²。主柱穴は特定できない。わずかな土器片と黒曜石・サヌカイトの剝片が出土した。

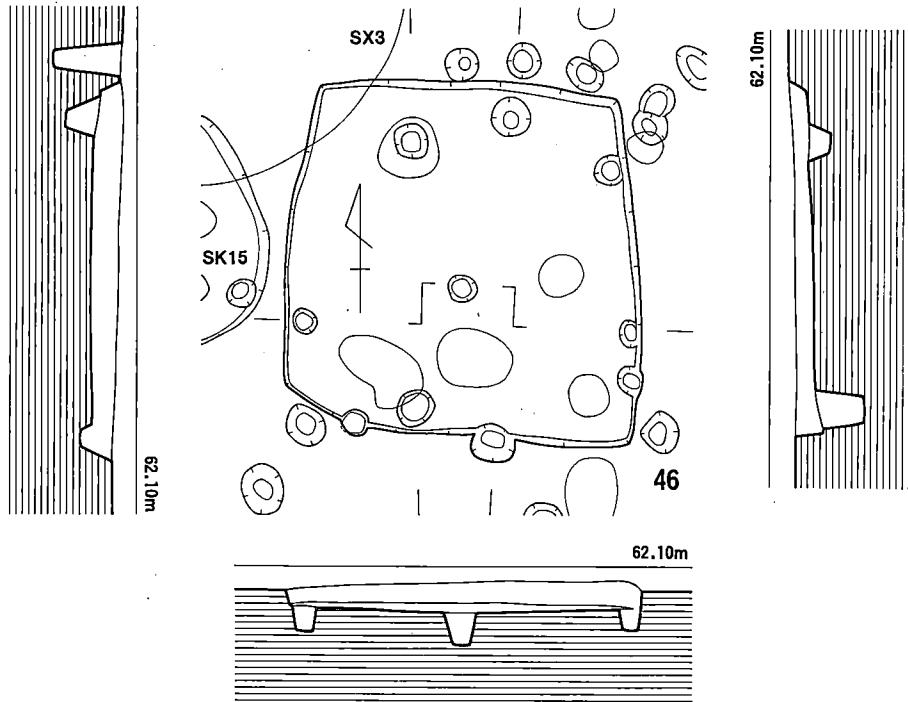
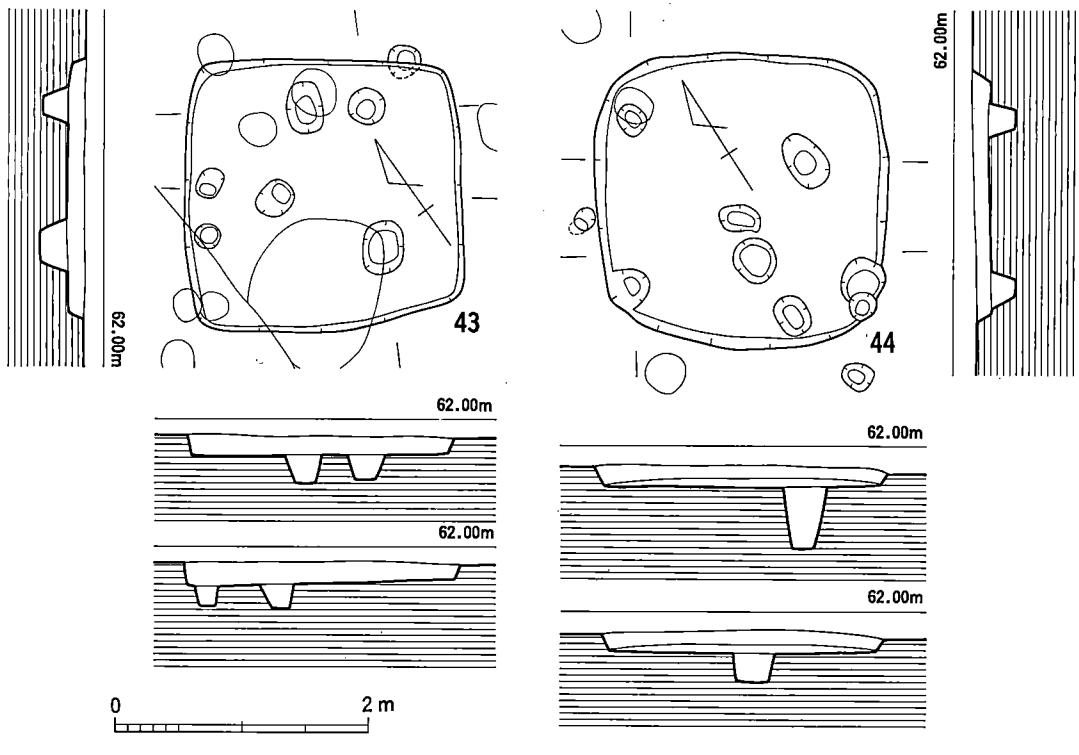
出土遺物（図版26、第38図1・2、98図21）

土器（第38図1・2） ともに甕の底部片である。

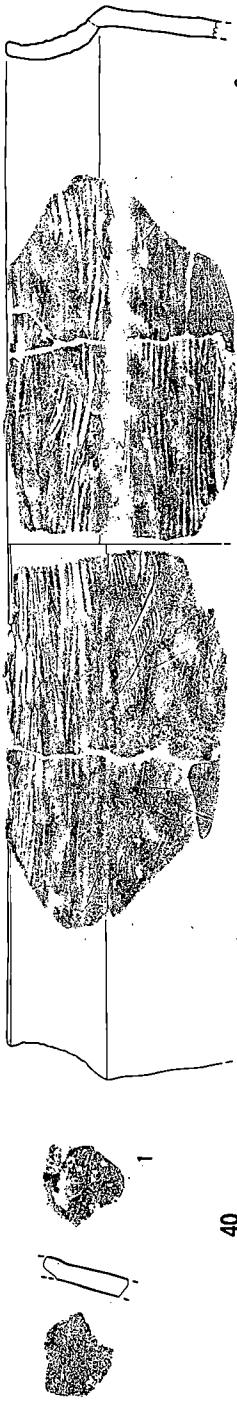
石器 第98図21は黒曜石の剝片で、鏃の未製品としておく。



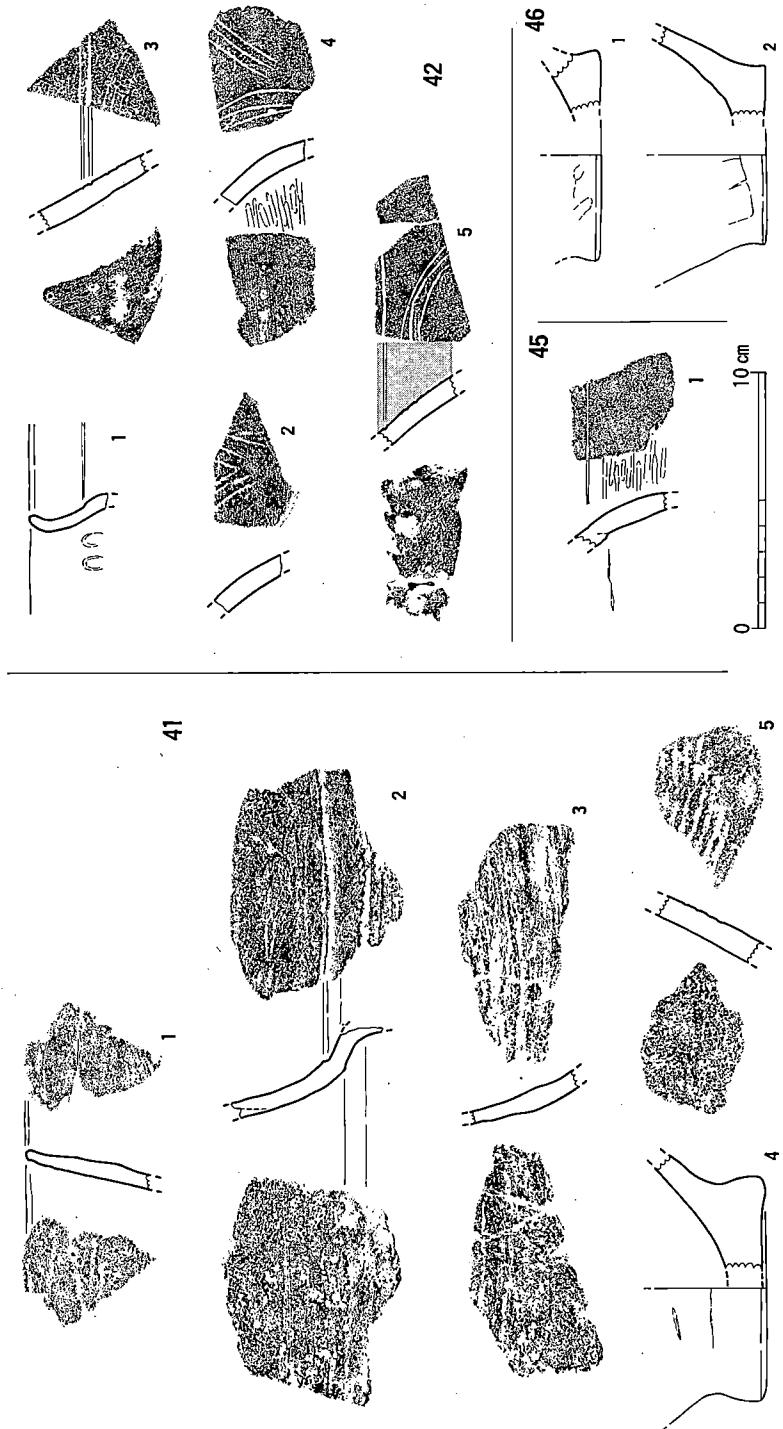
第36図 41・42号住居跡実測図 (1/60)



第37図 43・44・46号住居跡実測図 (1/60)



40



第38図 40・41・42・45・46号住居跡出土土器実測図 (1/3)

47号住居跡（図版8、第39図）

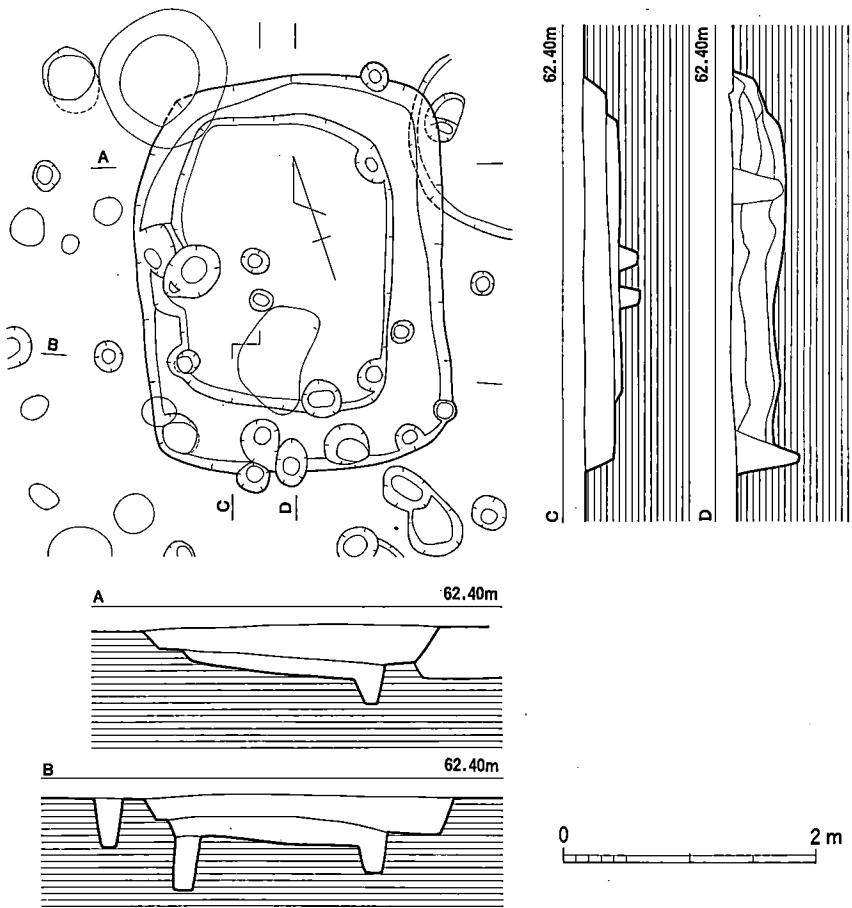
E 5 区にあり、東西2.4m、南北3.1mの隅円長方形プランをなす。面積は6.0m²。内部は二段掘りとなっている。主柱穴は特定できない。土器片と黒曜石・サヌカイトの剝片が出土した。図示していないが、下層出土の壺に外面丹塗りのものがある。

出土遺物（第43図1～7）

土器（第43図1～7） 1は壺の口縁部片。2は浅鉢片。3～6は刻目突帯の甕で、4の内面には丹塗りの痕跡がある。5は復元口径22.4cm。6は突帯より下位が煤けている。7は内面に煤が付着している。3・6・7は上層より、他は下層より出土した。

48号住居跡（図版6、第27図）

E 4 区にあり、49号住居跡を切り、22号住居跡に半分以上が切られているが、22号住居跡の



第39図 47号住居跡実測図 (1/60)

下層から切られた部分のプランが現れたので全貌がわかる。東西3.35m、南北2.6mの長方形プランをなし、面積は8.1m²。床の下層において、西辺に平行して幅1.1~1.3mがベッド状に高くなっていたが、その意味は不明である。主柱穴は特定できない。土器片と黒曜石・サヌカイトの剝片、すり石が出土した。

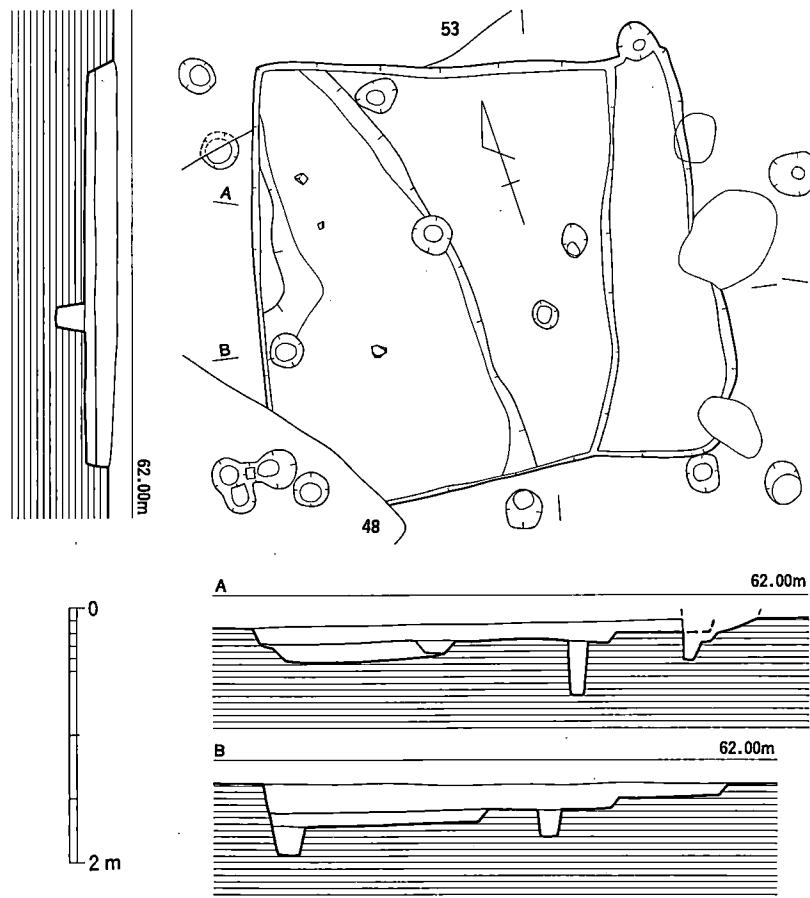
出土遺物（図版28、第43図1、106図17）

土器（第43図1）甕の肩部片でおそらく刻目が入るだろう。

石器 第106図17は丸い石で確実にすり石といえるかどうかわからない。

49号住居跡（図版6、第40図）

E・Fの3・4区にあり、53号住居跡を切り、48号住居跡に切られている。東西3.4~3.7m、南北3.1~3.5mの長方形プランをなし、面積は10.9m²。床面の中央付近と東寄りに段が付いて



第40図 49号住居跡実測図 (1/60)

いるのは、あるいはまだ別の住居跡があったのかもしれない。主柱穴は特定できない。土器片とサヌカイトの剝片、叩石・すり石が出土した。

出土遺物（図版29、第43図1～3、106図18・19）

土器（第43図1～3） 1は口唇外端部に小さな刻目突帯を貼り付けるが、2は接合面下端部に刻みを施している。2の刻目より下位には化粧土の痕跡がある。3の外底面にはワラのような圧痕が見られる。

石器 第106図18は一面が平滑に磨れ、逆の一面には敲打痕があり、叩石ともすり石とも称しうるものである。同19の一面も磨れている。

50号住居跡（図版6、第41図）

F 4 区にある。東西2.5m、南北2.7mの方形プランをなし、面積は 5.9m^2 。床面の中央付近が溝状になっているのは住居に伴うものかどうかわからない。主柱穴は特定できないが、壁際に位置する数個であった可能性もある。また、竪穴部外までも住居として使用していた可能性を考えれば、竪穴部外の柱穴群、例えば住居の四隅から1.3～2.0mの所にあるイロハニの各柱穴が主柱穴であったことも考えられる。土器片と石斧が出土した。

出土遺物（図版27、第43図1、103図5）

土器（第43図1） 脚台風の底部で壺であろうか。



Photo. 2 調査風景 2

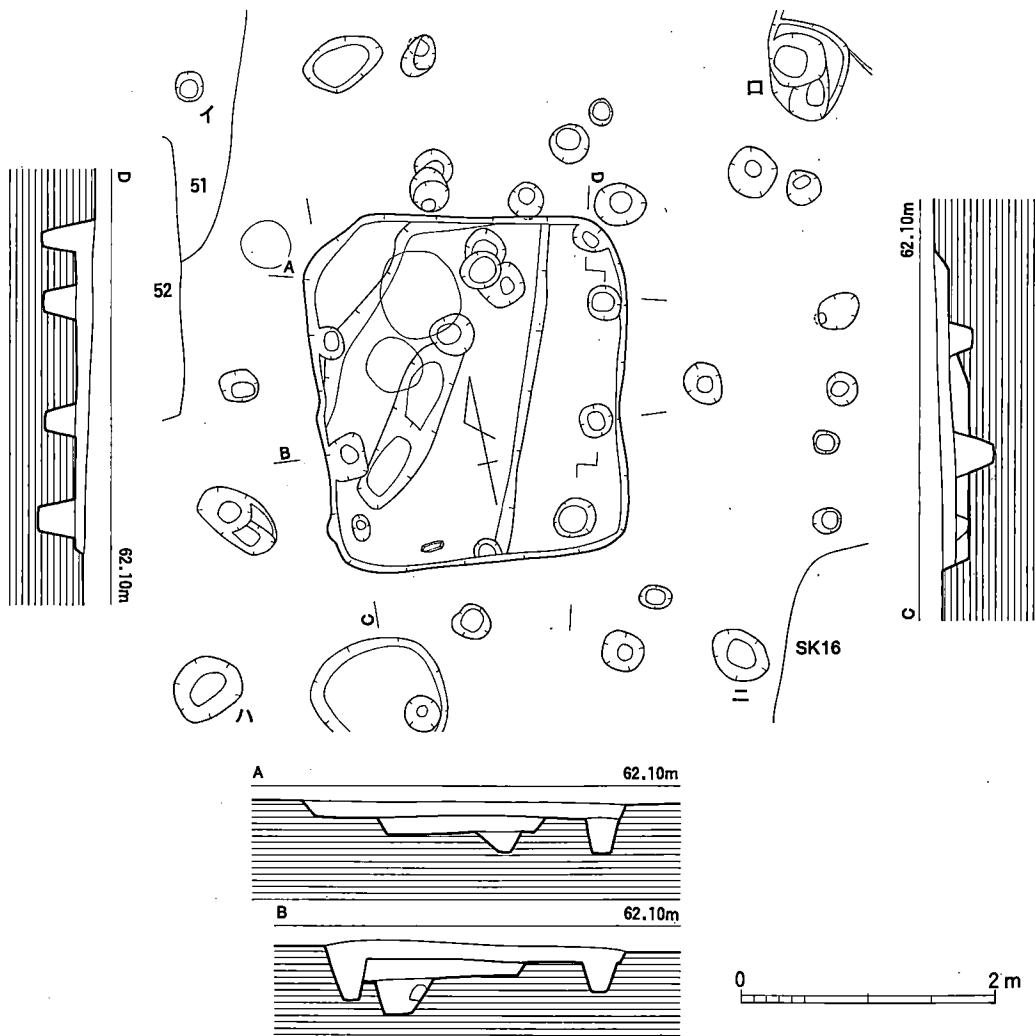
石器 第103図5は片岩の局部磨製石斧で、磨いた刃部には使用痕が著しい。頭頂部から5cmほど刃部寄りの所にわずかな抉りがあるのは縛縛した部分かもしれない。

51号住居跡（図版6、第42図）

F 4 区にあり、56号住居跡を切り、52号住居跡に切られている。東西3.2~3.45m、南北3.3mの方形プランをなし、面積は復元で10.4m²。主柱穴は特定できない。甕の破片が出土した。

出土遺物（第43図1）

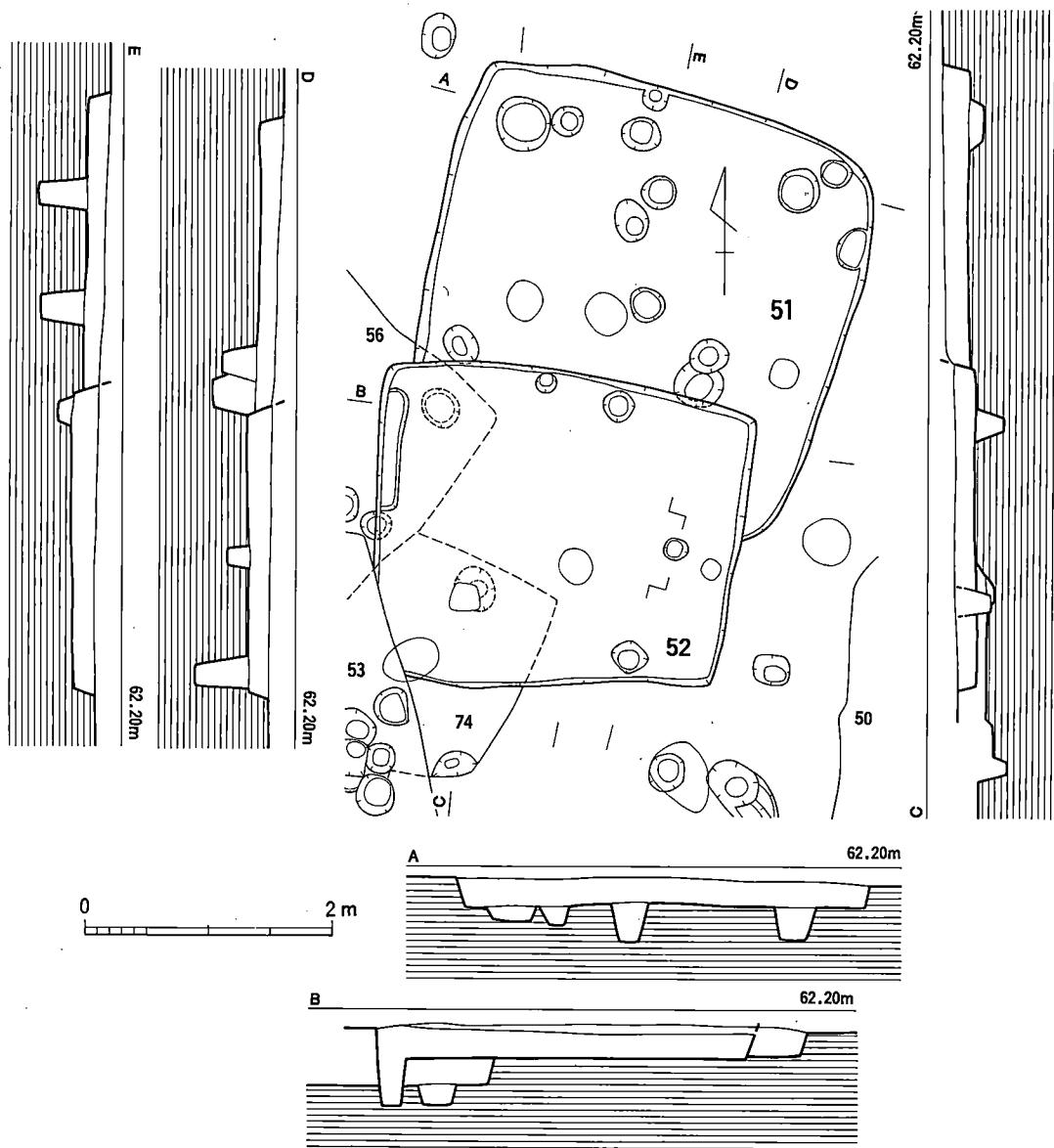
土器（第43図1） 甕の底部片で復元底径9cm。



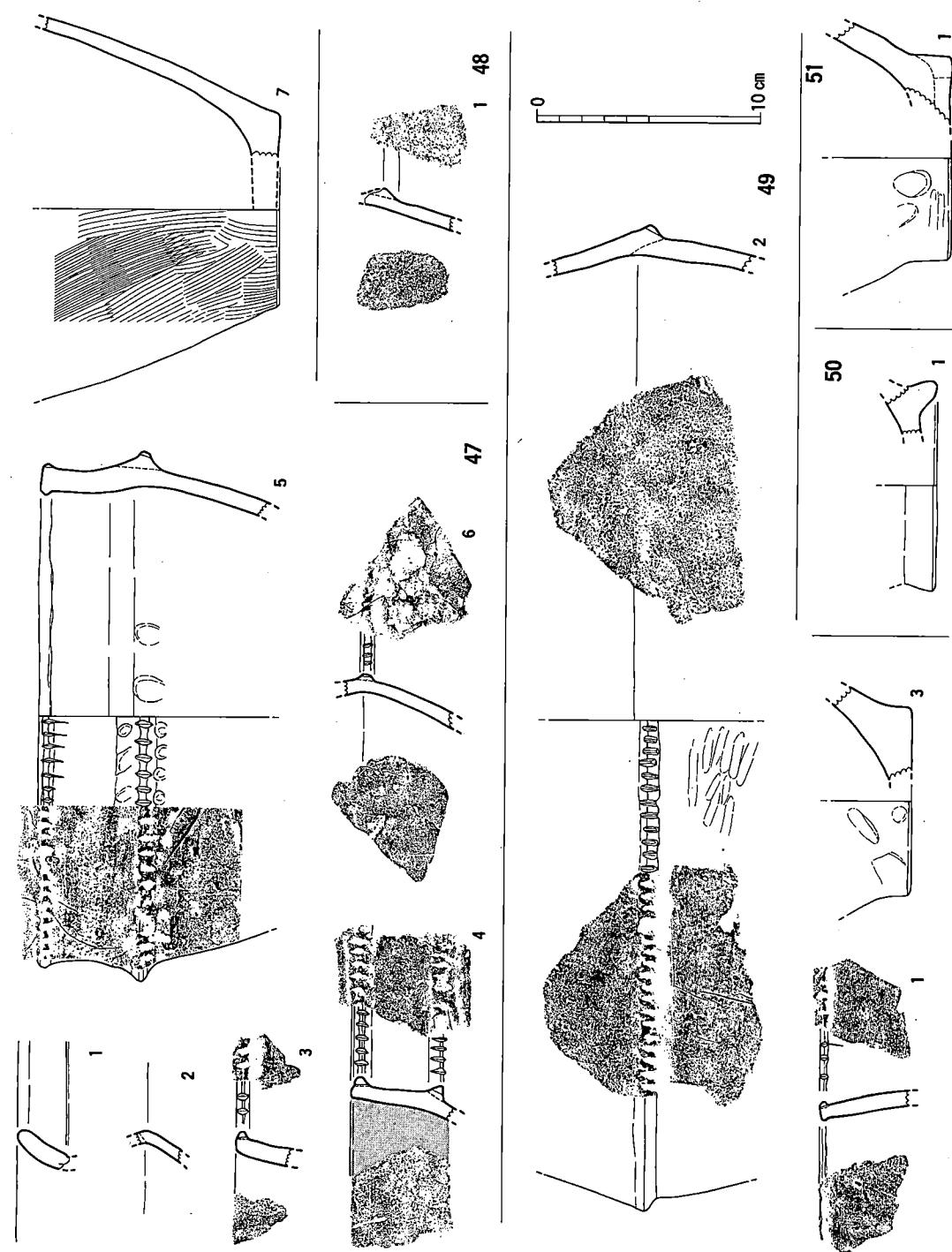
第41図 50号住居跡実測図 (1/60)

52号住居跡（図版6、第42図）

F4区の51号住居跡の南にあり、51・56・74号住居跡を切り、53号住居跡に切られている。東西3.0m、南北2.2~2.65mの長方形プランをなし、面積は復元で6.8m²。主柱穴は特定できない。混入の土師器の破片が出土した。



第42図 51・52号住居跡実測図 (1/60)



第43図 47・48・49・50・51号・住居跡出土土器実測図 (1/3)

53号住居跡（図版6、第44図）

E・Fの4区にあり、52・54・56・73・74号住居跡を切り、49号住居跡に切られている。東西3.4～3.7m、南北3.4mの方形プランをなし、面積は11.5m²。南辺の東側が二段になっているのは2軒の重複かとも思われるがはっきりしない。主柱穴は特定できない。土器片とサヌカイトの剝片が出土した。

出土遺物（第47図1）

土器（第47図1） 刻目突帯甕の肩部片である。突帯より下位は煤けている。

54号住居跡（図版6、第44図）

E4区にあり、56・57・73号住居跡を切り、53号住居跡に切られている。東西3.5～3.7m、南北3.5mの方形プランをなし、面積は復元で11.5m²。主柱穴は特定できない。土器片とサヌカイトの剝片が出土した。

出土遺物（第47図1・2）

土器（第47図1・2） 1は刻目突帯甕の肩部片である。突帯より下位は煤けている。2は粗製の甕で外面は条痕が著しい。

55号住居跡（図版5・6、第45図）

D2区にあり、4号掘立柱建物跡に切られている。また第1トレンチがこの住居を斜めに縦断する格好で設定された。東西2.1～2.6m、南北2.95mの隅円長方形プランをなし、面積は6.0m²である。埋土は淡黄灰色であった。二段掘りとなり、二段目は深い。柱穴は1個も検出されなかった。土器片とサヌカイトの剝片が出土したが図示できない。

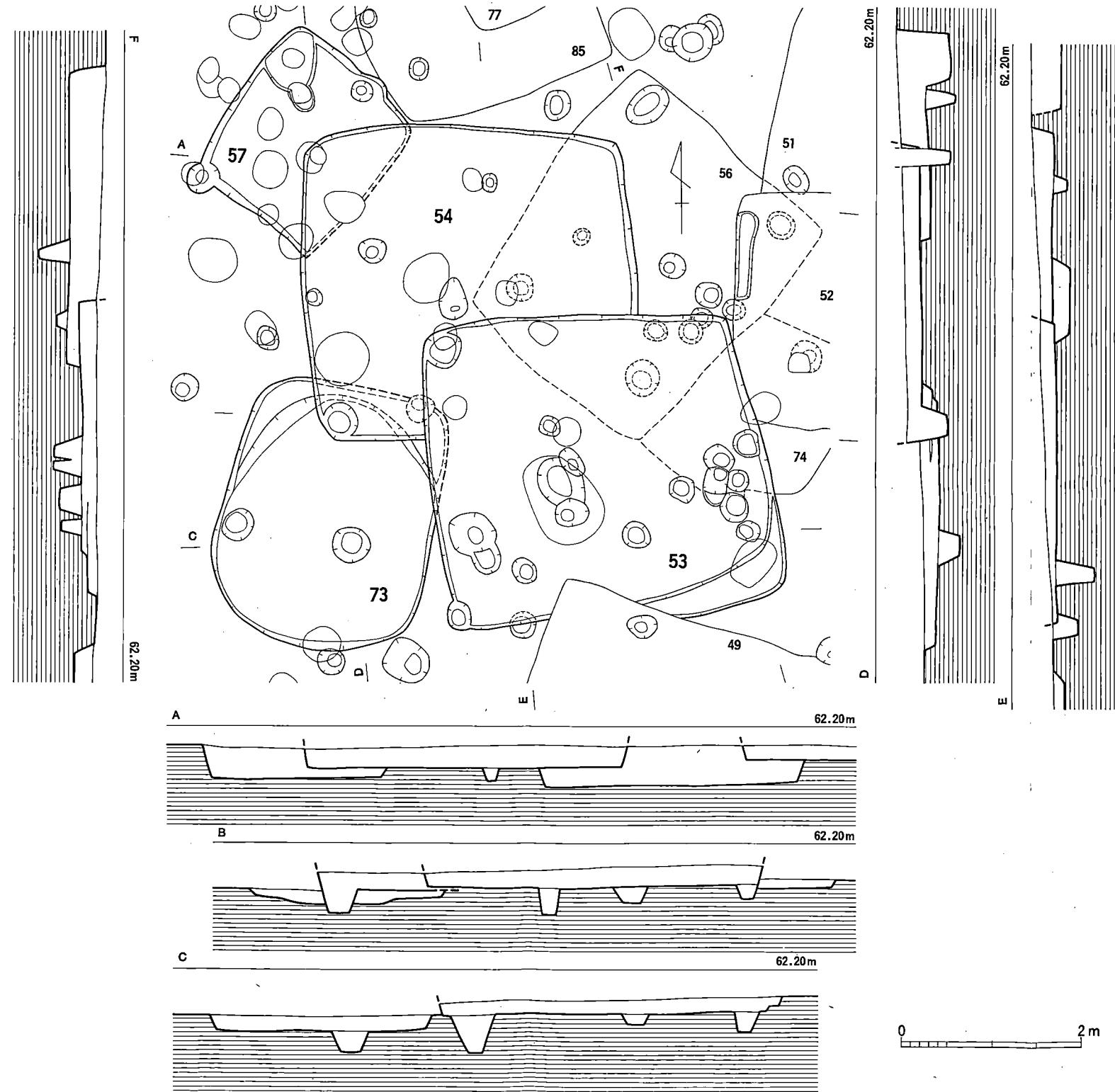
56号住居跡（図版6、第46図）

E・Fの4区にあり、74号住居跡を切り、51・52・53・54号住居跡に切られているが、切られた部分は各住居跡の下層から検出されたので全貌がわかる。淡黒色土を埋土としていた。北西一南東方向が2.4～2.8m、北東一南西方向が3.3mの長方形プランをなし、面積は8.2m²。主柱穴は特定できない。土器片とサヌカイトの剝片、すり石、台石が出土した。

出土遺物（図版29、第47図1・2、106図20・21、111図6）

土器（第47図1・2） 1は半精製の鉢片。2は刻目突帯甕の肩部片である。刻みは鋭利な感じを受ける。

石器 第106図20・21は小さなすり石。第111図6は凝灰岩かと思われる石材で、平面形が五角形状を呈し、表裏ともに磨れている。台石としておく。



第44図 53・54・57・73号住居跡実測図 (1/60)

57号住居跡（図版6、第44図）

E 4 区にあり、54号住居跡に切られている。埋土は淡黒色土であった。北西-南東方向が1.8m、北東-南西方向が2.0mの小さな長方形プランをなし、面積は3.03m²。この遺跡では45号住居跡に次いで小さい規模である。主柱穴はわからない。土器片はなく、黒曜石の剝片と小さな石が出土したが図示にたえない。

58号住居跡（図版8、第45図）

D・E の 5・6 区にあり、2 トレンチによって南半を削ってしまった。埋土は淡黒灰色土であった。北西-南東方向が3.4m を測るので、一辺をそのくらいとする方形プランであったかと思われる。主柱穴は不明。土器片が出土した。

出土遺物（図版21、第47図1～3）

土器（第47図1～3） 1は半精製の鉢片。2は肩部突帯に刻目を入れた甕で、口縁部には突帯が付かない。突帯より下位は煤けている。復元口径19.6cm。3は外面にタタキ痕、内面には刷毛目のある破片で、弥生終末頃の甕であろう。

59号住居跡（図版5・7、第31図）

C の 3・4 区にある。30・31・32号住居跡に切られているが、それらの下層で壁面が現れた。東西2.7～3.35m、南北3.5～3.9m の歪な長方形プランをなす。面積は10.8m²。埋土は淡黒色土であった。主柱穴は特定できない。南辺近くから蓋形土器と台石が出土し、ほかに土器片と砥石が出土した。

出土遺物（図版21・30、第51図1・2、111・112図2・12）

土器（第51図1・2） 1は蓋で内外ともミガキが著しい。撮み径7.8cm。2は刻目突帯の甕で、刻みは丸いものを押圧して施している。内面は煤けている。

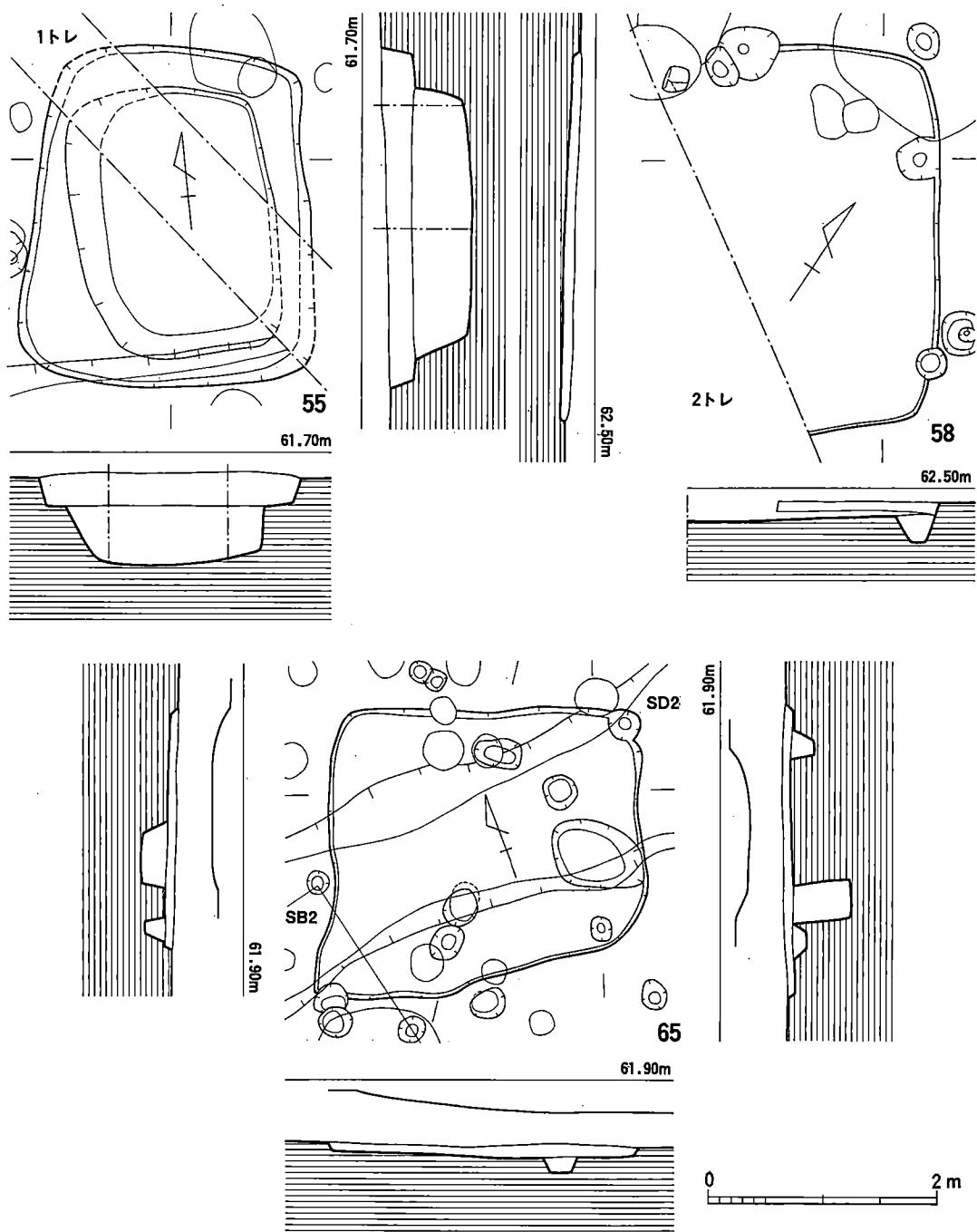
石器 第111図2は砂岩の砥石片で中砥であろう。第112図12は凝灰岩質の石材で、表裏面ともに刃先を研いだ痕跡が条痕として多数見られる。砥石としてもよいが台石としておく。

60号住居跡（図版8、第29図）

E 6 区にあり、25・26・61号住居跡を切り、5号支石墓と2号石棺墓、6号溝に切られている。東西長のみ3.4m がわかるが、おそらく南北長も同程度の方形プランであったかと思われる。主柱穴は不明。埋土中から土器片数点が出土したのみである。

出土遺物（第51図1）

土器（第51図1） 外面は条痕のちナデ、内面は擦過風のナデを施した破片で、外面には沈線が入る。粗製であり甕の肩部付近かとも思われるが明確でない。傾きも不明。



第45図 55・58・65号住居跡実測図 (1/60)

61号住居跡（図版8、第29図）

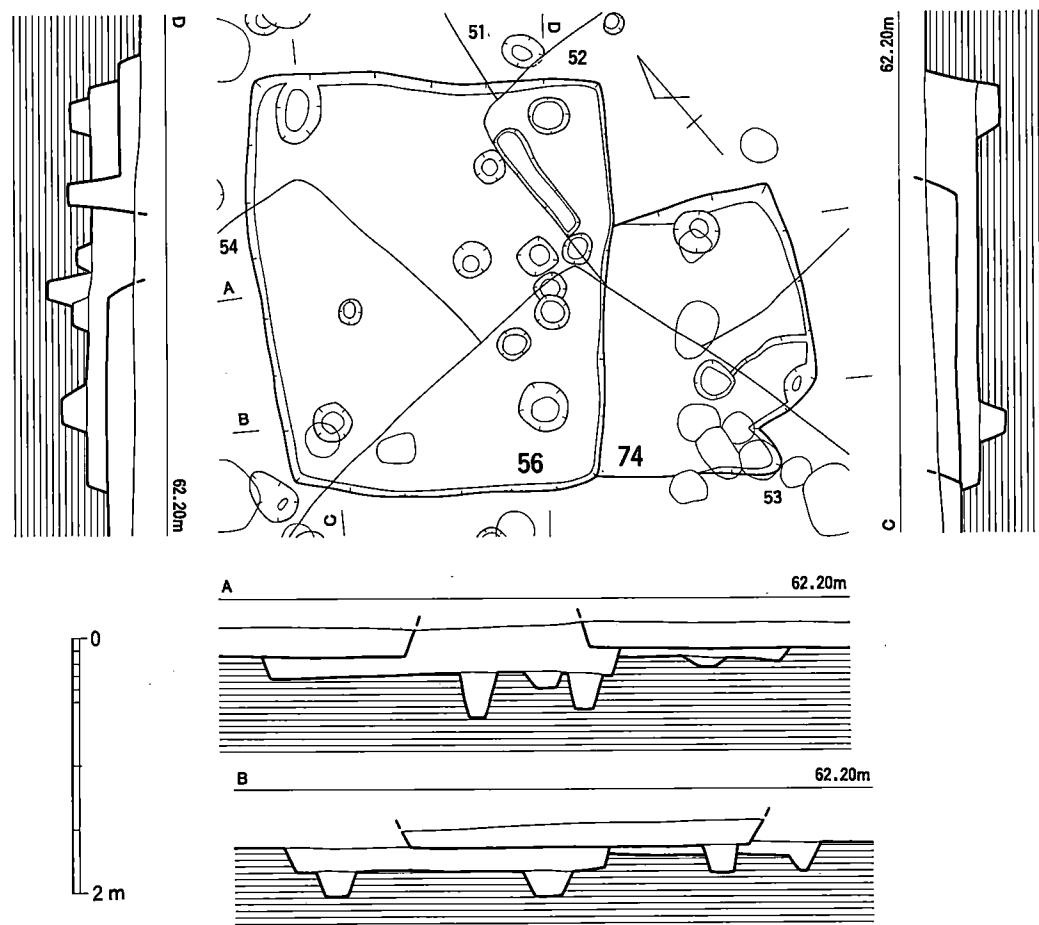
E・Fの6区にあり、60号住居跡を切り、25・26号住居跡と2号石棺墓、6号溝に切られている。断片的なラインから東西3.1m、南北2.7mの長方形プランに復元され、面積は7.6m²。6号溝をはさんで西と東では床面レベルが少し異なっている。主柱穴は不明。埋土中から土器片とサヌカイトの剝片が出土したが図示できない。

62号住居跡（図版10、第48図）

B・Cの2区にあり、64号住居跡を切り、1号住居跡に切られている。東西2.3～2.8m、南北3.6mのやや歪な長方形プランであり、面積は8.8m²。主柱穴は特定できない。埋土中から土器片と黒曜石の剝片が出土した。

出土遺物（第51図1）

土器（第51図1） 半精製の浅鉢片である。



第46図 56・74号住居跡実測図 (1/60)

63号住居跡（図版10、第49図）

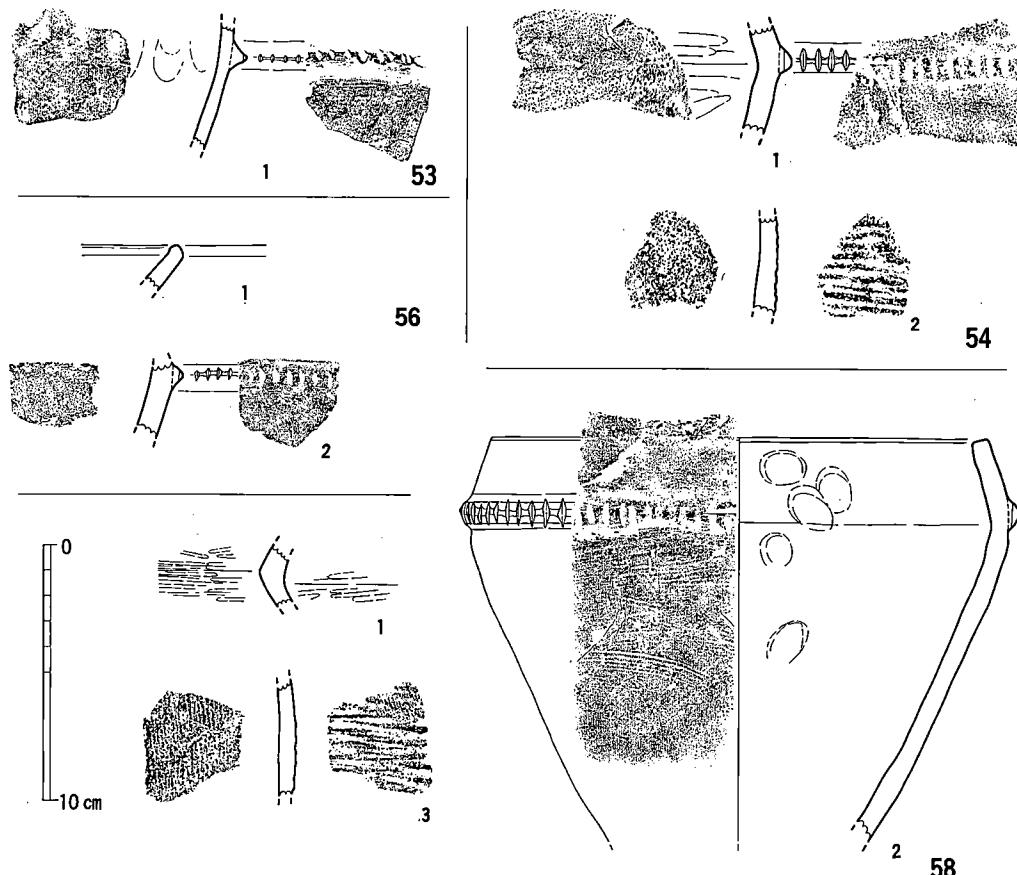
Cの2・3区にあり、64号住居跡を切り、15号住居跡と6号溝に切られている。一辺が3.2～3.7mの台形に近い形状の隅円方形プランであり、面積は復元で 12.1m^2 。主柱穴は特定できない。埋土中から縄文晩期の鉢片が出土したが図示にたえない。

64号住居跡（図版10、第48図）

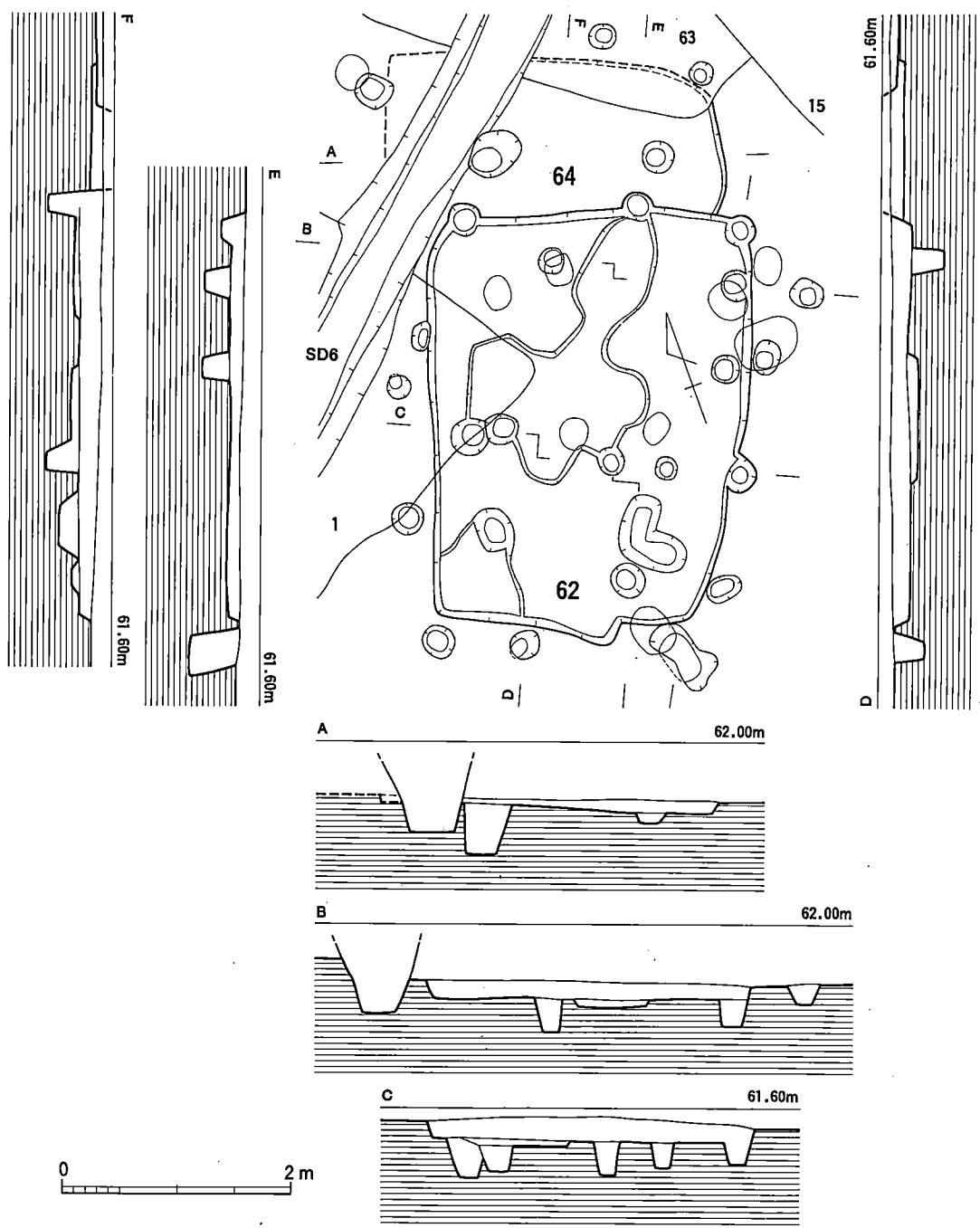
C 2区にあり、62・63号住居跡と6号溝に切られている。東辺の一部と、63号住居跡の下層にて北辺の一部が知られるのみで詳細不明だが、一辺が3m前後の方形プランであったかと思われる。主柱穴は不明。遺物は出土しなかった。

65号住居跡（図版10、第45図）

C 2区にあり、2号掘立柱建物跡と2号溝に切られている。東西2.7m、南北2.1～2.5mほどの小さな不整長方形プランをなし、面積は 5.9m^2 。主柱穴は特定できない。出土遺物はなかった。



第47図 53・54・56・58号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第48図 62・64号住居跡実測図 (1/60)

66号住居跡（図版10、第20図）

C 2区にあり、15号住居跡に切られている。東西2.7mで、南北方向は西辺が2.4mまでわかる。一辺が2.7m前後の小さな方形プランであろう。主柱穴は特定できない。土器片とサヌカイトの剝片が出土した。

出土遺物（図版11）

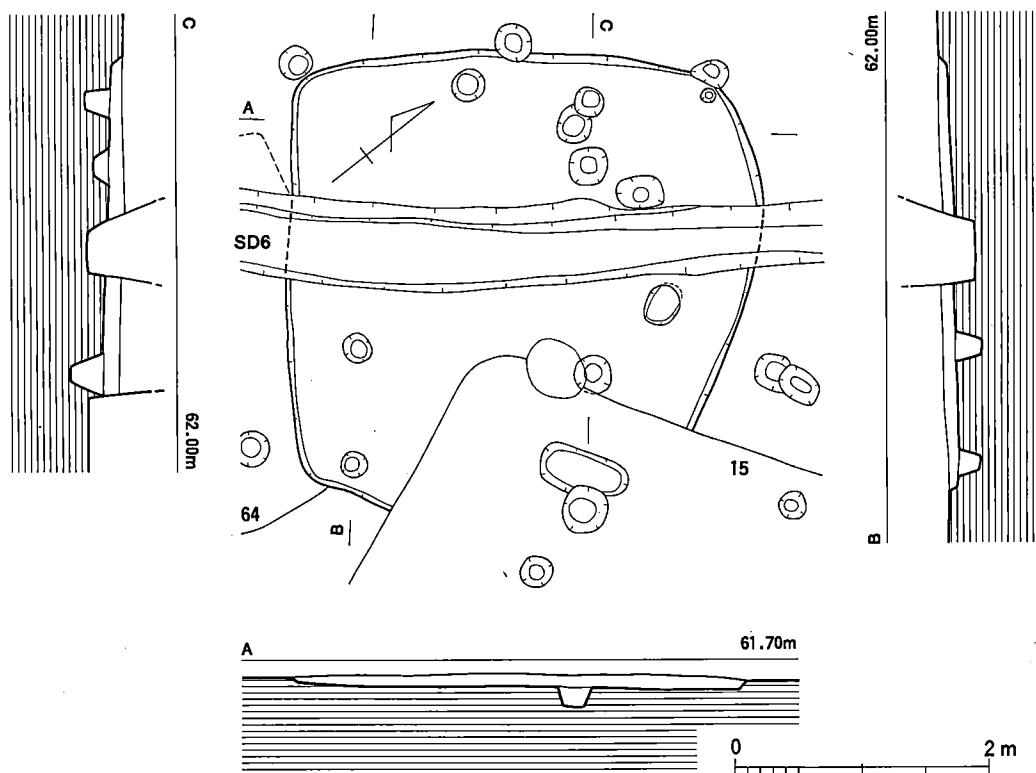
土器（図版11） 口縁の外端部と肩部突帯に刻目を施した甕で、口縁直下と肩部突帯上面には刺突文がある。胴部は器壁がかなり薄い。肩部突帯より下位は煤けている。復元口径21cm。

67号住居跡（図版10、第33図）

C 3区にあり、34号住居跡に切られている。東西1.9~2.1mで、南北方向は西辺が1.4mまでしかわからないが、一辺が2m前後の小さな方形プランであろう。主柱穴は特定できない。土器はなく、黒曜石とサヌカイトの剝片が出土した。

出土遺物（図版26、第100図67）

石器（図版100図67） 黒曜石の使用剝片。



第49図 63号住居跡実測図 (1/60)

68号住居跡（第50図）

C 3 区にあり、6号溝に切られ、かつ北東部は第1トレーニングにかかって失われている。南東辺と南西辺は2mが直線的であるけれども、北西辺は弧を描きながら伸びており、全体としては不整形の小さな長方形プランであろうか。主柱穴は特定できない。出土遺物はなかった。

69号住居跡（第35図）

D 5 区にあり、40号住居跡と2号周溝墓の周溝、そして細い溝に切られている。東辺と南辺が不明だが、南北長2.35mからすれば、一辺が2.3m前後のやや歪で小さな方形プランであったかと思われる。主柱穴は特定できない。出土遺物はなかった。

70号住居跡（第24図）

E・Fの3区にあり、20号住居跡と5号掘立柱建物跡に切られている。東西2.6~2.8m、南北3.2mの長方形プランで、面積は復元で8.1m²。主柱穴は特定できない。埋土中から土器片と石斧が出土した。

出土遺物（図版27、第51図1、103図6）

土器（第51図1） 粗製の鉢で、外面は粗い条痕がのこる。

石器 第103図6は片岩の打製石斧。

71号住居跡（図版9、第50図）

F・Gの2区にあり、72号住居跡と近接するが重複はしていない。東西方向は2.6~2.8mで、南北方向は南辺が遺存せず3.5mまでしかわからないが、ほぼこの規模の長方形プランであろう。面積は復元で9.4m²。主柱穴は特定できない。遺物は出土しなかった。

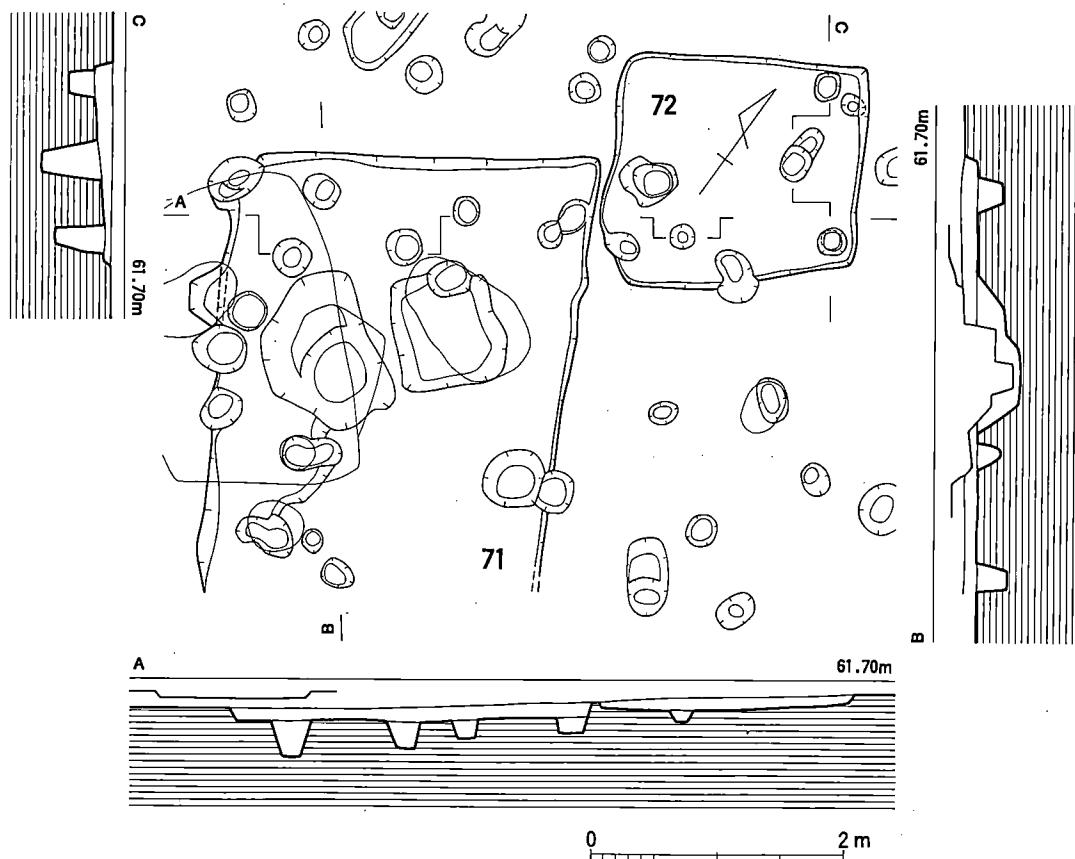
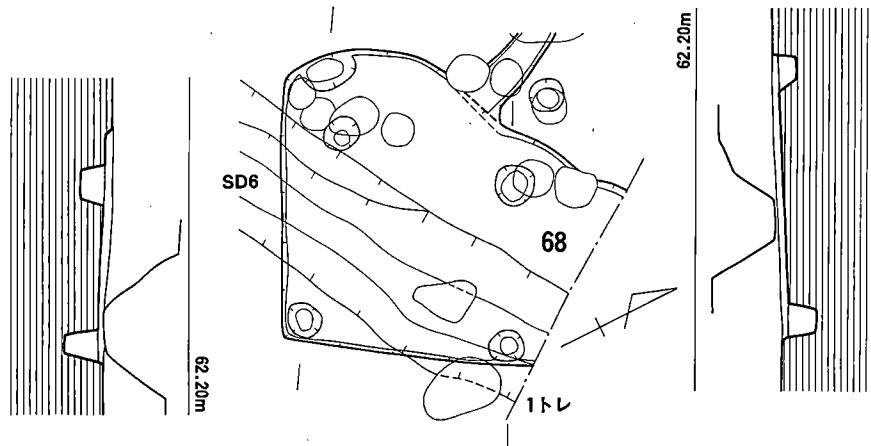
72号住居跡（図版9、第50図）

F・Gの2・3区で、71号住居跡の北にある。東西2m、南北1.6~1.8mの小さな方形プランで、面積は3.1m²。主柱穴は特定できない。遺物は出土しなかった。

73号住居跡（図版9、第44図）

E 4 区にあり、53・54号住居跡に切られている。東西2.1~2.4m、南北3mの隅円長方形プランであるが、南辺は直線部分がないほどに弧を描いている。また内部の北辺から東西両辺にかけては弧状に段が付いている。面積は5.8m²。主柱穴はわからない。土器片とサヌカイトの剝片が出土した。

出土遺物（第51図1）



第50図 68・71・72号住居跡実測図 (1/60)

土器(第51図1) 壺の肩部片で、外面の胴部付近は焼ける。

74号住居跡 (図版9、第46図)

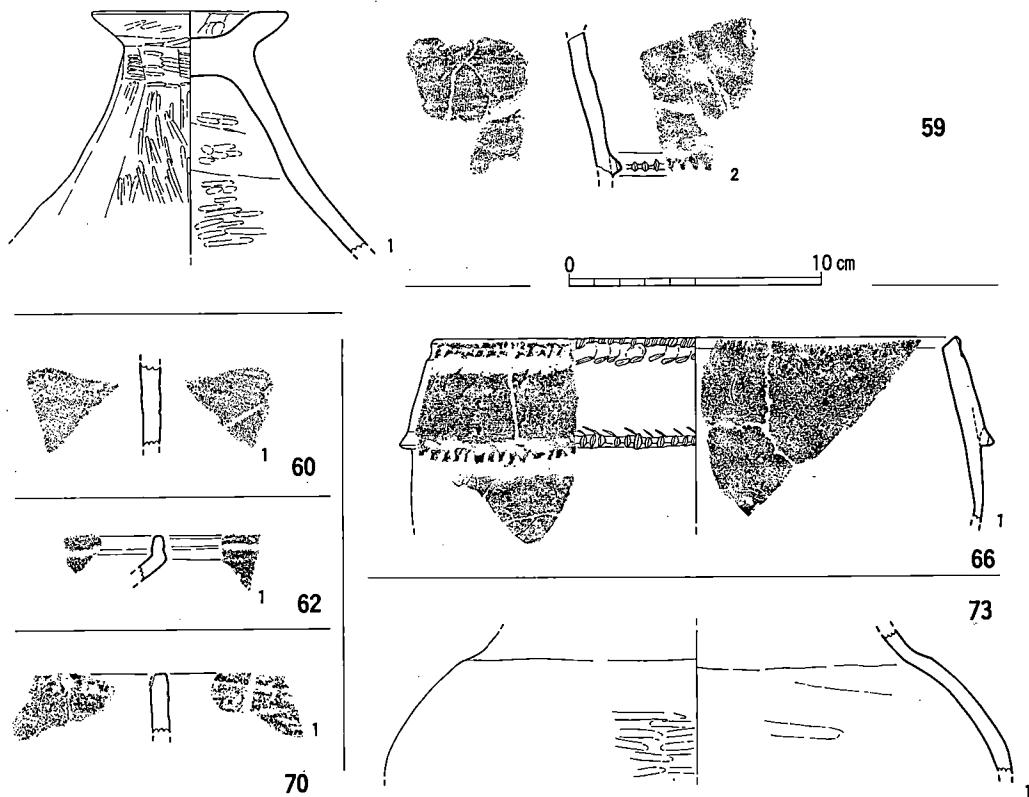
F 4 区にあり、52・53・56号住居跡に切られている。西辺が全くわからないが、東辺が出入りがありながらも2.2mほどなので、およそ一辺がこの規模の小さな方形プランであろう。出土遺物はなかった。

75号住居跡 (図版9、第52・53図)

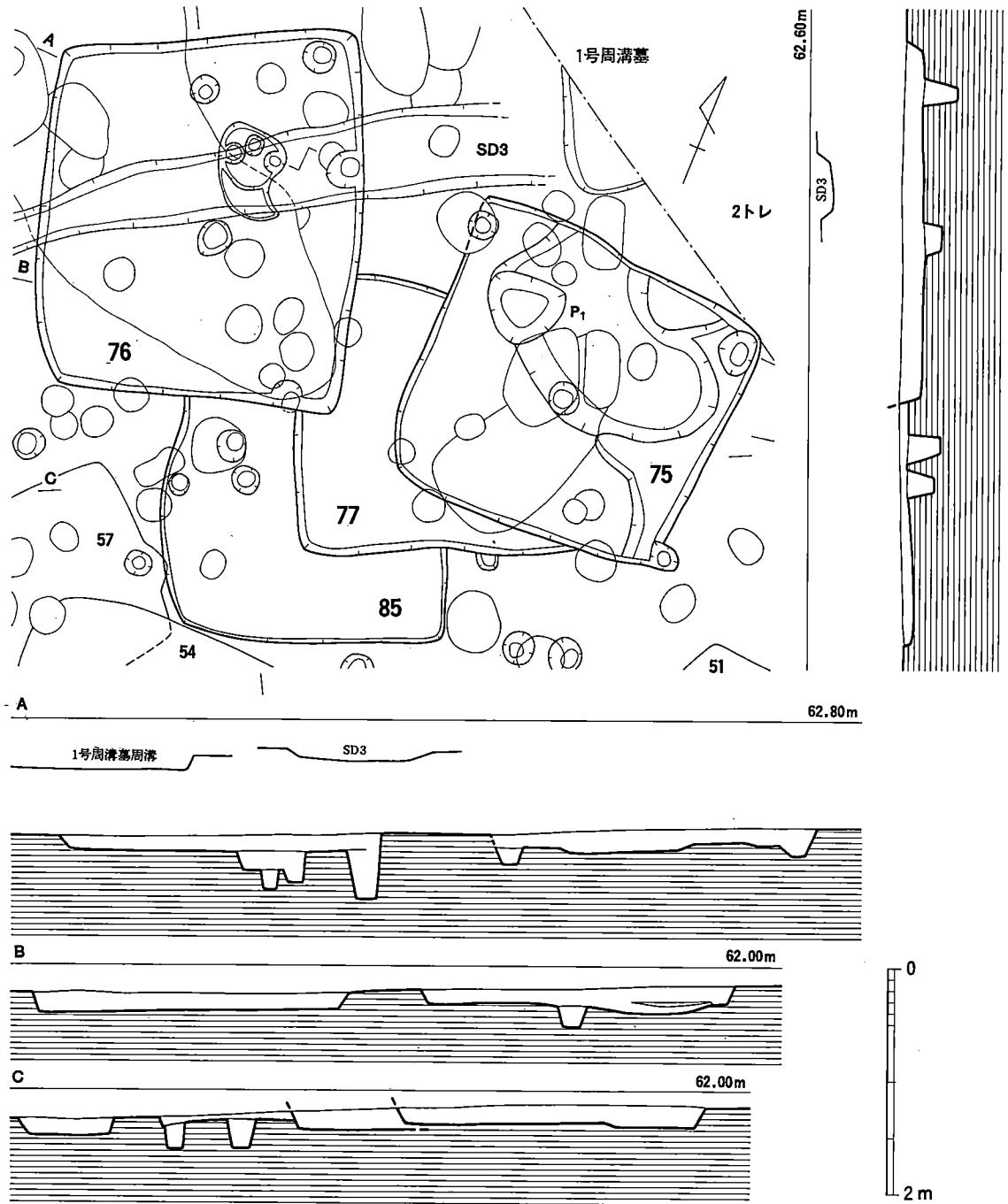
E・F の 4・5 区にあり、77号住居跡を切っている。東西2.5~2.8m、南北2.4~2.7mの方形プランをなし、面積は6.4m²。床面には凹凸がある。西辺寄りの北側に60×70cmの三角形状をした浅い掘込みP1があり、その周辺から土器等が出土した。炉跡の可能性もあるが定かでない。主柱穴はわからない。わりと多くの土器片と石、台石等が出土した。

出土遺物 (図版21・22・29、第54・55図1~10、106・107図22~31、111図10)

土器(第54・55図1~10) 1は大型壺の胴部片で、外面は丹塗り磨研、内面は刷毛目のちナデ

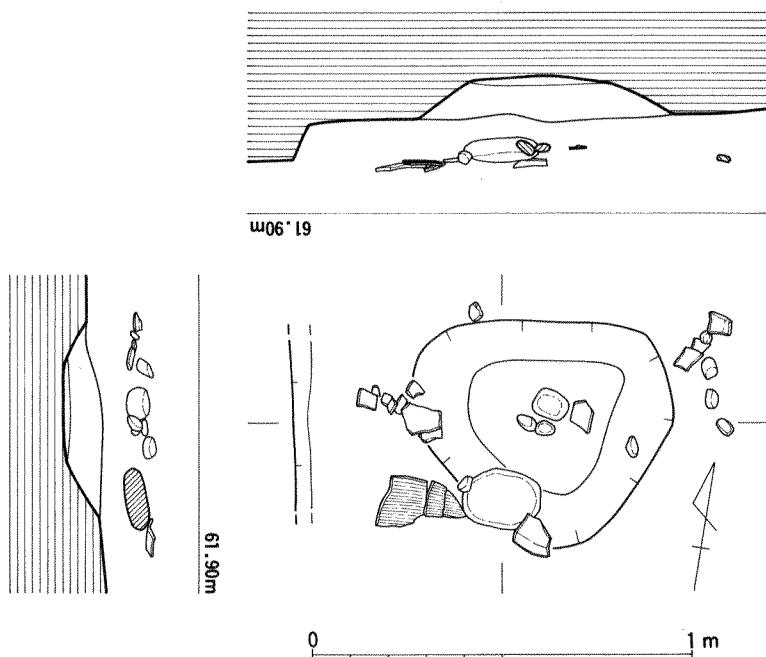


第51図 59・60・62・66・70・73号住居跡出土土器実測図 (1/3)

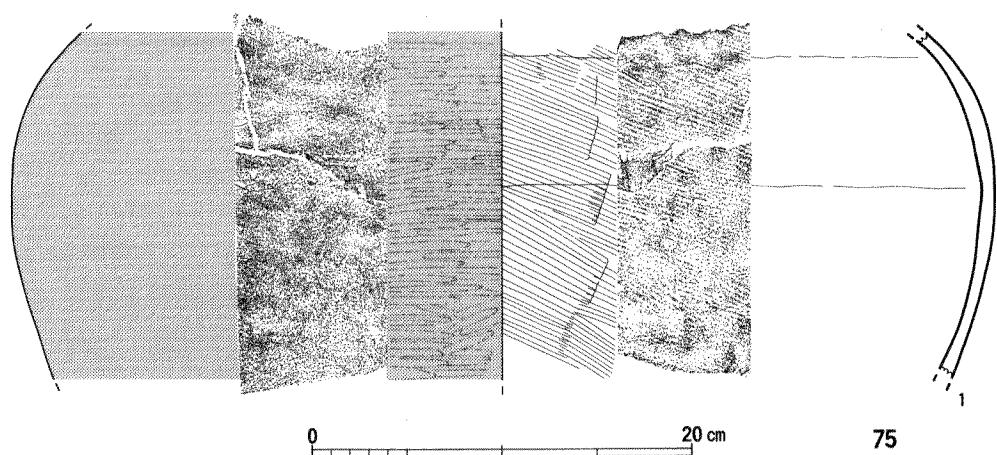


第52図 75・76・77・85号住居跡実測図 (1/60)

を施している。胴部最大径は復元で51.6cm。2~4は壺の底部片で、2は22号住居跡出土品と接合した。4の外面は丹塗りである。5・6は高坏で、両者は同一個体の可能性もあるが、6の方がより風化している。5は坏部が深い。復元口径24.2cm。7は甕の底部であろう。8は鉢か。外面は煤けている。9・10は肩部に刻目突帯を貼り付けた甕で、ともに突帯より下位の部分は黒ずんでいる。10の復元口径は23.3cm。1・2・5はP1周辺から出土した。



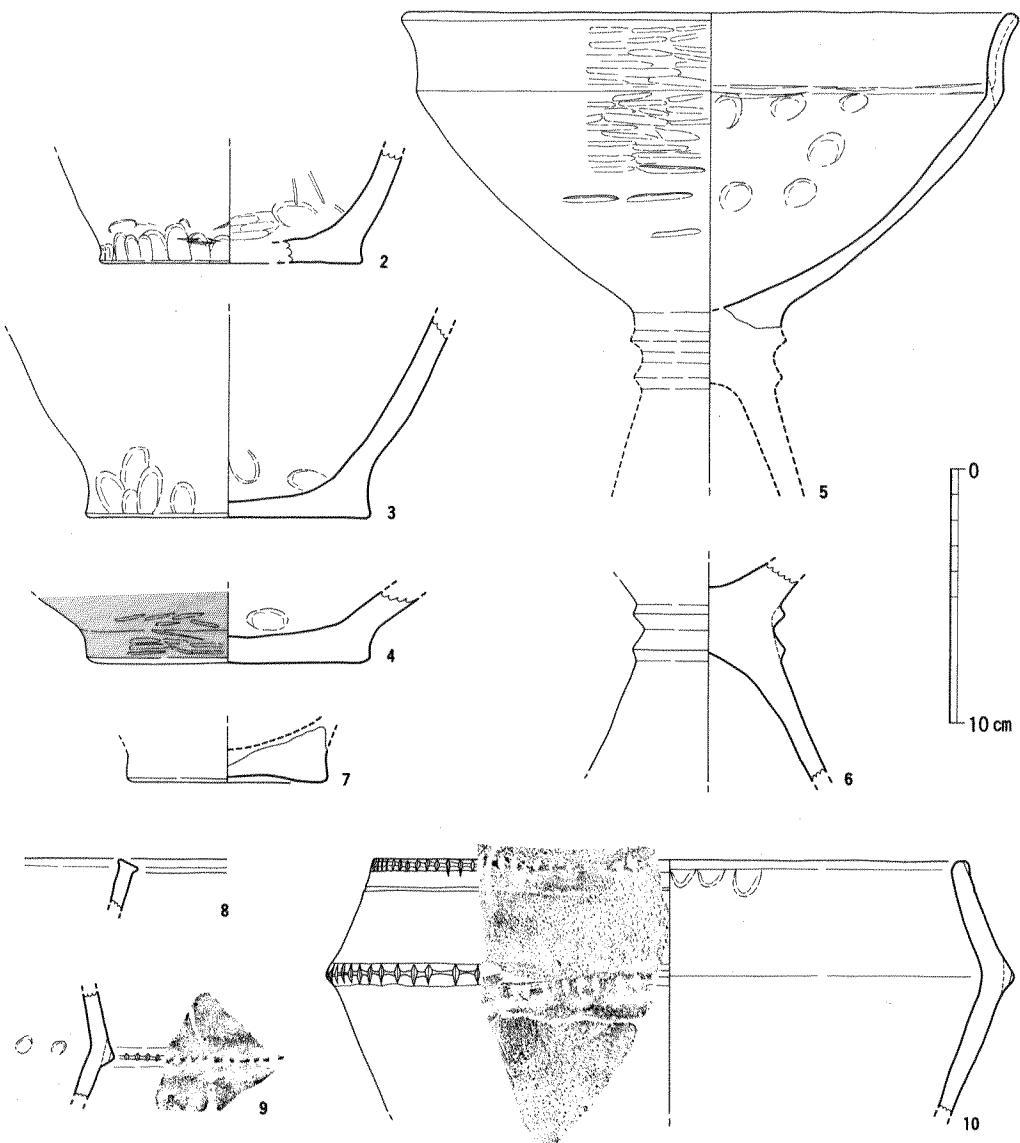
第53図 75号住居跡内炉跡？実測図（1/20）



第54図 75号住居跡出土土器実測図1（1/4）

石器 第106・107図22～31はすり石としておく。22は円柱状のもので、頭部は敲打のち磨れている。23はベンガラかと思われる赤色顔料が所々に付着している。石杵としたものであろうか。26は両頂部に紐掛けした時にすり減ったかと思われる部分がある。錘であろうか。器表の一部は磨れている。27～31も器表が磨れている。30は敲打痕があるので叩石とすべきか。25を除いてP1周辺から出土した。

第111図10は表裏ともに平滑な石で、台石とする。P1周辺の出土。



第55図 75号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)

76号住居跡（図版9、第52図）

Eの4・5区にあり、77・85号住居跡を切り、1号周溝墓の周溝と3号溝に切られている。東西2.5~2.85m、南北3~3.4mの長方形プランをなし、面積は8m²。主柱穴はわからない。土器片が出土したのみである。

出土遺物（第57図1）

土器（第57図1）鉢であろう。粗製。

77号住居跡（図版9、第52図）

E 4 区にあり、85号住居跡を切り、75・76号住居跡に切られている。東西方向は2.5m以上、南北方向は2.25~2.5mが知られるのみで、おそらく東西に長い長方形プランであろう。主柱穴は不明である。出土遺物はなかった。

78号住居跡（図版10、第56図）

E・Fの5区にあり、81・82・83号住居跡を切っている。南西辺は第2トレンチにかかっていて不明だが、北東辺が2.9mなので、ほぼ一辺がこの規模の方形プランであったものと思われる。主柱穴は不明。土器片と黒曜石・サヌカイトの剝片が出土した。

出土遺物（第57図1~4）

土器（第57図1~4）1は刻目突帯の甕で外面はミガキのちナデらしい。2は口唇に刻みを入れ、肩部には刻目突帯が貼り付けられていたであろう。内面はミガキである。3・4は口唇全面に刻みのある甕で、3の外面はミガキを施し精製に近い土器である。4は内外に粗い刷毛目があり、刻目の原体は刷毛目のそれと同じらしい。全体に煤けている。

79号住居跡（図版10、第56図）

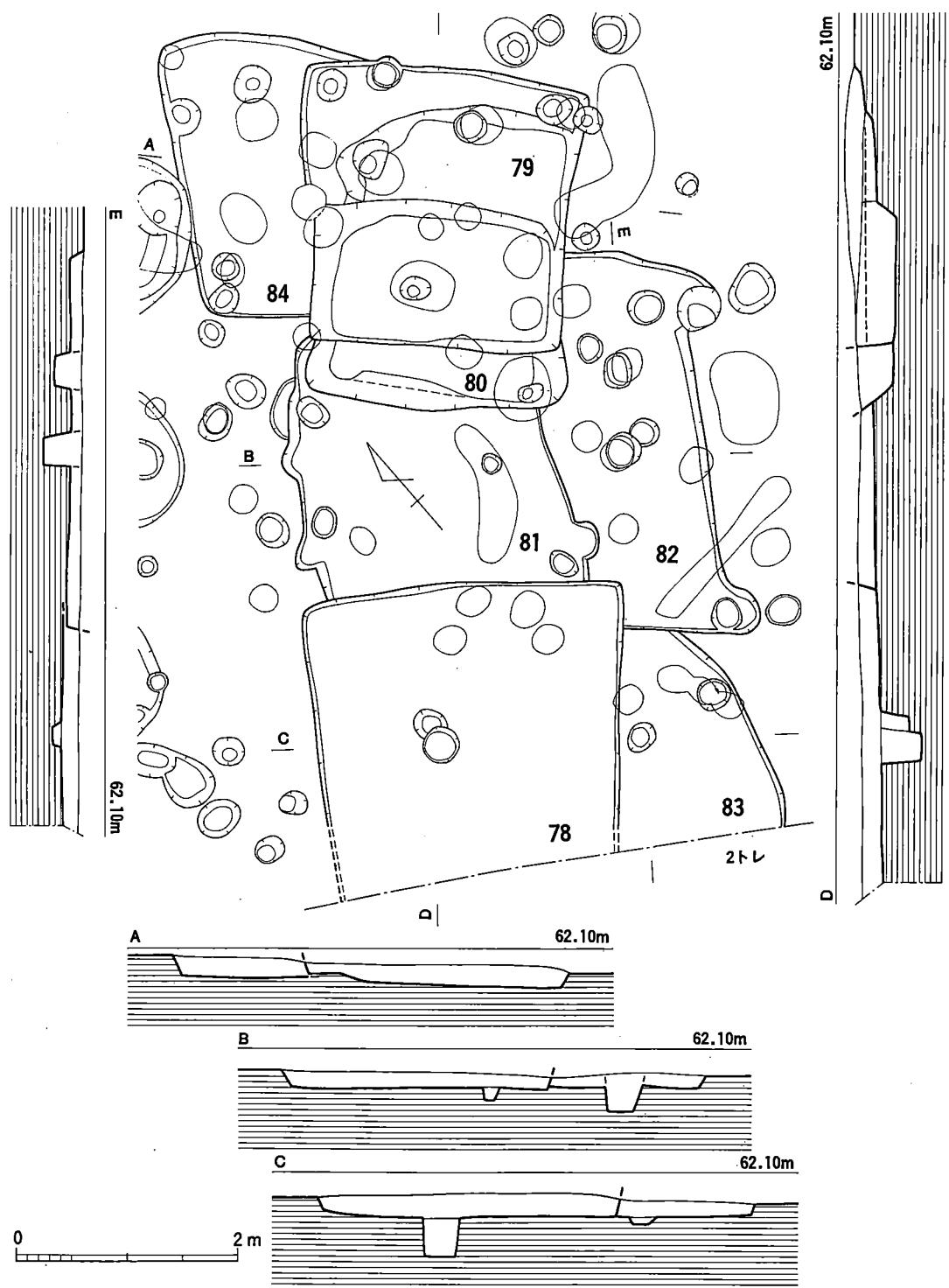
F 5 区にあり、80・81・82・84号住居跡を切っている。一辺が2.5mほどの方形プランで、面積は5.2m²。床面は二段階に段が付いているが、これらは80号住居跡に関わる掘り込みと見られる。主柱穴は不明。土器片が出土した。

出土遺物（第57図1・2）

土器（第57図1・2）1は口縁と肩部に刻目突帯を貼り付けた甕で、外面の突帯より下位は煤けている。復元口径24cm。2も甕で、突帯の刻みは浅い。外面は煤けている。

80号住居跡（図版10、第56図）

F 5 区にあり、81・82号住居跡を切り、79号住居跡に切られている。南西辺の2.35mしかわからないが、79号住居跡の項で述べたように、その下層の掘り込みがこの住居のものとすれば、



第56図 78・79・80・81・82・83・84号住居跡実測図 (1/60)

北東-南西方向が2.7mほどの長方形プランであったかと思われる。主柱穴は不明。土器片と黒曜石の剝片が出土したが図示にたえない。

81号住居跡（図版10、第56図）

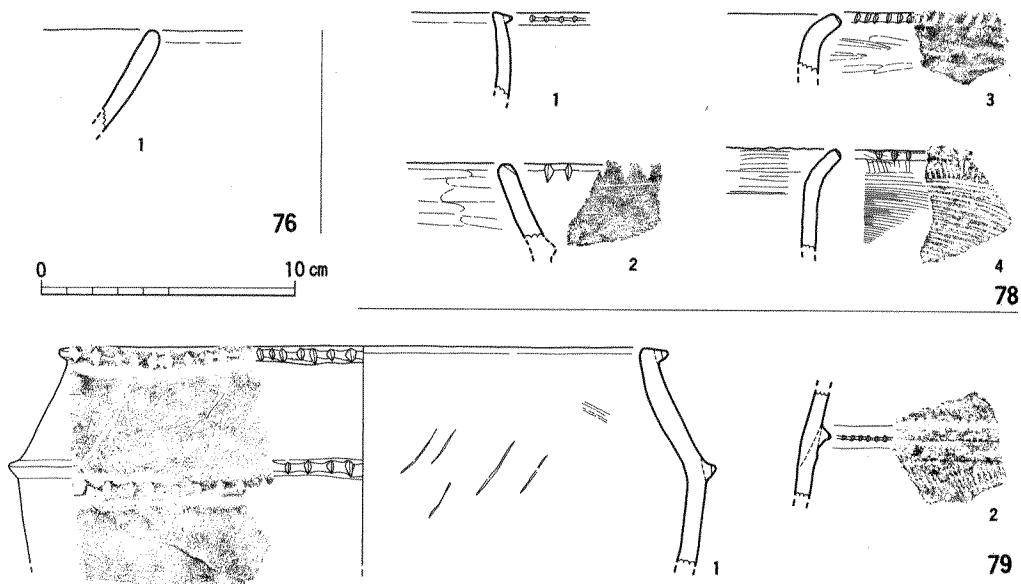
F 5 区にあり、82号住居跡を切り、78・79・80号住居跡に切られている。北西-南東方向の長さが2.25~2.4mで、北東-南西方向が2.4m以上ということしかわからないが、北東-南西方向に長い長方形プランであったものと思われる。主柱穴は不明。土器片1点が出土したが図示にたえない。

82号住居跡（図版10、第56図）

F 5 区にあり、83号住居跡を切り、78・79・80・81号住居跡に切られている。南西辺の長さが3.3mであり、西側へ1.4m以上伸びてゆくことは詳細不明だが、おそらく一辺が3.3mほどの方形プランであったものと思われる。主柱穴は不明。出土遺物はなかった。

83号住居跡（図版10、第56図）

F 5 区にあり、78・82号住居跡に切られ、第2トレンチでも削られてしまった。弧状になつた東辺の長さ2mがわかるのみで詳細は不明。出土遺物はなかった。



第57図 76・78・79号住居跡出土土器実測図 (1/3)

84号住居跡 (図版10、第56図)

F 5・6 区にあり、79・80号住居跡に切られている。北西辺の長さが2.5mなので、おそらくこの長さを一辺とする方形プランであろう。主柱穴は不明。外面が丹塗りの甕の破片が出土したのみである。これは図示にたえない。

85号住居跡 (図版9、第52図)

E 4 区にあり、75・76・77号住居跡に切られている。東西方向が2.3~2.5mで、南北方向は2m以上となるが、おそらく一辺が2.5m前後の方形プランであろう。主柱穴は不明である。出土遺物はなかった。

2 土坑・S X

この時期に属する土坑としたのは4・12・15・18・19号土坑の5基である。これらは1カ所に集中するではなく、調査区内に分散して位置する。またS Xとした不明遺構もここで触れる。

4号土坑 <SK 4> (図版13、第58図)

D 2 区の北端近くにある。短軸86cm、長軸178cmの長楕円形プランをなし、深さは最大17cmと浅い。主軸方位はN-68.5°-E。白灰色粗砂層を切り込んでおり、埋土は一部に炭化物が混ざった黒茶褐色砂質土であった。床面の西端部に径23~30cmで深さ30cmのピットが存する。東端に近く、大きめの玄武岩かと思われる石材が上面に存した。これをもって支石墓の下部遺構の可能性もあるものと捉えているが断定はできない。上面の石の周辺から土器片とサヌカイトの鏃・剝片、内部埋土中から黒曜石とサヌカイトの剝片が出土した。

なお、西端部でこの土坑を切っているピットがあるが、この中からは骨片が出土している。

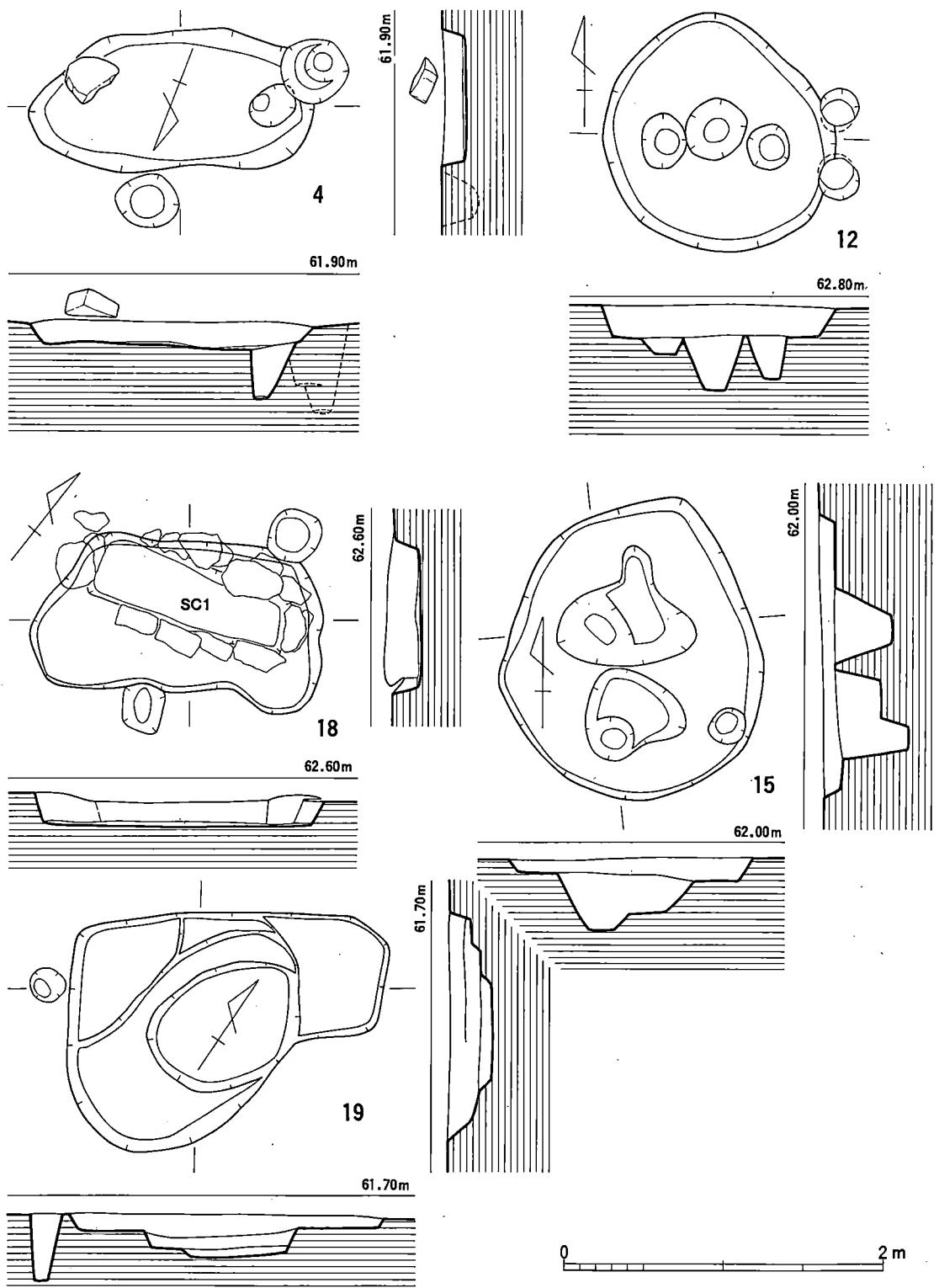
出土遺物 (図版24、第60図1・2、98図22)

土器 (第60図1・2) 1は椀形に近い鉢の破片である。2も鉢の胴部片で、内外とも条痕のちナデを施している。いずれも上面から出土した。

石器 第98図22はサヌカイト製の鏃である。

12号土坑 <SK 12> (図版3、第58図)

E 6 区の中央付近にある。径145~150cmの円形プランをなし、深さは最大20cmと浅い。底面に3個のピットがある。縄文晩期の鉢片2点が出土したが図示にたえない。



第58図 4・12・15・18・19号土坑〈SK 4・12・15・18・19〉実測図(1/40)

15号土坑 <SK15> (図版7、第58図)

D 4 区の東南隅付近で、46号住居跡の西隣にあり、S X 3 に切られている。短軸167cm、長軸190cmの楕円形プランをなし、深さは最大14cm しかなく浅い。底面に3個のピットがある。縄文晚期の鉢片と弥生前期の甕片、サヌカイトの剝片が出土したが図示にたえない。

18号土坑 <SK18> (図版8、第58図)

E 6 区の中央西端付近、1号石棺墓 (SC 1) の下部にて検出された。95×180cm ほどの不整な隅円長方形プランをなし、深さは最大20cm と浅い。主軸方位はN-50°-E。土壙墓の可能性がある。縄文晚期の鉢片2点が出土したが図示にたえない。

19号土坑 <SK19> (第58図)

B 2 区にあり、1号住居跡に切られている。短軸146cm、長軸200cm ほどの不整形プランで、深さは最大26cm と浅い。突帯文の甕が出土した。

出土遺物 (第60図1)

土器(第60図1) 鉢形に近い形状の甕で、口縁の貼り付け突帯は丸みを帯びている。刻みの入れ方は鋭い。復元口径26cm。

S X 1 (図版8、第59図)

C 6 区にある。2トレンチ北西端部に接している。東西160~190cm、南北230cm ほどの五角形に近い長方形プランで、深さは130cm くらいに復元しておくが明確でない。最上層に石があった。土器のほかに台石や片岩石斧の破片も出土した。上層では混入の鉄器も出土した。

出土遺物 (第60図1~11)

土器(第60図1~11) 1~3は精製の鉢で、3は復元口径28cm。4~11は粗製の鉢で、6は波状口縁になるかもしれない。8は焼成前の穿孔がある。10は外面に細い線刻がある。11はつくりが荒々しい。

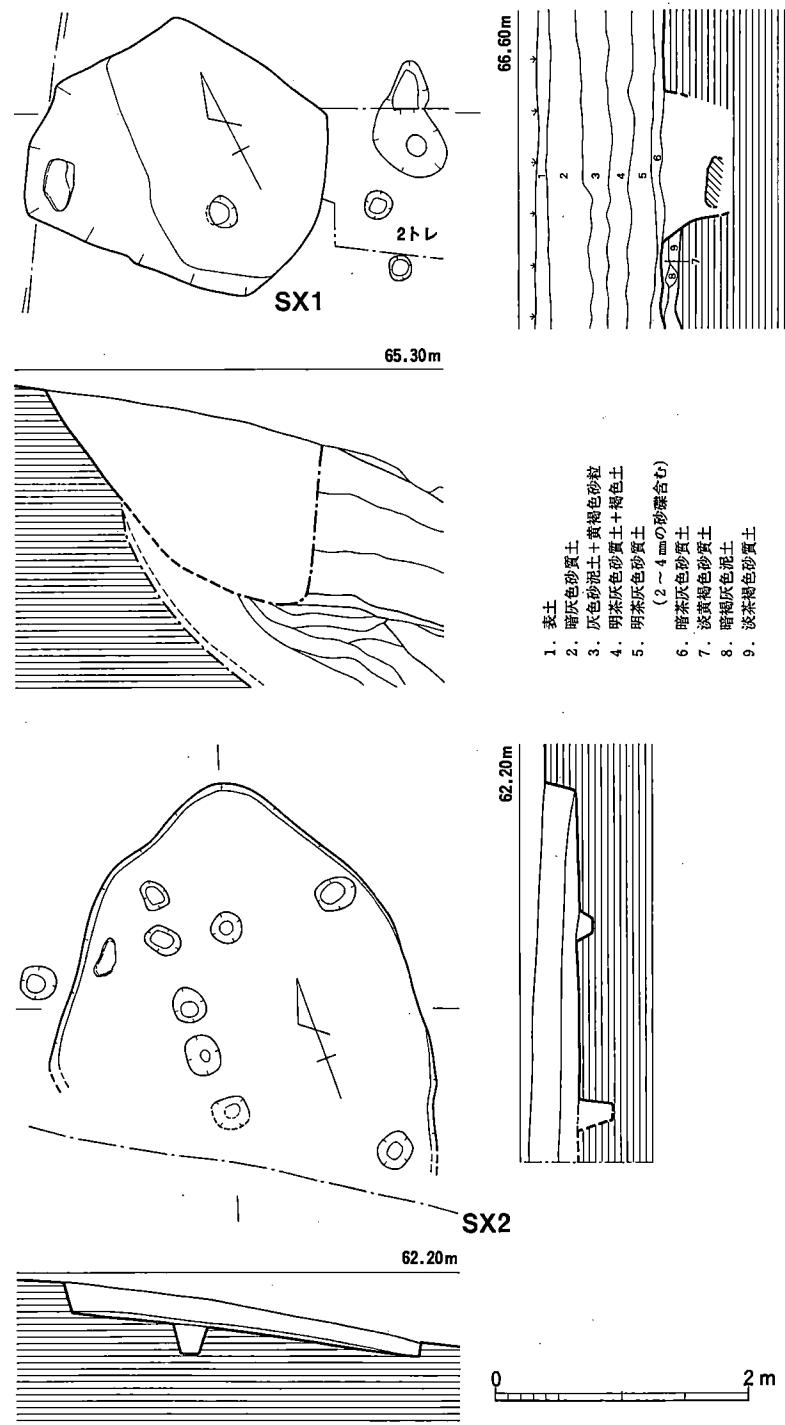
S X 2 (図版8、第59図)

D 6 区にあり、2トレンチで南半を断ち切られている。東西310cmで、南北は300cmまでが残存する。楕円形プランであろうか。深さは最大37cm。土器片のほか黒曜石・サヌカイトの剝片、台石が出土した。

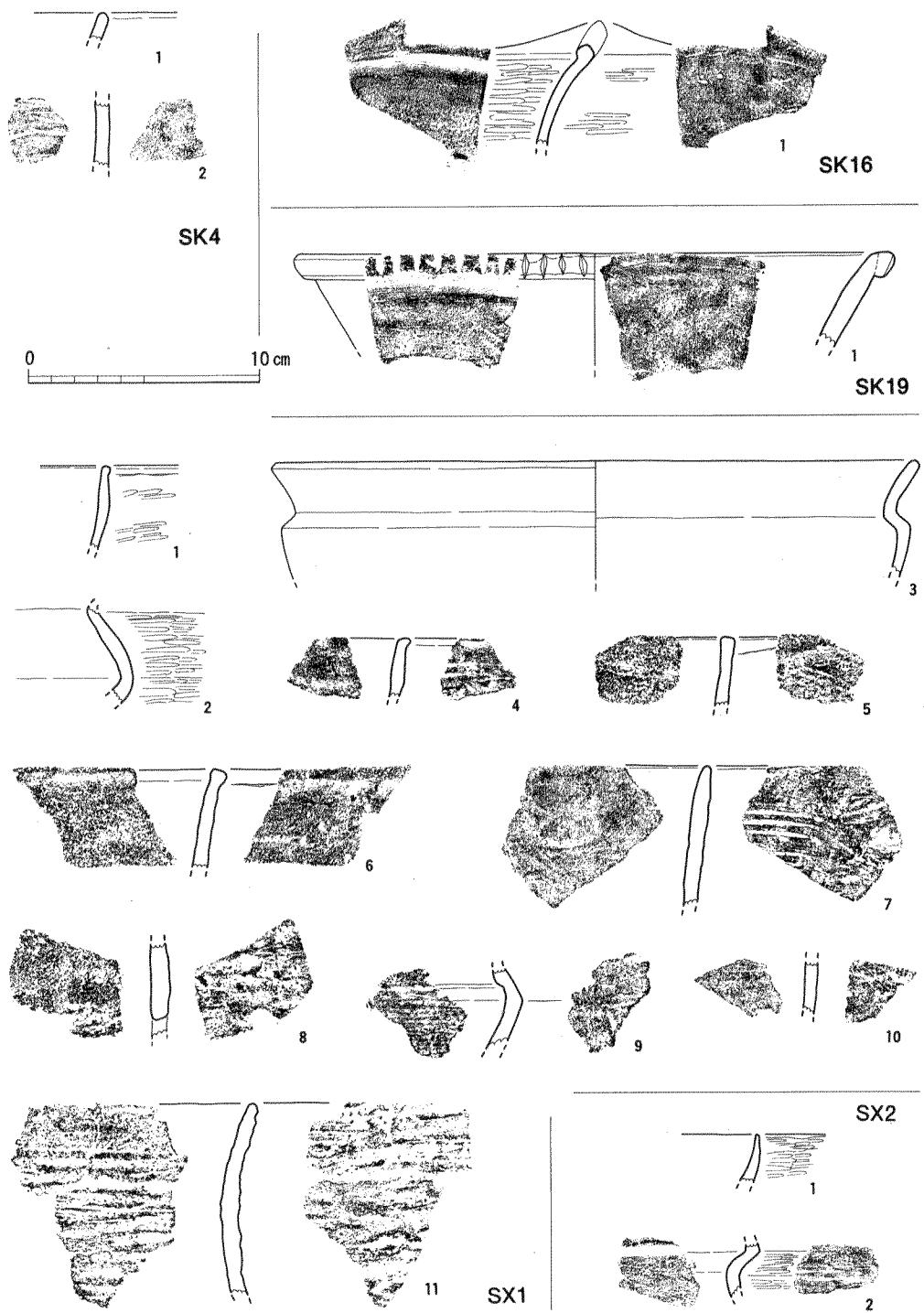
出土遺物 (第60図1・2、112図15)

土器(第60図1・2) 1は精製の鉢で碗に近い形状であろう。2は半精製の鉢。

石器 第112図15は少し湾曲した細長い台石で、上面は平滑である。



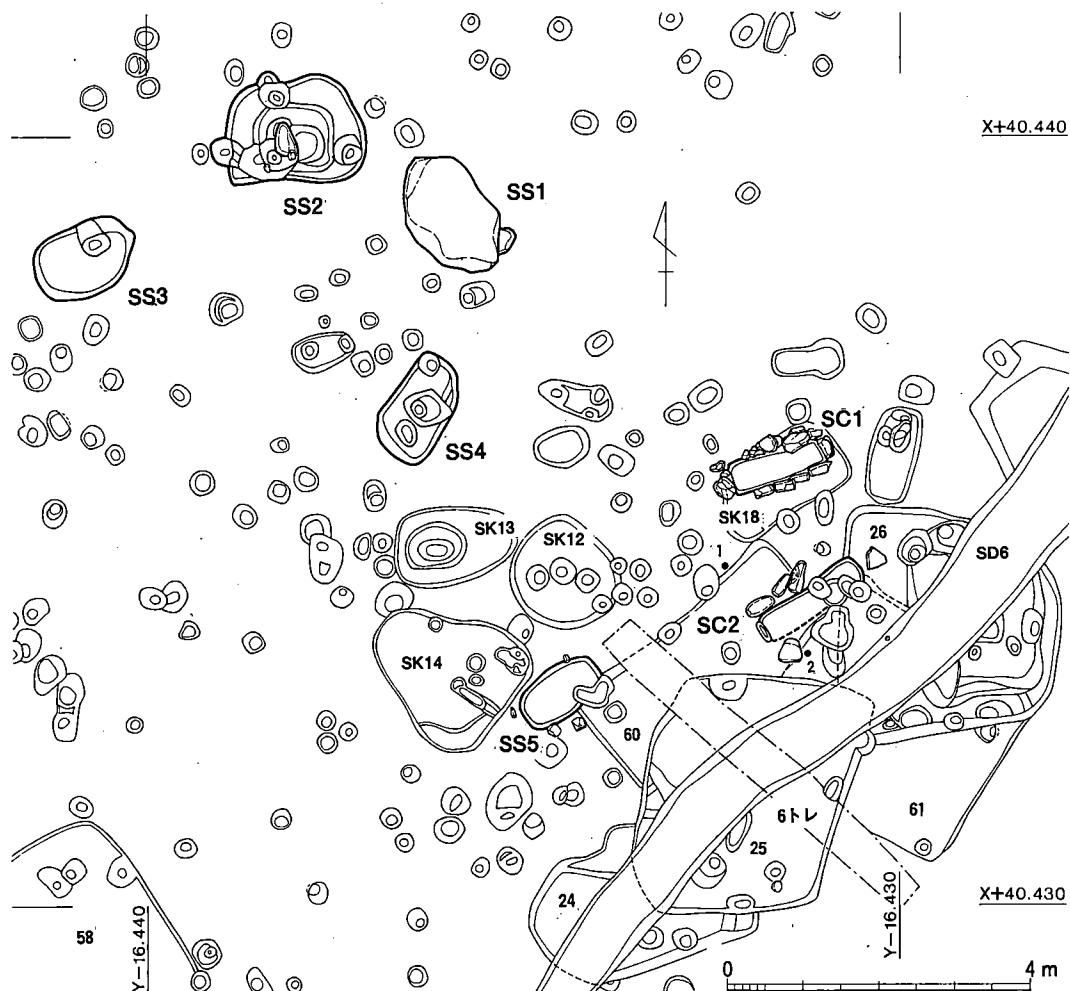
第59図 S X 1・2 実測図 (1/60)



第60図 4・16・19号土坑〈SK4・16・19〉、SX1・2出土土器実測図 (1/3)

3 支石墓 (図版3・4・8・10、第61図)

調査区の北側で、当初Ⅲ区としていた所で検出された。上石が遺存していた1号とその北西にある2号を要に扇形に、西側に3号、南側に4号があり、やや南に離れて5号が存する。上石の存した1号はもとより支石墓として間違いない。それ以外については、重機による遺構検出時に一度石を排除したとみなされる3号もまた間違いないところであるが、2・4・5号は早い時期に（それがいつの時点であるかは判断できないが）上石が除去された結果としての支石墓の下部遺構として捉えたものである。後述する石棺墓は、1・4号支石墓を結ぶラインの東側に位置している。なお、これらから40mほど南西にある4号土坑も支石墓の下部遺構の可能性があることは前述した。



1号支石墓 <SS 1> (図版11、第62図)

Eの6区と7区にまたがって存する。上石は長さ170cm、幅115cmの亀甲形の平面形をしたもので、玄武岩かと思われる。厚さは33cm。主軸方位はN-37°-W。支石は東側に長さ41cm、幅31cm、厚さ14cmの玄武岩が1個だけ存した。

下部遺構は2基の土坑が重複して検出された。西側の第1主体部は内法で長さ132cm、幅67cmの隅円長方形プランであり、深さは35cm。床面の西側に偏して径18cm、深さ14cmの小ピットがある。第1主体部を切ってその東に営まれている第2主体部は内法で長さ106cm、幅42cmの隅円長方形プランであり、深さは46cm。東辺についている段はこの遺構を切り込んだ別のもの名残であるらしい。埋土中に礫が2個あった。第1・2主体部とも木棺を埋置したような痕跡は確認できなかった。

第1主体部内埋土中からは外面丹塗りを含む壺、鉢、浅鉢、黒曜石・サヌカイトの剝片、床面のピットからは鉢、第2主体部からは鉢、甕が、いずれも小破片で出土した。

出土遺物 (図版22、第66図1~5)

土器(第66図1~5) 1は半精製の浅鉢。2は内外に条痕のある鉢。3は脚台の付く鉢とするが蓋の可能性もある。内面は煤けている。4はいわゆる黒色磨研の鉢。5は鉢もしくは甕の口縁に縦に付く耳であろう。

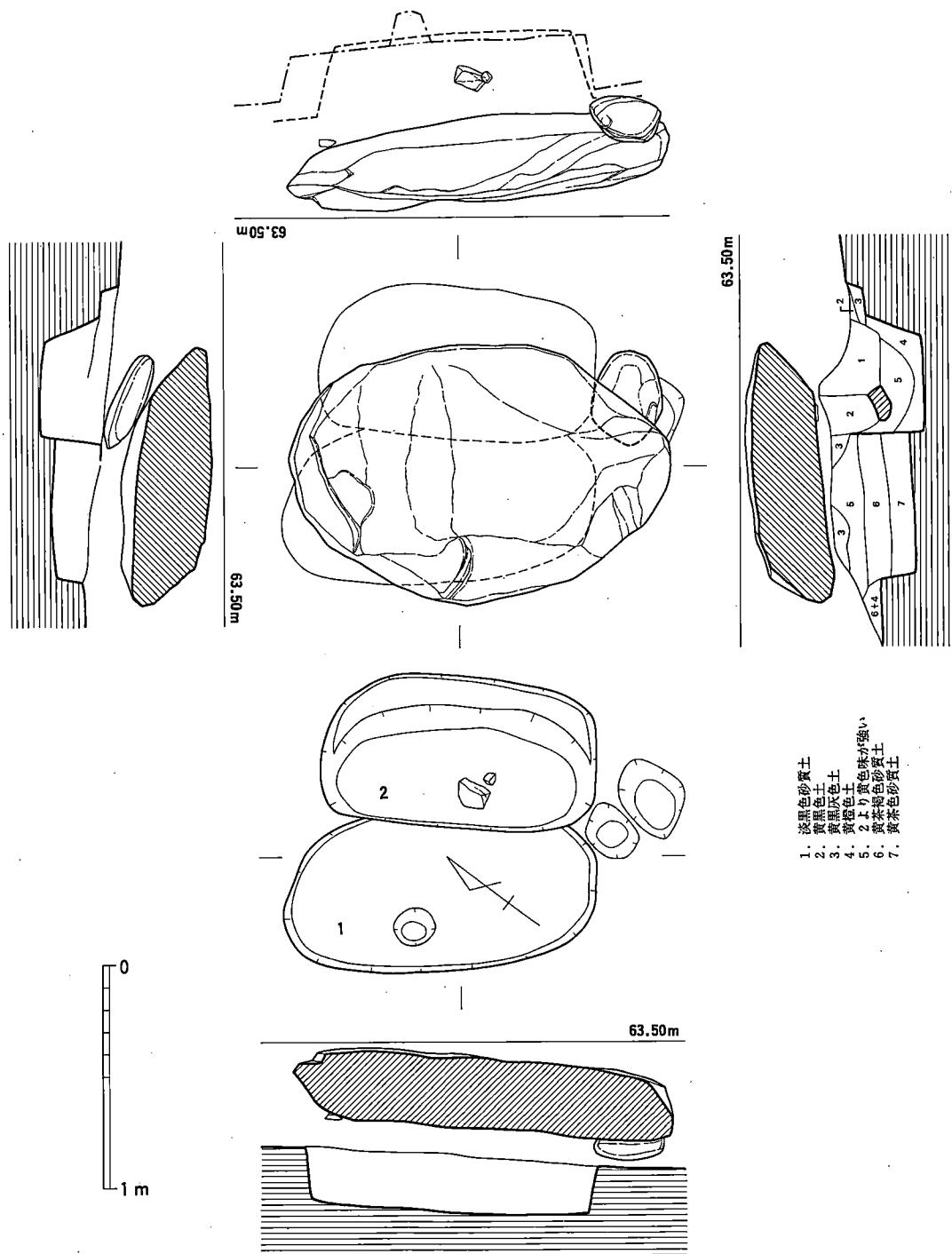
2号支石墓 <SS 2> (図版12、第63図)

E 7区の南端に存し、1号支石墓の北西に位置する。上石はすぐではなく、下部遺構は上面で東西183cm、南北137cmの隅円長方形プランの土坑である。主軸方位はN-89°-W。これは内部が3段掘りとなっており、内法での計測値は、1段目が長さ170cm、幅131cm、2段目が長さ93cm、幅72cm、3段目が長さ57cm、幅36cmとなり、2段目までの深さは45cmで、3段目までの深さは73cmであった。2段目の西寄りに長さ43cm、幅30cm、厚さ20cmの石があり、そのすぐ上面に丹塗り土器があった。この石が支石の1個であったものと思われる。2段目までが主体部としての下部遺構であり、3段目はより古い遺構と捉えるべきだろう。

下部遺構内からは壺、鉢、甕の破片と黒曜石剝片、木炭が出土した。

出土遺物 (図版22、第66図1~3)

土器(第66図1~3) 1は丹塗磨研の大型壺の底部で、若干の上げ底となる。胴部との境界は明確な稜を捉えにくいが、底径は10.2cmを測る。底部と胴部との境の接合面は外面において少し凹線状にくぼむ所がある。外面は底面が板状圧痕の上をナデ、胴部は横ヘラミガキ、内面はナデである。外面のみ丹塗磨研であるが丹はかなりはげ落ちている。この土器は3号支石墓の下部遺構、2・7トレンチ間B層出土の破片と接合した。2は壺であろうか。外面に刷毛目が残っている。3は粗製の鉢で外面の条痕は粗い。



第62図 1号支石墓〈SS 1〉実測図 (1/30)

3号支石墓 <SS 3> (図版12、第63図)

D 6区の北東端に存し、2号支石墓の西南に位置する。いまは下部遺構しかないが、重機による遺構検出時に除去してしまった長さ120cm、幅85cm、厚さ約20cmの花崗岩の扁平石は、おそらくこれの上石であったものと思われる。支石については存したかどうかわからない。

下部遺構は内法で長さ118cm、幅81cmの楕円形プランの土坑であり、主軸方位はN-67°-E。深さは30cm。木棺の痕跡は認められなかった。2号支石墓の出土品と接合した壺、鉢、甕と小丸石、片岩、黒曜石剝片等が出土した。

出土遺物 (第66図1~6)

土器(第66図1~6) 1・2は精製の鉢。3は粗製の鉢である。4は脚台としておく。内面は黒ずんでいる。5は円筒形支脚状で穿孔のあるものとして図示するが明確でない。内面はしづら痕がある。6は甕の底部であろう。

4号支石墓 <SS 4> (図版13、第64図)

E 6区で1号支石墓の南に位置する。上石はすでになく、下部遺構しかないが、坑の中央と北端をピットに切られている。内法で長さ120cm、幅70cmの不整な長方形プランであり、主軸方位はN-31°-E。深さは15cm。鉢の破片と黒曜石・サヌカイトの剝片が出土した。

出土遺物 (第66図1~3)

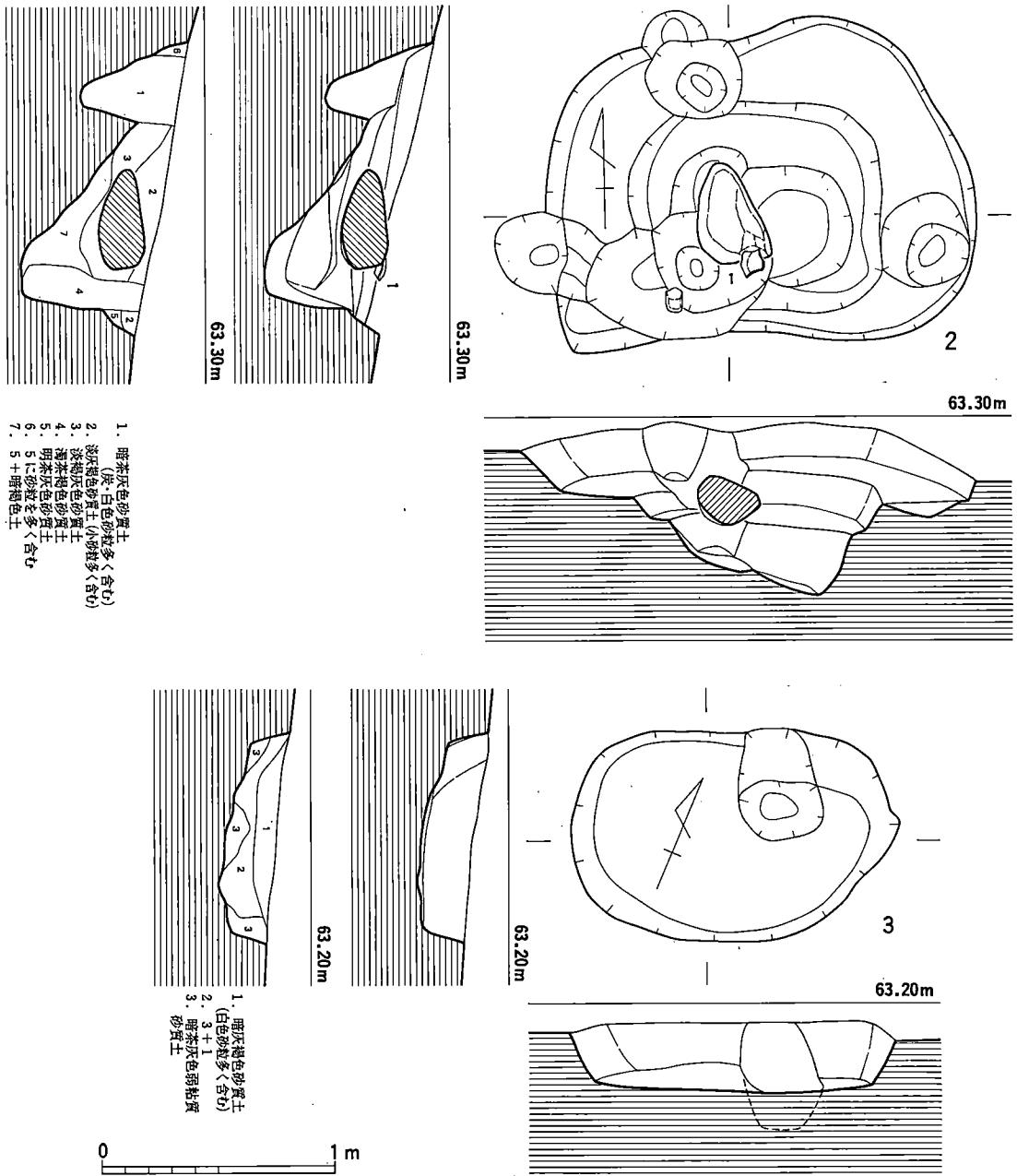
土器(第66図1~3) 1・2は精製の鉢。2はきわめて硬質である。3は粗製の鉢。

5号支石墓 <SS 5> (図版13、第64図)

E 6区で4号支石墓の南東に位置する。上石はすでになく、下部遺構しかない。坑の東側をピットに切られている。内法で長さ105cm、幅54cmのやや胴張りのある長方形プランで、主軸方位はN-51.5°-E。深さは17cm。坑の外に礫石が4個あり、とくに東側にある2個は支石であった可能性がある。出土遺物はなかった。

4 石棺墓または木棺墓 (図版4・8・10、第61図)

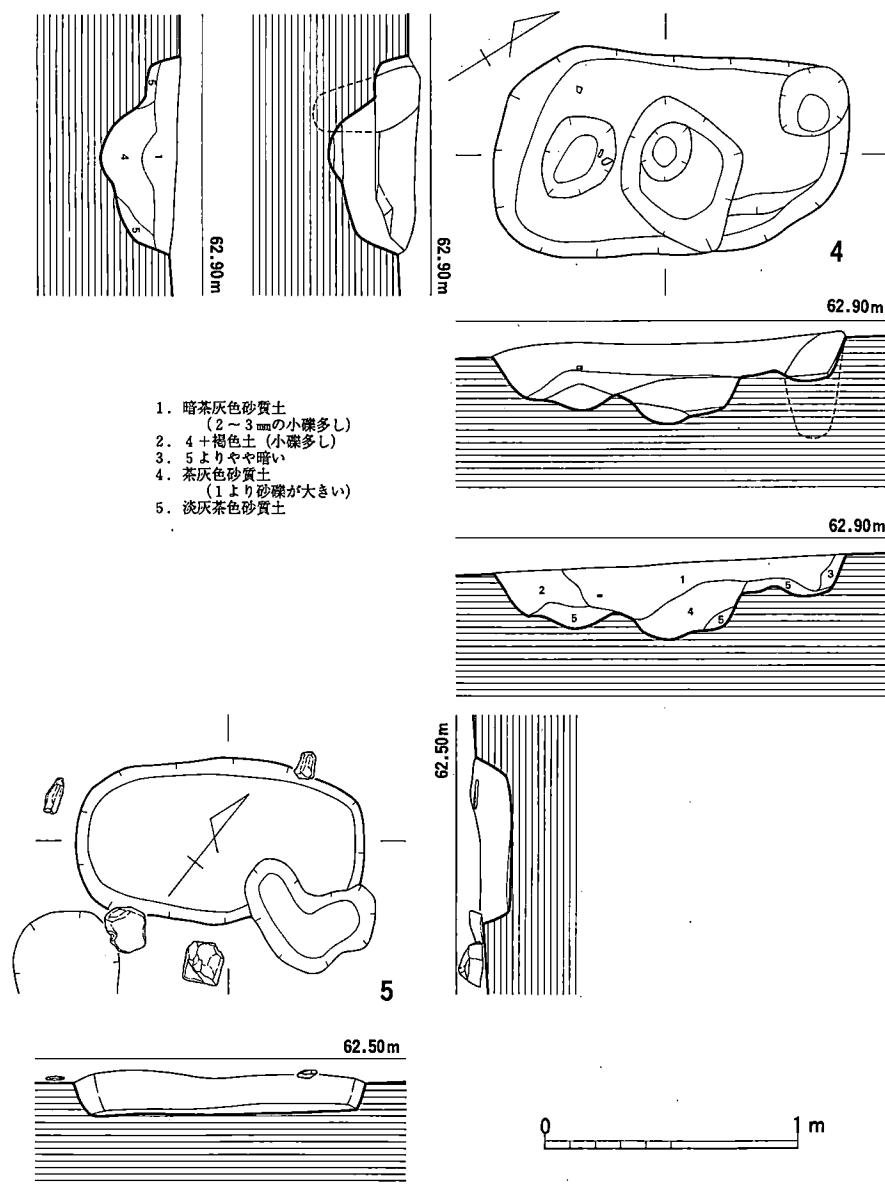
細長い長方形の坑の周囲に石組みのあるもので、調査中から石棺墓としていたが、通常の弥生時代石棺墓のように小口・側板ともに板石を立てて構築しているわけではない。これは木棺墓の裏込め石のみが遺存している状態を示している可能性が高いと思われるが、ここでは表示は石棺墓のままとしておく。



第63図 2・3号支石墓〈SS 2・3〉実測図 (1/30)

1号石棺墓 <SC 1> (図版14、第65図)

E 6区で4号支石墓の東に位置する。18号土坑を切っている。壙は東西に長く、内法で長さ120cm、小口幅は東が26cm、西が36cmで、主軸方位はN-72.5°-E。西側が広いので、こちらが頭位であろう。壙底レベルも西側の方が高い。この壙の周囲に角張った礫石が置かれているが、それは壙底から立て並べられたものではない。床面に木棺材を打ち込んだような痕跡はなかつ



第64図 4・5号支石墓 <SS 4・5> 実測図 (1/30)

たので、板材を組み合わせて棺とし、その背後に礫石を詰め込んでいたものだろう。残存する礫石の最上面から壙底までの深さは45cm。内部から鉢の破片が出土している。またこれの西南部、2号石棺墓との間で小壺が出土している（第61図）。これは1・2号いずれかの石棺墓の棺外副葬品と考えられるが、ただ両方の棺中心部からの距離は2号石棺墓の方が近い。

出土遺物（図版22、第66図1～4）

土器（第66図1～4） 1は2号石棺墓との間の西寄りの所で出土した小壺である。良質の精製土器で、内面の頸部以外は黒塗りがなされ、ミガキが施されているので黑色磨研土器と称してよい。いまは黒塗りの2/5ほどが禿げている。外面は口縁部と頸部との境に沈線が1条あり、その中は丹塗りを施している。頸部と肩部の境にも3～4条の沈線があり、その最上段のものは丹塗りが施される。いわゆる彩文土器である。外面には敲打によるものと思われる小さなクレーター状の陥没がある。口径7.8cm。

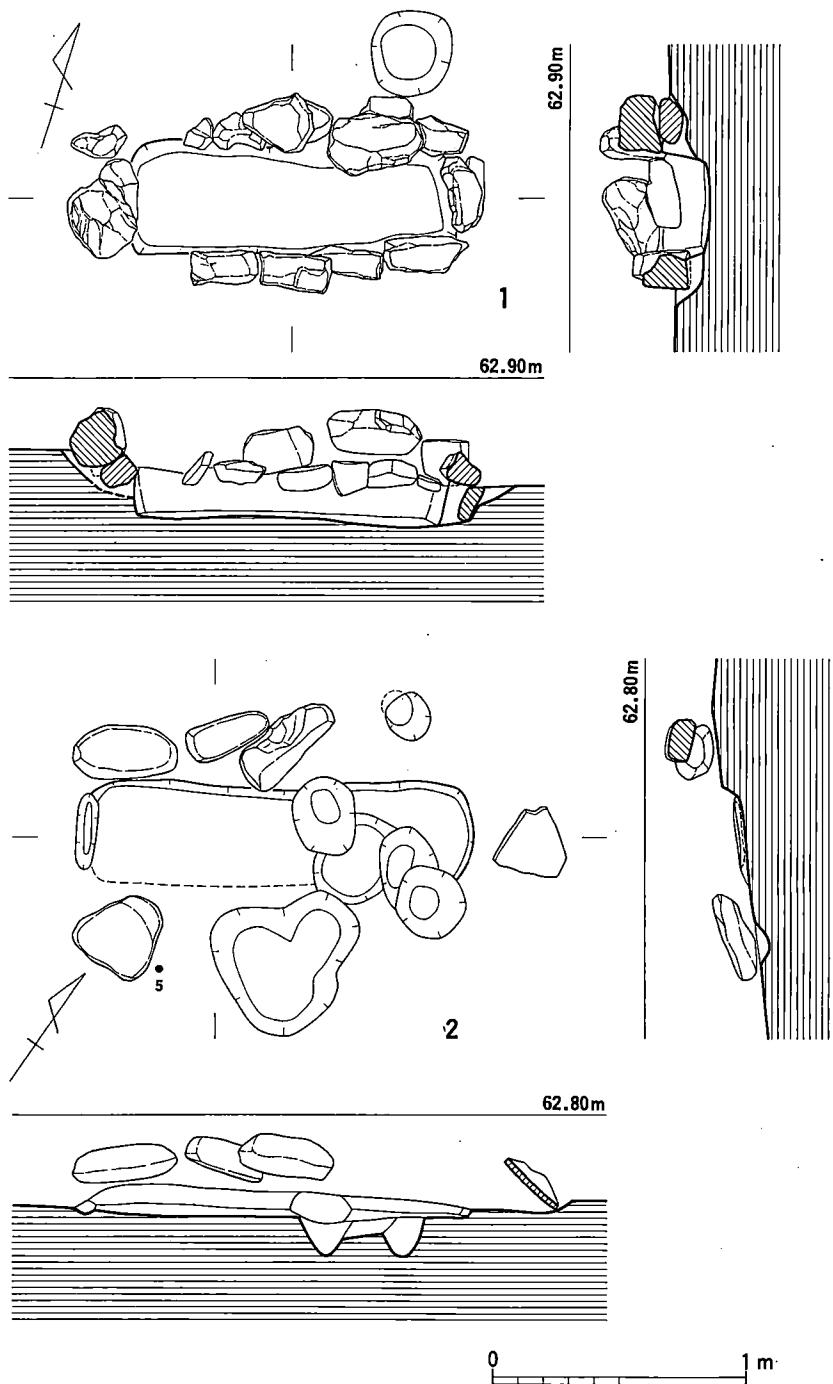
2は沈線のある破片で壺であろうか。3・4は鉢で、3はきわめて硬質である。

2号石棺墓〈SC2〉（図版14、第65図）

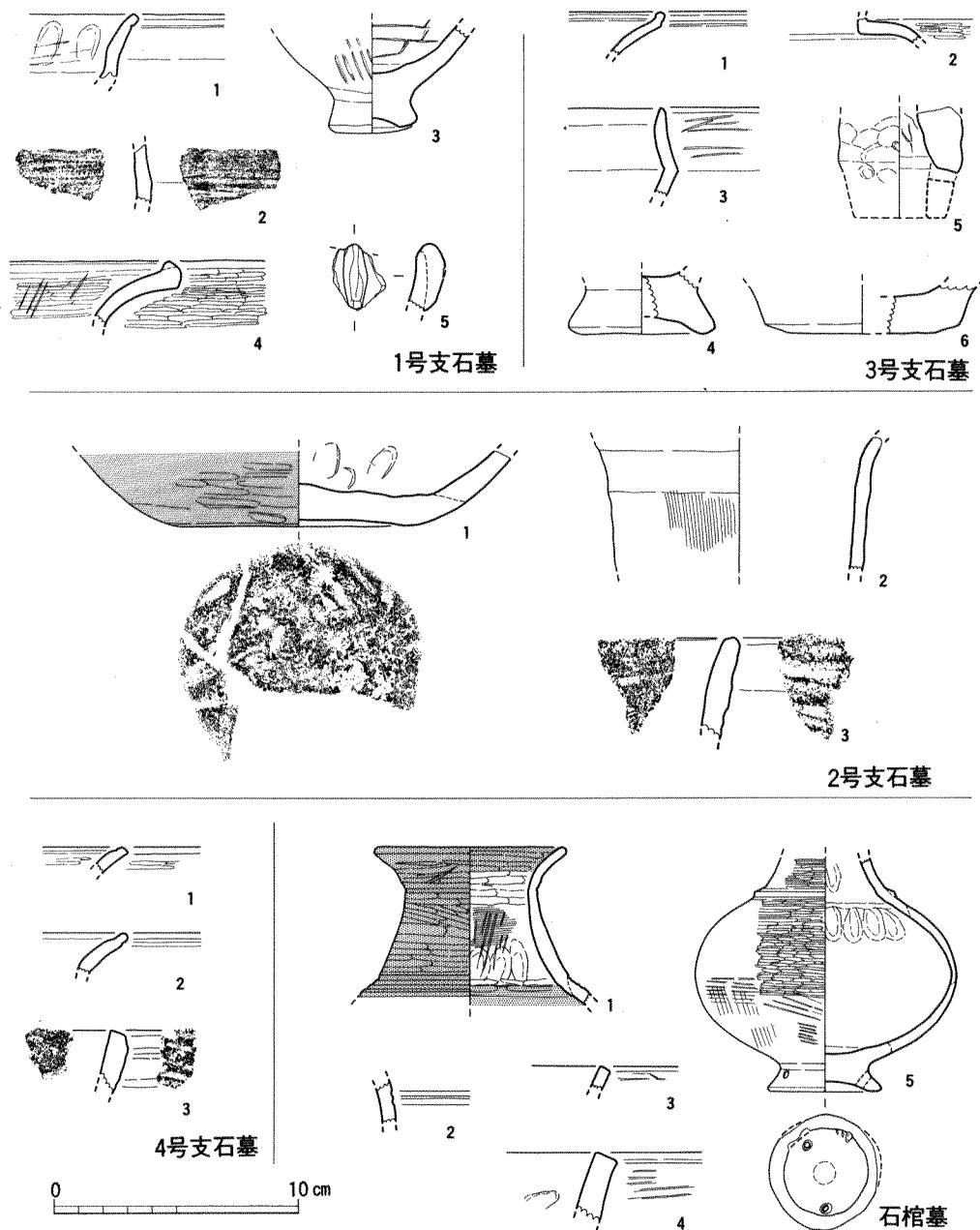
E6区で1号石棺墓の南に位置する。26・60・61号住居跡を切ってその上層に営まれている。壙の東寄りは数個のピットに切られている。壙は東西に長く、内法で長さ146cm、小口幅は東が34cm、西が37cmで、主軸方位はN-55°-E。西側が広いので、こちらが頭位であろう。壙底レベルもごく僅かながら西側の方が高い。西側小口部には細い溝状のくぼみがある。壙外の北側に3個、南側に1個の丸みをもった河原石があり、東小口部外には扁平板石が1枚斜めに立った状態で存した。これも1号石棺墓と同様に、木棺墓をしつらえたあとに外周に礫石を裏込めとして置いたものだろう。残存する石材の最上面から壙底までの深さは30cm。西小口部の南側にある石のすぐ横で土器が出土している（第65図）。棺外副葬品であろう。

出土遺物（図版22、第66図5）

土器（第66図5） 約1/2が残存する壺で、口縁部は欠失する。脚台が付き、それには2個の焼成前穿孔がなされている。これらは対称の位置にないが、紐掛け用のものであろうか。胴部はかなりの張りをもち、最大径のあたりは器壁が薄い。刷毛目のあとに横ヘラミガキが施されている。肩部と頸部の境には断面三角形の突帯が貼り付けられる。頸部はかなり窄まって口縁へ移行してゆく。胴部最大径10.6cm。



第65図 1・2号石棺墓〈S C 1・2〉実測図 (1/30)



第66図 支石墓・石棺墓出土土器実測図 (1/3)

5 その他

a. ピット出土遺物 (図版22・24・25・27・29、第67・68図1~30、98図25~30、100図69~73、103図8~13、108図50~56)

土器 (第67・68図1~30) 1~3は精製または半精製の鉢で2の内面には小突起がある。4は粗製の鉢。5~8は外面に複数の沈線を巡らす鉢。9は口縁外端部に粘土帯を貼り付けている。12は壺であろう。以上は縄文晩期に位置づけるが4は時期が下るかもしれない。13~16は刻目突帯文甕で、16は薄手のつくりである。弥生早期。20は弥生前期の壺か。24は口唇部にも刻みふうの刷毛目が施されている。25・26の突帯は刻みを持たない。29は中期前半の壺。30は二次熱を受けた土器で、とりべのようにも見えるが一応弥生後期の壺としておく。

石器 第98図25~30は全てサヌカイトの打製石鎌で、30は未製品であろう。25・26は同じピットから出土した。第100図69~73は黒曜石の剝片で縁辺部に小剥離が施されている。

第103図8~13は片岩の石斧で、9・10・11・13は局部磨製である。10・11・13は刃部に使用痕が見られる。

第108図50~56はすり石もしくは叩石で、50は両端部、53・56は側縁の一部、54は側縁に敲打痕が見られる。55の器表はツルツルに磨れている。

b. 包含層出土遺物

包含層はI~Ⅳと2・7・5トレンチの周辺にA~Fがあったが、前者のうちI~IVは中世に属するものであるけれども遺物として古い時期のものも混入している。中世期の遺構からも明らかに縄文~弥生期に属する遺物があるので、それらは次のcの項で触れる。

●包含層V出土遺物 (図版25・28・30、第69図1~10、99図45、104図24、111・113図3・4・24)

土器 (第69図1~10) 1~3は壺で、1・2は外面に化粧土を掛けている。4~7は甕で、6の刻みは口唇全面には及ばない。7の外面は煤ける。1・4・5は弥生早期、その他は弥生前期。

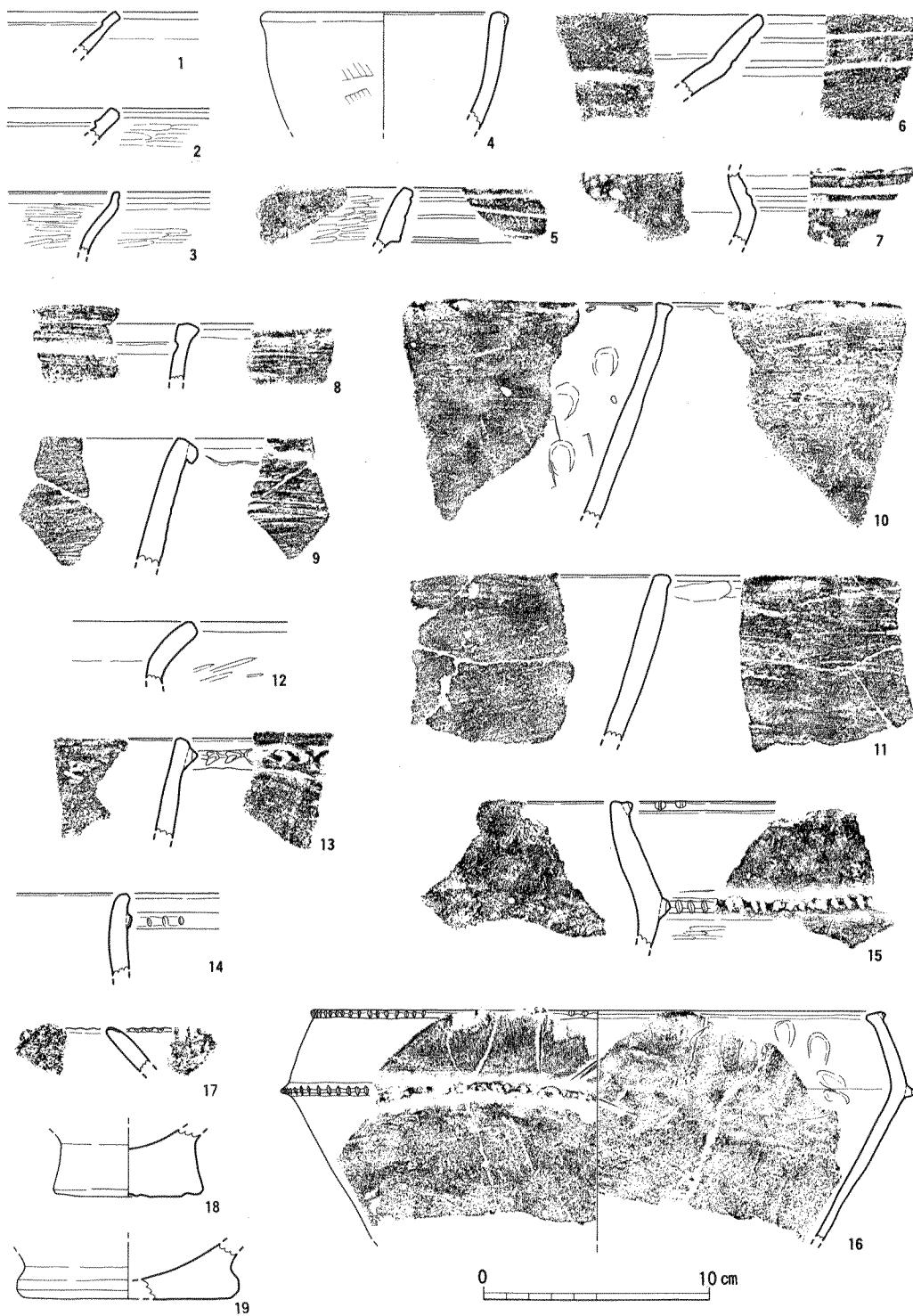
石器 第99図45はサヌカイトの打製石鎌。第104図24は局部磨製石斧。

第111図3・4は砥石で、ともに砂岩である。3は中砥で一面はよく使っている。4は荒砥でこれも一面はよく使用している。第113図24は安山岩の破片で台石であろう。

●包含層VI出土遺物 (図版22・25・28、第70図1~3、99図43・44、104図23)

土器 (第70図1~3) 1は粗々しい条痕のある鉢で外面は煤けている。2は刻目突帯文でこれも外面は煤ける。3は甕の底部で内面が煤けている。1は縄文晩期、2は弥生早期、3は弥生前期。

石器 第99図43はサヌカイトの石鎌で、51・52号住居跡の近辺から出土した。44もサヌカイト



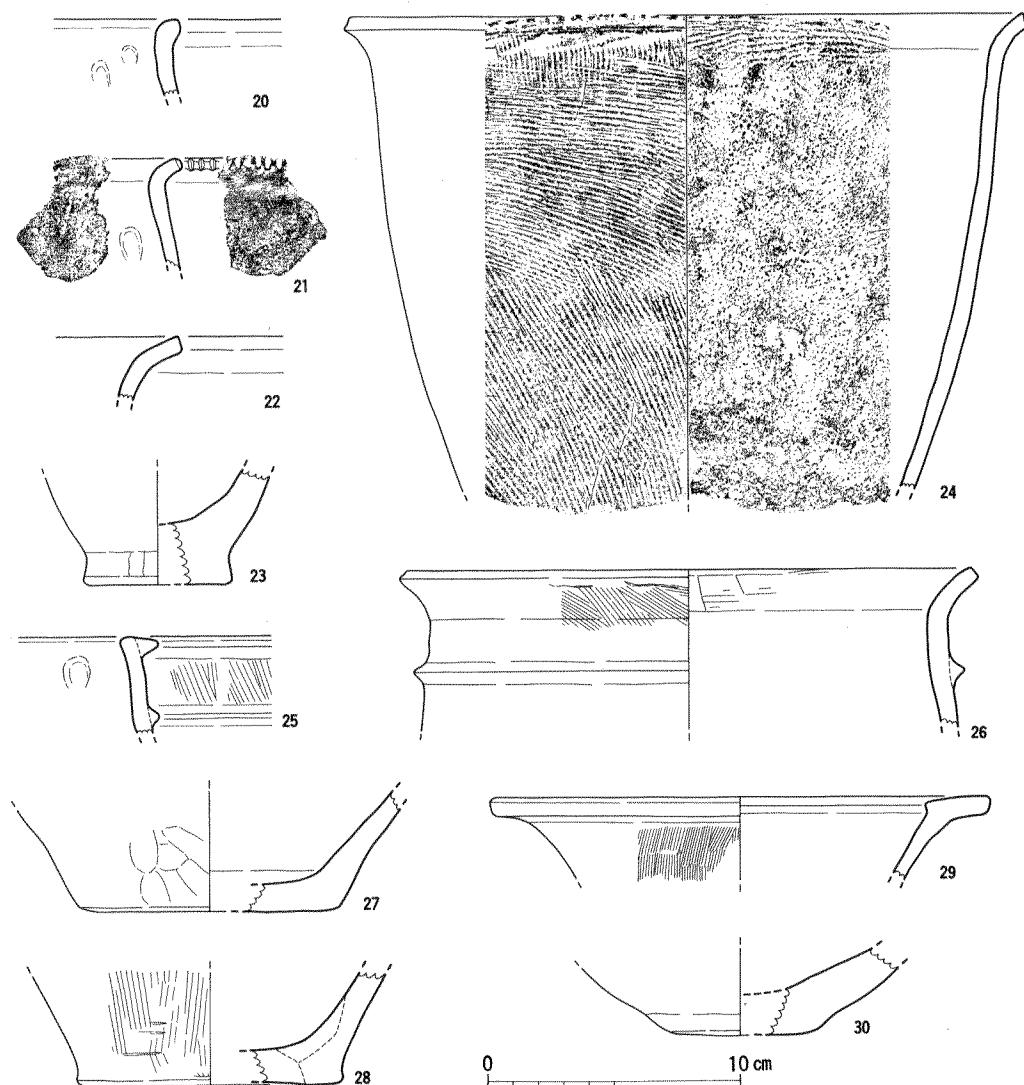
第67図 ピット出土土器実測図1 [縄文～弥生] (1/3)

で鏃としておくが槍先状の石器かもしれない。

第104図23は打製石斧で33・36号住居跡の近辺から出土した。

●包含層VII出土遺物 (図版23・24・25・27・29、第71・72図1~21、96図3、101・102図83・107、104図17・18、107図33、111図9)

土器 (第71・72図1~21) 1は壺で外面は丹塗りである。2~8は精製の鉢。9は半精製で、11~15は粗製。12は内面が、15は外面が煤けている。17は壺の底部であろう。19は組織痕土器で

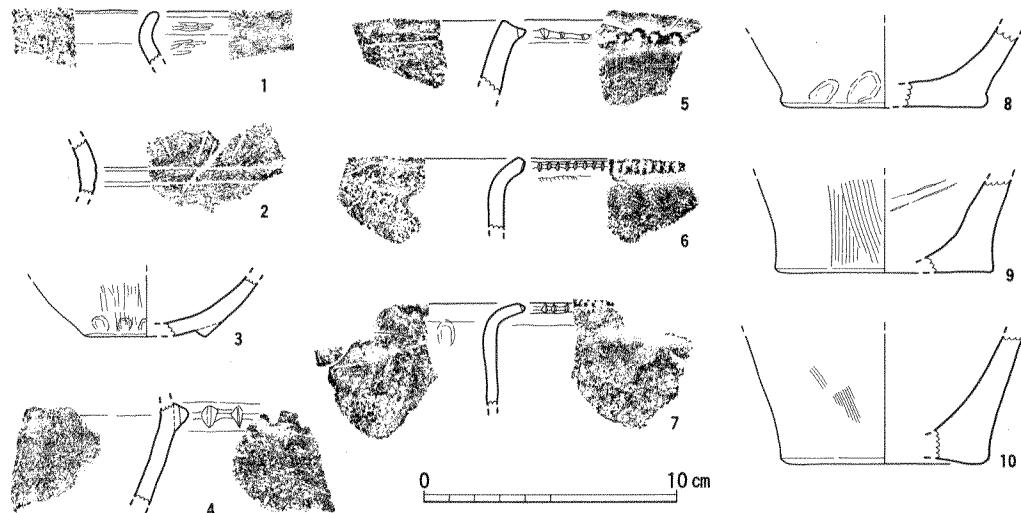


第68図 ピット出土土器実測図2 [縄文～弥生] (1/3)

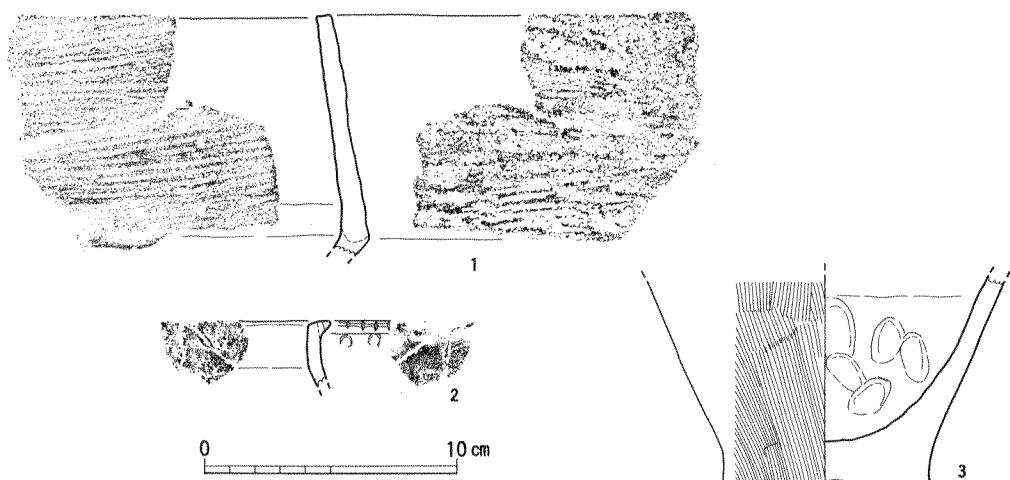
この土器についてはVを参照されたい。20・21は山形の押型文土器である。1は弥生早期、2~19は11を除いて縄文晩期後半、11は同前半であろう。

石器 第96図3は当初のI区とIII区を隔てていた農道を除去する時に出土した石斧で、確実にこの層かどうか断定できないが、この層に属するものとしておく。頁岩質石材の磨製石斧で、大型蛤刃の刃部を欠くが、遺存している部分にきれいに磨いた所はない。頭部から3.5~5.5cmの所に紐ずれしたような浅いくぼみがあり、ここに柄を装着したものと思われる。

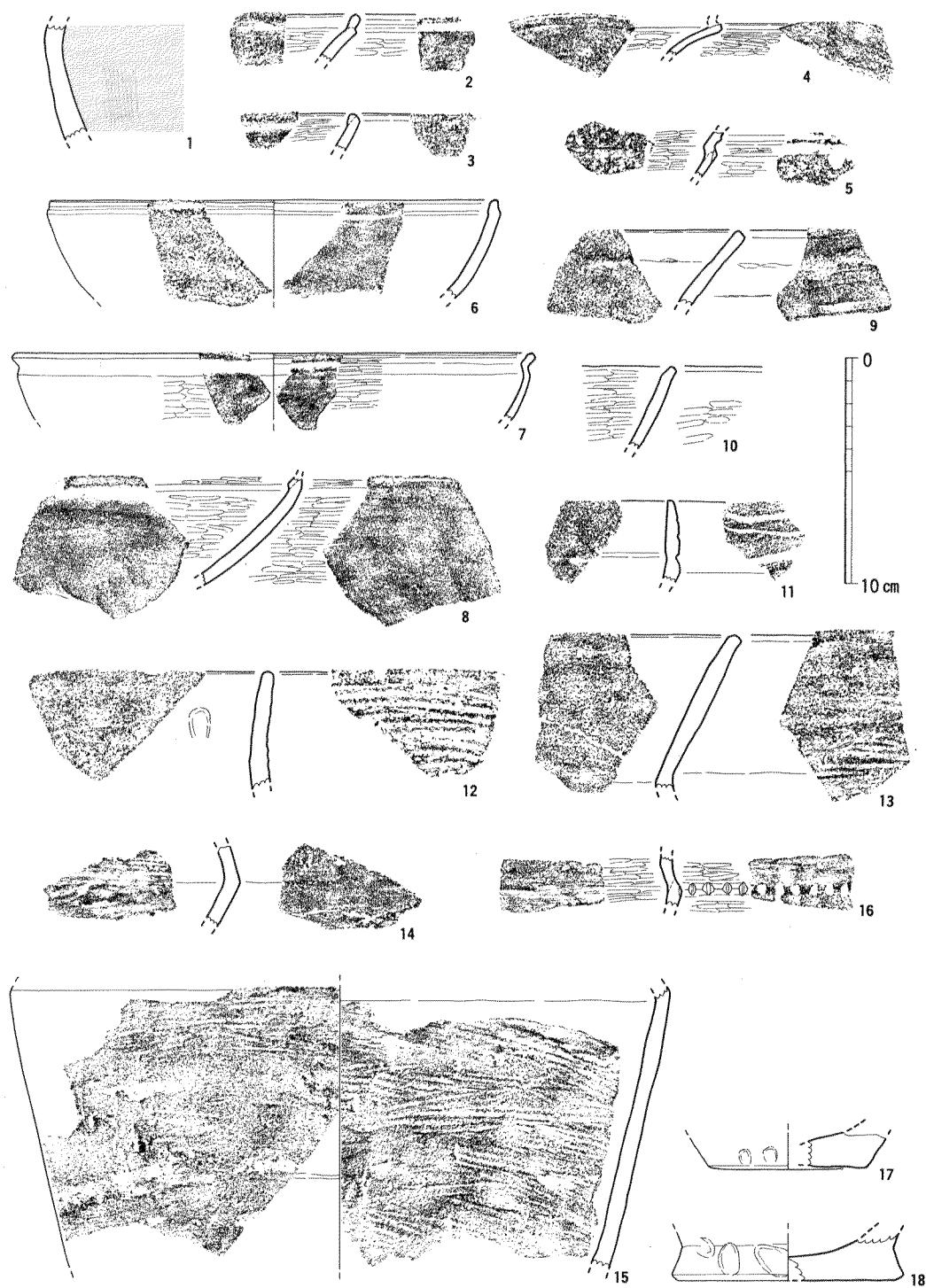
第101図83は黒曜石の使用剝片。第102図107はサヌカイトのスクレイパー。



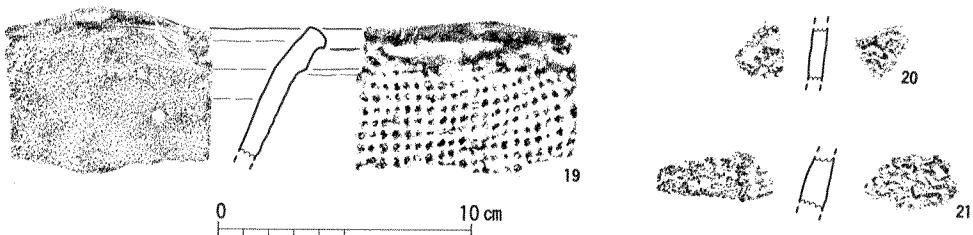
第69図 包含層V出土土器実測図 (1/3)



第70図 包含層VI出土土器実測図 (1/3)



第71図 包含層VII出土土器実測図1 (1/3)



第72図 包含層VII出土土器実測図2 (1/3)

第104図17・18はともに片岩の打製石斧で、17は器表が脆く剝落しやすい。18は局部磨製で器表に多数の条痕が見られる。

第107図33は安山岩のすり石で一面は平滑に磨れている。

第111図9は花崗岩の小さな板石で、器表は磨れていように見えるが、何に使用したか不明。

●包含層VII出土遺物 (図版22~27・29、第73~75図1~56、95図2・3、97図3、

98~100図31~34・64・74~82、104図14~16、107図32、111~113図7・11・13・14・18)

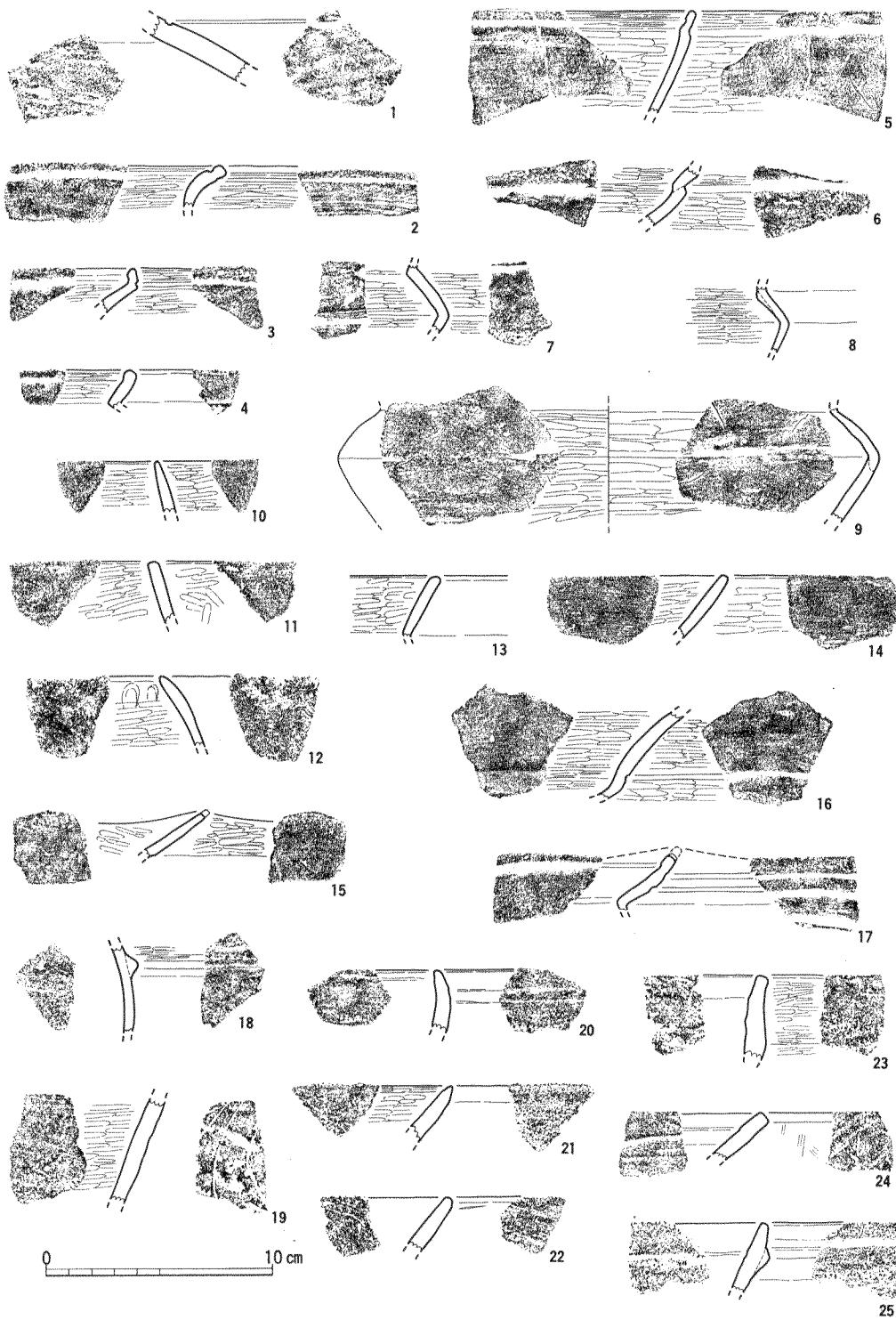
土器 (第73~75図1~56) 1は器形がよくわからないが、図のように復元すると壺の肩部になる。外面は条痕のちナデらしい。2~16は精製の鉢で、いずれもミガキで調整されている。9の胴部最大径は24cm。10~12は椀状を呈するらしい。17~33は半精製または粗製の鉢で、18は胴部に丸みのある突帯が貼り付けられている。19は外面に弧状の線刻がある。25の口縁下は膨らんで突帯状になる。27は焼成後の穿孔がある。31の口唇部には押圧に近い刻みが施されている。32は復元口径24cmで内外ともに煤けている。36は壺の底部であろう。強い二次熱を受けている。38は弥生前中期の甕の肩部のように見えるが、ここでは縄文晩期としておく。39の胴部最大径は32.5cm。40は大型壺の底部であろうか。外底面にはワラのような植物質のものの圧痕がある。以上は1を除いて縄文晩期中頃~後半であろう。

41~50は縄文後期に属すると思われる土器で、41・42は西平式系、43~46は磨消縄文である。

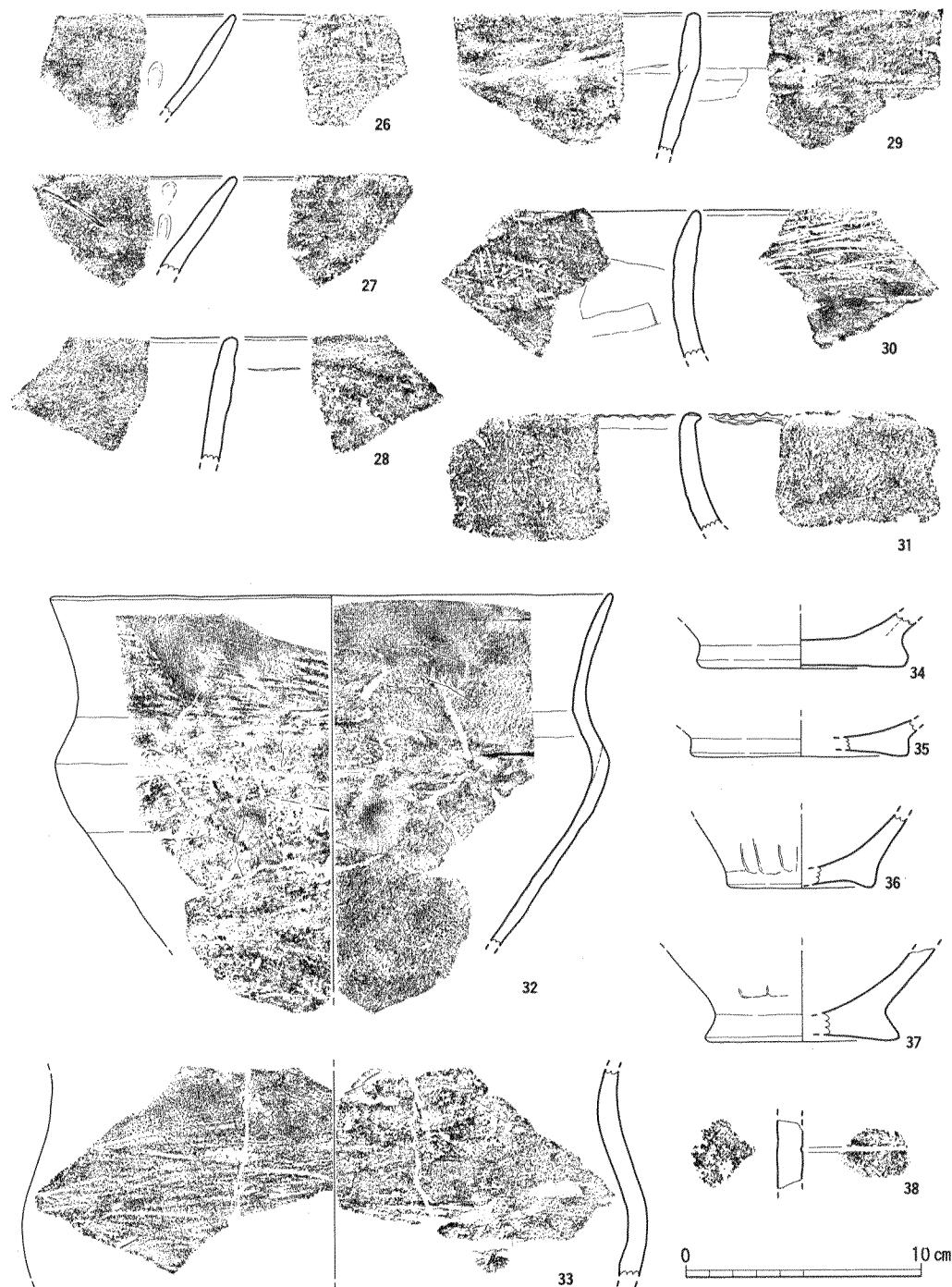
47は波状口縁の突起部に孔が穿たれている。外面の沈線はワラの茎を折り曲げたような植物質のもので施している。一部に擬似縄文が残っている。49・50は天地もよくわからない破片であるが、外面には八字状 (またはV字状) に沈線が施される。

51~53は条痕文土器で、51・53は内面が煤けていて同一個体かもしれない。52は口唇に押点文が施される。54は撚糸文土器かと思われる。55は山形の、56は楕円の押型文土器で、56の楕円は粒が小さい。51以下の土器は縄文早期に属するとみられる。

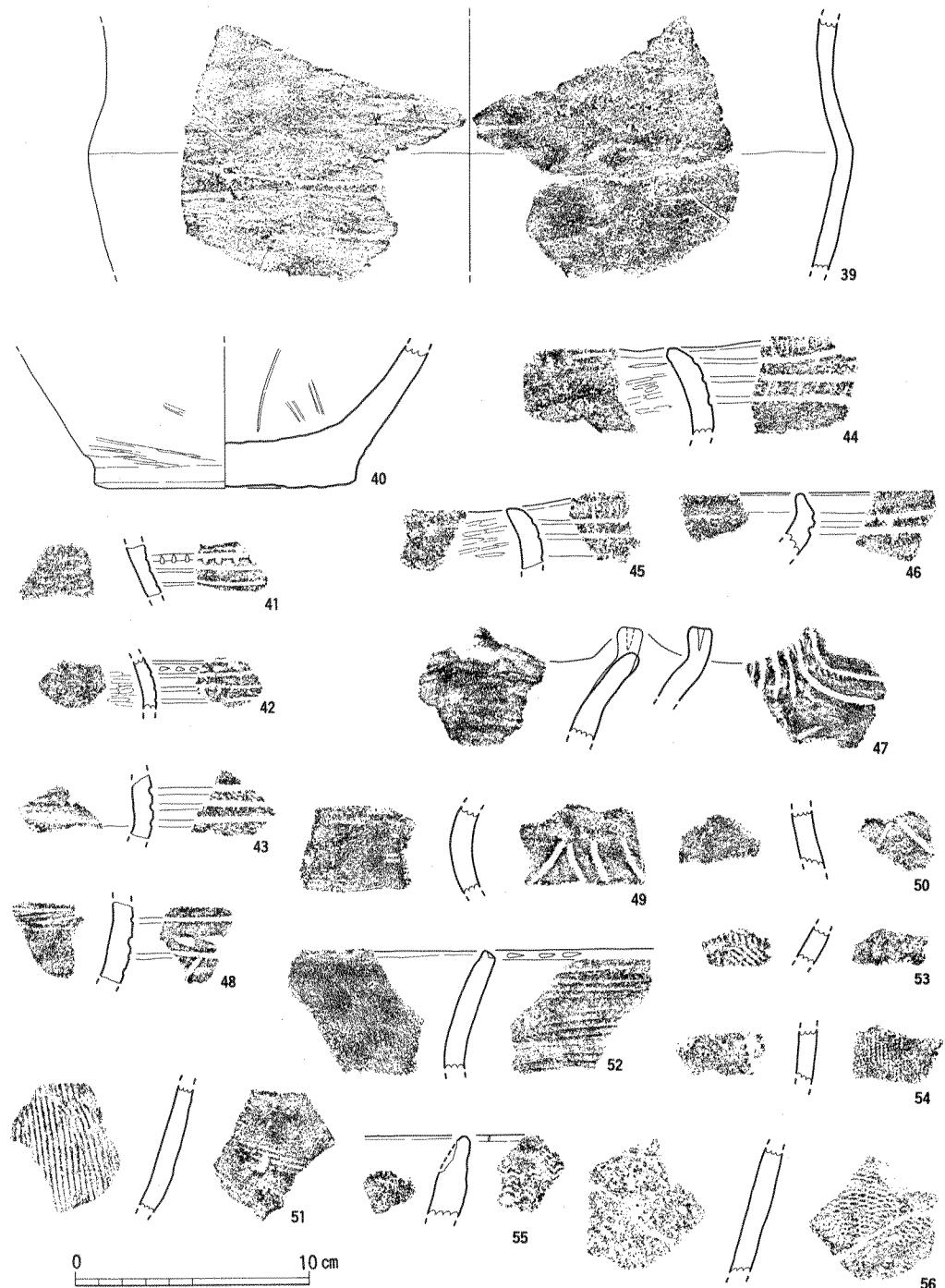
土製品 (第95図2・3) 2は円柱棒状の製品で、器表に押点が印される。一端部は平らに面取りしている。現存長35mmで、もう少し伸びるだろう。用途不明。3は縄文晩期の深鉢かと思われる土器の胴部片を再利用した円盤で、周縁の数カ所に擦れた所がある。内面は煤けている。



第73図 包含層Ⅷ出土土器実測図1 (1/3)



第74図 包含層Ⅲ出土土器実測図 2 (1/3)



第75図 包含層Ⅷ出土土器実測図3 (1/3)

石器 第97図3は片岩の石斧状の石器であるが、周縁すべてに両面から小さな剝離が施されているので石包丁形石器と称しておく。

第98図31～34は黒曜石の鏃で、33は剝片鏃である。第99図64は灰黄色をしたチャートでいわゆるトロトロ石器である。形態は鏃を大きくしたものとしてよい。第100図74～82は82がサヌカイト、その他は黒曜石である。74はスクレイパーか。75は錐の先端を欠失したものと捉えておく。76～78は縦長の使用剝片。79・80はスクレイパー。81は小剝片で使用したか否か定かでない。82は縦長剝片のスクレイパーで基部には原面が残る。

第104図14～16は石斧とするが、14は刃部と反対の折損したと思われる部分にも剝離痕があるので、折損後に再利用したか、本来が別の用途のものであるかのいずれかだろう。15は局部磨製で幅広の製品である。刃部には使用痕がある。16は磨製で裏面はほぼ平らである。

第107図32は周縁のほとんどに敲打痕があり、表裏ともに磨れている。叩石とすべきか。

第111～113図7・11・13・14・18は台石とすべきもので、7・14は表裏ともよく磨れている。

● 2・7 トレンチ間包含層出土遺物（図版25～29、第76～81図1～114、98・99・101図37～42・84・87、104図19～22、107・108図39・45～49、112・113図16・17・22・23）

次の5・7トレンチ間包含層も同じであるが、下層から順に新しい方へ、E→C→F→D→B3(→)・B2→B1→B→Aの層位であり、B3層とB2層については同一層の場所の違いである可能性がある。上層から順に述べるが、大半は縄文晩期である。

土器（第76～81図1～114）

【A・B層】 1～6は精製の鉢である。5はいわゆる黒色磨研土器である。7～9は粗製の鉢で、9の外面には格子状の線刻がある。11は弥生中期初め頃の甕の破片であり、混入と思われる。

【B層】 12は壺の胴部片で、いま磨滅してわからないが、本来は外面は丹塗磨研であったと思われる。13～33は基本的に精製の鉢であるが、19・20・21・25・30はやや質が悪く半精製とすべきか。29は内面が丹塗りである。34以下は粗製鉢で、36は口縁を肥厚させる。38は外面に弧状の線刻がある。55の底部内面は煤ける。56・57の口唇部は刻みのような押圧痕もしくは凹点文がある。58～61は刻目突帯文甕で、61の刻みはきわめて粗々しく、指先を押さえつけて施したものらしい。62・63は条痕文土器で、62の外面は煤が付着している。63には穿孔がある。64は薄いつくりの押型文土器で、内外ともに山形文がある。

【B1層】 67～69・73は精製の鉢である。73の内面にはコゲのような炭化物が付着している。70・71は粗製というには質がよく、半精製とすべきか。

【B2層】 74～84は精製の鉢である。ただ76・79は半精製とすべきか。81・83はいわゆる黒色磨研土器である。85以下は半精製または粗製の鉢。97の外面にはA・B層の9と同じ線刻がある。何を表現したものかわからない。98は復元口径14cm。104の外底面には原体不明の圧痕

が多数ある。105は条痕文土器か。106は撚糸文土器。107・108は押型文土器で、107は格子目、108は山形文らしい。

〔B3層〕 109～111は精製の鉢で、111はきわめて小型である。手づくねらしい。112・113は粗製の鉢。

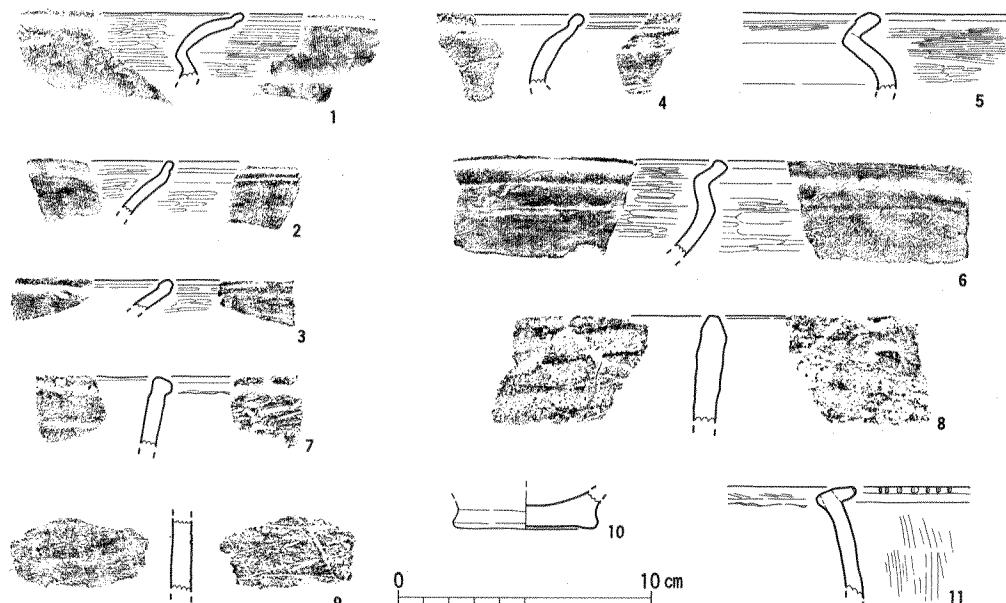
〔C層〕 114は山形文というよりは波状文の押型文土器である。

石器 第98・99図37～42は打製石鎌で、40・41は未製品であろう。37・39・40が黒曜石で他はサスカイト。37・38はB2層、39～41はB層、42はA層からの出土である。第101図84は黒曜石の使用剝片でB2層、同87はサスカイトのスクレイパーでB3層出土。

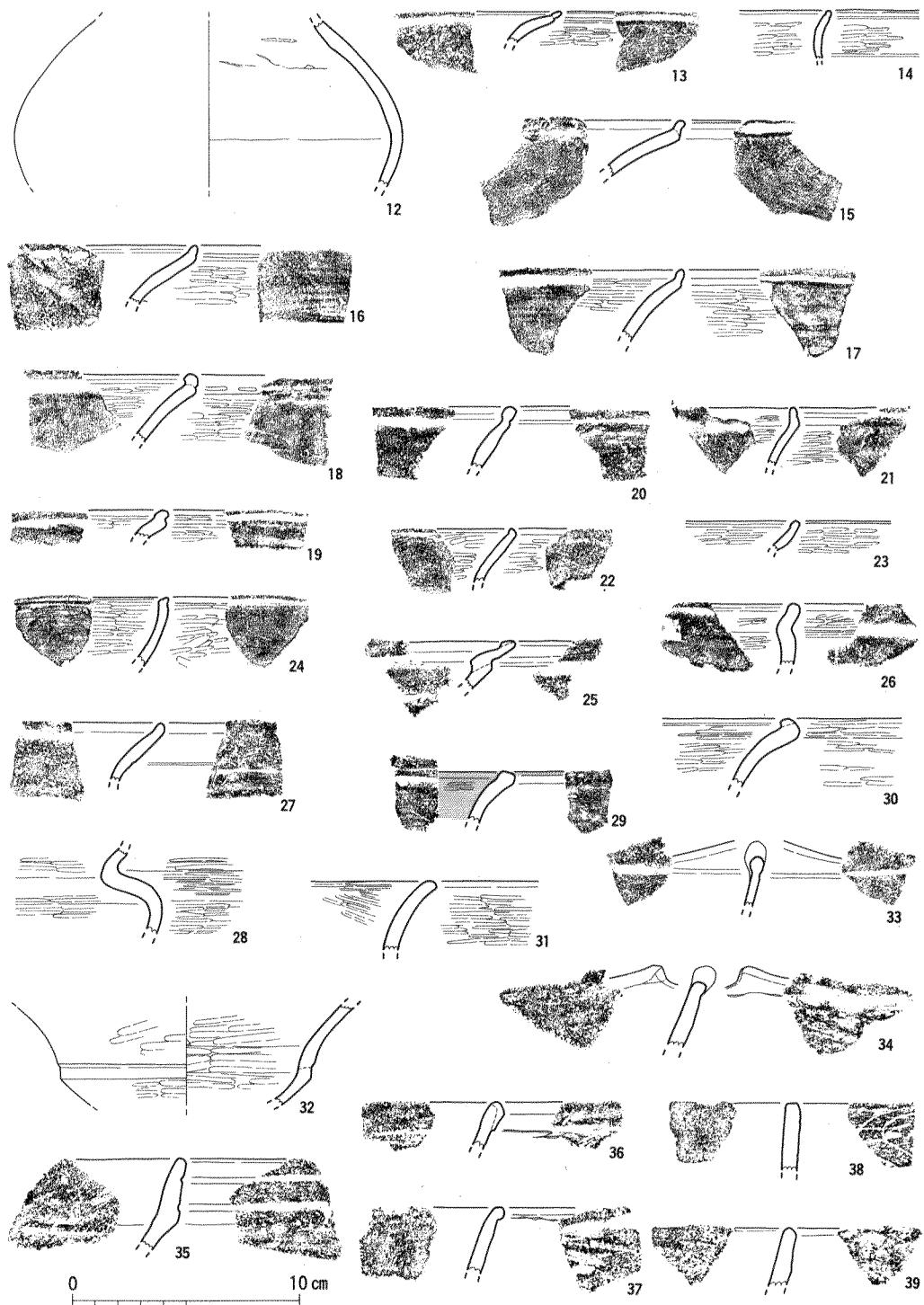
第104図19～22は石斧。19は局部磨製で、側縁の片方は敲打の用に供したらしい。20～22は磨製で、21は刃部の小破片であるけれどもよく磨かれている。22は蛇紋岩で器表はきれいに磨かれている。19・20はA・B層、21はB1層、22はB2層出土。

第107・108図39・45～49はすり石。39は表裏ともに磨れている。45も器表が磨れている。46は表裏ともに敲打によるくぼみがあり、周縁にも敲打痕が著しい。47は器表の片面がわずかに平坦になる。39はB2層、45はB層、46～49はA・B層の出土。

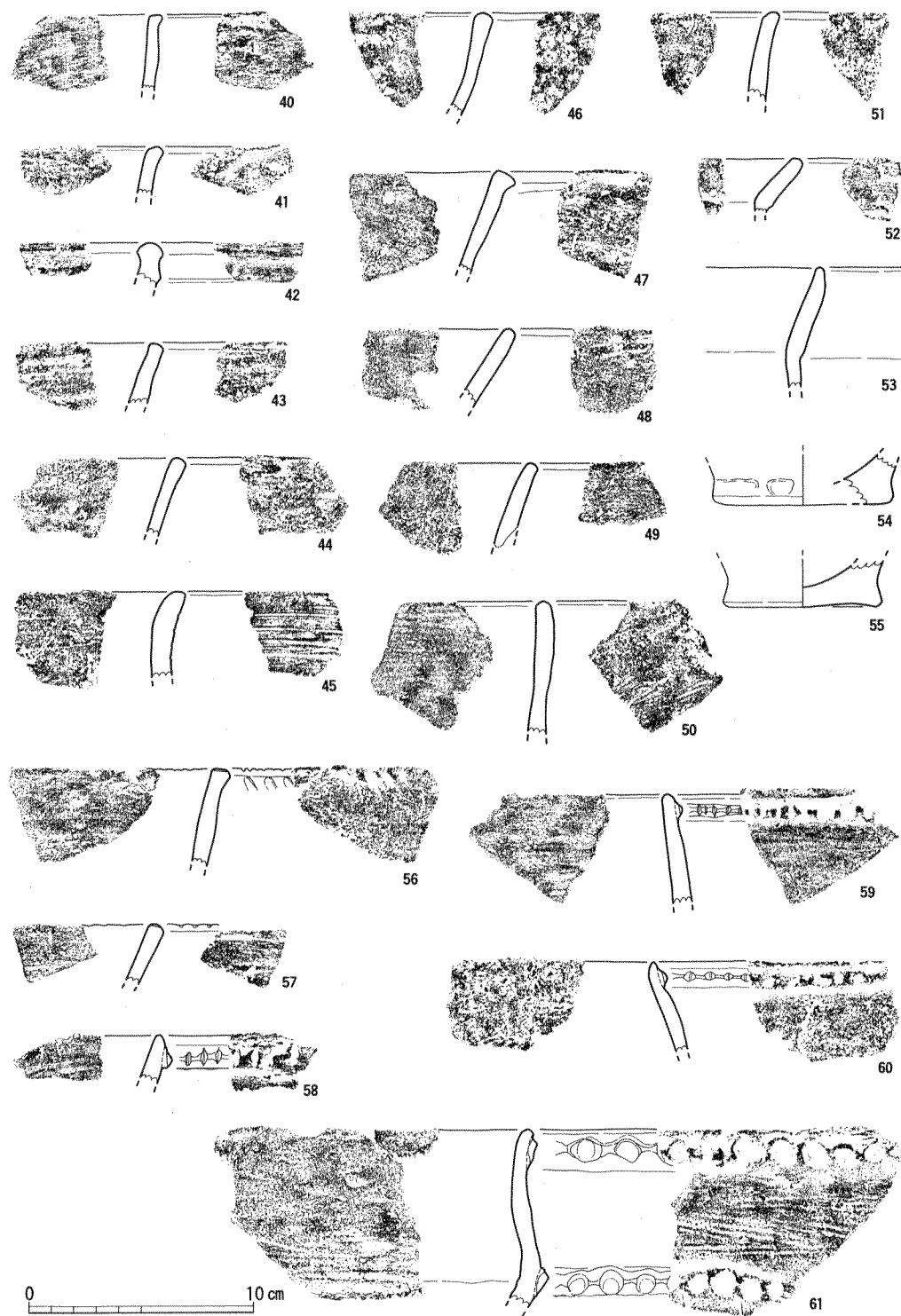
第112・113図16・17・22・23は台石。16・17は器表に使用痕が見られる。22の器表の剥離は敲打によるものであろう。23は器表に幾つかの面があり、よく磨れた部分がある。側面に敲打痕を見る。また熱を受けた部分がある。16・22がB2層、23はB層、17がD層出土。



第76図 2・7トレンチ間包含層出土土器実測図1 [A・B層] (1/3)



第77図 2・7トレンチ間包含層出土土器実測図2 [B層] (1/3)



第78図 2・7トレンチ間包含層出土土器実測図3 [B層] (1/3)

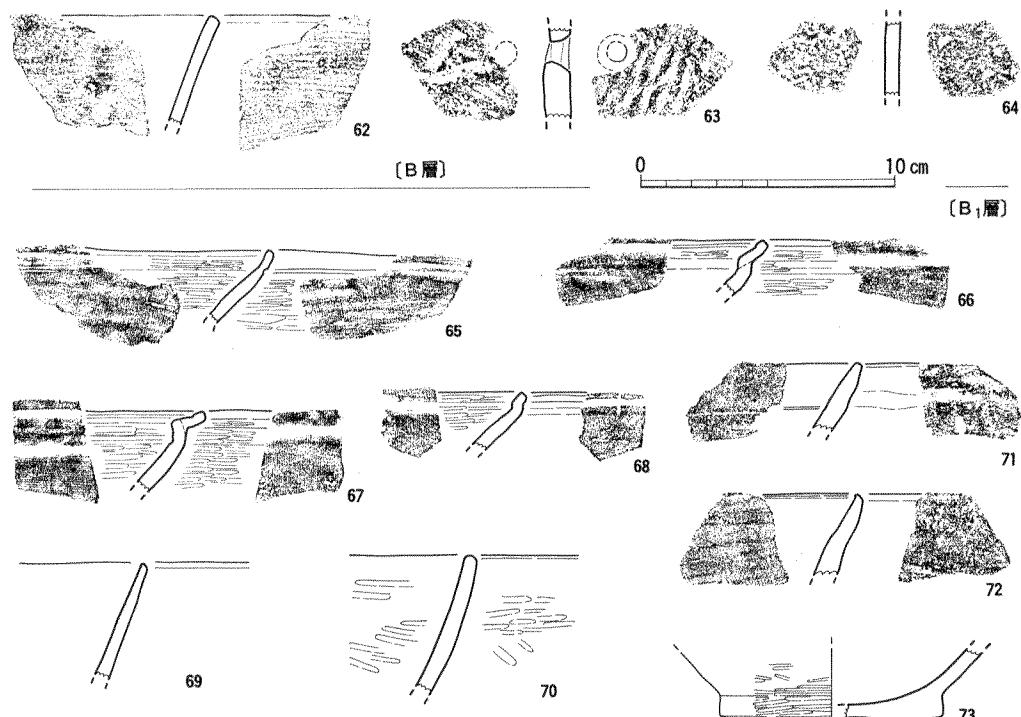
● 5・7 トレンチ間包含層出土遺物 (図版23・24・26・29、第82~85図1~57、97図1、98図35・36、107図40~44、113図19~21)

土器 (第82~85図1~57)

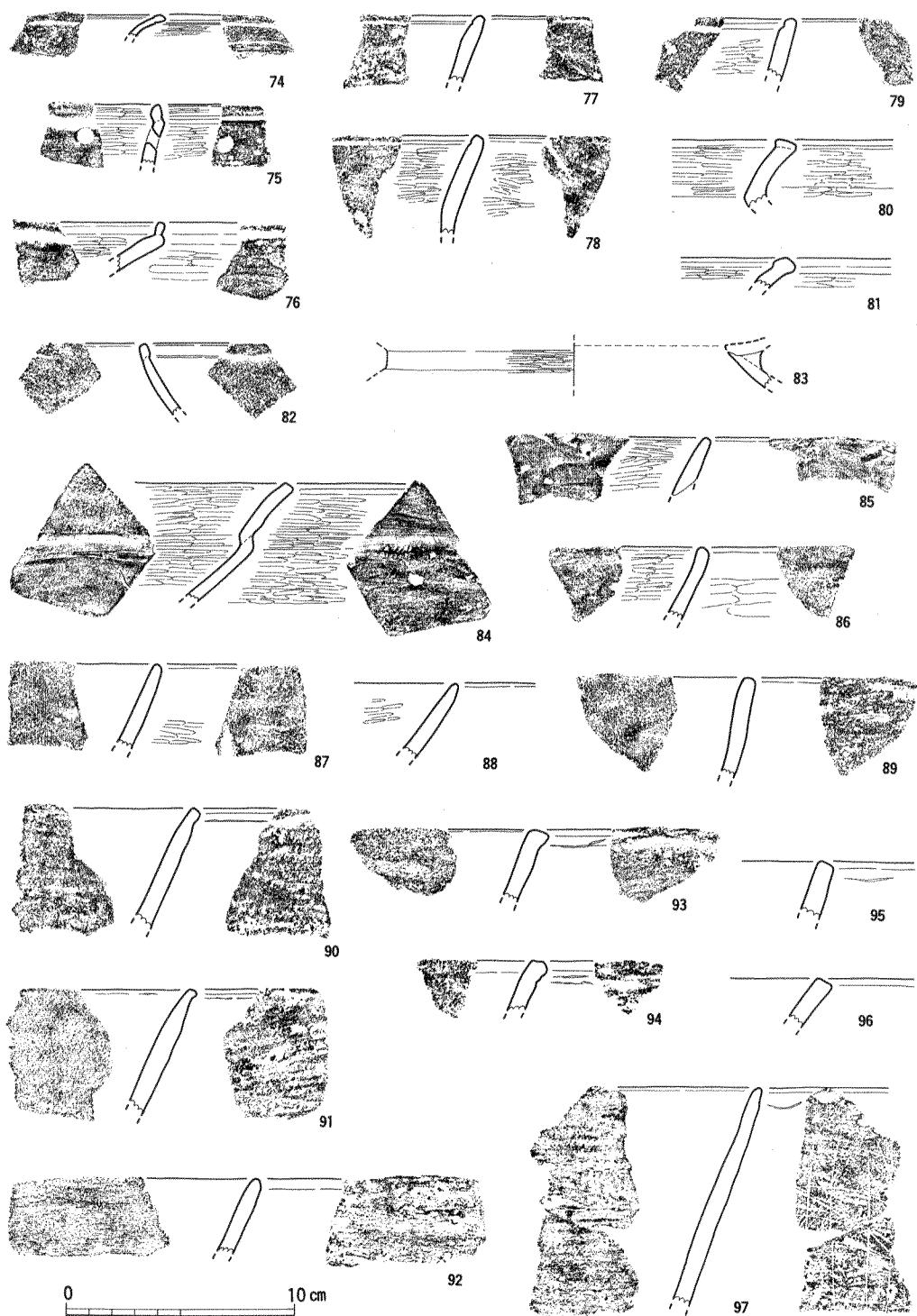
[A・B層] 1・2は精製の鉢。2の外面肩部屈折部には齧歯目動物の門歯痕が見られる。3~7は粗製の鉢で、5は内外とも条痕が著しい。8・9は刻目突帯文で、9の刻みは指先で施したものらしい。10・11は弥生前期の甕。12・13は壺の底部であろう。13は断面にも煤が付着している。14は弥生前期末か中期初めの甕であり、混入と思われる。15は山形の押型文土器である。

[B1層] 16は壺の肩部片で外面は丹塗磨研である。17~23は精製の鉢である。17・18は黒色磨研。21・22は権原式系文様の鉢で、外面は赤色顔料を塗布してのちミガキを施している。胎土が他とやや異なる。23はかなり大きく復元される鉢で口径は47.2cm。24~26は半精製品で、26はやはり鉢とすべきか。27~34は粗製の鉢。31は金雲母がキラキラしている。35~37は外面口縁直下に複数の沈線を入れる。38・39は縄文後期の鉢。40は一見すると弥生後期の壺のように見えるが、胎土、焼成はほかの縄文晩期の土器と変わらない。41は縄文後期土器であろう。42は山形文の押型文土器である。

[C層] 43は精製の浅鉢。44は粗製の鉢。45は楕円、46は山形の押型文土器である。



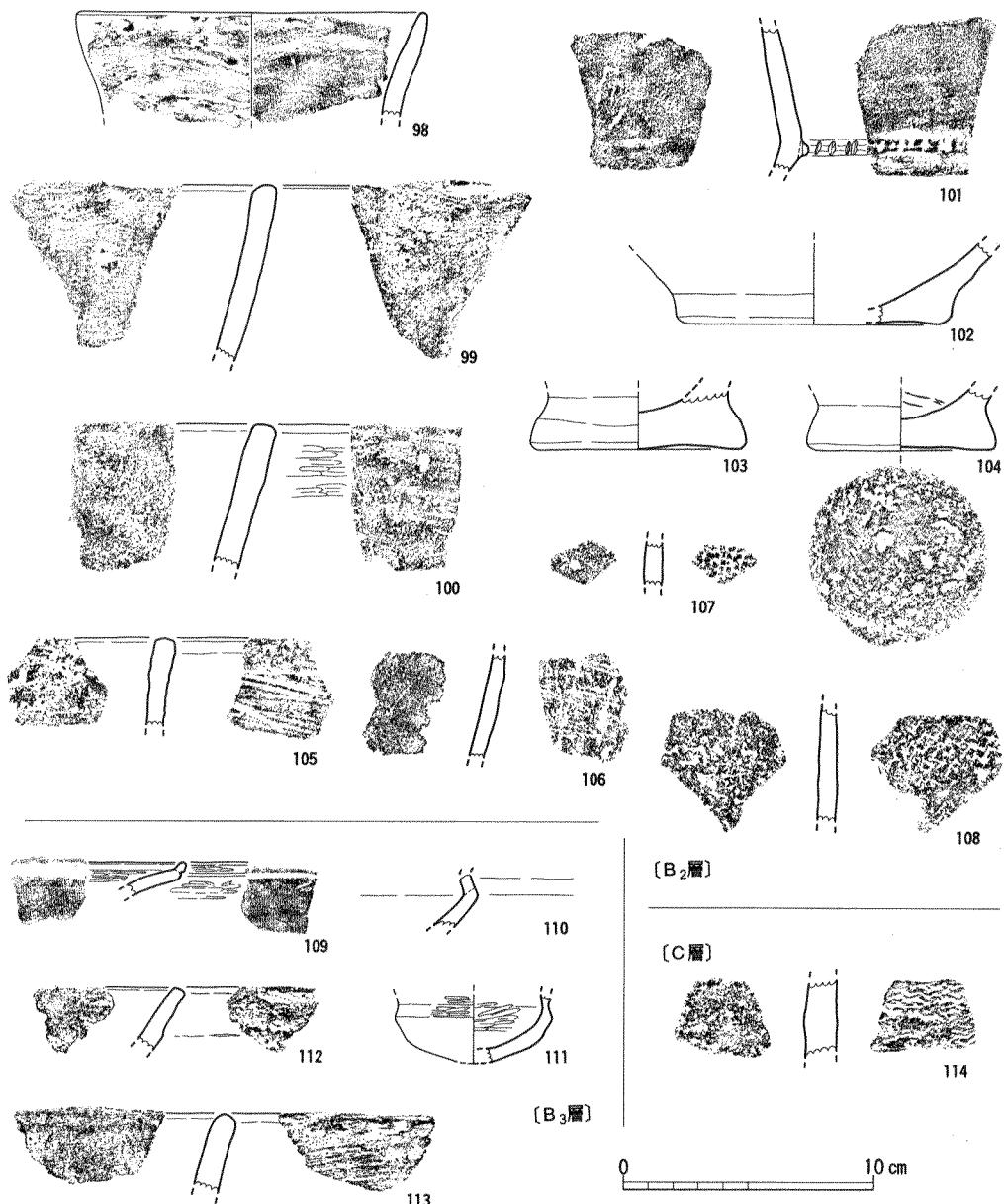
第79図 2・7 トレンチ間包含層出土土器実測図 4 [B・B1層] (1/3)



第80図 2・7トレンチ間包含層出土土器実測図5 [B2層] (1/3)

[D・F層] 47は壺の口縁部片で、内外ともミガキが著しい。

[F層] 48はB1層の21・22と同一個体の可能性もある。49・50は精製の鉢、51～55は半精製の鉢で、53は貼り付け突帯の上に沈線を入れている。56は時期不詳の破片。外面に巴文のような文様が入る。57は粗い条痕のある土器で縄文早期か。

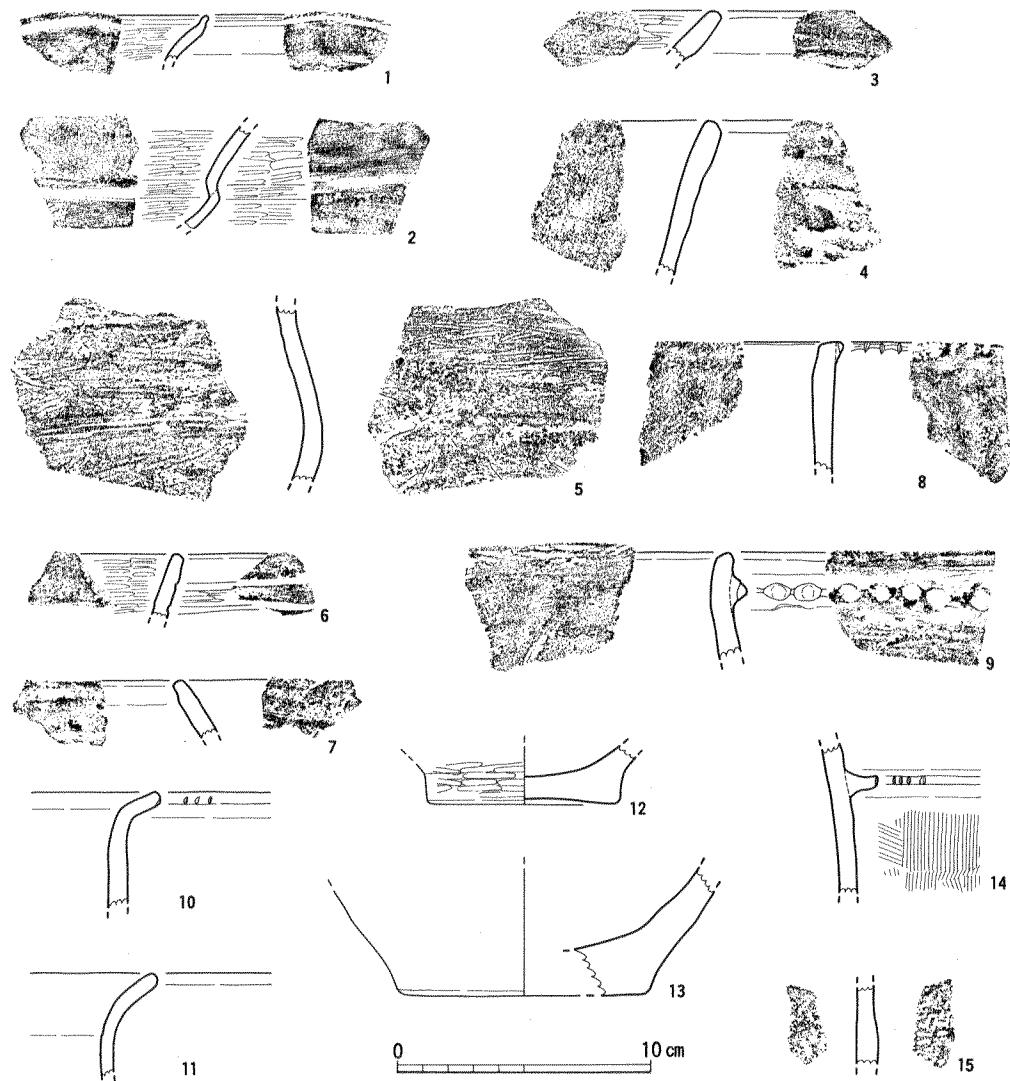


第81図 2・7トレンチ間包含層出土土器実測図6 [B₂・B₃・C層] (1/3)

石器 第97図1は片岩の石包丁形石器で、研磨によって一部に明確な刃部をつくっている。また体部にも研磨が及んでいるが、全体をきれいに仕上げるまでには至っていない。製作途中で放棄したものか、あるいはこの状態で使用したものか定かでない。石包丁であったとしても穿孔はなされていない。B1層の下層から出土した。

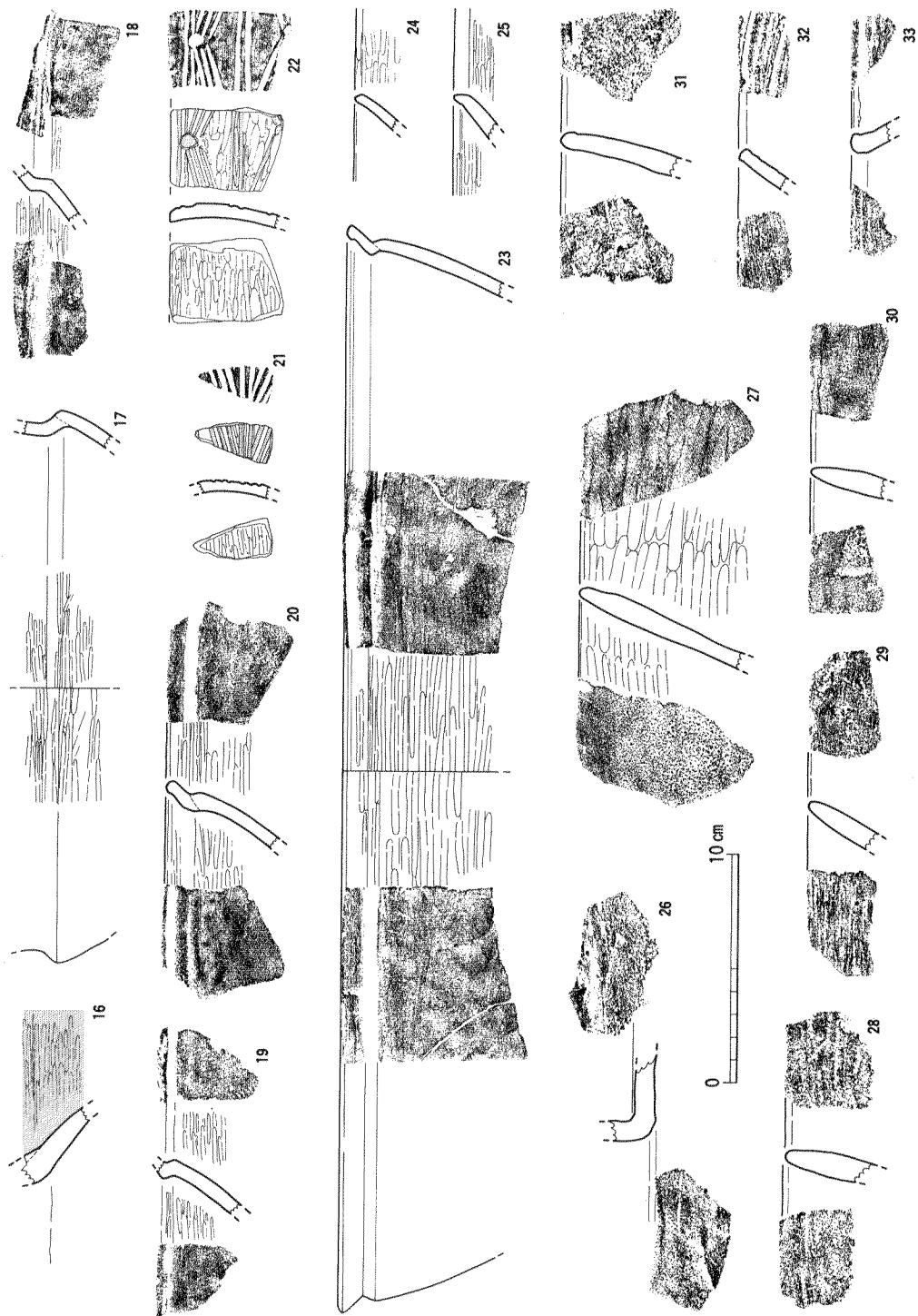
第98図35・36はともに黒曜石の打製石鎌で、35はF層、36はC層出土。

第107図40～44はすり石。40は表裏ともに敲打痕がある。41は側縁に敲打痕があり、表裏ともによく磨れている。叩石とした方がよいかもしれない。42も側縁の一部に敲打痕があり、器表



第82図 5・7トレンチ間包含層出土土器実測図1 [A・B層] (1/3)

第83図 5・7トレンチ間包含層出土土器実測図2 [B1層] (1/3)



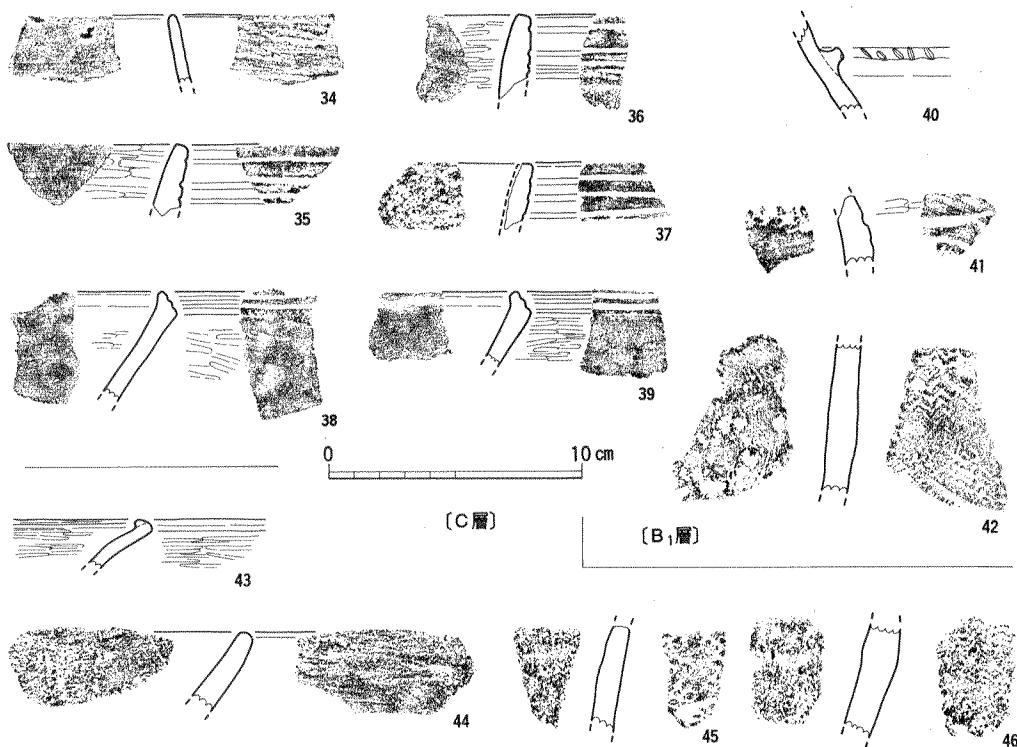
には条痕があつて磨れている。43は表裏、側縁ともに平らかな面を有する。44は器表の片面が磨れて平坦になっている。全てB₁層の出土。

第113図19～21は台石。19は器表に使用痕が見られる。20は側縁に敲打痕がある。21は図示した反対の面がくぼんでおり、こちらを石皿状に使用した可能性もある。20はF層、21はD・F層、22はA・B層からの出土である。

●その他包含層等出土遺物

土器(図版22、第86～94図1～152)

鉢形土器(1～72) 浅鉢と深鉢があるが、破片のみで全体の器形を特定できないものが多いのでまとめて述べる。つくりとしては精製と粗製、その中間的な半精製とがあるが、これもいずれとも判断しにくいものもある。1～4・6～14・17～19、21～29・31～36・39は精製土器、5・15・16・20・30・37・38・41・42・47・48・57・59・60・63・69・72は半精製土器、その他は粗製土器とみなされる。4・13は化粧土を掛けているらしい。10・11・18・32は黒色磨研である。10は肩部の屈折の角度が異様であるが現状の復元ではこのようになる。11は復元口径31.4cm。27

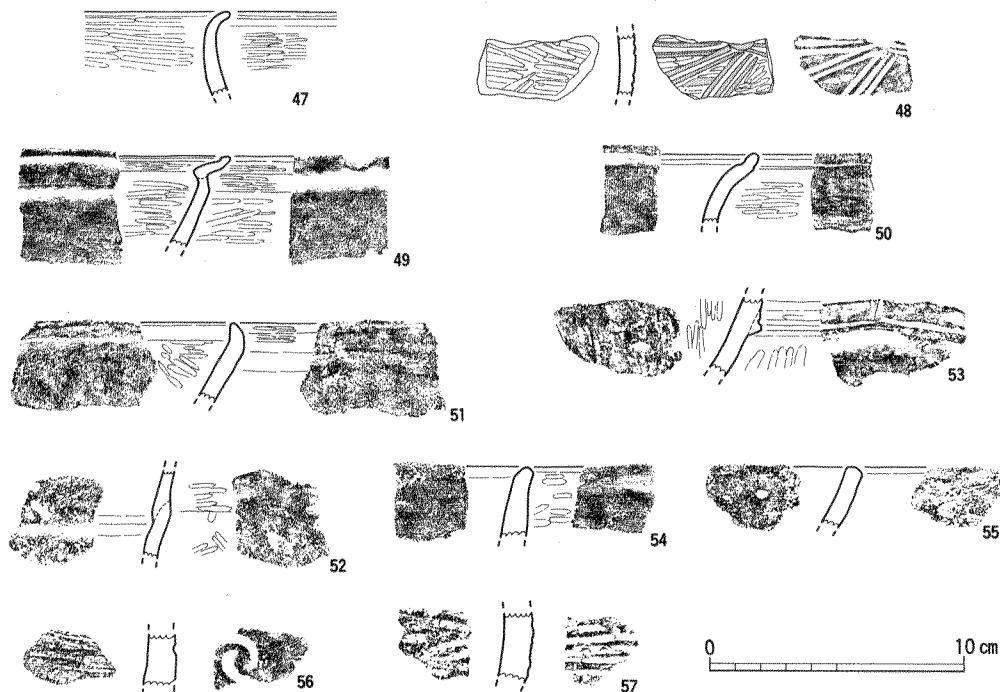


第84図 5・7トレンチ間包含層出土土器実測図3 [B₁・C層] (1/3)

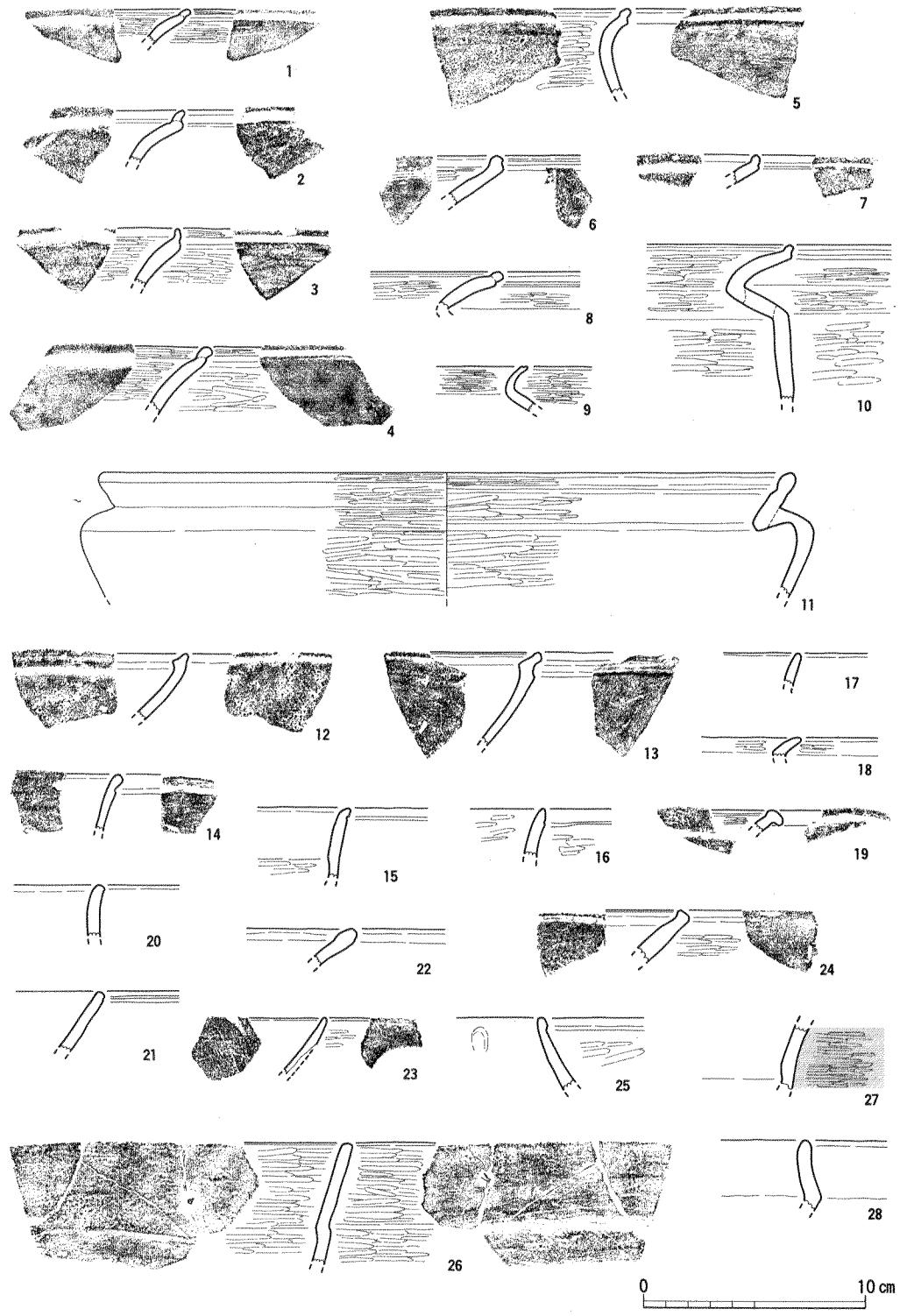
は外面に色鮮やかな丹を塗っており、内面にも雫が落ちている。30・42の屈折部より下位は煤けている。37は一見して土師器の甕のように見えるが縄文晩期とする。38は断面三角突帯を貼り付ける。ボウル状の器形であろう。43の外面は煤が厚く付着している。67は内外ともに煤けしており、内面にはコゲのようなものが付着している。粗製だがつくりはよい。68の口唇部は幅11mmが窪んで広くなり、そこに二枚貝の肋条痕が印されている。70~72は外面口縁下に複数沈線を施す。これらはほとんどが縄文晩期後半に属するとみてよいが、70~72が縄文晩期前半で、28は弥生早期の可能性がある。

刻目突帯文土器(73~83) 73・74は口縁に突帯はないが、肩部に存する可能性がある。75のみが肩部で屈折しない直口の形状となる。78~83の肩部突帯より下位は煤ける。76・77・79・81の刻みは粗い。80の復元口径は17.6cm。これらは弥生早期に位置づけられる。

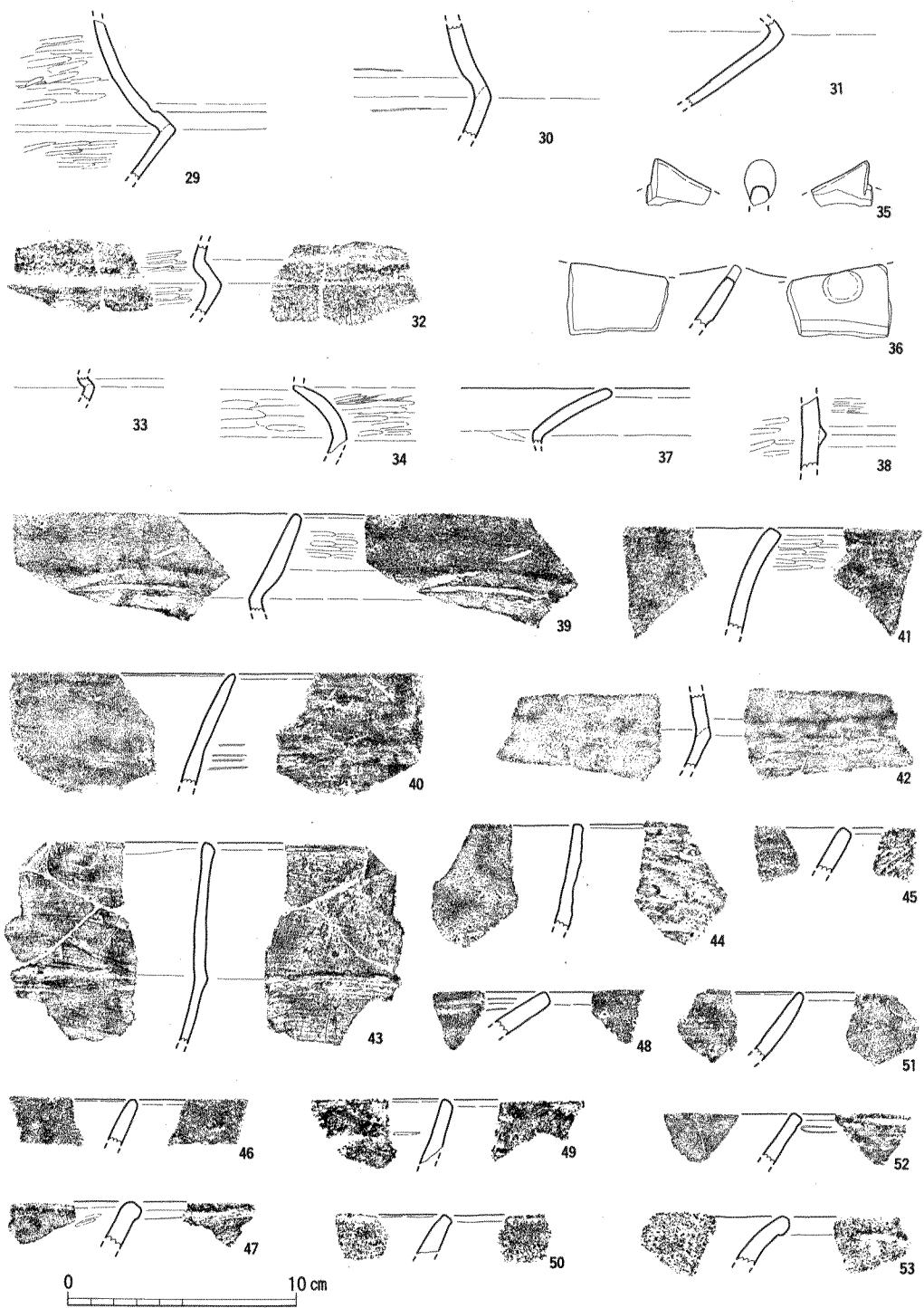
壺(91~100) 91は頸部片で、外面は丹塗磨研だが、その上に山形文かと思われる文様の一部が見られる。93の外面口縁下には沈線とは言えないほどに浅く細い条線がある。94・95は肩部に無軸と有軸の羽状文がある。96は外面と内面口縁下に薄い赤色顔料を塗布している。復元口径21cm。97・99は三重、98は二重の弧文が施される。100は大型品。92・96が弥生早期で、他は弥生前期とする。



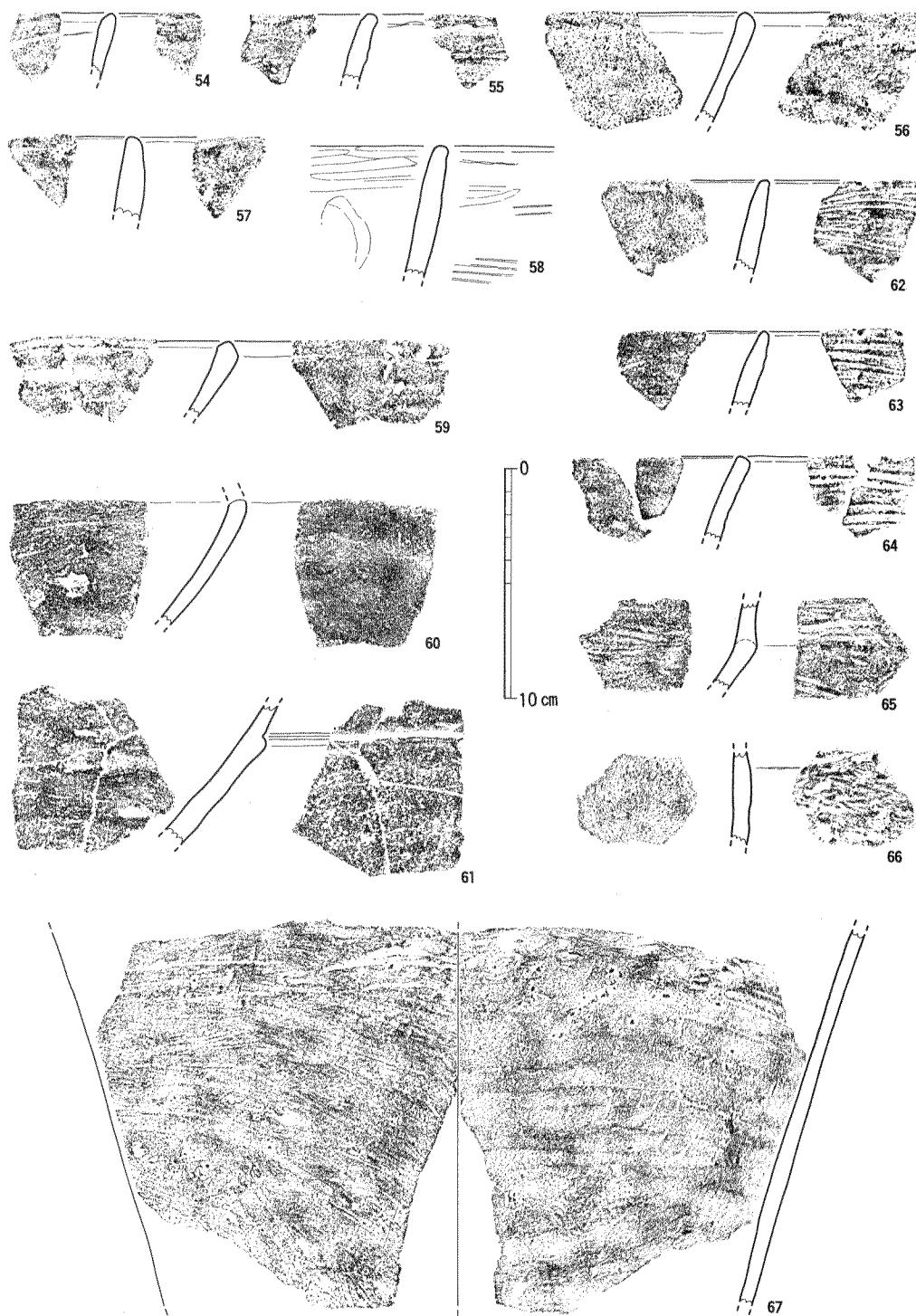
第85図 5・7トレンチ間包含層出土土器実測図4 [D・F層] (1/3)



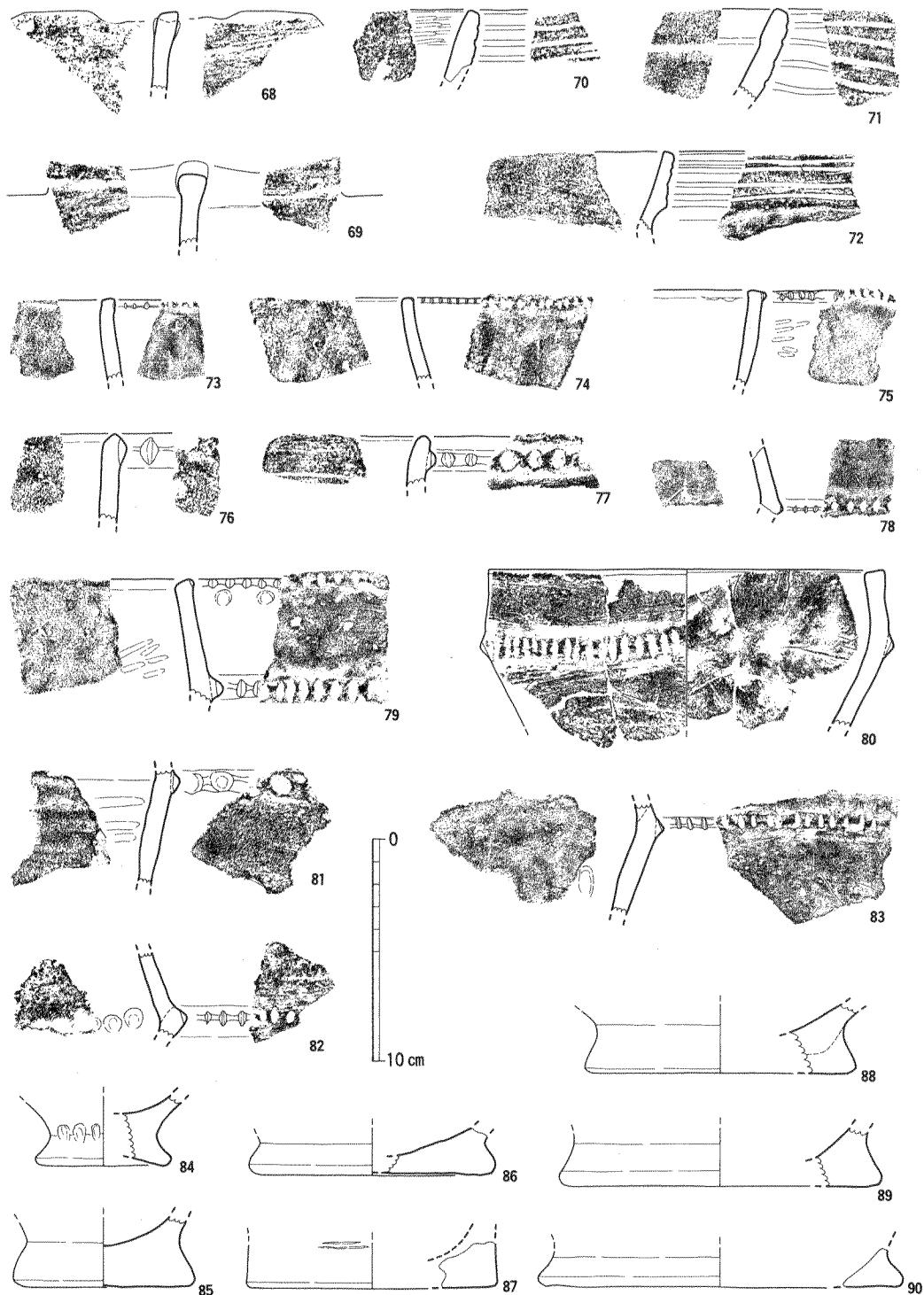
第86図 包含層等出土土器実測図 1 (1/3)



第87図 包含層等出土土器実測図2 (1/3)

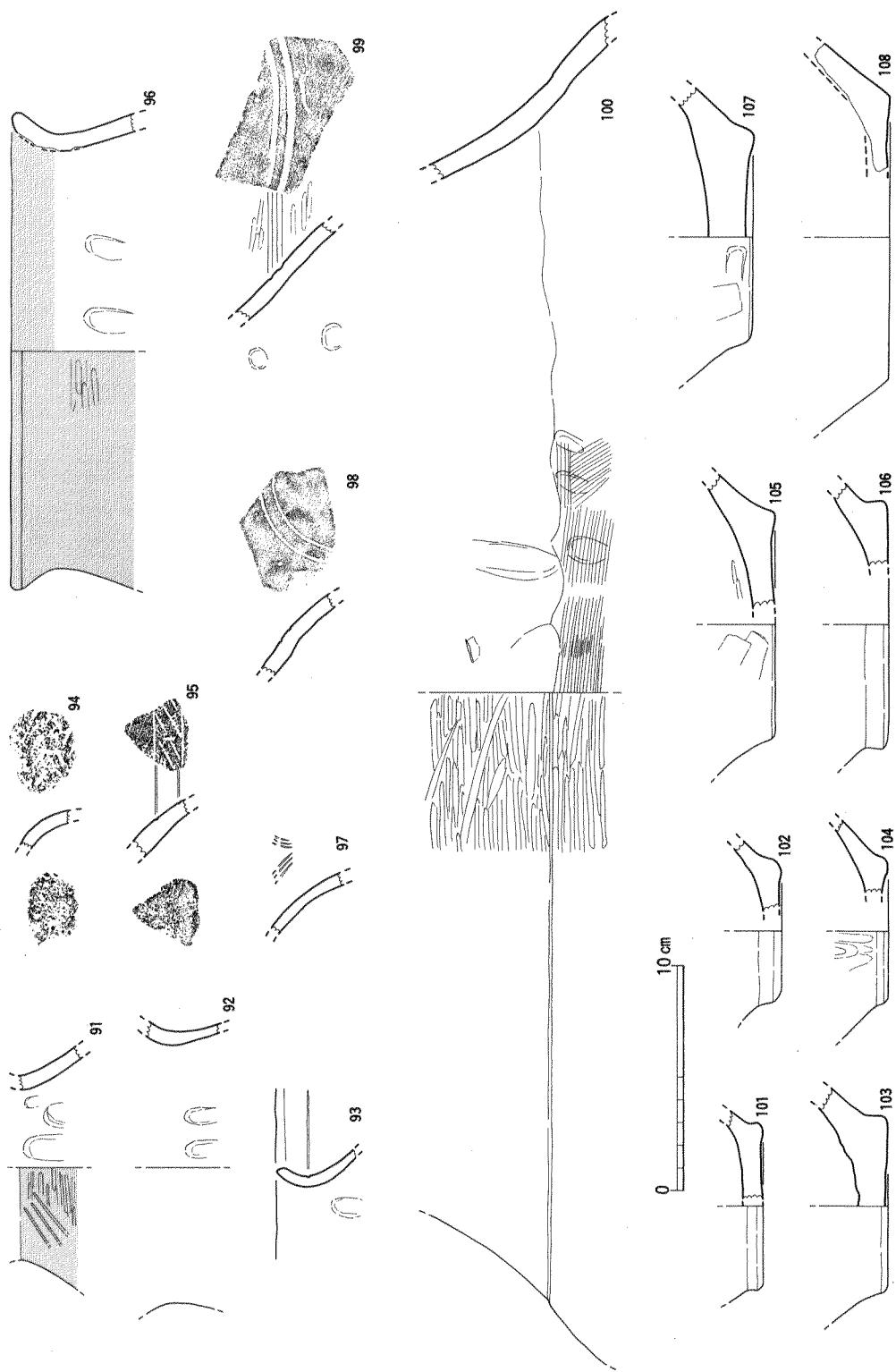


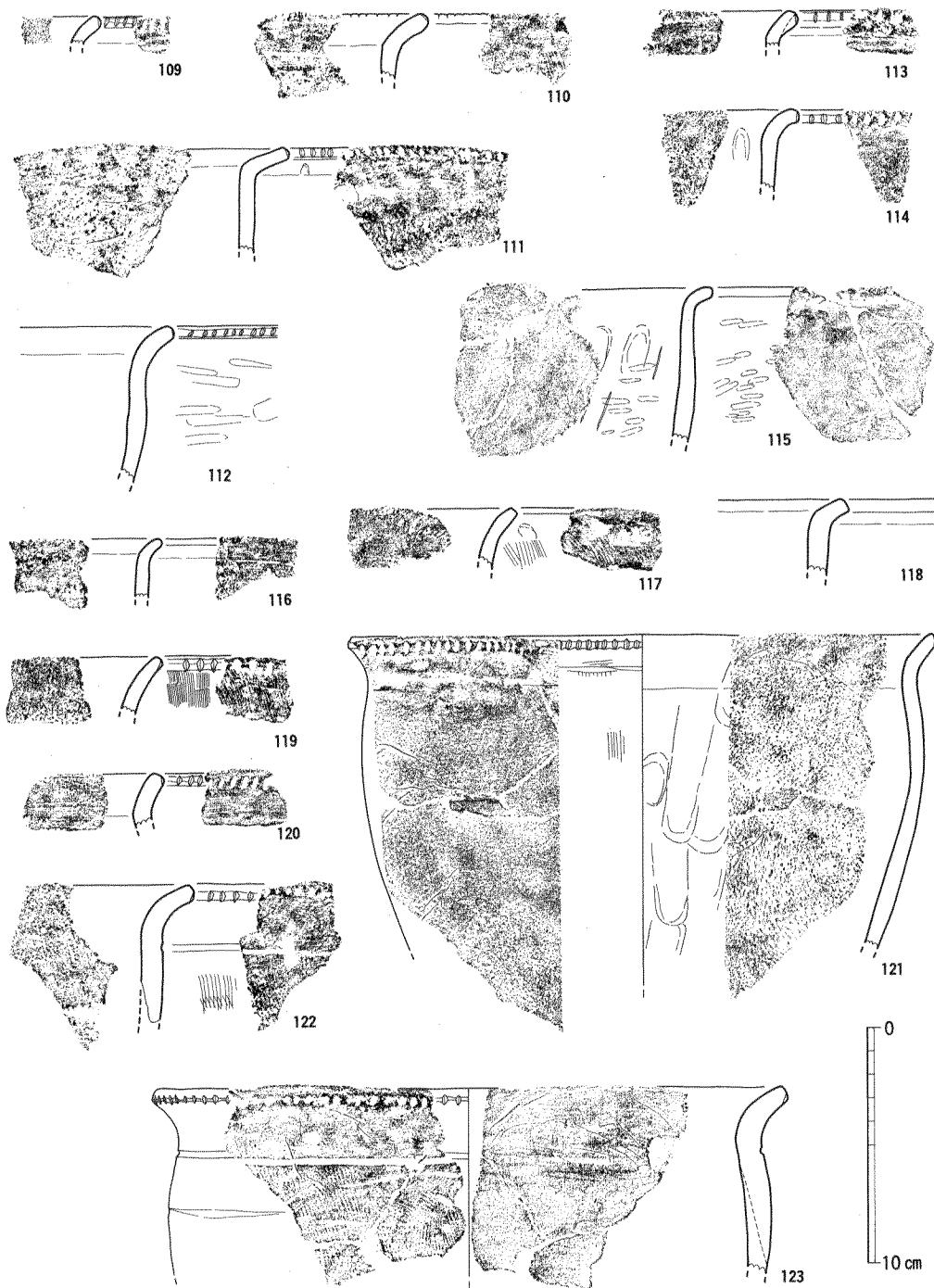
第88図 包含層等出土土器実測図3 (1/3)



第89図 包含層等出土土器実測図 4 (1/3)

第90圖 包含層等出土器實測圖 5 (1/3)



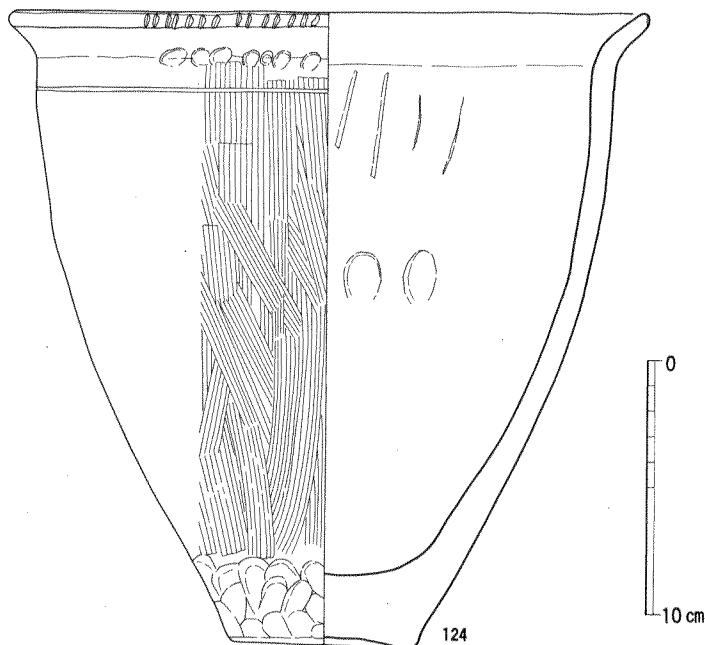


第91図 包含層等出土土器実測図 6 (1/3)

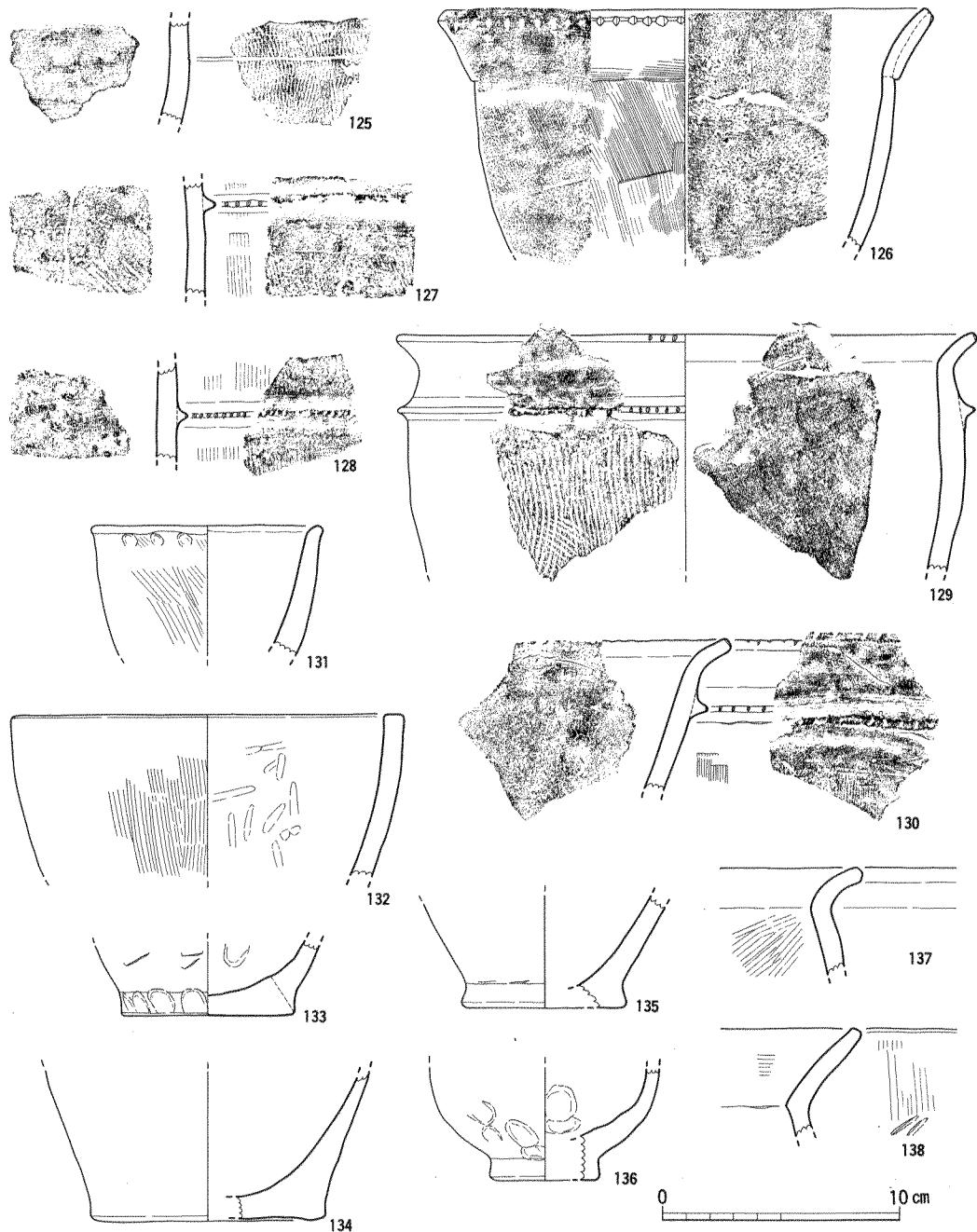
甕(109～130、137・138) 109～114は口唇全面に刻目に入るものであるが、110はヘラ先で切り刻んだような施し方である。111は屈折の度合いが強い。113は口縁をかなり肥厚させている。115～118は刻目のない破片だが、115は口縁端部が破損していて断定はできない。これは内外ともミガキが施されている。119～124は口唇下端のみに刻目が施される。121の外面は二次熱を受け、内面は煤けている。復元口径24.5cm。122～125は肩部に沈線が入る。123は復元口径26.6cmで外面は煤けている。124の分厚い底部の外面は指押さえ痕が著しい。口径25.4cm。126も口唇下端のみに刻目が入り、口縁を肥厚させているため肩部には大きく段が付く。復元口径21cm。127・128の刻目のある突帯は129・130のように肩部に貼り付けられたものである。129は胴部にやや張りがあり、外面は煤ける。復元口径24.5cm。109～118は弥生前期初頭～前半、119～125は前期中頃～後半、126～130は前期後半～末に位置づけられよう。137・138はとともに弥生後期の土器であろう。

鉢(131・132) 131は土師器の可能性がある。復元口径9.8cm。132は口縁内外と外面は煤けている。復元口径16.7cm。弥生前期。

底部(84～90、101～108、133～136) 84～90は縄文晩期の鉢の底部であろう。84の内面は黒変している。86・88の外底面には原体不明の小さな窪みとなった圧痕が多数見られる。全て縄文晩期であろう。101～108は壺の底部かと思われる。101・102・104は外周がわずかに高台風となり、縄文晩期であろう。その他は弥生早期～前期と思われる。133～135は甕、136は鉢もし



第92図 包含層等出土土器実測図 7 (1/3)

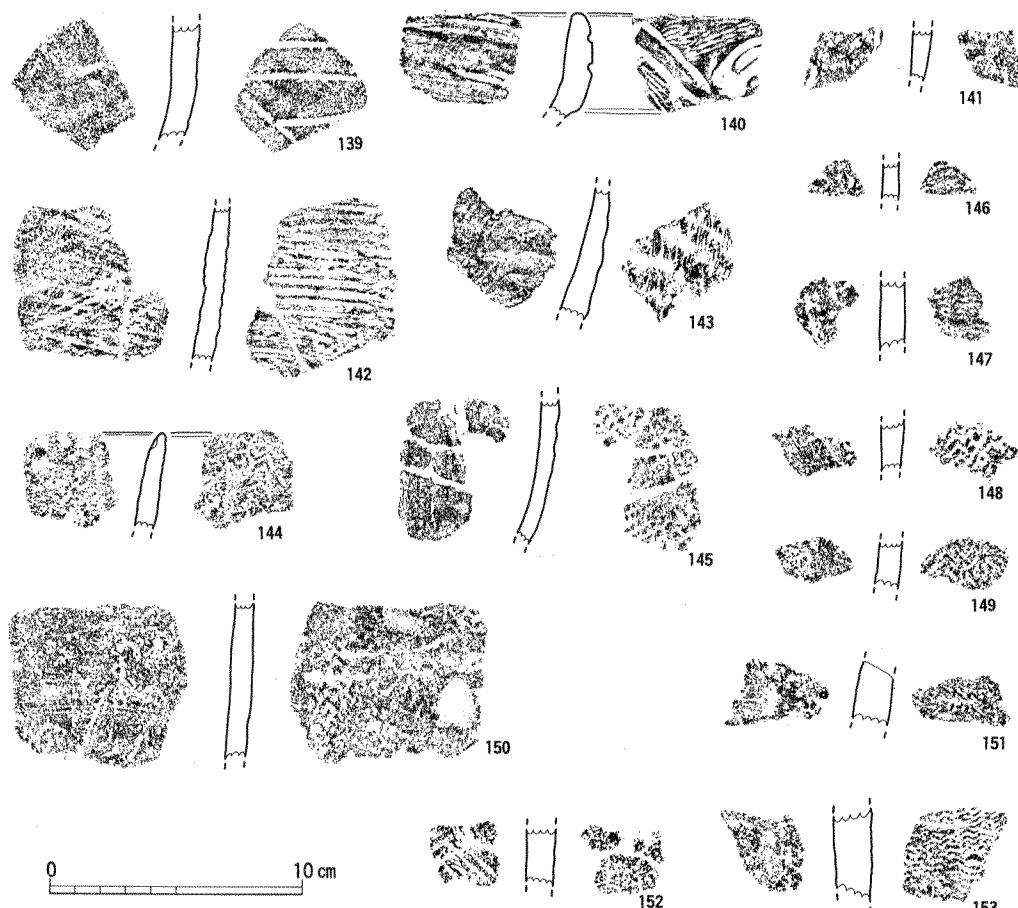


第93図 包含層等出土土器実測図 8 (1/3)

くは椀であろう。133・135は内面が煤けている。133・134・136は弥生前期、135は縄文晩期かと思われる。

縄文後期以前の土器(139～153) 139は後期の鐘崎式か。140は後期中頃と思われる。141は中期の阿高式系の土器で、滑石粉末を含んでいる。142は条痕文、143は撫糸文、144～153は押型文土器である。押型文は145のみが楕円で、他はみな山形文である。

出土した場所は次のとおりである。1・4・11・34・37・40・56・85・106・112は第2トレンチ内。20・39・60・110・120・125・129・147は第3トレンチ内。12・62・71・90・142・152は第4トレンチ内。17・146・149は第5トレンチ内。87・92・131は第6トレンチ。140は3・7トレンチ間のC層。148・151は4・7トレンチ間。53・55・72は第7トレンチ東側。10・23・36・46・48・51・78・141は第2トレンチの西側。2・3・9・19・25・29～31・54・65・82・89・123・144は第2トレンチと1号支石墓間。6～8・14・26・32・41・49・50・57・59・63・



第94図 包含層等出土土器実測図 9 (1/3)

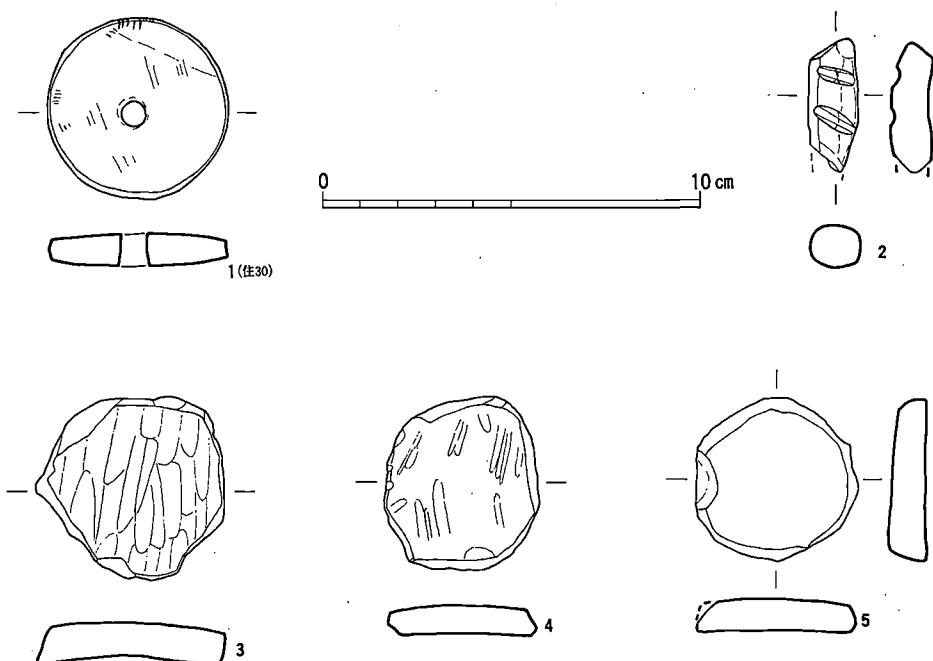
64・67~70・74・76・77・80・86・101・102・104・111・113・116・118・119・122・127・128・130・137・138・139・145・150・153は旧Ⅲ区。13・28・93~95・105・107・114・117・132・134・135は6号溝の南側。16・18・22・33・38・43・45・47・52・58・66・73・79・81・83・96・97・109・126は1号支石墓と1号石棺墓の周辺。21は32号住居跡の西側。24・91・100・143は17・21号住居跡周辺。15・35・42・44・75・133は24・25号住居跡の上面。5は第1トレンチの55号住居跡の所。61は15号住居跡の上層。98は51~57号住居跡周辺の上面。99は2号住居跡の西側。103は65・66号住居跡の間。108は84号住居跡の東側段落ち部。115は22号住居跡の東側。121は13号住居跡の東側。27・84・88・136は不明または表採。

土製品(図版23、第95図4・5)

第95図4・5は縄文晩期の深鉢の胴部片を利用した円盤である。周縁には磨れたところがある。ともに旧Ⅲ区の遺構検出時に出土した。

石器(図版24~30、第96図1・2・4、97図2・4、98~102図23・24・46~63・85・86・88~106・108~111、103~105図7・25~36、107~110図34~38・57~77)

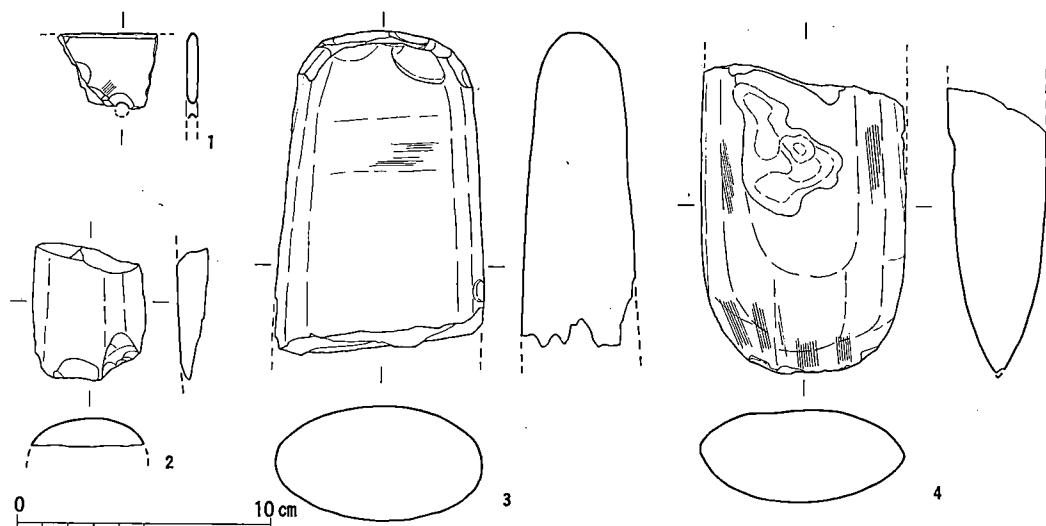
第96図1は石包丁の破片で、背が長さ39mmしか残っておらず、背孔間は28.5mmを測る。直背外湾刃になろう。第2トレンチ内の6号溝最下層から出土したが、もとより6号溝に伴うものではなく、包含層VIに属していたのではないかと思われる。同2は磨製石斧の破片で、旧Ⅲ区



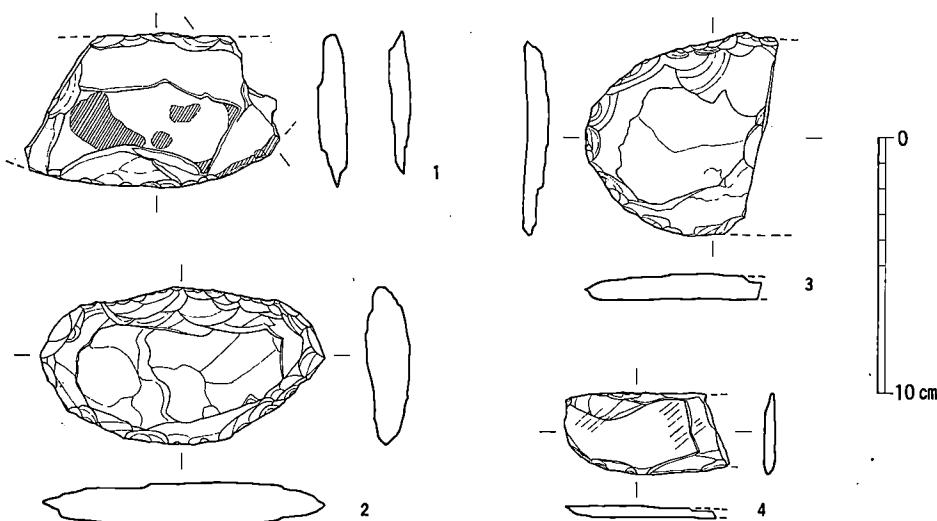
第95図 土製品実測図〔縄文~弥生〕(1/2)

の遺構検出時に出土した。同4は蛤刃の磨製石斧で、器表には擦痕があり、刃部周辺には使用による刃こぼれと条痕がある。2号住居跡の北側で、2号溝が一段深くなる肩部の所で出土した。

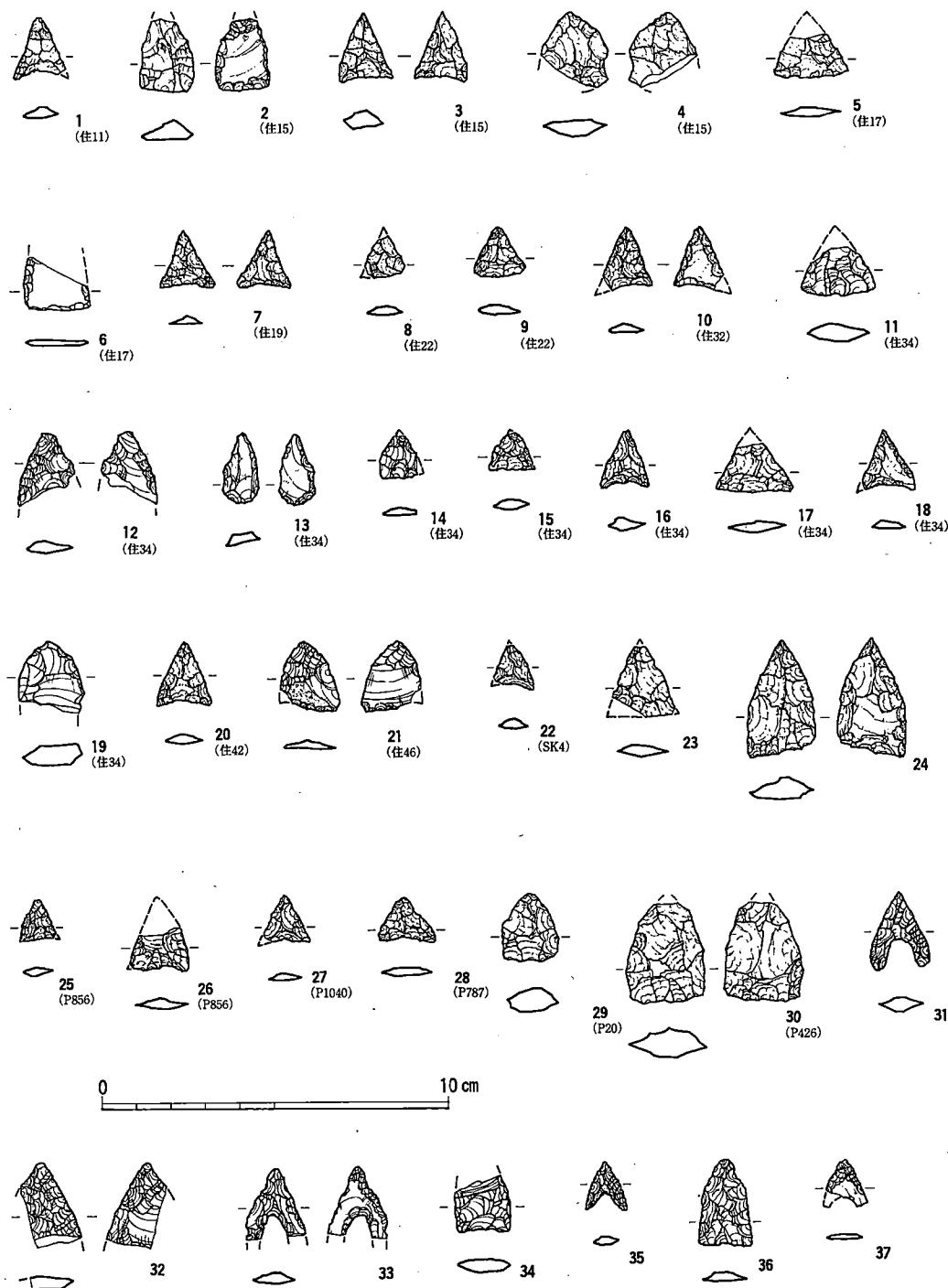
第97図2は片岩の杏仁形をした打製石器であるが、石包丁形石器としておく。磨いたような痕跡はない。1号支石墓の西側包含層から出土した。同4も薄い片岩で、器表の片面は磨いている。土掘り具としても薄すぎるので石包丁形石器としておく。4・7トレンチ間の包含層から出土した。



第96図 大陸系磨製石器実測図 (1/3)



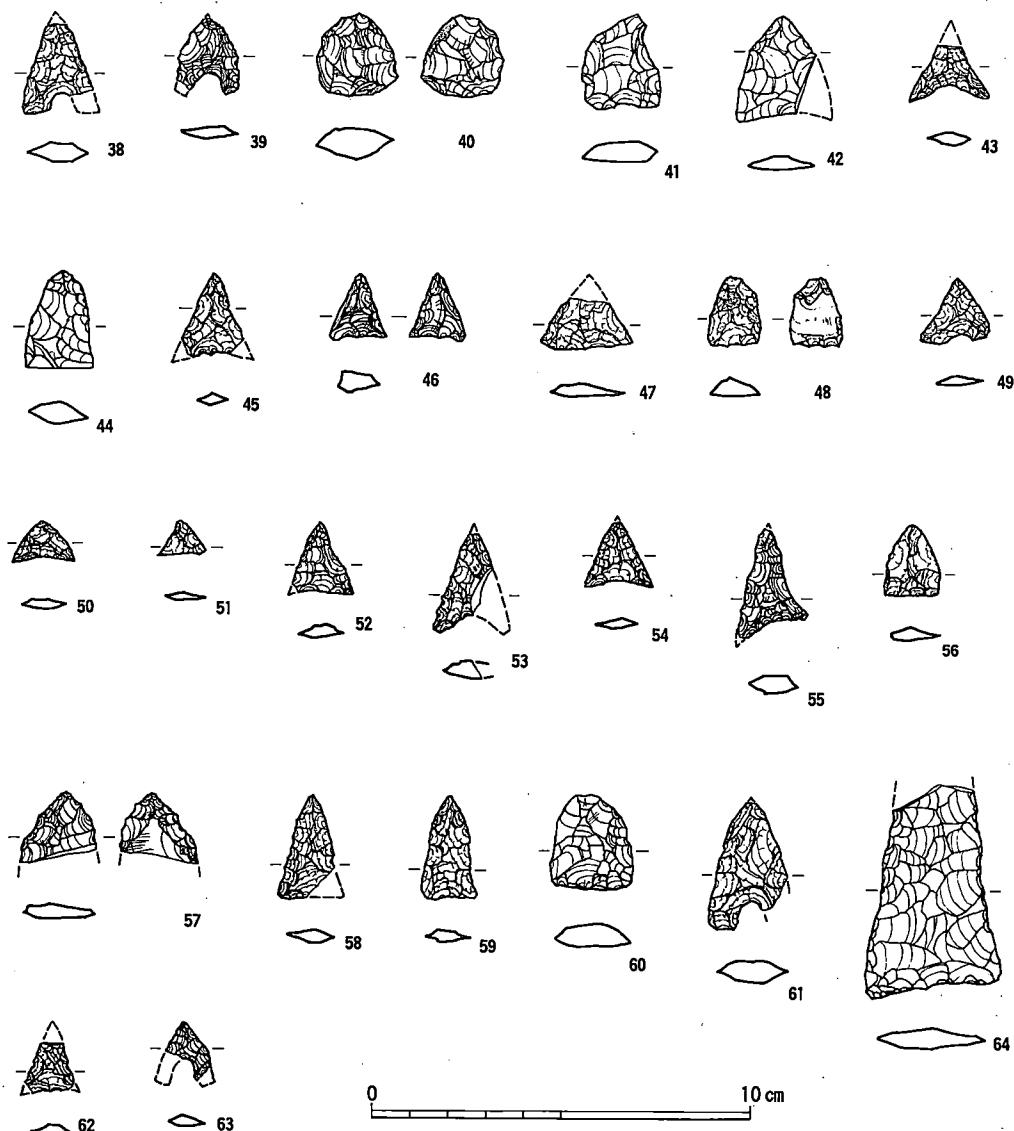
第97図 石包丁形石器実測図 (1/3)



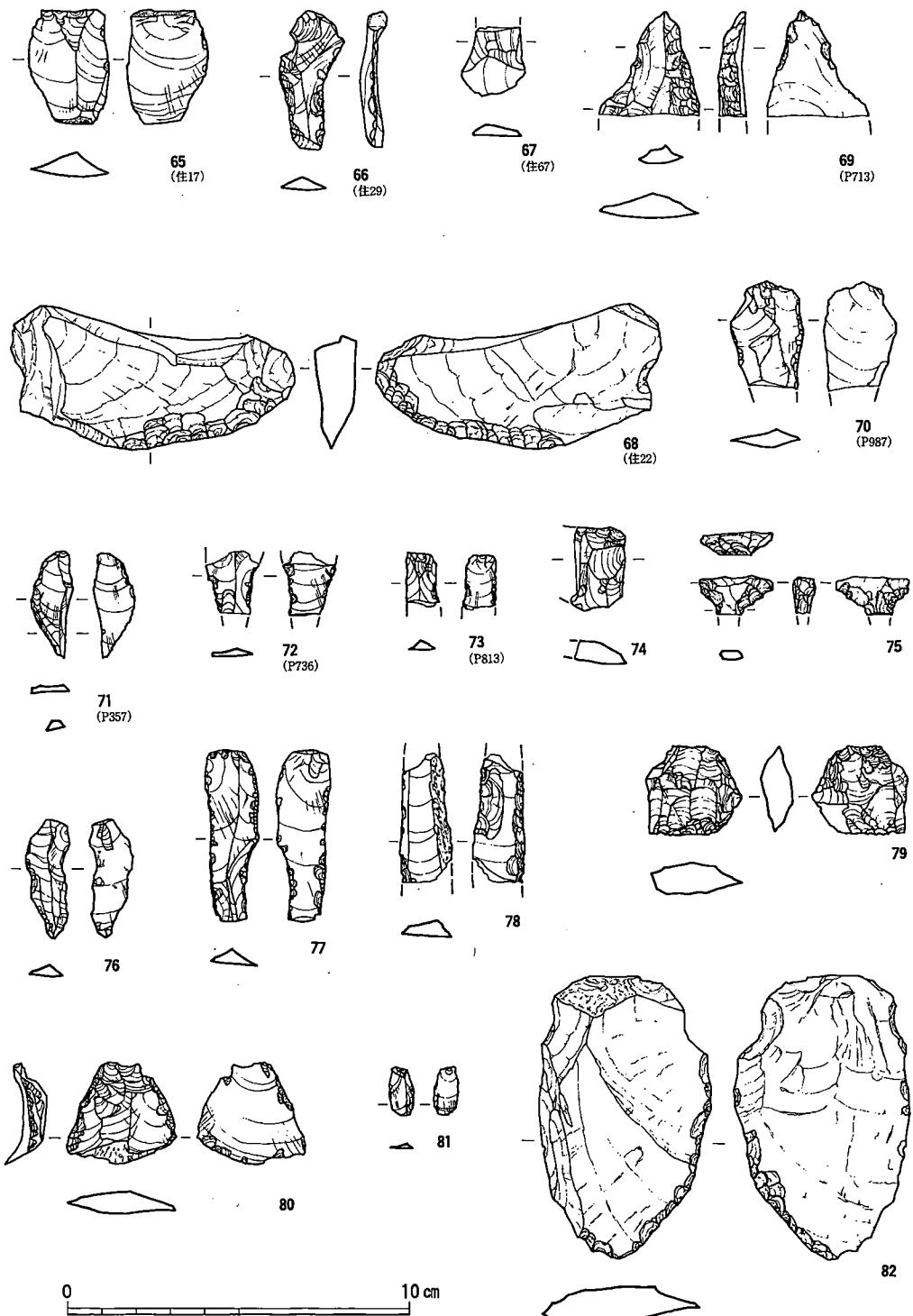
第98図 打製石器実測図1 <石鏃> (1/2)

第98・99図23・24・46～63は打製石鎌で、46・55・57・63は黒曜石、それ以外はサヌカイトである。23・54は薄い。55は鎌というよりスクレイパーの可能性もある。61は大型品。23が16～19号住居跡の上面、24は33号住居跡の北側、46～51は包含層IV、52は包含層III、53・54は1号石棺墓の周辺、55・56は4号土坑の南側、57は2トレンチと1号支石墓間、58・59は4・7トレンチ間、60は2号溝、61は5号溝、62は旧Ⅲ区、63は2号周溝墓の周溝内より出土した。

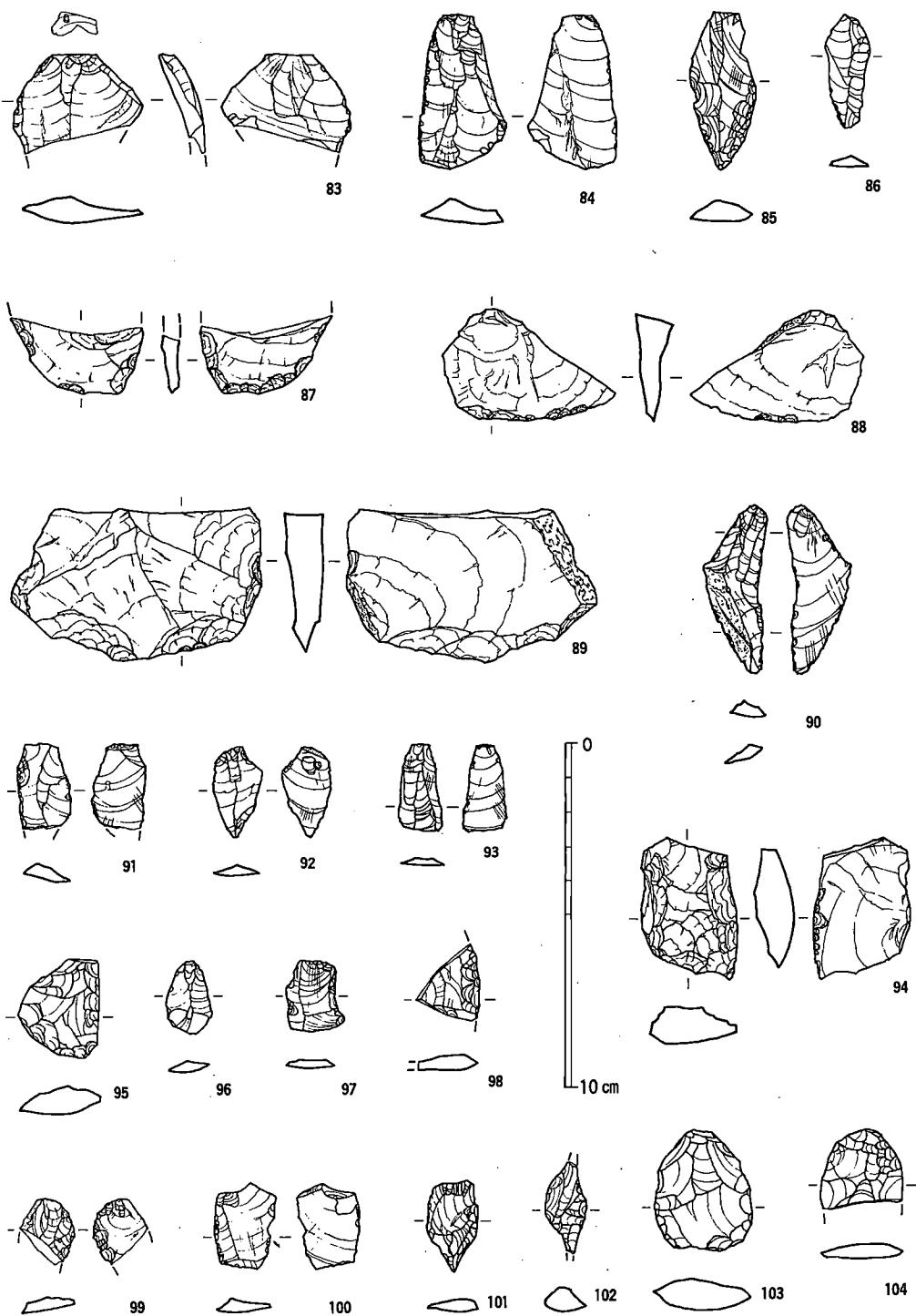
第101・102図85・86、88～106、108～111は87～89・94・95・98・99・103・104・106～109・



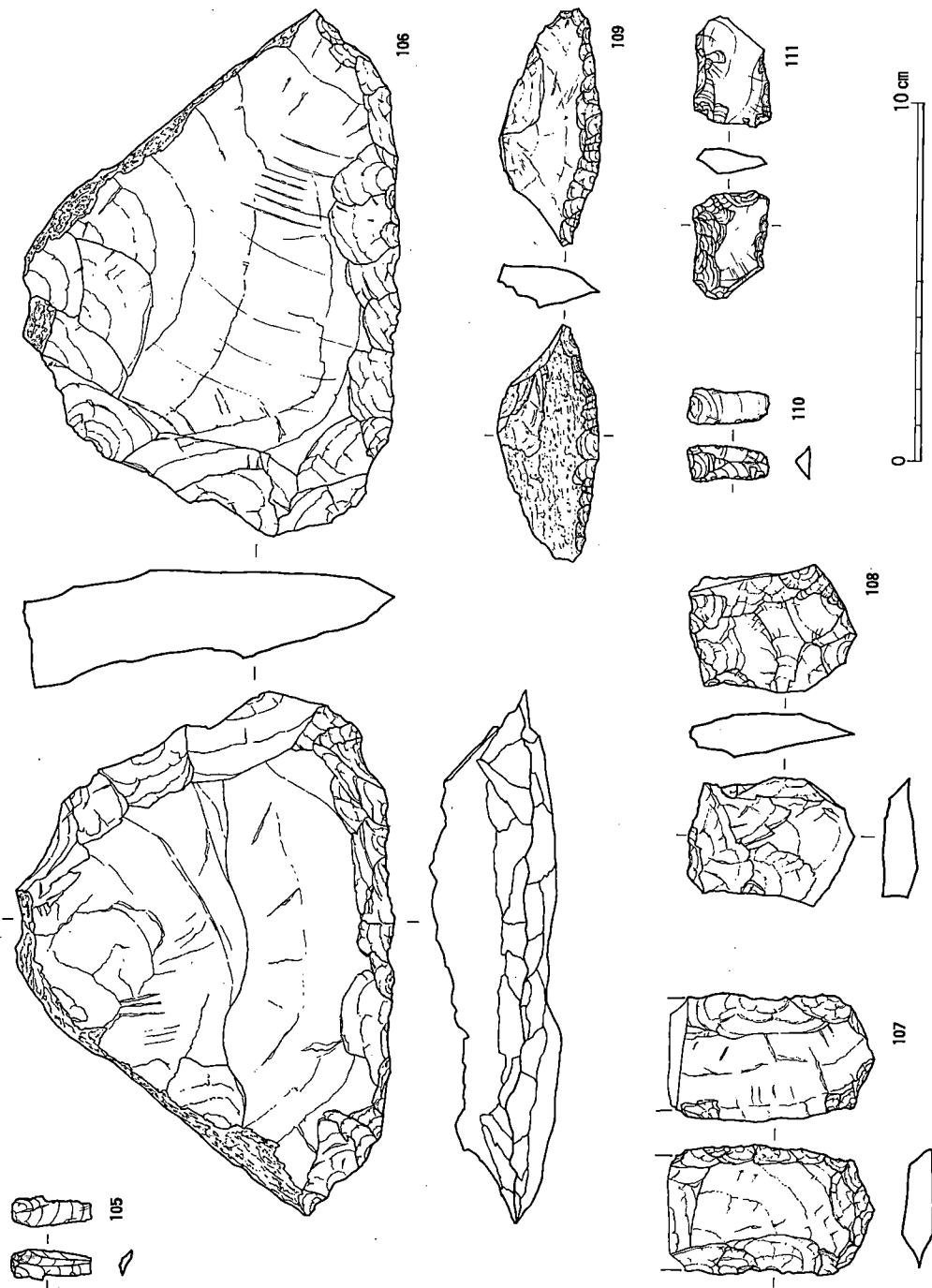
第99図 打製石器実測図2 〈石鎌〉(1/2)



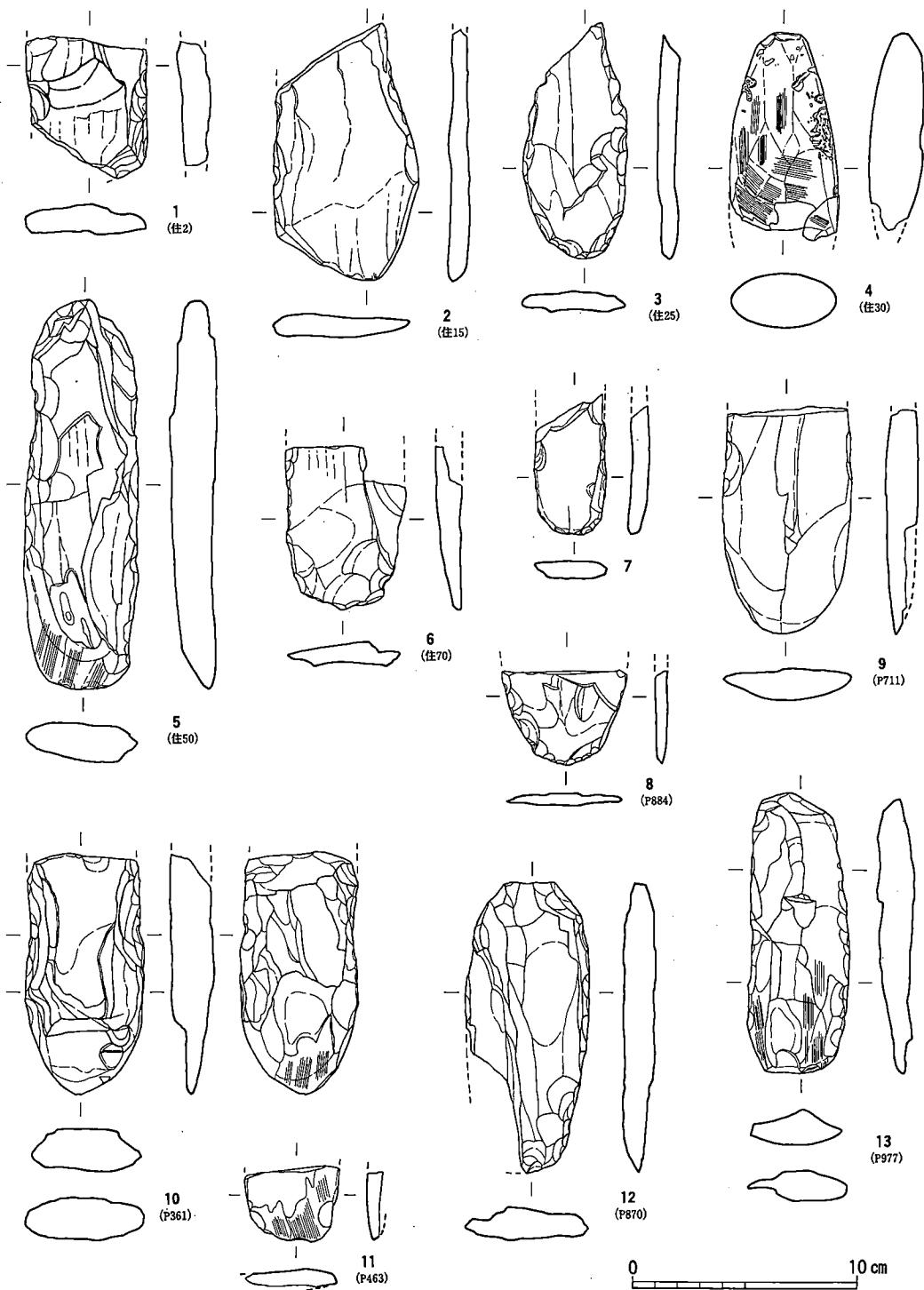
第100図 打製石器実測図3 <スクレイパー等> (1/2)



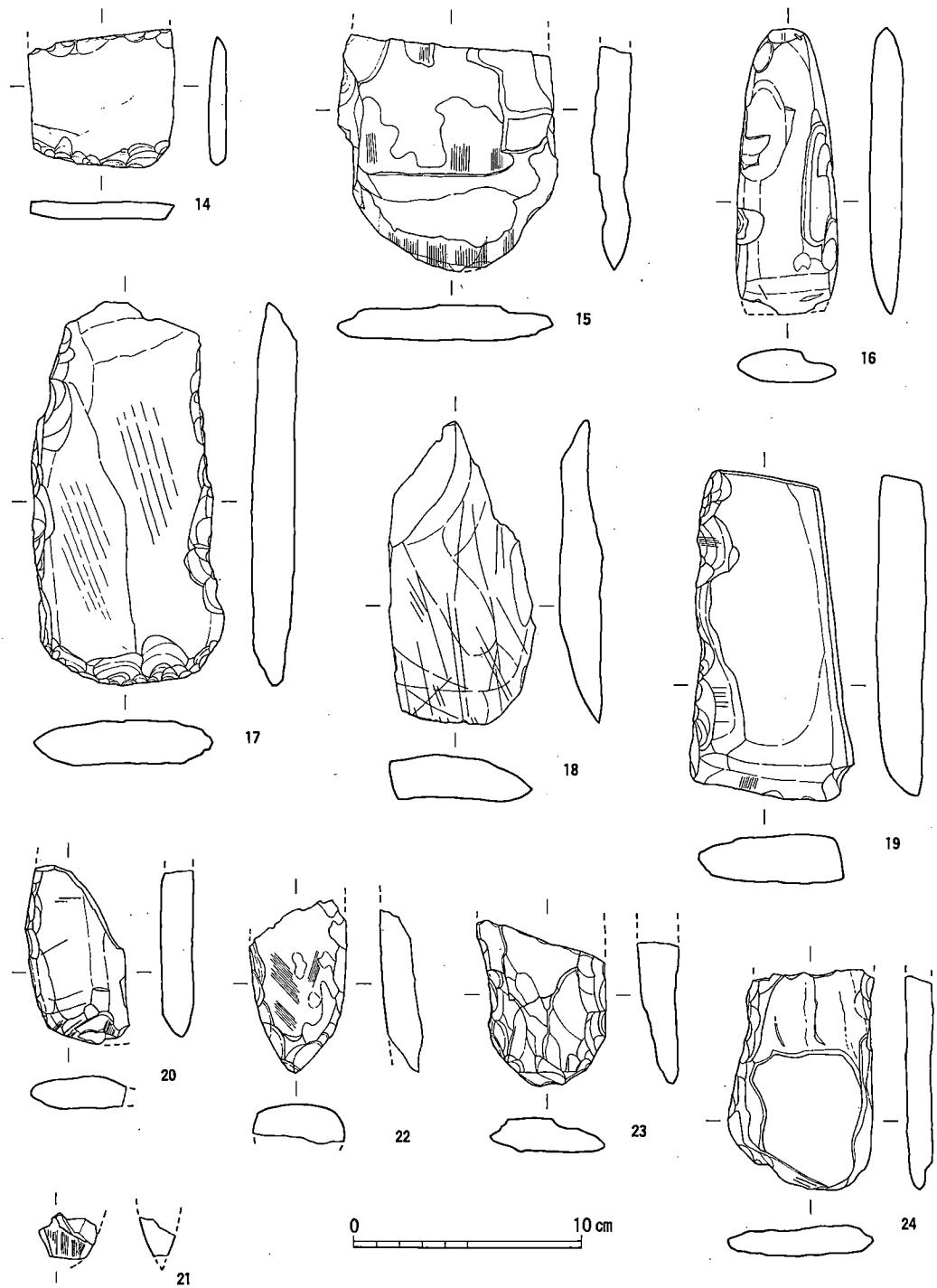
第101図 打製石器実測図 4 <スクレイパー等> (1/2)



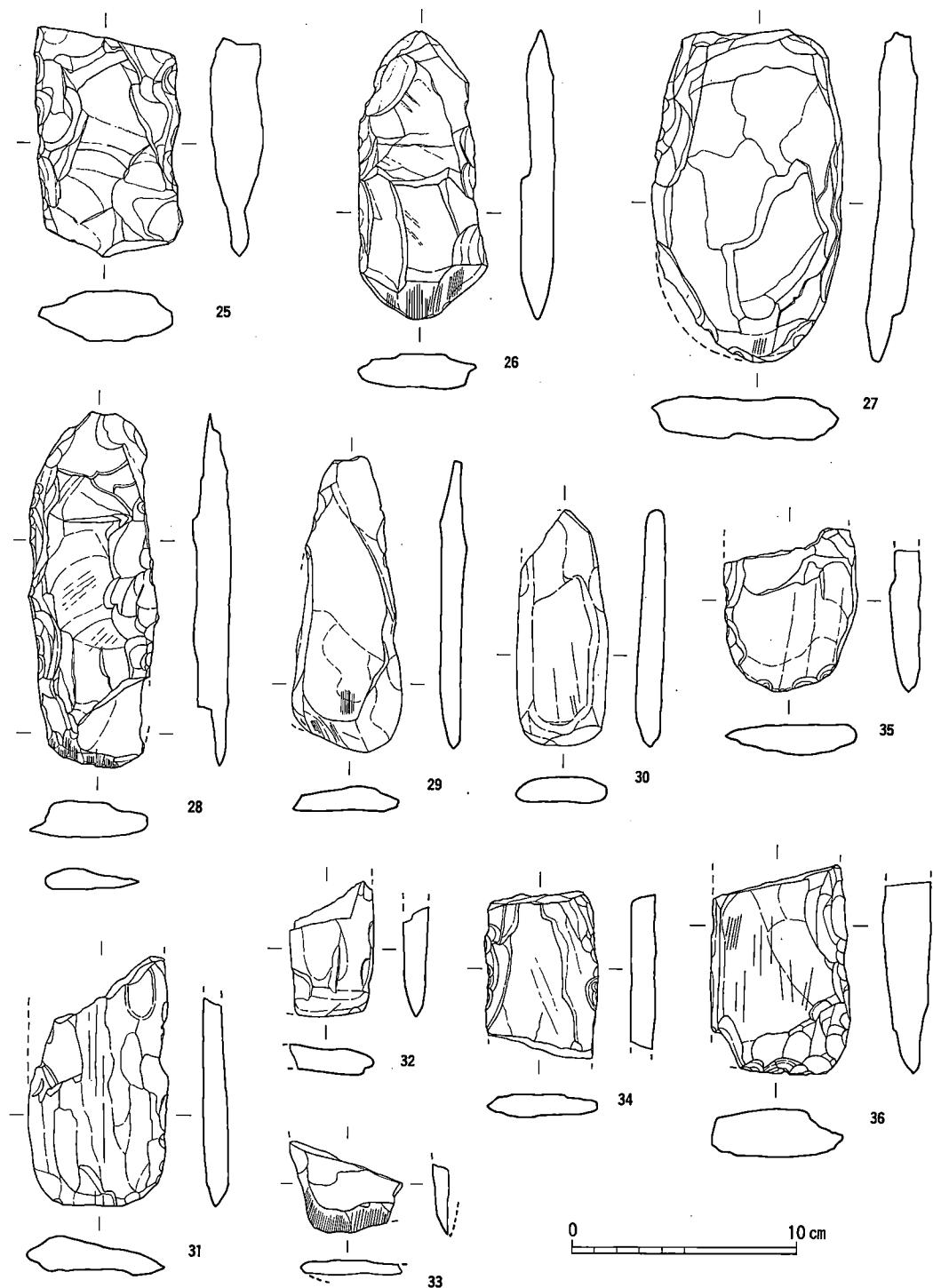
第102図 打製石器実測図 5 <スクレイバー等> (1/2)



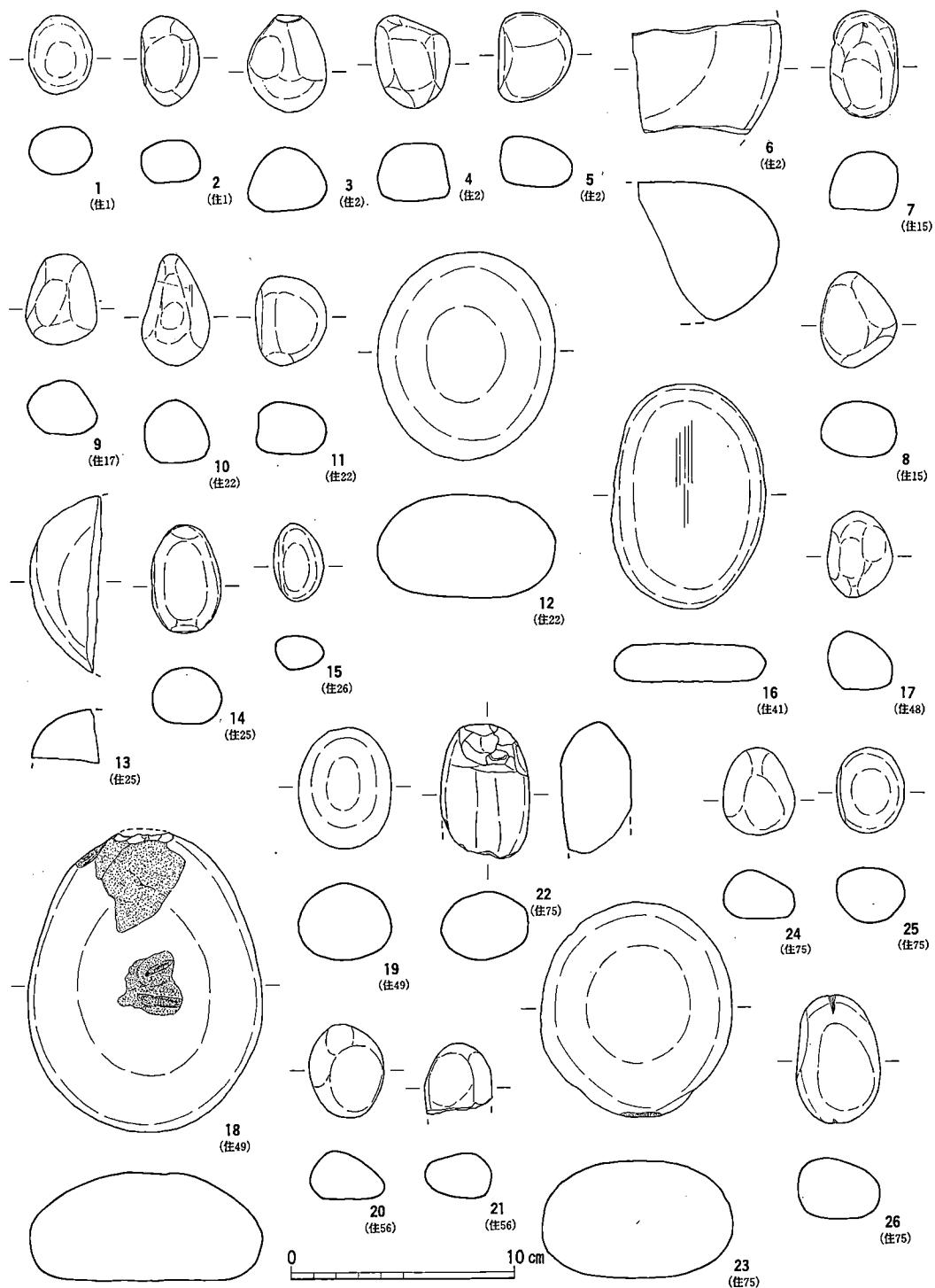
第103図 石斧実測図 1 (1/3)



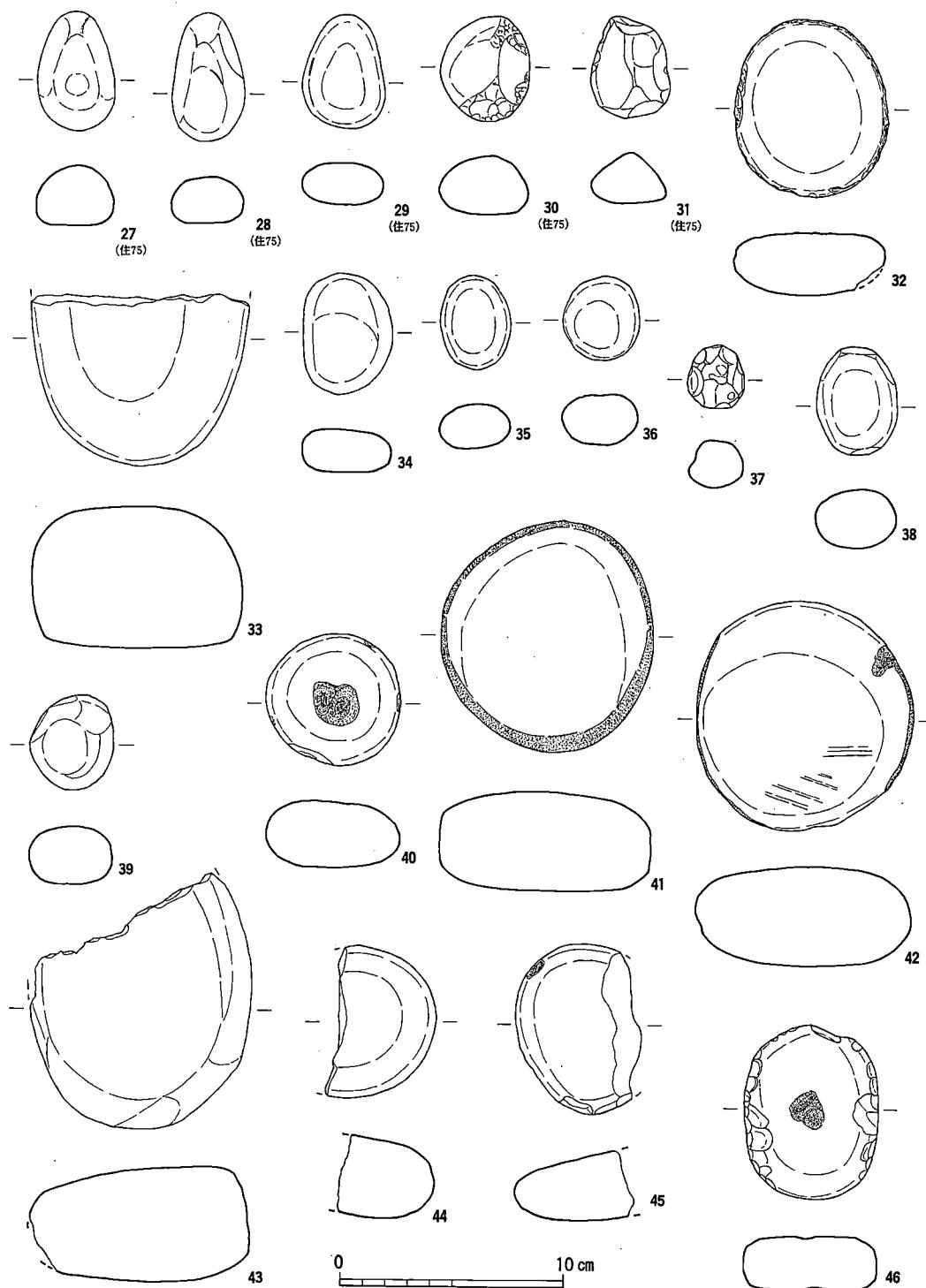
第104図 石斧実測図 2 (1/3)



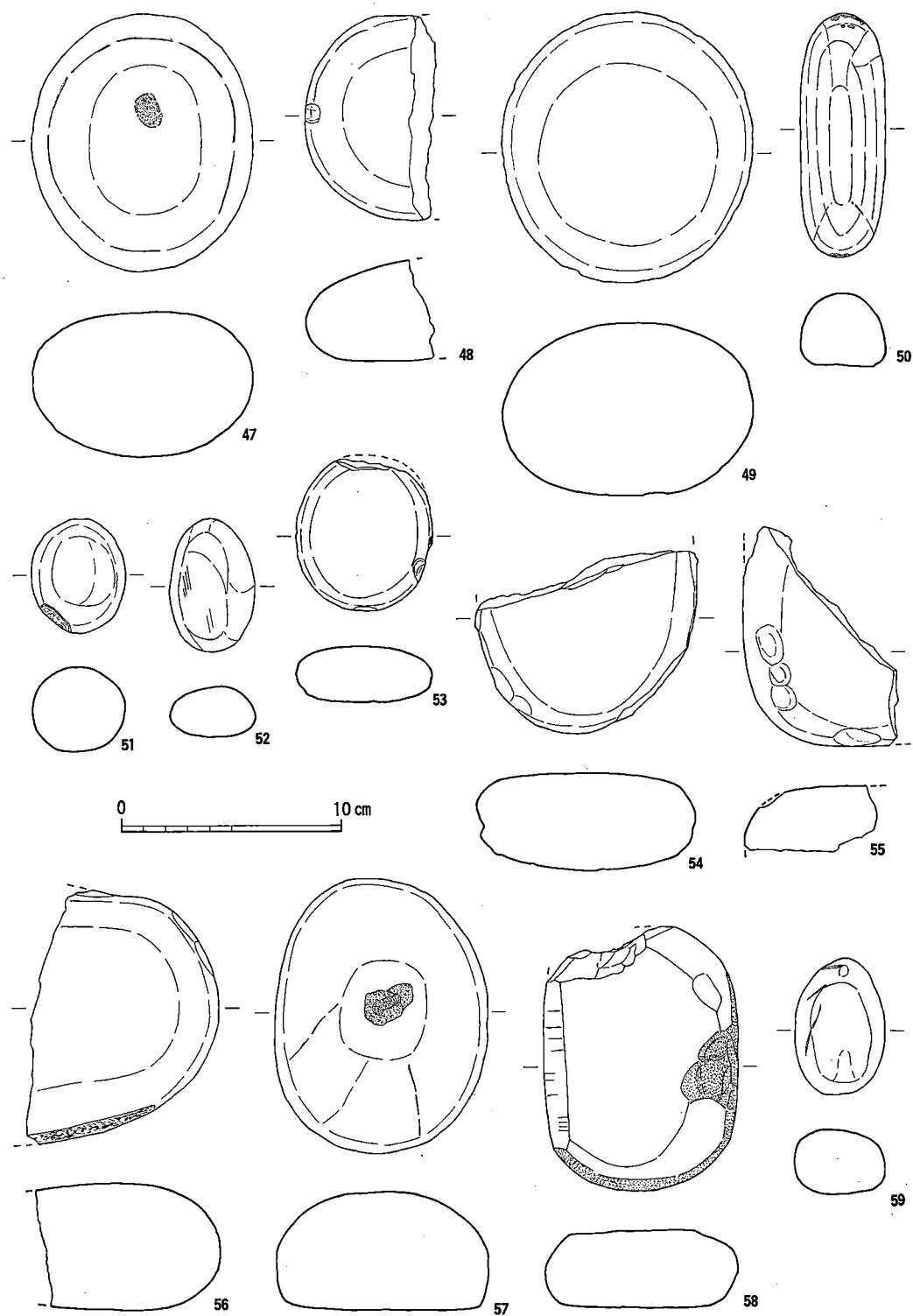
第105図 石斧実測図 3 (1/3)



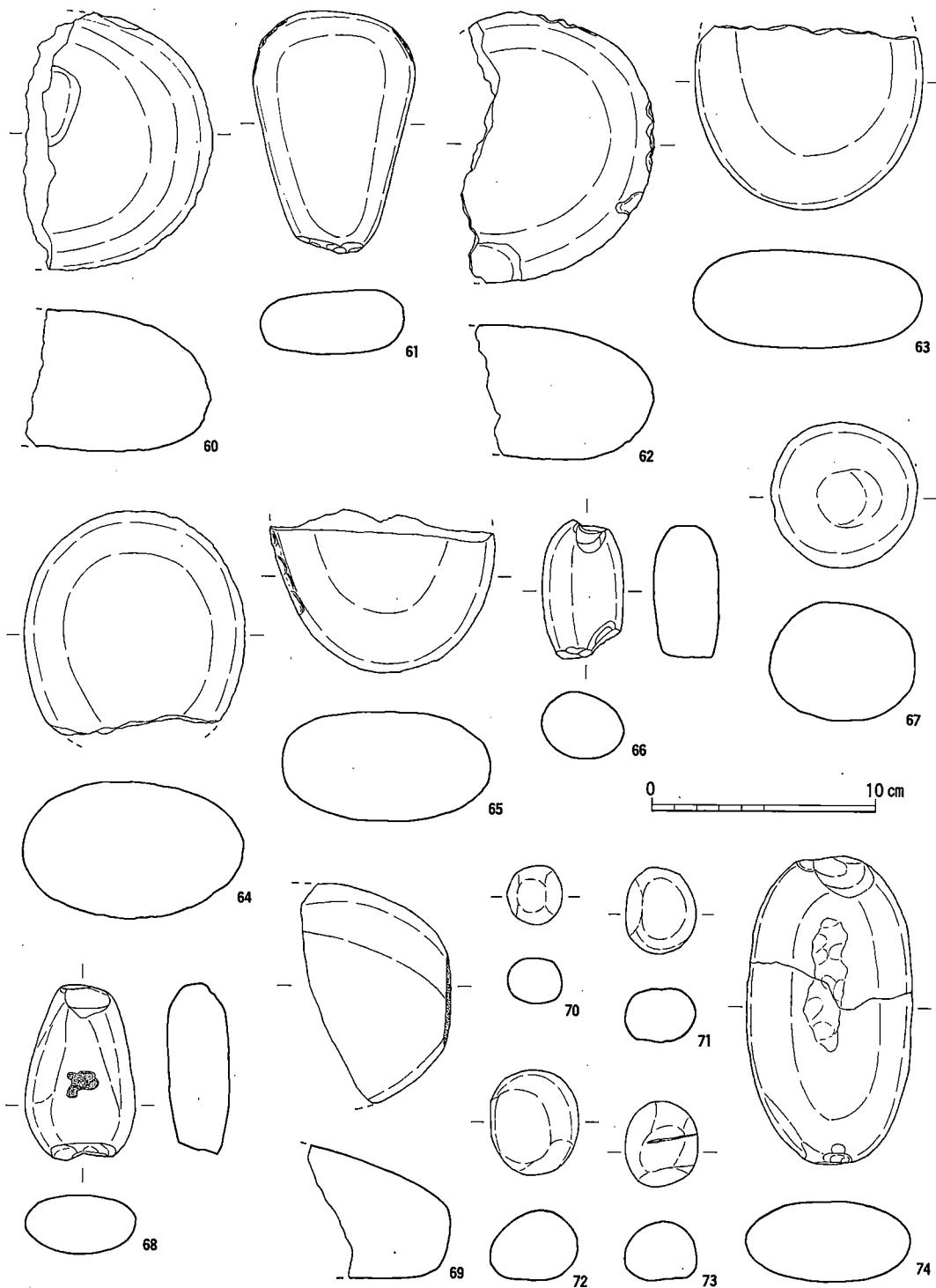
第106図 すり石・叩石実測図1 (1/3)



第107図 すり石・叩石実測図 2 (1/3)



第108図 すり石・叩石実測図 3 (1/3)

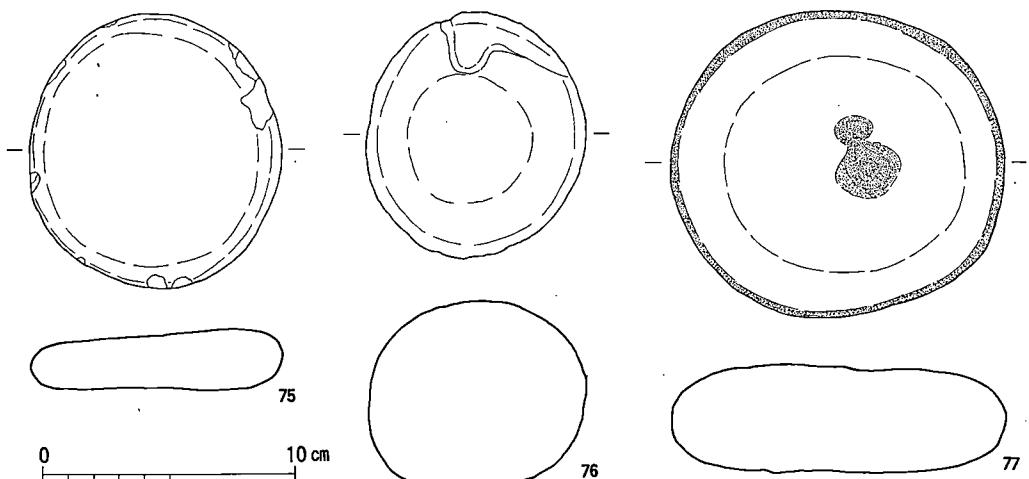


第109図 すり石・叩石実測図 4 (1/3)

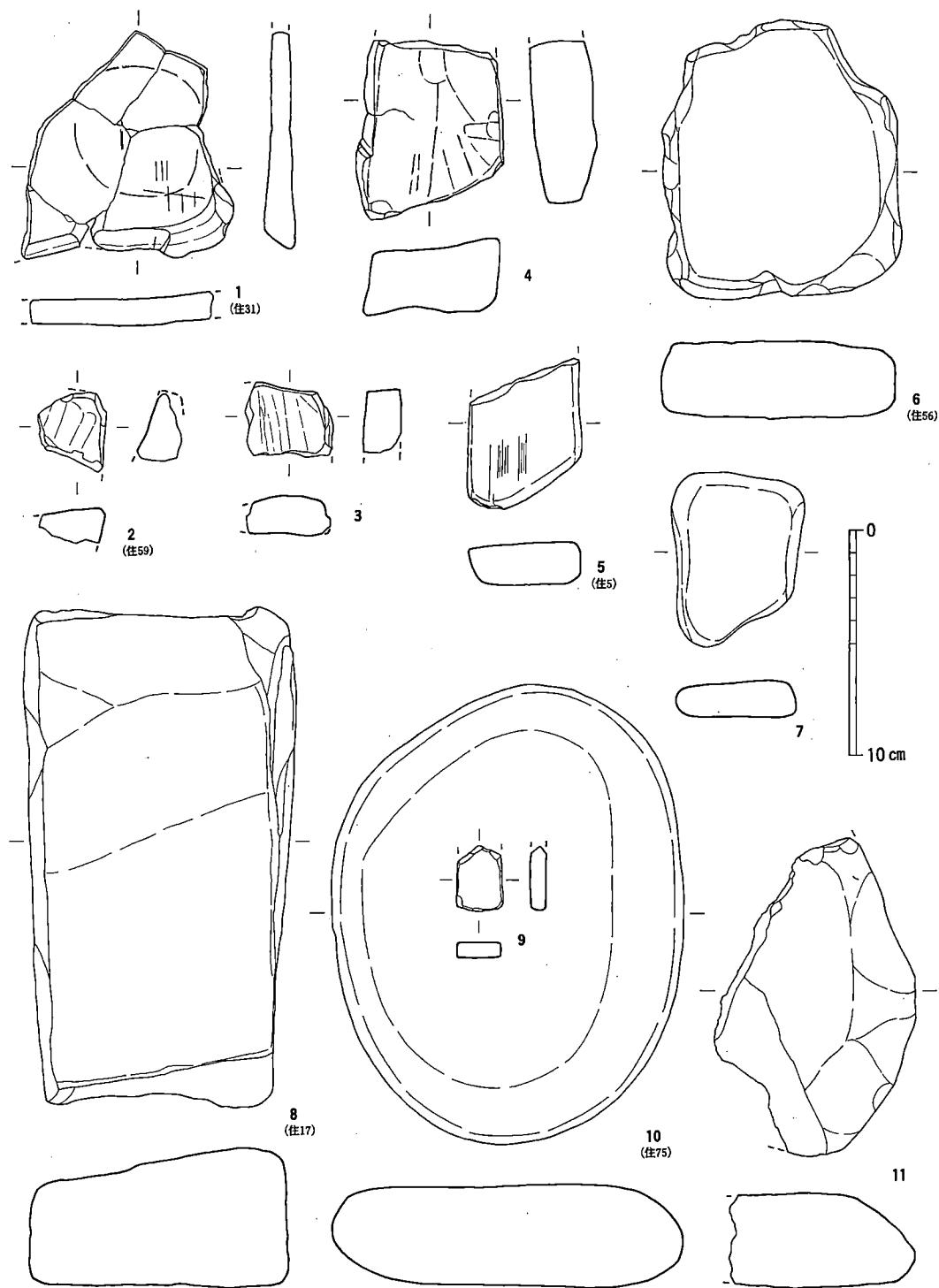
111がスクレイパー、101・102がドリルで、それ以外は使用剝片であろう。94・108はチャートである。106のサヌカイトはかなり大きい。出土した場所は、85・90は1号支石墓周辺、86・93は第2トレンチと1号支石墓間、88は第1トレンチの55号住居跡の所、89・97は第2トレンチ内、91・92・95・96は旧Ⅲ区、94は47号住居跡周辺、98は包含層Ⅳ、99・100は包含層Ⅲ、101・102は1号溝、103は2号溝周辺、104は4号溝、105・106は4・7トレンチ間、108・109は6号溝の南側、であり、110・111は採集品である。

第103・105図7・25～36は片岩の石斧で、7・26～29・31・33・35・36は局部磨製、30・32は磨製、その他は打製である。26の刃部には使用痕がある。34はあるいは石鎌のようなものかもしれない。出土場所は、7は51～57号住居跡周辺上面、25は1号支石墓の西側、26は70号住居跡の東側、27・35は旧Ⅱ区の段落ち部、28は36号住居跡の北西部、29は第2トレンチ内、30は1号溝、31はS X 3、32は26号住居跡東北側の6号溝内、33・34は旧Ⅲ区、36は不明、である。

第107～110図34～38・57～77はすり石もしくは叩石である。38の側面には幾つかの面がある。57は器表の一面が平坦になり、その反対側には敲打痕がある。58は表裏とも平滑であり、側面には条痕と敲打痕がある。59は表裏とも磨れている。61は丸みを帯びた三角形状をなし、その各頂点部に敲打痕がある。62・64の周縁にも敲打痕がある。66は両端部が打欠かれている。68も両端部に打欠きがあり、器表中央には敲打痕がある。69は表裏面ともよく磨れてツルツルであり、端部にはしっかりと敲打した痕跡がある。70～73ははたして使用したものかどうかわからない。74は68と同じで器表の中央に敲打痕があり、両端部には敲打による欠損がある。75も周縁に敲打痕がある。77は表裏に敲打による窪みがある。出土した場所は次のとおり。34～36は1号支石墓の西側、37は2号支石墓の主体部上層、38は1号石棺墓周辺、57・58は6号溝の



第110図 すり石・叩石実測図5 (1/3)



第111図 砥石・台石実測図 1 (1/3)

南側、59はS X 3、60~63・68は旧Ⅲ区、64~66は包含層Ⅳ、67は包含層Ⅲ、69はS R 1、70~72は3号土坑、73は5号土坑、74は5号溝、75は1号溝、76は3号土坑西側付近の6号溝内、77は不明。

c. その他

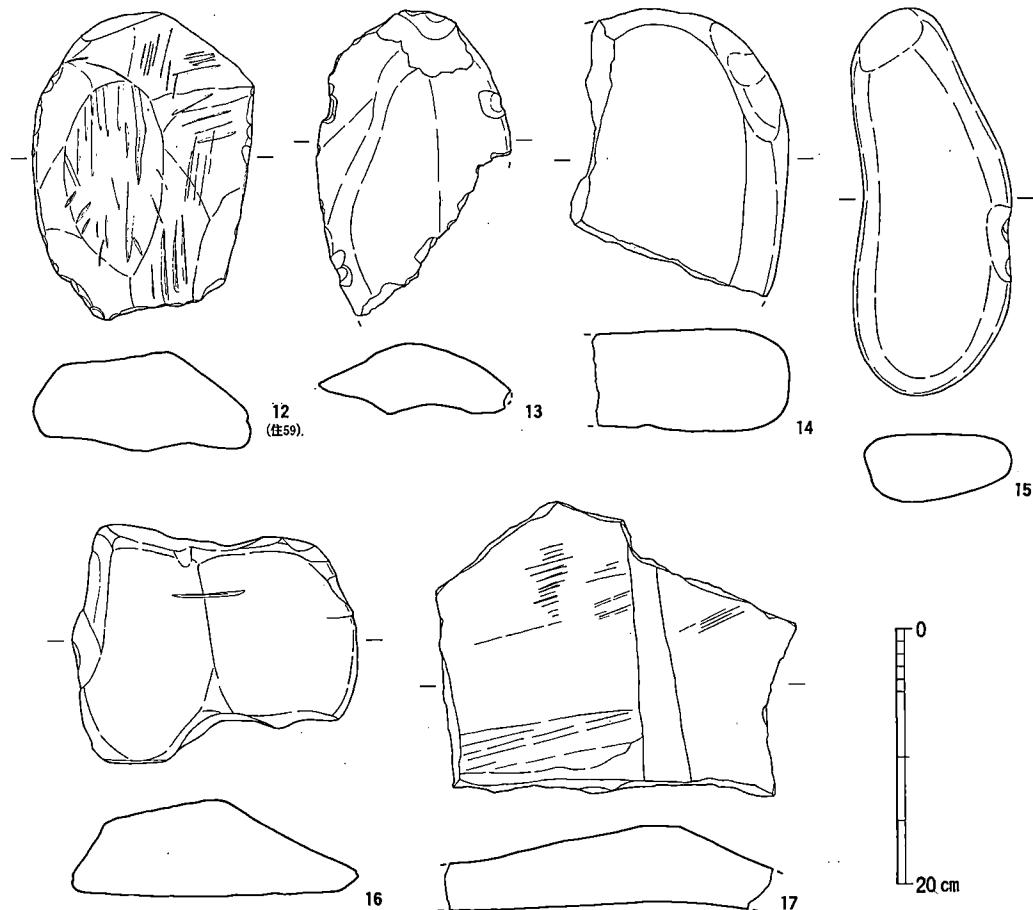
中世等の遺構から出土した縄文~弥生期の土器について触れておく。

●包含層Ⅱ出土土器（第159図22・23）

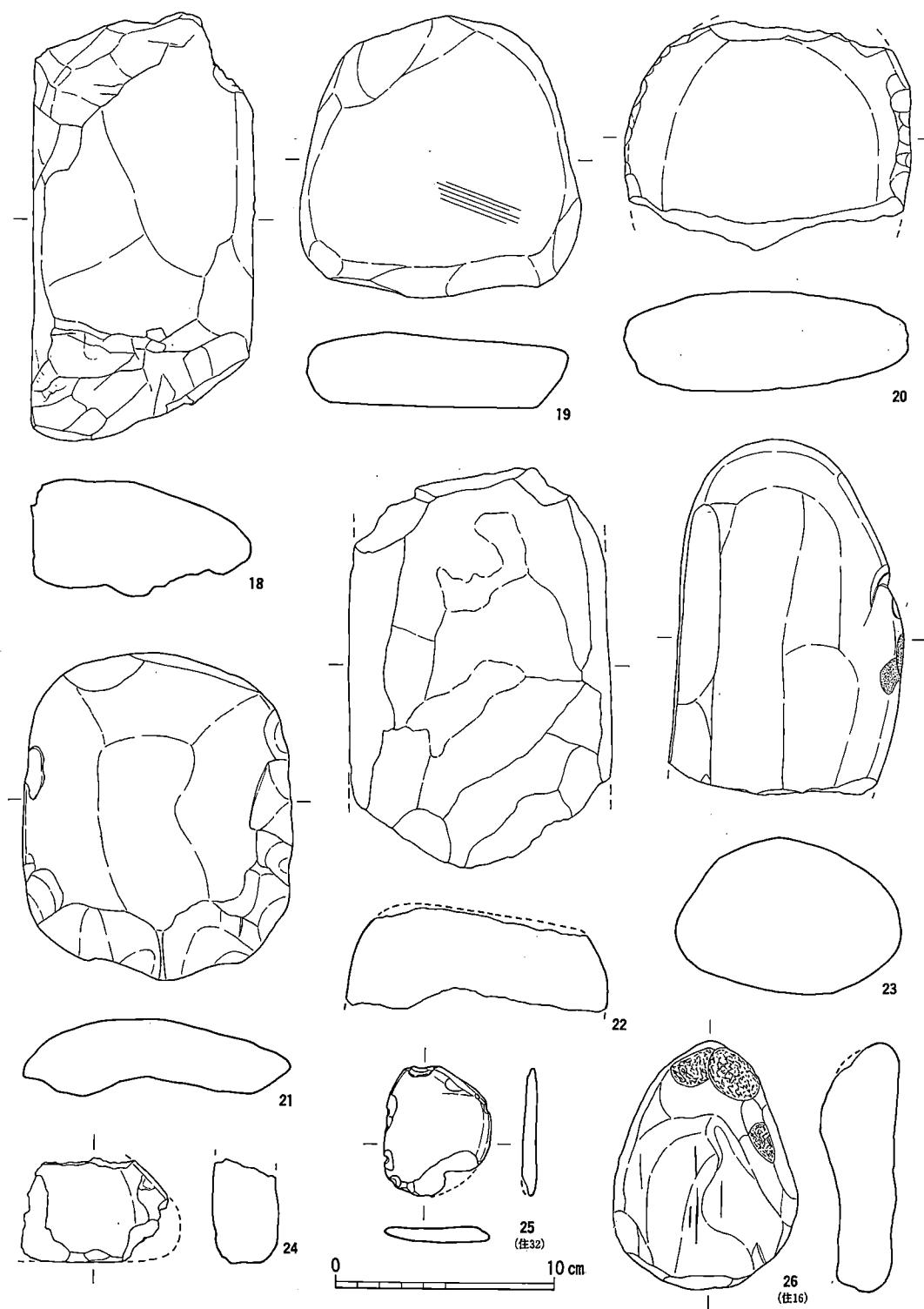
22は壺の肩部から胴部の破片で外面に弧状の沈線がある。23は甕。ともに弥生前期。

●包含層Ⅲ出土土器（第163図76~82）

76・77はよく似た刻目突帯文土器で、口縁内端部にも刻みが施される。78は前期末か。79は中期後半の鉢としておく。80は終末期の甕。81・82の高坏はよく似ているが同一個体かどうか



第112図 砥石・台石実測図 2 (1/6)



第113図 砂石・台石実測図 3 (1/3)

わからない。外面に縦方向の暗文がある。

●包含層IV出土土器（図版23、第164・165図1～17）

この包含層も中世期のものであるが、出土遺物で実測したのは弥生期のものだけであった。1～8は壺で、1は肩部に2条の沈線が入る。2・3は大型壺であろう。4の外面は丹塗りである。9～17は甕で、10～13は刻目突帯文である。13は粗製ではあるがつくりは丁寧である。14は口唇外端部に、15・16は全面に刻みが入る。2・4・10～14は弥生早期、15・16は弥生前期前半、17は前期末であろう。

●5号土坑出土土器（第127図18）

縄文晩期の粗製の深鉢片で、内外とも条痕が目立つ。

●16号土坑出土土器（第60図1）

縄文晩期の精製の鉢で、口縁にリボン状の突起がある。

●20号土坑出土土器（第133図22）

縄文前期の壺式であろう。

●21号土坑出土土器（第135図1）

縄文晩期前半の深鉢片である。

●S R 2 出土土器（第135図7）

弥生早期の突帯文甕の破片である。

●1号周溝墓出土土器（第139図5）

縄文晩期の粗製の鉢片である。

●2号溝出土土器（第145図48～50）

48は口縁外端に突帯を貼り付けて刻みを施した甕で、弥生中期初頭。49も中期の甕か。50の甕は前期らしい。

●6号溝出土土器（第148図11～17）

11は精製の鉢。12は高台風の底部で内面は真っ黒である。13は刻目突帯文で肩部突帯より下位は煤けている。14は口縁端部に鋭く深い刻目を施し、その直下は指ナデが著しい。17は強い二次熱を受けている。11・12は縄文晩期、13は弥生早期、14～17は弥生前期。

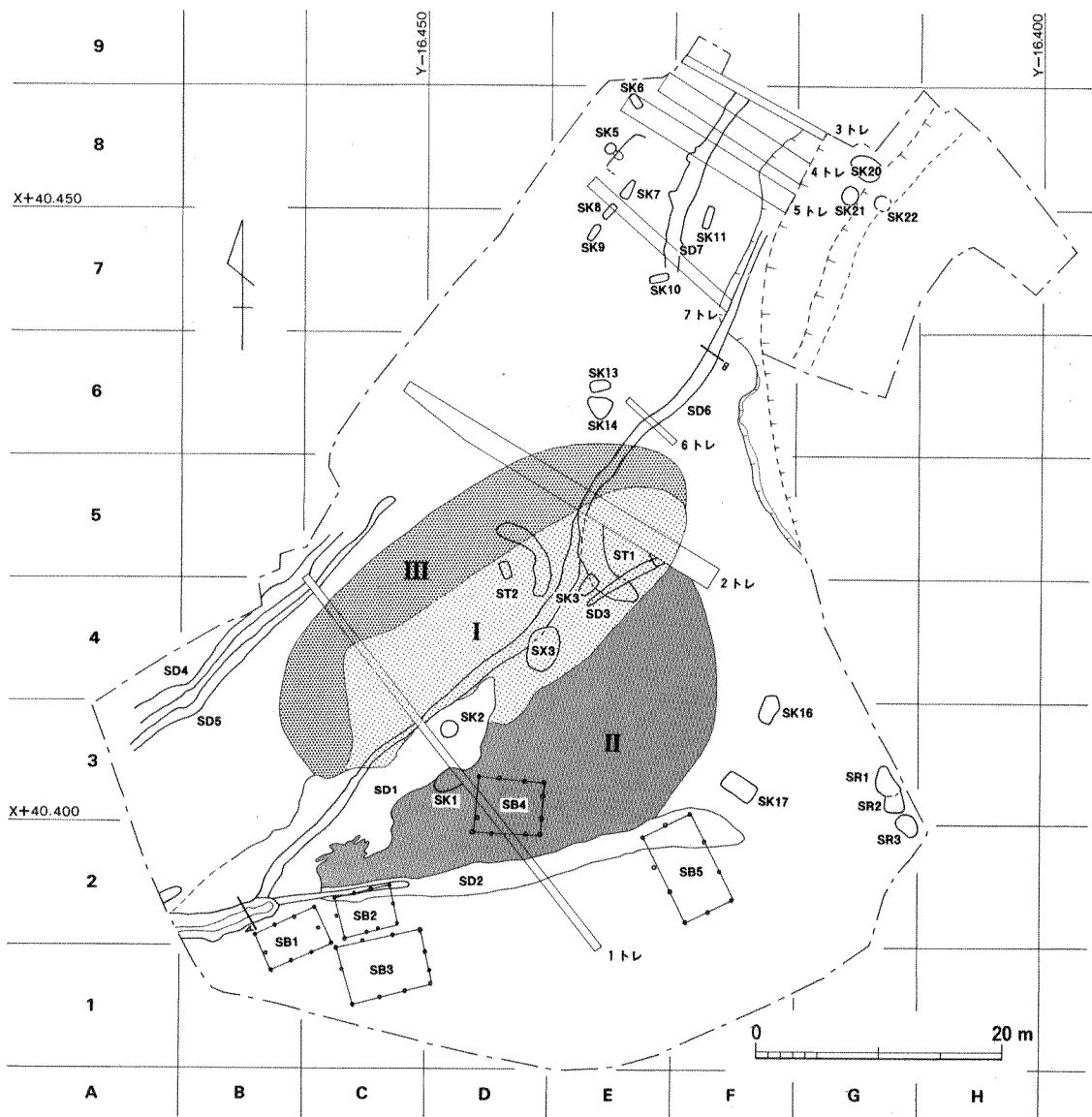
●7号溝出土土器（第148図1～5）

1は壺で、外面は刷毛目のちミガキを行っている。2は精製の鉢。3は甕の口縁で口唇外端部に細い刻みを施す。外面は煤ける。4・5は高台風の底部。2・4・5は縄文晩期、1・3は弥生前期。

B 古墳時代以降の遺構と遺物

1 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（SB1）（図版15、第115図）



第114図 畑田遺跡古墳時代以降遺構配置・区割図（1/600）

B・Cの1・2区にあり、2・3・4号住居跡を切っている。2間×3間の東西棟であり、桁行3.2m、梁行5.3mを測る。主軸方位はN-65°-E。桁行中央の棟持柱は内側に位置する。出土遺物はない。

2号掘立柱建物跡（S B 2）（図版15、第116図）

C 2区にあり、4・5・65号住居跡を切り、2号溝に切られている。2間×3間の東西棟であり、桁行3.5m、梁行4.5mを測る。柱筋が揃わない所もあり、建物としてやや確実性に欠ける感もあるが建物として扱っておく。主軸方位はN-77.5°-E。出土遺物はない。

3号掘立柱建物跡（S B 3）（図版15、第117図）

C 1区を中心にC 2区、D 1区に及んでおり、4・5・6・10・23号住居跡を切っている。3間×3間の東西棟であり、桁行4.7m、梁行6.8mを測る。主軸方位はN-76°-E。東側の桁行は柱穴が1個見つからなかった。出土遺物はない。

4号掘立柱建物跡（S B 4）（図版15、第118図）

Dの2・3区にあり、42号住居跡を切っている。3間×3間の東西棟としておくが3間×4間の可能性もある。桁行4.4m、梁行5.2mを測る。主軸方位はN-93.5°-E。出土遺物はない。

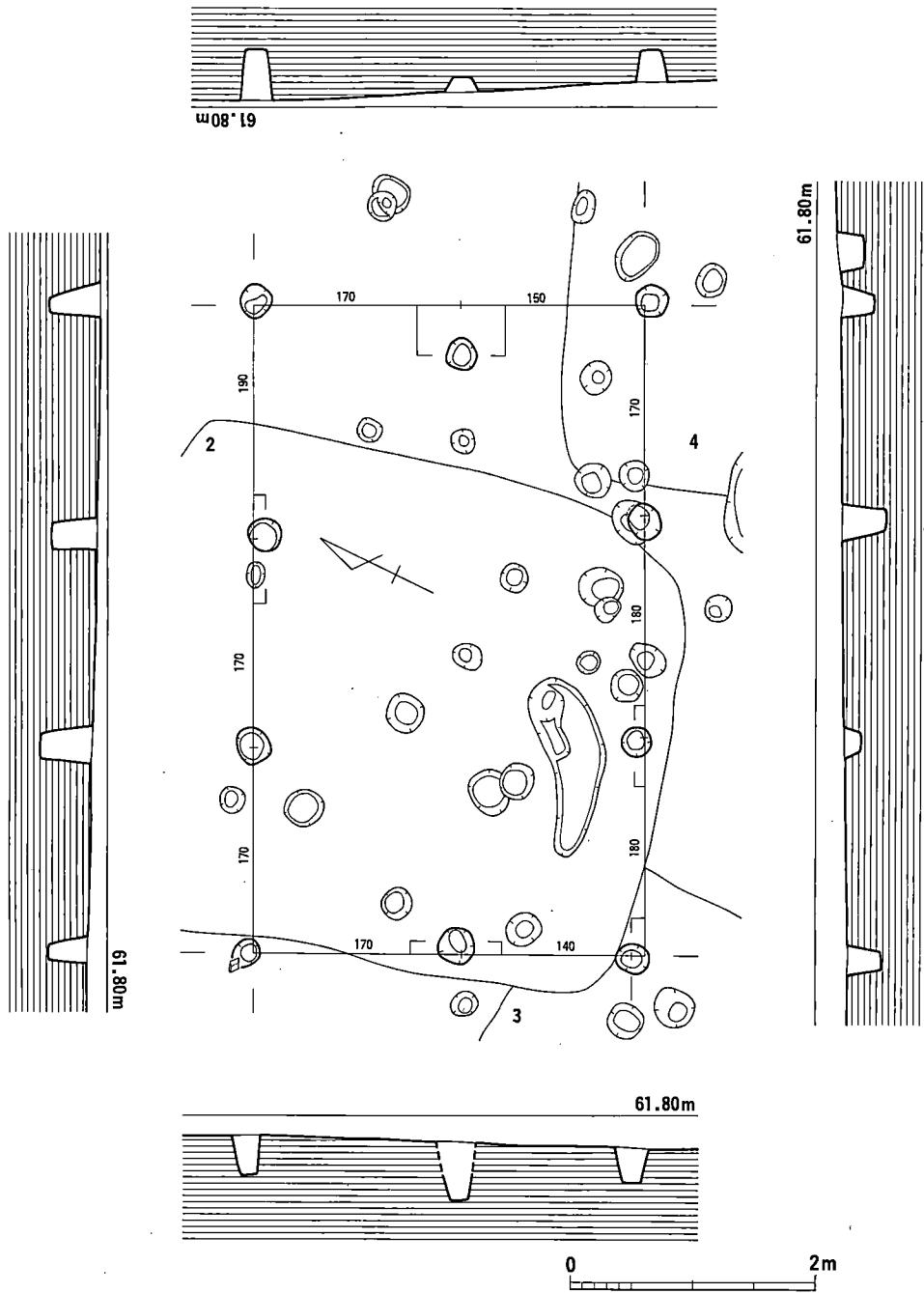
5号掘立柱建物跡（S B 5）（図版15、第119図）

F 2区を中心にE 2区、F 3区に及んでおり、16・19・20・21号住居跡を切っている。2間×3間の南北棟で、桁行4.4m、梁行7.9mを測る。桁行の柱穴間距離が2.7mの所もあるが、その間に柱穴は検出されていない。主軸方位はN-27°-W。出土遺物はない。

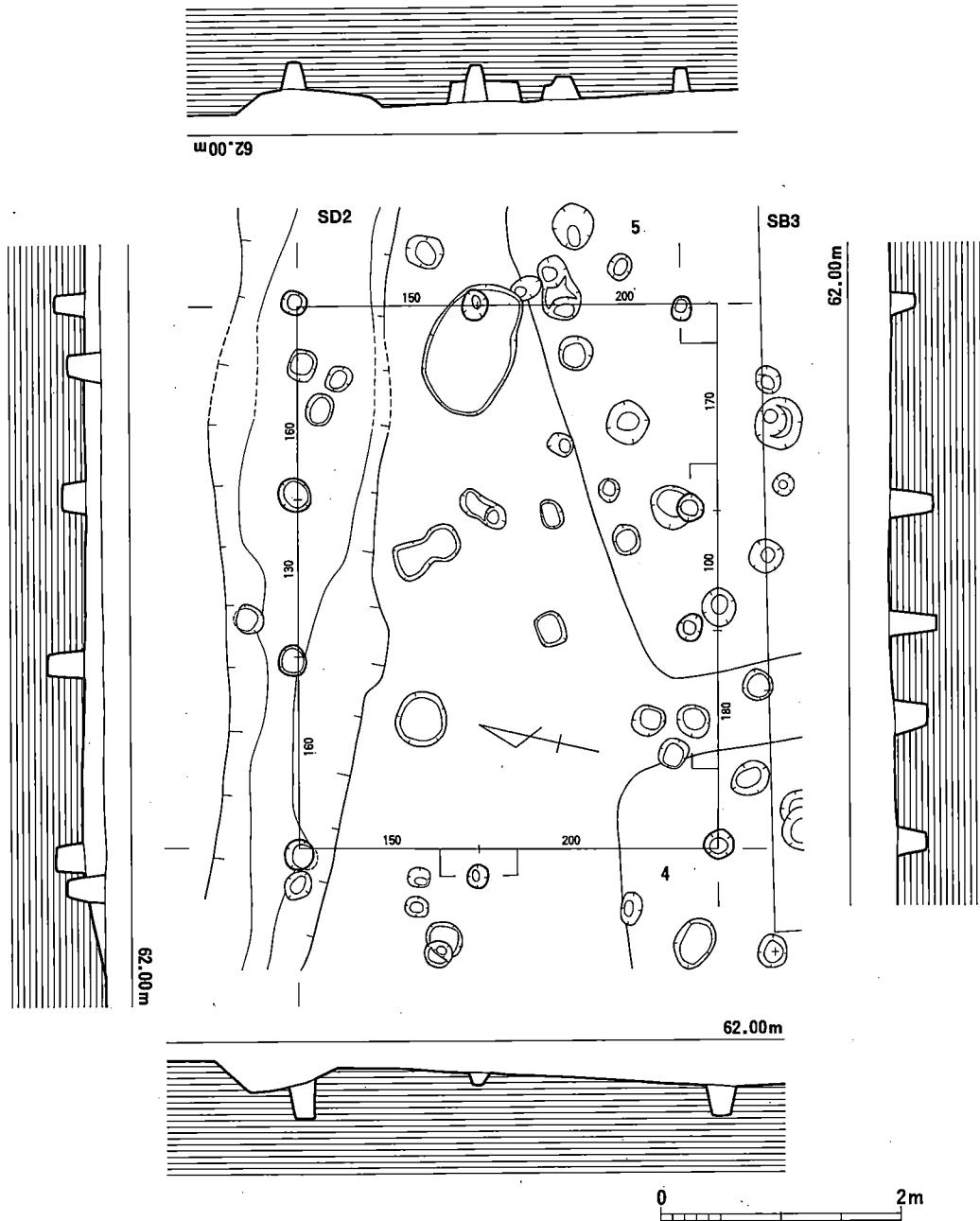
2 土 坑

古墳時代以降の土坑としたのは1~3・5~11・13・14・16・17・20~22の17基である。それとS R、S Xとした不明遺構もここで触れる。5~11号土坑はもとⅢ区としていた調査区の北端部周辺に集中しており（第129図）、そのうち11号土坑は土壙墓として間違いないと思われるが、6~10号土坑も土壙墓の可能性がある。20~22号土坑はもとⅡ区としていた調査区の北東端部にある。それ以外は調査区の中に散在する。S R 1~3は調査区の東南端部にある。

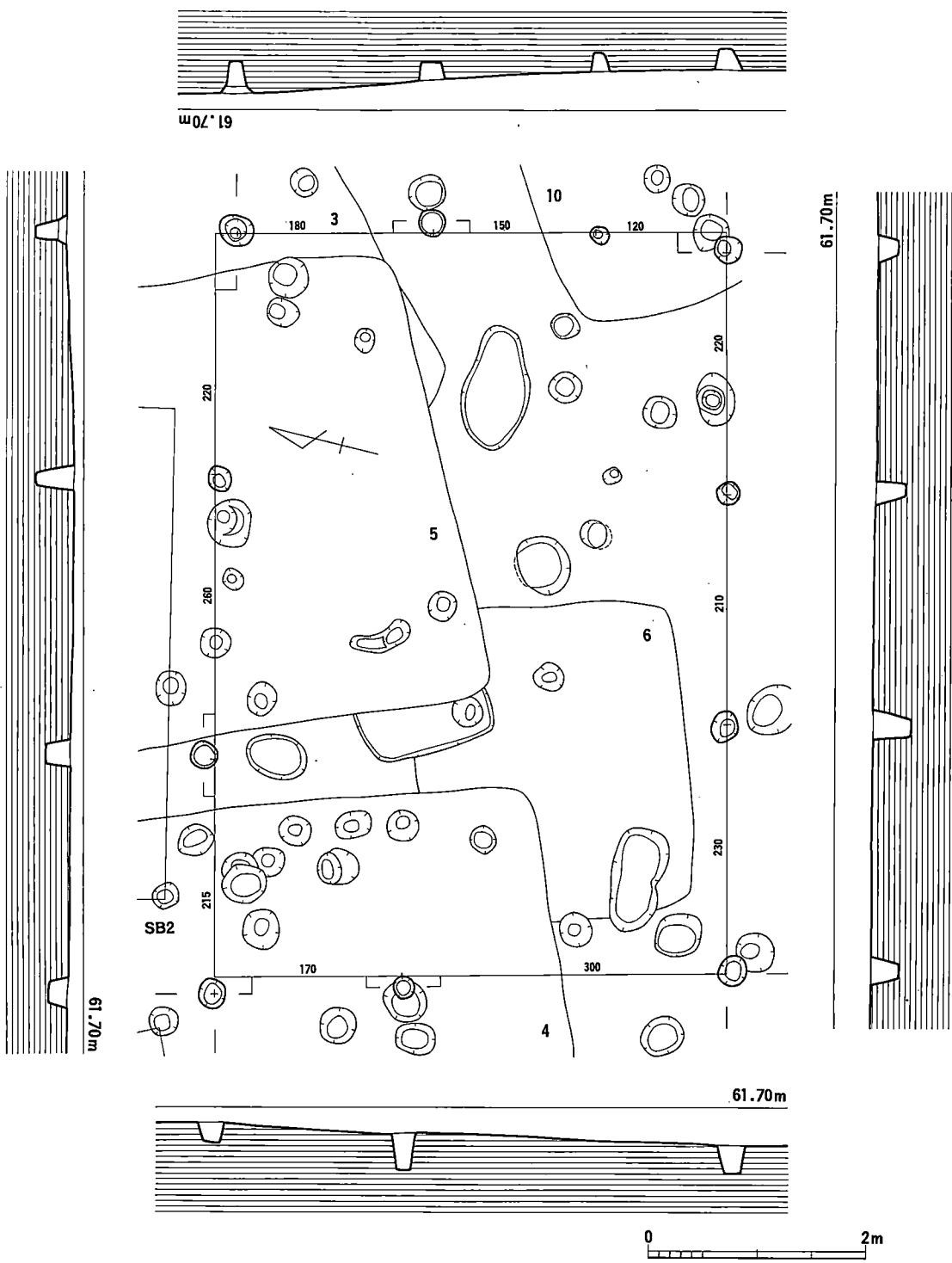
1号土坑（S K 1）（図版16、第120図）



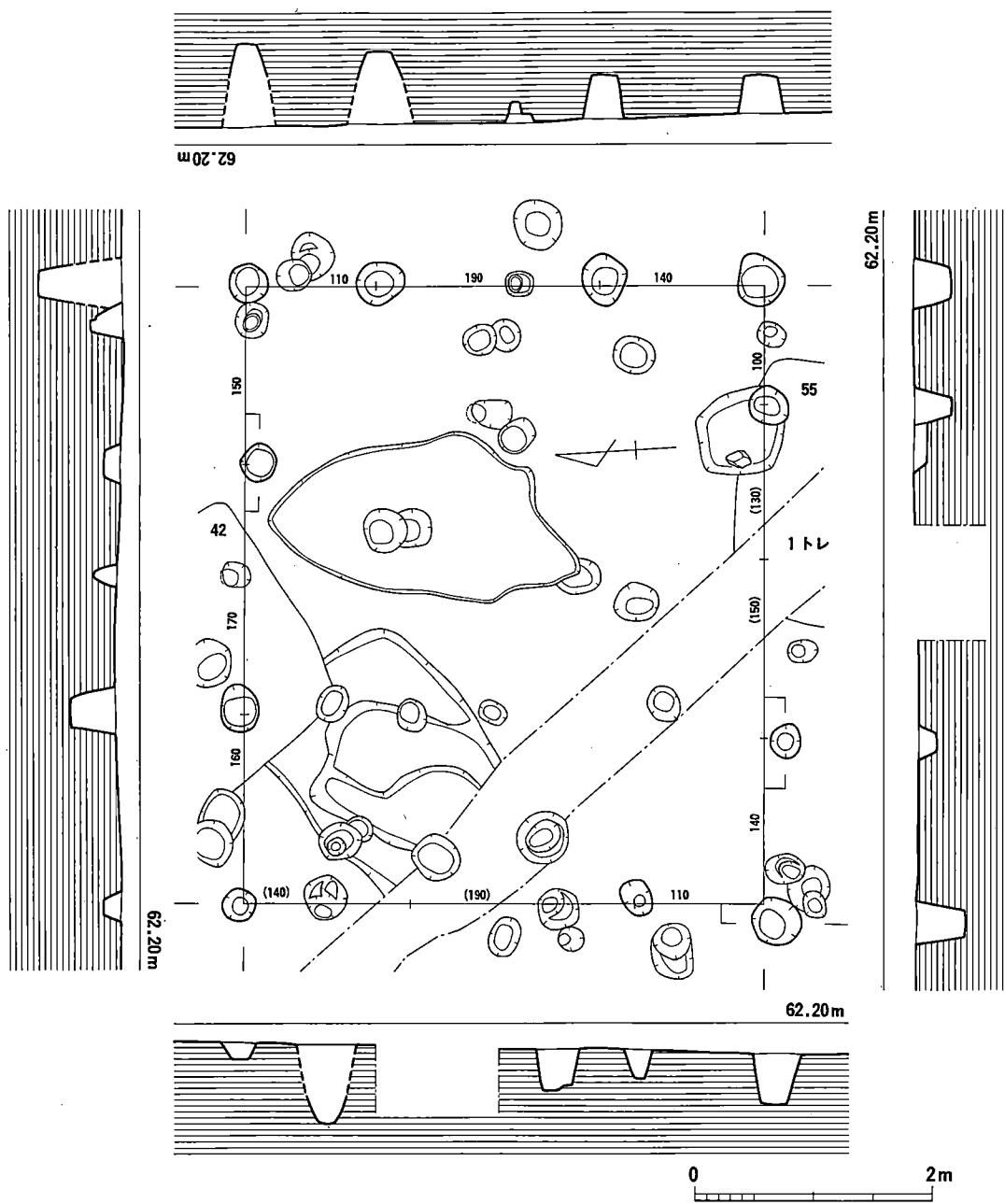
第115図 1号掘立柱建物跡〈SB 1〉実測図 (1/60)



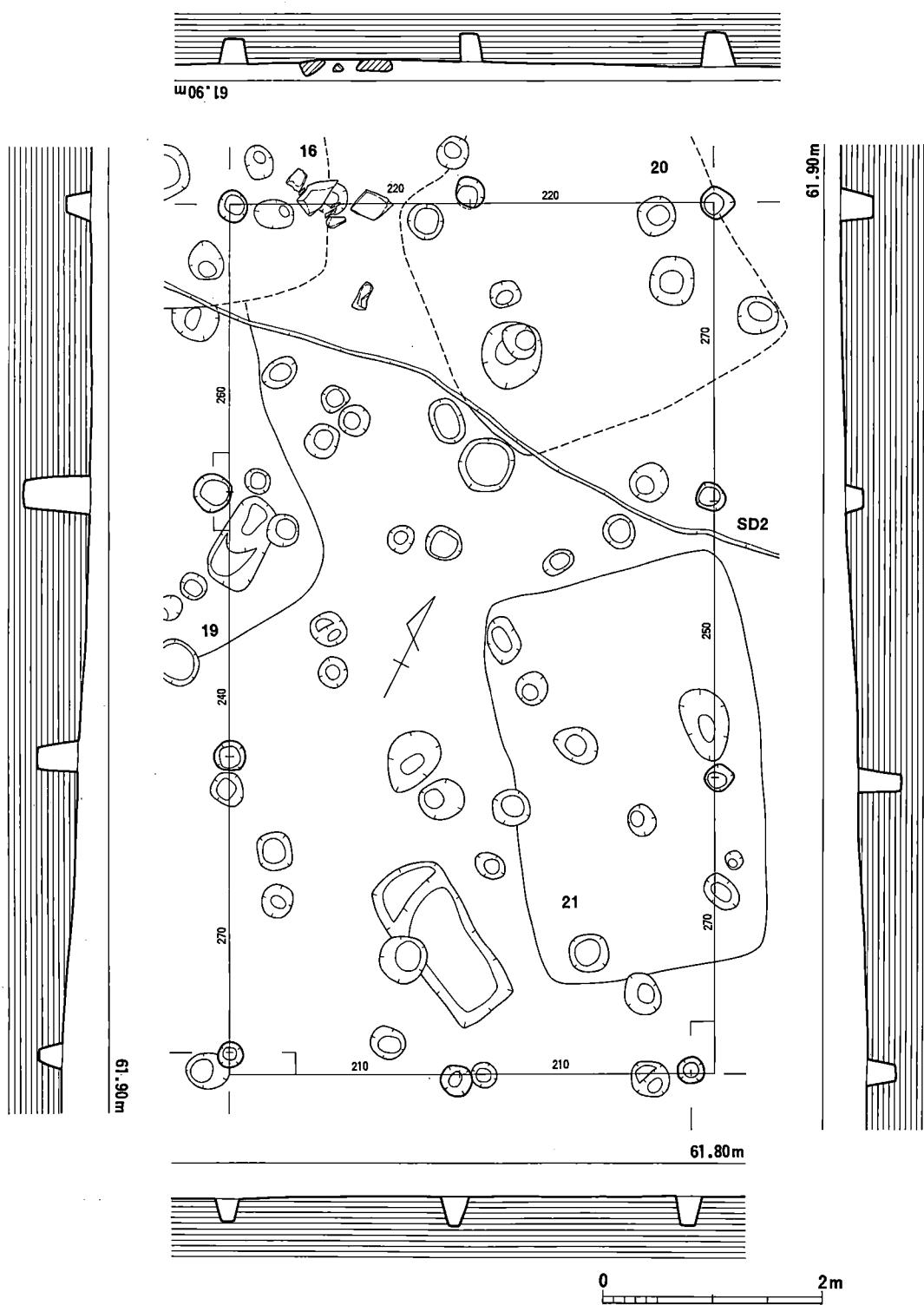
第116図 2号掘立柱建物跡〈SB2〉実測図(1/60)



第117図 3号掘立柱建物跡（SB3）実測図（1/60）



第118図 4号掘立柱建物跡（SB 4）実測図（1/60）



第119図 5号掘立柱建物跡〈S B 5〉実測図(1/60)

D 3 区で 4 号掘立柱建物跡の北西にある。第 1 トレンチで東側を断ち切ってしまったが、南北 180cm で、東西は 300cm を越えない楕円形プランであったことがわかる。深さは最大でも 16cm と浅い。残存する部分の東端、第 1 トレンチで削られた境界付近の床面に土師器の小皿と壺 14 枚が折り重なって出土した。それからやや西に離れて土師器壺と小皿、砥石が床面から少し浮いた状態で出土した。ほかに土師器の鍋、須恵質土器の甕、黒色土器、陶器、青磁、白磁の破片、鉄滓が出土している。

出土遺物 (図版 31・32・38、第 122 図 1~21、123 図 22~26、175 図 5)

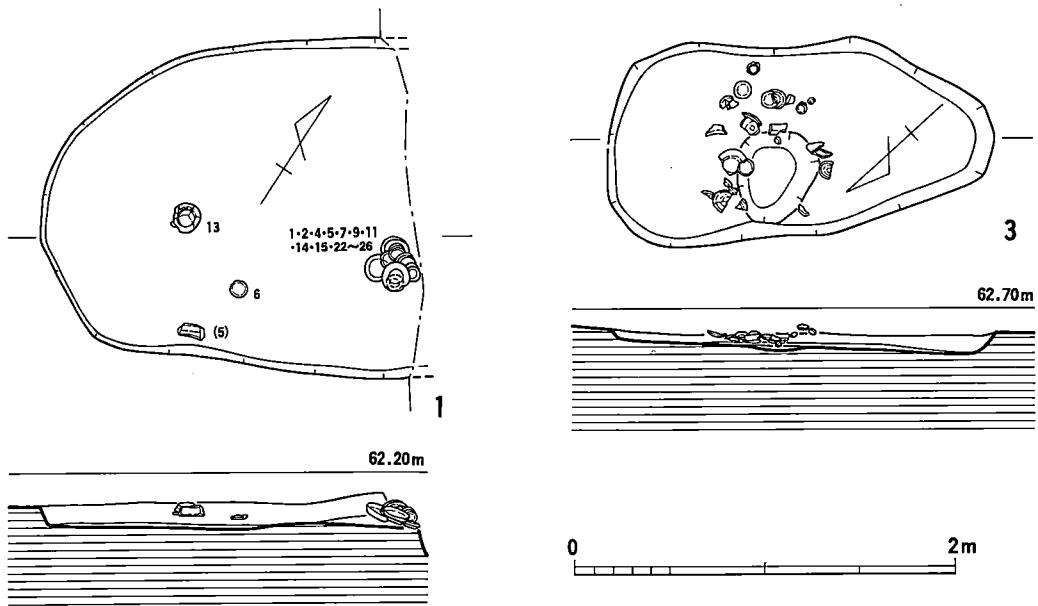
土師器 (第 122 図 1~16、123 図 22~26) 1~11、22~24 は小皿で、口径は 8.7~9.8cm、底径 6.5~7.7cm、器高 1.1~1.7cm の範囲内に納まる。外底面は全て糸切りであり、板圧痕の付くものが多い。10 を除いてみなほぼ完形である。3・4・11 は赤褐色粒子を含む。9・11・24 は少し歪んでいる。10 は底部に穿孔がある。12~16、25・26 は壺で、口径は 14.8~15.3cm、底径 8.8~10.5cm、器高 3.0~3.7cm の範囲内に納まる。これも外底面は全て糸切りであり、板圧痕の付くものが多い。みなほぼ完形である。16・25・26 は赤褐色粒子が目立つ。

黒色土器 (17) 内外ともに黒色である。

陶器 (18) 褐釉の壺の破片である。

青磁 (19) 龍泉窯系の碗の破片で貫入が目立つ。

白磁 (20・21) 同一個体の破片と思われる。玉縁口縁の碗である。乳白色の釉が掛かっている。



第 120 図 1・3 号土坑 (SK 1・3) 実測図 (1/40)

石器 (第175図5) 砂岩の中砥である。偏六面体の柱状をなし、全ての面を使用しているが、破損面は一部のみ使用している。

2号土坑〈SK2〉(第121図)

D3区で1号土坑の北にある。径が155cmほどの少し歪んだ円形プランをなし、深さは最大でも22cmと浅い。南端部に石が2個あった。土師器の壺と小皿、瓦器の破片が出土した。

出土遺物(第122図1~8)

土師器(1~6) 1~3は小皿で、2・3は口径が9.4cmと8.5cm、底径7.9cmと6.6cm、器高0.8cmと1.2cmを測る。ともに外底面は糸切りであり、板圧痕が付く。3は底面に焼成前の穿孔が2個ある。4~6は壺で、6は復元口径16cm。赤褐色粒子が目立つ。

瓦器(7・8) 梗で、8は黒褐色に燻された土器である。

3号土坑〈SK3〉(図版16、第120図)

E4区の北端にあり、のちにこれの北東部の下層から1号周溝墓の周溝が現れた。短軸107cm、長軸202cmの五角形状をなす不整形プランである。深さは最大でも10cmと浅い。底面の中央北寄りにピットがあり、その周辺に土師器の小皿や壺、小すり石等が散乱した状態で出土した。ほかに土師器の鍋、黒色土器、青磁、白磁、滑石の破片、鉄滓、木炭が出土している。すり石については混入として前述した。

出土遺物(図版32、第124図1~39)

土師器(1~29) 1~22は小皿で、口径8.6~9.8cm、底径6.5~8.2cm、器高0.8~1.3cmの範囲内に納まる。外底面は大半が糸切りであるが、8・10・12・13はナデしか見えない。この4点は他と違って若干の深みがある。19が完形、5・21もほぼ完形に近いが、19・21は内底面に黒斑がある。ほかはすべて半分以下の破片である。18と22は同一個体かもしれない。

23~28は壺で、口径15.2~17.8cm、底径11.2~12.2cm、器高2.7~3.3cmの範囲内に納まる。23を除いて外底面に糸切り痕が見られず、25を除いて板目痕がある。23・26・27は器体が手ずれしたような感じを受ける。26の体部は擬口縁状となっており、あるいは破損後にこの深さのままで使用したのかもしれない。29は硬質で大皿としておく。

黒色土器(30・31) 内外ともに黒色である。

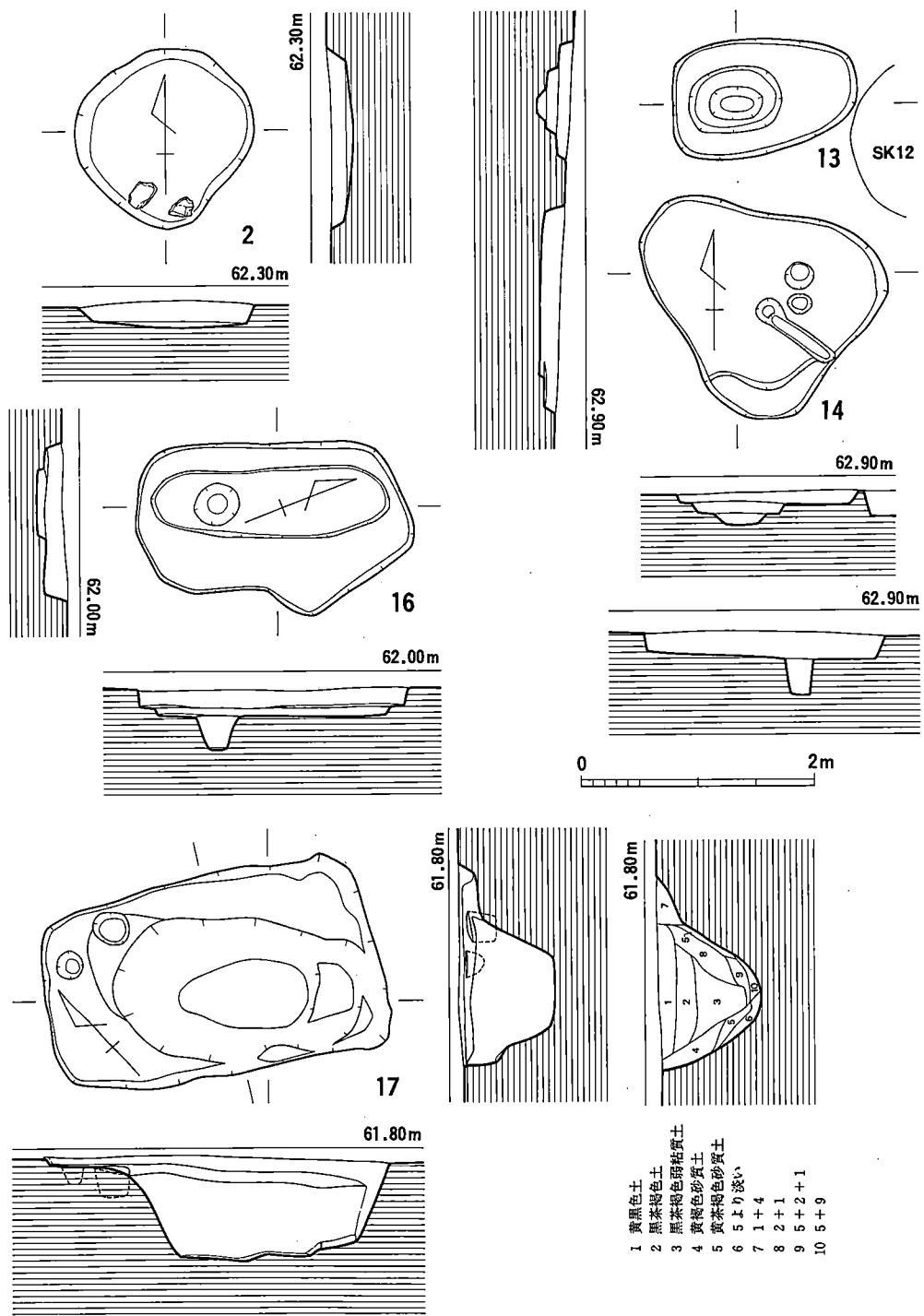
瓦器(32~34) 梗で、32の内面は黒色である。33は黄色い化粧土を掛けている。

青磁(35) 黄色い釉の掛かった皿で復元口径10cm。

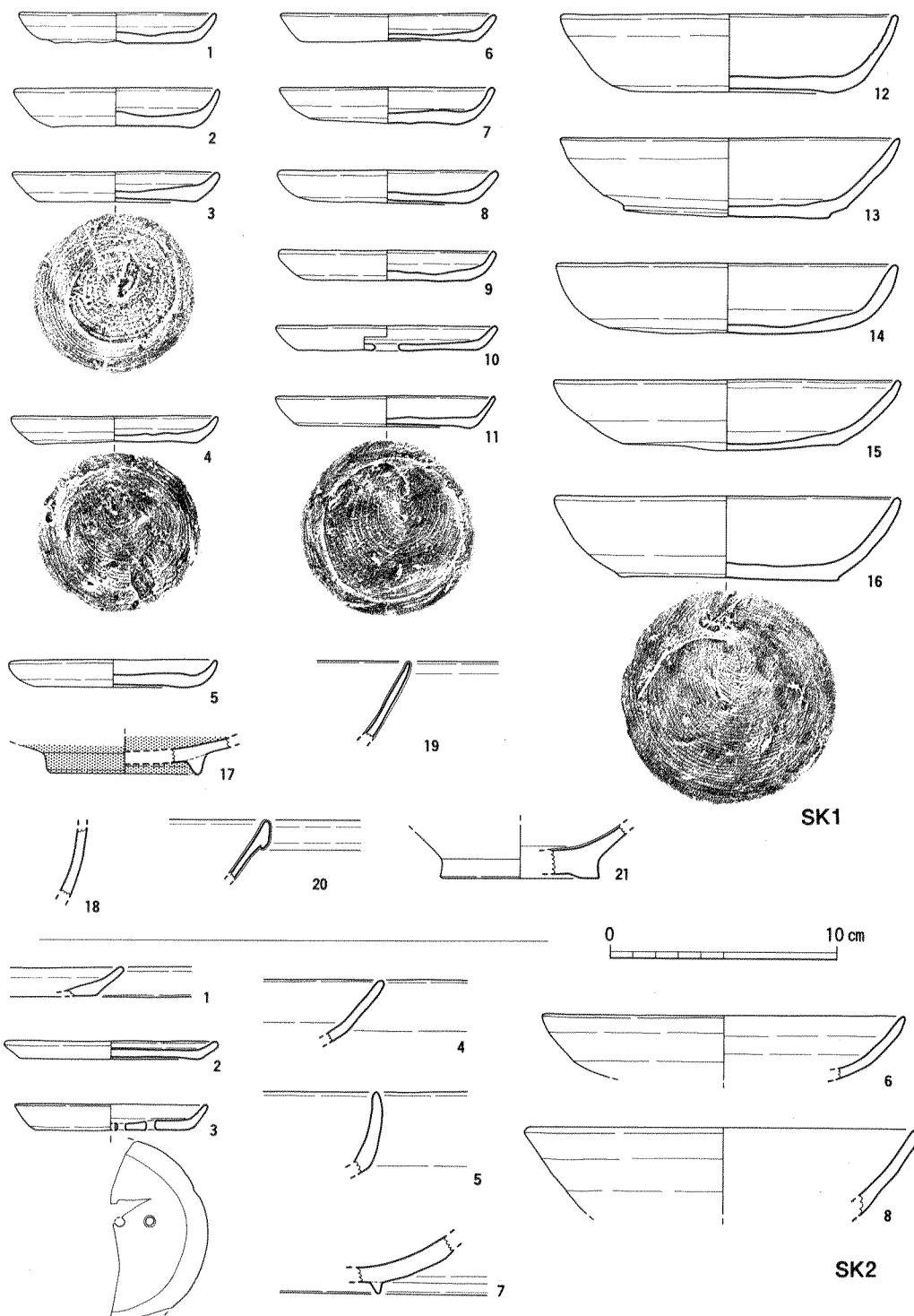
白磁(36~39) 36は端反りの、37は玉縁口縁の碗である。

1

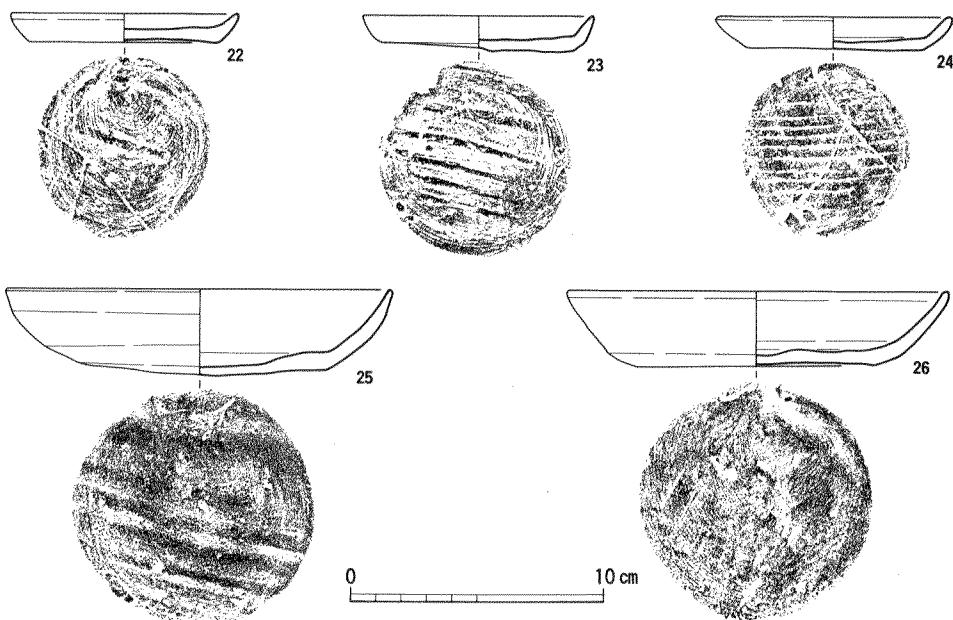
5号土坑〈SK5〉(図版17、第125・126図)



第121図 2・13・14・16・17号土坑 <SK 2・13・14・16・17> 実測図 (1/60)



第122図 1・2号土坑〈SK1・2〉出土土器等実測図(1/3)

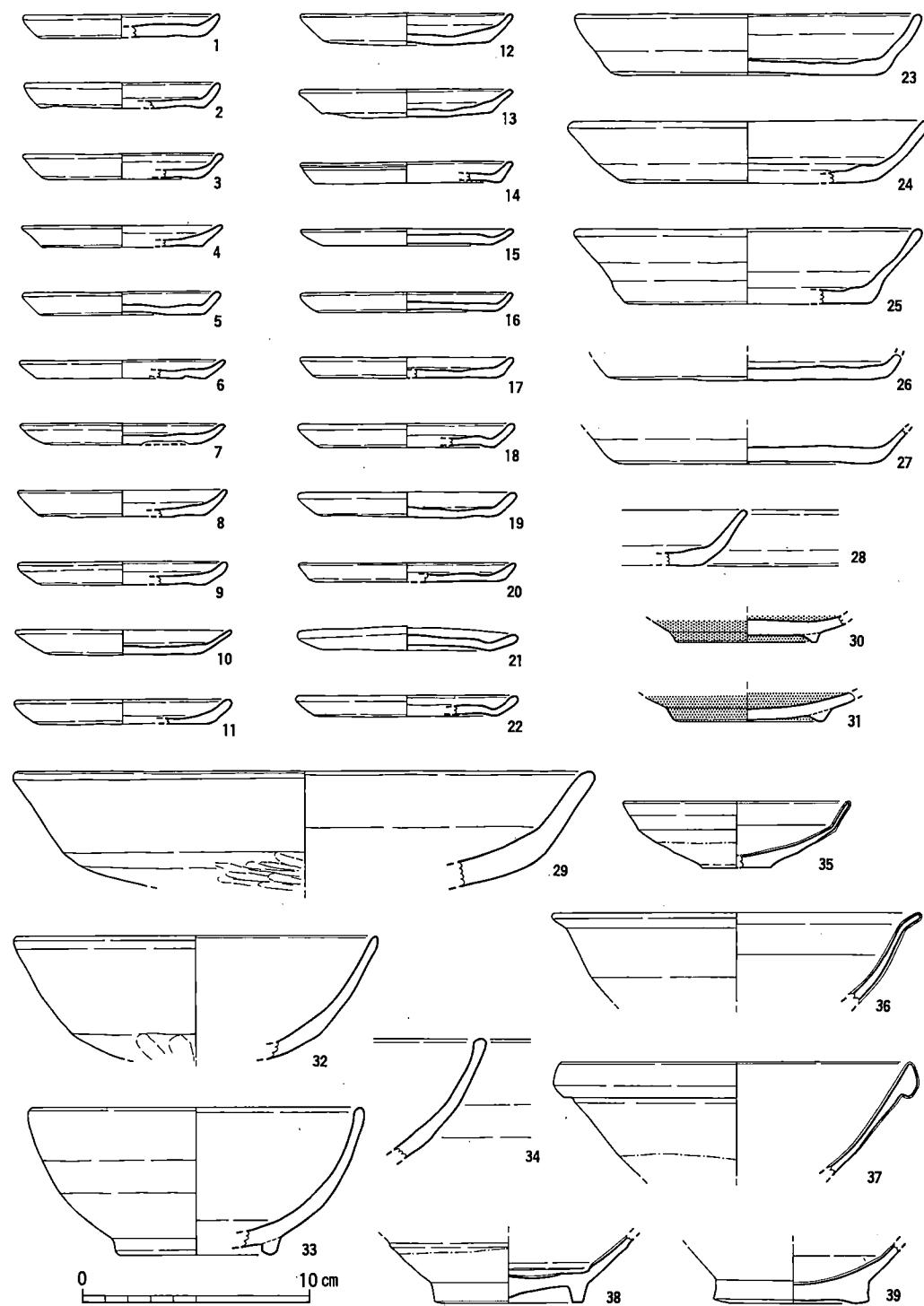


第123図 1号土坑〈SK 1〉出土土器実測図2 (1/3)

E 8区の斜面の所にある竈である。竈本体の東南側に焚口があり、この焚口部分を取り込んで竪穴状の掘り込みがある。この竪穴は北西壁が3.5~3.9mを測り、東南側へ1mほどの間にごく緩やかな傾斜のテラスを形成する。竈に伴う作業場的なものであろう。焚口・竈本体はこの竪穴の中央にはなくてやや南寄りの位置にある。竪穴の東南部斜面は、竈使用時にもこのまま斜面であったのか、あるいは埋め立てて平坦面をつくっていたのか、いずれとも判断できない。全体としては「釜屋」と表現すべきであろうか。

竈本体は上面径85cmの円形プランの坑であり、底面径は65cm前後であろう。奥壁の残存高は65cm。この坑の奥壁から25cmほどの、坑の中心より奥まった所に石を立てて支脚としている。この支脚の底面からの高さは25cm。支脚から焚口の方に2個の石が倒れており、それと直行する位置の、支脚の西側にも石が倒れていた。また支脚の北側で壁にもたれるようにして2個の石があり、その根元は別の石で押さえられていた。これらの石の周囲には土器片（土鍋）が散乱している状態であった。奥壁にもたれかかった石は当初の位置を保っていると考えられるが、焚口側に倒れた石はその下から土器が出土しているので、本来は焚口側に袖石のごとくに立っていたのではなかろうか。そうでなければ、この竈を作り直した時に置いたか、または廃棄する時に投棄されたものとするしかない。

焚口から竈本体へは最小幅30cm、高さ20cmほどで、約30cmの間がトンネル状に確認されたが、



第124図 3号土坑〈SK 3〉出土土器等実測図 (1/3)

これは上部が崩落しての規模と思われ、幅と距離はそのままでも高さはおそらく30cm前後はあったものと思われる。そうでなければ火回りも悪かったであろう。トンネル部には2個の石が倒れていた。

焚口は約50cmの幅があり、その前面の前庭部（燃焼部）は55~70cmの偏円形の範囲と、そこからさらに東南方向へ45cmほどがくほんでいたが、ここに焼土はほとんど見られなかった。

竈本体内部からは土鍋、土師器壺、瓦器椀、すり石、黒曜石・サヌカイトの剝片が、竪穴部と前庭部からは土鍋、土師器小皿・壺、黒色土器椀、縄文土器片、黒曜石剝片が出土した。縄文土器片とすり石については前述した。

出土遺物（図版32、第127・128図1~20）

土師器（1~4・14~17・20） 1・2は小皿。1は完形に近いが歪んでおり、二次熱を受けている。外底面は糸切り後ナデらしい。2の外底面は糸切り。法量は各々口径9.8cmと10cm、底径6.9cmと8.1cm、器高0.9~1.5cmと1.2cmを測る。3・4は壺。3は二次熱を受けており、外底面は板圧痕が付く。口径14.8cm、器高2.8cm。4は復元口径15.6cm。

14~17・20は鍋で、14と20は似た器形であり、ともに外面は煤が付着している。14は復元口径34.2cm。20は口径37.8cm、器高24.5cm。17は内面が煤ける。

瓦質土器（5~13・19） 5~9は壺で、復元口径は16~17.6cmの間にある。10~13・20は椀で、13は内面全体と口縁直下の外面が黒色をなしている。12・13・19の復元口径は15.2~17.2cmの間にある。

以上の土器は3・5~10・14~16・19・20が竈内部から、1・2・4・11~13・17・18が竪穴部と前庭部から出土した。

6号土坑（SK6）（図版18、第130図）

E 8区の北端近くにある。床面で幅47~53cm、長さ110cm以上の長方形プランをなし、南端部は削平されている。床面や壁を他のピットに切られているが、土壙墓の可能性がある。主軸方位はN-36°-W。埋土中から土師器壺、瓦器椀、染付、鉄器、縄文晩期土器、サヌカイト剝片、木炭が出土している。

出土遺物（図版37、第135図1・2、172図1）

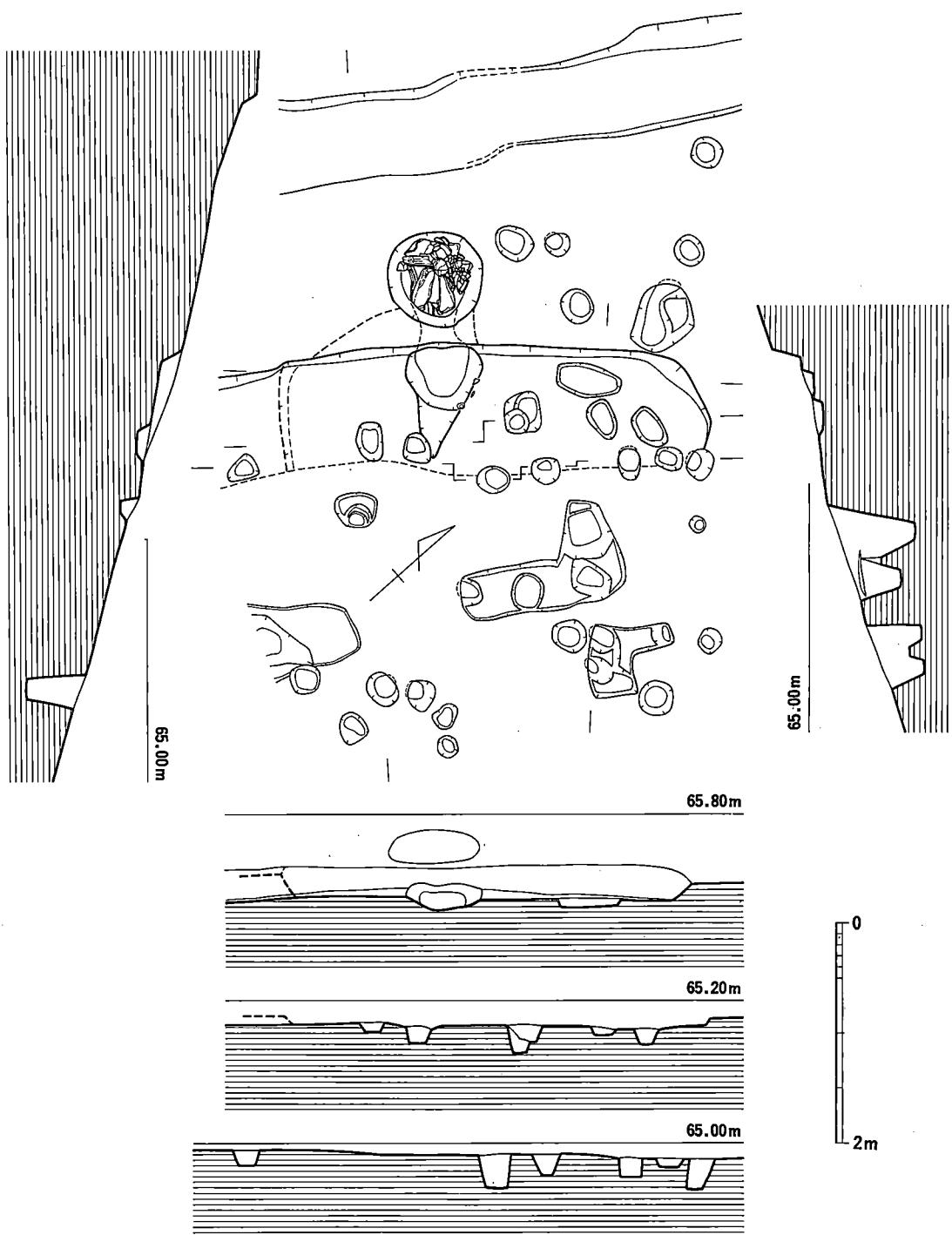
土師器（1） 梗の底部片で、復元底径は8.8cm。体部外面は煤けている。

染付（2） 梗の破片。ごく新しいものの混入であろう。

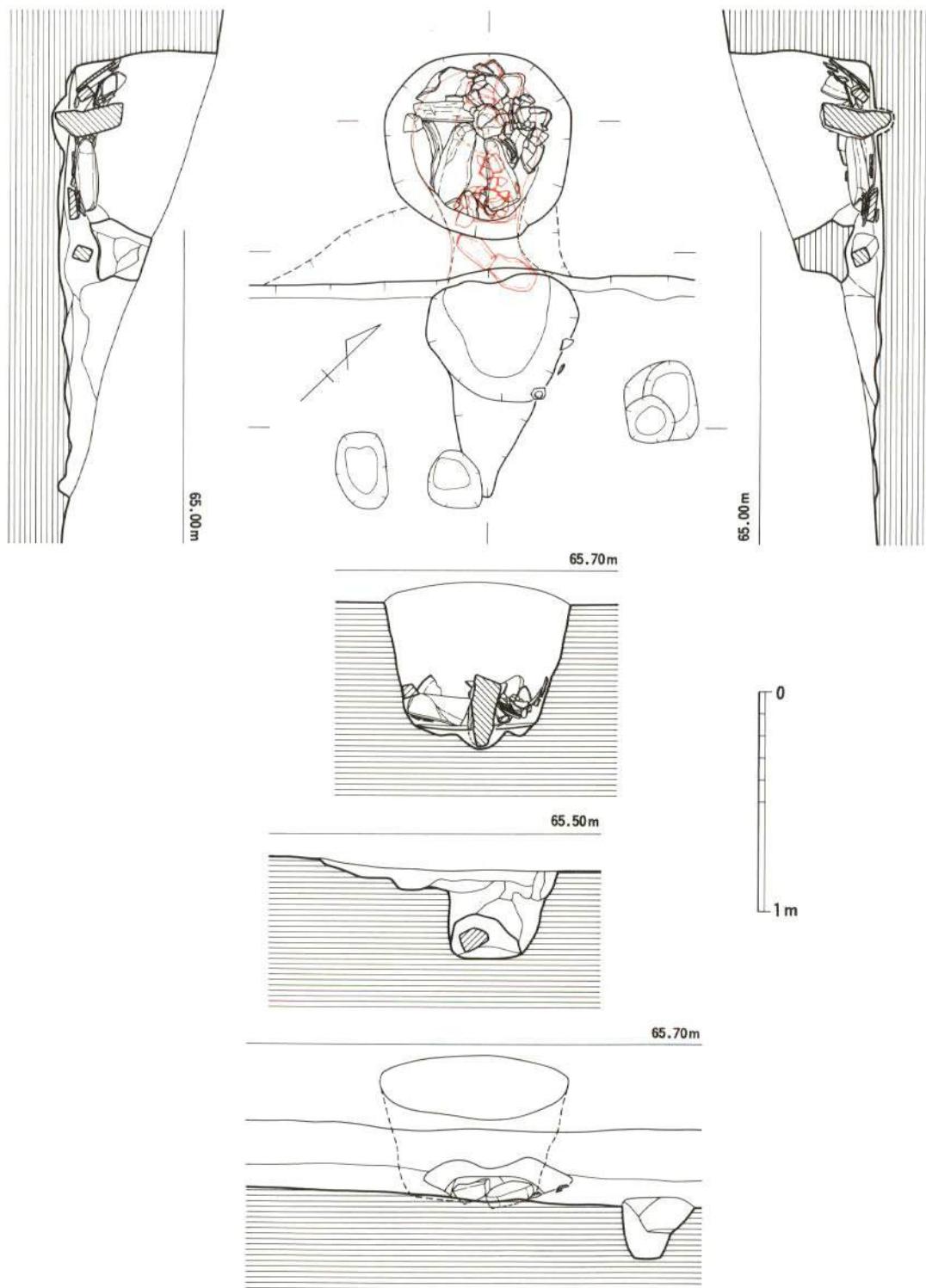
鉄器（第172図1） 小破片であるが釘であろうか。

7号土坑（SK7）（第130図）

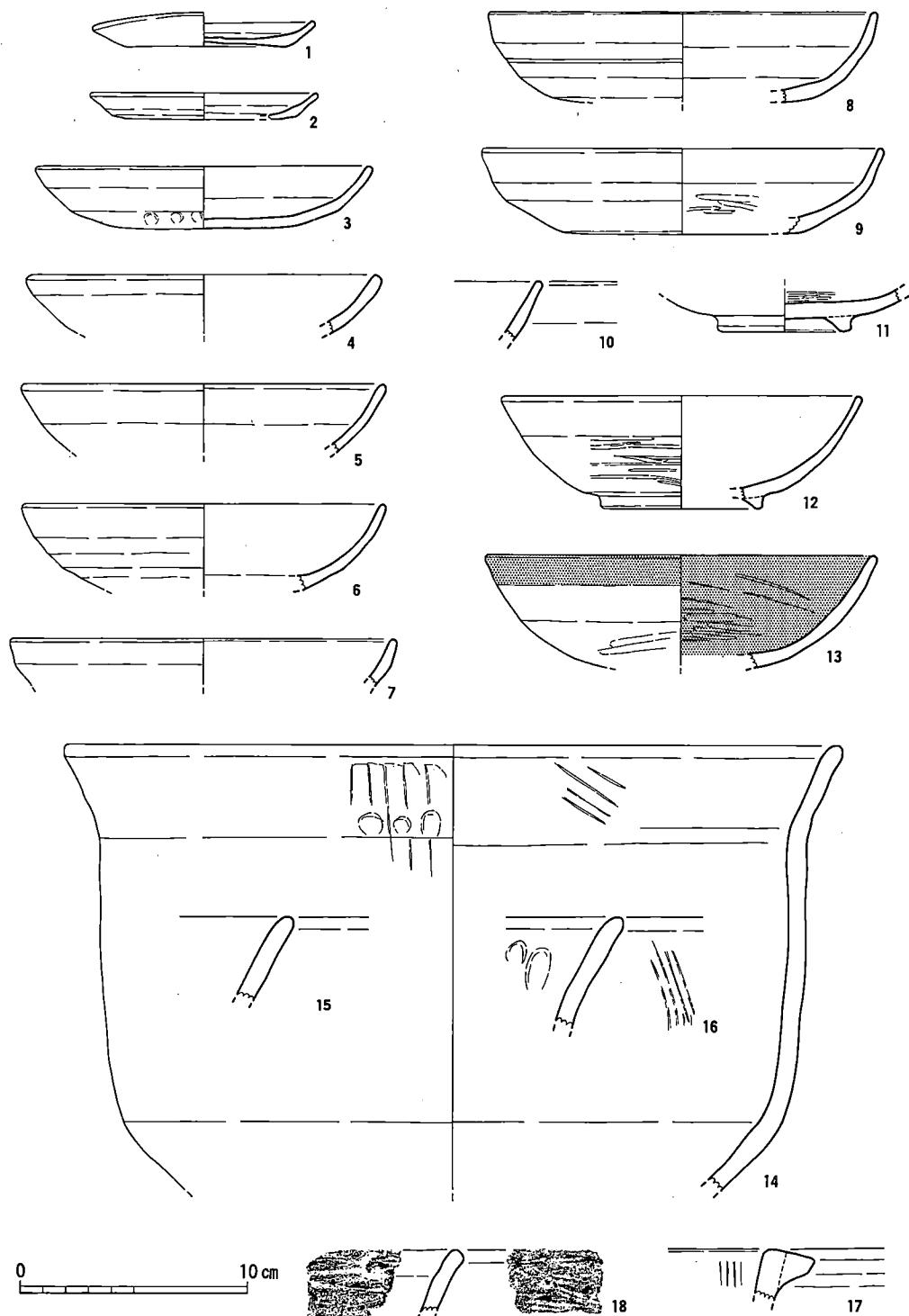
E 8区の南端にあり、8・9号土坑とは一列に並ぶような配置である。床面で幅40~55cm、



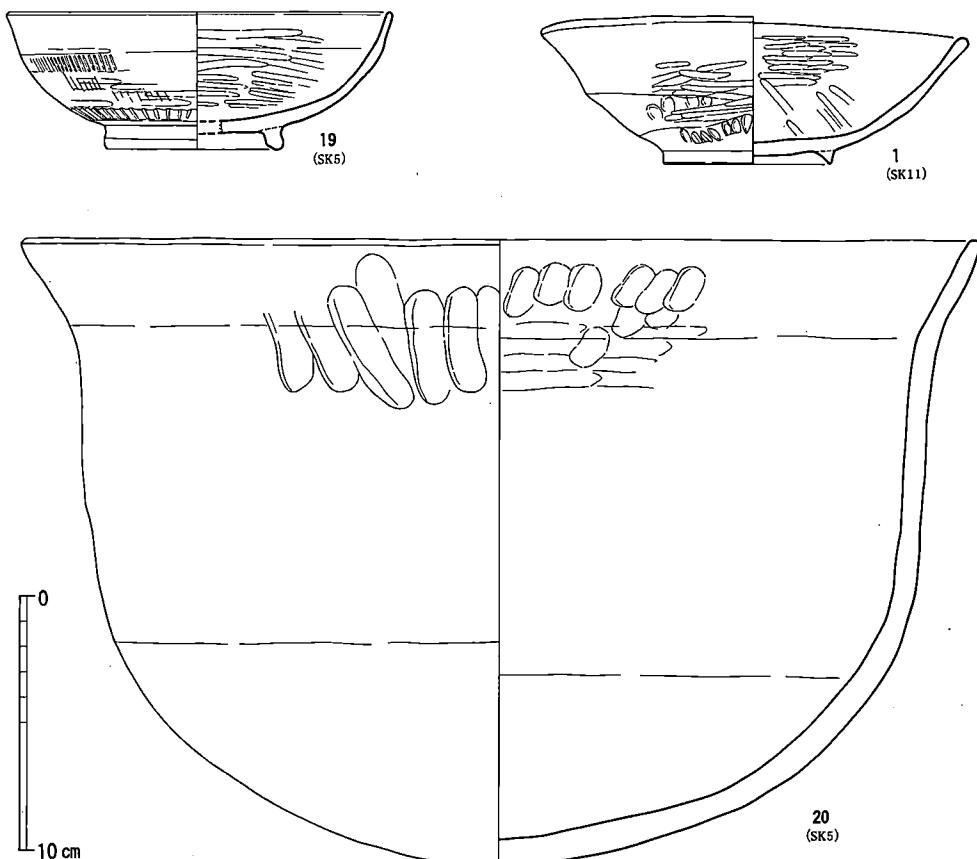
第125図 5号土坑〈SK5〉実測図1 (1/60)



第126図 5号土坑〈SK 5〉実測図2 (1/30)



第127図 5号土坑（SK 5）出土土器実測図（1/3）



第128図 5・11号土坑〈SK5・11〉出土土器実測図2 (1/3)

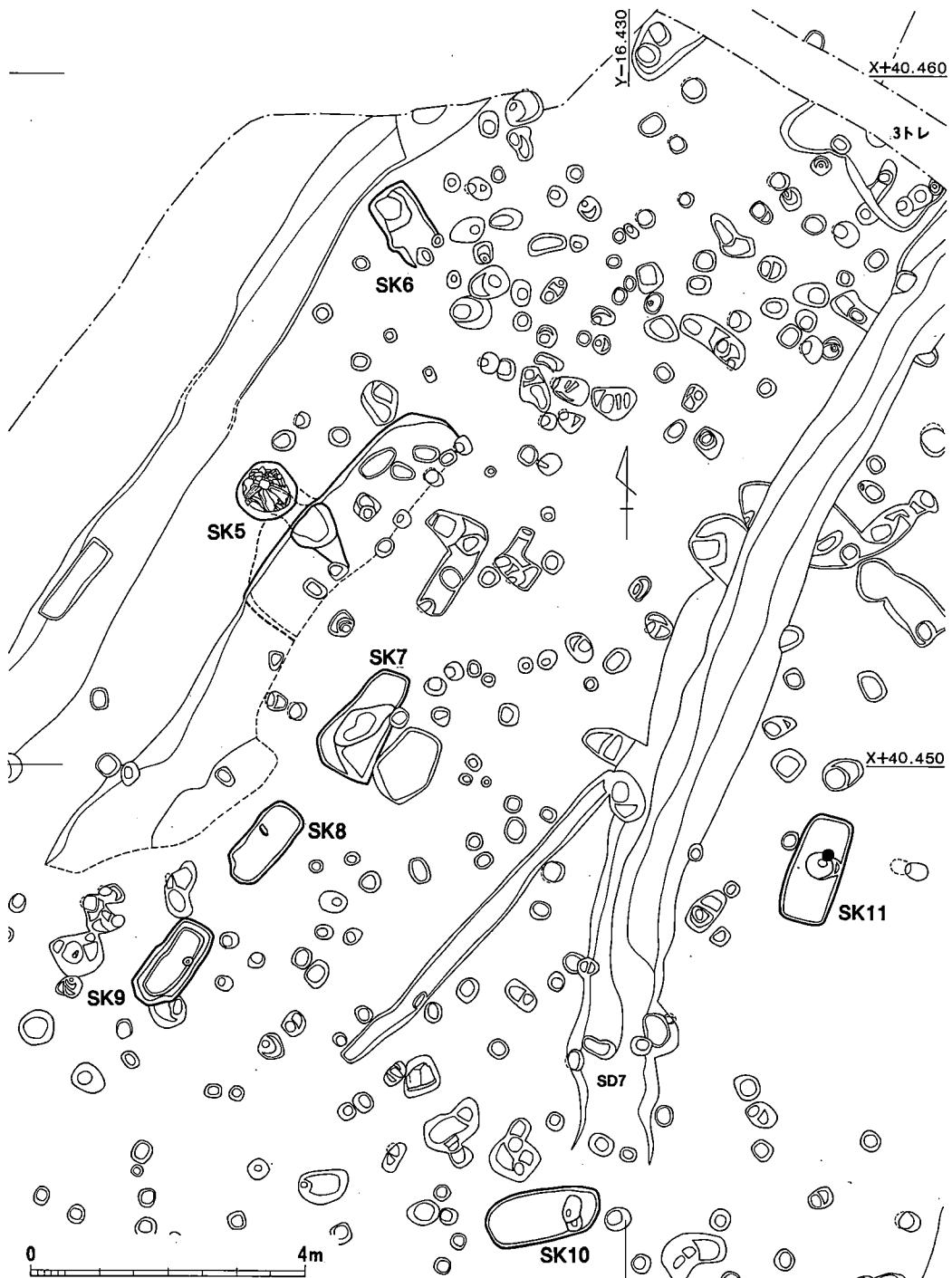
長さ160cmほどのやや不整な長方形プランをなし、中央をピットに切られている。これも土壙墓の可能性がある。主軸方位はN-31°-E。出土遺物はなかった。

8号土坑〈SK8〉(第130図)

E7区の北端で、7号土坑と9号土坑の中間にあつる。床面で幅48~50cm、長さ126cmの長方形プランをなし、床面レベルは東側がやや高くなつてゐる。これも土壙墓の可能性がある。主軸方位はN-42°-E。中央よりやや東寄りの所に石があり、埋土中から土師器片が出土している。

出土遺物(第135図1・2)

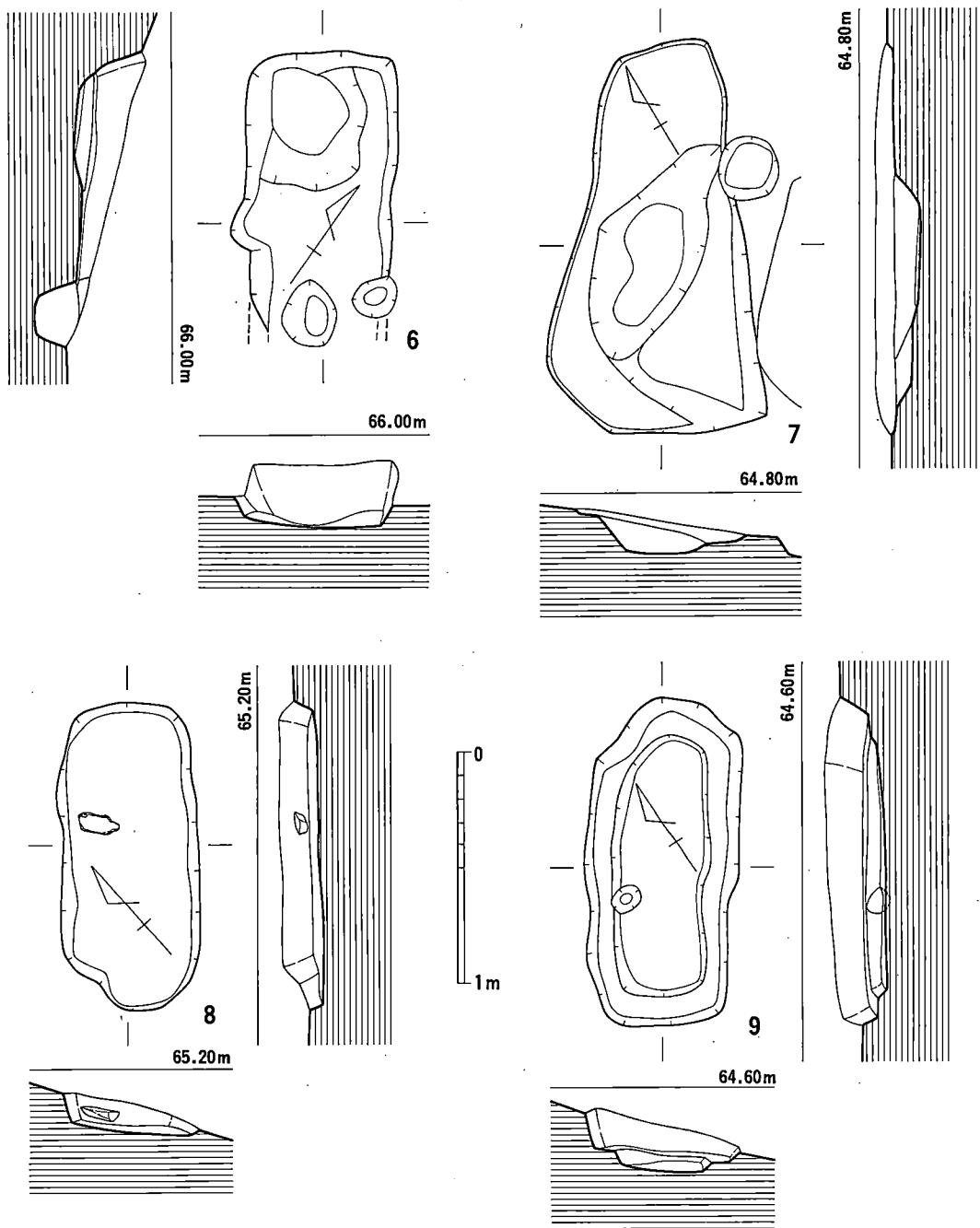
土師器(1・2) 1は小皿片で糸切り底である。復元口径8.6cm、器高0.9cm。2は壊で、復元口径17.6cm。



第129図 5～11号土坑位置図 (1/100)

9号土坑 <SK 9> (第130図)

E 7区で、8号土坑の西南にある。内部は二段掘りになっており、下段の床面で幅29~36cm、長さ107cm、一段目で幅46~55cm、長さ131cmの長方形プランをなし、床面レベルは東側がやや



第130図 6・7・8・9号土坑 <SK 6・7・8・9> 実測図 (1/30)

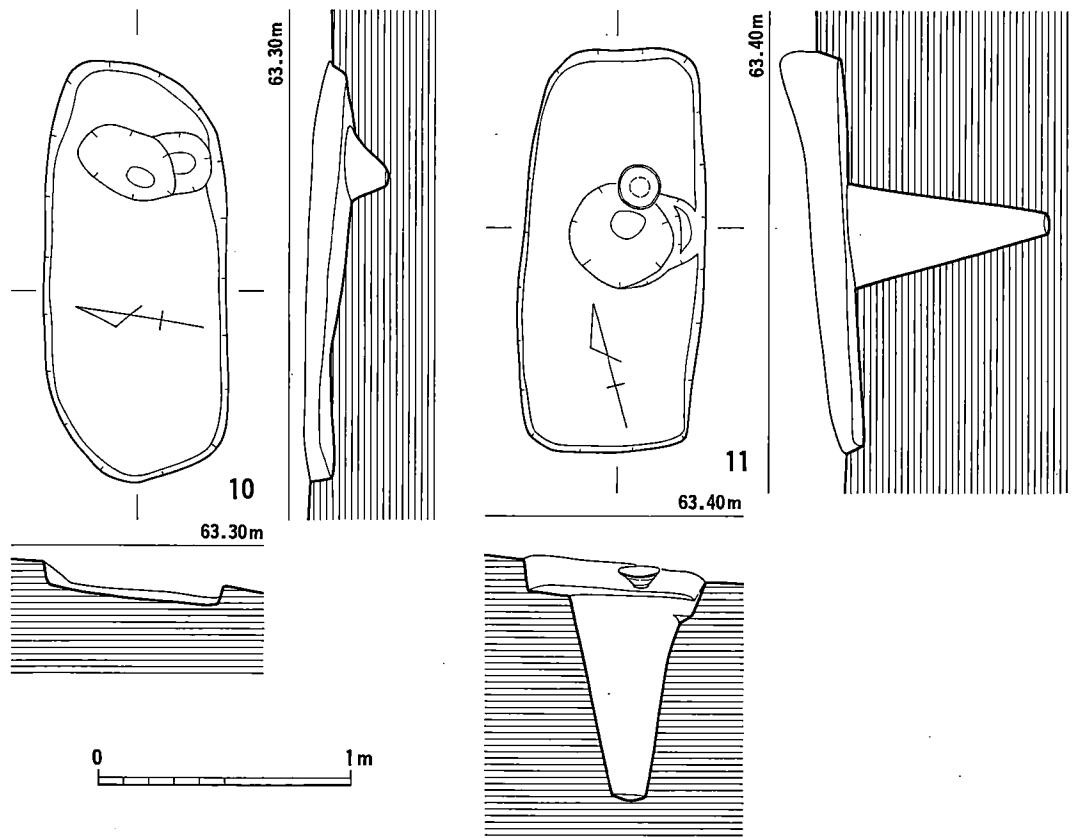
高くなっていく。これも土壙墓の可能性がある。主軸方位はN-35°-E。埋土中から土師器鍋片が出土しているが図示にたえない。

10号土坑 <SK10> (図版18、第131図)

E 7 区にある。床面で最大幅66cm、長さ160cmの長方形プランをなし、床面レベルは西側の方が高い。床面の東側をピットに切られていた。これも土壙墓であろう。主軸方位はN-100°-W。出土遺物はなかった。

11号土坑 <SK11> (図版18、第131図)

F 7 区の北端近くにある。床面で最大幅68cm、長さ152cmの長方形プランをなし、床面レベルは北側に徐々に高くなっている。坑の中央より北側に瓦器椀が床面からやや浮いてほぼ正立の状態で出土した。これは土壙墓として問題ないであろう。主軸方位はN-15°-E。床面下に深いピットがあるがこれはより古い時期のものとみられる。ほかに埋土中から土師器壺と混入



第131図 10・11号土坑 <SK10・11> 実測図 (1/30)

の縄文晚期の鉢片が出土した。

出土遺物（図版32、第128図1）

瓦器 完形の椀であるが全体に歪みがある。口縁内外は黒化している。口縁には補修した痕跡を見る。口径16.8cm、底径6.7cm、器高4.9~5.8cm。

13号土坑〈SK13〉（第121図）

E 6 区の中央にあり、弥生時代の12号土坑に隣接する。上面で南北最大100cm、東西158cmの東西に長い隅円台形プランをなし、深さは12cmと浅い。床面の西寄りに二段掘りの穴がある。埋土中から土師器坏片と混入の縄文晚期土器片、黒曜石・サヌカイトの剝片が出土したがいずれも図示にたえない。

14号土坑〈SK14〉（第121図）

E 6 区で13号土坑のすぐ南にある。東南辺約180cmを底辺とし、高さが200cmの隅円の三角形プランとみることができ、深さは最大22cm。埋土中から土師器小皿・坏片と混入の縄文晚期土器片、黒曜石・サヌカイトの剝片が出土したがいずれも図示にたえない。13世紀代か。

16号土坑〈SK16〉（図版6、第121図）

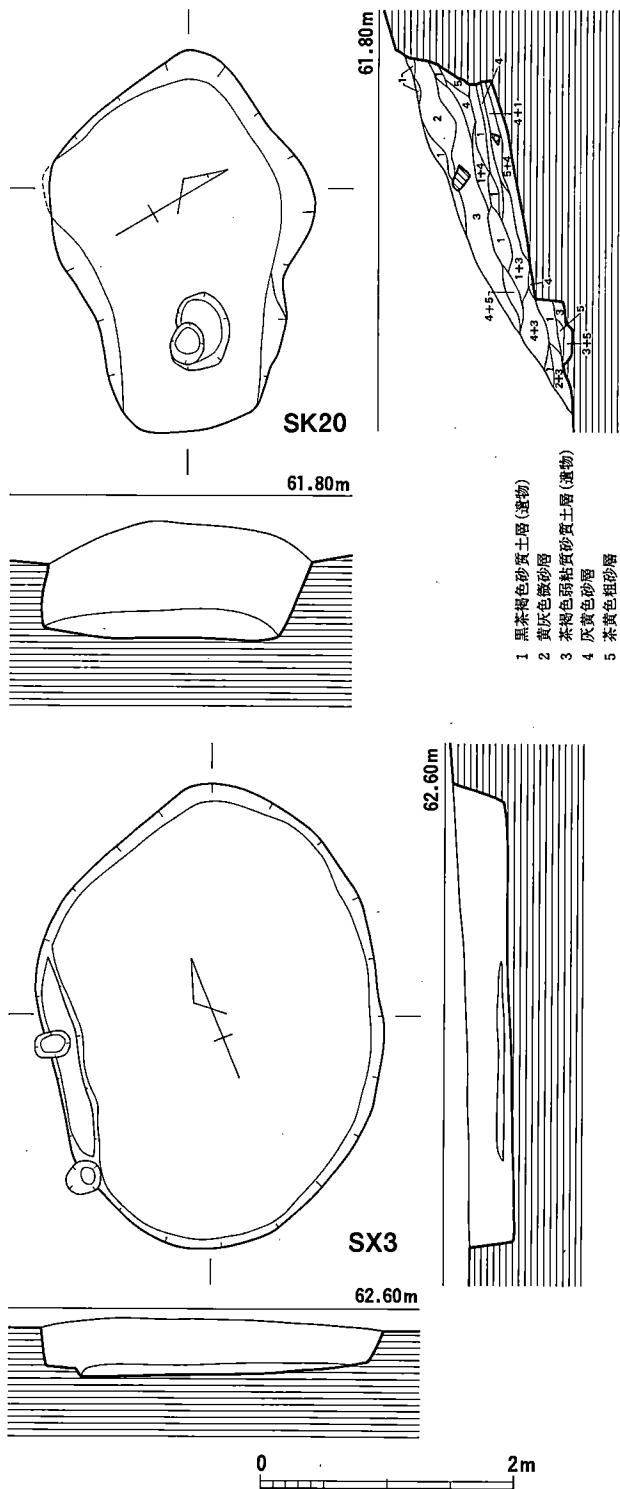
F 3 区から 4 区にかけて存し、二段掘りになっており、一段目は幅125cm、長さ237cmの南北に長い不整長方形プランをなし、二段目は床面で最大幅66cm、長さ195cmを測る。二段目の主軸方位はN-21°-E。これは土壙墓の可能性もあるが、先の6~11号土坑とは場所があまりに離れているので躊躇するところではある。床面下にピットがあるがこれはより古い時期のものとみられる。埋土中から縄文晚期の鉢（第60図）が出土したが混入であろう。中世期とみられる。

17号土坑〈SK17〉（図版6、第121図）

F 3 区にある。上面で南北最大幅172cm、東西長284cmの東西に長い長方形プランである。坑内の東側が長さ213cm、幅120cmにわたって深さ87cmまで落とし穴状に深くなっている。淡黒色土が入っていた。二段目の主軸方位はN-47°-W。埋土中から内黒土器のほか弥生前期土器片、サヌカイト剝片が出土したが図示にたえるものはない。

20号土坑〈SK20〉（図版19、第132図）

G 8 区の斜面部のもと II 区としていた所にある。上面で南北最大幅210cm、東西最大長298cmの東西に長い五角形状のプランであり、東壁の立ち上がりは削平されていた。埋土中から土師器、瓦器、青磁、白磁、土製の壁体片？のほか、混入の縄文土器、黒曜石剝片が出土した。縄



文土器は前述。

出土遺物（図版36、第133図1～22、

170図4・5）

土師器（2～5） 2は小皿で復元口径10.6cm。3は椀、4は壺、5は鍋の破片である。

瓦器（1・6～10） 1は須恵質に近い焼成。6～9は復元口径が15.2～17cm。6は内外とも、8は外面口縁直下のみが黒色である。

青磁（11～20） 11～19は龍泉窯系の碗で、13の内面に文様、17の内底面に文字らしい陰刻があるのを除けばみな無文である。口径は14.8～17cm、底径は5.7～6.6cm。20は小皿。

白磁（21） 皿で内底面には文様があるがよく見えない。復元口径12.5cm。

土製品（第170図4・5） ともにスサ入りの粘土を固めたもので、器表はナデが施されている。何かの壁材であったことは間違いないからう。

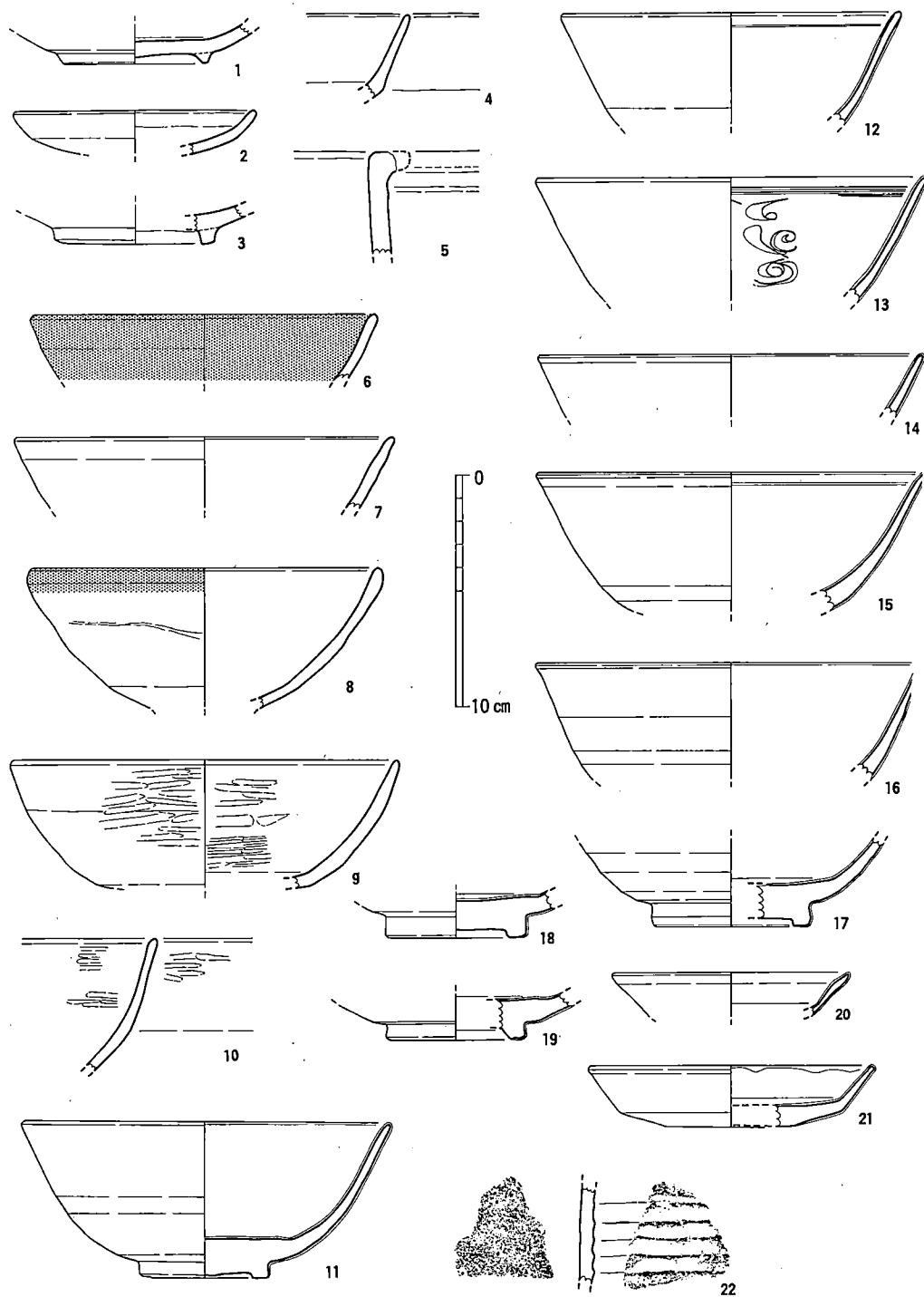
21号土坑〈S K21〉（図版19、付図）

G 8 区の南端、20号土坑の南にある。上面で南北150cm、東西120cm、深さ40cmほどの土坑であった。黒色土器の椀が出土している。

出土遺物（第135図1）

黒色土器 梗で内外とも黒色である。復元で口径15.8cm、底径8.6cm、器高5.8cm。

第132図 20号土坑〈S K20〉、S X 3 実測図 (1/60)



第133図 20号土坑〈SK 20〉出土土器等実測図 (1/3)

22号土坑〈SK22〉(付図)

G7区の北端、21号土坑の東にある。斜面にあって南側はほとんどが削られていた。残存するのは東西100cmほどであった。土鍋と縄文晚期土器、サヌカイト剝片が出土しているが土鍋は図示にたえない。縄文土器は前述。

S X 3 (第132図)

D・Eの4区にあり、46号住居跡、15号土坑、6号溝を切っている。東西275cm、南北366cmの楕円形プランで、深さは最大43cm。埋土中から土師器小皿・壺・鍋片と混入の黒曜石剝片、石斧、すり石が出土した。石斧は前述。

出土遺物(第135図1~3)

土師器 1は小皿で外底面は糸切り痕がある。復元口径9.2cm、底径7cm、器高1.1cm。2は壺で外底面は板圧痕がある。3は椀であろう。

S R 1 (図版19、第134図)

G3区で、地形そのものが段落ちになる縁の所にある。S R 2を切っていると捉えられたが、投棄された石は両方にまたがるものもあった。東西最大166cm、南北265cmの不整楕円形プランで、深さは最大43cm。坑内には熱を受けたものを含む多数の礫が投棄されたような状態で存したが、それらの大半は底面より20cmほど浮いた位置に集中していた。どのような性格のものかわからない。礫に混じって土師器、黒色土器、白磁、台石、渡来鏡、黒曜石剝片が出土した。渡来鏡は8枚が重なってくついたままで出土した。

出土遺物(図版38、第135図1~5、174図6~13、177図24)

土師器(2) 小皿で、外底面は糸切り痕がある。復元口径9.6cm、底径8.3cm、器高1.4cm。

瓦質土器(1) 須恵質に近い瓦質である。壺であろうか。

瓦器(3) 梗の底部片で、復元底径6.7cm。

白磁(4・5) 4は碗、5は皿である。5は復元口径10.2cm、底径3.8cm、器高2.6cm。

渡来鏡(第174図6~13) 6~8は「開元通寶」で、唐の高祖・武徳4年(621)始鑄である。3枚は字体が異なり同一の範ではない。7は文字の窟みに赤色顔料が付着しており、塗ってあったものだろう。6には器表に赤色顔料の痕跡があり、これは別のものに塗ってあったのが重なっている時に付着したものらしい。8は重なっていた8枚のうちの最上面にあったものであり、「開」の裏に「一」のような文様があり「背月」となる。ほかの7枚は2g以上の重さがあるので、これは1.8gしかない。3枚の径は24.3~25.0mm。9は「咸平元寶」で宋の真宗・咸平元年(998)始鑄である。径は24.6mm。10は「景德元寶」で宋の真宗・景德元年(1004)始鑄である。文字の不鮮明な部分がある。径は24.2mm。11は「景祐元寶」で宋の仁宗・景祐元年(1034)始鑄である。

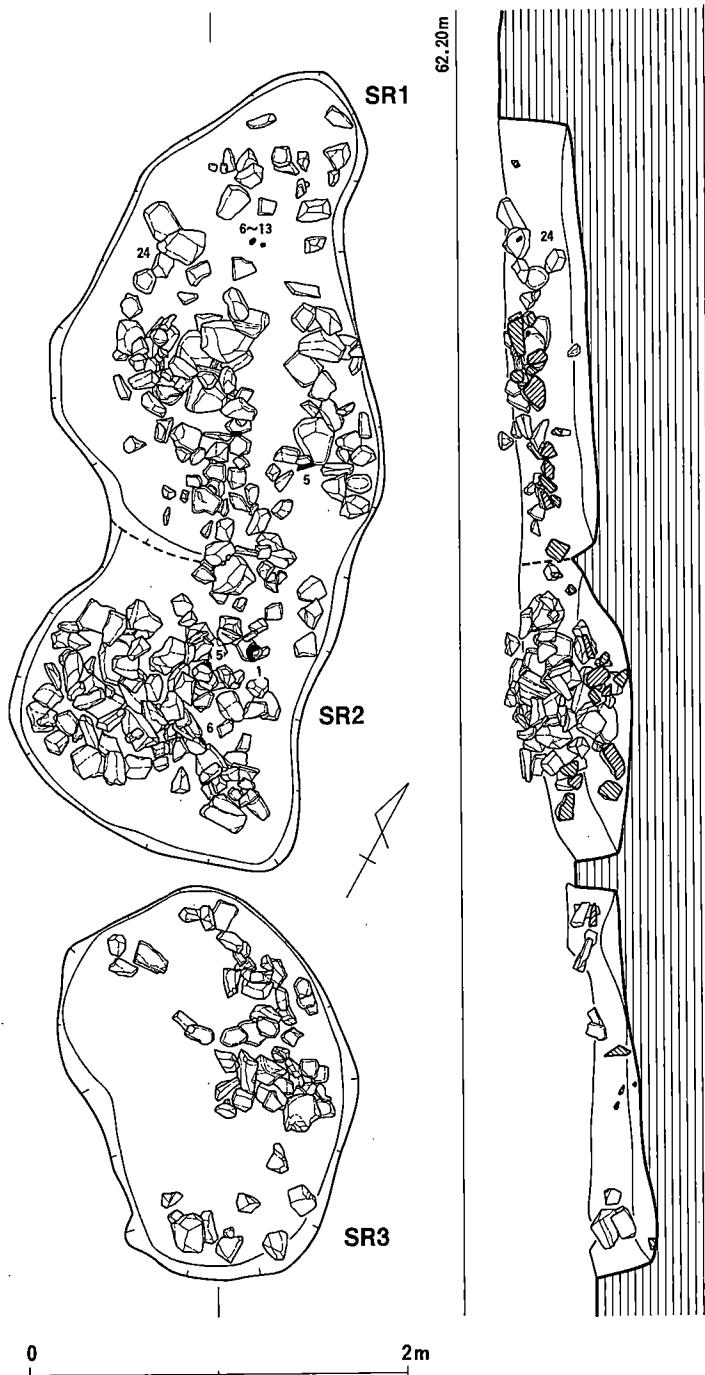
孔が方形というより円形に近い形状となる。径は24.8mm。12は「皇宋通寶」で宋の仁宗・宝元2年(1039)始鑄である。文字がやや不鮮明である。径は24mm。13は「元祐通寶」で宋の哲宗・元祐年間(1086~1093)の铸造である。径は23.7mm。これが最新銭である。

石器(第177図24)花崗岩の台石であろう。

SR 2

(図版19、第134図)

G 3区で、SR 1の南にある。東西最大165cm、南北155cm以上の不整形プランで、深さは最大58cm。これもSR 1と同じく、坑内に熱を受けたものを含む多数の礫が投棄されたような状態で存したが、こちらは坑底にまで及ぶ出土状態であった。礫に混じって須恵器、土師器、瓦器、青磁、白磁のほか、弥生早期の突帯文土器(前述)が出土した。



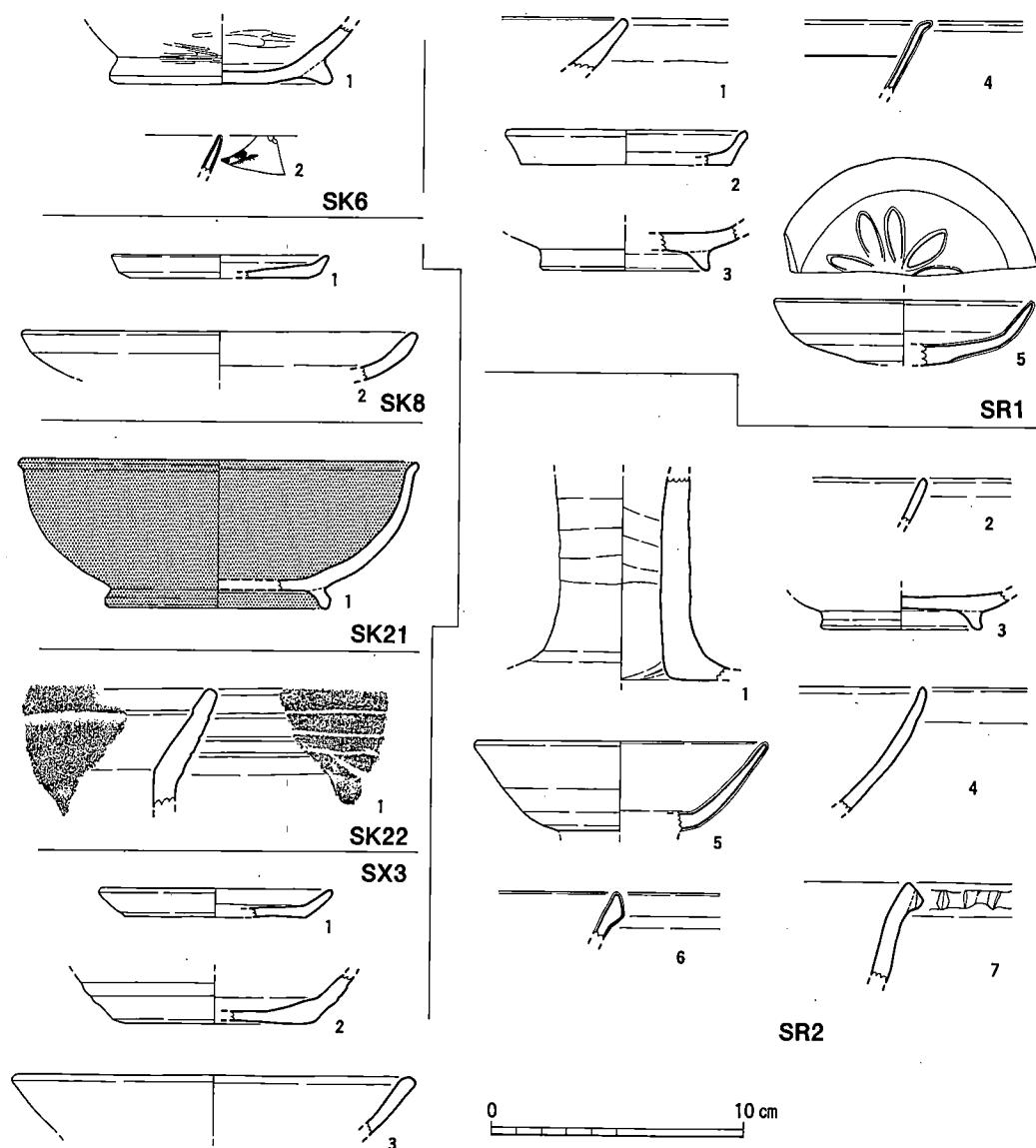
第134図 SR 1~3 実測図 (1/40)

出土遺物（第135図1~7）

須恵器(1) 長頸の壺である。

土師器(2・3) 2は壺であろうか。3は高台の付く椀である。復元底径6.3cm。

瓦器(4) 梗の破片。



第135図 6・8・21・22号土坑、SX3、SR1・2出土土器等実測図 (1/3)

青磁(5) 小碗であるが、内外とも灰被り状態となっている。復元口径11.6cm。

白磁(6) 玉縁口縁の碗。

S R 3 (図版19、第134図)

Gの2・3区にまたがり、S R 2のすぐ東南部に存する。東西最大155cm、南北206cmの不整楕円形プランで、深さは最大35cm。これもS R 1・2と同じく、坑内に熱を受けたものを含む礫が投棄されたような状態で存したが、それは東側に多かった。礫に混じって土師器壊、瓦器碗の破片と黒曜石のコアが出土したが図示にたえない。

3 周溝墓

1号周溝墓 <ST 1> (図版3、第136・138図)

Eの4・5区にあり、76号住居跡と6号溝を切り、3号土坑・3号溝に切られていた。また周溝の北側は第2トレンチで失われている。

周溝は約8mの長さが検出されたが、東側に主体部を置いて弧状に巡っているものの、本来全周するものではなかったと思われる。いま残っている部分の外周で径を復元すると10.8mほどとなるが、主体部はその中心には位置しない。溝そのものは浅かった。

主体部は半分以上を第2トレンチで削られてしまい、いま西辺が120cm、南辺が70cmほどしか残っていないが、2号周溝墓の主体部を参考にすれば、幅が80cm、長さが150cm前後の長方形プランの南北に主軸を持つ土壙ではなかったかと思われる。残存する壙内に石が3個存した。主軸方位はS-24°-E。主体部埋土中から土師器壊、瓦器碗、縄文土器（前述）の破片が、周溝からは須恵器、土師器、瓦質土器、弥生土器、鉄滓が出土している。

出土遺物 (第139図1~5)

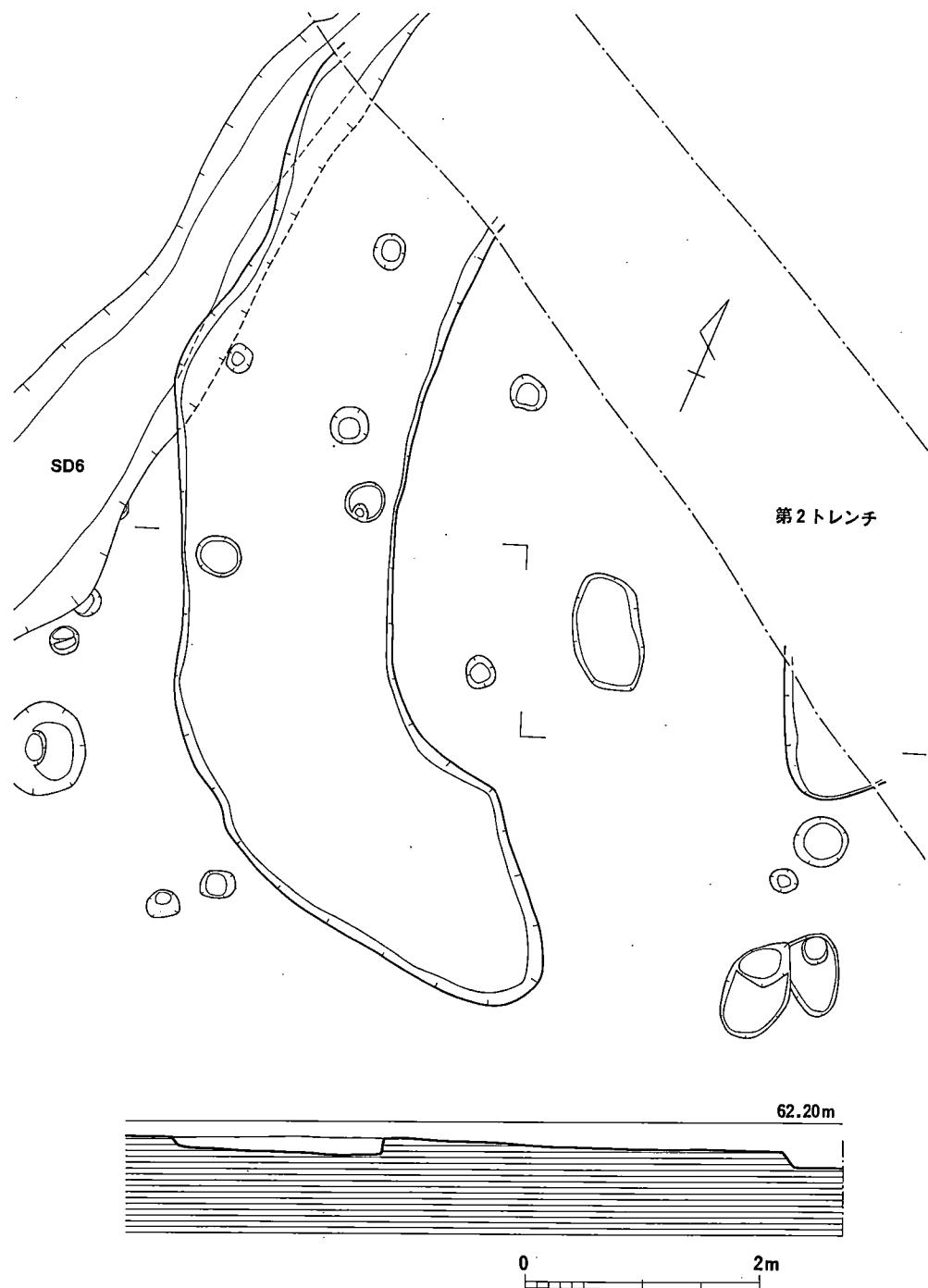
土師器(1・2) 1は小皿片。2は壊で、外底面には板压痕がある。復元口径11.8cm、底径7.3cm、器高4.2cm。

瓦器(3・4) 碗の小破片である。

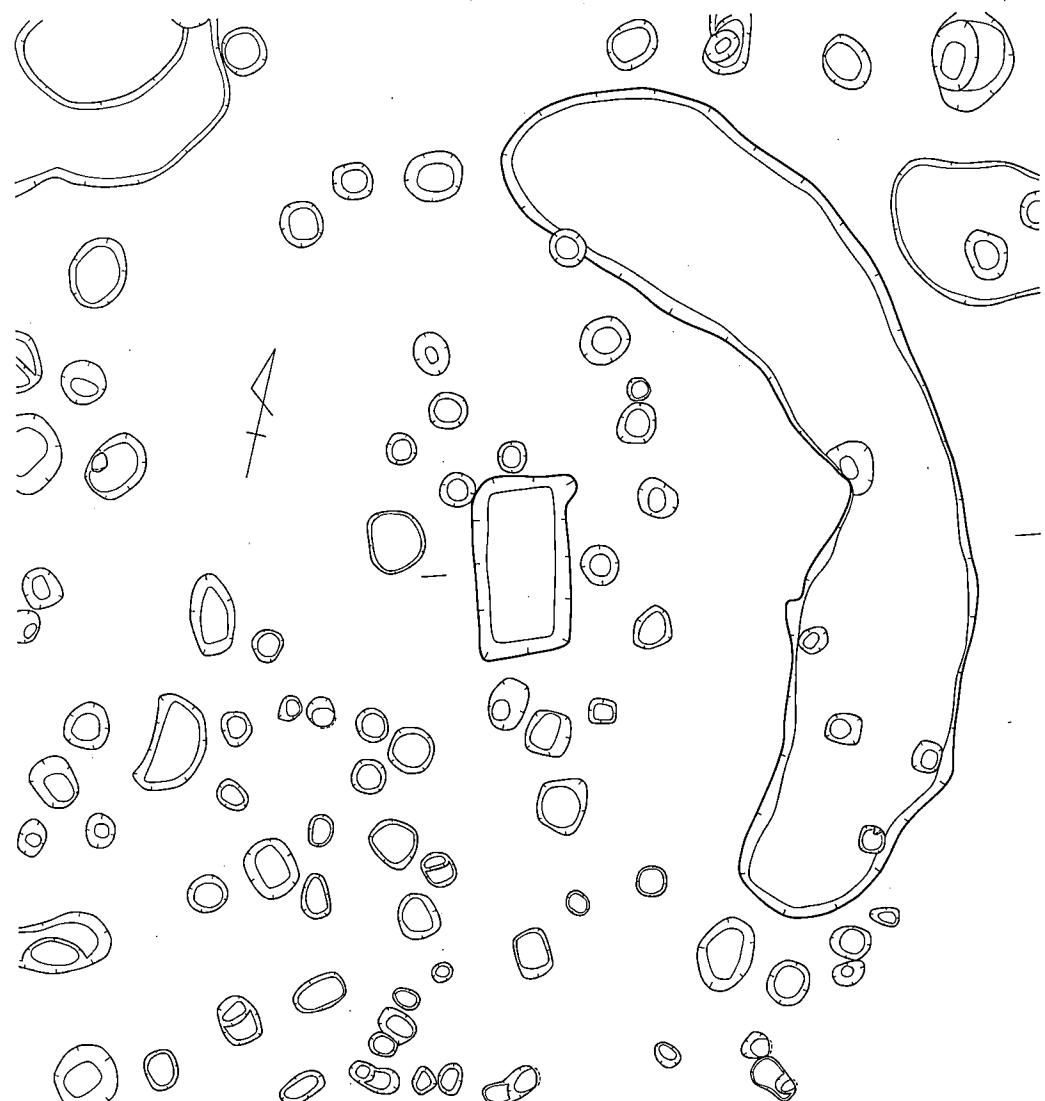
2号周溝墓 <ST 2> (図版3、第137・138図)

Dの4・5区にあり、1号周溝墓の西側に位置する。37・38・40・69号住居跡を切っている。

周溝は約6.7mの長さが検出されたが、西側に主体部を置いて弧状に巡り、これも本来全周するものではなかったと思われる。この外周で径を求める10mほどに復元されるが、主体部は1号と同様やはりその中心には位置しない。溝そのものは浅かった。



第136図 1号周溝墓〈ST 1〉実測図 (1/60)



62.60m

0 2m

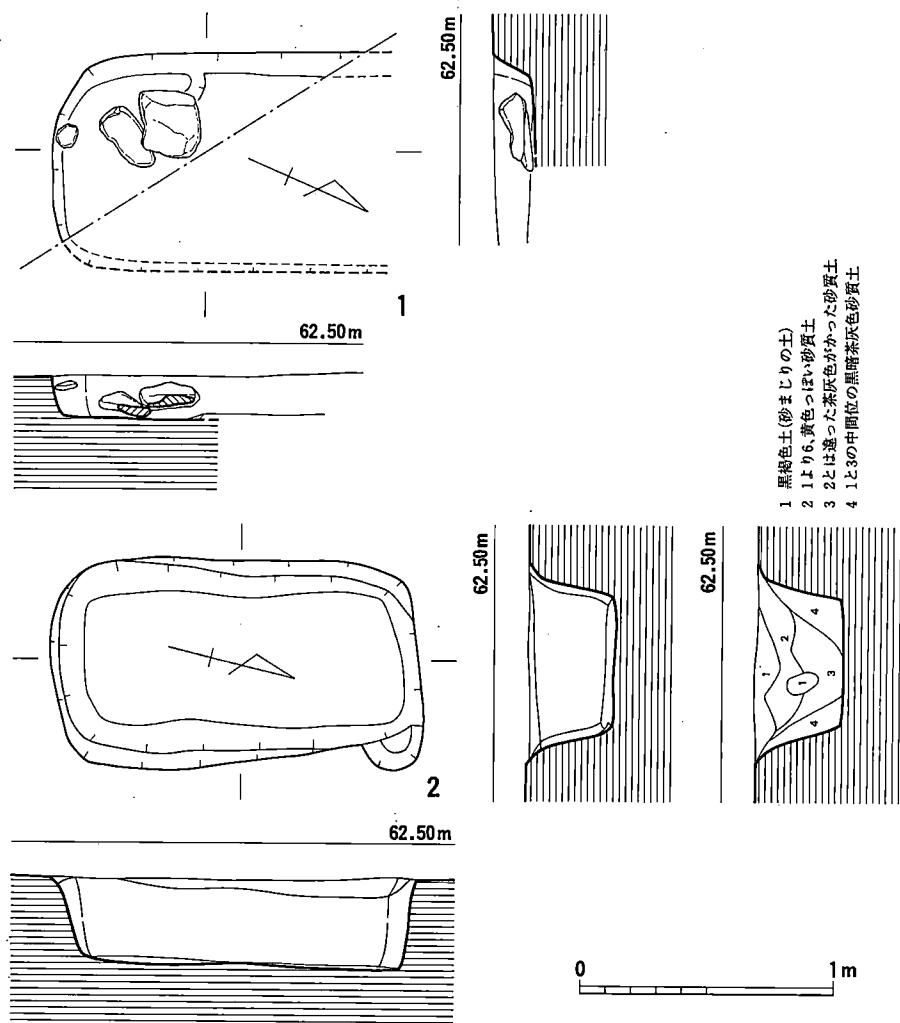


第137図 2号周溝墓 (ST 2) 実測図 (1/60)

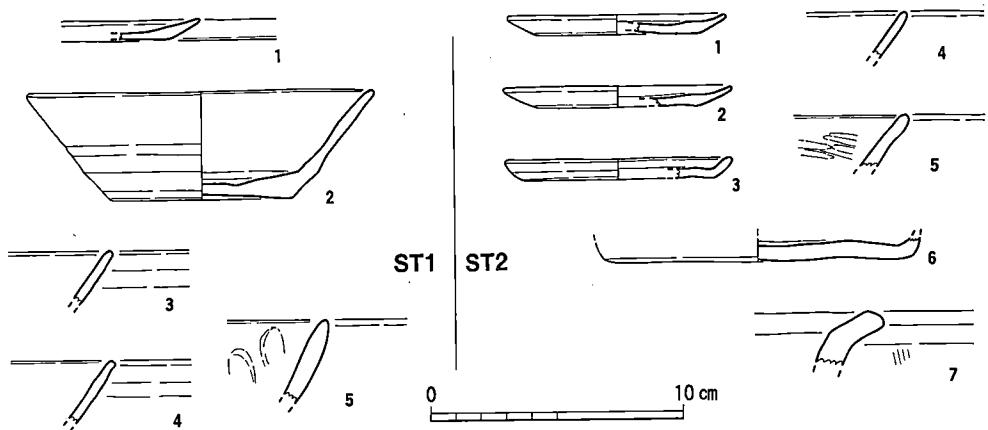
主体部は床面で東西52cm、南北125cmを測り、床面レベルは南側が高くなっている。木棺の痕跡は認められなかったので、南北に主軸を持ち南を頭位とする土塚墓であったと思われる。主軸方位はS-14°-E。主体部埋土中から土師器の壺と鍋片、周溝からは土師器、石斧片、黒曜石の鏃（前述）や・サヌカイトの剝片等が出土している。

出土遺物（第139図1～7）

土師器（1～7） 1～3は小皿片で外底面はみな糸切りであるが、1・2と3とでは体部の立ち上がりに違いがある。復元で口径8.6～9cm、底径6.2～7.6cm、器高は3点とも0.8cm。4～6は壺としておくが、5は椀かもしれない。7は鍋の破片。



第138図 1・2号周溝墓〈ST1・2〉 主体部実測図 (1/30)



第139図 1・2号周溝墓〈ST1・2〉出土土器実測図 (1/3)

4 溝

溝は7条を取り上げるが、1・3号の全部と2号の大半は浅くて、確実に溝としてよいかどうか疑問もないではない。包含層I～IIIの中の窪みであった可能性も否定できないが、ここでは調査時の所見どおりに遺物を取り扱うこととする。

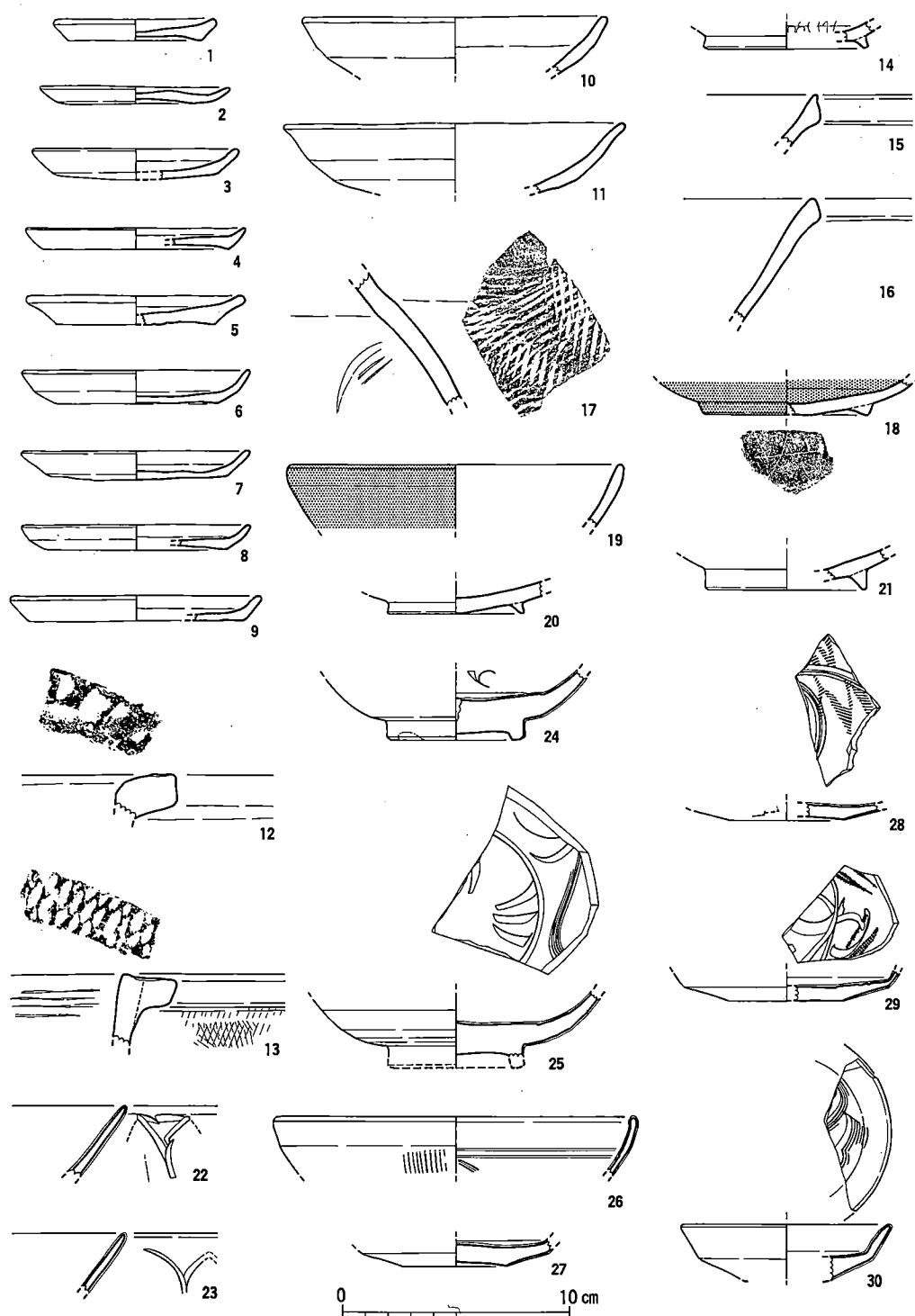
1号溝〈SD1〉(第114図)

B・C・Dの2・3区を中心に一部がD4区にかけて、6号溝の上層およびその東側に存する灰褐色土の広がりであった。幅は500cmから800cmほどあるが、深さは10cmに満たないので確実に溝としらるかどうか定かではない。包含層のI・II・IIIとも重複する。土師器、須恵質土器、黒色土器、瓦器、陶器、青磁、白磁のほかに、土錘、滑石片、鉄器、鉄滓7、すり石、砥石、台石、石斧、黒曜石・サヌカイト・チャートの錐・剝片(既述)などが出土した。

出土遺物(図版36・37、第140・141図1～50、169図1～3、171図1、172図2～4、175・176図1・13・14)

土師器(1～13) 1～9は小皿。1のみが他より極端に小さく、9は一回り大きい。3・7はヘラ起こし底で丸みを持った底部であるが、それ以外は糸切り底である。2は強い二次熱を受けている。1は復元口径7.1cm、底径5.9cm、器高1cm、9は復元口径11cm、底径9.3cm、器高1.1cmで、それ以外は口径8.3～10cm、底径6.8～8.1cm、器高0.8～1.5cmの間に納まる。10・11は壊。12・13は土鍋片で、口縁上端部にはワラの茎のようなものを使って施した押圧痕がある。

須恵質土器(14～17) 14は椀になろう。内面はミガキである。15・16は東播系のこね鉢。17は甕である。



第140図 1号溝〈SD 1〉出土土器等実測図1 (1/3)

黒色土器(18) 内外とも黒色の椀である。外底面に×印の細い線刻がある。

瓦器(19~21) 19は外面の口縁下が黒色である。

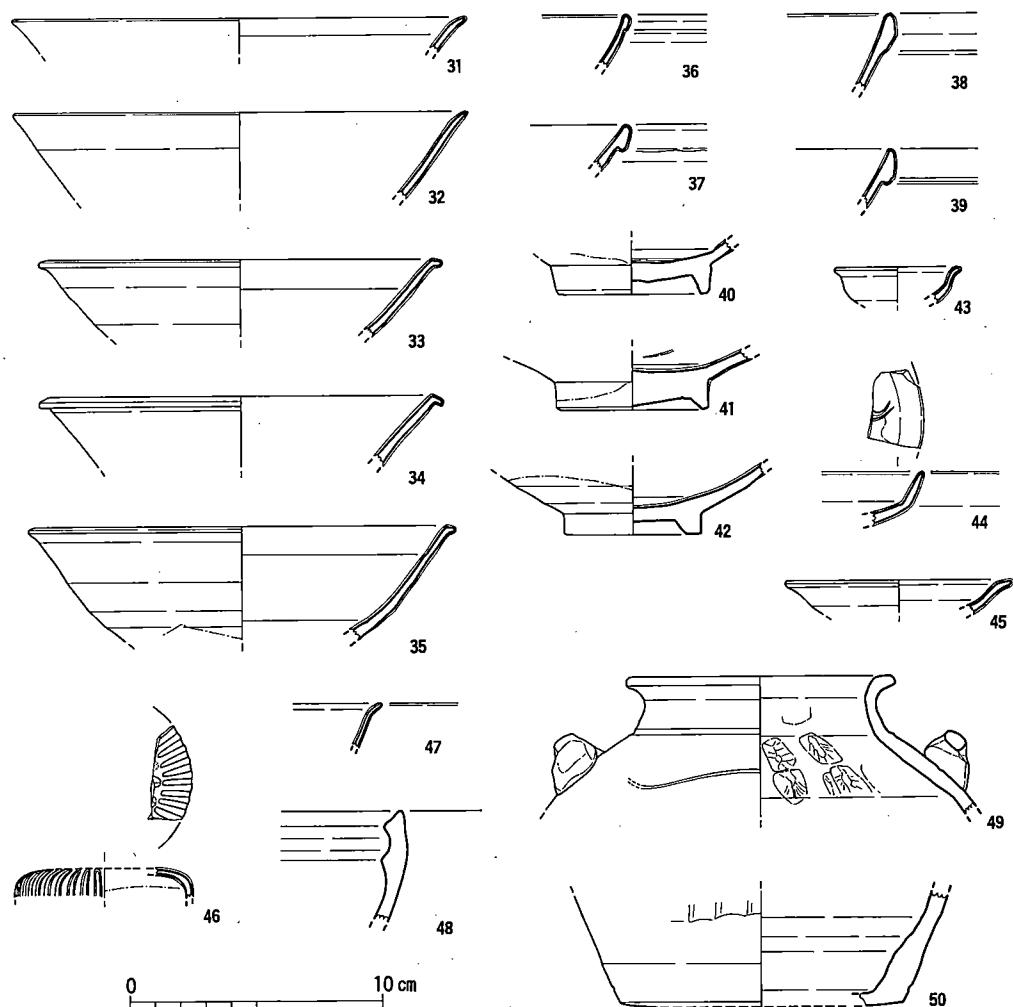
青磁(22~30) 22~26は碗で、22・23には連弁文がある。22~25は龍泉窯系、26は同安窯系。

27~30は皿。

白磁(31~45) 31~42は碗で、31~35は復元口径16~18cm。36~39は玉縁口縁となる。40の内底面には釉の搔き取りがある。43は復元口径5cmの小碗である。44・45は皿。

青白磁(46・47) 46は合子、47は器壁の薄い碗。

陶器(48~50) 48は無釉の鉢。49は褐釉の壺で、耳は1個しか残存しないが四耳壺であろう。



第141図 1号溝〈SD 1〉出土土器等実測図2 (1/3)

50は壺の底部で褐釉であろう。

土製品(第169図1~3) 管状の錘である。3点ともに外面はナデ調整で、孔は楕円形気味となる。1は端部のごく一部を欠損するのみではほぼ完形。化粧土を掛けている。全長47.2mm、最大径11.8mm、重さ4.8g。2・3の最大径は13mmと11.2mm。

滑石製品(第171図1) 滑石の小さな容器の破片で、石鍋を再利用したものだろう。

鉄器(第172図2~4) 2・3は釘であろうか。2の全長は55mm。4は紡錘車の芯棒であろうか。

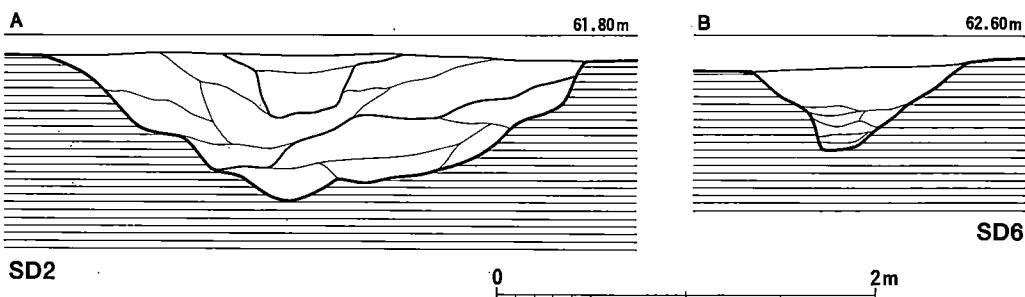
石器(第175・176図1・13・14) 1は片岩の砥石もしくはすり石であろう。器表はよく磨れてい。る。13・14は台石で、14の周縁には敲打によると思われる剝離がある。

2号溝〈SD2〉(図版2、第114・142図)

調査区の南側において、B2区からC・Dの2区そしてE・Fの2・3区まで大略東西方向に伸びる溝であるが、D・E・Fの部分では最大幅350cmもありながらきわめて浅かった。それに対し、B・C区の特にB区部分は第142図の断面図に見るよう幅280cm、深さ75cmほどで断面がすり鉢状をなしていた。茶褐色土を埋土としていた。溝の性格はわからない。土師器、黒色土器、瓦器、青磁、白磁のほかに、滑石片、鉄器、鉄滓1、砥石、すり石、台石、弥生土器、磨製石斧、黒曜石・サヌカイトの鏃・剝片などが出土した。弥生土器と石鏃等は既述した。

出土遺物(図版32・33・37・38、第143~146図1~50・51~53、172図5、175~178図2・3・15~19・33)

土師器(1~27・51・52) 1~6は小皿で、2~5は外底面に板圧痕はあるが糸切り痕は見えない。6のみが他より大きい。6は復元口径13.6cm、底径9.5cm、器高1cm。1~5は復元口径9.2~10.2cm、底径7~8cm、器高1~1.5cmの間に納まる。7は托。口径10.2cm、底径6.6cm、器高2.2cm。8~11、16・17・51・52は壊。10は化粧土を掛けている。16・17は本来は内外とも黒塗りであったと思われる。黒ウルシであろう。51には外面に、52には内面に黒塗りの痕跡がある。12~15はやや浅いが椀としておく。13・15は硬質であり瓦質に近い。化粧土を掛けている。18は壺で復元口径19cm。8世紀代のものと思われる。



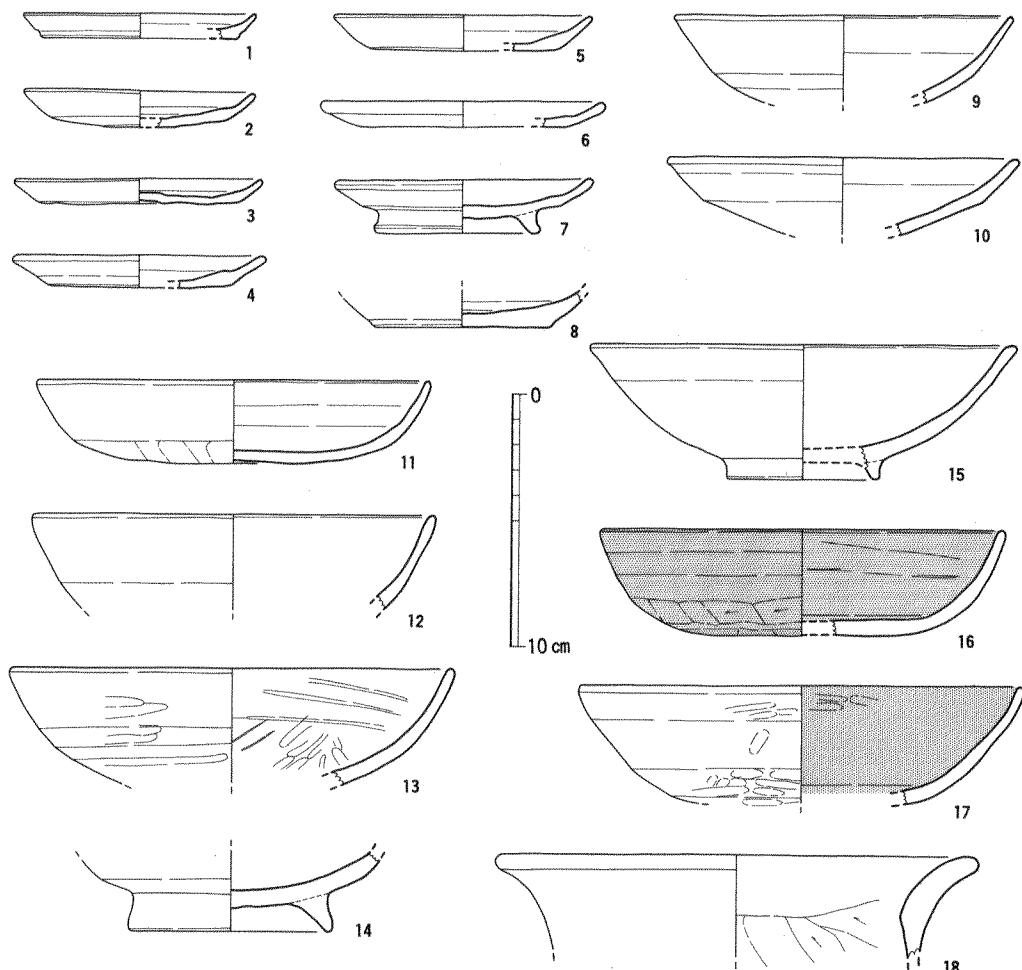
第142図 2・6号溝〈SD2・6〉土層図(1/40)

19～27は土鍋であるが口縁の形態は一様ではない。19は内外とも粗い刷毛目で調整する。内底面にはコゲらしきものが付着し、外面は煤けている。復元口径36cm。20はL字形に屈折する口縁で、内面下端は煤ける。復元口径40.8cm。21は把手の部分であろう。

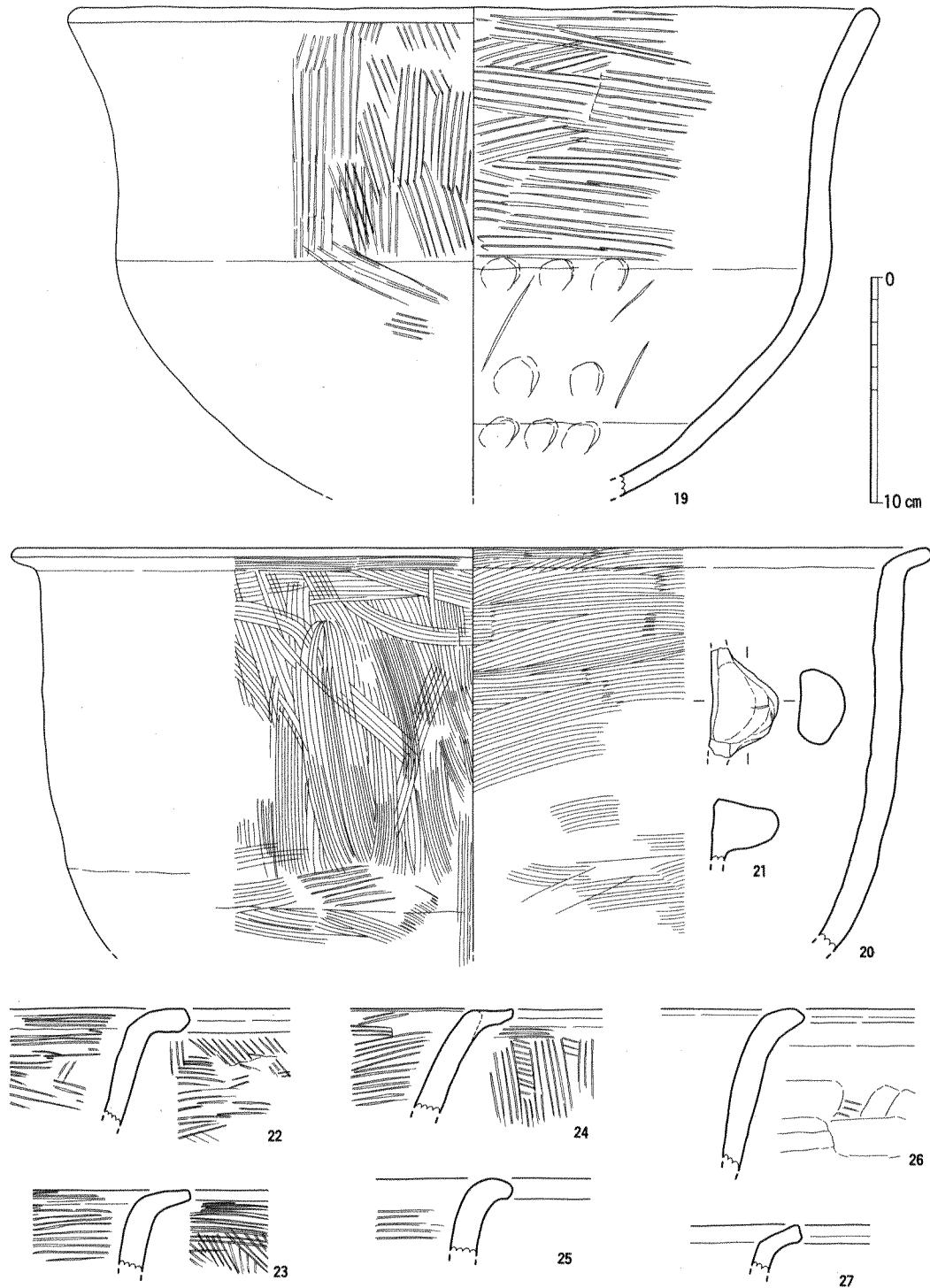
黒色土器(28～31) 28は内外とも、29は外面の口縁下まで、30・31は内面が黒色である。29～31は瓦質に近い。29は口径17.7cm、底径6.7cm、器高6cm。

瓦器(32～36) 全て椀である。32は外面が黒塗りで、ウルシを塗ったものであろう。外底面には十字の線刻がある。口径17cm、底径6.4cm、器高6cm。33は口縁が外反気味である。復元口径16.9cm。34は土師質に近い。

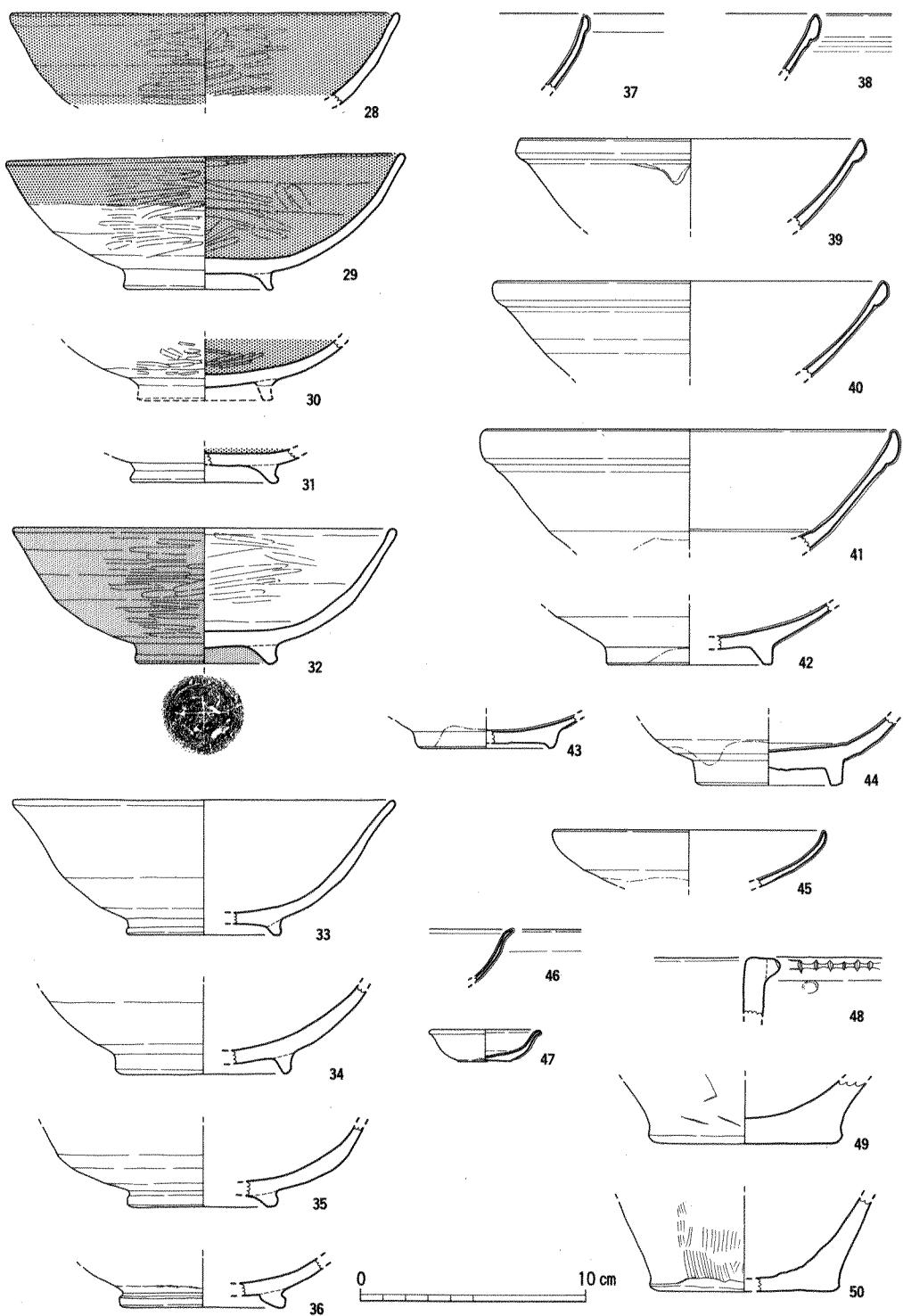
青磁(46) 小碗の破片である。



第143図 2号溝〈SD 2〉出土土器等実測図1 (1/3)



第144図 2号溝〈SD 2〉出土土器等実測図2 (1/3)



第145図 2号溝〈SD 2〉出土土器等実測図3 (1/3)

白磁(37~45・47・53) 37~44・53は碗で、37の口縁玉縁は小さい。53は少し歪みがある。45は皿とすべきか。47はごく小さな鉢で復元口径5cm。口縁に口禿げ状の所がある。

鉄器 (第172図5) 刀子であろう。刃部長6.6cm。

石器 (第175~178図2・3・15~19・33) 2は片岩の砥石もしくはすり石で、器表はよく磨れていて使用痕が見える。3は砂岩の中砥で、角柱状の2面はよく磨れており、もう2面も粗面部をも使用している。15~19は台石または叩石。15は周縁の何カ所かに敲打痕がある。叩石とすべきか。16は熱を受けた痕跡がある。17も熱を受けているらしい。18は強い熱を受け、表面はとてもよく磨れている。19は叩石が妥当か。33は砂岩の中砥で両側面はよく使用している。

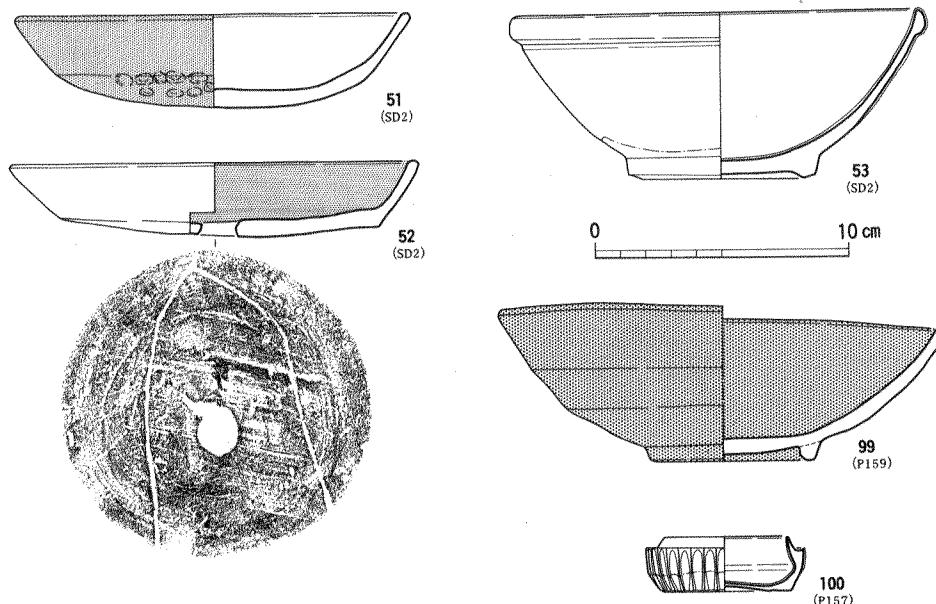
3号溝〈SD3〉(第114図)

調査区の中央付近、Eの4・5区において長さ約6m分が検出された。東側は第2トレンチで削られてしまったが、そこよりさらに東へは伸びていない。これは幅が最大でも75cmしかなく、深さも10cm前後の浅いものであった。ただし溝といえるかどうか定かでない。黒茶褐色土を埋土としていた。土師器、須恵質土器、黑色土器、瓦器、白磁が出土した。

出土遺物 (図版33・36、第147図1~9、171図3)

土師器(1~4) 1は壺で、復元口径13.7cm、底径7.1cm、器高3.5cm。2は椀。化粧土を掛けている。3・4は鍋の破片。4の外面は煤ける。

瓦質土器(5) 小皿で、外底面は糸切りである。復元口径8.4cm、底径6.5cm、器高1.4cm。



第146図 2号溝〈SD2〉、ピット出土土器等実測図(1/3)

黒色土器(6) 内面と外面の口縁直下部分が黒色である。深みのある椀である。

瓦器(7・8) 口縁内外が黒色をなす椀である。

白磁(9) 玉縁の碗。

滑石製品(第171図3) 石鍋片を再加工したもので、三角形状の一頂点に撮みないしは紐掛けができるような部分を削りだしている。内面には煤が付着する。製作途中であろうが、分銅にでもしようとしたものだろうか。

4号溝 <SD 4> (図版5、第114図、付図)

調査区の西端、A 3区からC 5区まで、北東一南西方向に走る溝である。最大幅は約120cm、深さは最も深い所で40cmほどがあったが総体に浅い。やや粘性を帶びた灰褐色砂質土が埋土であった。これとほぼ平行して南側に5号溝があり、それらは心心間で120~170cmの距離である。内部には礫が転がっていたが5号溝ほど多くはなかった。土師器、青磁、石鍋、鉄器、砥石、黒曜石・サヌカイトのスクレイパー(既述)・剝片が出土した。

出土遺物 (図版37、第147図1~3、171図2、172図6、175図4)

土師器(1~3) 1は小皿で、外底面は糸切りらしい。2は壺か鉢で、外底面は糸切り後に板圧痕が付く。内面は煤ける。復元底径8.6cm。3は鍋の口縁部片で外面は煤けている。

滑石製品(第171図2) 石鍋の口縁部片で、鍔ではなく縦型の把手が付く。割れてのち再利用しようとしたらしい。

鉄器(第172図6) 折損しあつ錆ぶくれが著しいが図のように刀子に復元した。

石器(第175図4) 凝灰岩の砥石で仕上砥である。四面ともよく使用している。

5号溝 <SD 5> (図版5、第114図、付図)

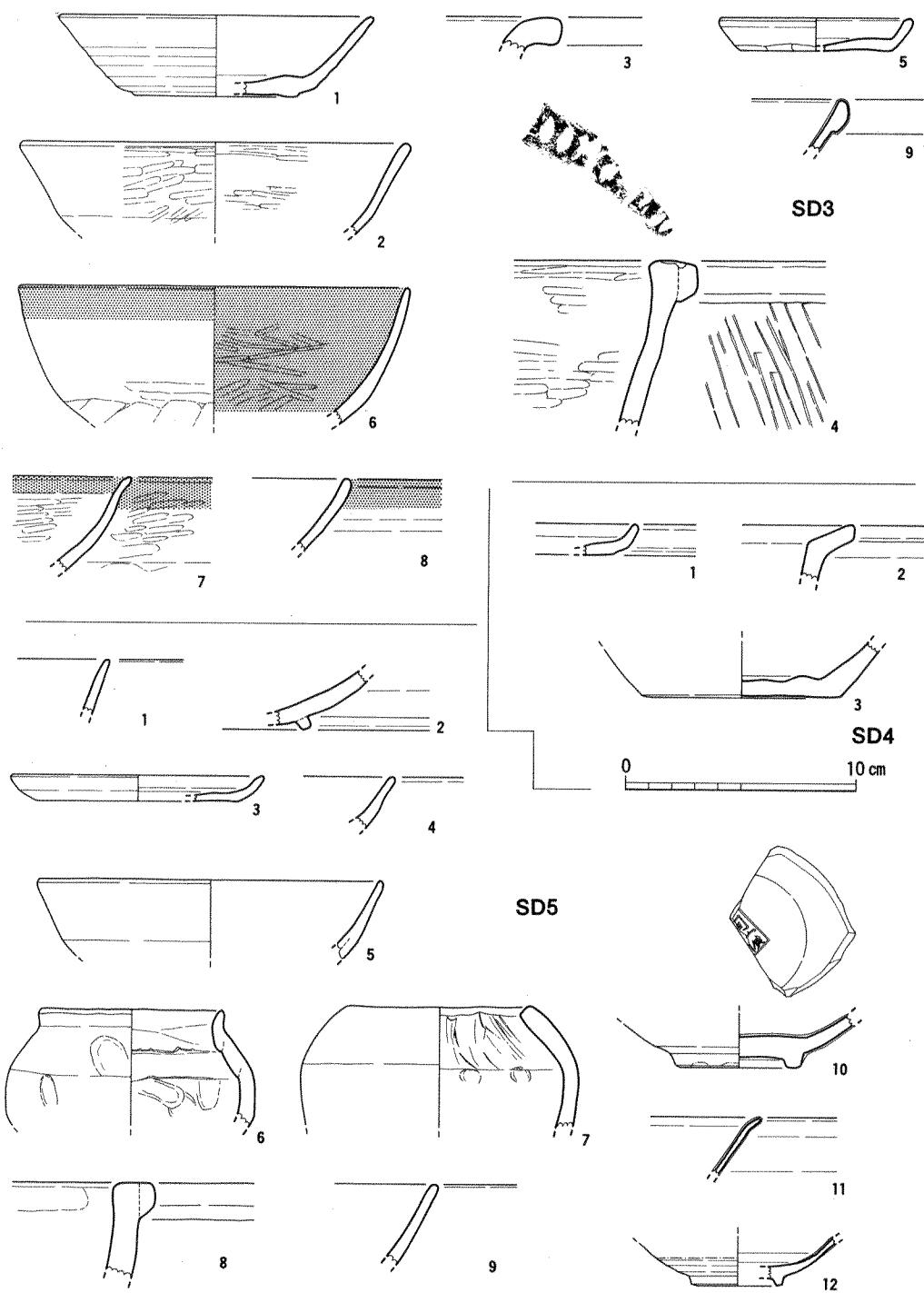
4号溝とほぼ平行してその南側にある。最大幅は約100cm、深さは最大で30cmほどがあったがこれも総体に浅い。灰茶褐色土が埋土であった。内部にはかなりの量の礫が転がっていたがその意味するところはわからない。土師器、須恵質土器、瓦器、陶器、青磁、白磁のほかに、石鍋、すり石、石斧、黒曜石・サヌカイトの鏃・剝片(既述)などが出土した。

出土遺物 (第147図1~12)

須恵器(1・2) 1は椀の口縁部片。少し磨滅している。2は椀か鉢の底部であろう。これは須恵質土器とすべきか。

土師器(3~8) 3は小皿で外底面は糸切り後ナデを施す。復元口径11cm。4・5は壺で、5は強い二次熱を受けている。復元口径15cm。6は壺、7は壺で、つくりは粗い。復元口径は6が8.1cm、7が8cm。8は鍋で外面には煤が付着する。

瓦器(9) 椗の破片。



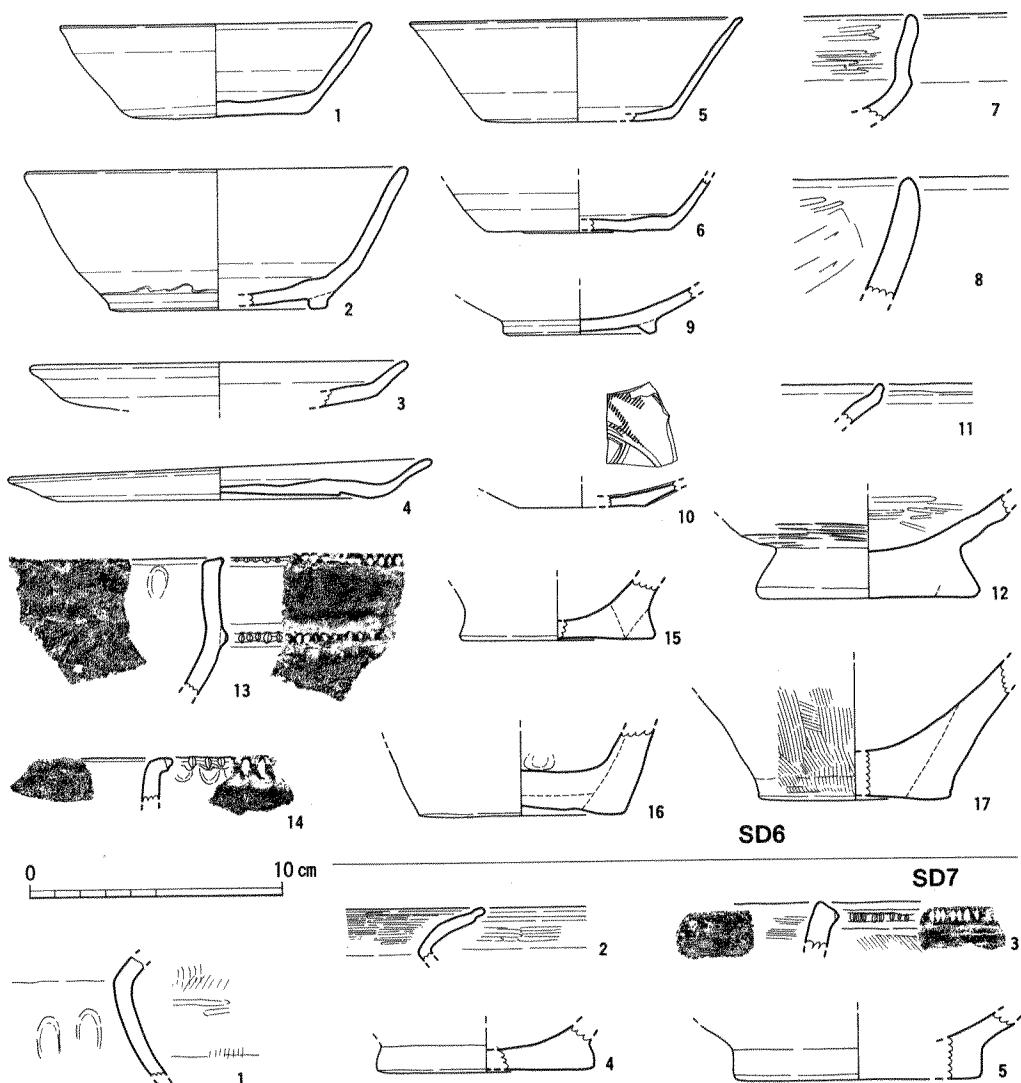
第147図 3・4・5号溝〈SD3・4・5〉出土土器等実測図 (1/3)

青磁(10) 龍泉窯系の碗で、外底面には重ね焼きの痕跡がある。内底面には文字の陰刻があるがはっきりと読めない。

白磁(11・12) 11は碗、12は皿であろう。

6号溝 <SD 6> (図版4・5・7・8、第114・142図、付図)

調査区の中央部を、B 2区からF 7区まで、北東一南西方向に縦断する溝である。場所によつて幅・深さとも異なるが、最大幅は約150cm、深さは最も深い所で100cmほどがあった。断面は



第148図 6・7号溝 <SD 6・7> 出土土器等実測図 (1/3)

U字形だがV字形に近い所もある。粗砂層と微砂層が互層になっているので水の流れていたことが伺える。土師器、須恵器、瓦器、青磁のほかに、縄文晩期土器、弥生土器、石包丁、すり石、石斧、黒曜石・サヌカイト・チャートの剝片などが出土した。縄文土器等は既述した。

出土遺物（図版33、第148図1～17、176図20・21）

須恵器（1～4） 1は壺で口径12.4cm、底径7.1cm、器高3.7cm。2は高台の付く椀であり、復元口径15.2cm、底径8.6cm、器高5.6cm。3・4は皿。3の復元口径15cm。4は少し歪みがある。復元口径16.8cm、器高1～1.5cm。

土師器（5～8） 5の壺は精良な土器で、きわめてつくりがよい。化粧土を掛けている。復元口径13.2cm、底径7.6cm、器高4cm。6も5と同様で硬質である。7も精良土器。8は鉢であろうか。

瓦器（9） 挽の底部である。復元底径6cm。

青磁（10） 同安窯系の皿。

石器（第176図20・21） ともに台石とする。

7号溝〈SD7〉（図版4、Photo.3、第114図、付図）

調査区の北端からFの8・7区に略南北方向に走る溝である。約15mで南端はなくなっている。最大幅は約160cm、深さは最も深い所で80cmほどがあった。断面はV字形に近い。黒褐色土が入っていた。土師器壺と縄文晩期土器、弥生土器、黒曜石・サヌカイトの剝片が出土した。土師器は図示にたえず、図示できるのは縄文～弥生土器のみであり、これらは既述した。



Photo. 3 SD7など

5 その他

a. ピット出土遺物 (図版33・34・36~39、第146・149~152図1~100、169図4、171図4・5、172図7~13、175~179図12・22・23・37・42)

ピットは縄文~弥生時代をも含めて遺物の出土したものは1072個を数えたが、それらのうち実測に堪えうる資料としては中世期のものの方が多かった。以下の図示する資料について個別のピット番号は掲示しない。なお、6個のピットから7点の鉄滓が出土している。

土師器(1~56) 1~39は小皿。1のみが器形が大きく異なる。外底面は1~4・21がヘラ起こしらしく底部がやや丸みを帯びる。5~9もヘラ起こしだろう。それ以外は糸切り痕がある。4は×かと思われる線刻がある。8の内底面は煤ける。20の底部はかなり薄い。27は底面中央に穿孔があり、その近くに貫通していない窪みが表裏ともにある。35は一部に二次熱を受けた所がある。口径は27の8cmから26の10.8cmまでの間にある。40~47は杯で、すべて外底面は糸切り痕がある。48~51は椀であろう。51は瓦質に近い。52は高壺。53~55は鍋か。53は口径が小さいが内面は煤けている。56はミニチュアの鉢。手づくねである。

瓦質土器・黒色土器(57~67・99) すべて椀で、63~65は瓦質とはいえない。58・59は内黒土器かもしれない。65は内外に黒塗りの痕跡がある。99は内外とも黒色で、瓦質である。

瓦器(68~72) 楓のみで、70は外面と口縁直下の内面は黒色をなす。

須恵質土器(73・74) 73は東播系のこね鉢である。74は強い二次熱を受けている。

青磁(75~79) 75・76・79は碗。79のつくりはやや粗い。77・78は皿。

白磁(80~98) 98は皿で、それ以外は碗。85~88の釉は薄い。

青白磁(100) 合子で、蓋受け部と外底面は露胎である。型づくりかもしれない。口径4.9cm。

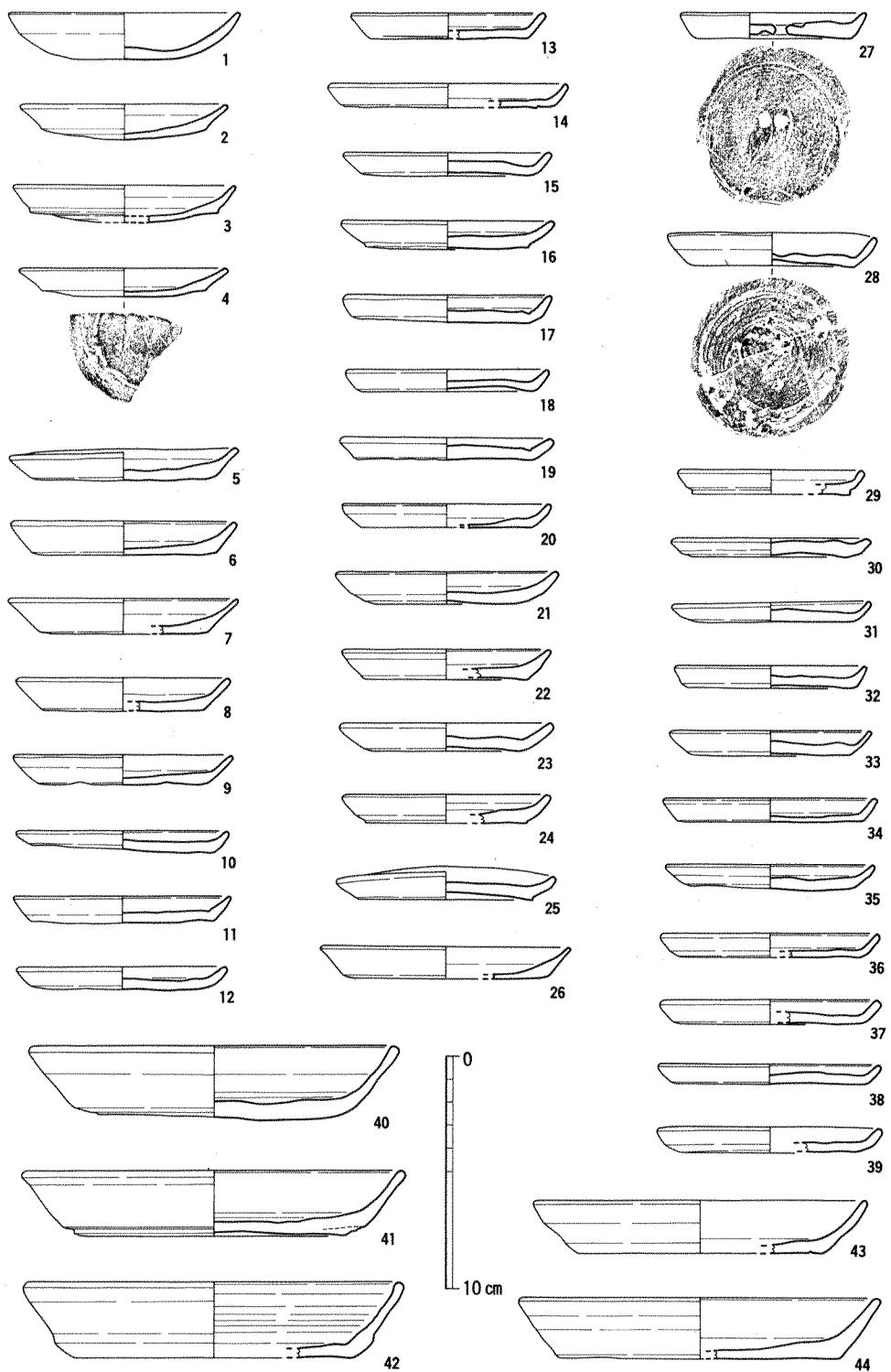
以上の土器等は(10~12・40~42・94)、(18・19・55)、(13・14)、(6・8・9・77)、(15~17・57・69)、(24・43)、(20・28・51・70・95・98)は各々同じピットから出土している。

土製品(第169図4) 土錐の半欠品である。現存長27.5mm、最大径11mm。

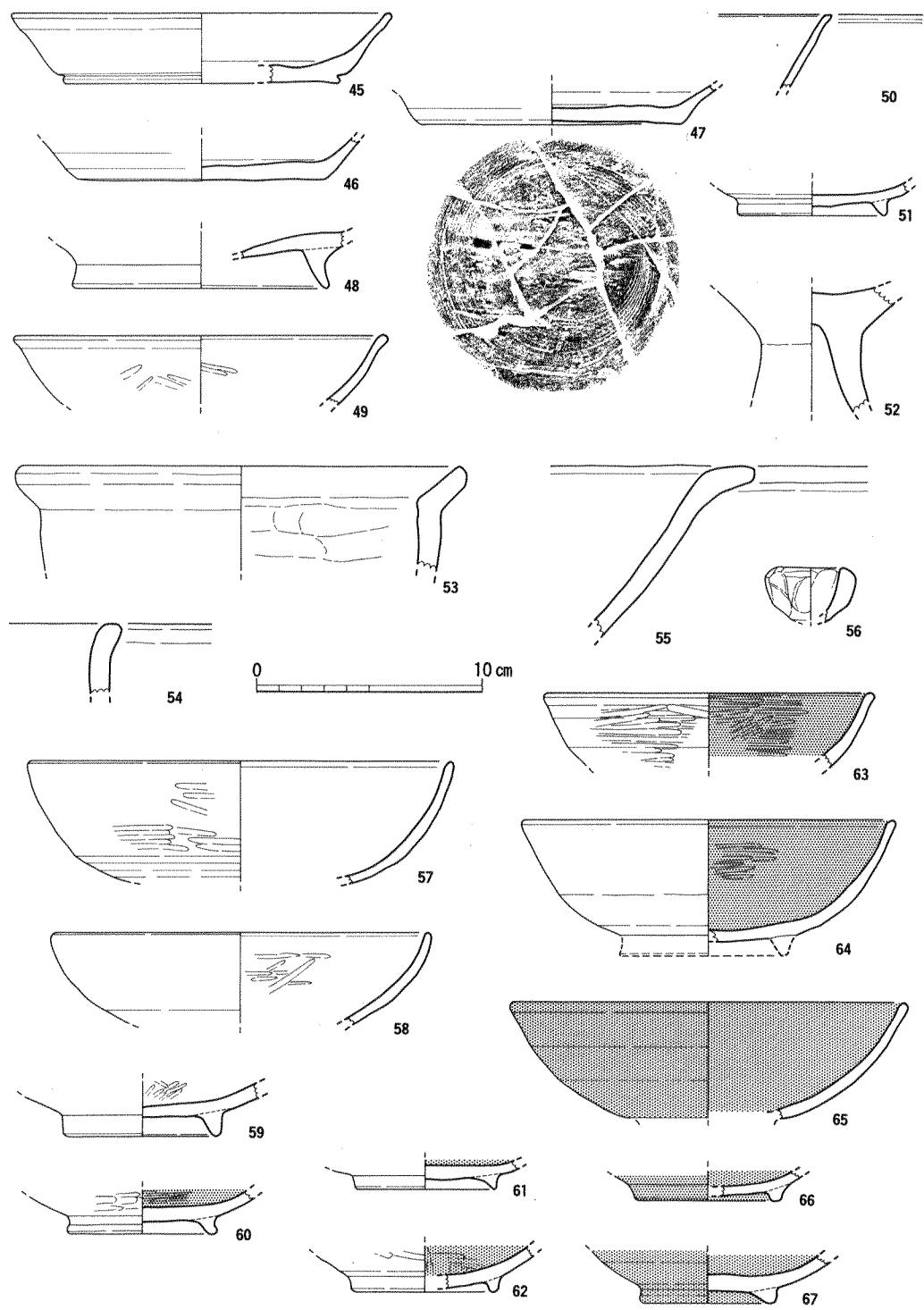
滑石製品(第171図4・5) 4は石鍋の底部付近を再加工したものとみられるが、何を造ろうとしたのか不明。5も石鍋の底部であるが、破片になって後に体部の破断面を研磨している。ともに外面には煤が付着している。

鉄器(第172図7~13) 7は刀子もしくは小刀であろう。8は鉈か。9~11は釘であろう。12・13も釘の先端が曲がったものかもしれない。

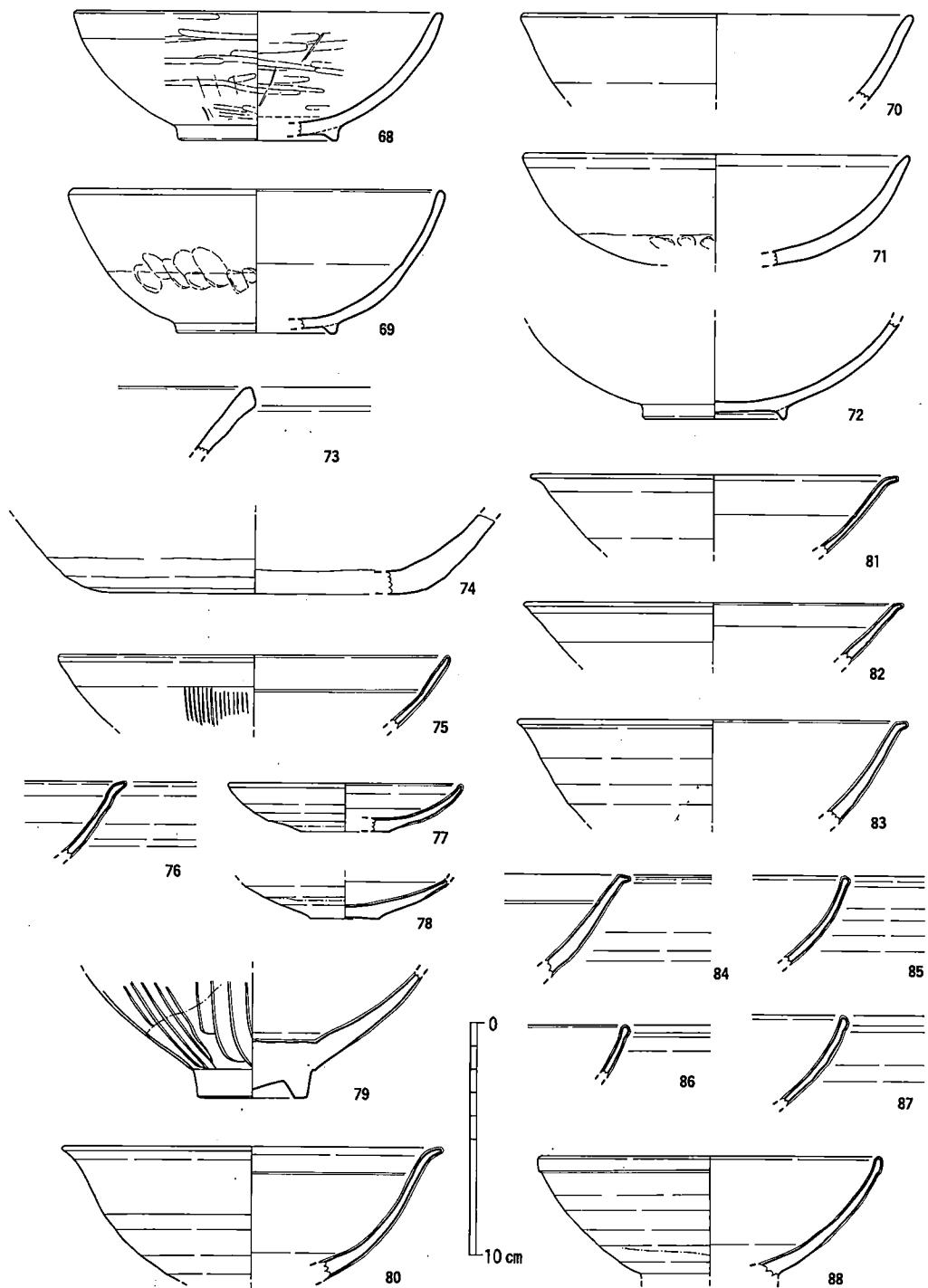
石器(第175~179図12・22・23・37・42) 12は砂岩の砥石で中砥であろう。両側面がよく磨れている。22・23は器表がよく磨れており、すり石とすべきか。37は扁平円形の小さなボタン状のもので頁岩らしい。器表には使用痕らしい条線が見える。42は軽石で側縁に面を取る所があるので页岩としたものか。



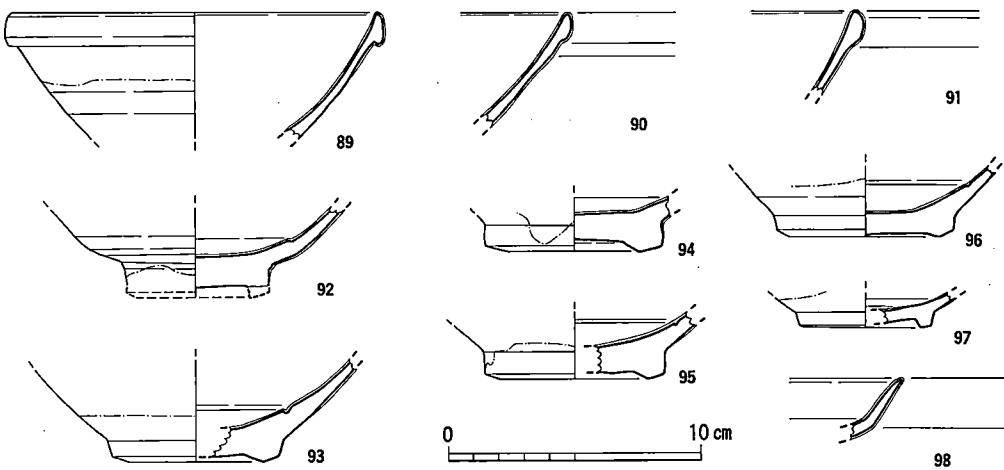
第149図 ピット出土土器等実測図1 [中世] (1/3)



第150図 ピット出土土器等実測図2 [中世] (1/3)



第151図 ピット出土土器等実測図3 [中世] (1/3)



第152図 ピット出土土器等実測図4〔中世〕(1/3)

b. 包含層出土遺物

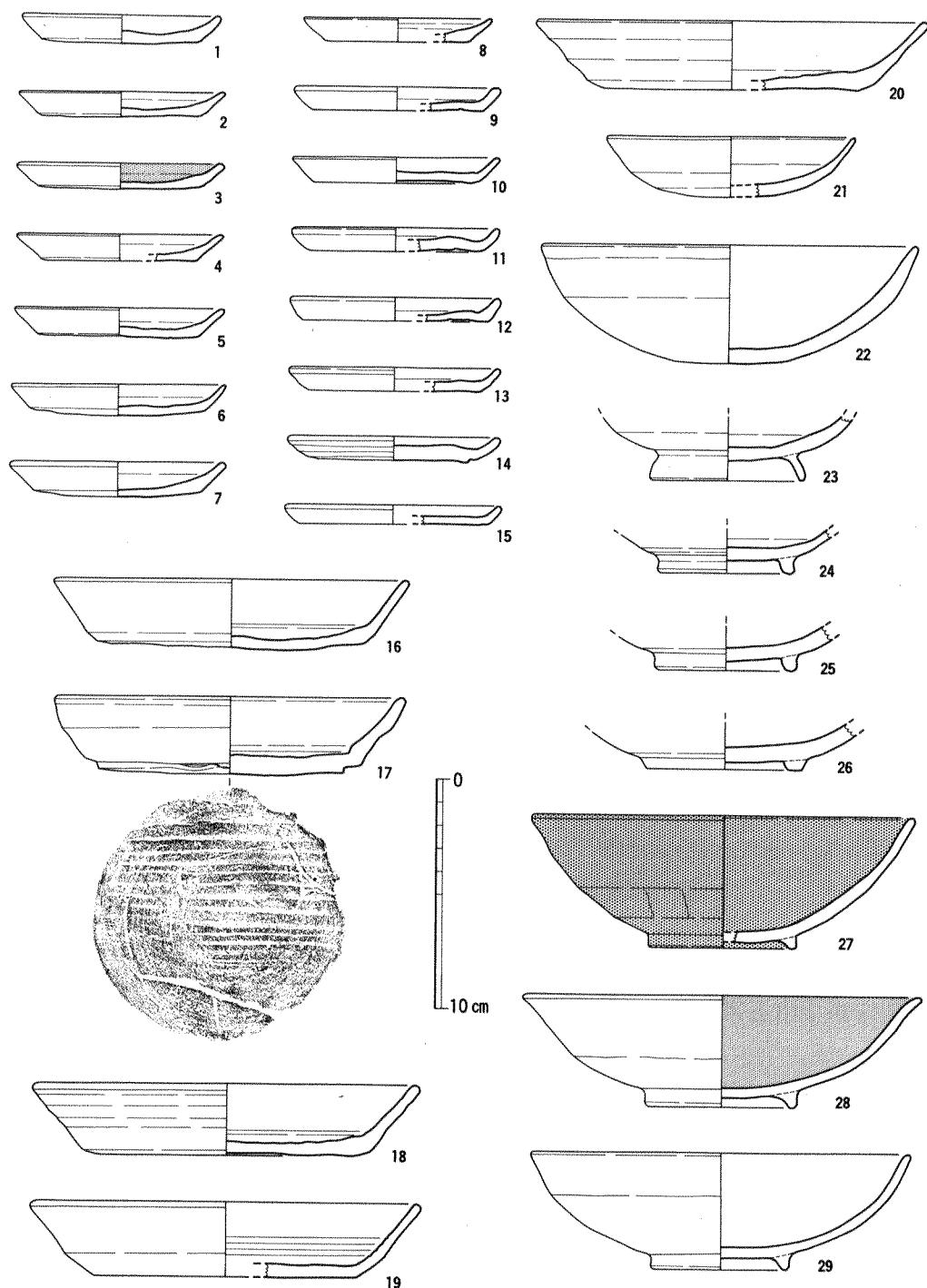
この時期の包含層はⅠ～Ⅳである。第114図のおおよその平面分布と第8図の第1トレンチの土層でわかるように、包含層Ⅰは調査区の中央付近、1号溝の下部とその北側に存したもので、のちに検出した6号溝の周辺にあたる。黒褐色土の拡がりであった。包含層Ⅱは1号溝の南から東側一帯に拡がっている暗褐色土の層で、2号溝よりは北側にあたる。包含層Ⅲは包含層Ⅰの下部にあり、Ⅰよりもさらに北側に拡がる暗茶褐色土の層である。Ⅱと同一時期の可能性もある。包含層Ⅳは包含層Ⅱの下部にあり、それよりもさらに南側に拡がるが、この層からは助文晚期～弥生前期の遺物の方が多く出土した。土器については既述。

その他とした遺物は遺構検出面やトレンチ内等で出土し、層位が確認または確定できなかつたものである。

● 包含層Ⅰ出土遺物 (図版34・35・36・37・39、第153～158図1～85、169図5、171図6～8、172図15～18、175～179図6～8・25・26・38)

土師器(1～26・39～51) 1～15は小皿。外底面は1～7はヘラ起こしで、それ以外は糸切り痕がある。3の内面はウルシらしい黒塗りである。6は二次熱を受けた部分がある。1～7は口径8.6～9.4cm、底径6.8～7.5cm、器高1.1～1.6cm。8～15は口径8.2～9.4cm、底径6.3～8.3cm、器高0.8～1.1cm。16～20は杯で、外底面は16が明確でないもの他は糸切りである。

20は化粧土を掛けている。これらは口径15.3～17cm、底径11～12.5cm、器高3～3.5cmの間にある。21・22も壊としておく。23～26は高台の付く椀で、25・26は瓦質に近い。39～51は鍋で、大半が外面は煤けている。すべて胎土はきわめて粗い。



第153図 包含層I出土土器等実測図1 (1/3)

黒色土器(27) 内外とも黒色の椀である。復元口径16.6cm。

瓦器(28~33) 椗のみで、28の内面はもと黒塗りである。32は外面の口縁下が黒色をなす。28~31は口径16~17.3cm、底径6~6.6cm、器高4.7~5cmの間にある。

須恵質土器(34~38) 34~37は東播系のこね鉢である。38は甕の胴部片。

青磁(52~62) 52~56は碗、57~62は皿。

白磁(63~82) 63~80は碗で、81・82は皿。70・71の玉縁は小さい。80は小碗であろう。

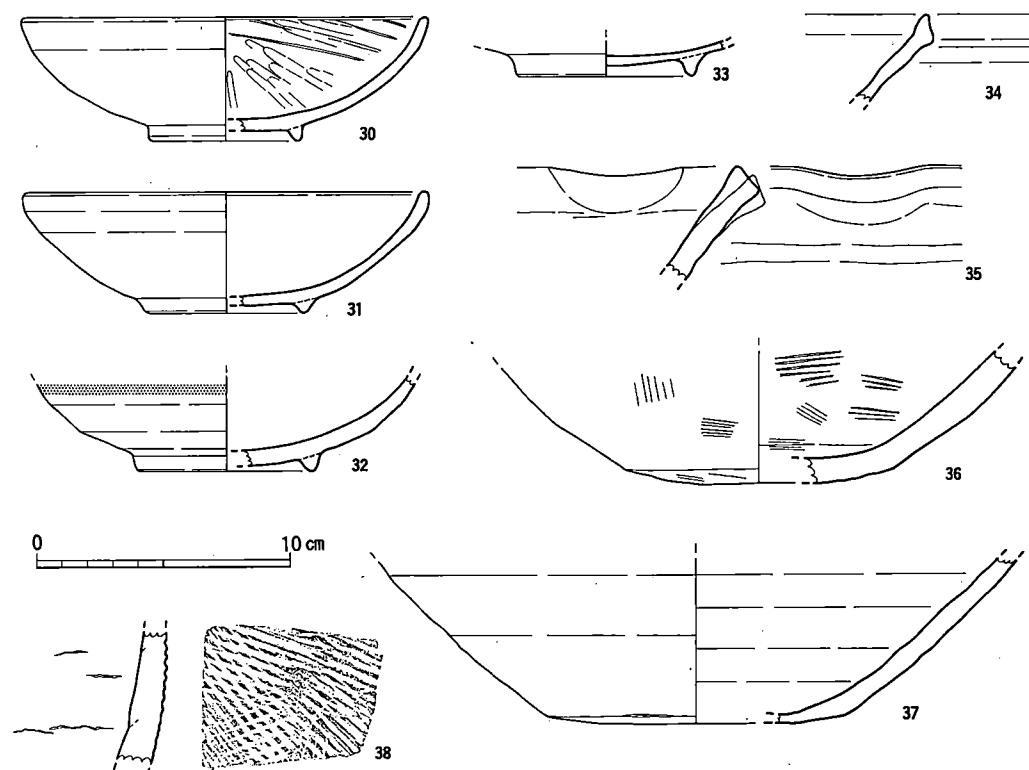
青白磁(83・84) 83は皿で薄手のつくりである。84は合子片で復元口径6.9cm。

陶器(85) 四耳壺の耳の部分である。無釉のままの破片である。

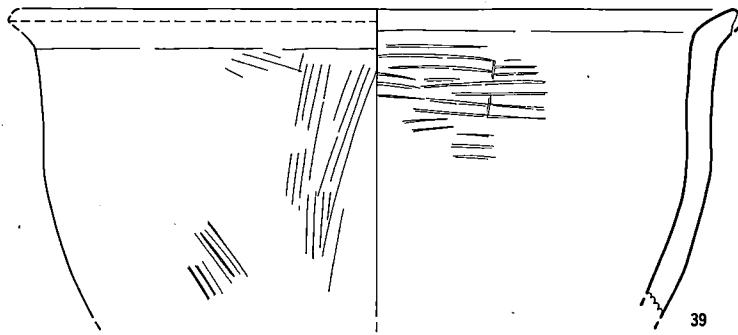
土製品(第169図5) 土錐の破片で現存長51mm、最大径12.3mm。もうそれほど長くはならないだろう。孔は楕円形気味である。胎は黒い。化粧土を掛けている。

滑石製品(第171図6~8) 3点ともに破断面を研磨しているので再利用しようとしたことがわかる。6の外面は煤で真っ黒である。

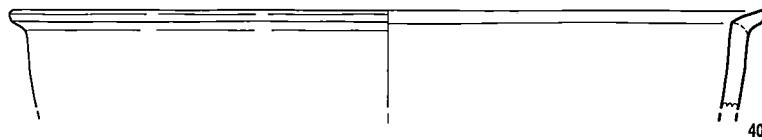
鉄器(第172図15~18) 15は紡錘車、16は刀子もしくは小刀であろう。17は鎌か。18は釘の破片であろう。



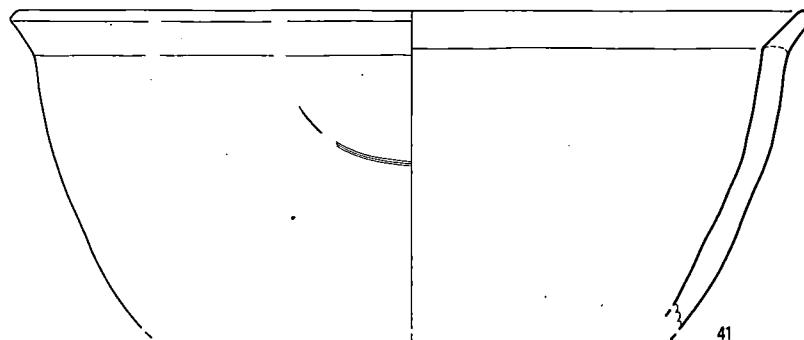
第154図 包含層I出土土器等実測図2 (1/3)



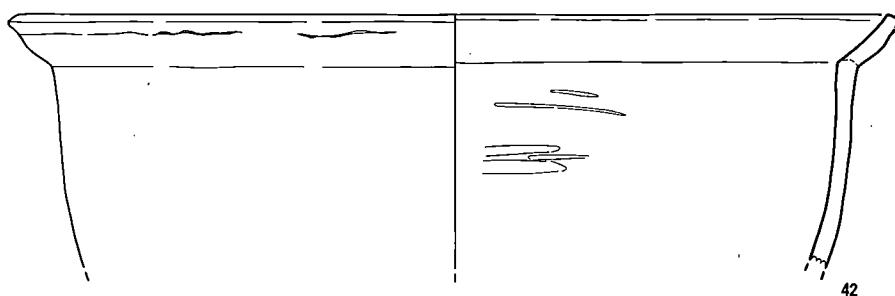
39



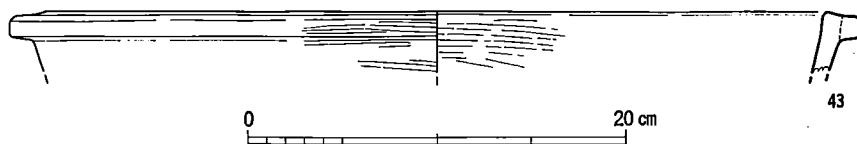
40



41



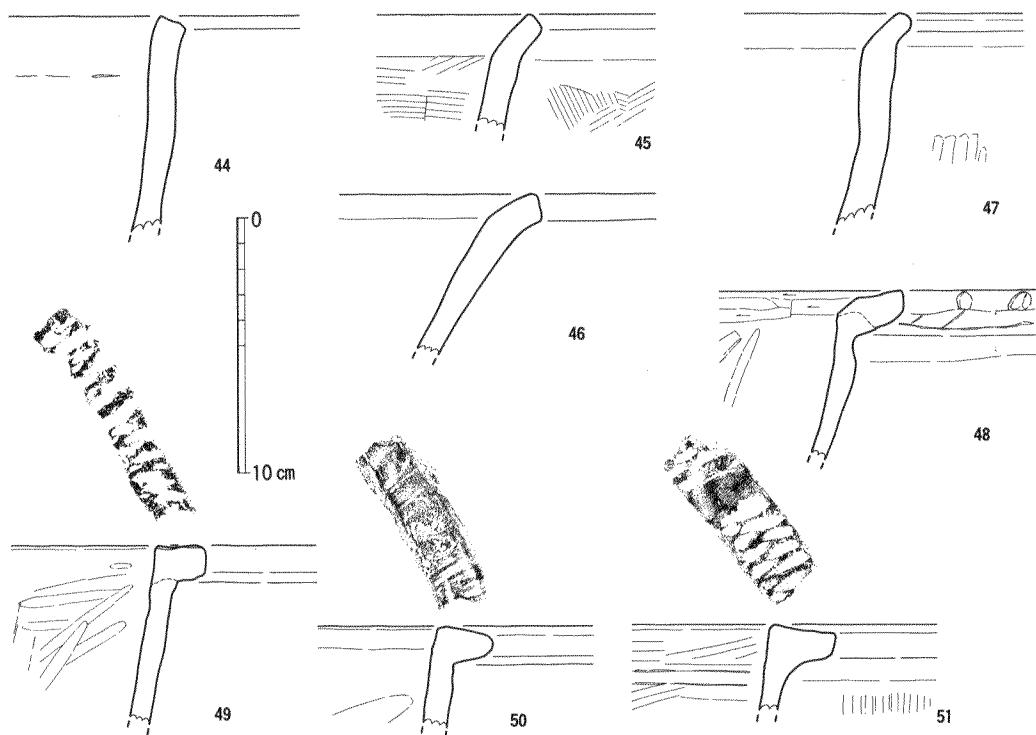
42



43

0 20 cm

第155図 包含層Ⅰ出土土器等実測図3 (1/4)



第156図 包含層I出土土器等実測図4 (1/3)

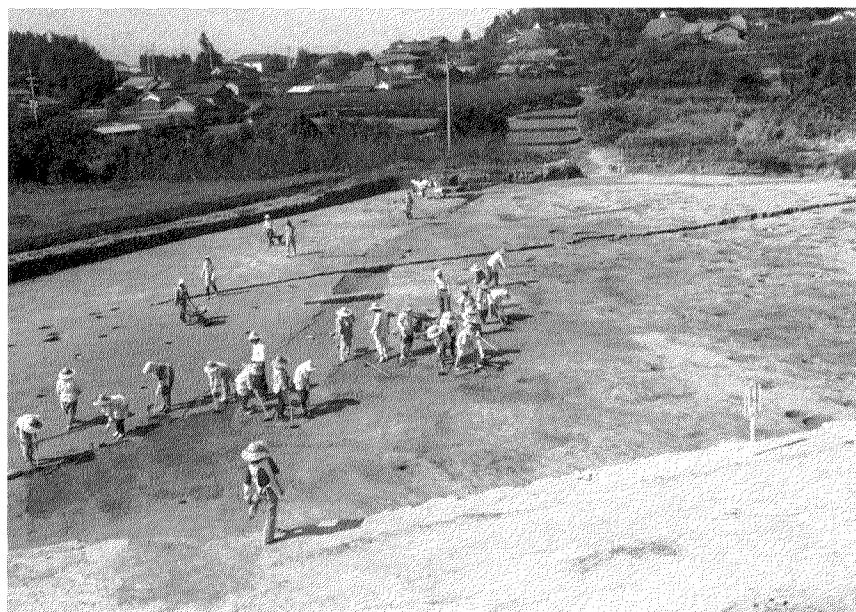
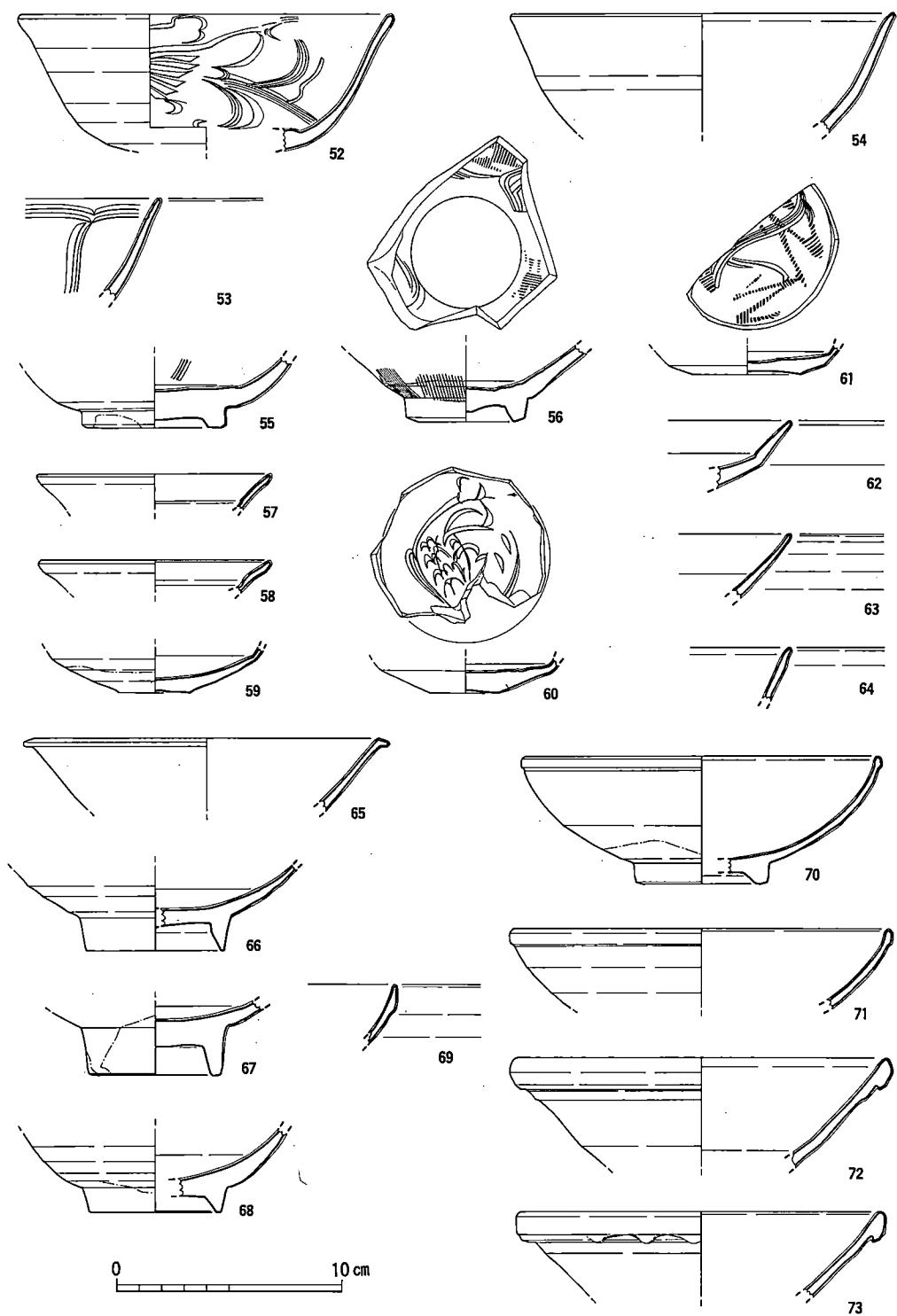


Photo. 4 調査風景 3



第157図 包含層Ⅰ出土土器等実測図5 (1/3)

石器(第175~179図6~8・25・26・38) 6・7はすり石または砥石である。6の表面と7の周縁はとてもよく磨れている。8は晶質石灰岩と思われる仕上砥石である。25は台石で器表はよく磨れている。26はすり石もしくは砥石で器表はよく磨れている。側縁は刃部状になる所がある。38は扁平円形の小さなボタン状のもので、表裏ともにすべすべであるが、はたして石器としるかどうか断定できない。蛇紋岩か。

●**包含層Ⅱ出土遺物** (図版35・37、第159図1~23、172図19・20)

土師器(1~8・13・14) 1~3は小皿。外底面は1はヘラ起こしで、2は不明、3は糸切り痕のち板目痕がある。1は口径10cm、器高1.6cm。4は杯。5~8は高台の付く椀で、5の外底面には十字形の線刻がある。8は瓦質に近い。13・14は肉厚の鉢としておく。

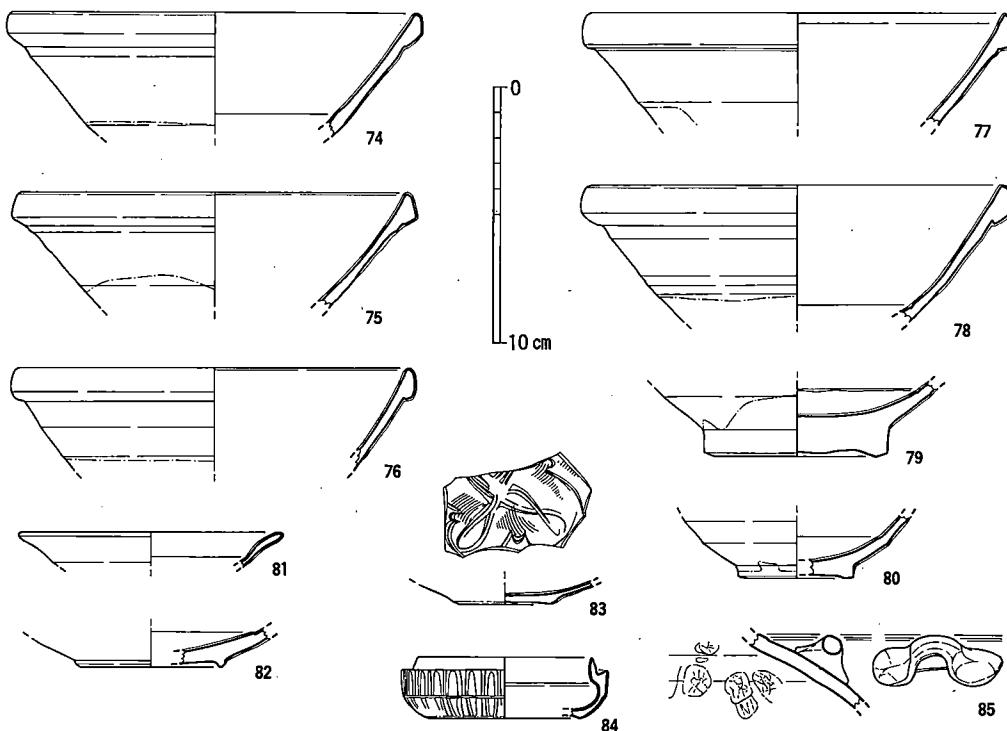
黒色土器(9) 内外とも黒色の椀で瓦質である。外底面には十字形の線刻が入るらしい。

瓦器(10~12) 椗のみで、10の外面口縁下は黒色をなす。

青磁(15) 龍泉窯系の碗の底部。

白磁(16~21) すべて碗で、19は貫入が入る。

なお、22・23の弥生土器は既述した。

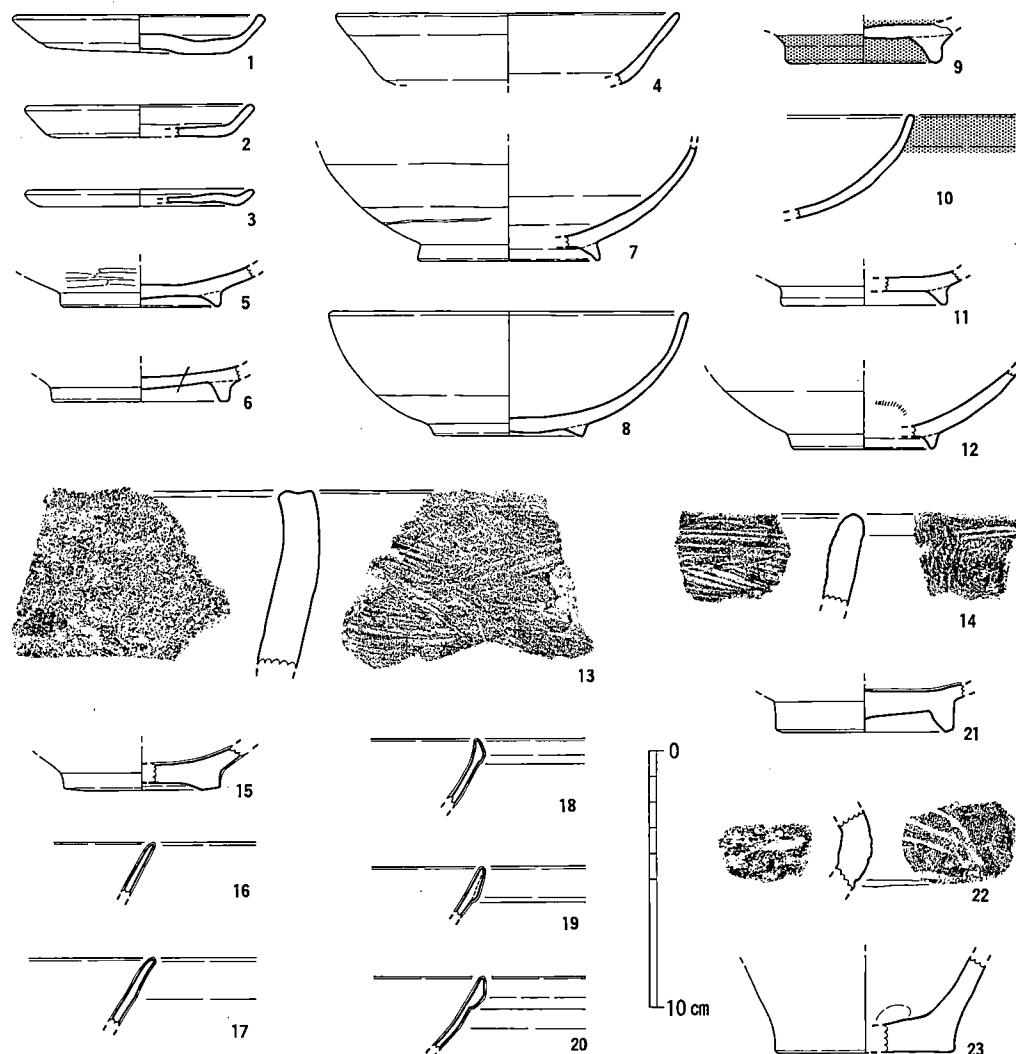


第158図 包含層Ⅱ出土土器等実測図6 (1/3)

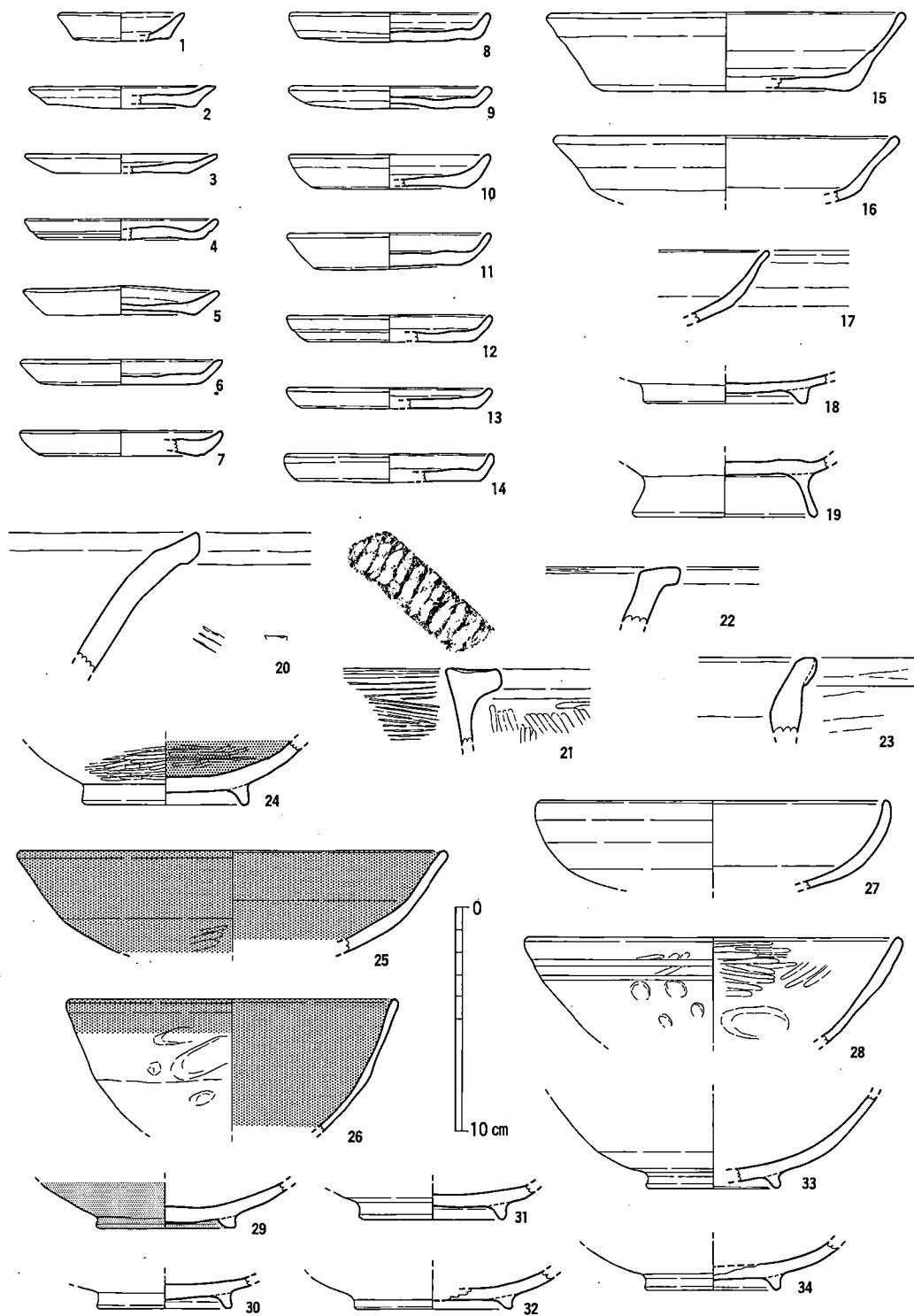
鉄器(第172図19・20) 19は頭部に撮み状の突起があるが刃部はないらしい。用途不明。20は釘が曲がったものか。

●包含層Ⅲ出土遺物 (図版35・36・37・39、第160~163図1~82、169図6・7、171図9~11、172図21~24、175~179図9・10・27・28・43)

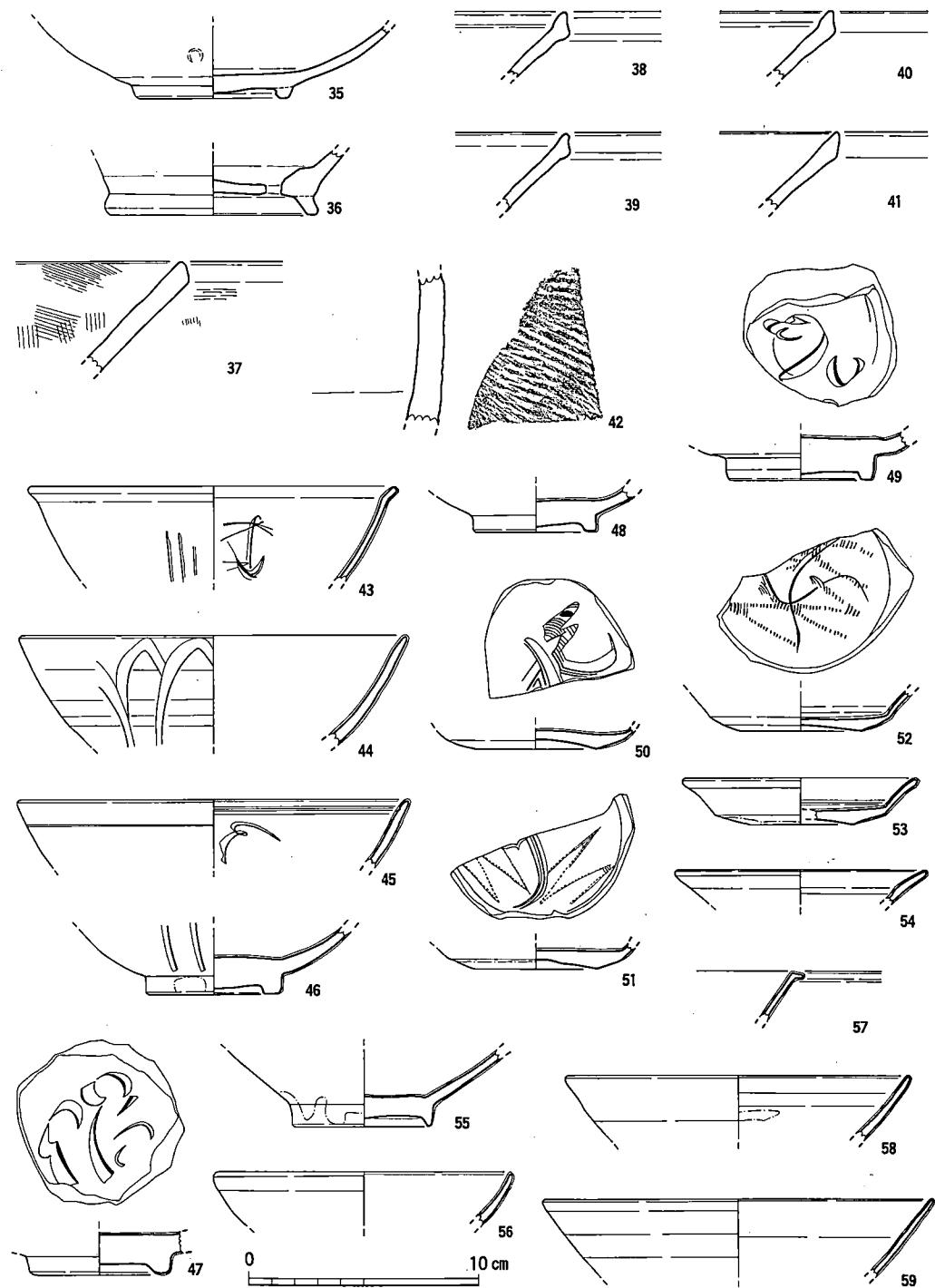
土師器(1~23) 1~14は小皿。1は復元口径5.6cmの特に小さい皿である。外面は化粧土を掛けている。2~14の外底面は不明のものもあるが糸切り痕と思われる。5は二次熱を受けた部分が



第159図 包含層Ⅱ出土土器等実測図 (1/3)



第160図 包含層Ⅲ出土土器等実測図1 (1/3)



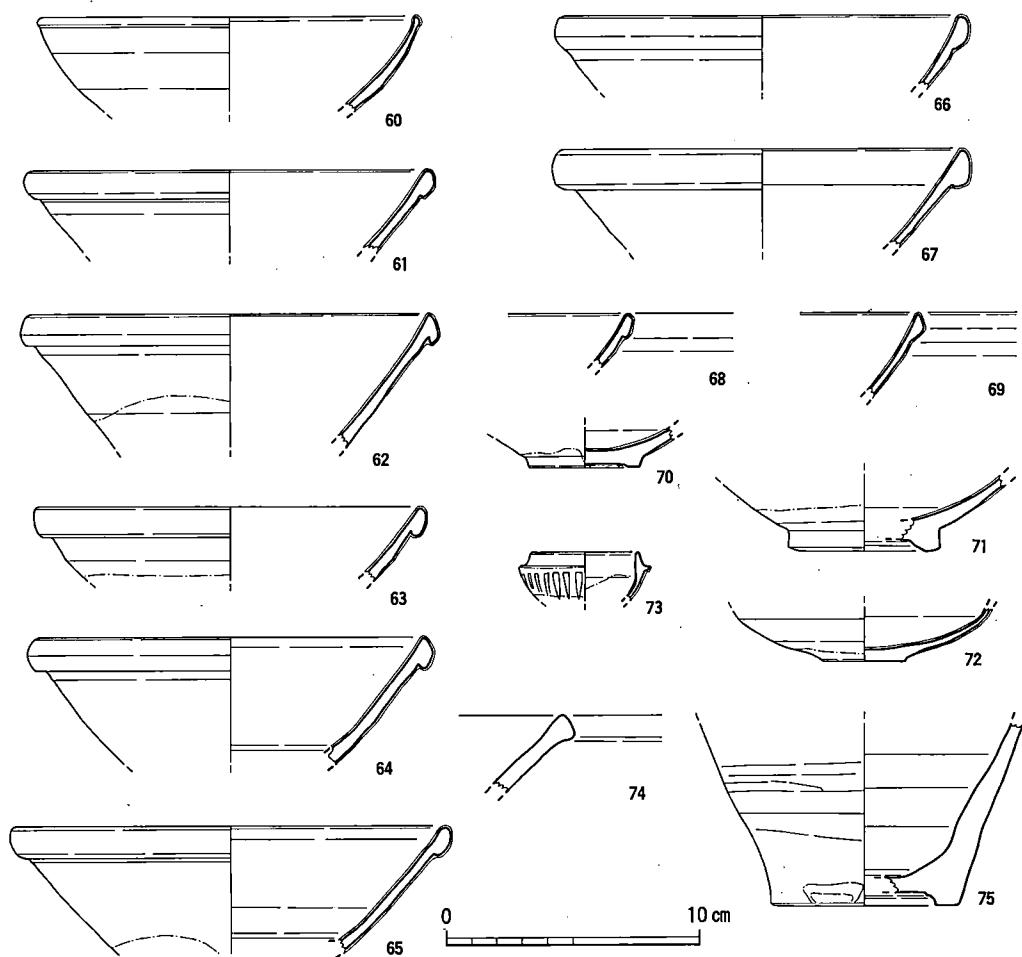
第161図 包含層Ⅲ出土土器等実測図2 (1/3)

ある。9の外面は黒塗りの可能性がある。これらは口径8.3~9.4cm、底径5.9~8.4cm、器高0.9~1.6cmの間に納まる。15~17は杯で、17の外面は黒塗りであった可能性がある。18・19は椀。18は瓦質に近い。20~22は鍋で、23もおそらく鍋だろう。20・21の外面は煤けている。

黒色土器(24~26) 24は内面は真っ黒、外面は焦げ茶色をなす。内底面には線刻がある。25・26は瓦質である。

瓦器(27~36) 27が杯、36が壺と思われるほかは椀である。28の体部は凹凸が著しい。これは銀化した所がある。29の外面は黒塗りらしい。31・33の内底面には重ね焼きの痕跡がある。36の底面には穿孔がある。

瓦質土器(37) すり鉢である。



第162図 包含層Ⅲ出土土器等実測図3 (1/3)

須恵質土器(38~42) 38~41は東播系のこね鉢である。40の口縁内面は煤ける。42は甕。

青磁(43~54) 43~49は碗。49の外底面には重ね焼きの目跡がある。50~54は皿。43の碗と皿は同安窯系、ほかの碗は龍泉窯系と思われる。

白磁(55~72) 72が皿であるほかは碗。60はわずかに玉縁状口縁となる。釉は薄い。

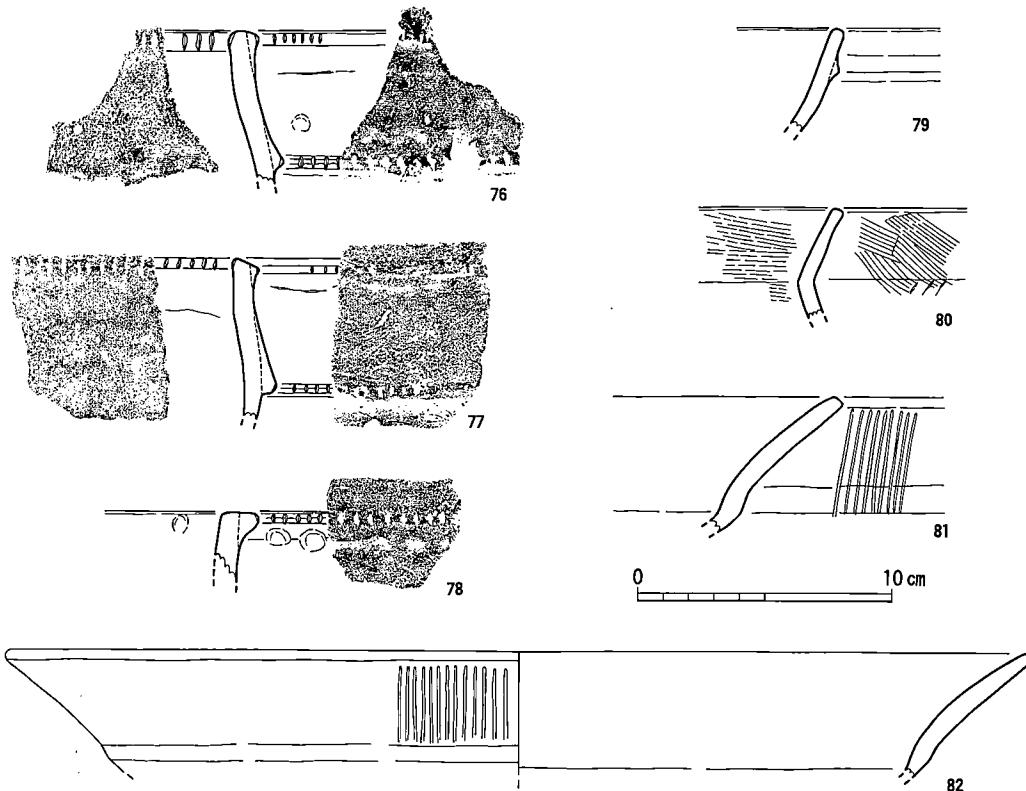
青白磁(73) 小さな合子片で復元口径4.3cm。

陶器(74・75) 74はすり鉢の破片。75は壺で薄い灰釉が掛かっている。底部外縁に生乾きの時に手でつまみ上げた際の指による窪みがある。

76~82の弥生土器については既述した。

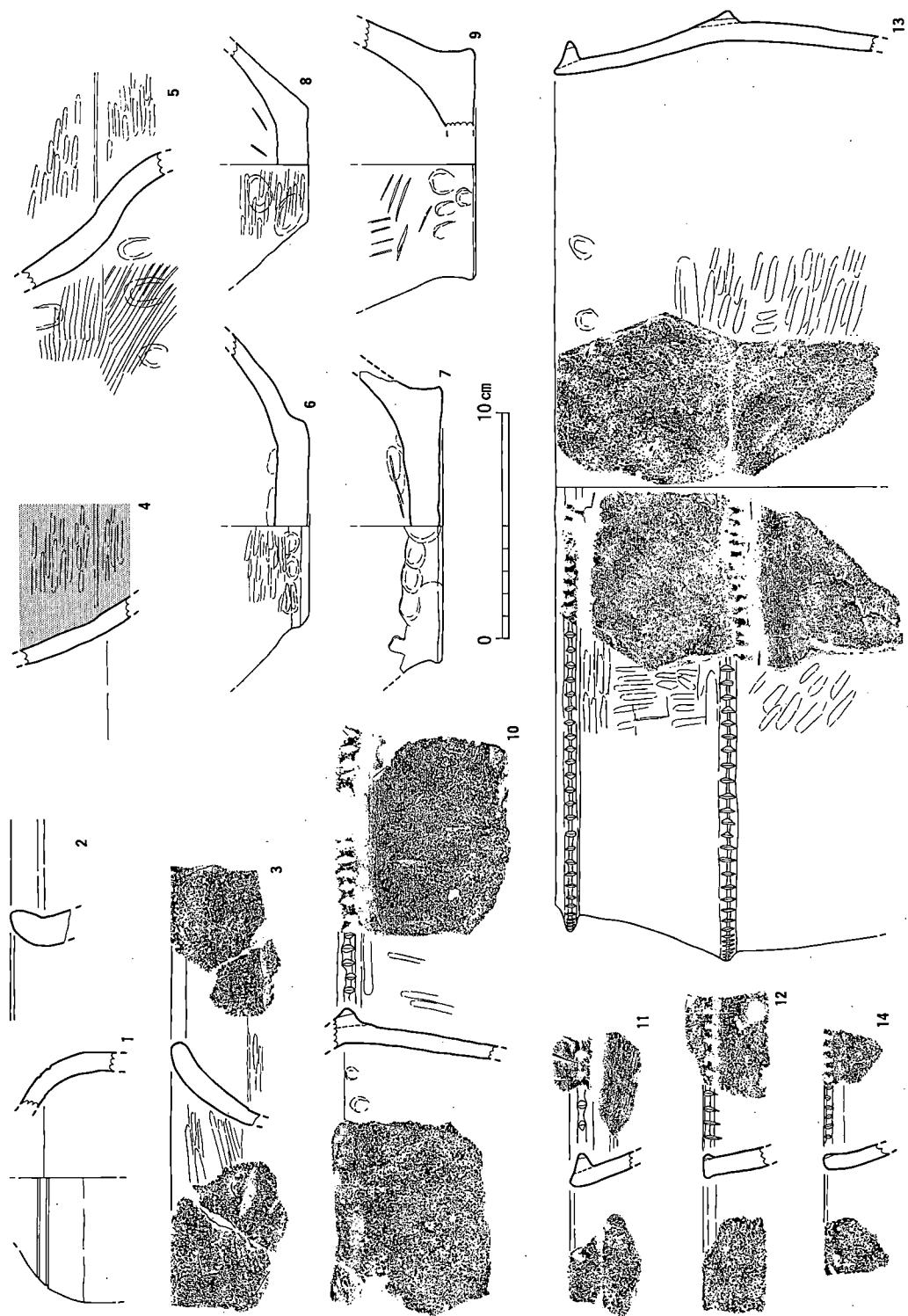
土製品(第169図6・7) 6は土錘で現存長45.9mm、最大径10mm。表面に化粧土を掛け、粘土のよじれの線が見える。孔は楕円形気味である。7は蜂の巣状に孔のいっぱいある土製品で、貫通していない孔もあり、全部で14個はある。12.7gの軽いものだが用途不明。

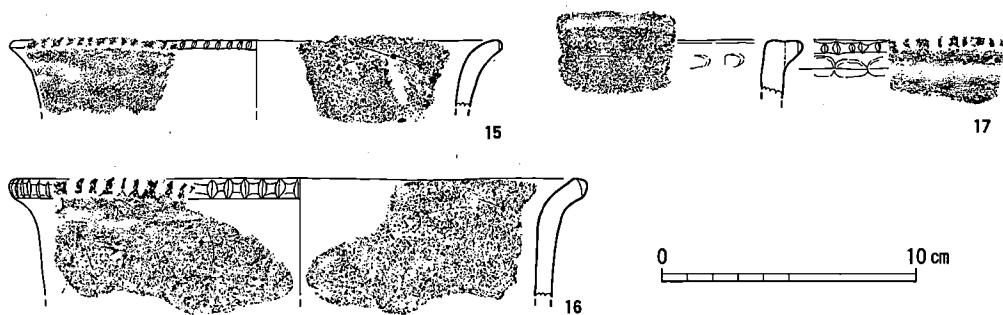
滑石製品(第171図9~11) 9は石鍋の底部で外面と破断面にも煤が付着している。10は石鍋片



第163図 包含層Ⅲ出土土器等実測図 4 (1/3)

第164図 包含層IV出土器等実測図 1 (1/3)





第165図 包含層IV出土土器等実測図 2 (1/3)

を再利用したもので、周縁を研磨し、穿孔が5箇所にある。何であろうか。11も石鍋の突起部分を含めた再加工品である。突起には煤が付着する。撮みとする部分には穿孔があり、その孔には穿孔で得られた棒を差し込んでいた。内面には木の葉文のような刻みがある。用途不明。

鉄器(第172図21~24) 21・22は釘であろうか。23・24は鉄板で、用途は不明。

石器(第175~179図9・10・27・28・43) 9・10は砥石で、ともに仕上砥であり、よく使用している。27は台石で熱を受けている。28はすり石で、表裏ともによく磨れているが条痕は見えない。両側縁は敲打のち磨いているらしい。鉄鎌が2箇所に付着している。43は軽石で側縁に磨つたところがあるのですり石としておく。

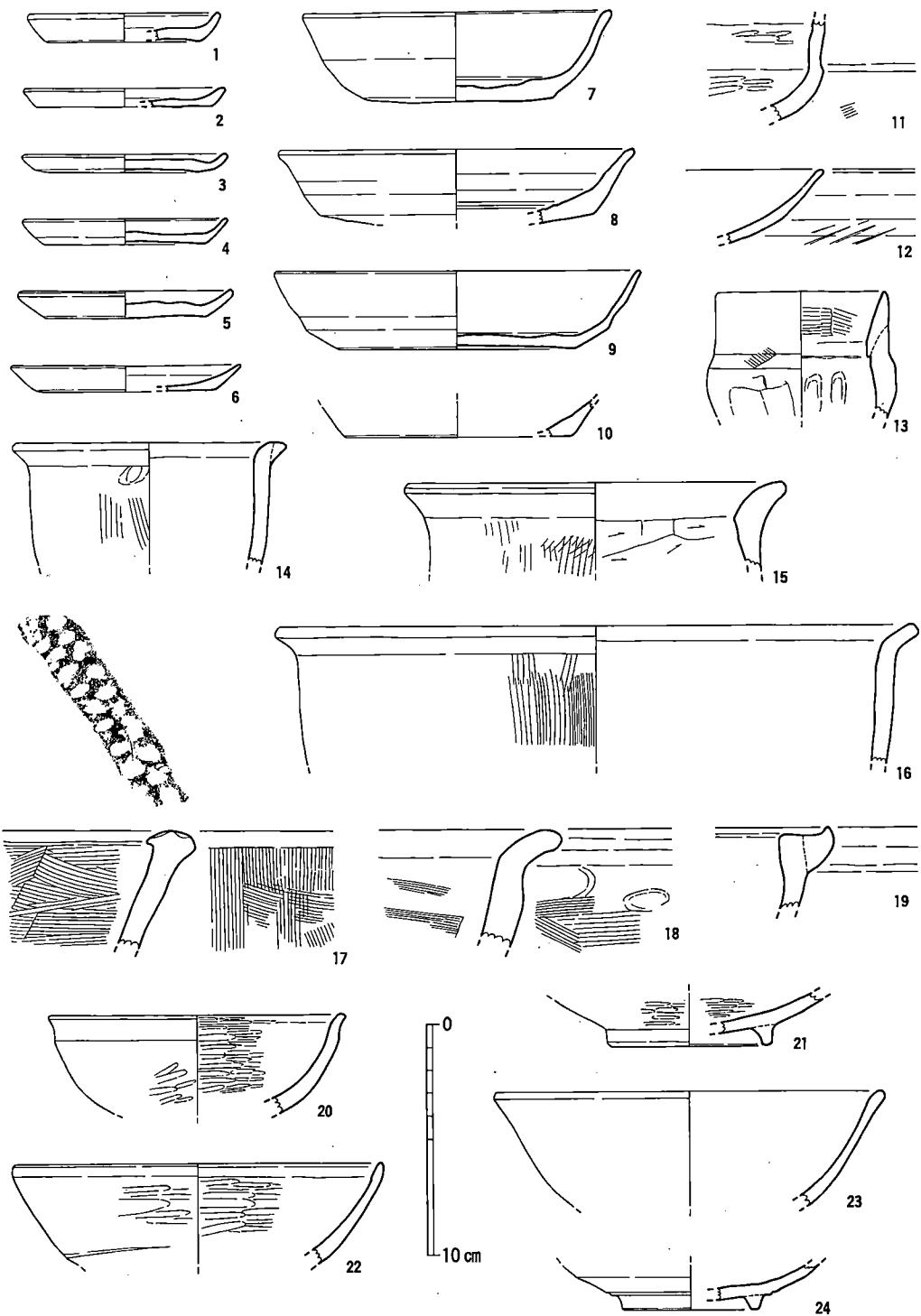
●包含層IV出土遺物 (図版39、第175~179図11・29・39・44)

石器(第175~179図11・29・39・44) 11は砂岩の砥石で中砥。溝状にくぼんだ所は鉄器を研いだものであろうか。29は台石とすべきか。平坦面には使用による条線がある。39は器表がツルツルの小さな石で、はたして人の手が関与していたのかどうかわからない。44は石塔の頂部である相輪の一部であろう。宝珠は四分割されており、その下には下向きの八弁の連弁がある。層塔であろうか。

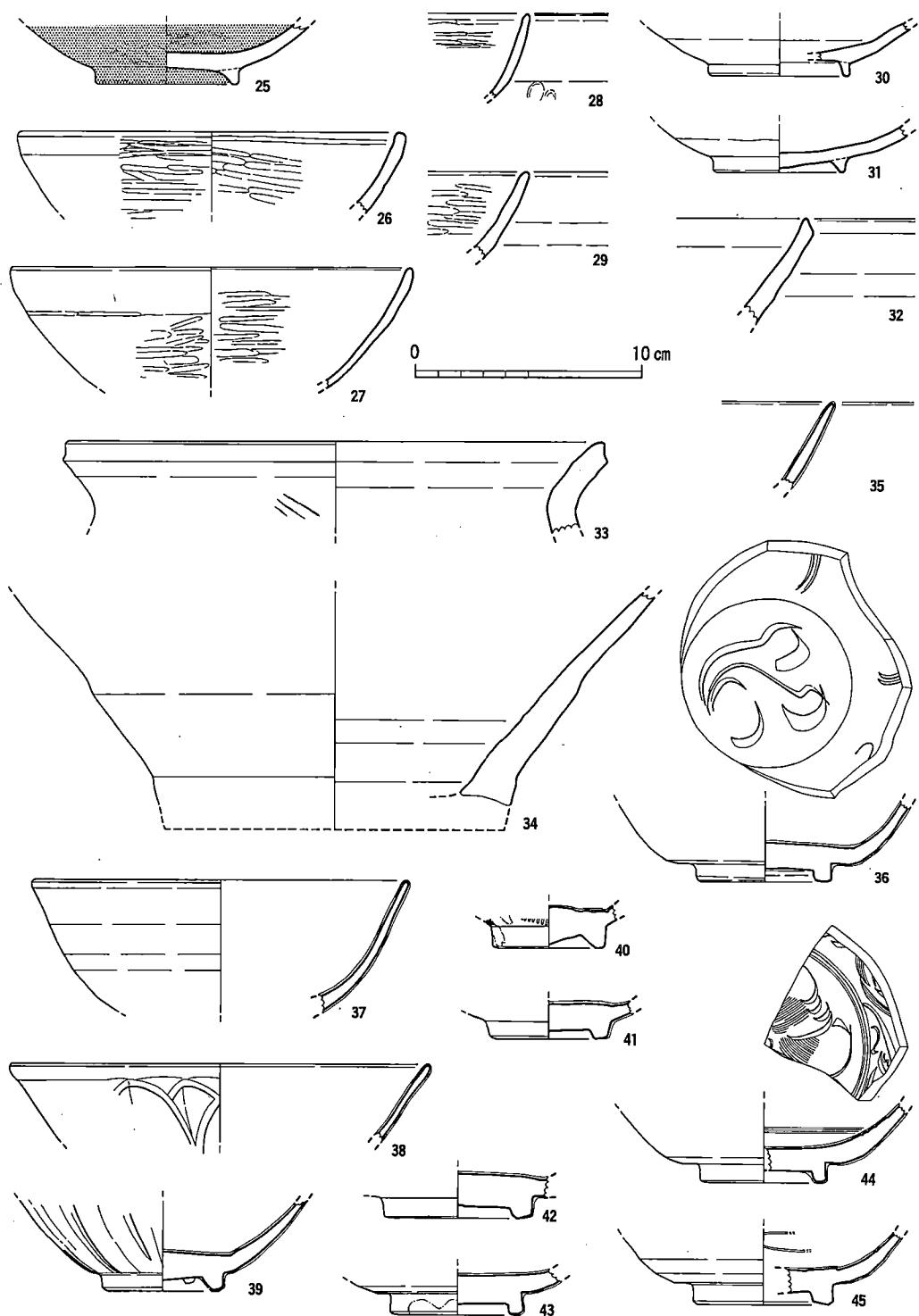
●その他包含層等出土遺物 (図版35・36・37・39、第166~168図1~71、170図1~3、

171図12~14、172・173図14・25~31、177~179図30~32・34~36・40・41)

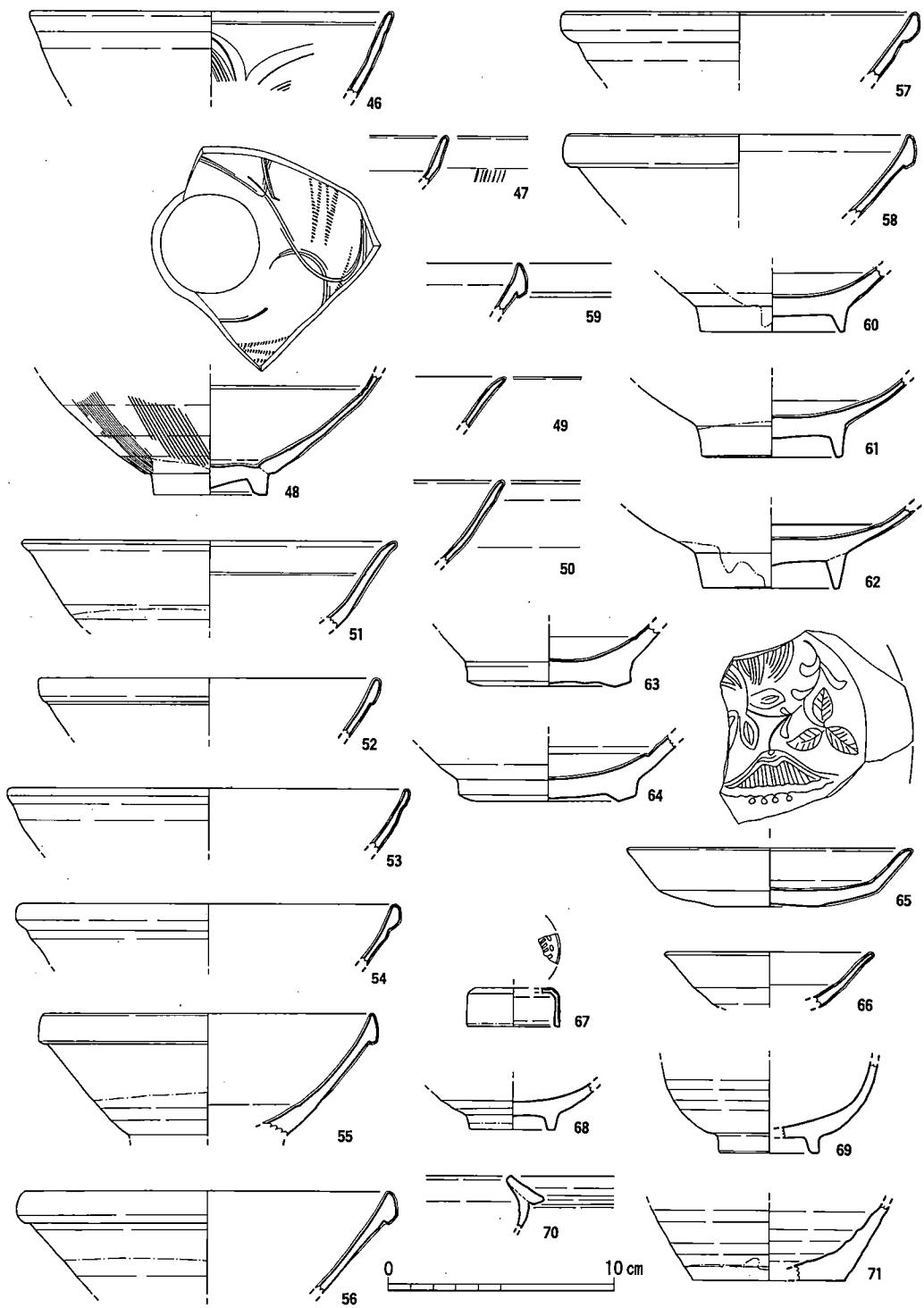
土師器(1~22) 1~6は小皿。外底面は不明のものもあるが全て糸切り痕と思われる。これらは口径8.4~10cm、底径6.6~8.1cm、器高0.8~1.3cmの間に納まる。7~12は杯で、7の外底面はヘラ起こしらしい。9・10は糸切り底。11は化粧土を掛けている。13は壺とすべきか。14~16は甕で15の外面には煤が付着している。17~19は鍋で、17の口縁上面には押圧痕がある。20~22は椀で、20・21は硬質、22は瓦質に近い。



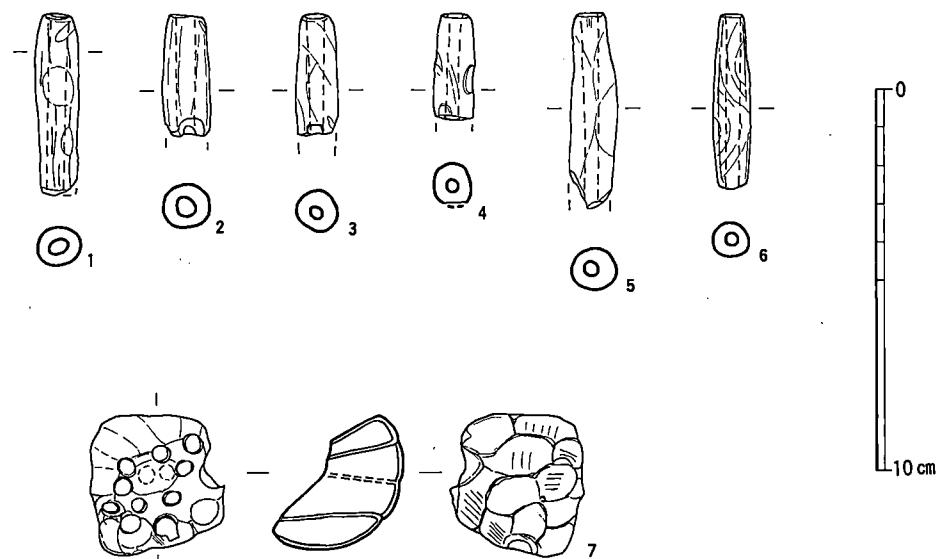
第166図 遺構検出面その他出土土器等実測図 1 (1/3)



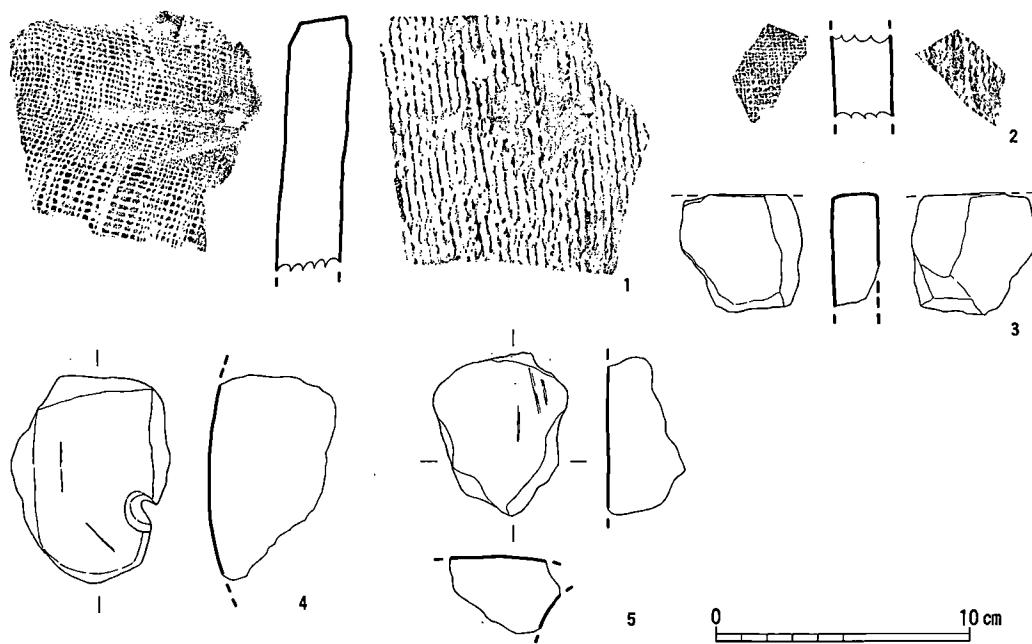
第167図 遺構検出面その他出土土器等実測図 2 (1/3)



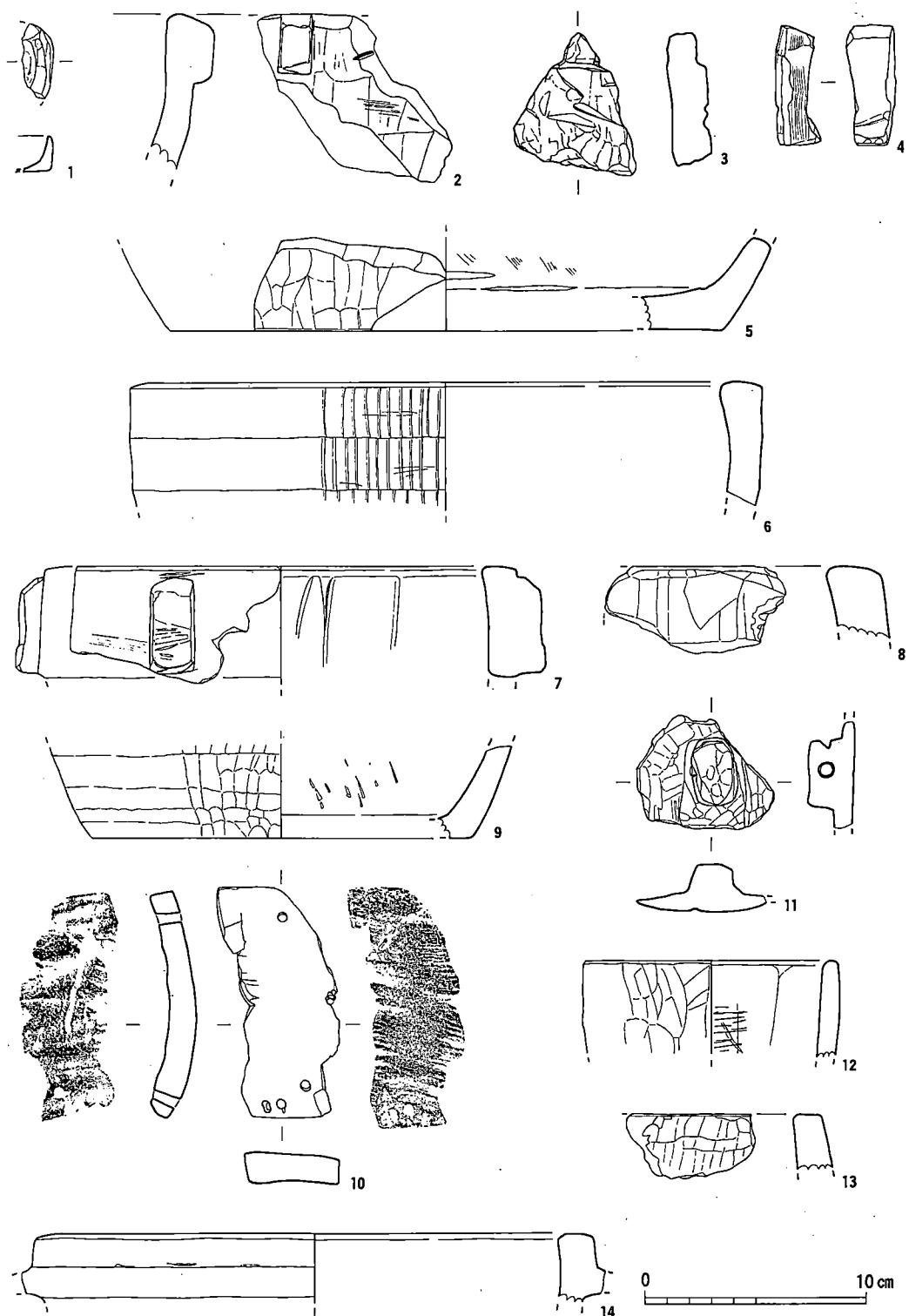
第168図 遺構検出面その他出土土器等実測図 3 (1/3)



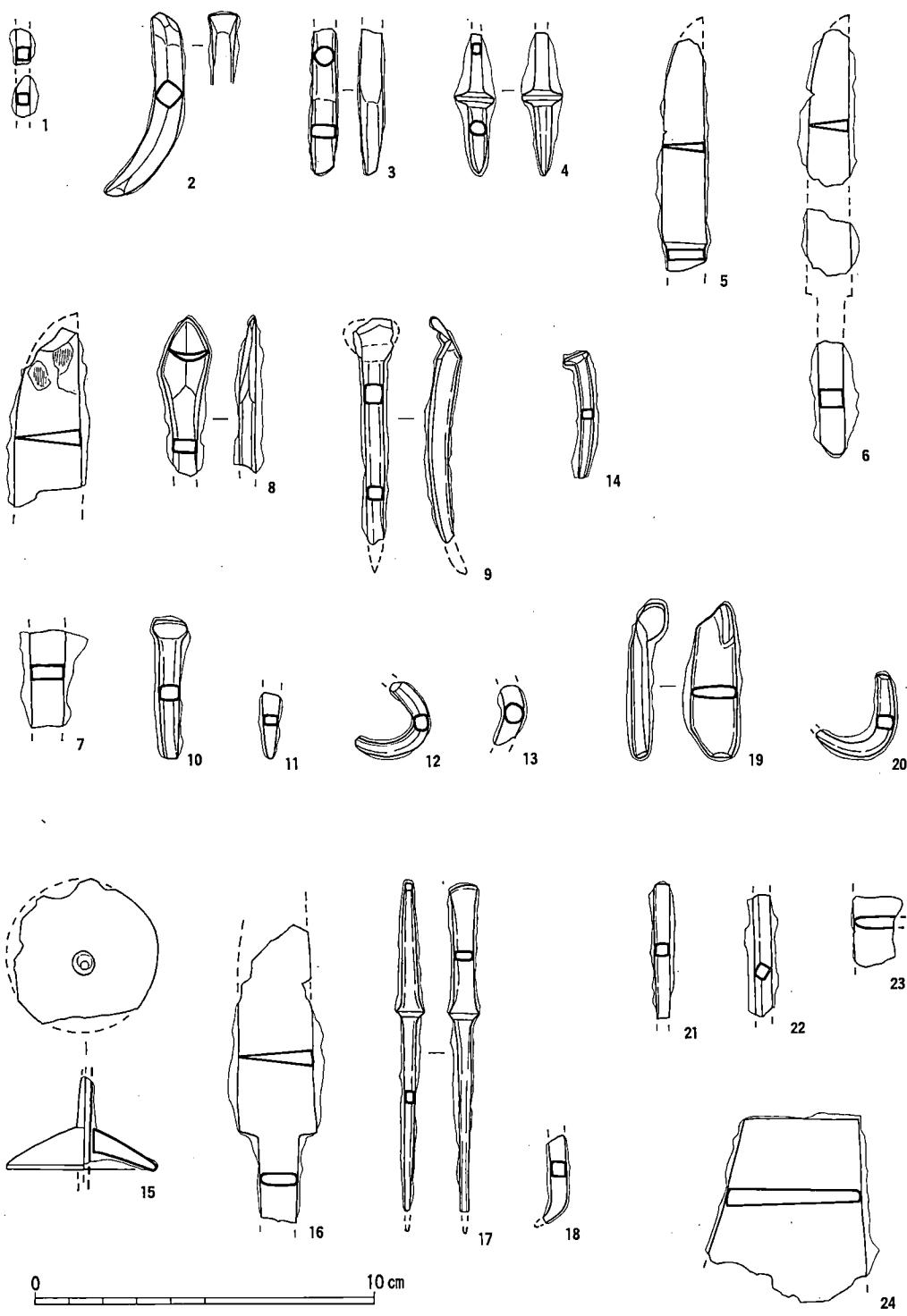
第169図 土製品実測図〔中世〕(1/2)



第170図 瓦・土製品実測図(1/3)



第171図 滑石製品実測図 (1/3)



第172図 鉄製品実測図 1 (1/2)

瓦質土器(23・24)ともに楕で、23の口縁周辺は黒色をなす。

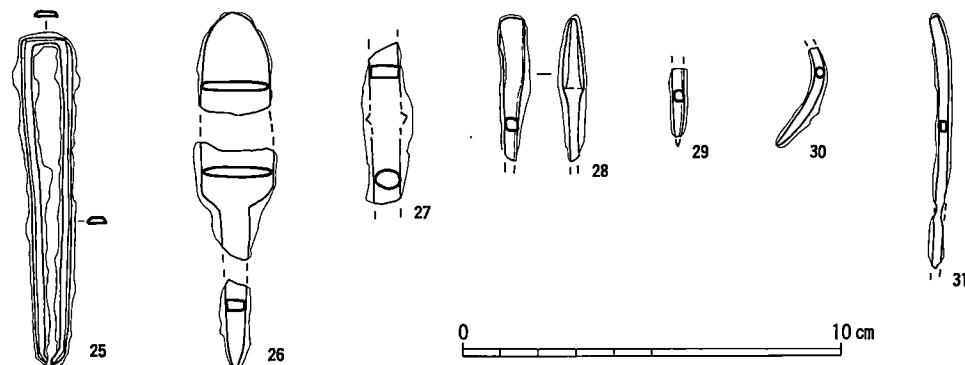
黒色土器(25) 内外とも黒色の楕である。

瓦器(26～31) すべて楕で、28・31は須恵器と称しても遜色ない焼成である。

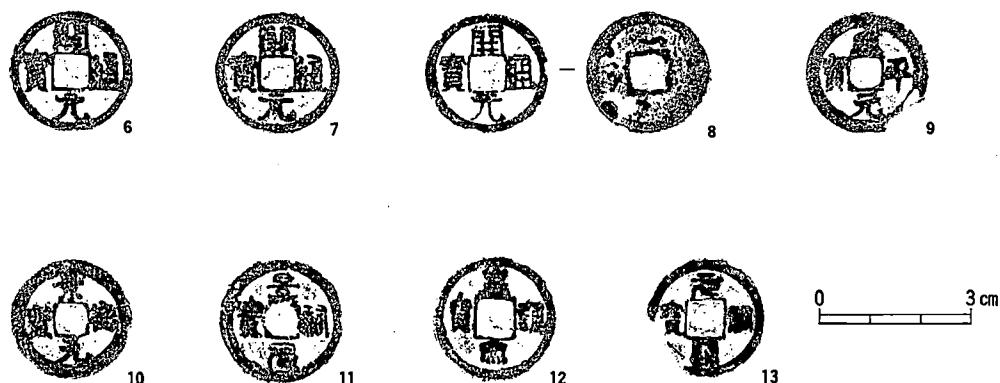
須恵質土器(32～34) 32は東播系のこね鉢である。33は甕。34も大型のこね鉢。

青磁(35～48) 全て碗である。38の連弁にはかすかに鎬がある。39・42は高台内部に重ね焼きの痕跡があり、43は高台に目跡がある。48は1/3ほどが底部と体部の境で割れており、一見すると体部と底部とを別造りにして貼り付けたかのように見える。

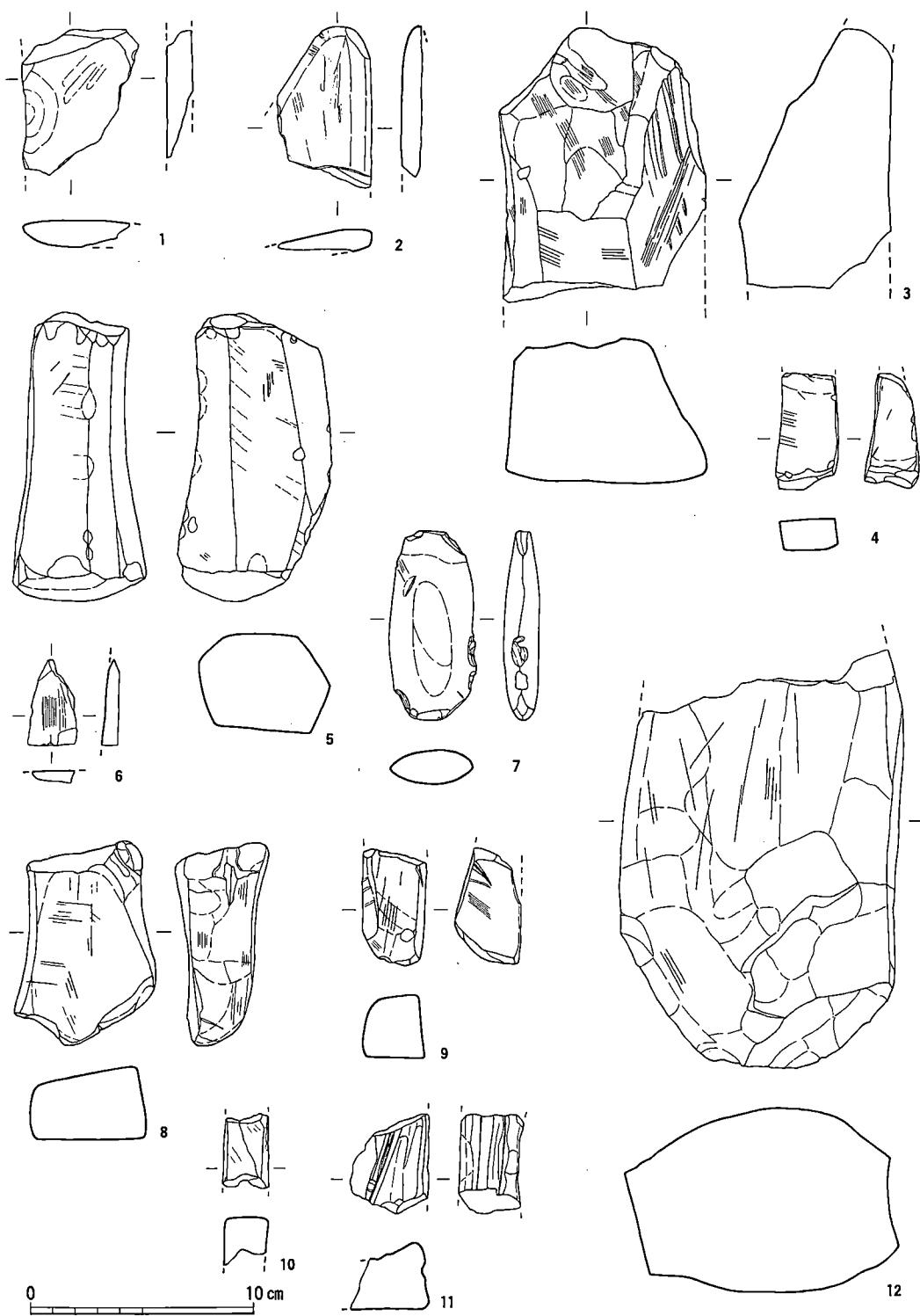
白磁(49～66) 65・66が皿であるほかは碗。53は青白磁に近い色調をなす。65の内底面には山と樹木の絵を線彫りで描いている。



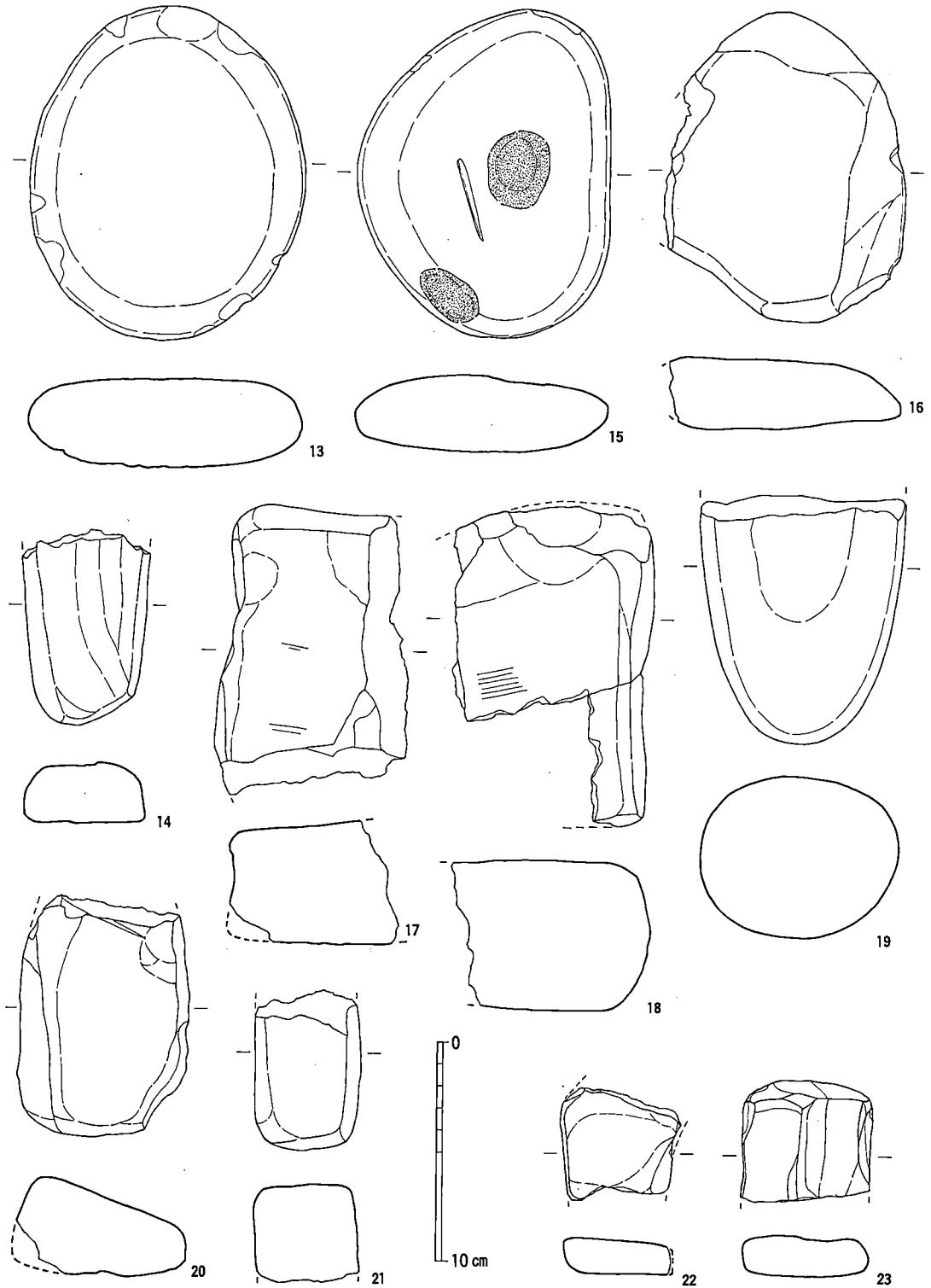
第173図 鉄製品実測図 2 (1/2)



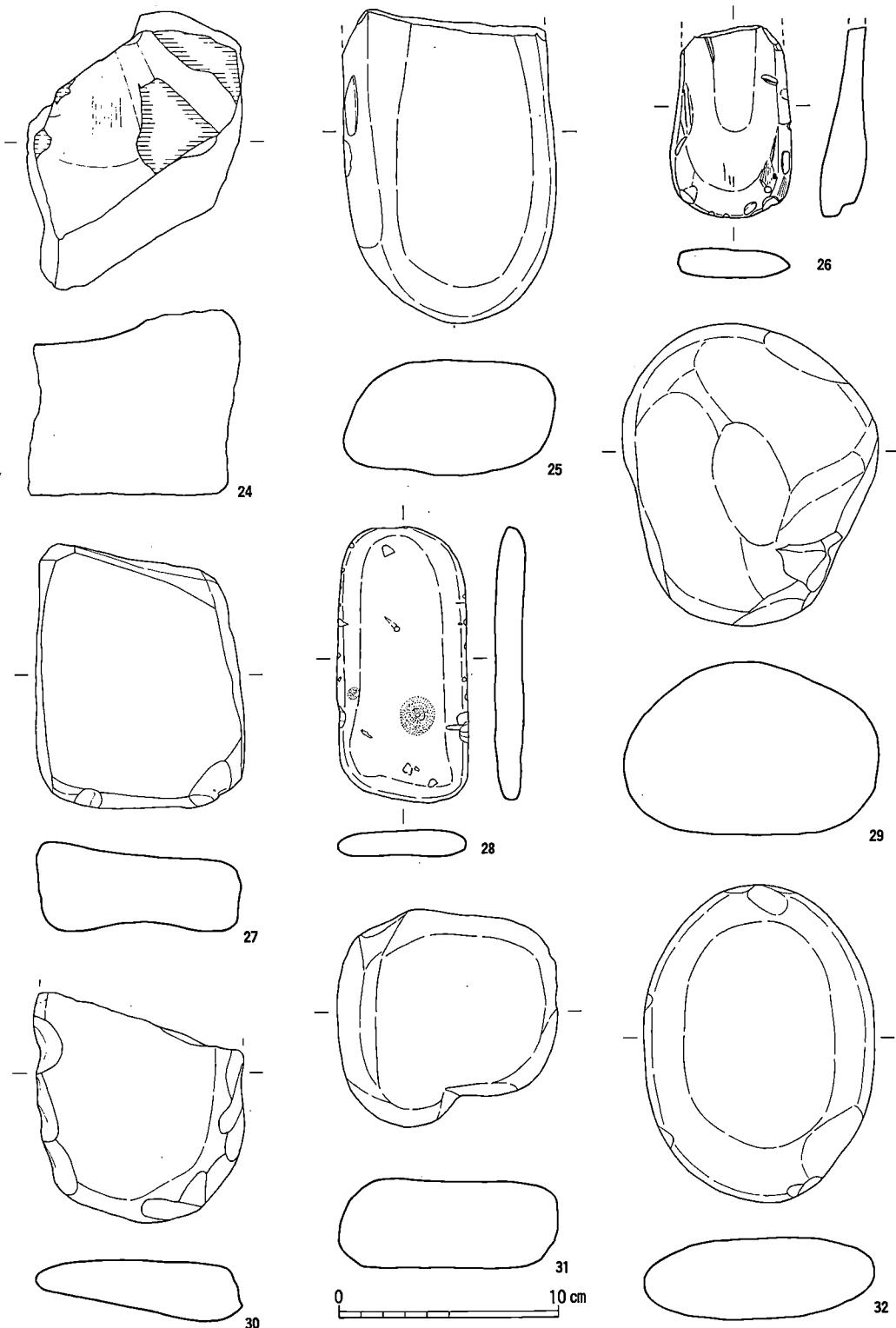
第174図 渡来銭拓影 (2/3)



第175図 石製品実測図1 〈砥石〉〔中世〕(1/3)



第176図 石製品実測図 2 <台石> [中世] (1/3)



第177図 石製品実測図3 〈台石〉〔中世〕(1/3)

青白磁(67) 小さな破片で、合子の蓋になる。復元口径4.1cm。

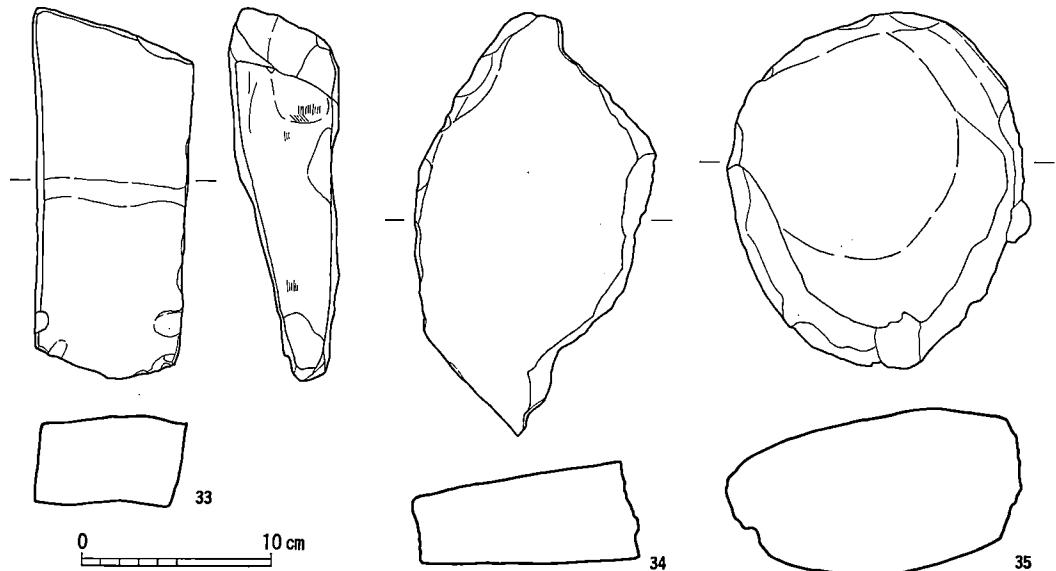
陶器(68~71) 68・69は碗で、69の胎は磁器に近い。70は壺もしくは鉢であろう。薄い釉が掛かっている。71は壺であろう。

瓦(第170図1~3) 平瓦の破片である。1・2は表面に布目、裏面に縄目を持つ。3は無文で表面は少し黒化している。1は旧Ⅲ区、3はFの5・6区の段落ち部の所で出土した。

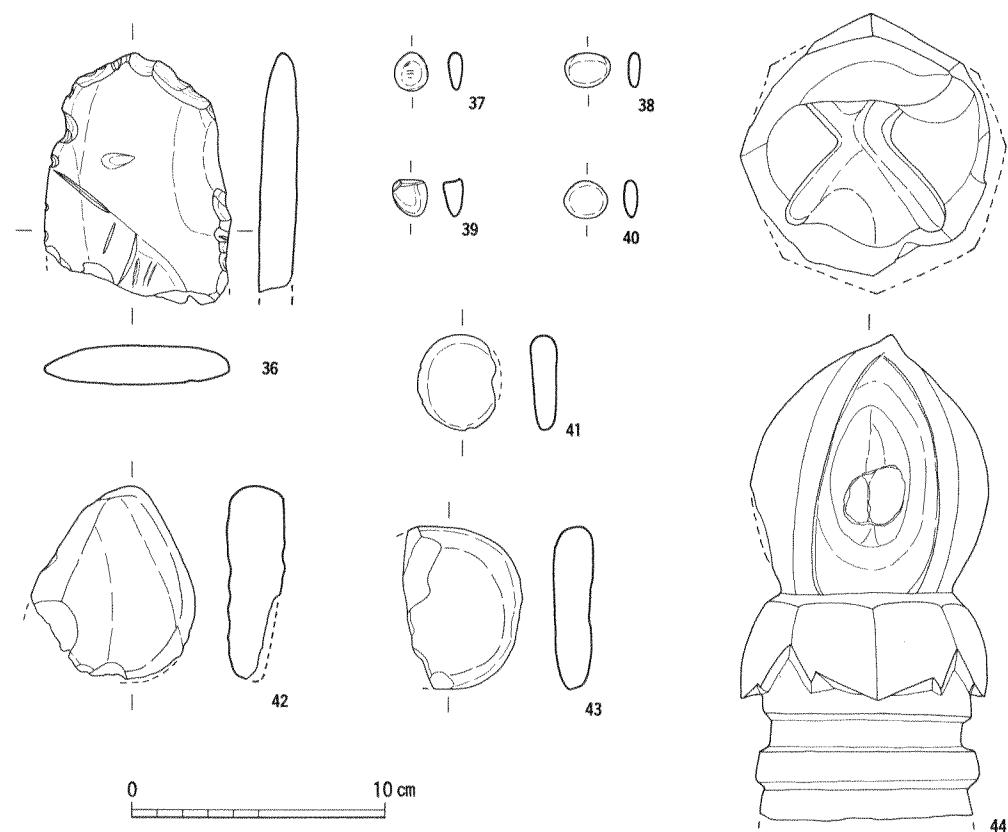
滑石製品(第171図12~14) 石鍋の破片であるが、12はかなり小さい製品で外面は煤で真っ黒である。14は通常の大きさといってよからう。

鉄器(第172・173図14・25~31) 14はS X 1の上層から出土した釘で全長3.7cm。25は全長82mmの完形品の鏃子(毛抜き)である。1号支石墓と1号石棺墓の周辺を掘り下げる時に出土した。層位的には新しくとも弥生前期中頃といえるが、いまは上層からの新しい掘り込みによる混入としておく。26・27は鏃か。28は用途不明。29・30は釘か。31は針金様のもので用途不明。

石器(第177~179図30~32・34~36・40・41) 30~32・34・35は台石としておく。31は明確な使用の痕跡は見えないが器表面が磨れているのは確かである。34・35は熱を受けている。36は周縁に穿孔しようとしたような擦り切りの痕跡が8箇所ほど見られ、器表には擦痕がある。すり石としておくが錘の可能性もないではない。40はボタン状の小さく扁平な長石質の玉石である。磨って整形したと思われるが定かではない。41は扁平な軽石で、磨って丸みをもたせたのは確かなようである。浮子であろうか。重さは5gしかない。



第178図 石製品実測図4 <台石> [中世] (1/4)



第179図 石製品実測図 5 〈軽石等〉 [中世] (1/3)



Photo. 5 IV区

IV IV区の調査

IV区は上述してきた旧I～III調査区から小さな尾根を越した西側にあり、白木谷川に注ぐ小流に面した谷部分である。このIV区より西へ100m足らずで上池田遺跡が存する。

ここで検出された遺構は溝とピットのみであった。ピットは建物になるようなまとまったものはなかった。溝は7号まで番号を付したが、そのうち3条（5～7号）は北側の谷奥からかつて流れてきた旧河川の跡かと思われるものであった。それも新旧のものが重複していた。それ以外は浅くて不規則な方でしかなかった。それらと前後して包含層が形成されており、そこには奈良～平安時代を中心とする多量の土器が包含されていた。調査区を縦横に分断して設定した第11・12トレンチの土層で見ると整地したような水平層があるが、整地を伴うほどの建物等は調査区内では確認されなかった。

A 遺構と遺物

1 溝

1～7号のうち、1～4号は確実に溝といえるか疑問もあるが、ここでは調査時のままに述べる。5・6号溝は1～4・7号溝よりも下層から検出されている。

1号溝 (SD 1) (図版20、第181図)

調査区の西端部に近く、長さ13.5mほどが北西-南東方向に存した。深さは10cmに満たない。瓦・土師器・須恵器・縄文土器の破片が出土している。

出土遺物 (第183図1・2)

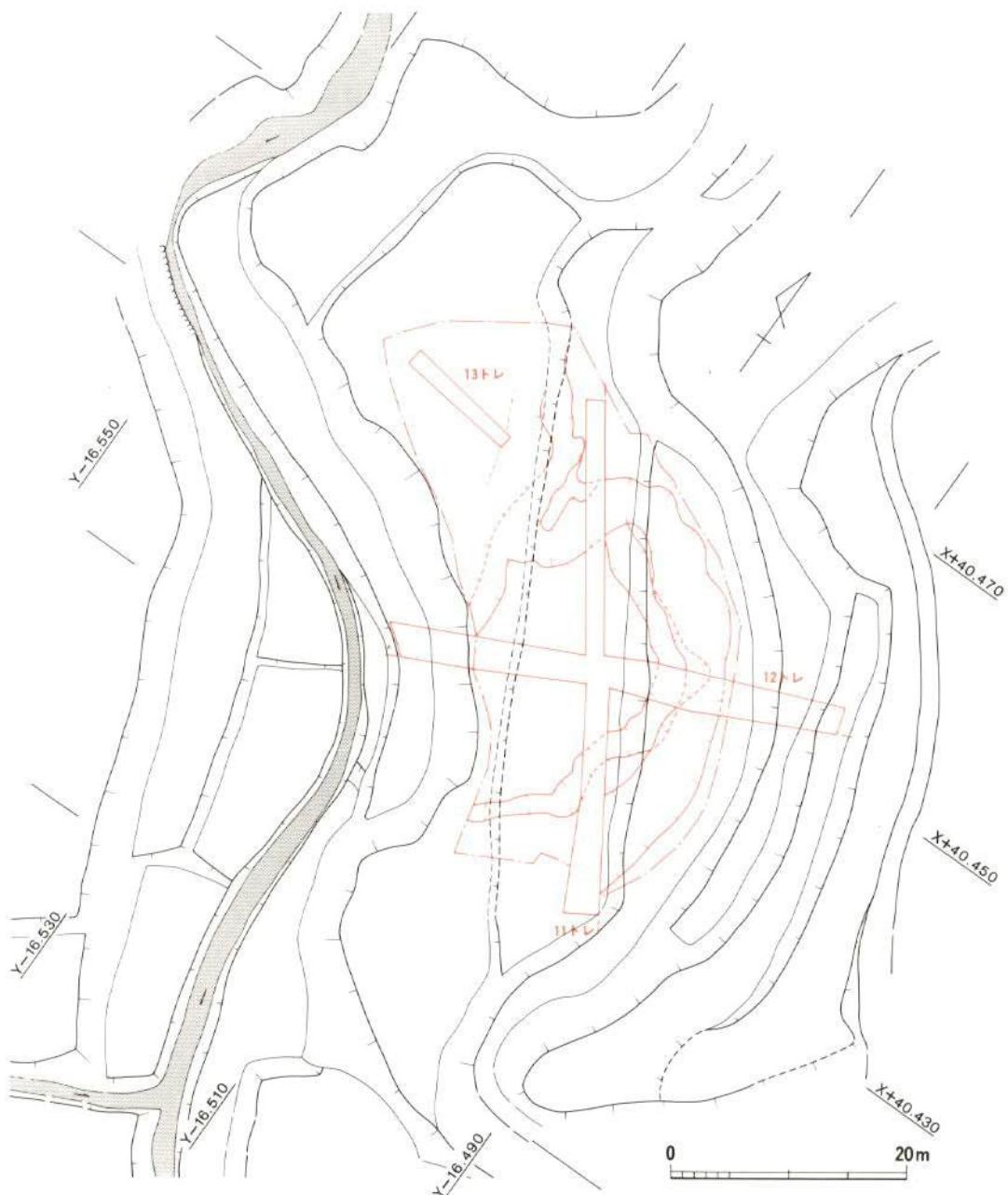
須恵器(1・2) 瓦質に近い高台付椀である。

2号溝 (SD 2) (図版20、第181図)

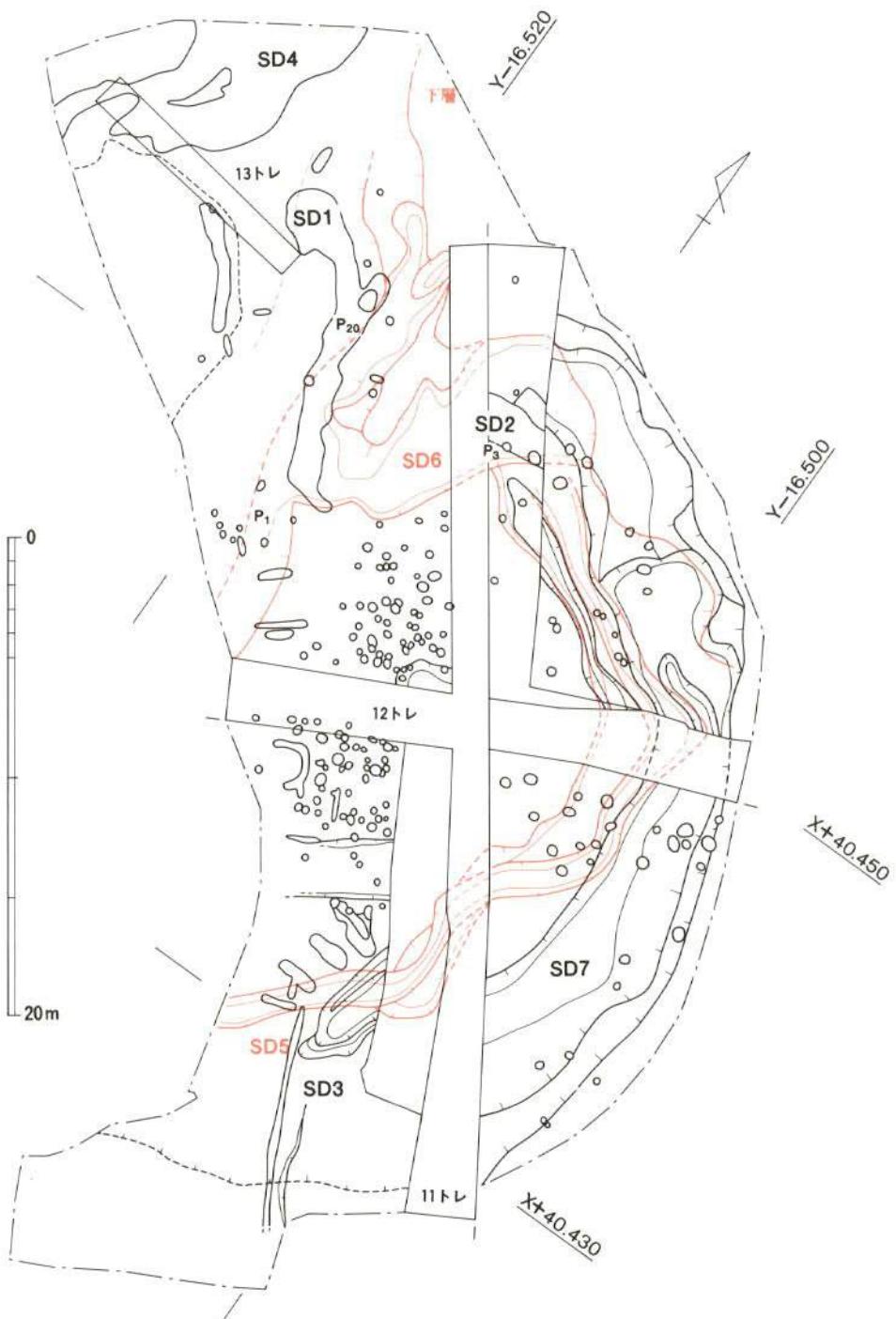
1号溝の東側に、幅1.7mで長さ3mほどのごく一部があった。深さは10cmに満たない。調査の手順によって違った番号になったが、これはおそらく5号溝の一部ではないかと考える。須恵器と古式土師器が出土しているが図示にたえない。

3号溝〈SD3〉(図版20、第181図)

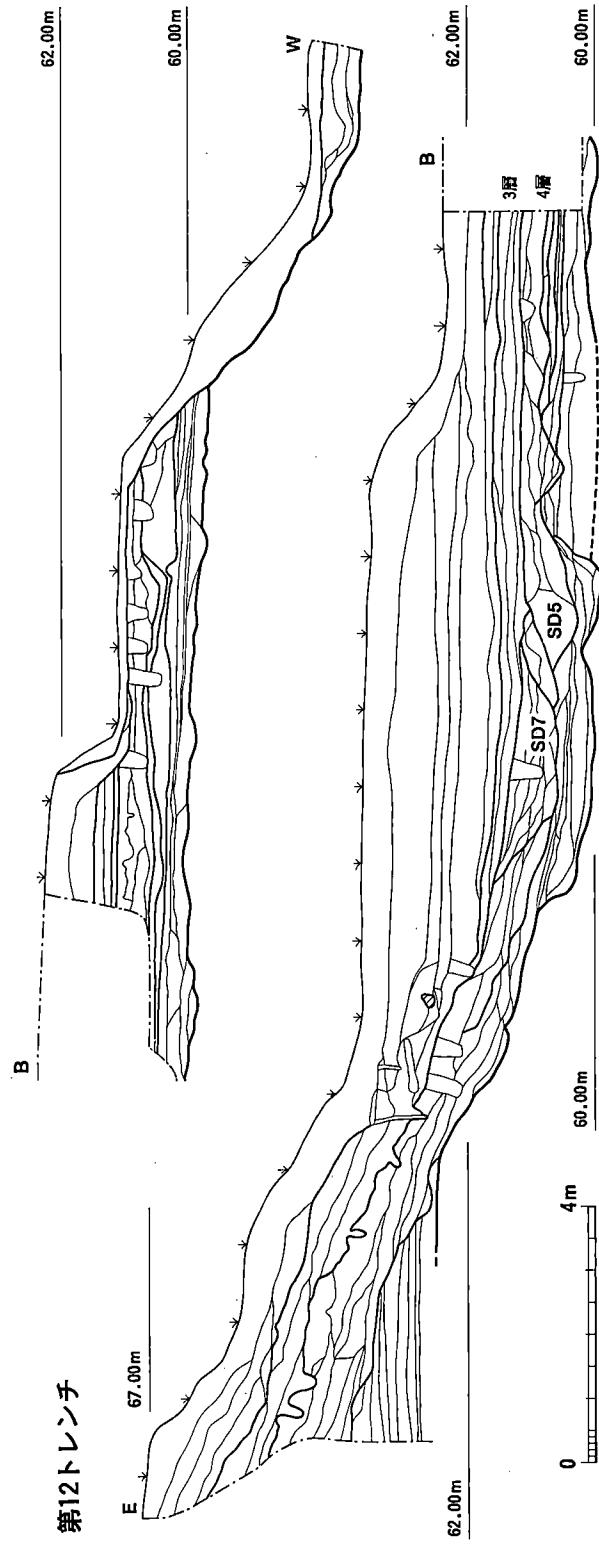
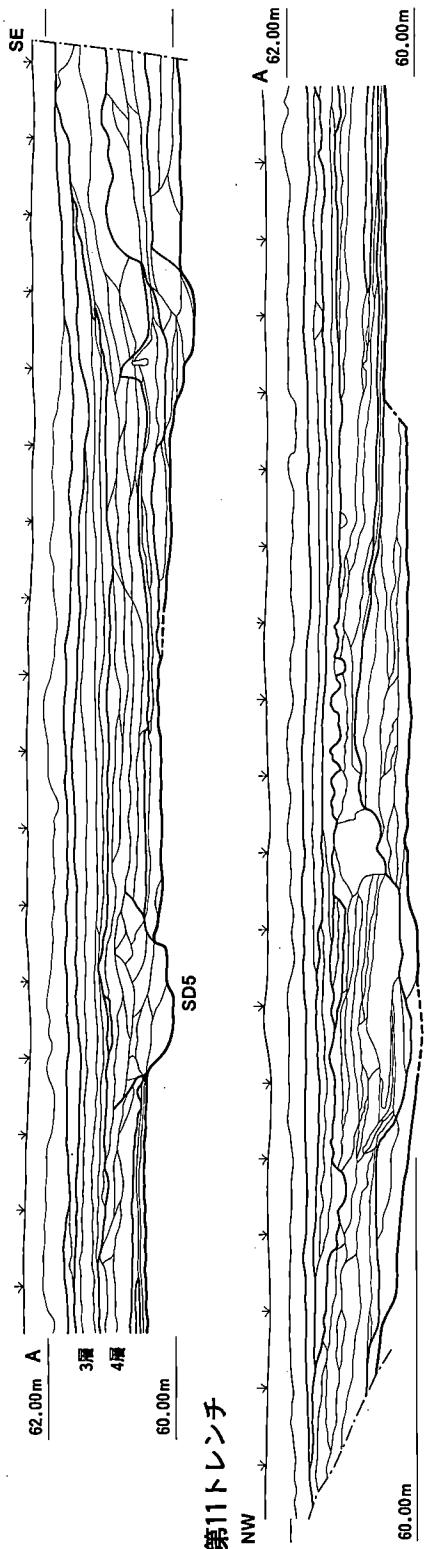
調査区の南端に近い所にあり、5号溝の上層にあった。幅最大90cmがU字形にターンした形狀であるが深さ10cm前後と浅い。土師器の破片が出土したが図示にたえない。



第180図 IV区地形図 (1/600)



第181図 IV区遺構図 (1/300)



第182図 N区第11・12トレンチ土層図 (1/120)

4号溝〈SD4〉(図版20、第181図)

調査区の西端部、1号溝の西にある。略南北方向に13mほどが検出されたが。深さは最大20cmほどしかなく浅い。瓦・土師器・須恵器・土製品が出土している。

出土遺物(図版42、第183図1~4、200図7・11)

須恵器(1~3) 1・2は瓦質に近い椀である。3は小壺か。

土師器(4) 高台付椀で、外底面には木の小口による擦過痕がある。

土製品(第200図7・11) 7は土師質で、容器の脚であることは間違いないであろうが、4cmしかないというのは短すぎる気もする。11は端部が膨らみをもった棒状の土製品で、長さ9.8cmのこの状態で完形である。器表はナデ調整。両端部には貫通しない孔がある。何であろうか。

5号溝〈SD5〉(図版20、第181図)

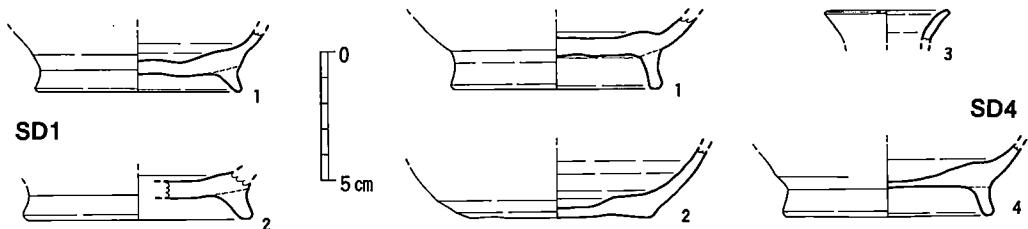
調査区の東半部で、東側へ大きく張り出して弧状に巡る溝である。当初は幅1~1.5m、長さ25mほどであったのが、のちにはほぼ同じ所で幅1~3m、長さ28m以上へと流路が変わったらしい。深さは最大で30cmほどであった。6号溝とも一連のものであったかもしれない。縄文晩期土器が大半で、若干の弥生早期~前期と中期前半1点、土師器1点の土器のほかに黒曜石・サヌカイトの鏃・剝片等が出土した。新しい時期の土器は混入として縄文晩期末頃のものと捉えてよいのではないかと考えている。

出土遺物(図版42・44・45、第184図1~14、200図12・13、201~203図1~3・10・11・27・28・37)

縄文~弥生土器(1~14) 1は粗製の壺である。2~4は精製の浅鉢。5~8は粗製の鉢である。9は口縁外端部に薄く粘土を貼り付けた甕。10は刻目突帯文甕。以上は縄文晩期後半~弥生早期であろう。11・12は弥生前期後半~末の甕。13は縄文晩期、14は弥生前期であろう。

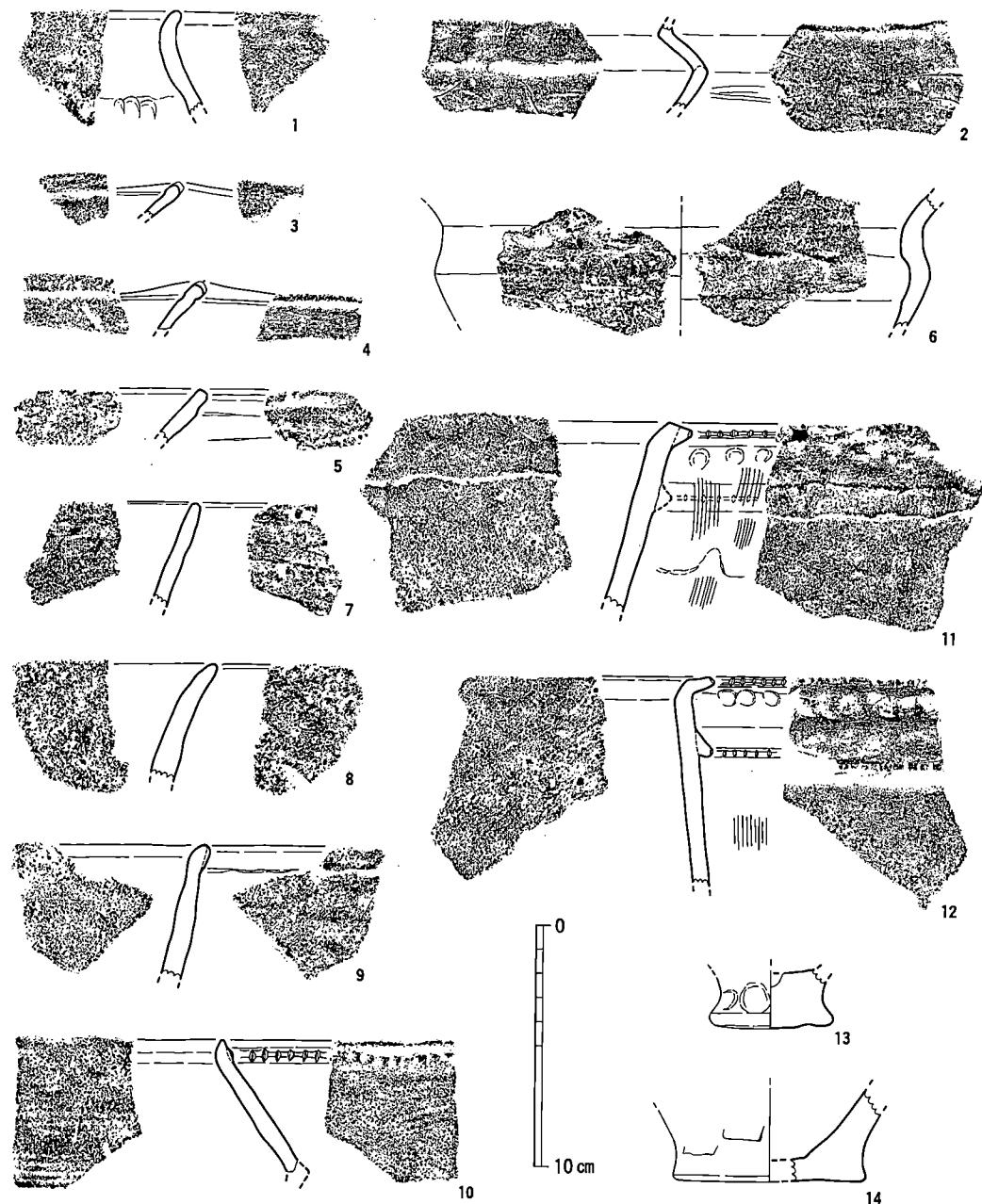
土製品(第200図12・13) ともに縄文晩期鉢の胴部片を利用した円盤で、周縁には擦った所があり、とくに12はそれが著しい。

石器(第201~203図1~3・10・11・27・28・37) 1~3は片岩の打製石斧で、1は局部磨製である。10は凝灰岩質砂岩で、周縁には切り込みを入れて造形を行っているように見えるが、何を表現しようとしたものか不明。表裏ともに磨れているので石としておくが、用途も不明。11は



第183図 IV区 1・4号溝〈SD1・4〉出土土器実測図 (1/3)

溝状の窪みのあるもので側縁は磨れている。用途不明。27は黒曜石、28はサヌカイトの鏃で、27の脚部先端は磨滅しているように見える。37は風化の著しい剝片で、一部に新しい小剝離がある。スクレイパーとしておく。



第184図 IV区 5号溝〈SD 5〉出土土器実測図 (1/3)

6号溝 <SD 6> (図版20、第181図)

調査区の西半で、南北方向に見られたもので、5号溝の方へ伸びていく蛇行した部分と、旧流路の本流かと思われる段落ち部とからなる。5号溝と同じ頃からそれよりも新しい時期まで機能していたものかと思われる。縄文晚期土器が大半で、若干の弥生前期と終末の土器、土師器の破片と黒曜石・サヌカイトの鎌・スクレイパー・剝片、すり石等が出土した。

出土遺物 (図版44・45、第185図1~20、201~203図7・20・21・29・34・35)

縄文～弥生土器(1~14) 1は精製の浅鉢。2~14は粗製である。10~12は刻目突帯文甕で、口縁より少し下がった所に突帯を貼り付ける。13は口縁部かもしれない。以上は縄文晚期～弥生早期に属する。14は形態としては弥生中期初頭の甕であるが、胎土・焼成と内外に条痕が残る調整は縄文晚期のそれである。どちらとすべきか判断がつかない。15は弥生前期の甕。16・17は縄文晚期～弥生前期。18~19は弥生終末の壺と甕で、20は復元口径22.4cm。

石器(第201~203図7・20・21・29・34・35) 7は砥石というには難があるが、各面が磨れており台石もしくはすり石とすべきか。煤けた部分がある。20・21は器表が磨れており、破損面までもが磨れている。29はサヌカイトの鎌。34・35は黒曜石の使用剝片。

7号溝 <SD 7> (図版20、第181図)

調査区の東半部で、5号溝よりも東側にあり、一部は5号溝と重複してそれよりも上層にあつた。地形に沿った形状で東側へ大きく張り出して弧状に巡る溝である。幅3~5.5mで、長さ35mほどが確認できた。深さは最大で80cmほどであった。溝底は当然ながら北から南へ低くなっている。須恵器、土師器、瓦、石鍋の破片のほかに製塩土器、鉄滓、土鉢、陶器、弥生土器片、石斧、すり石、黒曜石・サヌカイトのスクレイパー・剝片等が出土した。

出土遺物 (図版40~45、第186・187図1~37、197図1・2、200図1・3・10・15・16・17、201~203図5・6・13・17・39~41)

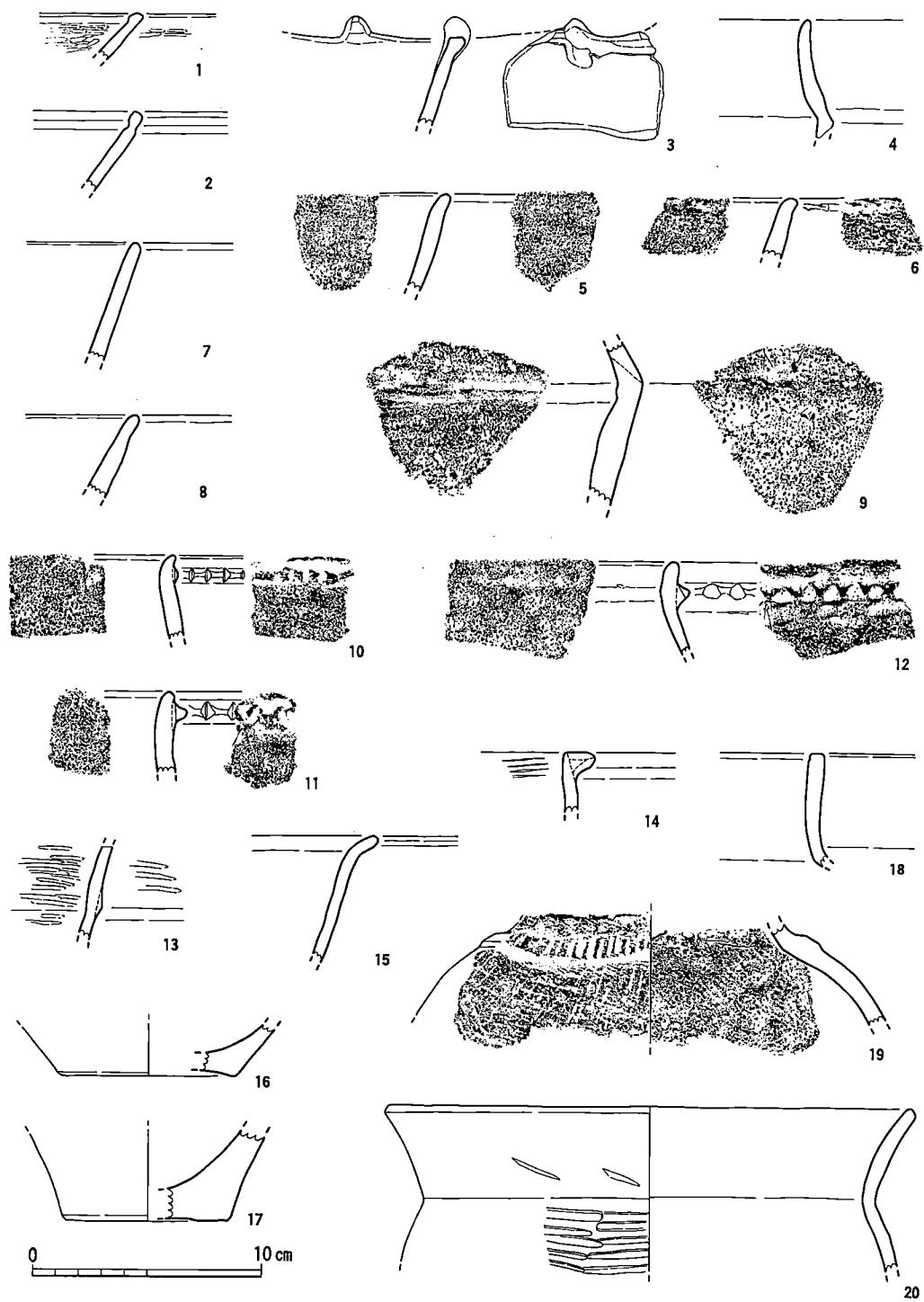
須恵器(1~23) 1~4は壊。1の復元口径11.2cm。3は椀の可能性もある。5~15は椀。全体に瓦質っぽい土器の中で7は須恵器らしい焼成である。8は底部破断面を破損後に擦った痕跡がある。13は瓦質土器と称すべき焼成である。16~20は皿。19・20は少し歪んでいる。21~23は甕。21の内面には鳥足状もしくは車輪状の当具痕がある。23の内面同心円当具痕には窪みの中に刷毛目(年輪)が見える。口縁はやや歪んでおり口径18.9~20.2cm。

土師器(24~35) 24は壊。25~27は椀で、27は内外とも黒い黒色土器。28は皿。29は大型の甕になる。30~32は小型甕の把手。33は壊。34の底部は完全な丸底ではない。35は鉢か。

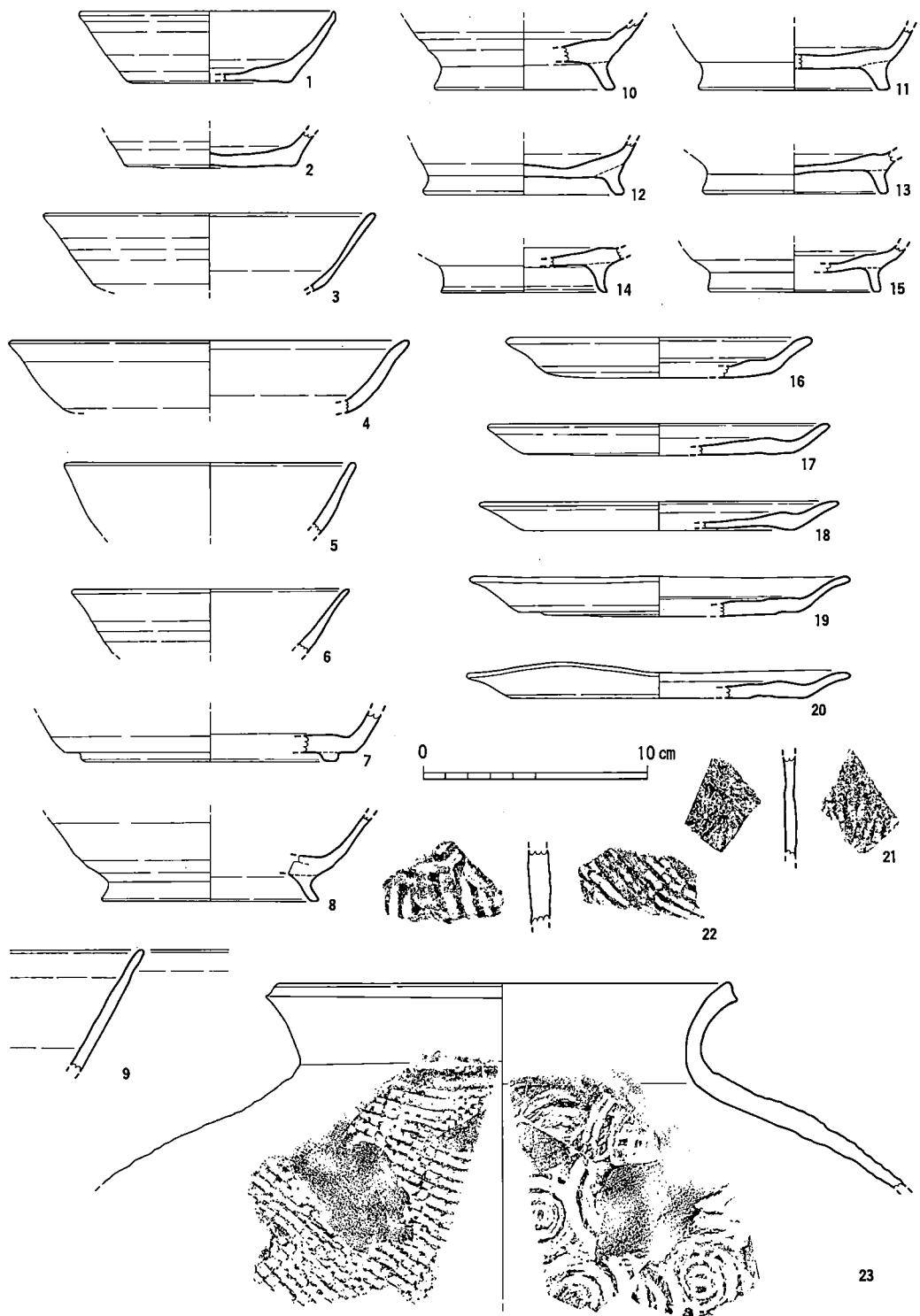
縄文土器(36) 刻目突帯文甕で、口唇部にも刻みが入る。

陶器(37) 無釉の鉢で、外面は焼き締め風となる。

瓦(第197図1・2) ともに須恵質の平瓦である。1は薄い。



第185図 IV区6号溝〈SD 6〉出土土器実測図(1/3)



第186図 IV区7号溝〈SD 7〉出土土器等実測図1 (1/3)

焼塙土器(第200図1) 円筒状で、内面下半には黒色の有機物が付着している。復元で胴部最大径は11.7cm。

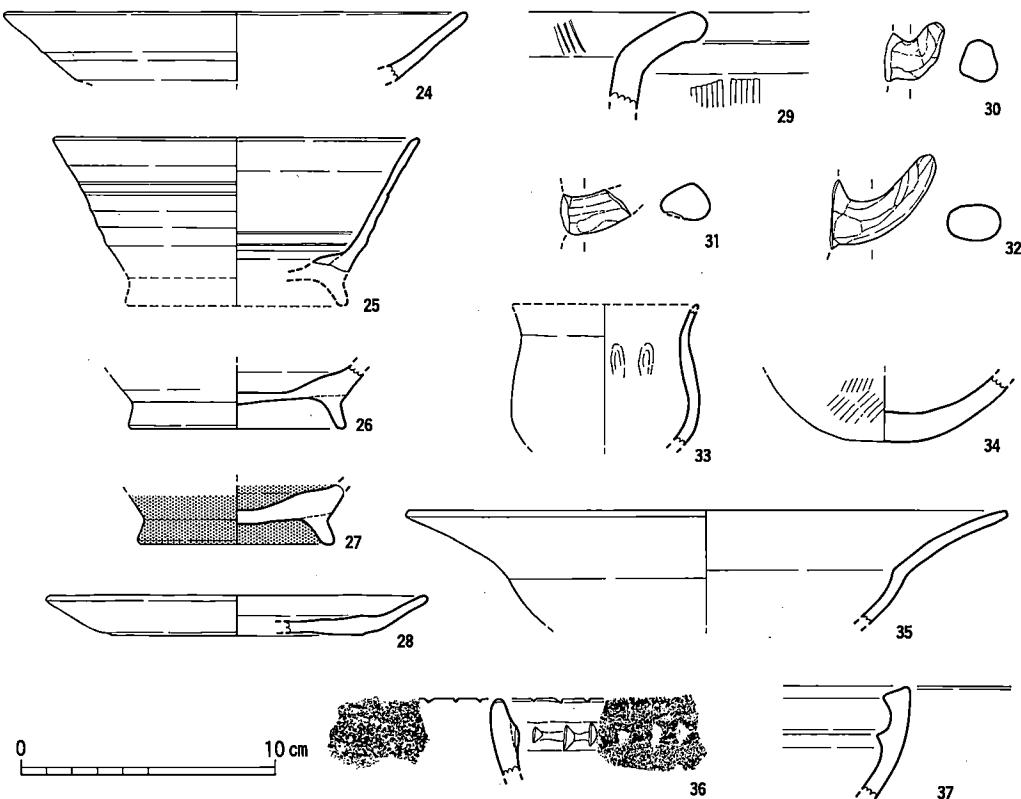
土鈴(第200図3) やや瓦質に近い須恵器で、鈴とみてよいだろう。外面には細い線刻があるが何を表現したものかわからない。胴部の最大径は復元で5.5cm。

土製品(第200図10・15) 10は甕か鉢かに付くこぶ状の把手である。15は短い棒状のもので、用途不明。

滑石製品(第200図16・17) 石鍋の破片で、鋸より下位は煤が付着する。

石器(第201~203図5・6・13・17・39~41) 5・6は打製石斧。6は雲母片岩できわめて脆い。13は球形をなし、器表はあまり磨れた感じはないが一部に敲打痕を見る。叩石とすべきか。17は卵形をなし器表が磨れている。すり石としてよいだろう。39~41はサヌカイトのスクレイパー。

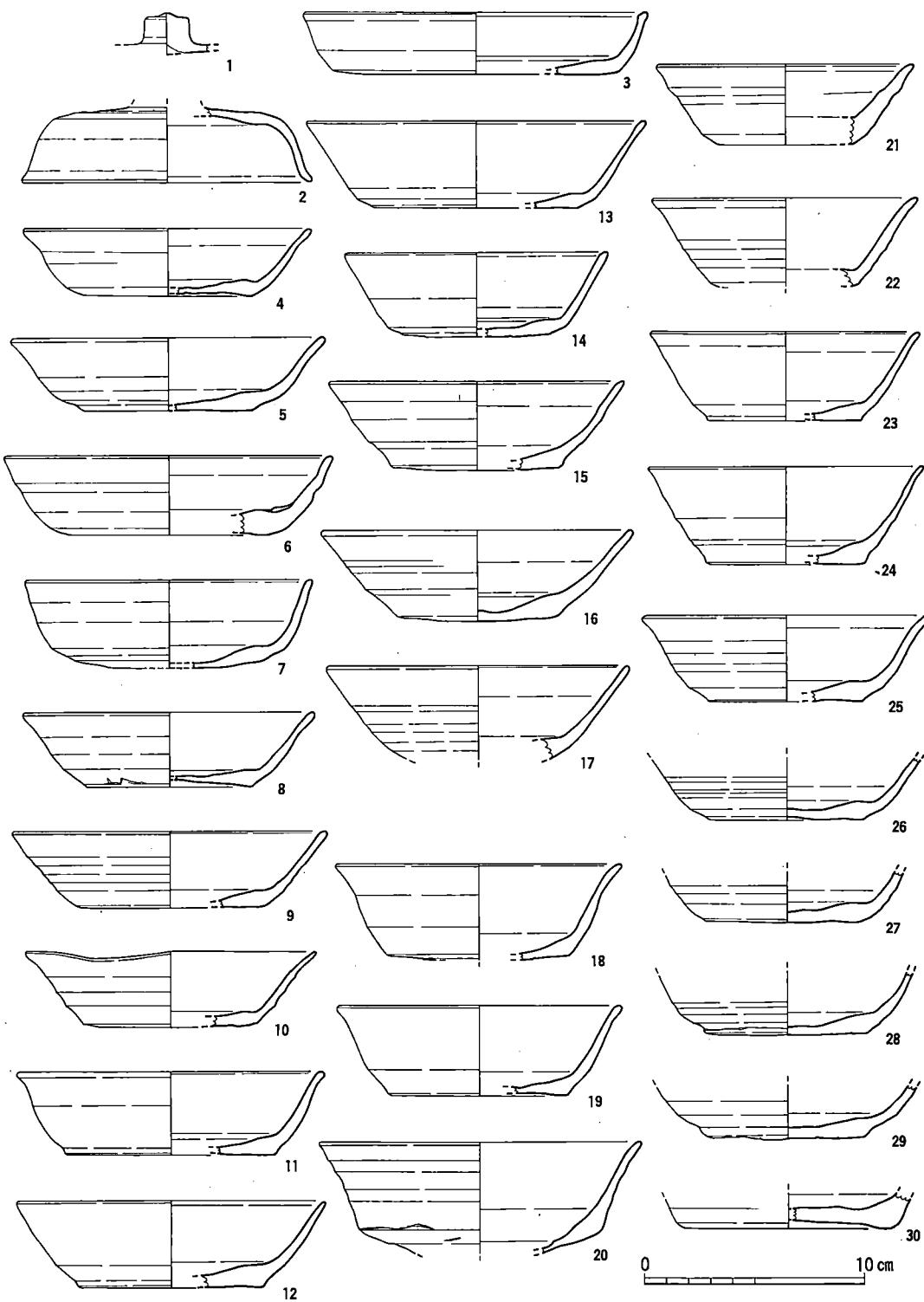
2 ピットその他



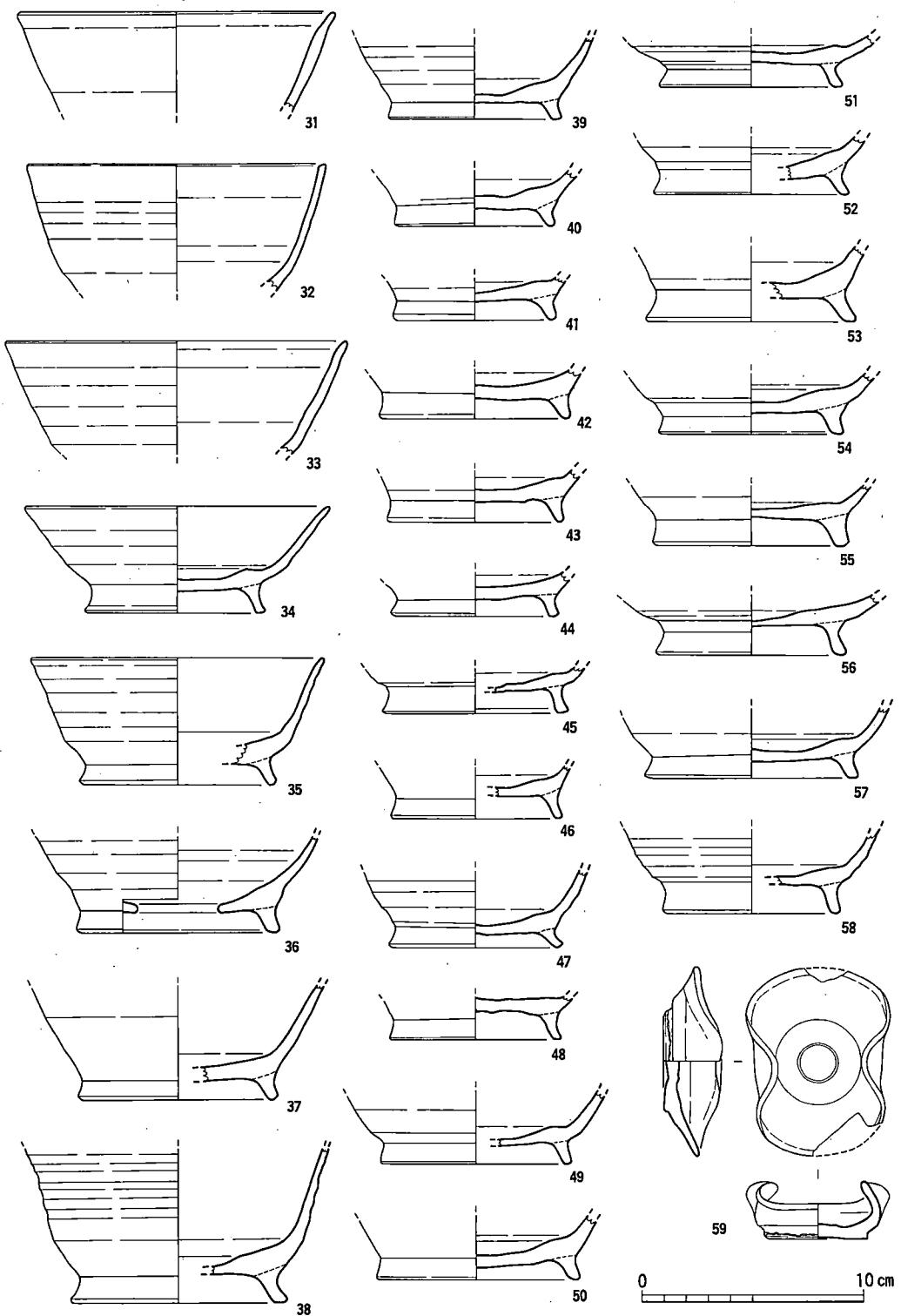
第187図 IV区 7号溝〈SD 7〉出土土器等実測図2 (1/3)

IV区全体の堆積層を大きく1～6層に分けたが、そのうち遺物が多く出土したのは3層と4層であった。とくに3層は多量であった。

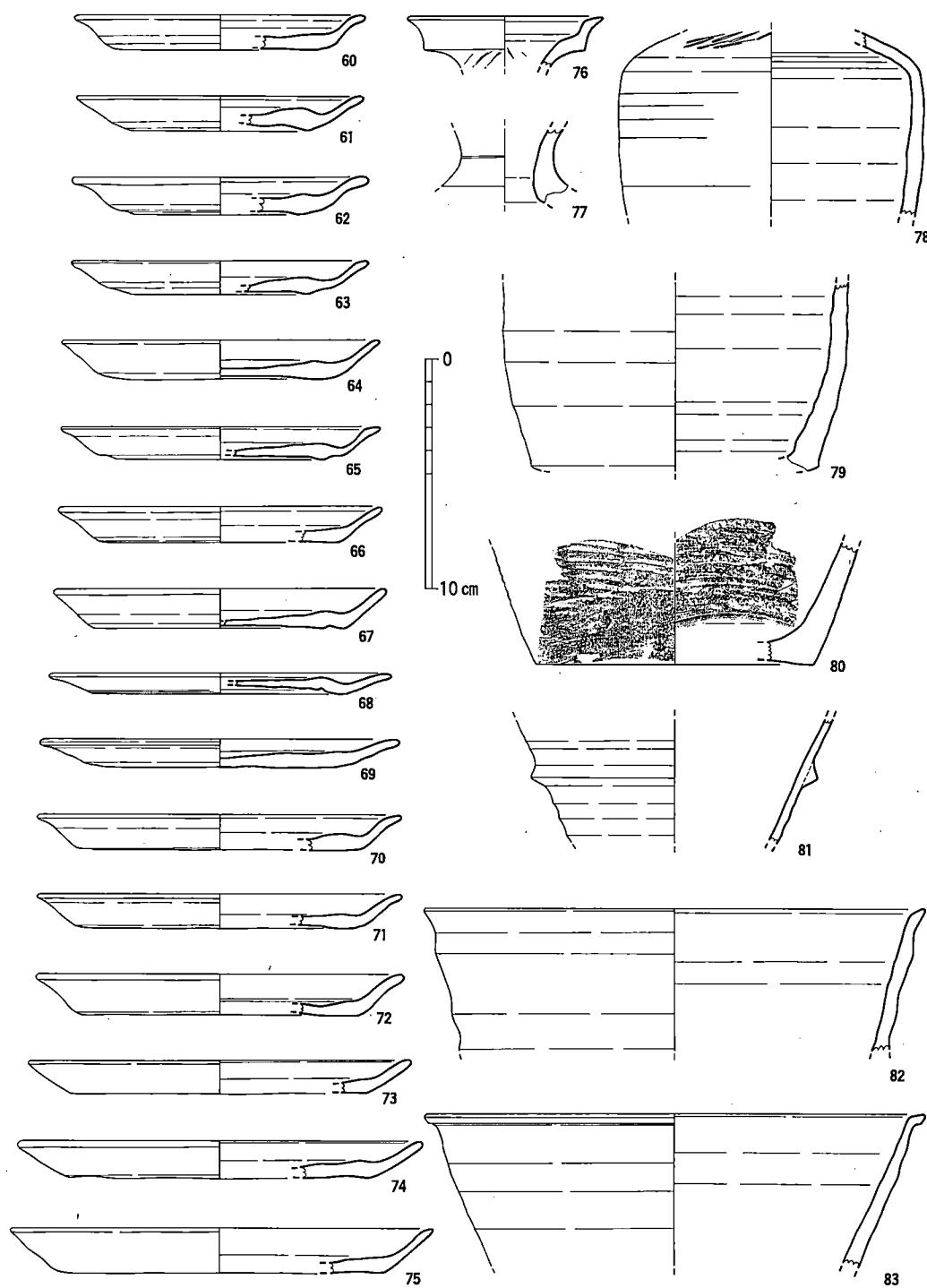
- 3層出土遺物 (図版40～46、第188～194図1～151、197～199図3～28、200図2・4・5・8・9・14・18、201～203図4・8・14・15・18・22・23・25・26・31～33・36・38・42、204図1～5)須恵器(1～94) 1・2は蓋。2は壺の蓋であろう。3～30は壺とする。なかには碗とする方がよいような深いものもある。3は蓋の可能性もある。10は口縁に片口状となる所がある。25は内外の一部に煤が付着する。12・13・15・18・19・28・29は瓦質に近いものである。31～58は碗。33・45・57は精良な土器である。34は壺とすべきか。36は底面に焼成前の大きな穿孔がある。36・37・40～43・46・53～56は瓦質に近い。59～75は皿。59は耳皿でほぼ完形といってよい。64・71は生焼けに近い。66・69・72～75は瓦質に近い。76～80は壺。76は瓦質っぽい。81～84は鉢としておく。82・84は瓦質に近い。85は高壺か。86は三脚か四脚になると思われるが明確でない。87は器台の脚裾としておく。88～94の甕の胴部片は、内面の当具痕が88は平行、89～91は車輪状もしくは鳥足状、92～94が同心円となる。土師器(95～140・146～148) 95～101は壺。96の外底面には板圧痕がある。98の外面は化粧土を掛けている。102～119は碗。106は二次熱を受けている。112の高台端部には刻み風の板圧痕がある。103・108は瓦質に近い。119は内黒土器である。120～126は皿。122・125・126は瓦質に近い。127は壺。128～139は甕とするが、130・133・137・139は甕かもしれない。130はきわめて精良な土器である。134は内外に煤が付着する。140は甕。146～148は古式の土師器。縄文土器(141) 晩期の鉢である。粗製。弥生土器(142～145) 142は前期か中期の甕。143～145は終末の壺と甕である。白磁(149・150) 碗の底部。陶器(151) 鉄釉と黄釉を掛け分けた壺である。瓦(第197～199図3～28) 全て平瓦片で、表は布目痕、裏は縄目痕である。厚さや焼成のあり方からすると数個体分はあると思われる。13の表面は粗い布目の上にナデを行っており、指紋がたくさん付いている。3～6・8・12～25は須恵質で、7が半須恵質、それ以外は瓦質である。焼塩土器(第200図2) 内面に布目痕のあるもので鉢形になろう。土鈴(第200図4・5) やや瓦質に近い須恵器で、鈴であろう。これにも外面に細い線刻がある。土製品(第200図8・9・14) 8・9は土師器で、何かに付属していた把手であろう。14は土師質の円盤で、径28.5mmのほぼ中央に切り込みのような孔がある。用途不明。滑石製品(第200図18) 石鍋の底部破片を再加工したもので、縁辺を擦り、穿孔も行っているが何を造ろうとしたものか不明。内外に煤が付着したままである。



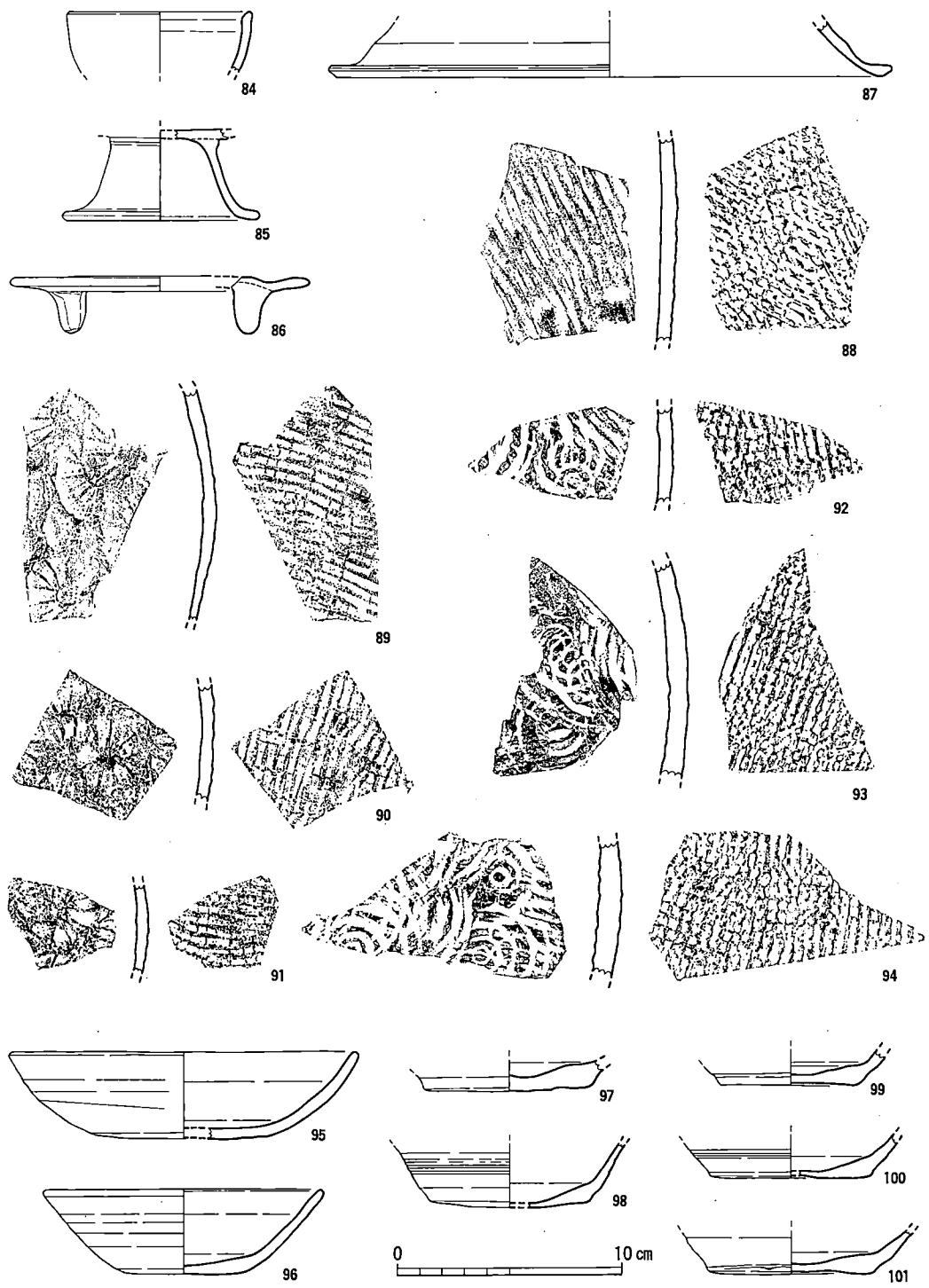
第188図 IV区 3層出土土器等実測図 1 (1/3)



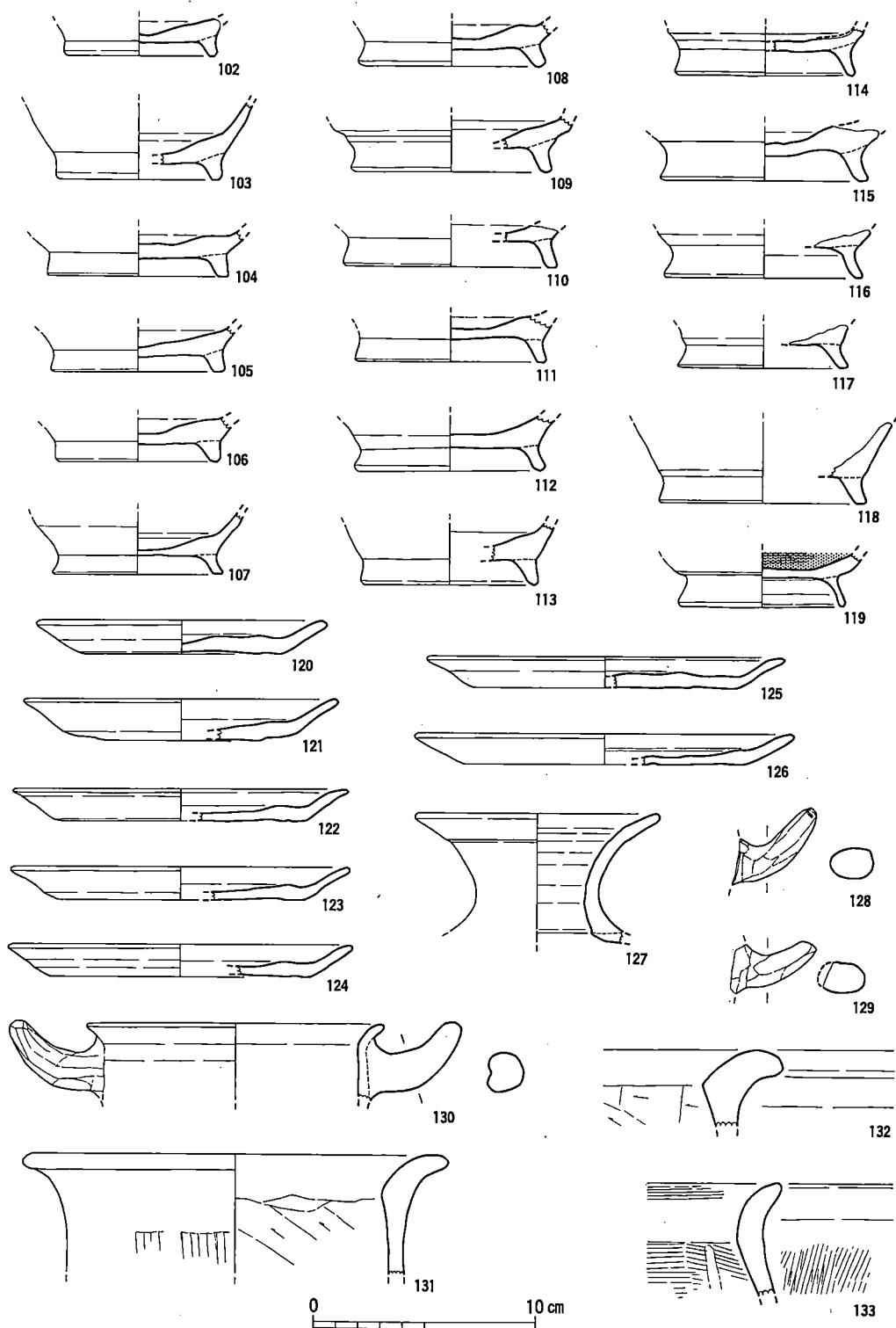
第189図 IV区3層出土土器等実測図2 (1/3)



第190図 IV区3層出土土器等実測図3 (1/3)

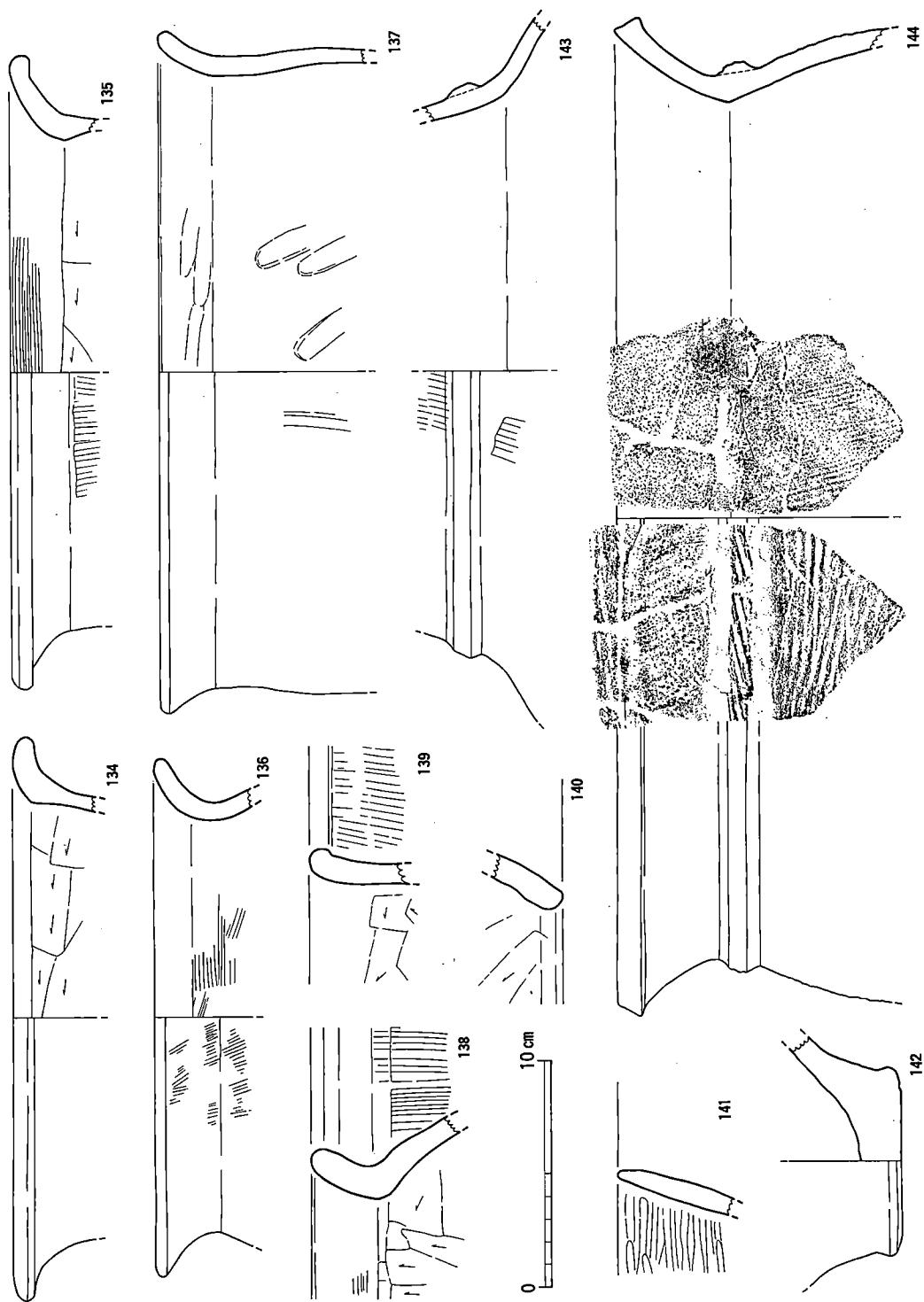


第191図 IV区3層出土土器等実測図4 (1/3)



第192図 IV区 3層出土土器等実測図 5 (1/3)

第193図 IV区3層出土土器等実測図 6 (1/3)



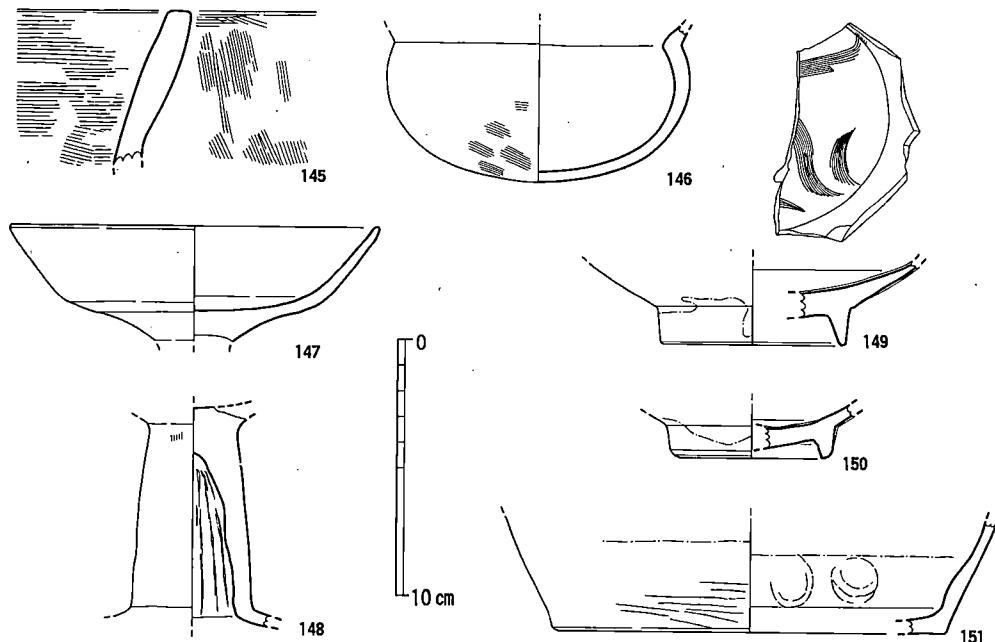
石器(第201~203図4・8・14・15・18・22・23・25・26・31~33・36・38・42) 4は片岩ですり石であろうか。8は粘板岩の仕上砥石で全ての面を使用している。14・15・18はすり石であろう。器表が磨れている。22・23も器表が磨れており台石もしくはすり石であろう。25は軽石であるが、浮子ではなくて何かを磨るのに用いたらしい。

26は扁平磨製石鎌である。切っ先部分は破損している。31はサヌカイトで、スクレイパーか鎌の未製品かであろう。32はサヌカイトの鎌。33は黒曜石の剝片で先端を欠損するが鎌であろうか。36は黒曜石の使用剝片。38・42はサヌカイトのスクレイパー。42は器表が白灰色に風化している。

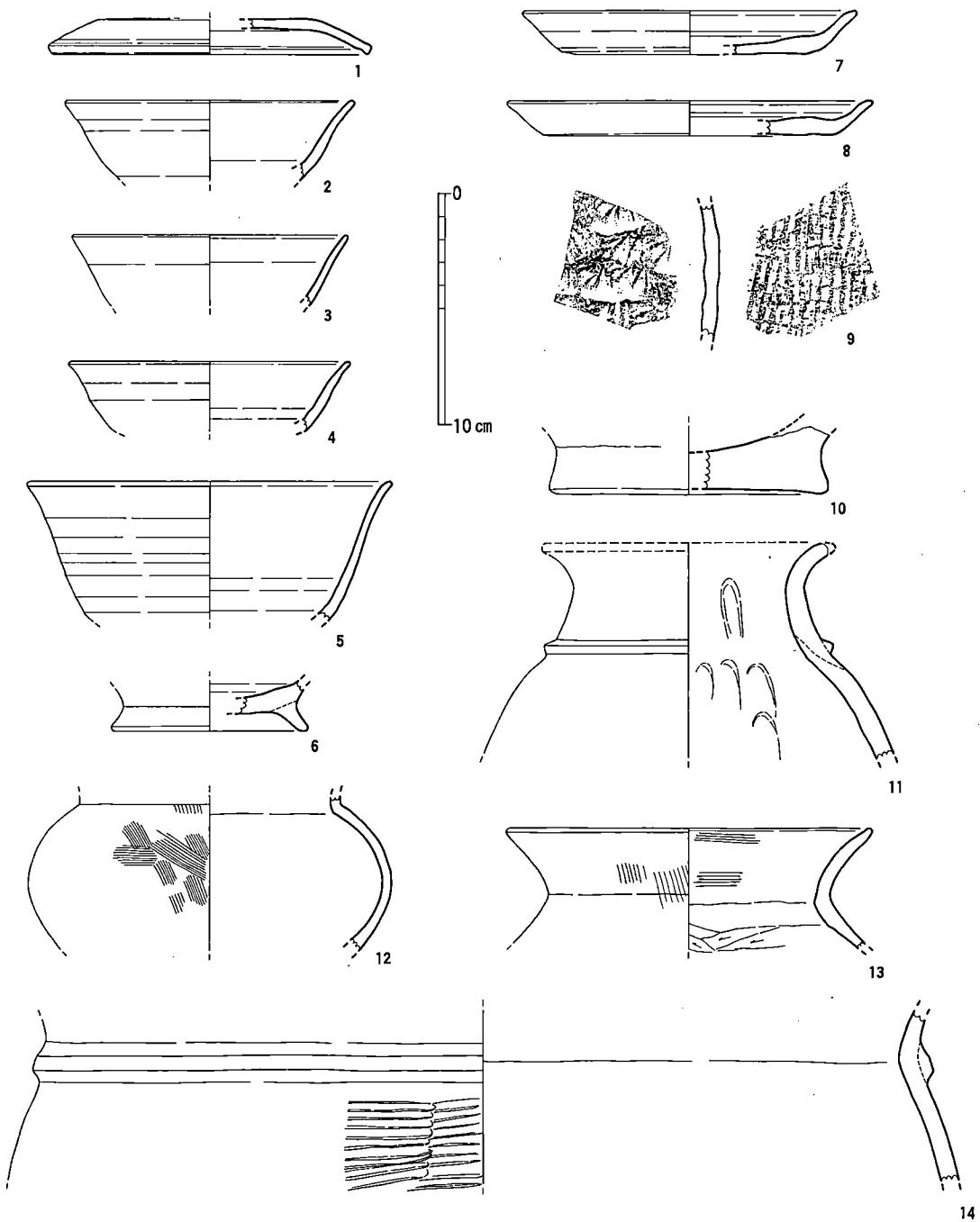
鉄器(第204図1~5) 1は全長6.6cmの刀子状のものであるが、刃部がないので楔であろうか。2は刃部が明確でないが刀子の可能性がある。3は折り曲げのある製品で用途不明。4・5は釘で、4は折れ曲がり、5には木質が付いている。

● 4層出土遺物 (図版43~45、第195図1~14、199図29、202・203図16・30)

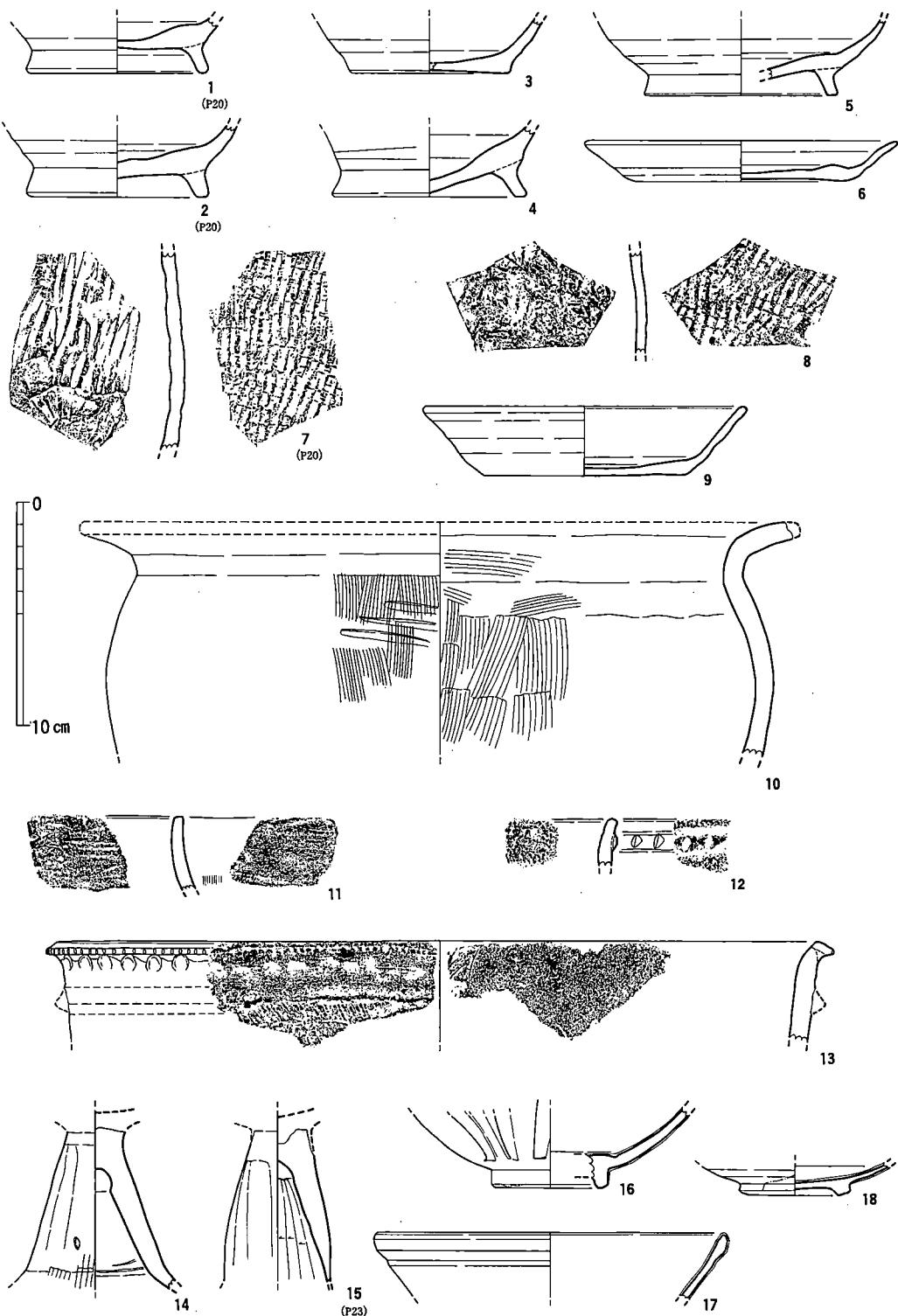
須恵器(1~9) 1は蓋。口縁上端部に重ね焼きの痕跡がある。2~6は碗。5は深みがある。7・8は皿。7の底部は内外とも黒変している。9の竈胴部片は内面が車輪状もしくは鳥足状の当具痕である。



第194図 IV区3層出土土器等実測図7 (1/3)



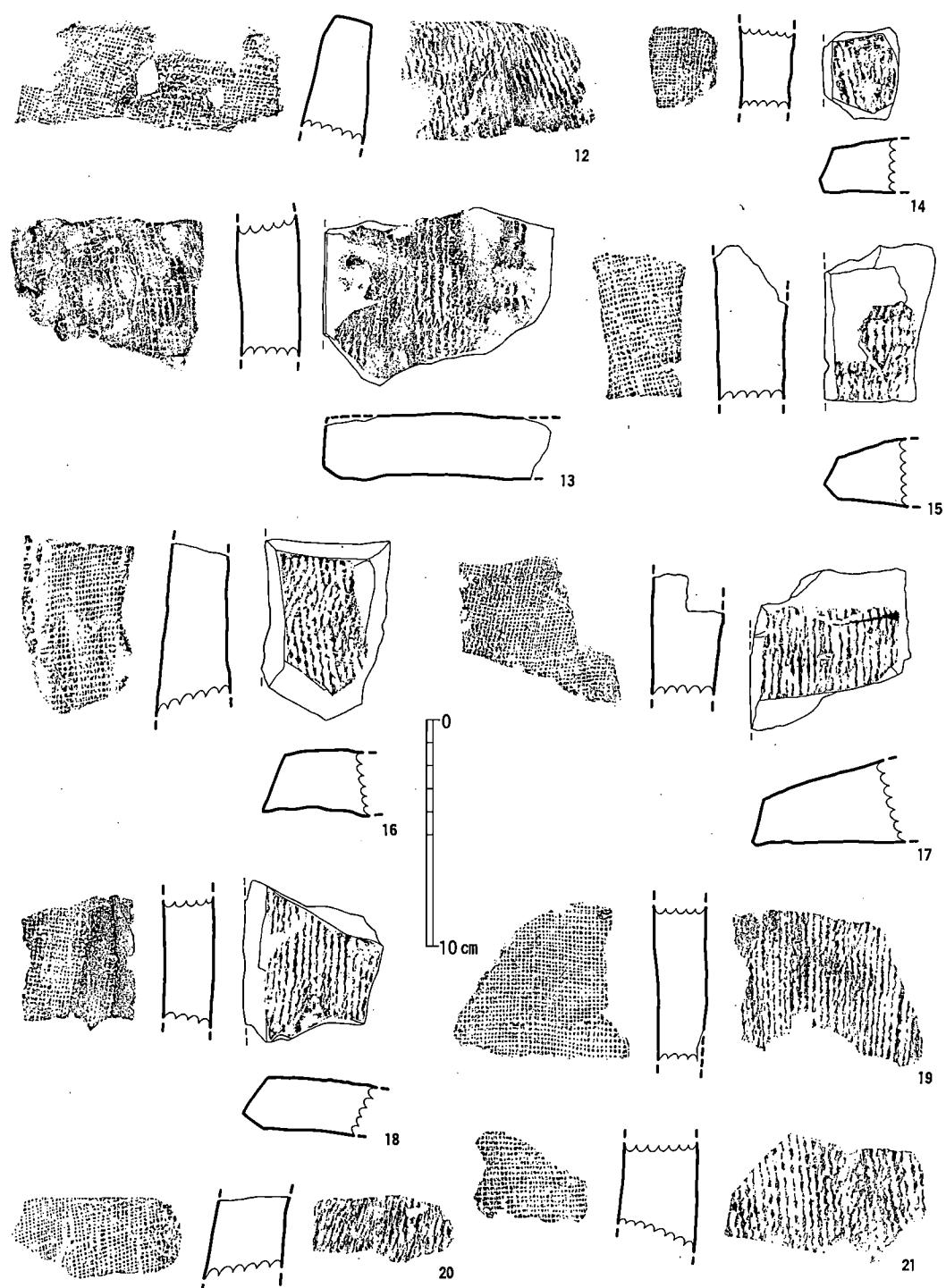
第195図 IV区 4層出土土器実測図 (1/3)



第196図 IV区出土土器等実測図 (1/3)



第197図 IV区出土瓦実測図 1 (1/3)



第198図 IV区出土瓦実測図2 (1/3)

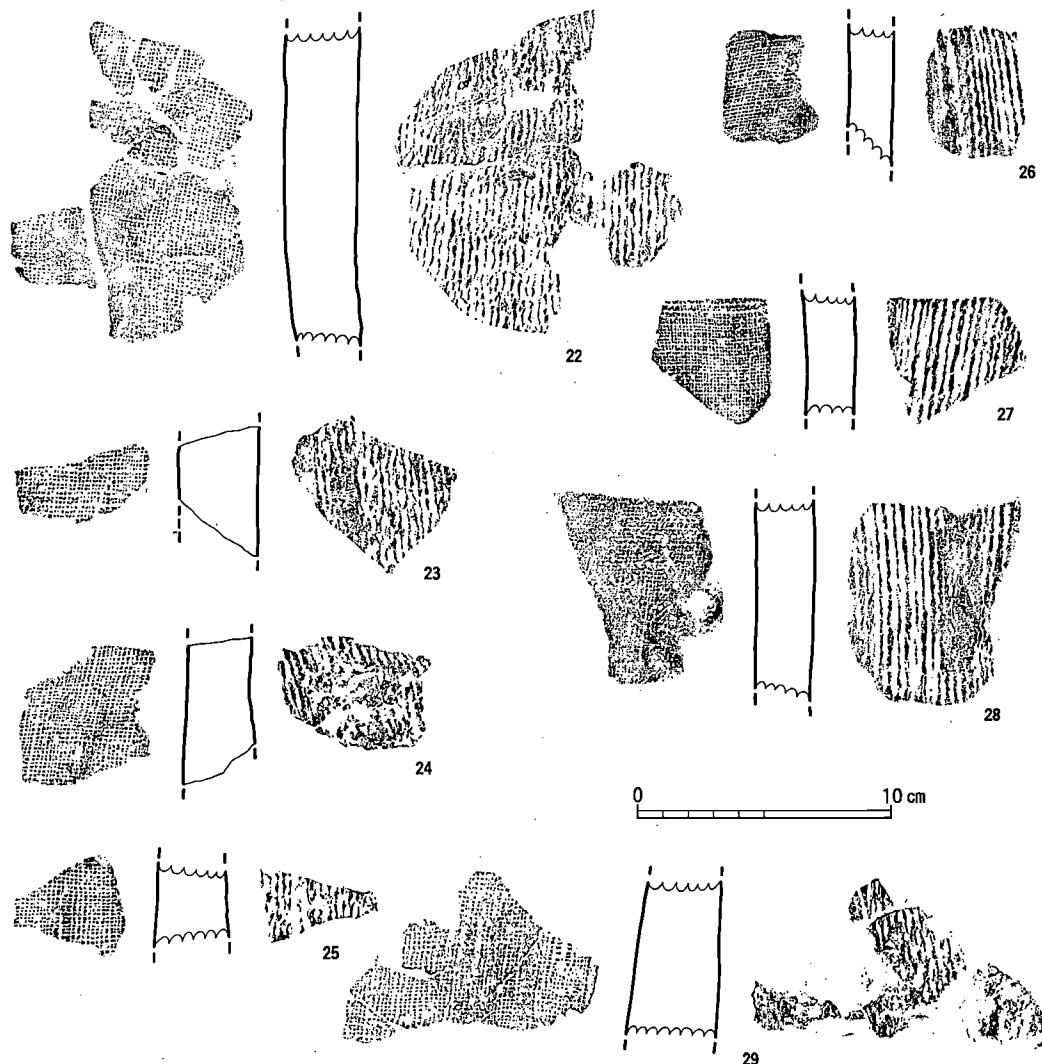
縄文土器(10) 晩期の鉢の底部である。粗製。

弥生土器(11・14) 11は前期末～中期初頭の壺で、肩部に断面三角突帯を貼り付ける。14は終末期の甕。143～145は終末の壺と甕である。

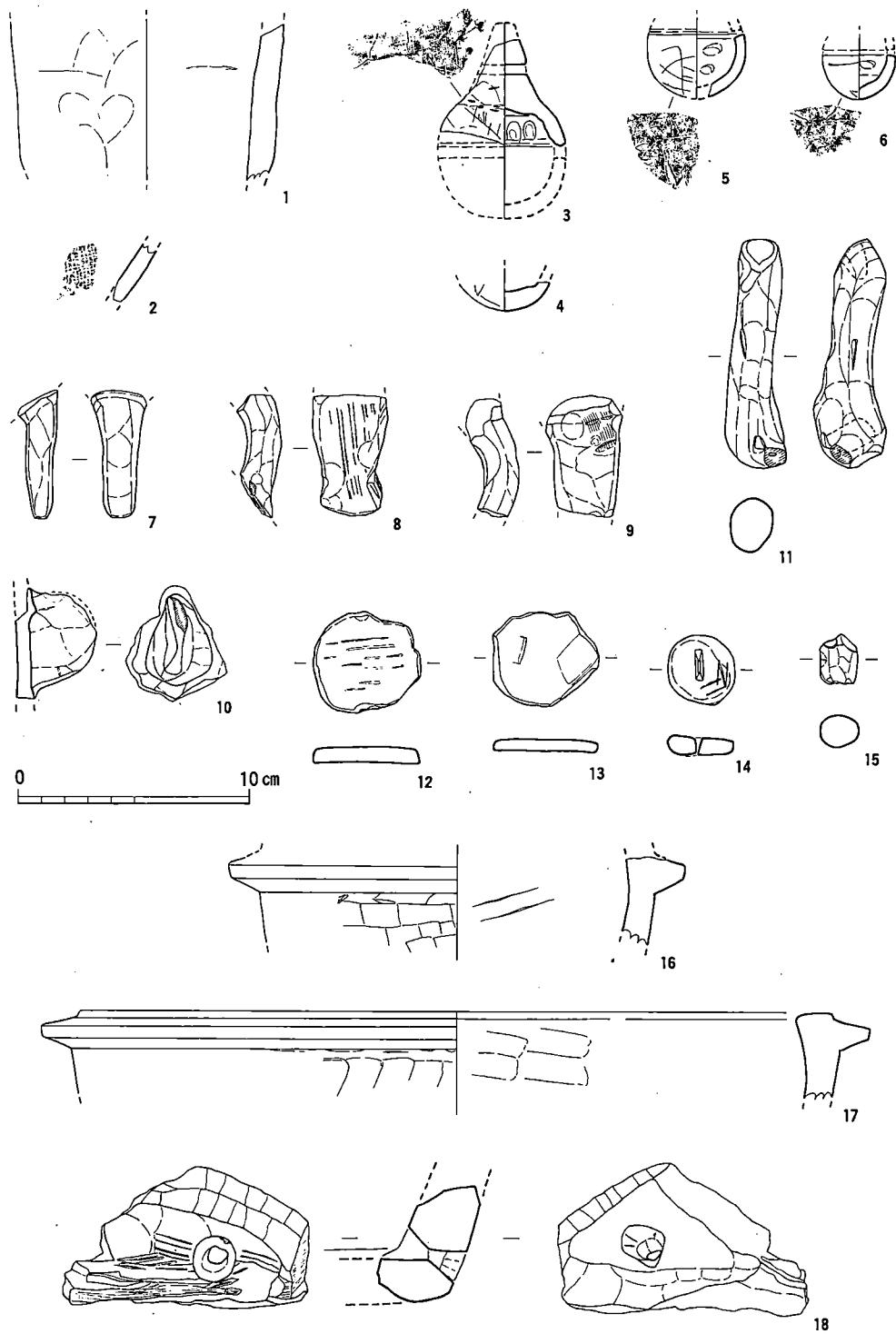
土師器(12・13) 古式土師器である。12は埴、13は甕。

瓦(第199図29) 3層で多く出土したのと同じである。須恵質。

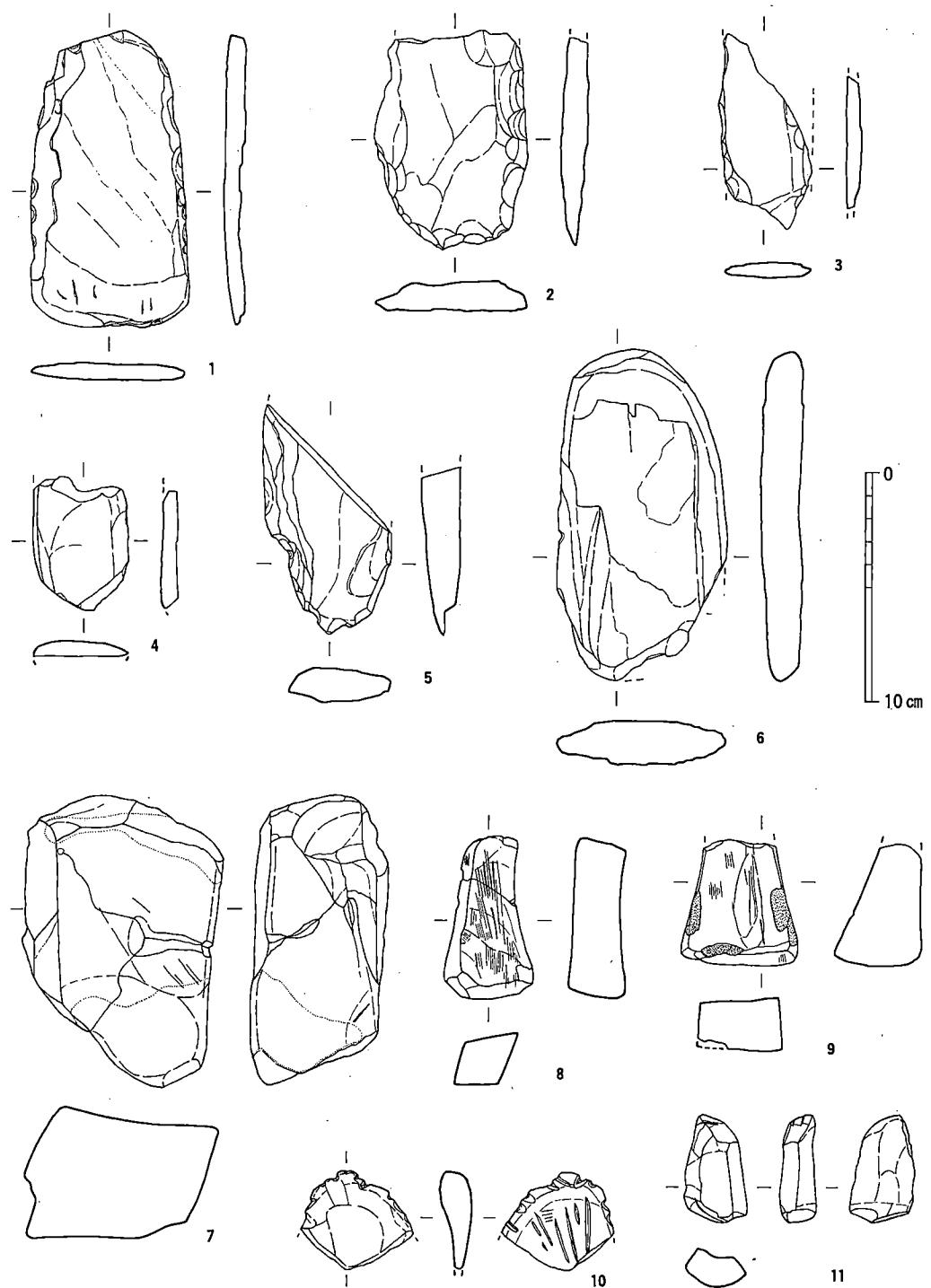
石器(第202・203図16・30) 16は細長い棒状の石で器表の一部が磨れている。すり石であろう。30は黒曜石の剝片鏃。



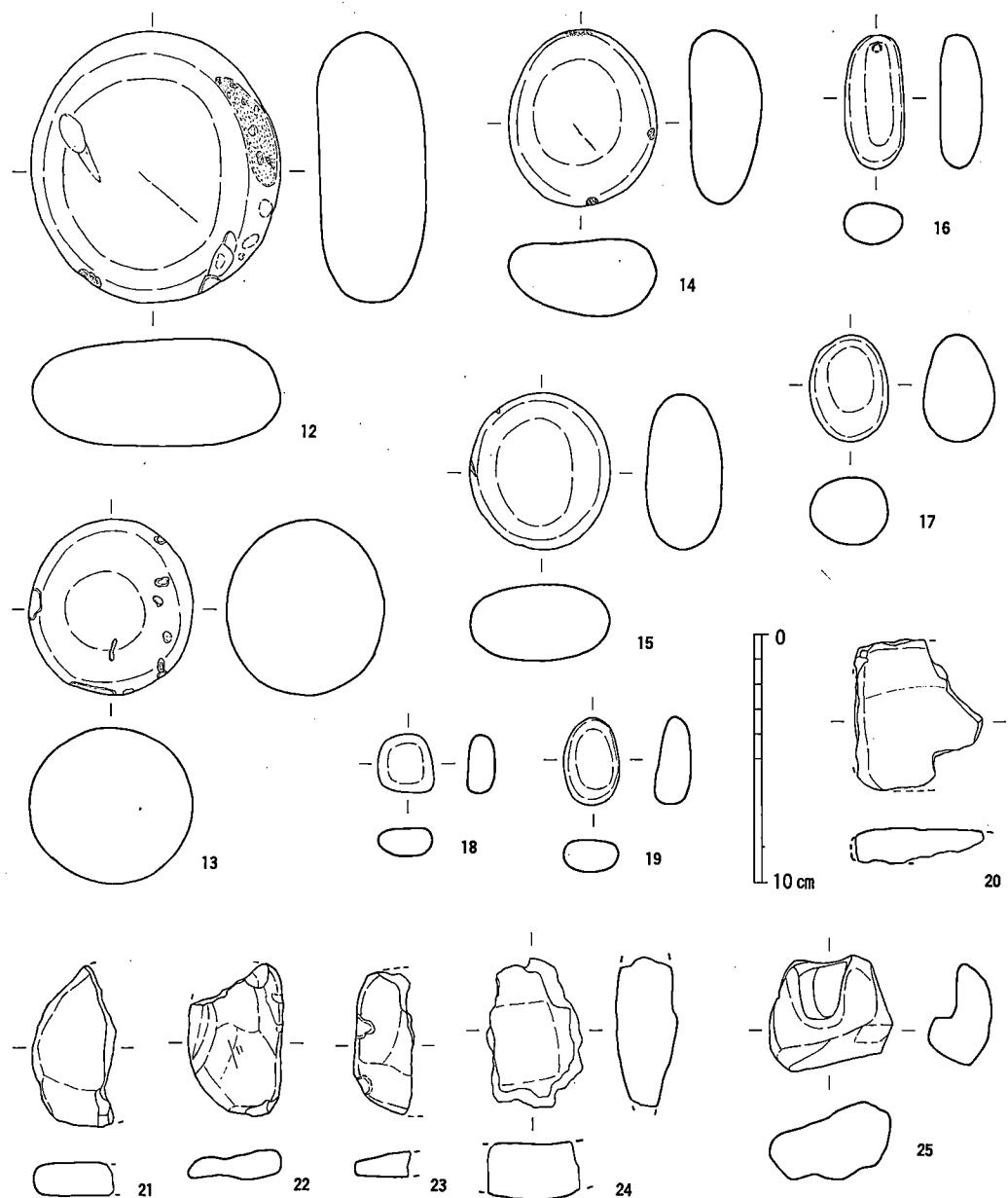
第199図 IV区出土瓦実測図 3 (1/3)



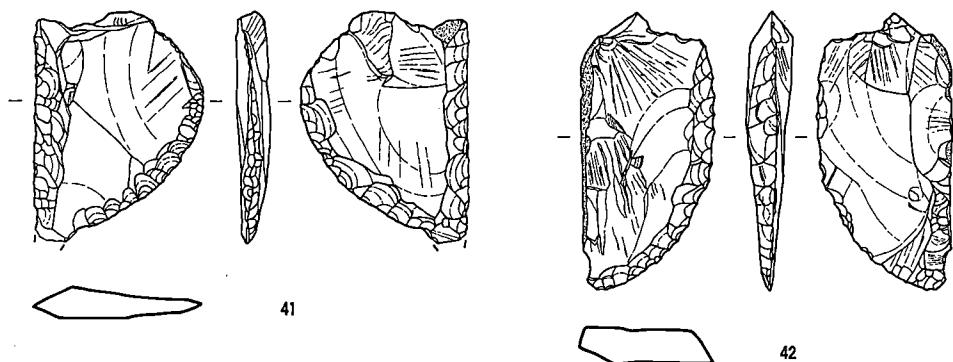
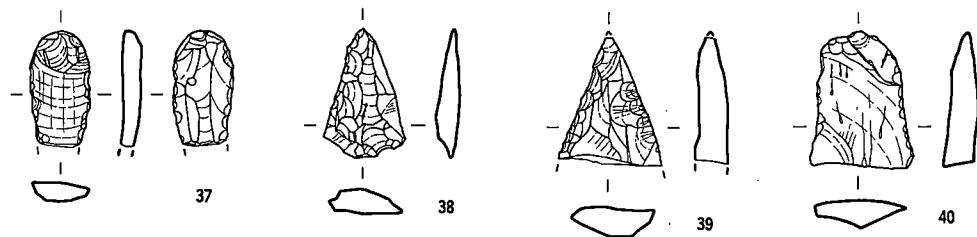
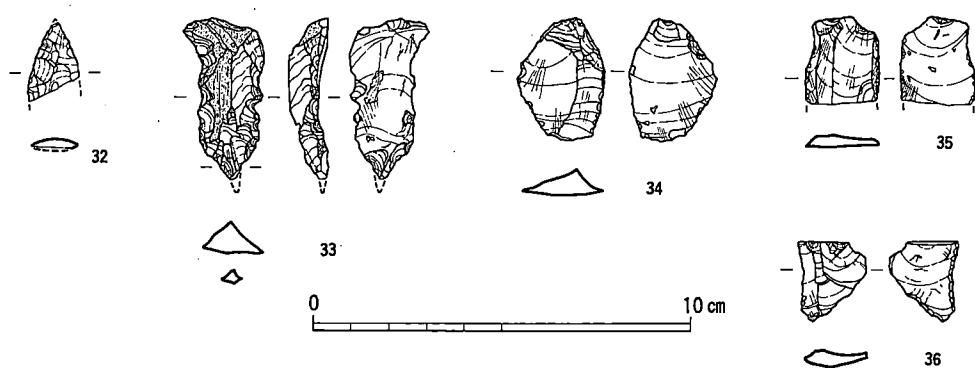
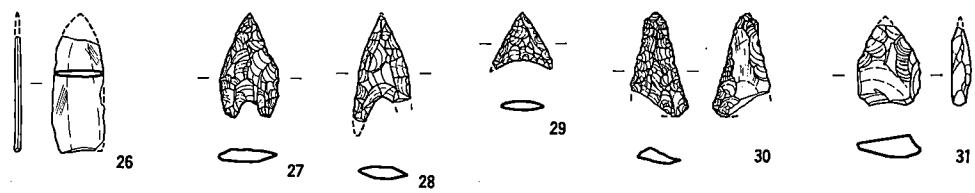
第200図 IV区出土土製品・石鍋等実測図 (1/3)



第201図 IV区出土石製品実測図 1 (1/3)



第202図 IV区出土石製品実測図 2 (1/3)



第203図 IV区出土石製品実測図 3 (1/2)

● ピットその他出土遺物（図版44～46、第196図1～18、200図6、201・202図9・12・19・24、204図6）

須恵器(1～8) 1～5は碗。3の外底面には板目痕がある。6は皿で底部は内外とも黒ずんでいる。7・8は甕胴部片で、7の内面は平行と車輪状もしくは鳥足状の当具痕を併用している。

土師器(9・14・15) 9は硬質の壺で復元口径14.6cm。14・15は古式の高壺で、14の脚部外面には糲圧痕がある。15は脚部下方がエンタシス状になる。

縄文～弥生土器(10～13) 10は傾きにやや違和感を覚えるが弥生終末期の壺としておく。11・12は縄文晩期～弥生早期の鉢と甕。13は弥生前期末の甕で、突帯は剥離しているが、突帯を貼り付ける前に刷毛目調整がなされている。外面は煤けている。

青磁(16) 碗で外面は連弁文らしい。

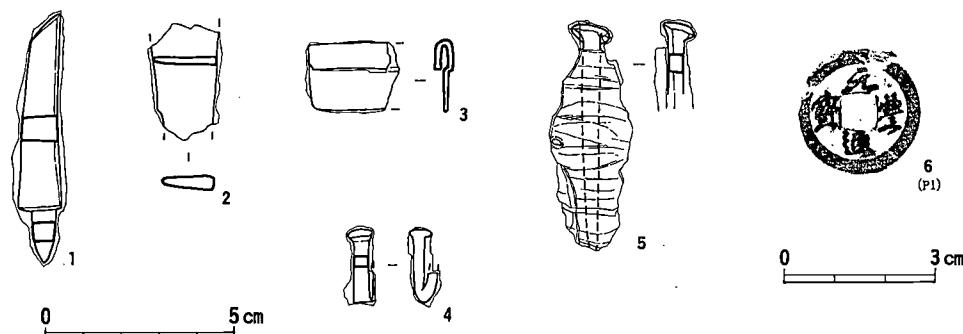
白磁(17・18) 17は碗、18は皿になろう。

以上は、1・2・7は1号溝の中にあるP20、15は2号溝の所にあるP23、12は5層、それ以外はトレンチ内や検出面から出土したもの、または採集品である。

土鈴(第200図6) 7号溝や3層から出土したものと同様の須恵質のものでやや小型ではある。同じように線刻がある。出土場所不明だがおそらく3層であろう。

石器(第201・202図9・12・19・24) 9は砥石で中砥らしい。四面と小口部も使用している。調査区西側のごく新しい溝から出土した。12は叩石もしくはすり石で、表面はよく磨れていて、側縁には敲打痕がある。採集品。19は小さなすり石で、表面はよく磨れている。11トレンチ出土。24は台石もしくはすり石で、器表は磨れている。採集品。

渡来銭(第204図6) 「元豊通寶」で、宋の神宗・元豊元年(1078)始鑄である。径は24.5mm。1号溝の南側にあるP1から出土した。



第204図 IV区出土鉄製品・渡来銭実測図・拓影 (1/2・2/3)

V 福岡県杷木町畠田遺跡の組織痕土器

名古屋大学 渡辺 誠

1 はじめに

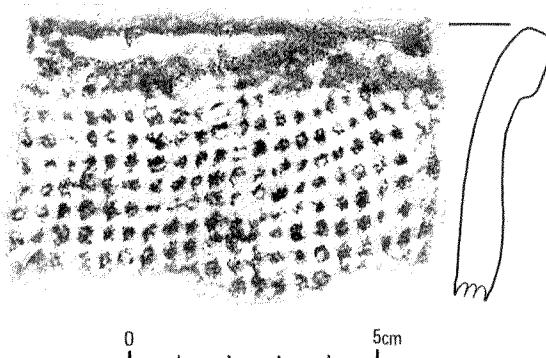
本資料は、1986年に福岡県教育庁文化課の伊崎俊秋氏等によって、九州横断自動車道第48地点より発掘されたものである。行政区画上は福岡県朝倉郡杷木町池田に位置する、畠田遺跡である。そして本資料の所属時期は縄文晩期中葉である。ラベルには「第7トレ南、包含層VII」と記されている。

点数はわずか1点にすぎないが、福岡県下における類例はきわめて少なく、福岡市羽根戸遺跡(渡辺1986)に次ぐ2例目の資料であり、分布上きわめて興味深い資料である。

2 観察の結果

この組織痕土器は浅鉢形土器の口縁部破片で、大きさはタテ5.9cm、ヨコ8.6cmである(第V-1図、写真1)。器表面は褐色を呈し、器壁の厚さは6~9mmである。厚さにムラがあるのは、組織痕土器たらしめている型取り法に由来することである。口唇下の幅13~17mmの無文帯の厚さは8~9mmで、ほぼ一定である。しかしその下の網目についている部分では、左側に三角形を呈して8~9mmの厚さを呈し、6~8mmを呈す両側よりは明瞭に厚くなっている部分がある。ただし内側は平滑である。

口縁部のカーブはきわめて緩く口径の算出は不可能であるが、おそらく数10cmはあるであろう。



第V-1図 組織痕土器拓影 (2/3)

網目がきわめて細かいため、型になったカゴの組織を示す圧痕は確認できない。網目は一見正方形を呈するが、実際は菱形であって、網自体がカゴの内面に斜めに敷かれた結果なのである。網目の計測部位は第V-2図のように統一することにした（渡辺1982）。これにしたがえば、aは7.0～7.5mm、bは6.0～6.5mm、そしてcは4.66～5.0mmであり、きわめて細かい。また糸はZ字撚りである。

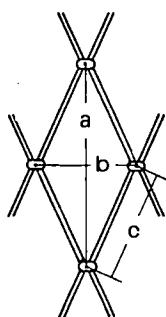
これを現行の網の規準で表現する場合、このような細かな網目は5寸(15cm)の間にある結び目（節）の数で呼ぶことが多いということであるから、15をaで割ると20～21節となる。この細かさから想定される網は、小型の表層魚をとる小規模な網、あるいはたも網などである。

全体の遺存状態は良好であるが、結び目の部分については必ずしも良好とはいがたい。しかしその結び目は、他の遺跡でも確認されている「かえる股」とみることは可能である（写真1-c）。

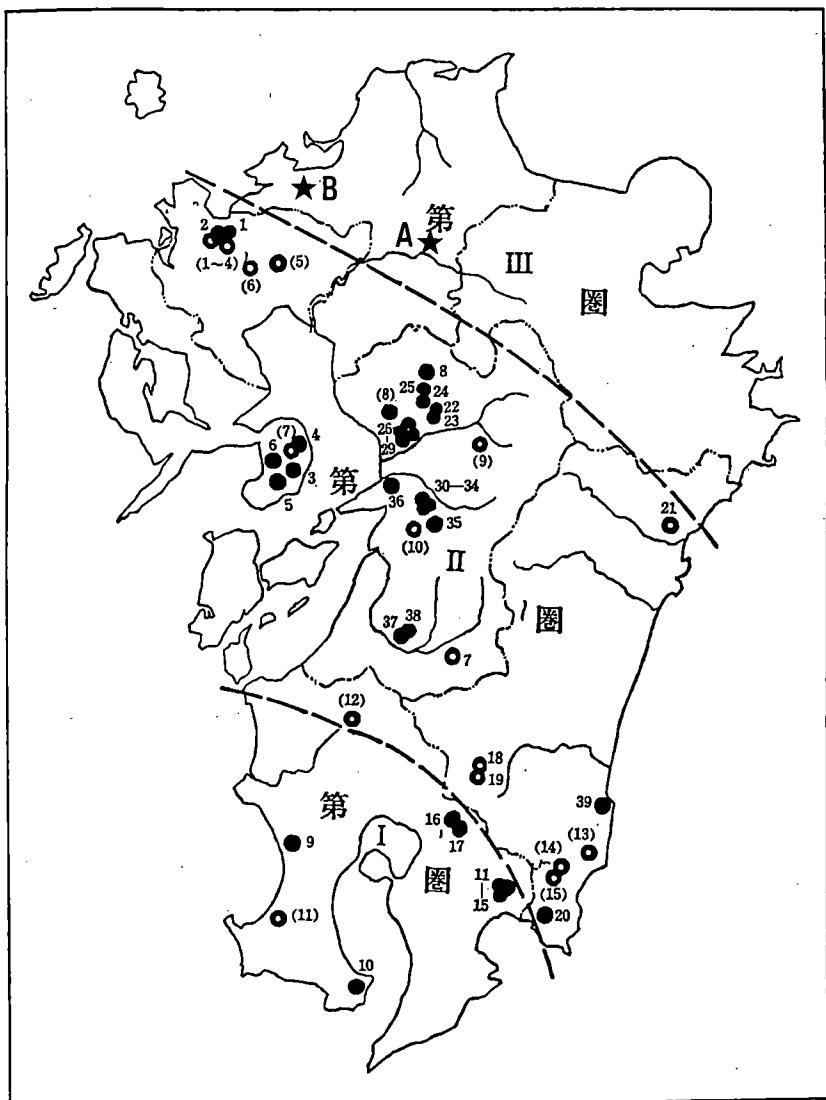
3 分布上の位置

組織痕土器について先駆的な業績を残したのは、鏡山猛氏である（鏡山1972）。それでもっとも普遍的と考えた席目（編目）圧痕などからみて、第V-3図に引用するような分布図を作成し、仮説として南島方面からの伝播を想定されたのであった。

しかし近年では韓国釜山市の東三洞貝塚からも網目をもつ組織痕土器の出土が確認され、この韓国南海岸と西北九州との間には西北九州型結合釣針や石鋸装着鉛などを共有する文化的交流が盛んなことが判明しつつある（渡辺1985a）。これらの遺物と分布範囲がかなり重なる組織痕土器についても、南島よりも韓国との関係の方が重要視されるのである。また席目圧痕については、その実体は東日本より伝播した編布圧痕であることが判明し、南島にその源流を求めることは不可能になってきた（渡辺1985b）。



第V-2図 網目の計測部位



第V-3図 鏡山氏による組織痕土器の分布
(★印A：本遺跡、B：羽根戸遺跡)

韓国との関係を重視するようになれば、当然初期稻作の伝播時期や地域の問題と無関係ではありえなくなる。したがって基礎的資料の整備という観点から、玄界灘に面した地域における資料の再検討が重要になってくる。その意味において近年あいついで検出された福岡市羽根戸遺跡例や本遺跡例は、その東北部の限界（現時点での）を示す貴重な資料なのである。

4 おわりに

最後に、本資料調査の機会を与えられた福岡県教育庁文化課の伊崎俊秋氏、および種々御教示くださった佐賀大学講師の木村幾多郎氏に対し、深謝の意を表する次第である。

引用文献

- 鏡山猛 1972 : 原生期の織布 『九州考古学論攷』 413~485頁 東京
渡辺誠 1982 : 組織痕について 『菜畑 分析・考察編』 546~556頁 唐津
渡辺誠 1985a : 西北九州の縄文時代漁撈文化 『列島の文化史 2』 45~96頁 東京
渡辺誠 1985b : 編布の研究 『日本史の黎明』 169~207頁 東京
渡辺誠 1986 : 羽根戸遺跡の組織痕土器について 『福岡市埋蔵文化財調査報告書』 134 95~102頁 福岡
(1987年5月11日 原稿挿受)

※編者註

この稿の原稿は、畠田遺跡の調査が終わってまだ半年も経っていない1987(昭和62)年5月11日には渡辺誠氏よりいただきていた。その後の九州横断道関係報告書の刊行スケジュールにおいて、この畠田遺跡は最終年度に割り振ったため、結局のところ原稿をいただきながら12年もの歳月が経過してしまった。

渡辺氏はこの原稿の後に「組織痕土器研究の諸問題」をまとめられ(*)、その時点での組織痕土器研究のまとめと方向性を示された。福岡県内ではその後の若干の資料増加等(**)もあるが、ここではその当時のままに掲載させていただくこととした。

* 渡辺誠 1991 「組織痕土器研究の諸問題」

『交流の考古学』 三島格会長古稀記念 肥後考古第8号 肥後考古学会

** 朝倉郡朝倉町稗畑遺跡：九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－20－ 1991

朝倉郡朝倉町長田遺跡：九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－30－ 1994

写真1

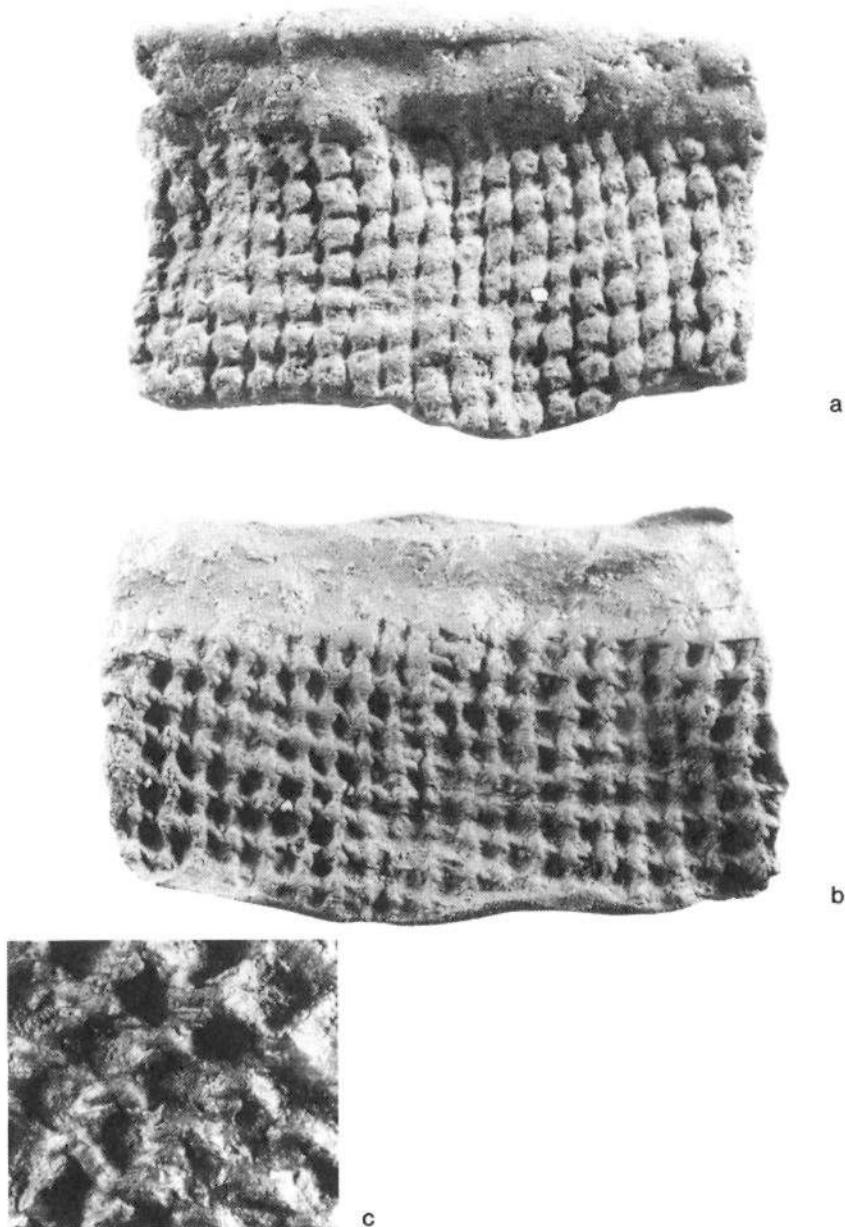


写真1 組織痕土器（a）とモデリング陽像（b）、および結び目（c）
(縮尺 a・b : 実大、c : 2倍大)

VI まとめ

諸般の事情で詳しいまとめを行う時間的余裕がないが、思いつくままに述べて若干のまとめとしたい。

1 縄文時代晚期～弥生時代前期の集落と墓地

畠田遺跡では85軒の竪穴住居跡を検出した。それらの中には45・57号住居跡のように面積が3m²前後しかなく、住居というより単なる竪穴でしかないようなものも含まれるが、ここでは住居として報告してきたところである。それらには土器の全く出土しなかったものもあり、総体に遺物は少なかったが、概ね縄文晚期後半～弥生前期中頃に営まれたものと捉えられる。弥生前期後半頃の土器を出土したものもあったが、それは混入であろう。

85軒はその多くが重複しており、全てが同時併存ではない。いま、ある一時期に同時併存していた住居を抽出できないが、全体を面的に見ると、もちろん単独で存する住居もあるものの、5～6軒が重複した状態で9～10個のグループとして分布していることが看取できる。おそらくそのグループごとに住居の消長があったのではないかとさえ思われるあり方である。そういうならば、ある一時期には10軒前後が併存していたと見ることもできる。

さらには、それら10個ほどのグループは、調査区の中央付近にある42・43号住居跡あたりを中心として環状に分布していると見なされる。これは時間的経過の結果としての偶然的現象であろうか。そうではなく、42号住居跡のあたりは集落形成の当初から広場的な空間が確保されていたのではなかろうか。その広場の中に造られた42号住居跡は該期の畠田集落の中では最も新しい時期と考えられ、そこから出土したのが壺形土器のみであったことも何かしら示唆的である。

縄文晚期後半～弥生前期といえば、わが日本列島における稻作開始の過渡期である。現時点では佐賀県唐津市菜畑遺跡や福岡県糸島郡二丈町曲り田遺跡、福岡市板付遺跡等において、従来の縄文晚期後半～終末とされていた突帯文土器の段階に、石包丁・大型蛤刃石斧・片刃石斧などの大陸系磨製石器、木器、鉄器を伴い、取排水施設を備えた区画された水田で、当初からかなり完成された姿での水田稻作農耕が行われていたことが明らかにされている。そして、その突帯文土器段階を弥生早期と位置づけ、日本列島における食料生産の時代である弥生時代の開始時期をここに置くという説が有力となっている。

突帯文土器甕や精製浅鉢は縄文晚期黒川式以来の土器の系譜として捉えられるが、壺の存在と上記の稻作文化複合の諸要素からすれば、やはり新しい時代の幕開けとして弥生早期が位置

づけられるのは自然であろう。

この畠田遺跡で注目されるのは、その縄文晩期から弥生早期～前期に集落が形成されていることである。そして支石墓を含む墓地も伴っていることである。

住居群のなかでは、34号住居から未製品を含む9個の鏃と、黒曜石・サヌカイトの剝片がごく小さなものも含めてそれぞれ184点と821点出土した。ここで石器製作を行っていたものと思われる。ほかには製品を含めて黒曜石・サヌカイトの剝片が多く出土したのは22号住居から70点、17号住居から47点、15号住居から46点などである。いずれもサヌカイトの方が圧倒的に多い。原材の産地は特定できないが、ともに以外と近くに未知の供給源があるのかもしれない。

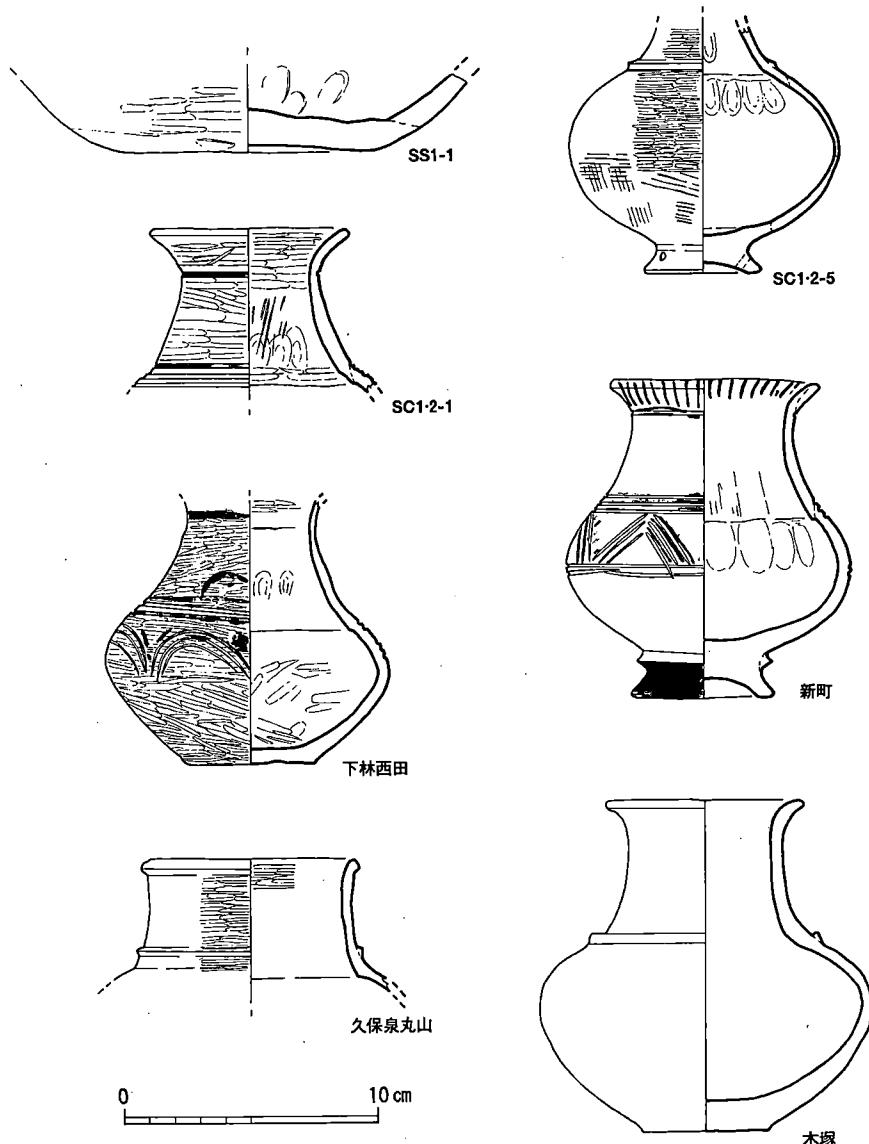
17号住居跡出土の壺には外面口縁下頸部に粋痕があった。この壺は夜臼系の大型品であるが、弥生前期初頭に位置づけられよう。稻作が実際に行われていたかどうかは証明できないにしても、この土器が搬入品でない限り、ここに米が存在したことは実証している。

支石墓は、上石が残存していた1号と、手違いで上石を除去してしまった3号の、合わせて2基は確実であるが、それ以外の2・4・5号についてもおそらく間違いないものと考えている。下部遺構はみな土壙墓であったとみられる。2号支石墓から出土した丹塗り壺の底部については、供獻あるいは伴っていたものが何らかの理由で割れてしまつたまま残っていたと当初は思っていたが、整理の段階で、3号支石墓の下部遺構出土破片、それにその周辺の包含層B層（2・7トレンチ間B層）出土破片と接合した。ここに至つて2号支石墓出土丹塗り壺については、(A)この支石墓を構築する際に古い包含層の土器が混入した、(B)本来はこの支石墓に伴っていたが、支石墓自体がのちに破壊された際に土器の一部が遺存した、という二通りの考え方で捉えざるを得ないこととなった。いまいざれとも判断がつかないが、支石墓群は2・7トレンチ間のB1層の上に構築されたという判断からすれば(B)の方が実状であったかもしれない。この壺の時期をもって、支石墓は弥生早期の曲り田(古)段階に造られたと捉えていたのであるが、伴うということ自体に疑惑が生じた結果となったので、やや曖昧ではあるが、弥生早期から前期にかけての時期に営まれたとしておきたい。あるいは1・2号石棺墓と同じ時期なのかもしれない。

1・2号石棺墓は石棺ではなく、やはり木棺墓とすべきであろう。組合せ木棺を壙に埋置したあと、板材の背後に礫石を置いていた結果がこのように見えているものと理解される。最近の宗像市田久松ヶ浦遺跡例(註1)を見ると、その可能性が強い。

この1・2号石棺墓の時期については棺外から出土した土器が参考になる。彩文で黒塗りの小壺(1)は板付I式に比定して大過ないと考える。これを板付II式に下げて考へる必然性はないであろう。低い脚台の付く小壺(5)はやや特異である。脚台がつくこと、胴部の張りが強いこと、肩部と頸部の境に突帯を貼り付けていること、頸部がかなり細いこと、これらのいずれをとってもこれまでに類例のほとんどないものといってよい。しかしそれでも幾つかは似通つ

た例がある（第205図）。脚台の付く例は糸島郡志摩町新町遺跡の4号支石墓副葬の彩文の壺があり、これは橋口達也氏が板付I式に比定されている（註2）。肩部と頸部の境に突帯を貼り付ける例は久留米市木塚遺跡第1号土壙墓副葬小壺がある。これは報告者は前期後半としているけれども（註3）、供伴した羽状文の小壺を見てもそこまで下げる必要はない。板付I式の範疇で捉えてよいであろう。片岡宏二氏は板付I式期から板付II式期古段階に位置づけている（註4）。



第205図 畑田遺跡出土壺と関連土器〈畑田以外は各報告書より改変転載〉（1/3）

畠田例はこの二例とも器形としては異なっているが、個別の要素としては共通するところがある。この小壺の位置づけは慎重にならざるを得ないが、現時点では板付I式期と捉えておきたい。畠田1・2号石棺墓の時期を弥生初頭の板付I式併行と考えるものである。第205図にはほかに参考として大川市下林西田遺跡の彩文土器(註5)、佐賀市久保泉丸山遺跡の頸部に突帯のある土器(註6)を転載した。

畠田遺跡では縄文晩期後半から集落が形成され始め、弥生早期を経て前期には支石墓と石棺墓(木棺墓)も営まれ、集落は前期中頃まで継続したと考えられる。その後は弥生前期末～中期初頭、弥生終末の土器がIV区を含めてごく少量が出土しているが、遺構は存しない。

なお、余談であるが、朝鮮半島に由来する支石墓が存することに関し、この畠田遺跡の所在する谷の奥部は「白木(しらき)」という地名であることが気になる。全く関係ないのかもしれないが、参考までに記しておく。

2 平安期～中世期の様相

IV区については、7号溝や包含層3層・4層出土土器は一部に奈良時代後半に属する土器もあるが、大半は平安時代に位置づけられる。9世紀前半を主体とし、一部後半にまで及んでいる。須恵器・土師器の土器や瓦、製塩土器、鉄滓等を含む、これだけの遺物包含層が形成されていることは、それを使っていた人々の居住ないし活動していた「主体」が近在することを示している。瓦は平瓦の小破片のみであるが、江戸時代の文献や地元に伝承する寺跡に関係したものである可能性は高いといえよう。おそらく調査区外に存するであろうその遺構の確認は、今後の調査に期待されるところである。

縄文晩期～弥生前期の遺構の上層には古代末～中世期の遺構があった。遺構の密度は高くなかったが、掘立柱建物、土坑、竈、溝、周溝墓、土壙墓と包含層などがあり、そのうちのとくに1・3号土坑、1・2号溝、包含層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲからは多くの土器・陶磁器等が出土した。土師器の小皿と壺の外底面はヘラ切りと糸切りの双方が混在しているものがあり、その成形手法の過渡期にあることがわかる。SR1出土の渡来鏡は最新のものが宋の「元祐通寶」で1086～1093年の鋳造なので、少なくともSR1はそれよりも新しい時期、すなわち11世紀末以降となる。これらも勘案して、上記遺構出土の土器等は11世紀後半から12世紀後半に及ぶ時期のものと思われ、その主体は12世紀中頃前後であると考えられる。平安時代末ではあるが中世の胎動期にあたる。

数多い柱穴群の中から調査時には掘立柱建物は5棟しか確認できなかつたが、まだほかにも存するものと思われる。特に包含層ⅠおよびⅢとした辺りには無数と言ってよいほどの柱穴群があつたので、その中に建物としてまとまるものがあるかもしれない。いま掘立柱建物とした1～5号のうち4号を除く4棟については、北西～南東方向を意識した軸設定がなされている

ようにも見えるが、それは朝倉町才田遺跡(註7)で見られたようなある程度の規則性を持った配置には及ばない。ただ、出土遺物の中に輸入陶磁器が相応に含まれていることは、ここの建物群が、未認定のものがあるとしたらそれも含めて、一般的な民衆層のものではなく、ある程度の有力富豪層の存在を示しているとみてとれよう。

平安時代においてはこの近辺では筑前觀世音寺に寄進された荘園である杷木荘の存在が知られている。その実体はなお不明であるが、この畠田遺跡の輸入陶磁器のあり方は、やや短絡的ではあるけれども、その杷木荘に関与した階層に由来するものと捉えておきたい。

また、1・3号土坑、1・2号溝、柱穴等から総数18点の鉄滓が出土している。鍛冶炉等の遺構は全く見られなかつたが、ここで小鍛冶を行っていたのは間違いないであろう。集落または屋敷地内部において、自給的な生産活動が行われていたことはこの時期の他の遺跡にもほぼ共通する事象のようである。

4号溝と5号溝は北東から南西に伸びる小さな尾根の裾にある。確証はないが、道路の如き遺構に関係するものかもしれない。

註

- 1 宗像市教育委員会 1998『田久松ヶ浦遺跡』—宗像市埋蔵文化財発掘調査説明会資料—
- 2 志摩町教育委員会 1987『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書 第7集
- 3 久留米市教育委員会 1977『木塚遺跡』久留米市文化財調査報告書 第14集
- 4 片岡宏二 1986『弥生時代前期から中期初頭にかけての供獻土器について』
小郡市教育委員会『三国の鼻遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書 第31集
- 5 福岡県教育委員会 1998『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書 第132集
- 6 佐賀県教育委員会 1986『久保泉丸山遺跡』
(九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)) 佐賀県文化財調査報告書 第84集
- 7 福岡県教育委員会 1998『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 48』

【捕 遺】

畠田遺跡出土の木炭について、昭和63年(1988)に社団法人日本アイソトープ協会に放射性炭素年代測定を依頼し、平成1年(1989)3月にその報告を受けていた。その結果は下記のとおりである。[依頼者コード] のKOF6-1は2号支石墓主体部上層、KOF6-2は第7トレンチB層出土の木炭である。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
N-5374	KOF 6-1 NO.11	1590 ± 75 yB.P. (1540 ± 70 yB.P.)
N-5375	KOF 6-2 NO.12	3560 ± 80 yB.P. (3450 ± 80 yB.P.)



第206図 烟田遺跡周辺地形図 (1/5000)

【附編】

——九州横断自動車道関係の事績概要——】

1969(昭和44)年 1月22日	長崎県大村市～大分県日田市間の基本計画決定
1973(昭和48)年10月19日	佐賀県鳥栖市～大分県日田市間の施工命令
1974(昭和49)年	福岡県内全線の分布調査・…194カ所1060000m ² の埋蔵文化財包蔵地 ルート決定により56カ所62000m ² が調査対象
1979(昭和54)年	調査開始
1982(昭和57)年	報告書刊行開始
1988(昭和63)年12月	調査終了
1989(平成 1)年	37地点の一部追加調査
1990(平成 2)年	38地点の一部追加調査
1999(平成11)年	報告書終了

1979(昭和54)年の発掘調査開始から実質的に調査の終わった1988年まで10年、それからさらに1999年の調査報告書の刊行終了まで10年、都合20年間の事業であった。

この間、調査に携わった職員、臨時職員、調査補助員、そして現場作業員、整理作業員を合わせると、九州横断自動車道に関する埋蔵文化財に対してはおそらく1000名に近い人数が関与したこととなろう。

この20年間が単に平坦な道のりとしてのみ経過したわけではないが、こと発掘調査に関しては、特段の大事故もなかったといってよい。その結果として1987(昭和62)年2月5日には鳥栖～朝倉間が開通し、1990(平成2)年3月10日には朝倉～日田間も開通して九州横断自動車道(大分自動車道)の福岡県内部分は全線の供用が開始されたのであった。

調査報告書については、発掘調査期間と併行して刊行したのが15集まで、16集からこの56集まではその後の10年間に作成したものである。調査担当者の異動等もあって必ずしも順調な経過を辿ったとはいえないが、とにもかくにも64カ所の全ての遺跡を網羅して報告した。

この横断道の路線内に存した遺跡を通観すると、旧石器時代から近現代まで全ての時代にわたるといってよいが、全般を通じて特徴的なのは、縄文時代と奈良時代の遺跡が特に多かったということであろう。ほかの時代も含めて、この調査で得られた資料が地域史解明の研究に欠かせないものであることは多言を要しない。今後の更なる研究の展開と、資料の活用が望まれるところである。

いま、この九州横断自動車道に関わる埋蔵文化財の事業が終わるに際して、諸関係機関およびお世話になった多くの皆様に対して深甚の謝意を表します。

以下に、報告書に収録した遺跡名を列記しておく。

『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』

- 1 - 1982 西原A・B遺跡(15B地点)
上々浦遺跡(14地点)
- 2 - 1983 下原遺跡(15A地点)
立野遺跡(I) <B・D・E地区> (11地点)
- 3 - 1984 西原C遺跡(15B地点)
- 4 - 1984 柿原古墳群I <G・H・S地区> (57地点)
- 5 - 1984 立野遺跡(II) <A・D地区(墳墓編)> (11地点)
- 6 - 1986 柿原古墳群II <I地区> (57地点)
- 7 - 1986 小郡小尻遺跡(1地点)
- 8 - 1986 立野遺跡(III) <C地区> (11地点)
- 9 - 1987 塔ノ上遺跡(19A地点)
- 10 - 1987 井上薬師堂遺跡(I) <谷地区> (5地点)
- 11 - 1987 前伏遺跡(2地点)
- 12 - 1987 柿原遺跡群III <E・F地区> (57地点)
- 13 - 1988 薬師堂東遺跡(6地点)
- 14 - 1988 宮原遺跡I <B・C地区> (11地点)
- 15 - 1988 大板井遺跡(3・4地点)
- 16 - 1990 高松家墓地(6地点)
- 17 - 1990 宮原遺跡II <A I地区> (11地点)
- 18 - 1990 上の原遺跡I (21D地点)
- 19 - 1990 柿原遺跡群IV <D地区> (57地点)
- 20 - 1991 上ノ宿遺跡(35A地点)
恵蘇山遺跡(35B地点)
稗畑遺跡(36地点)
- 21 - 1991 柏木宮原遺跡(39A地点)
中町裏遺跡(39BC地点)
- 22 - 1992 鎌塚遺跡(30地点)
山ノ神遺跡(31地点)
鎌塚西遺跡(工事用道路部分)
- 23 - 1992 山田遺跡群(58地点)
- 24 - 1992 大迫遺跡(37地点)

- 25- 1993 鞍掛遺跡(杷木I.C.A地点)
 前田遺跡(杷木I.C.B地点)
 西ノ追遺跡(杷木I.C.C地点)
 -26- 1993 宮巡遺跡(8地点)
 春園遺跡(9地点)
 十三塚遺跡(10地点)
 -27- 1993 上の原遺跡Ⅱ(21D地点)
 -28- 1994 狐塚南遺跡(22C地点)
 -29- 1994 妙見墳墓群(29B地点)
 堤古墳(工事用道路部分)
 -30- 1994 長田遺跡(33地点)
 -31- 1994 高原遺跡(16地点)
 口ノ坪遺跡(17地点)
 -32- 1994 治部ノ上遺跡(22A・B地点)
 座禪寺遺跡(23地点)
 -33- 1995 上の原遺跡Ⅲ(21D地点)
 -34- 1995 長島遺跡Ⅰ〈C地区〉(27地点)
 -35- 1995 外之隈遺跡Ⅰ〈墳墓編〉(38地点)
 -36- 1995 大庭久保遺跡(21C地点)
 -37- 1995 柿原Ⅰ縄文遺跡(柿原遺跡群V)(57地点)
 -38- 1996 井上薬師堂遺跡(Ⅱ)(5地点)
 -39- 1996 中道遺跡(20地点)
 石成久保遺跡(19C・D地点)
 大還端遺跡(19B地点)
 -40- 1996 外之隈遺跡Ⅱ〈集落編〉(38地点)
 -41- 1996 大谷遺跡(43地点)
 柿原遺跡群VI(57地点)
 -42- 1996 天園遺跡(46地点)
 夕月遺跡(46地点)
 上池田遺跡(47地点)
 -43- 1997 クリナラ遺跡(杷木I.C.D地点)
 若宮遺跡(杷木I.C.E地点)
 -44- 1997 笹隈遺跡(44地点)

- 45- 1997 志波桑ノ本遺跡(40地点)
-46- 1997 宮原遺跡Ⅲ〈A II・D地区〉(11地点)
-47- 1997 西法寺遺跡(21A地点)
 経塚遺跡(21B地点)
-48- 1998 才田遺跡(24地点)
 東才田遺跡(25地点)
-49- 1998 楠田遺跡(51地点)
 小覚原遺跡(52A地点)
 二十谷遺跡(52B地点)
 陣内遺跡(53地点)
 上野原遺跡(54地点)
-50- 1998 原の東遺跡 I (29A地点)
-51- 1998 宮原遺跡IV〈D地区〉(11地点)
-52- 1998 宮原遺跡V(11地点)
-53- 1999 原の東遺跡 II (29A地点)
-54- 1999 金場遺跡(34地点)
-55- 1999 長島遺跡 II (27地点)
-56- 1999 畑田遺跡(48地点)



Photo. 6 調査風景 4

第2表 土製品・石器法量表

(1)

挿図番号	名 称	出 土 遺 構	材 質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
第95図	1 紡錘車	30号住居跡	土製	47.8	46.7	8.5	24	
	2 棒状	包含層Ⅶ下層	土製	35	13.5	10.3	4.9	2トレス東
	3 円盤	包含層Ⅶ下層	土製	50	46	10	26.1	縄文晚期鉢片
	4 円盤	Ⅲ区検出時	土製	45.2	41	8	16.6	ク
	5 円盤	Ⅲ区検出時	土製	43.4	40.2	10	18.4	ク
第96図	1 石包丁	6号溝最下層	頁岩か	39		4.5	7.7	包含層VIか
	2 磨製石斧	Ⅲ区検出面	安山岩か	53			35	
	3 磨製石斧	包含層Ⅶ?	砂質片岩	127	82.5	44	723.6	農道下包含層
	4 磨製石斧	2号溝	泥質片岩	121	80	37.5	579.1	2号住居の北
第97図	1 石包丁形石器	5・7トレンチ間B1層	片岩	99.8	61	12.4	80.4	磨いた部分あり
	2 石包丁形石器?	1号支石墓西側包含層	片岩	111	61.8	18.6	141	
	3 石包丁形石器?	包含層Ⅶ下層	片岩	75	79.2	9.6	73	2トレス東
	4 石包丁形石器?	4・7トレンチ間包含層	片岩	65	31.8	5	16.5	
第98図	1 打製石鎌	11号住居跡	サヌカイト	18.5	15	3	0.5	
	2 打製石鎌	15号住居跡	黒曜石	20.5	13.5	5.5	1.8	未製品か
	3 打製石鎌	15号住居跡	サヌカイト	20	15.5	5.5	1	完形
	4 打製石鎌	15号住居跡	サヌカイト	22	19.5	5	1.7	未製品か
	5 打製石鎌	17号住居跡	サヌカイト	12	21	3	0.7	
	6 打製石鎌	17号住居跡	サヌカイト	15	18.6	1.7	0.6	剥片鎌
	7 打製石鎌	19号住居跡	サヌカイト	16.5	14.5	2.5	0.3	完形
	8 打製石鎌	22号住居跡	サヌカイト	12	11	3	0.4	
	9 打製石鎌	22号住居跡	サヌカイト	14	15	3	0.5	
	10 打製石鎌	32号住居跡	サヌカイト	18	14	2.5	0.4	
	11 打製石鎌	34号住居跡	黒曜石	14	21	5.5	1.2	
	12 打製石鎌	34号住居跡	黒曜石	16	16	4.5	0.9	
	13 打製石鎌	34号住居跡	黒曜石	20.5	10	3.5	0.7	剥片
	14 打製石鎌	34号住居跡	黒曜石	12	10.5	3	0.3	
	15 打製石鎌	34号住居跡	サヌカイト	10.5	12.5	3	0.3	
	16 打製石鎌	34号住居跡	サヌカイト	16	14	4.5	0.5	完形
	17 打製石鎌	34号住居跡	サヌカイト	14	22	3.5	0.9	
	18 打製石鎌	34号住居跡	サヌカイト	17.5	15	2.5	0.4	
	19 打製石鎌	34号住居跡	サヌカイト	20	19.5	6.4	2.2	未製品か
	20 打製石鎌	42号住居跡	サヌカイト	18	16	3	0.5	完形
	21 打製石鎌	46号住居跡	黒曜石	20	17.4	3.2	0.8	剥片
	22 打製石鎌	4号土坑	サヌカイト	12.5	11.5	3	0.3	
	23 打製石鎌	16~19号住居跡上面	サヌカイト	20	18	3.5	1	
	24 打製石鎌	33号住居跡の北側	サヌカイト	34	19.5	6.5	3.6	

挿図番号	名 称	出 土 遺 構	材 質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備 考
第98図	25 打製石鎌	P856	サヌカイト	12	10.5	2.5	0.2	
	26 打製石鎌	P856	サヌカイト	13	17	3.5	0.6	
	27 打製石鎌	P1040	サヌカイト	13.5	13	2.5	0.4	
	28 打製石鎌	P787	サヌカイト	13.5	11.5	2.5	0.4	
	29 打製石鎌	P20	サヌカイト	20	16	7	2.2	
	30 打製石鎌	P426	サヌカイト	29	23	9	6.2	未製品
	31 打製石鎌	包含層Ⅲ下層	黒曜石	23	16.5	4.5	1	完形
	32 打製石鎌	包含層Ⅲ下層	黒曜石	24	17.5	4	1.5	2トレ東
	33 打製石鎌	包含層Ⅲ上層	黒曜石	20	17	3	0.6	剥片鎌
	34 打製石鎌	包含層Ⅲ	黒曜石	16	16	4	1.1	1トレ東
	35 打製石鎌	5・7トレンチ間F層	黒曜石	14	12	3	0.2	完形
	36 打製石鎌	5・7トレンチ間C層	黒曜石	25	15.5	3	1.2	完形
	37 打製石鎌	2・7トレンチ間B2層	黒曜石	14	11.5	2	0.2	
第99図	38 打製石鎌	2・7トレンチ間B2層	サヌカイト	23.5	18.5	5.5	1.6	
	39 打製石鎌	2・7トレンチ間B層	黒曜石	19.5	16	3.5	0.9	
	40 打製石鎌	2・7トレンチ間B層	黒曜石	21.5	22	8.5	3.6	未製品か
	41 打製石鎌	2・7トレンチ間B層	サヌカイト	24.1	20	5.5	2.6	未製品か
	42 打製石鎌	7トレンチAB層	サヌカイト	27.7	23	3.8	1.9	
	43 打製石鎌	包含層VI	サヌカイト	15	21	4	0.8	住51・52付近
	44 打製石鎌	包含層VI	サヌカイト	25.6	18.1	6.8	2.8	
	45 打製石鎌	包含層V	サヌカイト	22	16.5	4.5	1.1	
	46 打製石鎌	包含層IV	黒曜石	17	15	5.5	0.9	
	47 打製石鎌	包含層IV	サヌカイト	13.5	24	3.5	1	
	48 打製石鎌	包含層IV	サヌカイト	18	14	5.5	1.3	
	49 打製石鎌	包含層IV	サヌカイト	17.5	18	2.5	0.6	
	50 打製石鎌	包含層IV	サヌカイト	11	16.5	3	0.3	
	51 打製石鎌	包含層IV	サヌカイト	9.5	13	2	0.1	
	52 打製石鎌	包含層III	サヌカイト	19.5	16	4	0.7	
	53 打製石鎌	1号石棺墓周辺	サヌカイト	26	15.5	5	1	
	54 打製石鎌	1号石棺墓周辺	サヌカイト	17	17.5	3	0.5	
	55 打製石鎌	4号土坑の南側	黒曜石	28.5	18.5	5	1.6	スクレイバーか
	56 打製石鎌	4号土坑の南側	サヌカイト	19	14	4	1.1	
	57 打製石鎌	2トレンチ・1号支石墓間	黒曜石	17.5	20.4	4	1.1	
	58 打製石鎌	4・7トレンチ間	サヌカイト	28	15	3.5	1	
	59 打製石鎌	4・7トレンチ間	サヌカイト	27.5	14.5	3.5	1.2	
	60 打製石鎌	2号溝	サヌカイト	25	22	6.3	3.3	スクレイバーか
	61 打製石鎌	旧III区	サヌカイト	33.5	21	6	3.3	
	62 打製石鎌	旧III区	サヌカイト	13	13.5	3	0.4	

挿図番号	名 称	出 土 遺 構	材 質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重 さ (g)	備 考
第99図 63	打製石鏃	2号周溝墓周溝内	黒曜石	15	12	3	0.3	
64	トロトロ石器	包含層Ⅲ下層	チャート	54.7	36	6	13	
第100図 65	使用剝片	17号住居跡	黒曜石	33.5	23.5	8	5.3	
66	使用剝片	29号住居跡	黒曜石	4	18.7	4.7	2.8	
67	使用剝片	67号住居跡	黒曜石	19.4	18.2	3.1	1	
68	スクレイパー	22号住居跡	サヌカイト	84.4	37.6	13.4	43.8	
69	ポイント?	P713	黒曜石	30.7	29.8	8	5.2	
70	使用剝片	P987	黒曜石	31.2	21.6	5.8	3.5	
71	使用剝片	P357	黒曜石	31	11.8	2.4	0.9	
72	使用剝片	P736	黒曜石	18.2	15.4	7.5	2.5	
73	使用剝片	P813	黒曜石	16	9.7	3.7	0.6	
74	スクレイパー	包含層Ⅲ下層	黒曜石	25	15.4	7.5	2.5	2トレ東
75	錐?	包含層Ⅲ	黒曜石	10.6	21.2	6.4	1.4	2トレ東
76	使用剝片	包含層Ⅲ下層	黒曜石	34.9	12.8	3.5	1.4	2トレ東
77	使用剝片	包含層Ⅲ下層	黒曜石	50.2	16.2	5.8	4.2	
78	使用剝片	包含層Ⅲ上層	黒曜石	37	15.6	5.8	3.8	
79	スクレイパー	包含層Ⅲ	黒曜石	26.4	27.7	11	8.1	2トレ東
80	スクレイパー	包含層Ⅲ下層	黒曜石	30.5	31.8	7.2	5.4	2トレ東
81	使用剝片	包含層Ⅲ下層	黒曜石	14	7	1.7	0.1	
82	スクレイパー	包含層Ⅲ下層	サヌカイト	83.2	50.6	15	58	
第100図 83	使用剝片	包含層Ⅶ	黒曜石	28	37.7	8.4	7.8	
84	使用剝片	2・7トレンチ間B2層	黒曜石	44.3	25.8	7.9	7.1	
85	使用剝片	1号支石墓周辺	黒曜石	45	18.4	6.4	4.5	
86	使用剝片	2トレンチ・1号支石墓間	黒曜石	32.2	12.7	4.2	1.1	
87	スクレイパー	2・7トレンチ間B3層	サヌカイト	19	38	6.2	4.2	
88	スクレイパー	1トレンチ内	サヌカイト	32.2	49.8	14.4	14.5	
89	スクレイパー	2トレンチ内	サヌカイト	43.8	73	17	55.1	
90	使用剝片	1号支石墓周辺	黒曜石	48.2	16	6	3.6	
91	使用剝片	旧Ⅲ区	黒曜石	25	15.3	7.8	1.9	
92	使用剝片	旧Ⅲ区	黒曜石	26	14.2	3.6	0.9	
93	使用剝片	2トレンチ・1号支石墓間	黒曜石	25	12.4	3.6	0.8	
94	スクレイパー	4号住居跡周辺	チャート	42.4	27.7	11	12.7	
95	スクレイパー	旧Ⅲ区	サヌカイト	28.6	23.7	8.2	5.7	
96	使用剝片	旧Ⅲ区	黒曜石	20.6	13.1	3	0.5	
97	使用剝片	2トレンチ内	黒曜石	20.3	15.7	3	1	
98	スクレイパー	包含層Ⅳ	サヌカイト	22	18	5	1.9	
99	スクレイパー	包含層Ⅲ	黒曜石	19	16.1	6.2	1.2	
100	使用剝片	包含層Ⅲ	黒曜石	24.6	17.6	4	1.6	

挿図番号	名 称	出 土 遺 構	材 質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
第101図 101	錐	1号溝	黒曜石	25.8	15	3.8	1.2	
102	錐	1号溝	サヌカイト	26.2	12	7.2	1.6	
103	スクレイパー	2号溝周辺	サヌカイト	35	28.9	10	10.5	
104	スクレイパー	4号溝	サヌカイト	23	23.7	4	2.5	
105	使用剝片	4・7トレンチ間	黒曜石	22.5	8.7	4.2	0.5	
106	スクレイパー	4・7トレンチ間	サヌカイト	110.2	147.6	30	468.3	
107	スクレイパー	包含層Ⅶ	サヌカイト	58	36.8	12.2	30.4	
108	スクレイパー	6号溝の南側	チャート	46.5	35.9	12.5	21.4	
109	スクレイパー	6号溝の南側	サヌカイト	66.6	29	12.3	19.8	
110	スクレイパー	採集	黒曜石	23	10.4	4.2	0.7	
111	スクレイパー	採集	黒曜石	31.6	21.7	6.2	4.5	
第103図 1	打製石斧	2号住居跡床面	片岩	60.2	53.6	13.4	65.7	
2	打製石斧	15号住居跡	片岩	112	64.6	10.2	111.1	局部磨製
3	打製石斧	25号住居跡下層	片岩	103	46	8.8	61.5	
4	磨製石斧	30号住居跡	泥質片岩	92.2	47.4	24.3	142.6	
5	打製石斧	50号住居跡	砂質片岩	172	50.5	20	271.3	局部磨製
6	打製石斧	70号住居跡	片岩	72.2	53.5	10.6	45.1	
7	打製石斧	51~57号住居跡周辺	片岩	61.2	31.6	8.4	24.9	局部磨製
8	打製石斧	P884	片岩	41	55	6	19.4	
9	打製石斧	P711	片岩	100	56.7	14.8	117.6	局部磨製
10	打製石斧	P361	片岩	106.7	52.7	19	165.7	局部磨製
11	打製石斧	P463	片岩	33	42	8	15.2	局部磨製
12	打製石斧	P870	片岩	128	54.6	17	138.3	
13	打製石斧	P977	片岩	124	44	17.5	111.8	局部磨製
第104図 14	打製石斧	包含層Ⅶ下層	片岩	57.6	63.6	8	52.6	
15	打製石斧	包含層Ⅶ下層	片岩	103	96.6	15.5	236.3	局部磨製
16	磨製石斧	包含層Ⅶ下層	片岩	123.4	43.8	14.6	123.5	1トレ東
17	打製石斧	包含層Ⅶ最下層	片岩	157	80.4	18.4	376.5	
18	打製石斧	包含層Ⅶ最下層	片岩	131.5	63.4	21.2	210.4	局部磨製、2トレ東
19	打製石斧	2・7トレンチ間A・B層	片岩	144	71	21	402.2	局部磨製
20	磨製石斧	2・7トレンチ間A・B層	片岩	80.5	41.2	14.6	78.1	
21	磨製石斧	2・7トレンチ間B1層	安山岩	20	25	16	7.2	
22	磨製石斧	2・7トレンチ間B2層	蛇紋岩	76	42	17	66.2	
23	打製石斧	包含層VI最下部	片岩	72	54.5	18.4	83.2	
24	打製石斧	包含層V	片岩	96.6	62.7	12.4	127.4	局部磨製
第105図 25	打製石斧	1号支石墓の西側	片岩	101.6	65	22.8	206.9	
26	打製石斧	70号住居跡の東側	片岩	126.21	57	15.2	150.1	局部磨製
27	打製石斧	旧II区段落ち部	片岩	146.5	83.6	18.7	373.7	局部磨製

挿図番号	名 称	出 土 遺 構	材 質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
第105図 28	打製石斧	36号住居跡の北西部	片岩	156	57	17	208.9	局部磨製
29	打製石斧	2トレンチ内	片岩	129.8	48.4	12.6	98.7	局部磨製
30	磨製石斧	1号溝	片岩	104.2	40	11.2	82.9	
31	打製石斧	SX 3	片岩	109.2	61.4	15.6	125.8	局部磨製
32	磨製石斧	6号溝(26号住居跡東北側)	片岩	60	37	11	39	
33	打製石斧	旧Ⅲ区	片岩	40	50	7	15.7	局部磨製
34	打製石斧	旧Ⅲ区	片岩	74	49.7	10.8	59.5	
35	打製石斧	旧Ⅱ区段落ち部	片岩	72	58.6	13.6	73.4	局部磨製
36	打製石斧	不明	片岩	91.5	61.7	20.5	186.3	局部磨製
第106図 1	すり石	1号住居跡	安山岩	34.4	28.4	22	25.3	
2	すり石	1号住居跡	頁岩?	40.3	26.4	18.7	29.2	
3	すり石	2号住居跡	安山岩	43.4	35	29.6	55.1	
4	すり石	2号住居跡	安山岩	42.3	33.4	26.8	52	
5	すり石	2号住居跡	安山岩	40.2	33.3	22	41.5	
6	すり石	2号住居跡	硬砂岩	60.3	49	61	212.6	
7	すり石	15号住居跡	安山岩	47.3	29.1	26.3	48.8	
8	すり石	15号住居跡	安山岩	42.4	33.3	24.5	43.3	
9	すり石	17号住居跡	安山岩	39.8	32.6	24.5	27.7	
10	すり石	22号住居跡	頁岩?	49.5	30.6	27.9	56.6	
11	すり石	22号住居跡	安山岩	39.7	32.3	24.2	45.8	
12	すり石	22号住居跡	安山岩	92	78.6	46.8	501.4	
13	すり石	25号住居跡下層	頁岩?	78	31	23	71.8	
14	すり石	25号住居跡上層	安山岩	47.4	31	25.4	52.6	
15	すり石	26号住居跡下層	安山岩	34.4	22.4	15	15.1	
16	すり石	41号住居跡	安山岩	99.3	67.7	17.3	197.6	台石か
17	すり石	48号住居跡	安山岩	37.6	31	24.8	37.6	
18	すり石	49号住居跡	安山岩	133.5	104	48.5	1033.6	(叩石)
19	すり石	49号住居跡	安山岩	53.2	41.5	35.3	107.6	
20	すり石	56号住居跡	安山岩	41.4	33.6	21.7	38.5	
21	すり石	56号住居跡	安山岩	31	30.4	21	24.5	
22	すり石	75号住居跡炉跡?	凝灰岩	60.7	39.3	30.6	68.1	
23	すり石	75号住居跡炉跡?	安山岩	96	85.5	52.3	637.1	赤色顔料付着
24	すり石	75号住居跡炉跡?	安山岩	38.7	31.8	22.4	37.9	
25	すり石	75号住居跡	安山岩	38	30.6	24.3	32.7	
26	すり石	75号住居跡炉跡?	安山岩	57	38.4	27.2	83.7	錘かも
27	すり石	75号住居跡炉跡?	頁岩?	53.2	35	27.7	70.1	
28	すり石	75号住居跡炉跡?	安山岩	56.8	32.6	23.3	54.8	
29	すり石	75号住居跡炉跡?	安山岩	49.7	36.4	19.2	43.3	

挿図番号	名 称	出 土 遺 構	材 質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
第107図 30	すり石	75号住居跡炉跡?	安山岩	46.8	40	26	64.2	(叩石)
31	すり石	75号住居跡炉跡?	凝灰岩	44.5	35.5	24	40.5	
32	すり石	包含層Ⅲ	安山岩	78.8	67.6	28.8	202.6	(叩石)、2トレス
33	すり石	包含層Ⅲ	安山岩	77.4	97	66.3	777.1	
34	すり石	1号支石墓の西側	安山岩	53.6	39.8	19.3	64	
35	すり石	1号支石墓の西側	安山岩	42.1	31.8	19.6	30.2	少し風化
36	すり石	1号支石墓の西側	安山岩	37.4	33.9	22.7	35.4	
37	すり石	2号支石墓主体部上層	凝灰岩	28.3	24	21	13.8	
38	すり石	1号石棺墓周辺	安山岩	48.4	35.8	26.7	64.1	
39	すり石	2・7トレンチ間B2層	安山岩	42.4	38	29	62.6	
40	叩石	5・7トレンチ間B1層	安山岩	59.7	57.7	30.9	154.4	
41	叩石	5・7トレンチ間B1層	安山岩	102.5	94.2	45	731.2	(すり石)
42	叩石	5・7トレンチ間B1層	安山岩	101.5	96	45.3	636.5	(すり石)
43	すり石	5・7トレンチ間B1層	安山岩	114.8	97.5	53	797.8	
44	すり石	5・7トレンチ間B1層	安山岩	67	45.6	36.8	163.6	
45	すり石	2・7トレンチ間B2層	安山岩	75.2	57	31.4	168	
46	叩石	2トレンチA・B層	安山岩	76.6	59.8	25.2	192.8	
第108図 47	すり石	2・7トレンチ間A・B層	安山岩	115	99.6	66.2	1062.9	
48	すり石	2・7トレンチ間A・B層	安山岩	91	57	45.4	332.1	
49	すり石	2・7トレンチ間A・B層	安山岩	120.4	113	78	1537.7	
50	叩石	P987	頁岩?	108.3	38.4	33.6	214.6	
51	すり石	P785	安山岩	50.8	42	38.5	110.6	
52	すり石	P783	安山岩	59.2	38.8	22.6	73.6	やや風化
53	叩石	P503	安山岩	67.4	66.7	25.9	142.4	
54	叩石	P791	凝灰岩	88	104	43.8	423.6	(すり石)
55	すり石	P748	安山岩	98.3	70	30	230.8	
56	すり石	P1044	玄武岩?	92	115.5	56.9	778.9	
57	すり石	6号溝南側	安山岩	124.3	96.6	55	963.3	(叩石)
58	すり石	6号溝南側	安山岩	119.5	98	36	629.3	(叩石)
59	すり石	SX 3	安山岩	62.3	41.4	29.3	110.4	
第109図 60	すり石	旧Ⅲ区	安山岩	115.8	81	61.9	875.1	
61	叩石	旧Ⅲ区	頁岩?	107.1	72.1	29.2	363.1	
62	すり石	旧Ⅲ区	安山岩	119.7	87	59.2	796.7	
63	すり石	旧Ⅲ区	安山岩	80.8	101	44	590.2	
64	すり石	包含層Ⅳ	安山岩	101.4	98.5	61	785.5	
65	すり石	包含層Ⅳ	安山岩	70.9	100.5	49.9	485.9	(叩石)
66	すり石	包含層Ⅳ	安山岩	62	36.7	29.5	96.3	
67	すり石	包含層Ⅲ	安山岩	63.7	65	53.2	311.2	

挿図番号	名 称	出 土 遺 構	材 質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
第109図 68	すり石	旧Ⅲ区	安山岩	78.6	49.5	27.7	153.4	(叩石)
69	すり石	SR 1	頁岩?	67	101	56	411.4	(叩石)
70	すり石	3号土坑	安山岩	26.9	24.8	20.9	18.9	
71	すり石	3号土坑	凝灰岩?	39.2	31.8	24	28.3	
72	すり石	3号土坑	安山岩	46.6	40.2	31	81.9	
73	すり石	5号土坑	安山岩	37.7	32.3	26.3	42.9	
74	叩石	5号溝	安山岩	137.6	74	37.6	472.2	かなり風化
第110図 75	すり石	1号溝	頁岩?	109.6	99.8	24	401.4	(叩石)
76	すり石	6号溝(3号土坑の西)	安山岩	95.7	87.8	75	875.8	
77	叩石	不明	凝灰岩?	131.3	121.8	92.4	1010.6	
第111図 1	砥石	31号住居跡	砂岩	101	95	14	142.4	中砥
2	砥石	59号住居跡	砂岩	35	30	20	20	中砥
3	砥石	包含層V	砂岩	40	33	18	28.2	中砥
4	砥石	包含層V	砂岩	79	66	32	204.3	荒砥
5	台石	5号住居跡	玄武岩?	64	52	19	103.8	
6	台石	56号住居跡	凝灰岩?	124.2	104.9	37	734.2	
7	台石	包含層Ⅶ下層	安山岩	77.2	59.5	18.3	131.3	(すり石)、2トレ東
8	台石	17号住居跡	花崗岩	223	123.3	75	3060	
9	不明	包含層Ⅶ下層	花崗岩	29	15	7	7.4	
10	台石	75号住居跡炉跡?	頁岩?	206.5	160	46	2507.3	
11	台石	包含層Ⅸ	安山岩	141.6	90	42.8	604.9	2トレ東
12	台石	59号住居跡	凝灰岩?	240.2	173	84	3240	(砥石)
13	台石	包含層Ⅸ下層	安山岩	240	153	56.6	1741.2	2トレ東、被熱
14	台石	包含層Ⅸ下層	安山岩	222	170	84	4840	1トレ東
15	台石	SX 2	玄武岩?	302.8	124.4	57.7	3280	
16	台石	2・7トレンチ間B2層	安山岩	225.3	188.4	77.2	3680	
17	台石	7トレンチD層	玄武岩	283.1	232	62.4	5690	
第113図 18	台石	包含層Ⅹ	安山岩	192	100.8	61	1161.7	2トレ東
19	台石	5・7トレンチ間F層	安山岩	125.6	127.4	34.2	783.3	
20	台石	5・7トレンチ間D・F層	花崗岩?	102.3	129.8	45	821.6	
21	台石	5・7トレンチ間A・B層	安山岩	150.3	123	33.2	704.4	
22	台石	5・7トレンチ間B2層	安山岩	181	119.4	45	1348.2	
23	台石	2トレンチB層	玄武岩?	165	103.5	76	1878.1	被熱
24	台石	包含層V	安山岩	66.4	47	30	120.5	
25	錘	32号住居跡	片岩	58	48.2	6.6	30	
26	すり石	16号住居跡	軽石	112.4	84	35.4	58.9	

挿図番号	名 称	出 土 遺 構	材 質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備 考
第169図 1	錘	1号溝	土製	47.2	11.8		4.8	口径3.5~4.5mm
2	錘	1号溝	土製	32	13		4.5	口径4.2~5.0mm
3	錘	1号溝	土製	31.7	11.2		3.3	口径2.8~4.0mm
4	錘	P880	土製	27.5	11		2.7	口径3.0~3.4mm
5	錘	包含層Ⅰ	土製	51	12.3		5	口径3.5~4.2mm
6	錘	包含層Ⅲ	土製	45.9	10		3.6	口径3.0~3.2mm
7	不明	包含層Ⅲ	土製	37	35	20	12.7	
第175図 1	砥石	1号溝	片岩	65	52	12	41.9	(すり石)
2	砥石	2号溝南方上層	片岩	72	42	10	39.3	(すり石)
3	砥石	2号溝南方上層	砂岩	122	92	64	895.3	中砥
4	砥石	4号溝	凝灰岩	52	28	23	44.8	仕上砥
5	砥石	1号土坑	砂岩	123	61.6	64	585.1	中砥
6	砥石	包含層Ⅰ	頁岩?	38	21	7	6.7	(すり石)
7	砥石	包含層Ⅰ	片岩	84	39	14.8	69.8	(すり石)
8	砥石	包含層Ⅰ	晶質石灰岩	92	64	41	266.2	仕上砥
9	砥石	包含層Ⅲ	凝灰岩	53	28	30	53.8	仕上砥
10	砥石	包含層Ⅲ	凝灰岩	33	20	21	15	仕上砥
11	砥石	包含層Ⅳ	砂岩	45	28	30	48.9	中砥
12	砥石	P179	砂岩	187	123	82	2435.6	中砥
第176図 13	台石	1号溝東端	安山岩	154	127	41.8	1136.8	(叩石)
14	台石	1号溝東端	安山岩	90.6	57.9	28.2	213.3	
15	台石	2号溝南方上層	玄武岩?	151.4	116.8	35	949	
16	台石	2号溝南方上層	安山岩	142.6	121.8	33.2	551.3	
17	台石	2号溝南方上層	安山岩	134	89.4	59.2	992.7	被熱
18	台石	2号溝南方上層	安山岩	148.8	93.4	70.5	1000.1	被熱
19	台石	2号溝南方上層	玄武岩?	114	94.3	74	1151.6	
20	台石	6号溝	安山岩	110.6	79	44.8	473.1	
21	台石	6号溝	安山岩	73.4	47.8	45.8	251.1	
22	すり石	P192	凝灰岩	51	54.4	17.5	68.1	
23	すり石	P442	凝灰岩	57	59.3	19.4	97.6	
第177図 24	台石	SR 1	花崗岩	125	97	89	1298.5	
25	台石	包含層Ⅰ	玄武岩?	143.8	98.5	54.7	1167.2	
26	すり石	包含層Ⅰ	片岩	86	55	19.8	121.4	(砥石)
27	台石	包含層Ⅲ	安山岩	119.4	96	43	691.3	被熱
28	すり石	包含層Ⅲ	片岩	124.1	58.7	14.6	179.7	鉄錆付着
29	台石	包含層Ⅳ	安山岩	138.3	114	81.6	1738.7	
30	台石	旧Ⅲ区	安山岩	105	97.2	26.2	356.6	

挿図番号	名 称	出 土 遺 構	材 質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
第177図 31	台石	旧Ⅲ区	安山岩	100.7	98	41	519.3	
32	台石	旧Ⅲ区	凝灰岩?	143.5	104	38	731.9	
第178図 33	砥石	2号溝南方上層	砂岩	195	85	59	1228.8	中砥
34	台石	旧Ⅲ区	玄武岩?	223	128	54	1850.5	被熱
35	台石	旧Ⅲ区	凝灰岩?	188.3	154	90.4	2676.2	被熱
第179図 36	すり石	検出面	片岩	99	73.4	15.4	154.5	(錘)
37	すり石?	P631	頁岩?	14.7	13.3	5.9	1.6	
38	すり石?	包含層Ⅰ	蛇紋岩?	18	13.4	5	1.9	
39	すり石?	包含層Ⅳ	不明	14.2	13.6	7.9	2.3	
40	すり石?	2号溝周辺	不明	17.2	15	5.7	2.3	
41	浮子?	旧Ⅲ区	軽石	37.6	31.3	10.8	5	
42	すり石?	P624	軽石	76	66	23	16.9	
43	すり石?	包含層Ⅲ	軽石	65	46	15.4	31.3	
44	石塔(相輪)	包含層Ⅳ	凝灰岩	191	103		1433.6	
[IV区]								
第200図 11	棒状	4号溝	土製	98	25	23	46.2	土師器
12	円盤	5号溝	土製	46	44	7.2	16.3	縄文晚期鉢片
13	円盤	5号溝	土製	45.5	40.4	6.5	13.2	縄文晚期鉢片
14	円盤	3層下層	土製	28.5	28.5	8	6.1	土師質
15	不明	7号溝上層	土製	21.4	17	13.8	4.2	土師質
第201図 1	打製石斧	5号溝	片岩	129	69	8.6	125.9	局部磨製
2	打製石斧	5号溝	片岩	94	66.7	12.8	116.4	
3	打製石斧	5号溝	片岩	85.6	37.8	7	26.1	
4	すり石?	3層下層	片岩	59	41.4	8	29.6	
5	打製石斧	7号溝	片岩	103	55.5	17.5	99.1	
6	打製石斧	7号溝	雲母片岩	143.4	74.4	18	265.7	脆い
7	台石	6号溝	玄武岩?	128	88	58	747.9	(すり石)
8	砥石	3層下層	粘板岩	72	39	25	74.7	仕上砥
9	砥石	現代溝	砂岩	55	52	38	104.6	中砥か
10	すり石?	5号溝	砂岩	43	49	15	16.6	
11	すり石?	5号溝	安山岩	47	28	16	18.9	

挿図番号	名 称	出 土 遺 構	材 質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備 考
第201図 12	すり石	表採	安山岩	108	99	44	708.5	(叩石)
13	叩石	7号溝上層	安山岩	71	65		407.7	球形
14	すり石	3層下層	頁岩?	71	59	32	195.3	
15	すり石	3層下層	安山岩	63	57	30.8	163.3	
16	すり石	4層上層	安山岩	53	23	17	32.9	
17	すり石	7号溝	安山岩	42	31	28	48.8	
18	すり石	3層上層	頁岩?	24	23	11.8	9.4	
19	すり石	11トレンチ	安山岩	35	22	14.5	15.4	
20	すり石	6号溝	玄武岩	60	51	15	47.4	(台石)
21	すり石	6号溝	玄武岩	65	33	13	37.8	(台石)
22	すり石	3層下層	玄武岩	62	38	11	27.7	(台石)
23	すり石	3層上層	玄武岩	58	24	10.5	16.7	(台石)
24	すり石	3層?	玄武岩	60	39	25	60.2	(台石)
25	すり石?	3層下層	軽石	45	50	31	11.3	
第203図 26	磨製石鎌	3層下層	粘板岩	30.2	13.2	1.8	1.2	
27	打製石鎌	5号溝	黒曜石	26.6	15.3	3.1	1.2	
28	打製石鎌	5号溝	サヌカイト	27.4	14.8	3.3	1.1	
29	打製石鎌	6号溝	サヌカイト	14.2	15.4	2.5	0.3	
30	打製石鎌	4層	黒曜石	26.7	14.6	3.8	1.1	剥片鎌
31	打製石鎌	3層下層	サヌカイト	21	16.2	5.5	1.9	スクレイパーか
32	打製石鎌	3層下層	サヌカイト	20.5	13.8	2.7	0.5	
33	錐?	3層下層	黒曜石	42.4	20.7	8.2	5.9	
34	使用剝片	6号溝	黒曜石	32.4	22.7	7	4	
35	使用剝片	6号溝	黒曜石	23.4	19.6	3.8	2	
36	使用剝片	3層下層	黒曜石	21.4	17.5	4.7	1.4	
37	スクレイパー	5号溝	黒曜石	30.1	15.6	5.5	3.1	風化
38	スクレイパー	3層上層	サヌカイト	33.4	20.8	6.8	3.6	
39	スクレイパー	7号溝上層	サヌカイト	34	27.2	8.2	6.8	
40	スクレイパー	7号溝上層	サヌカイト	35.5	26.8	8.5	7.5	
41	スクレイパー	7号溝下層	サヌカイト	63.8	44.8	8	23.2	
42	スクレイパー	3層下層	サヌカイト	73.1	35.4	10.3	27.7	風化

図 版



畠田遺跡全景（気球写真）

図版 2



1. 上空より白木谷をのぞむ

2. 楠田遺跡より畑田遺跡をのぞむ

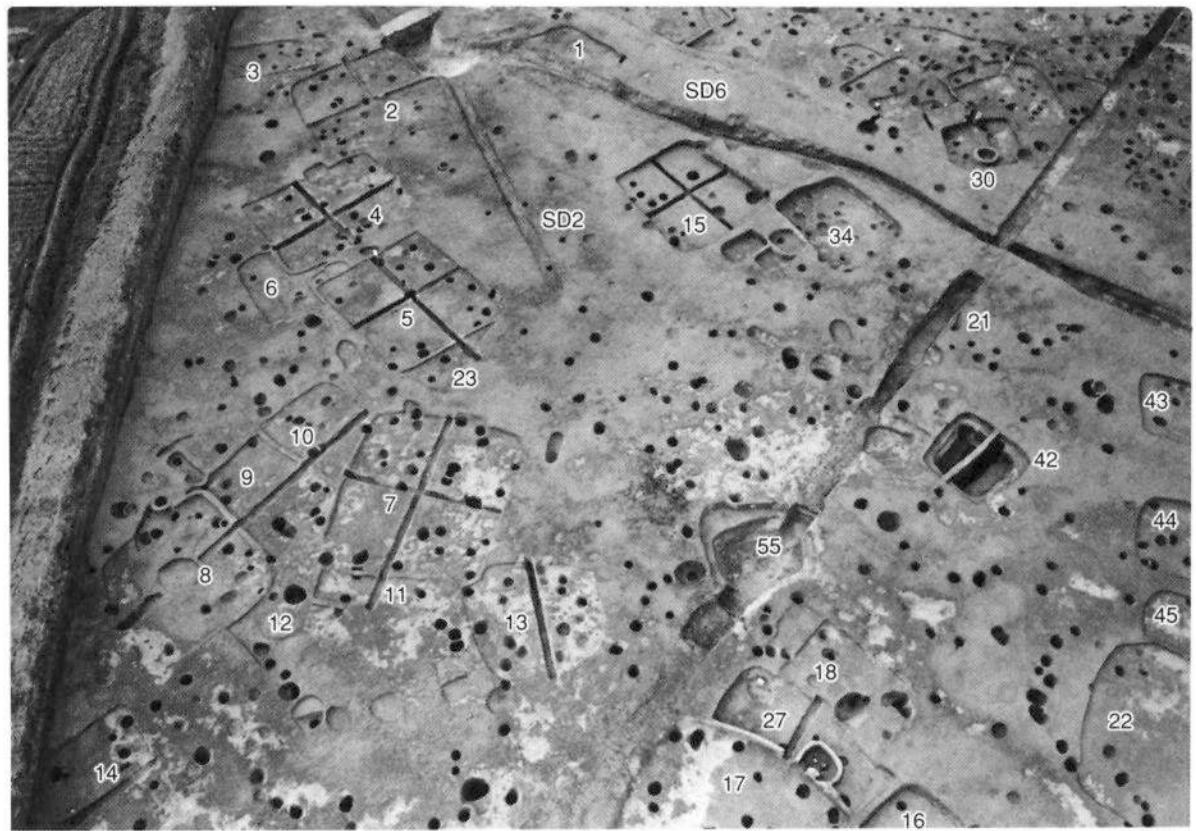
3. SD2など（東から）



1. 煙田遺跡全景（南東から） 2. 同（北から）

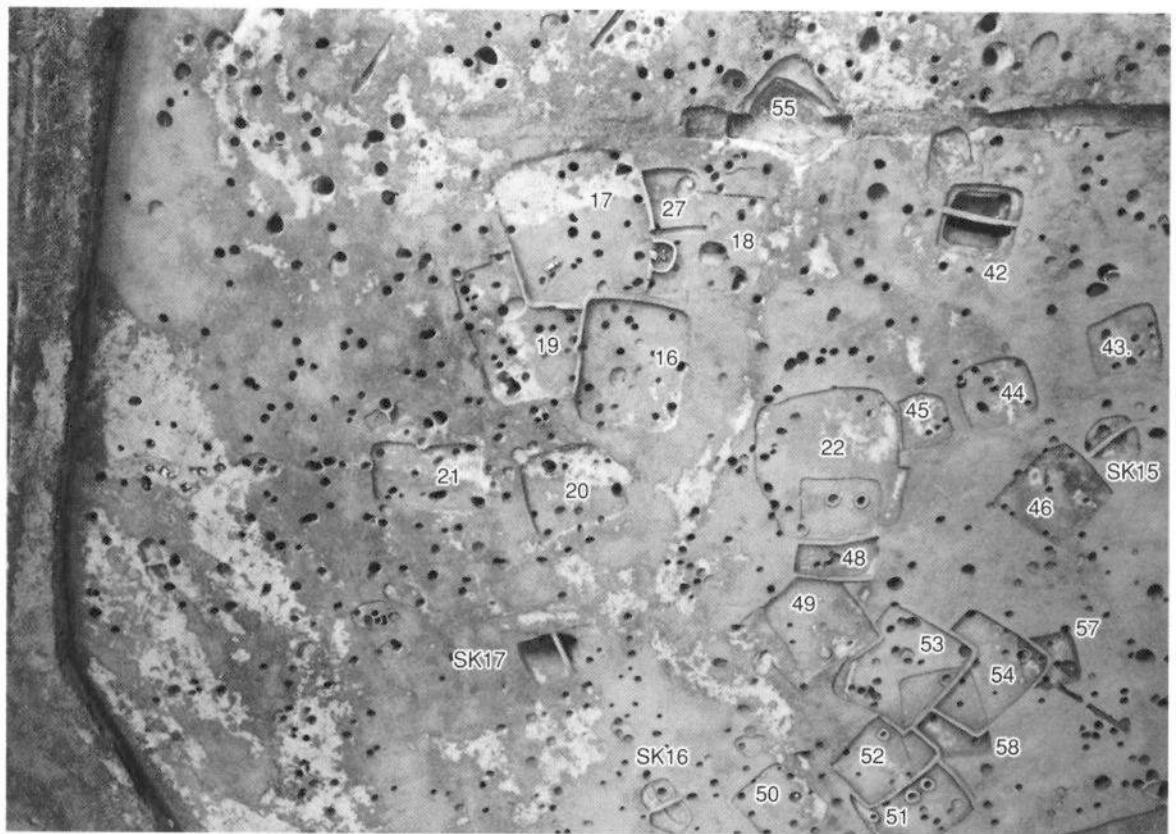


1. 支石墓周辺遠景（南東から） 2. 西半部遠景（東から）



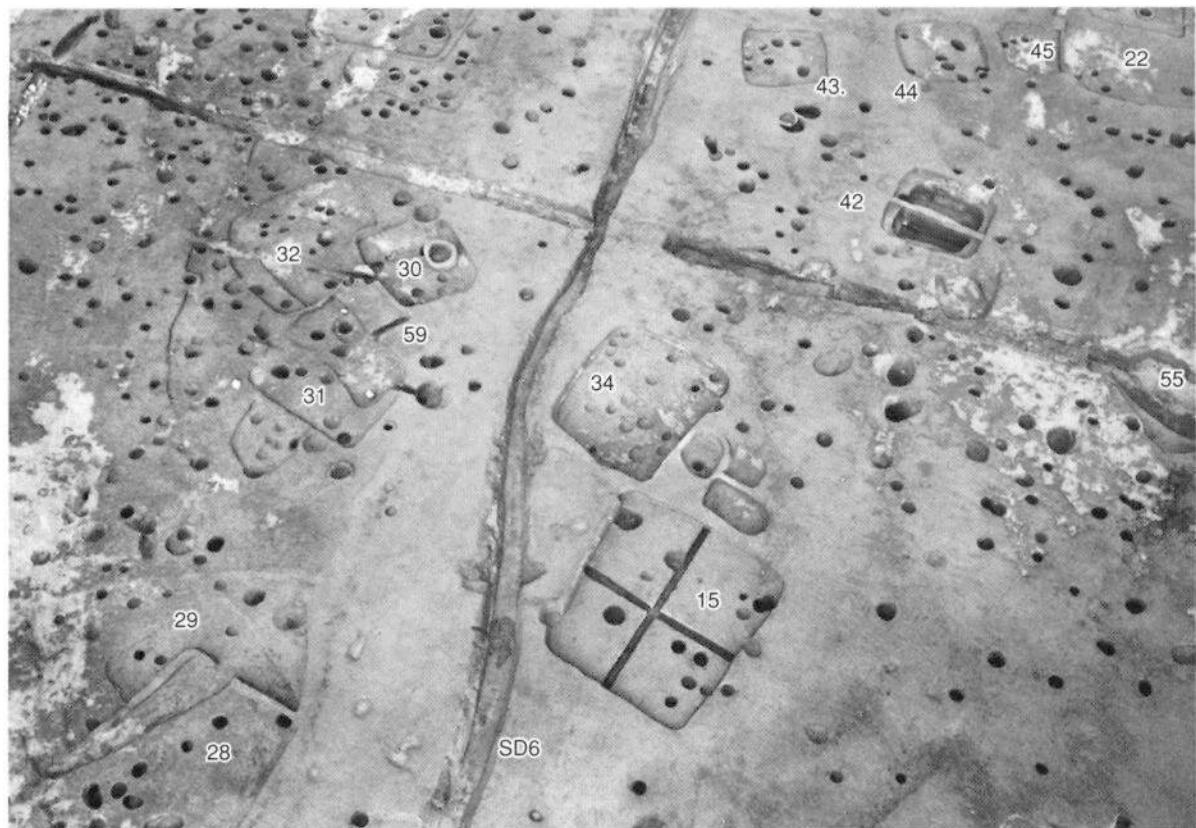
1. 1~10号住居跡ほか 2. 28~32号住居跡ほか

図版 6



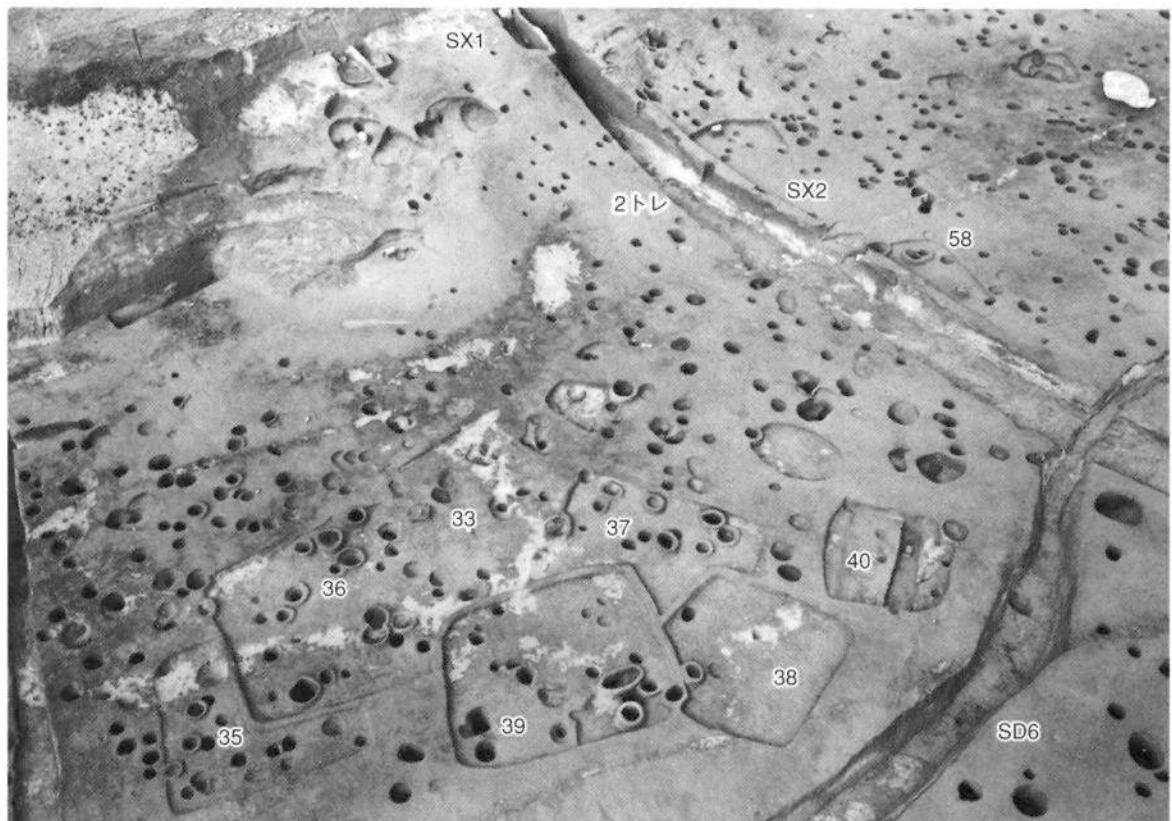
1. 17~22号住居跡ほか

2. 48~54号住居跡ほか



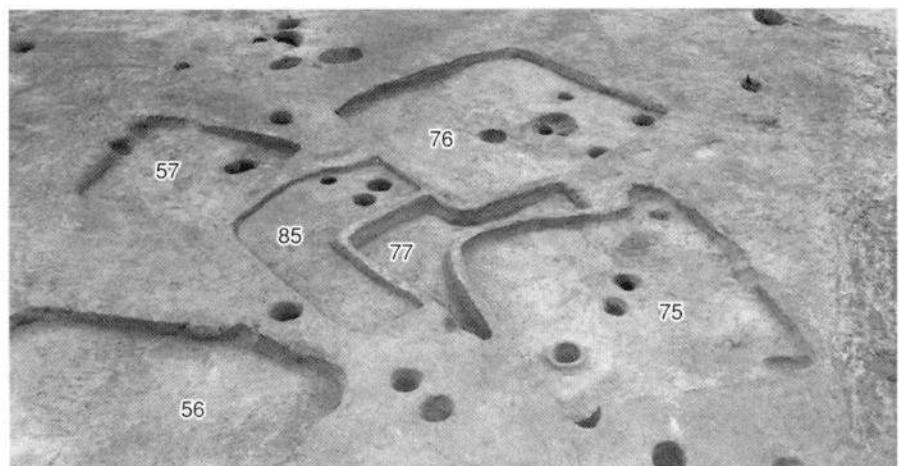
1. 15・34号住居跡ほか

2. 39・46号住居跡ほか

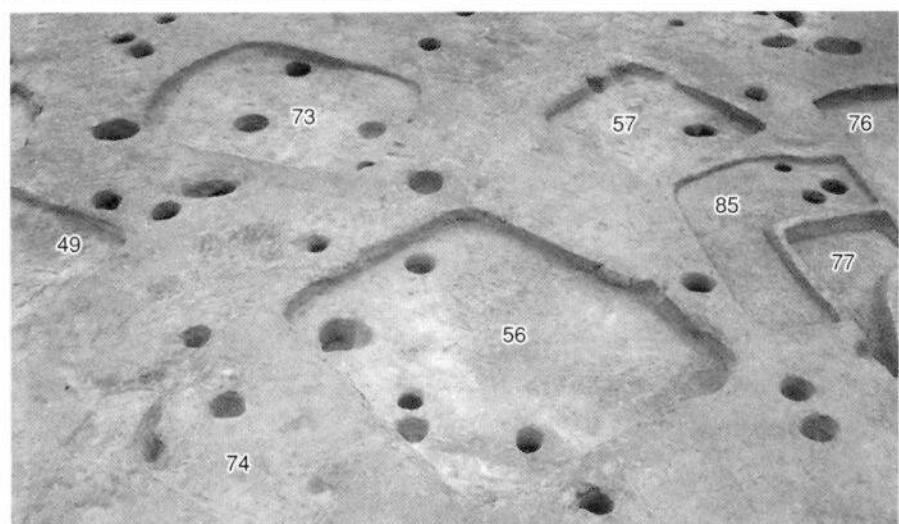


1. 37~40号住居跡ほか

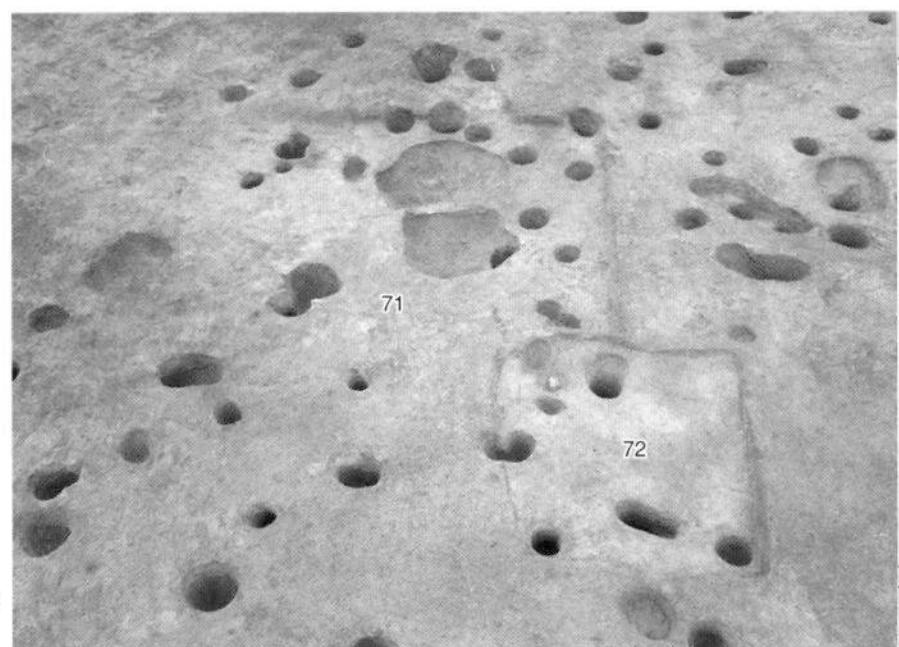
2. 24~26号住居跡ほか



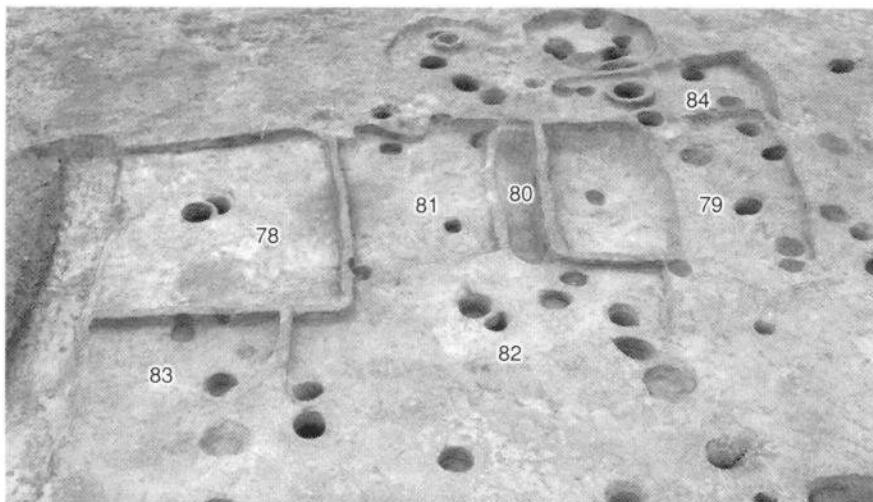
1.
75号住居跡ほか
(東から)



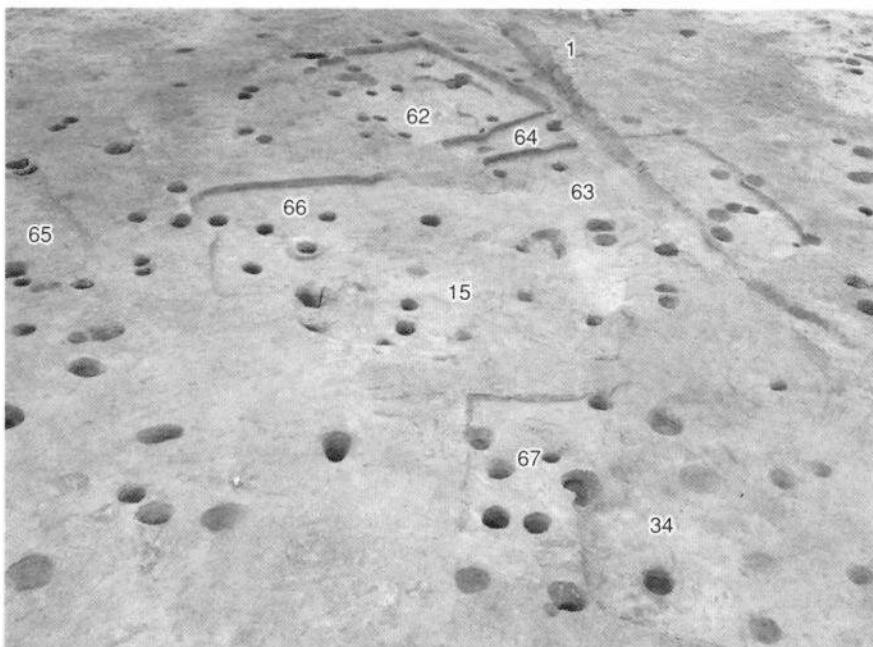
2.
56号住居跡ほか
(東から)



3.
71・72号住居跡
(北東から)



1.
79号住居跡ほか
(東南から)

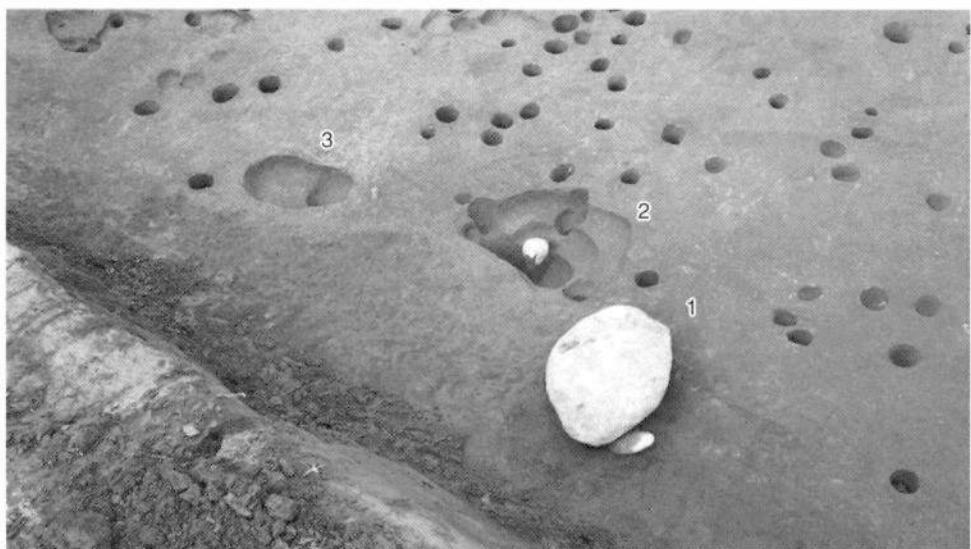


2.
63号住居跡ほか
(東から)

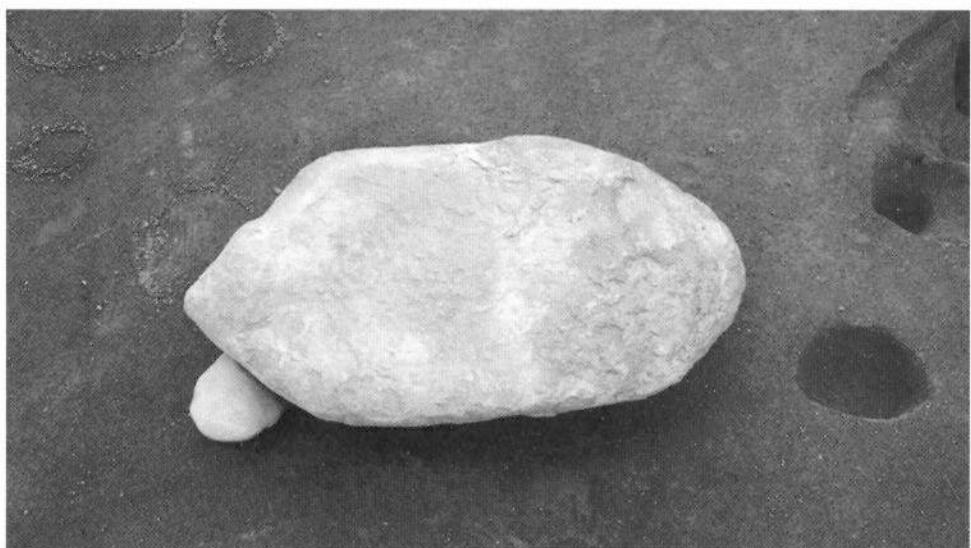


3.
1号支石墓周辺
(東から)

1.
1~3号支石墓
(東南から)

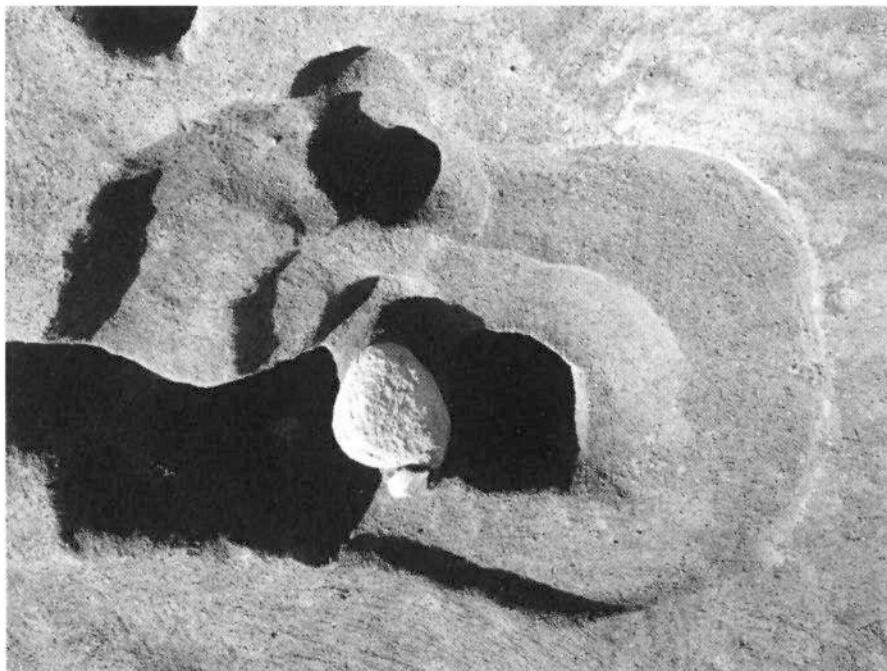


2.
1号支石墓上石
(北東から)



3.
1号支石墓
下部遺構
(北東から)

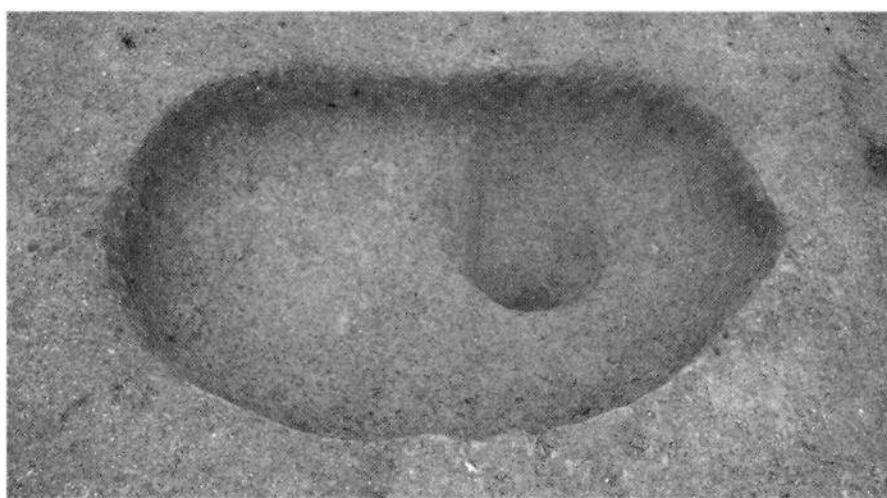




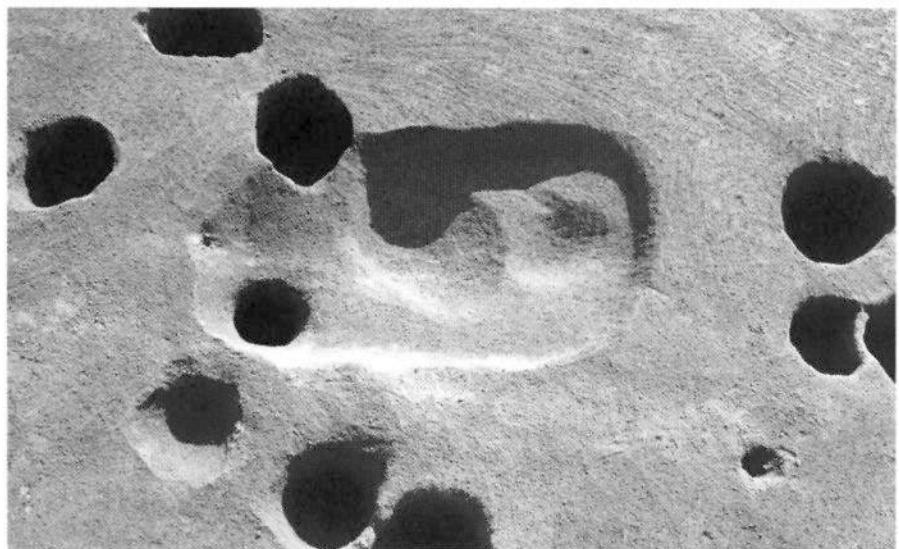
1.
2号支石墓
土器出土状態
(南から)



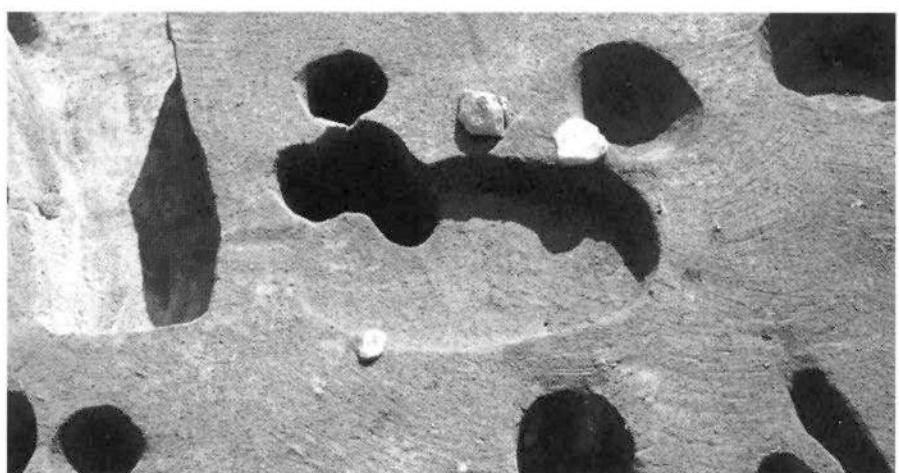
2.
2号支石墓
下部遺構
(南から)



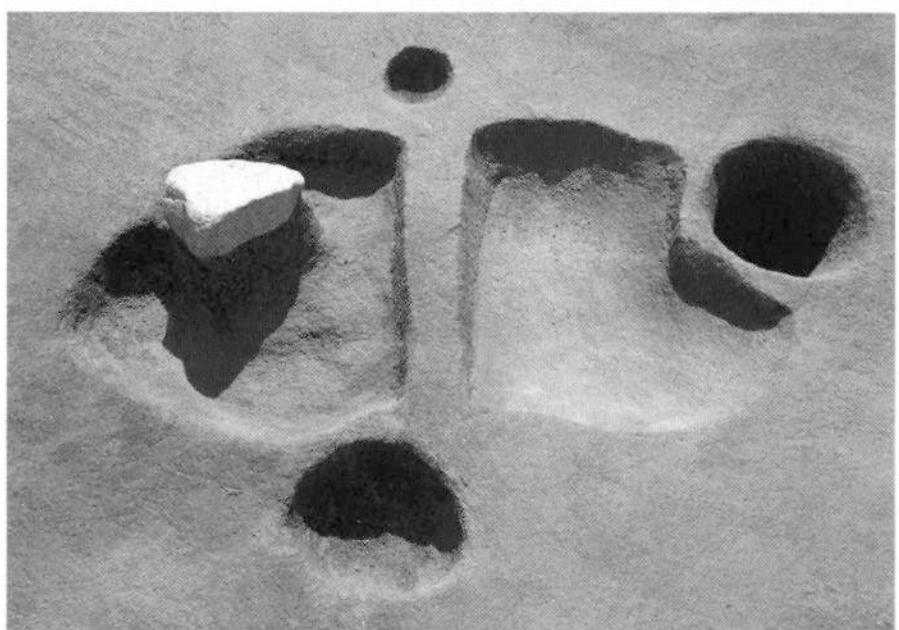
3.
3号支石墓
下部遺構
(南から)



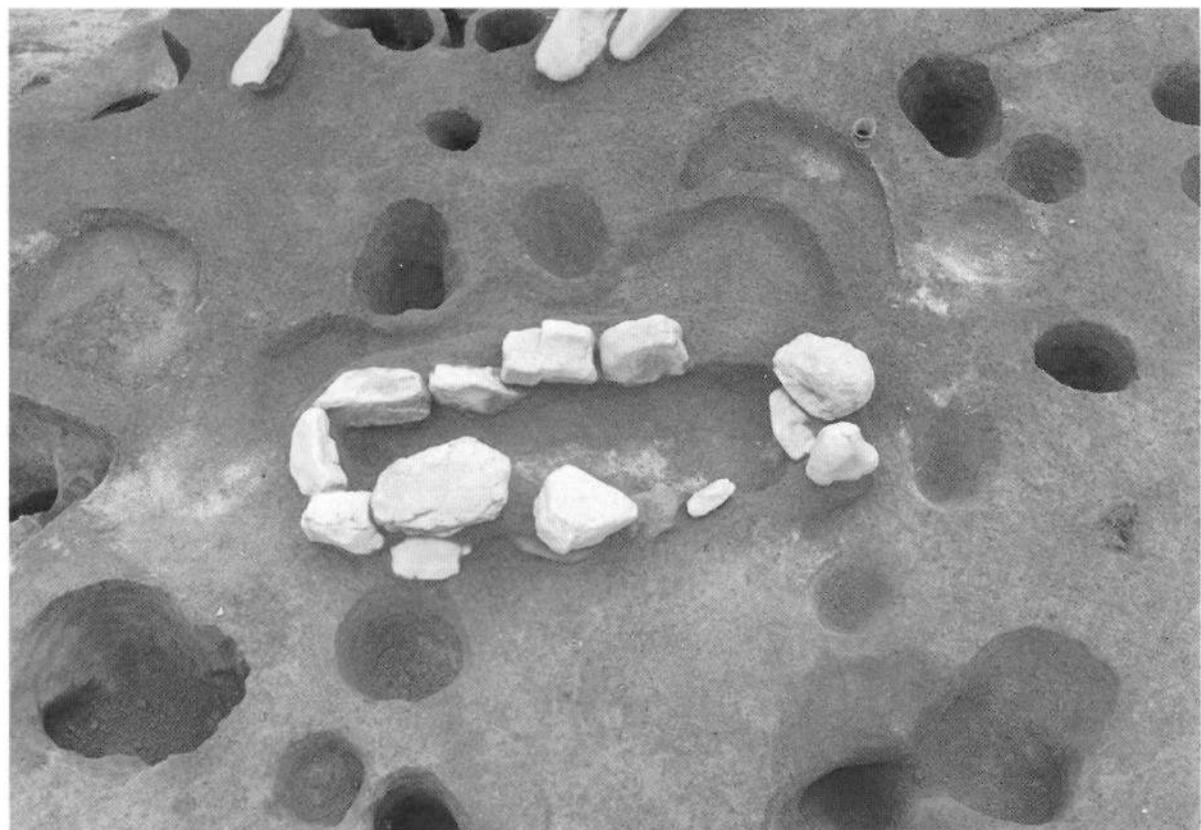
1.
4号支石墓
下部遺構
(西北から)



2.
5号支石墓
下部遺構
(西北から)

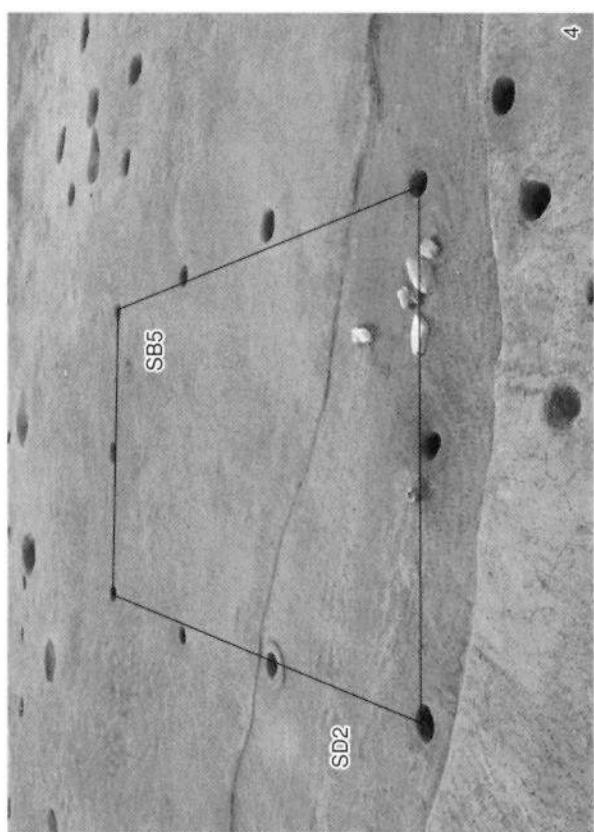
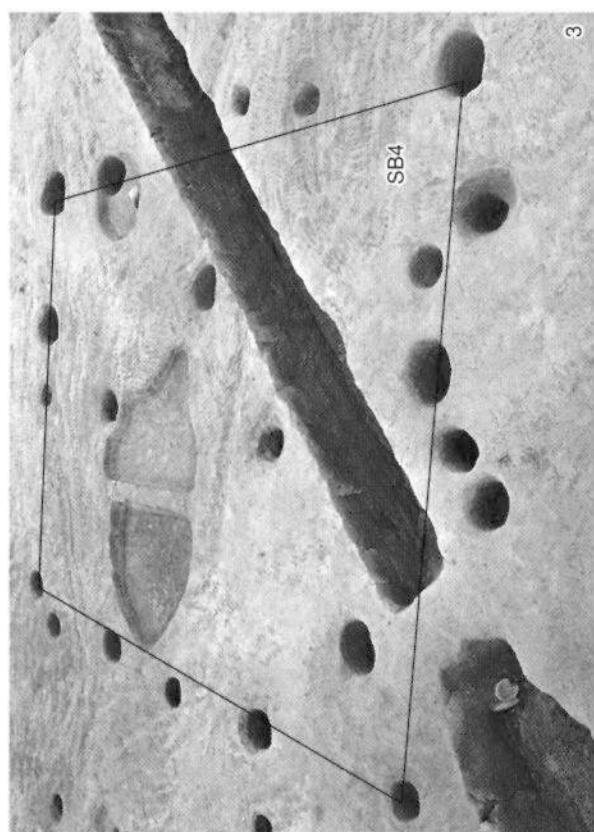
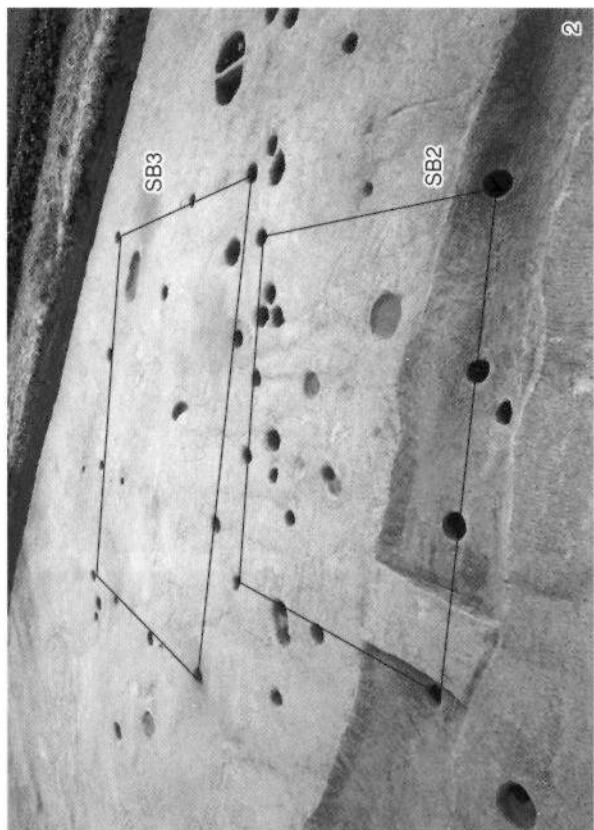
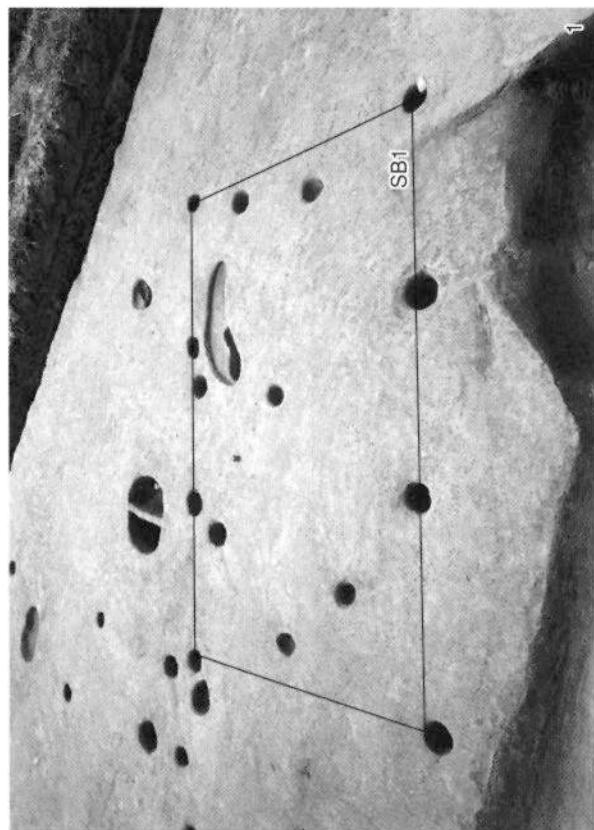


3.
4号土杭
(北から)



1. 1・2号石棺墓（南から）

2. 1号石棺墓（北から）



掘立柱建物 (1・2・4は北から。3は西から)



1.
1号土坑
(東北から)



2.
1号土坑
土器出土状態



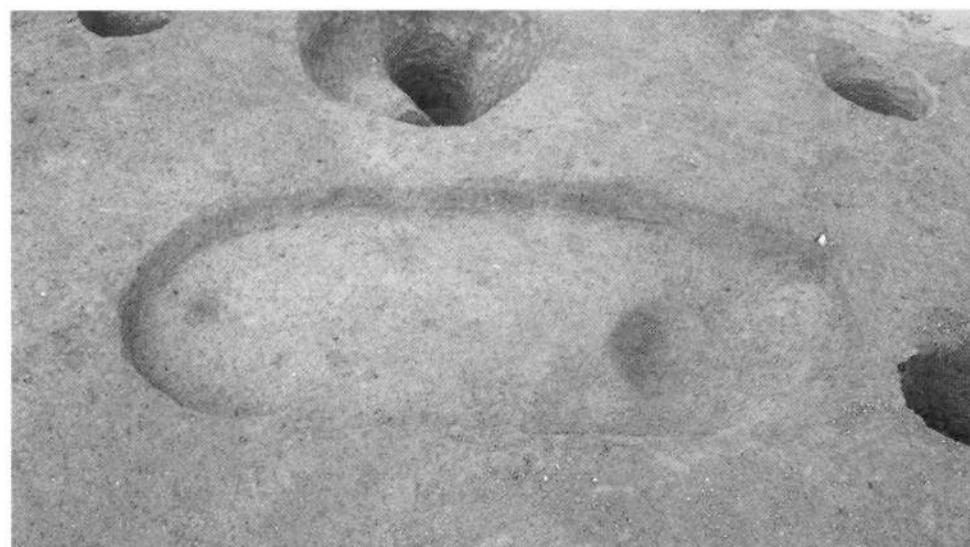
3.
3号土坑
(南東から)



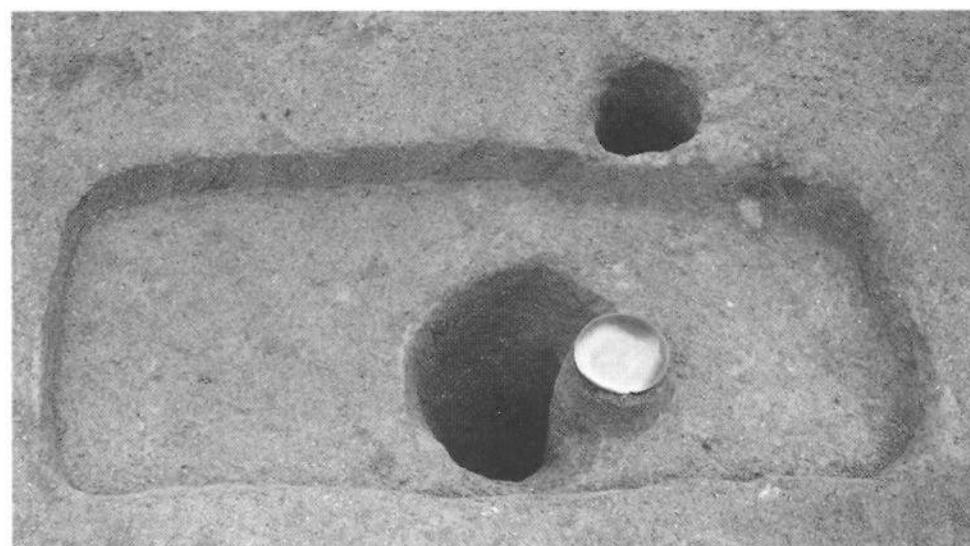
1. 5号土坑（南東から） 2. 5号土坑カマド（南東から）



1.
6号土坑
(南西から)



2.
10号土坑
(南から)



3.
11号土坑
(東から)



1.
旧II区と
SK20ほか
(北東から)



2.
SR1~3
(東から)



3

3. SR2遺物出土状態 (東から)



4

4. SR1渡来銭出土状態 (東から)

図版 20



1.
IV区全景
(南東から)



2.
IV区
11トレンチ



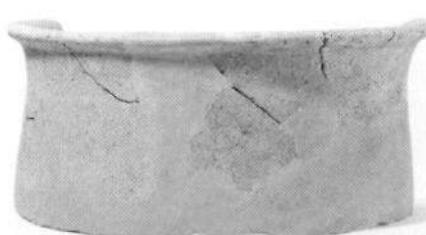
3.
IV区
12トレンチ



2-1



59-1



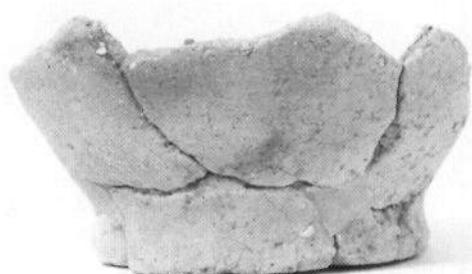
17-2



75-2



30-2



75-3



31-1



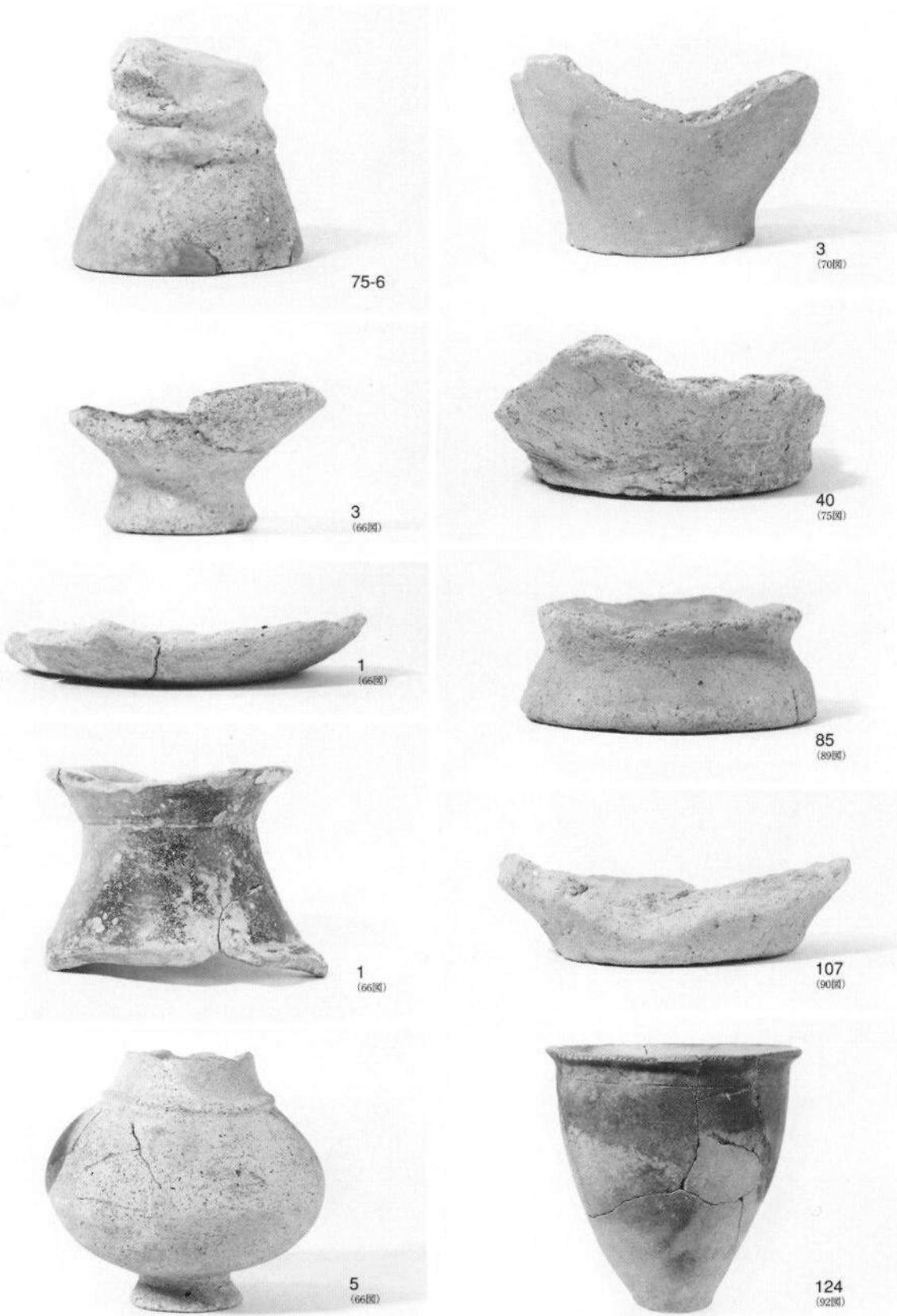
75-4

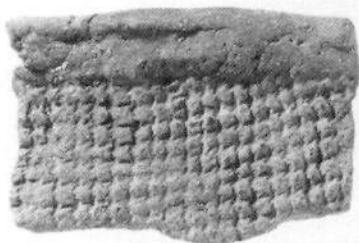


58-2



75-5

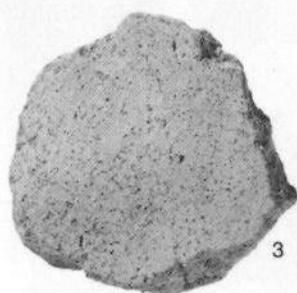


121
(91図)12
(148図)6
(164図)7
(164図)19
(72図)22
(83図)48
(85図)21
(83図)

1



2

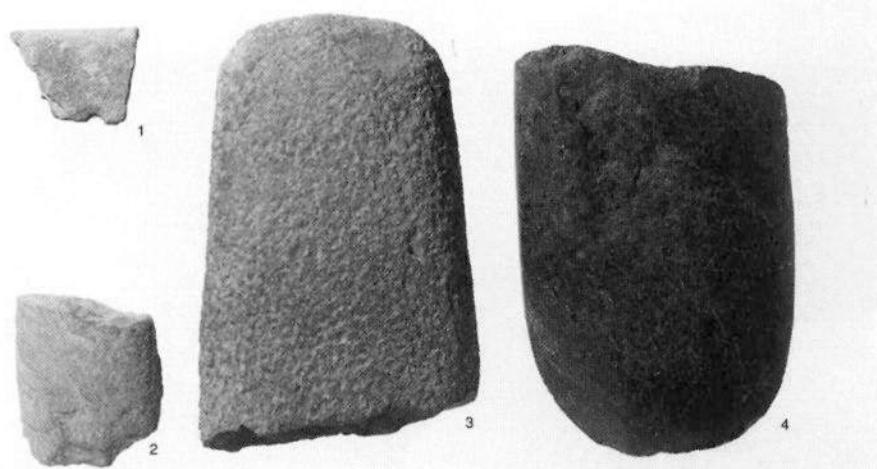


3

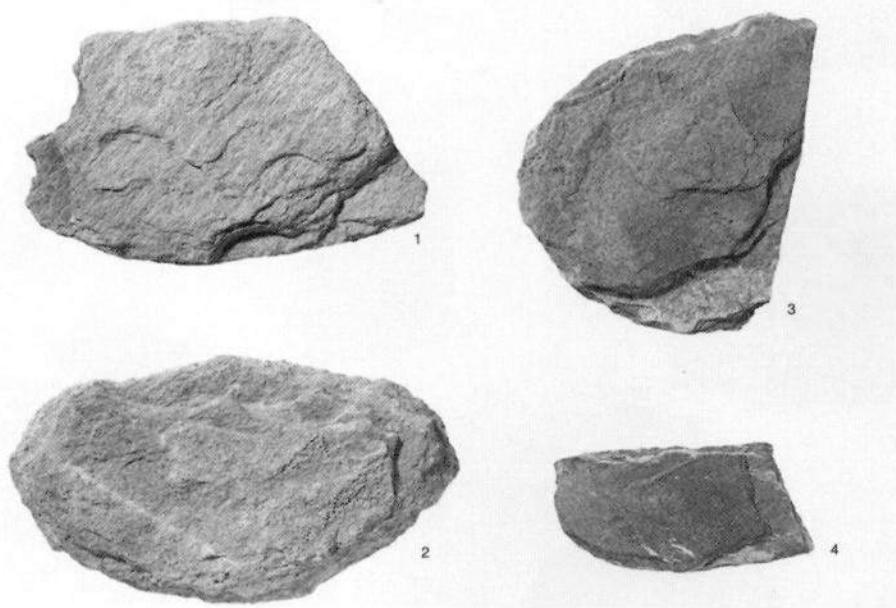


4

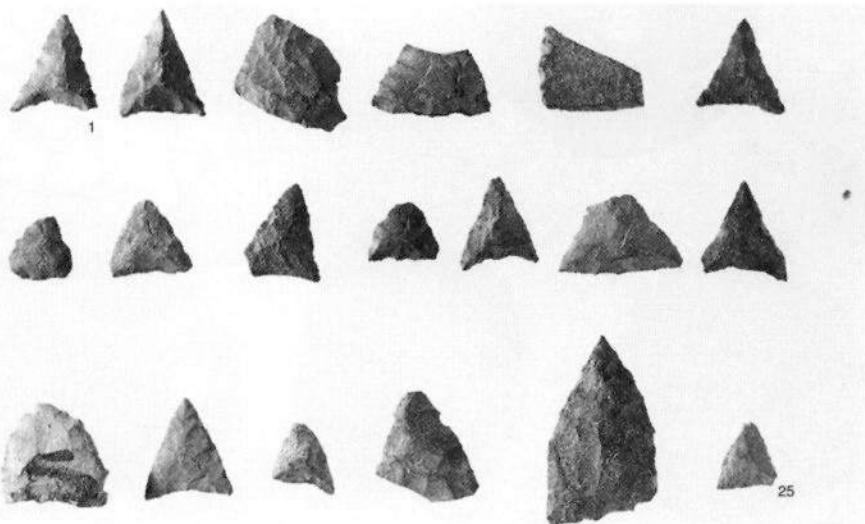
5
(95図)



1.
大陸系磨製石器
(第96図)



2.
石包丁形石器
(第97図)



3.
打製石鏃
(サヌカイト)
(第98図)

26



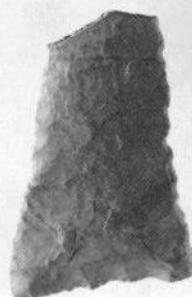
1.

打製石鏃〈サスカイト〉

(第98・99図)



52



64

2.

打製石鏃〈サスカイト〉

(第99図)



68



3.

スクレイパーほか

〈サスカイト他〉

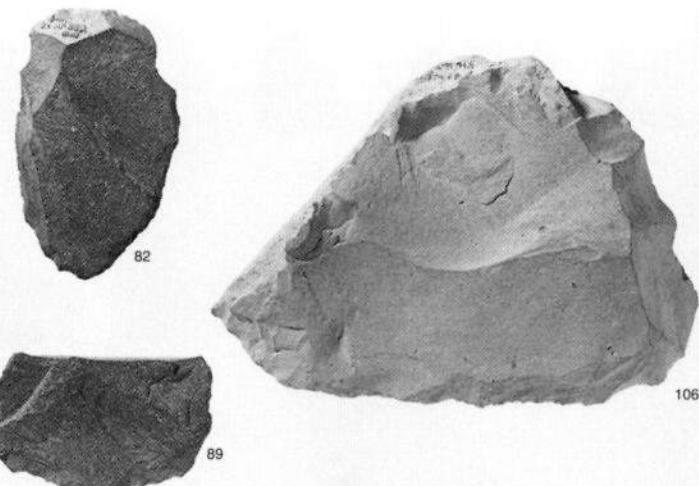
(第100~102図)



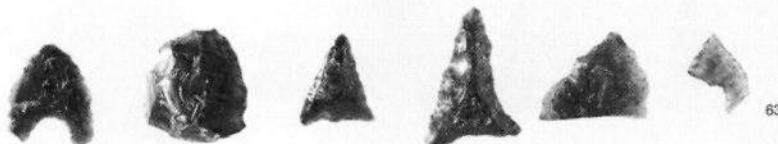
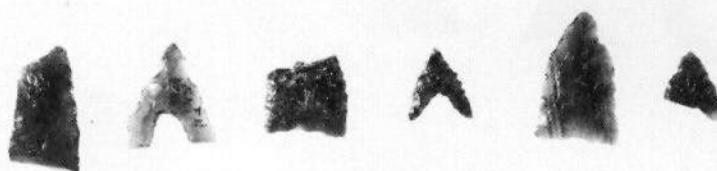
107



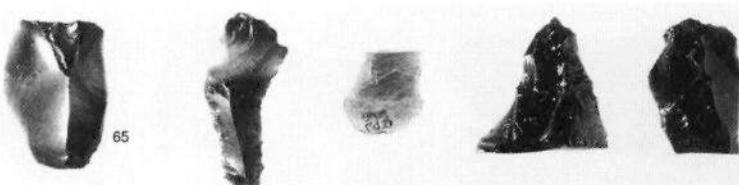
109



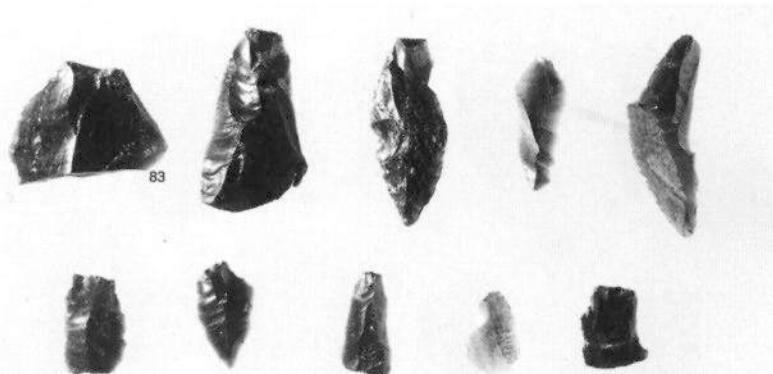
1.
スクレイパー
〈サスカイト〉
(第100~102図)



2.
打製石鏃
〈黒曜石〉
(第98・99図)



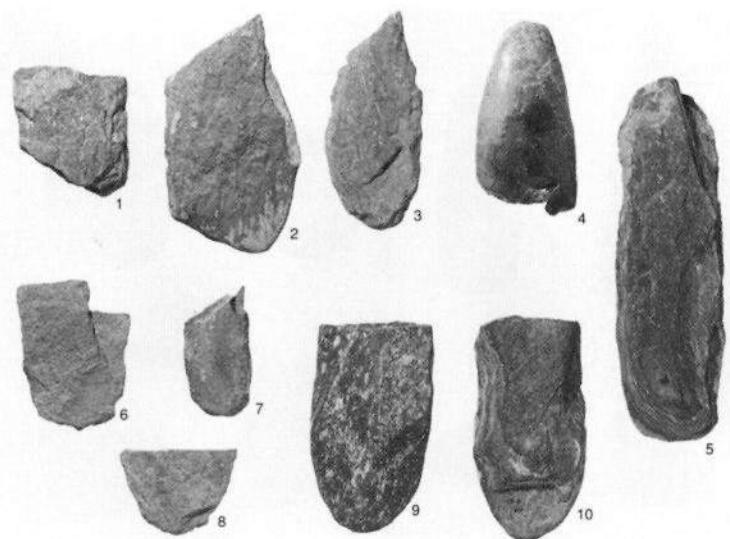
1.
スクレイパーほか
〈黒曜石〉
(第100図)



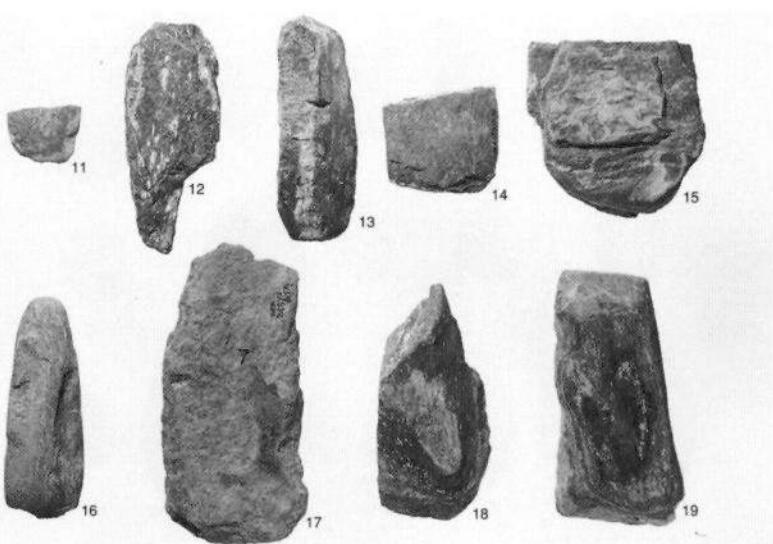
1.
スクレイパーほか
<黒曜石>
(第101・102図)

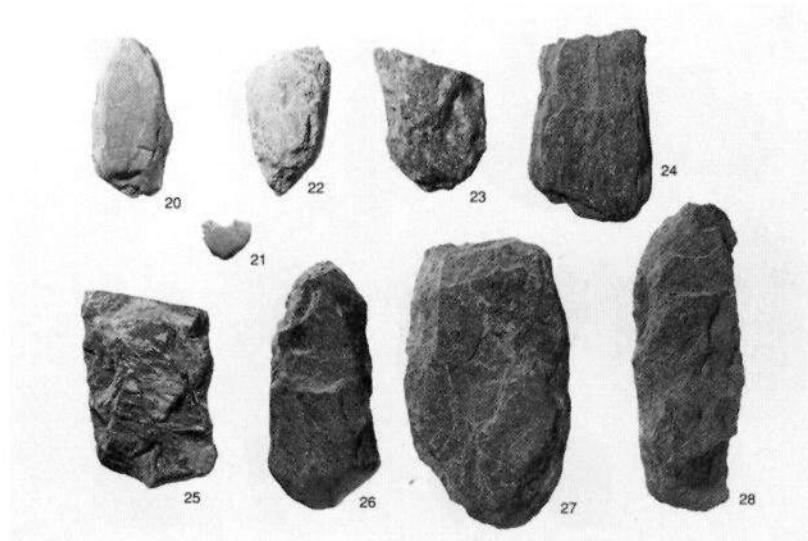


2.
石斧
(第103図)

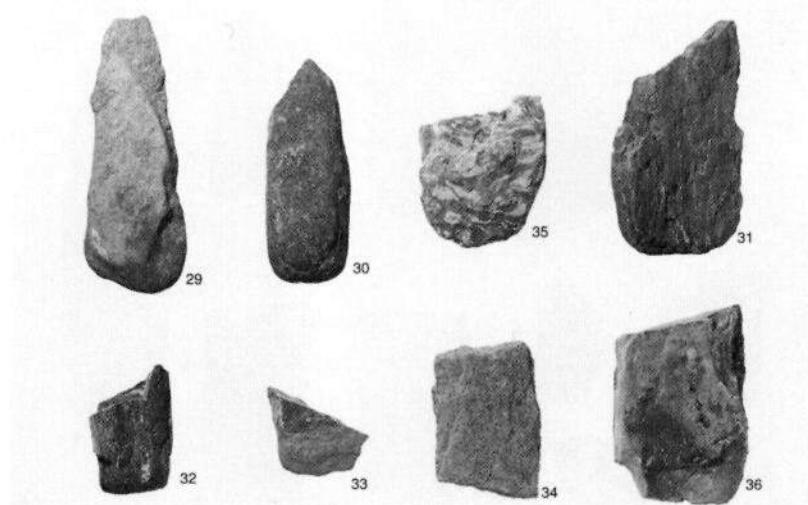


3.
石斧
(第103・104図)

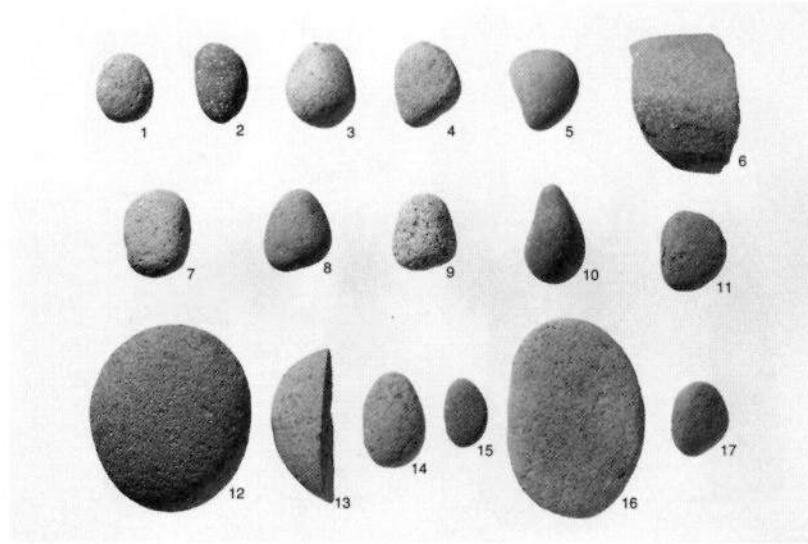




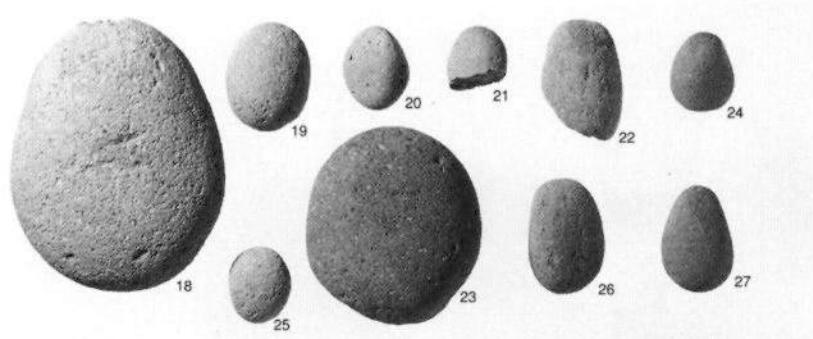
1.
石斧
(第104・105図)



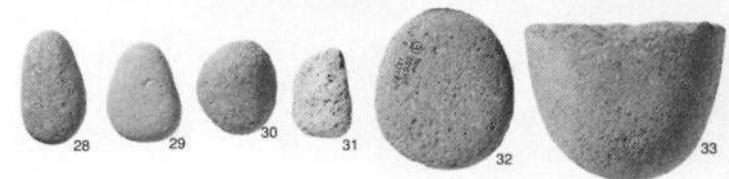
2.
石斧
(第105図)



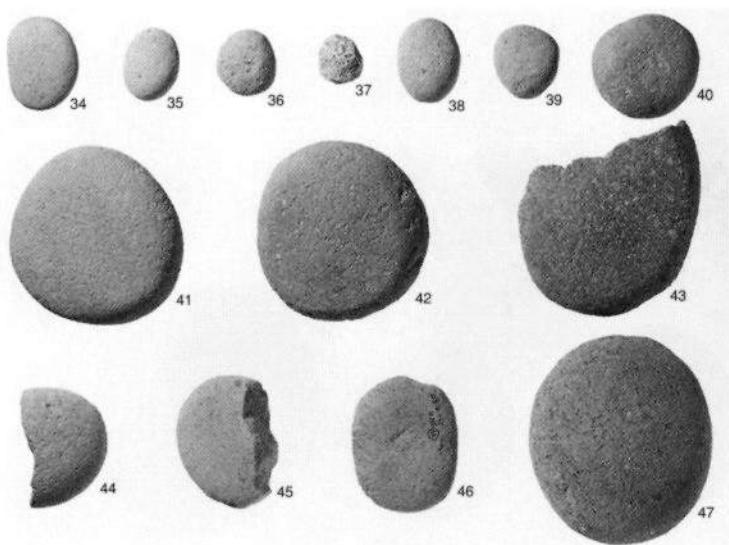
3.
すり石・叩石
(第106図)



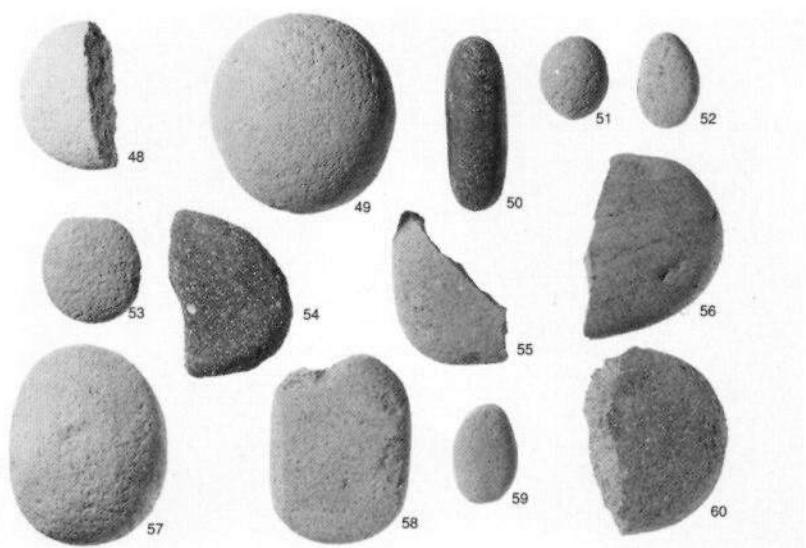
1.
すり石・叩石
(第106・107図)



2.
すり石・叩石
(第107・108図)

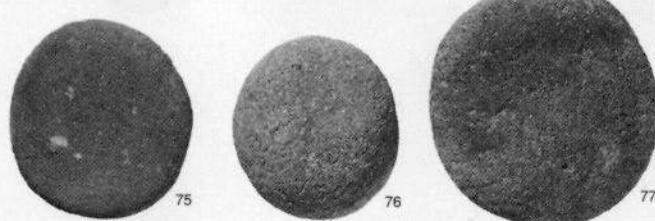
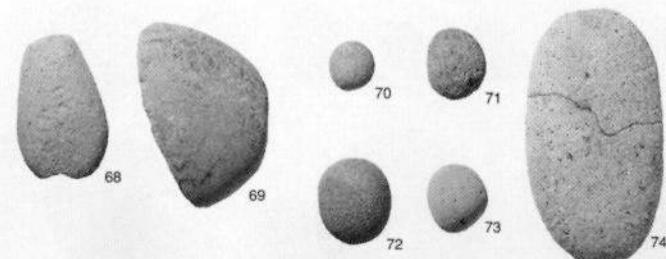


3.
すり石・叩石
(第108・109図)

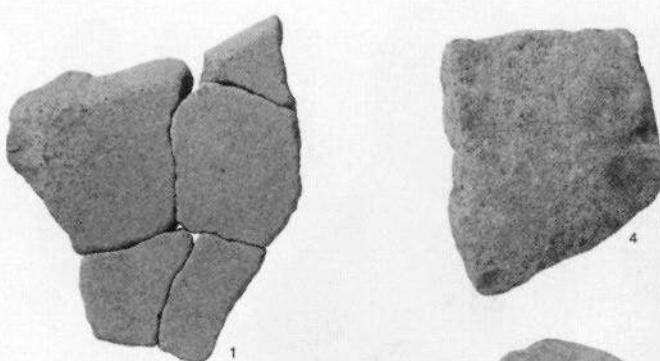




1.
すり石・叩石
(第109図)



2.
すり石・叩石
(第109・110図)



3.
砥石・台石
(第111・113図)



1



11



2



12



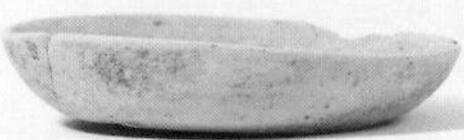
3



13



4



14



5



6



15



7



16



8



22

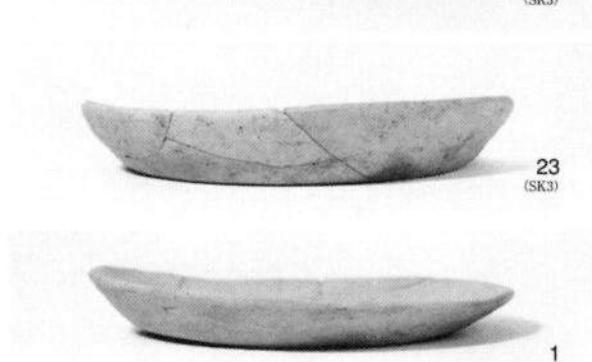
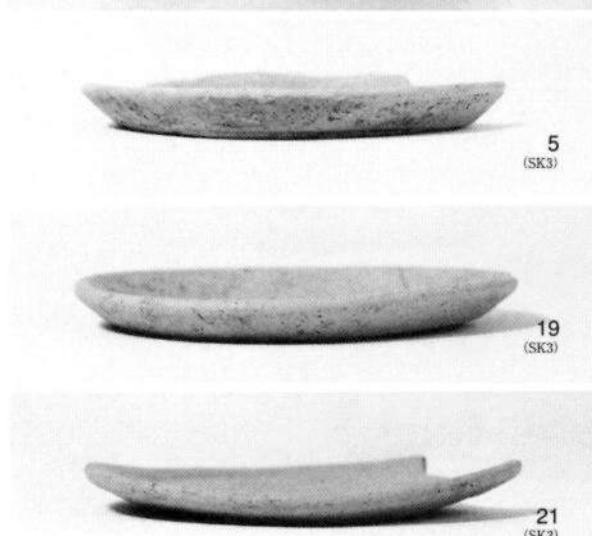
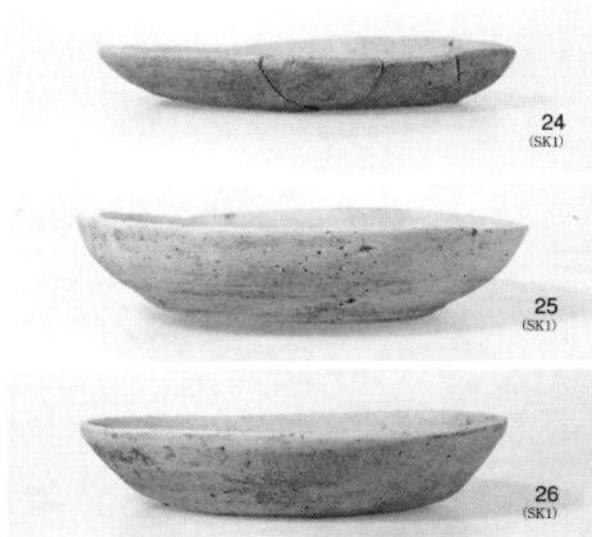


9



23

図版 32



1・3・5・11号出坑、2号溝出土土器



29
(SD2)



1
(SD6)



32
(SD2)



5
(P199)



10
(P46)



51
(SD2)



11
(P46)



52
(SD2)



12
(P46)



53
(SD2)



15
(P185)



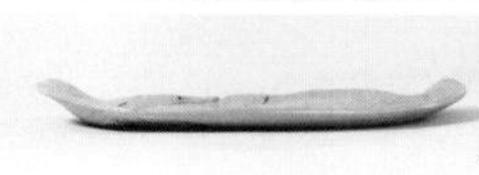
16
(P185)



1
(SD3)



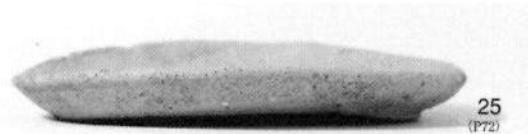
17
(P185)



4
(SD6)



19
(P49)



25
(P72)



27
(P769)



28
(P813)



29
(P988)



31
(P38)



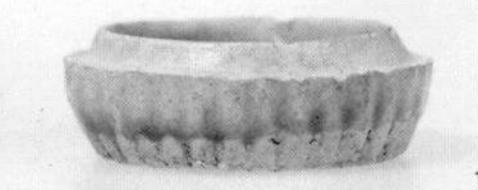
35
(P163)



99
(P159)



39
(P277)



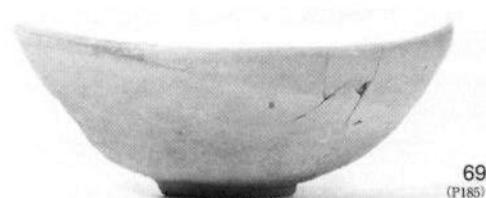
100
(P157)



40
(P46)



2



69
(P185)



5



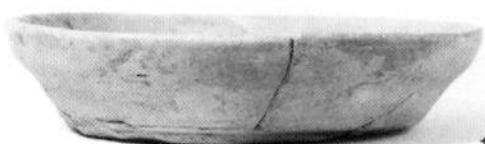
94
(P46)



6



14



17



75



18



7



79



1



8



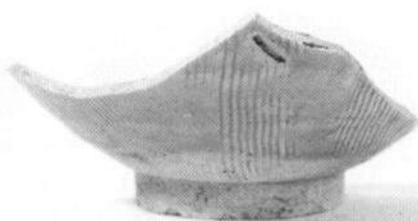
36



39



2



48



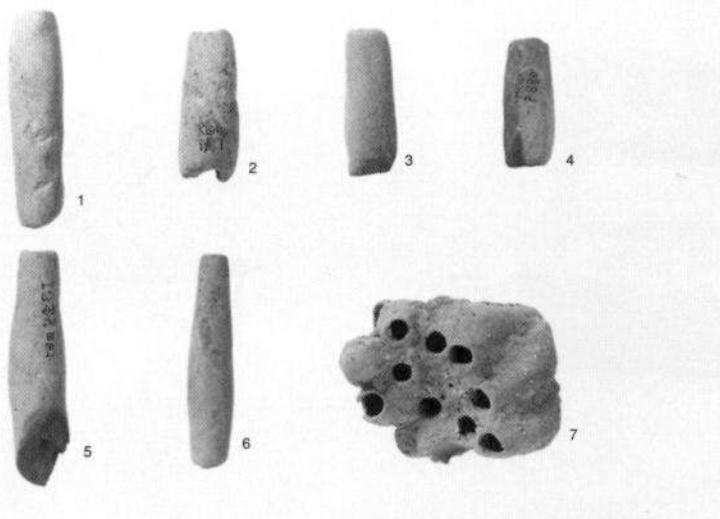
5



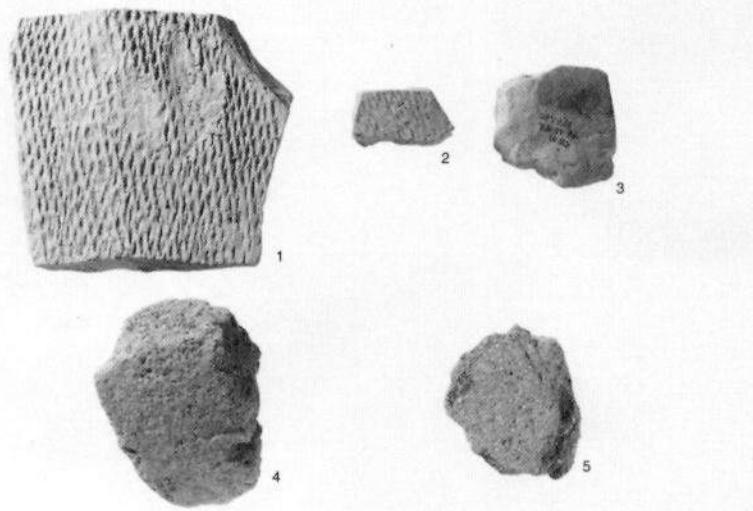
61



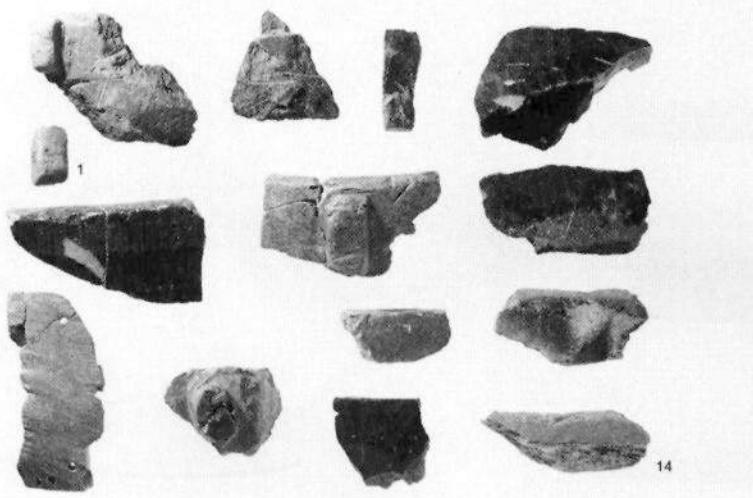
9



1.
土器品〔中世〕
(第169図)



1.
瓦、土製品
(第170図)

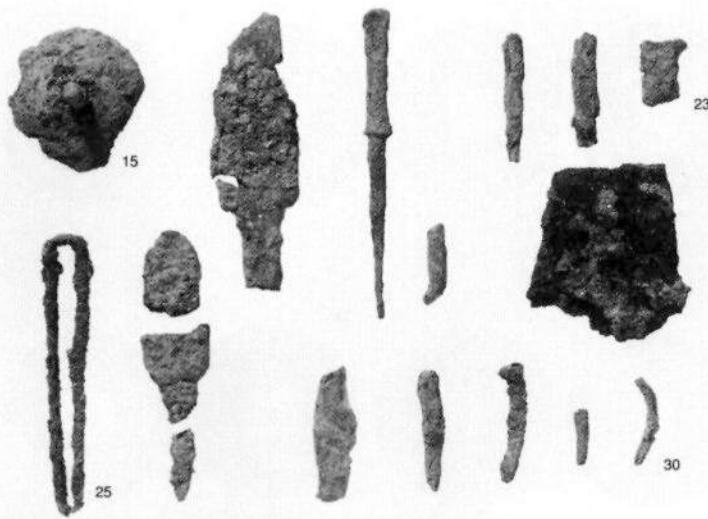


3.
滑石製品
(第171図)

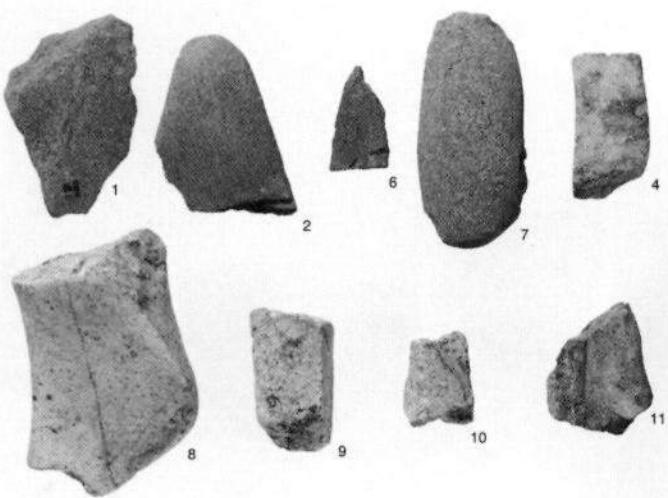
1.
鉄製品
(第172図)



2.
鉄製品
(第172・173図)

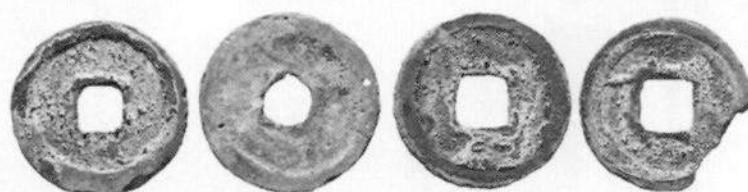


3.
砥石
(第175図)

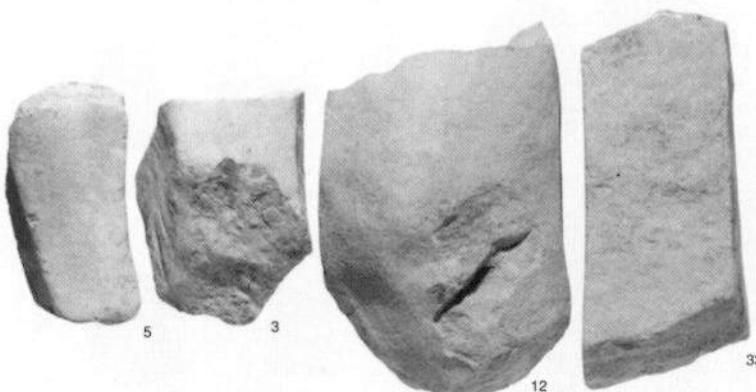




1.
渡来銭〈表〉
(第174図)

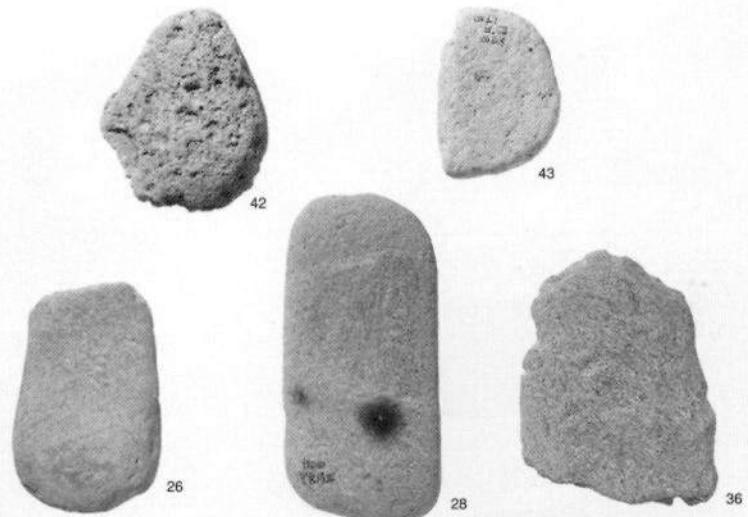


2.
渡来銭〈裏〉
(第174図)

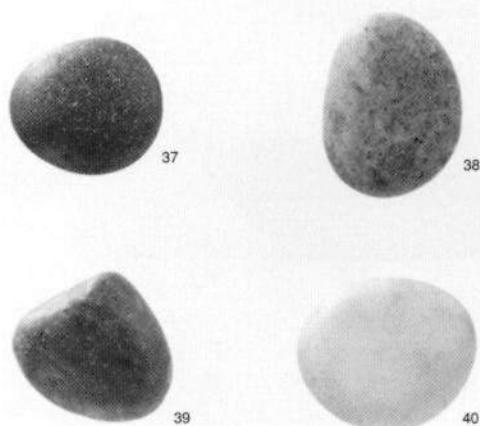


3.
砥石
(第175・178図)

1.
台石、軽石等
(第177・179図)

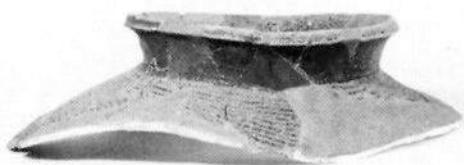


2.
小扁平石
(第179図)

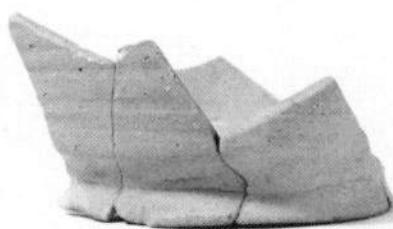


3.
石塔
黒曜石原石
(第179図)





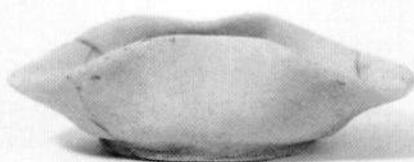
23



35



4



|



10



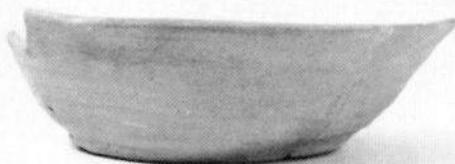
59



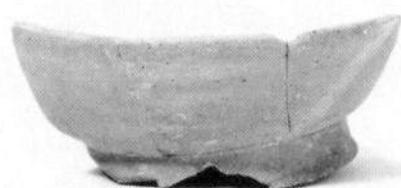
16



85



25



34



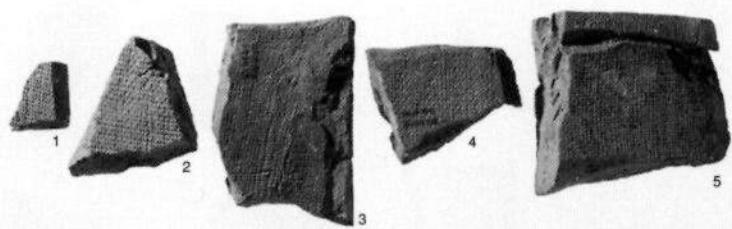
95



63



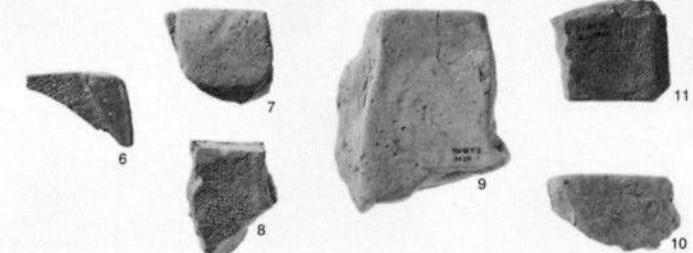
147



1.

IV区出土瓦1（表）

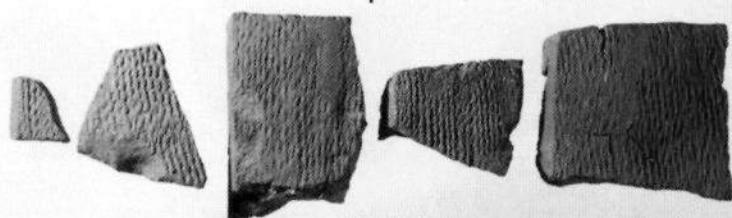
(第197図)



2.

IV区出土瓦1（裏）

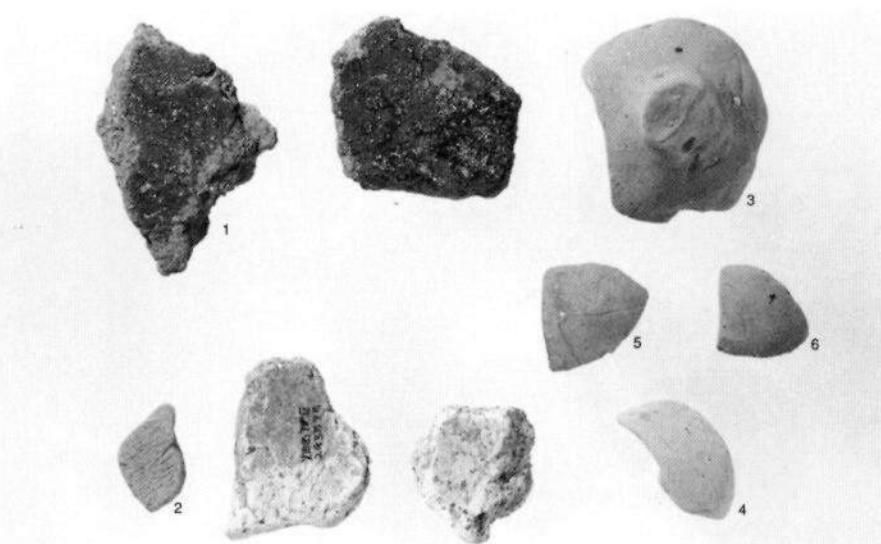
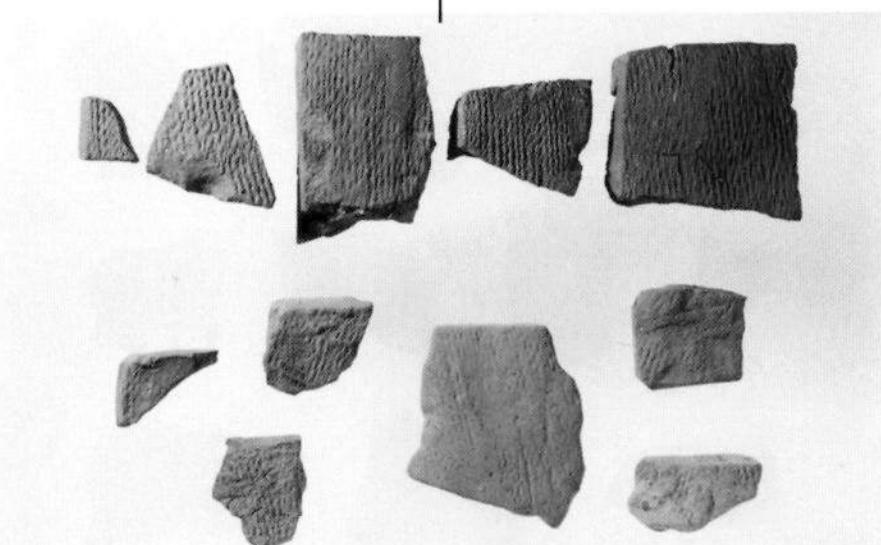
(第197図)

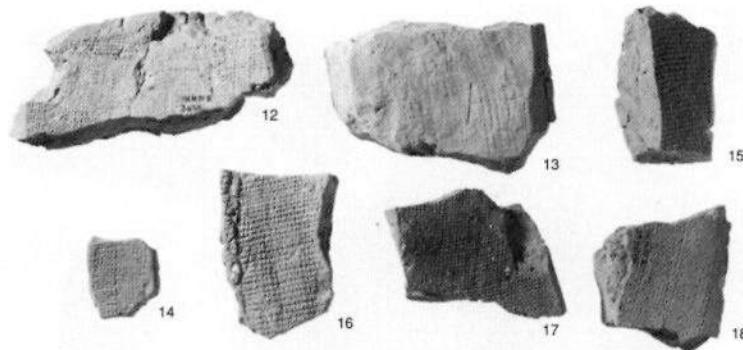


3.

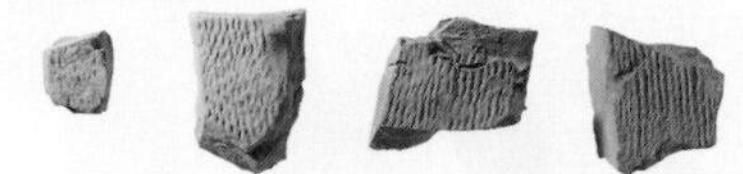
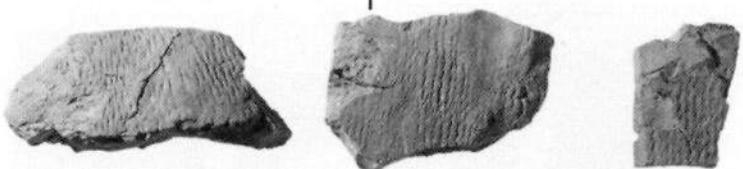
IV区出土製品

(第200図)

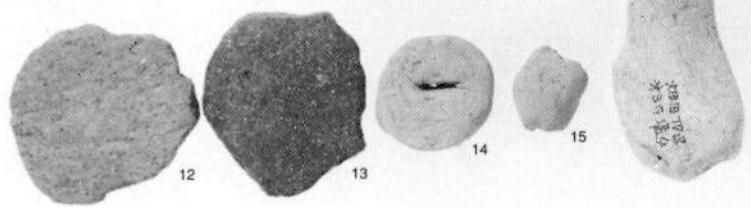




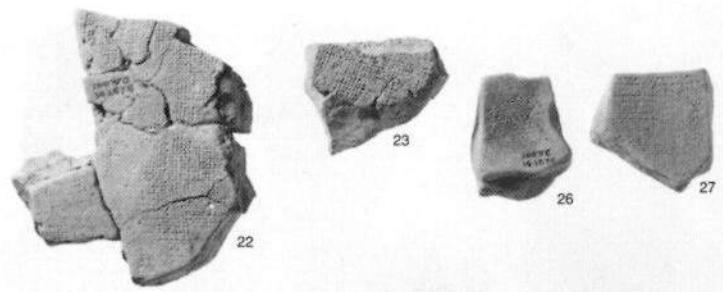
1.
IV区出土瓦2 (表)
(第198図)



2.
IV区出土瓦2 (裏)
(第198図)



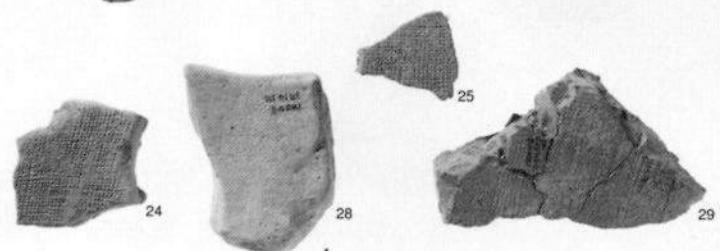
3.
IV区出土土製品
(第200図)



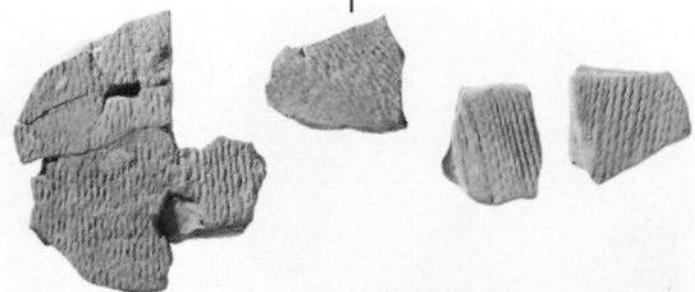
1.

IV区出土瓦3 (表)

(第199図)



|



2.

IV区出土瓦3 (裏)

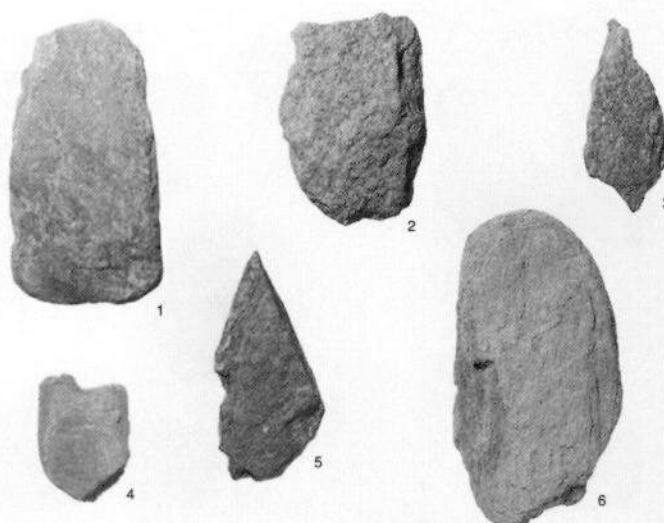
(第199図)



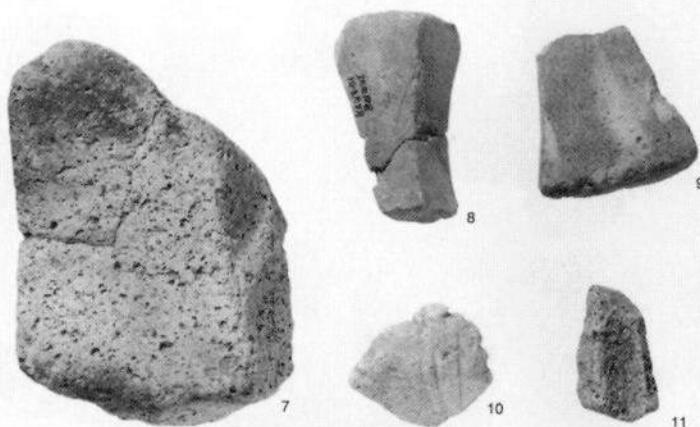
3.

IV区出土滑石製品

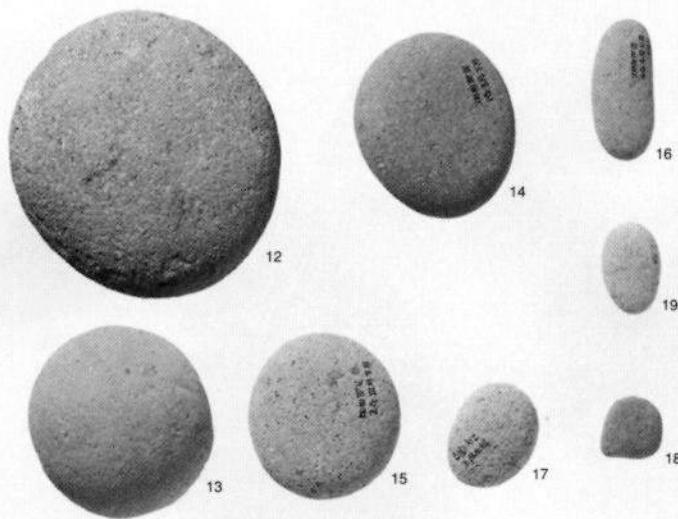
(第200図)



1.
IV区出土石斧等
(第201図)



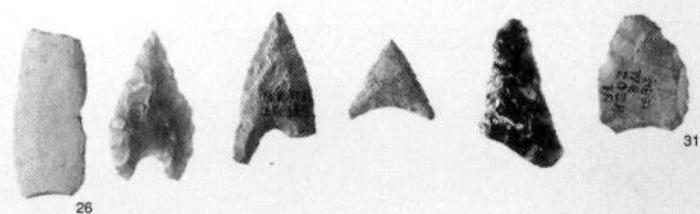
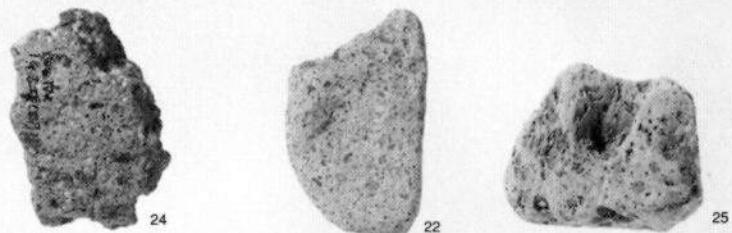
2.
IV区出土砾石等
(第201図)



3.
IV区出すり石・叩石
(第202図)



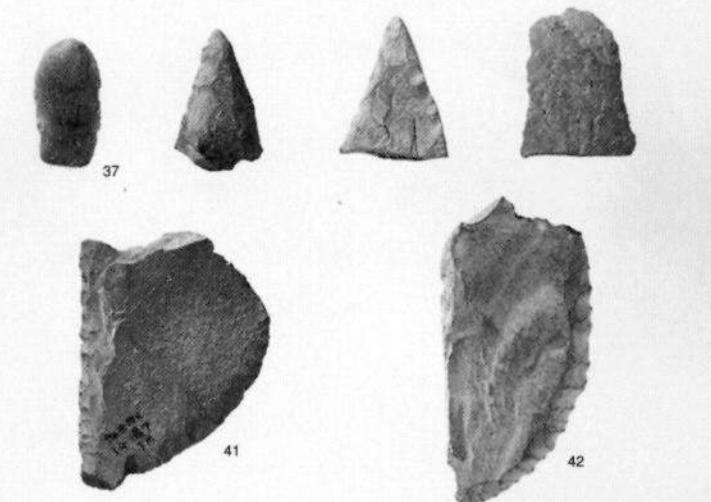
1.
IV区出土軽石等
(第202図)

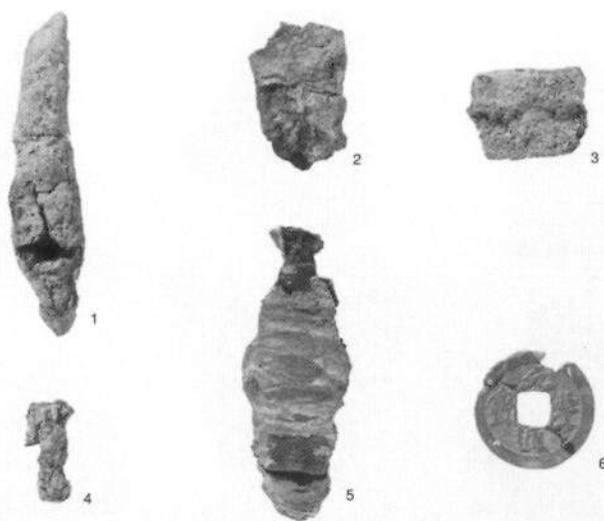


2.
IV区出土石鏃等
(第203図)



3.
IV区出土
スクレイパー
(第203図)





1.
IV区出土鉄製品等
(第204図)



2.
移築復元した
支石墓
(甘木歴史資料館)



3.
3号支石墓（？）
上石

報告書抄録

ふりがな	はたけだいせき
書名	畠田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	56
編著者名	伊崎俊秋
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL 092-651-1111
発行年月日	西暦 1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
畠田	福岡県朝倉郡 杷木町大字池田 字畠田 57-1ほか	404411		33° 21' 52"	130° 49' 24"	19860818 19870124	17,000	道路 (九州横断 自動車道 建設に伴 う調査)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畠田	包含層	縄文 早期～後期		土器、石器	
	集落 墓地	縄文晚期 ～弥生前期	竪穴住居 85軒 土坑 7基 支石墓 5基 石棺墓 2基	土器 土製紡錘車 打製石鏃、 スクレイパー 石斧、石包丁	集落と墓地がセット で検出された。
	集落	奈良 ～平安	溝	土器 瓦	寺跡が近在するらしい
	集落 墓地	平安 ～鎌倉	掘立柱建物 5棟 土坑 19基 周溝墓 2基 溝 7条	土器 輪入陶磁器 渡来鏡 鉄器 鉄滓	莊園に関わる集落か

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 H10	登録番号 11

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－56－

平成11年3月31日

発行 福岡県教育委員会
〒812-8575 福岡市博多区東公園7-7

印刷 瞬報社写真印刷(株)
〒810-0001 福岡市中央区天神5丁目4番16号 城戸ビル3F

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 56 —

福岡県朝倉郡杷木町所在 畑田遺跡の調査



付図 畑田遺跡全体図(1/200)